魔法少女リリカルなのはViVid　とある訓練生と覇王っ子

F20C

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＶｉＶｉｄ　とある訓練生と覇王っ子

【Ｎコード】
Ｎ２９８３Ｔ

【作者名】
Ｆ２０Ｃ

【あらすじ】
覇王流の強さを証明するため。覇王としての拳を、覇王の悲願を受け止めてくれる存在を求めていたアインハルト・ストラトス。そして、とある理由から管理局の執務官になる事を目指している訓練生ホムラ・スメラギ。２人の共通点と言えば、ただの学校のクラスメイト。しかし、とある日を境に、二人の鮮烈な物語が始まります。アインハルト、マジ覇王！！　可愛いよ、アインハルト！！なお話になっていく予定です！　前作がありますが読まなくても大丈夫な感じで作っていきたいと思いますｗ

おかげさまで１４０万ＰＶ突破！　皆様、本当にありがとうございます。

プロローグ

歴史が私にどんな関係があろう。私の世界こそが、最初にして唯一の世界なのだ。

ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン　『草稿１９１４－１９１６』より

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

星の光が、空を埋め尽くしている。その光は、一体何十、何百、何千、何億年前のモノなのか、地上に居ながら眺めているだけではわからない。

しかし、眺めているだけでも分かる事もある。

「綺麗だ……」

「はい……そうですね……」

こうして、空を彩る星が『美しい』と認識することは誰にだって出来る。傍に誰かが一緒に居るのなら、その美しいという認識を共有することも。

原っぱに寝転がりながら、星を見る2人には今同じ光景が、同じ世界が観えている。

それぞれ独立した人間である二人が、星空を見て綺麗、美しいという認識を共有できるのは、そこに『言葉』があるからだ。
『星空』と言う言葉があって、『美しい』という言葉がある。そしてそれを、二人は同じ世界を観るために使っている。

言葉があって、世界がある。

歴史も、他者の価値観も、社会の風潮も、世論も、二人の観ている世界に干渉することは出来ない。

他の人間が、この星空を、どんな世界を観ていようが、二人には関係が無い。今2人が観ている世界だけが、彼らにとっての世界なのだから。

「……」

「……」

ギュ……

少し跳ね気味の、朱色の髪の少年の手を、碧銀の長い髪を二条に結った、虹彩異色の瞳の少女が黙って握る。
少年も、それをしっかりと握り返す。

こうして手を繋いでいると、自分達でも不思議なくらいに気持ちが落ち着く。

まるで、足りなかった自分のもう半分を見つける事が出来たようで、心が満たされる。

「いつまで、こうしていられるのでしょうか……私達は……」

「……僕達も、いずれは大人になって、今のような日々を送ることは出来なくなると思う。……でも……」

少女の問いに、少年は現実的な未来を投影し、まずはそれを言葉にする。

言葉となったその未来の投影は、少女の心にも同じイメージを想い浮かび上がらせる。

誰しもが大人になる。若い頃の、この時間が永遠に続くのでは？という何の根拠もない気持ちは、時間と共に消えて行く。

学校に行き、アルバイトをし、何かを学び、就職活動を経て、仕事を始め、可能であれば結婚し、これまた可能ならば子供を授かり、子育てをし、子供の一人立ちを見送り、年を取り、最後は死が待っている。

この中の過程がどこか違っても、ゴールは1つだ。

だからこそ、人はその過程の中で必死に生きる。若い頃の、なんとなく良い感じの時間などその内の一時でしかない。

「でも……こうして一緒にいることくらいは、幾らでも出来ると……思う……」

「……えぇ……」

少女の手を握ってくる力が、少し強くなった。
彼女も、同じ結論、気持ちに至ったのだろうか。

言葉になっていないことについては、認識を共有できない。

だが、同じだと思いたい、信じたい。そんな気持ちを持つことくらいは出来る。

隣りを見れば、碧銀の髪が視界に映り、虹彩異色の瞳がこちらを見つめている。
どうやら、同時にお互いの方を向いてしまったらしい。
気恥ずかしさと、可笑しさで2人して困った顔をしてしまった。

いつからだっただろうか？

お互いの存在が、こんなにも大事な、大切なものになったのは。

それをすべて思い返すのには、少し時間が掛かるが、二人にとっては掛け替えのない思い出だ。

それは、とある日から始まった物語。

２人にとっての鮮烈な物語の始まり。

プロローグ（後書き）

どうも、初めましての方は初めまして！　いつも通りのこんにちはな方は、こんにちはｗ　変態度に定評のあるＦ２０Ｃでございます。

この度、新作である魔法少女リリカルなのはＶｉＶｉｄ　とある訓練生と覇王っ子　の連載を開始させて頂きました。

プロローグで、既に趣味全開な形になっていますが、次回からは普通にキャラが出てきますのでご安心をｗ

前作として、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　ＬｏｓｔＭｅｍｏｒｙ　と　魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　ＢｌｏｏｄｏｆＰｒｏｍｉｓｅ　がございますが、未読の方でも楽しめるようにお話を書いていく予定なので、どうぞお楽しみくださいｗ　前作も、読んでいただけると嬉しいですがｗｗ

アインハルトがヒロインのこの作品、私自身、ＶｉＶＩｄを三冊まとめて買い、楽しく読ませていただいています。基本的に、原作の時系列通りに物語は進んでいきますが、要所要所でオリジナルの展開を挟んでいく予定です。その間で、主人公とのお話とかを入れたり……

駄文作者の書く作品ではありますが、よろしければ物語の最後までお付き合い下されば幸いですｗ

ではでは、また次回～～♪

次回　Ｍｅｍｏｒｙ.；０１　正面衝突から始まる何か

Ｍｅｍｏｒｙ，０１　正面衝突から始まる何か（前書き）

という訳で、連続更新ですねｗｗ

ストックは四話分あるので、推敲が終わり次第更新していきたいと思います。

今回は、主人公とアインハルトの出会いのお話。少しシリアスな部分もありますが、ここからが二人のお話のスタートでございますｗ

よろしければ、最後までお付き合い下さいませ！

では、本編どうぞ～

Ｍｅｍｏｒｙ；０１　正面衝突から始まる何か

記憶に鮮明に残っているのは、真っ赤な炎。
周囲に転がる焼死体や、圧死したのだろうか、腹から内臓が飛び出ている死体達。

そこはまさに死の世界と言うにふさわしい地獄と化していて、高級ホテルという保養地に必須の施設の面影は影も形も見えはしない。

つい数分前まで、バーで優雅に酒を嗜んでいた厚化粧のおばさんも、カジノで負けたとかで荒れていたお兄さんも、金婚式だとかで夫婦揃って保養地を堪能していたお爺ちゃんとお婆ちゃんも、一瞬で地獄と化した世界に飲みこまれ、生きているという状態を手放すことを強いられた。

人の生とは、こうまでも脆く、儚いものなのか。

朱色の髪に、青色の双眸を持った少年は、地面にへたり込み、泣いている妹を抱き締めながら、そんな事を考えていた。
そして、このまま自分達も、生きている状態から死んでいる状態へと変化してしまうのかと……

「ホムラ！！」

しかし、それは杞憂に終わることになる。
名前を呼ばれた瞬間、少年、ホムラは体に浮遊感を感じた。いや、実際に宙に浮いているのだ。

飛行魔法によって、崩れゆくホテルの廊下を高速で飛んでいる。

見れば、ホムラは魔導師であり管理局の局員でもある父に抱えられていた。先ほどまで一緒だった妹は、同じく魔導師の母が抱えている。

一瞬何が起こったのか訳が分からなかったが、父と母が自分たちを助けに来てくれたことだけは分かった。

「すまないな、助けに来るのが遅くなってしまった」

「よくユキナを守ってくれたわね……偉いわよ、ホムラ」

朦朧とする意識の中、父と母が自分を褒めてくれていたのを覚えている。その笑顔を、賞賛の言葉を。

それが、最後に交わした父と母との穏やかな会話だった。
この後の惨劇……ホムラにとっての紅い記憶の始まりとなる、最後の家族らしい会話だった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

戦いの記憶。

古代ベルカの、王達による戦いの記憶。

覇王の記憶。

悲しい記憶。

聖王との記憶。

体に受け継がれた、それらの記憶は夢となって少女の夜を彩る。
果たせなかった悲願、覇王の求めた悲願が、痛いくらいに伝わってくる夢。

碧銀の髪と虹彩異色の瞳と共に受け継がれてきた、記憶。覇王の血の中に流れ続ける、欠片としての記憶。

自分が成すべき事……覇王の悲願を達成すること、数百年分の後悔を清算すること。

少女、アインハルト・ストラトスにとって、覇王流（カイザーアーツ）とこれらの記憶は、自身の存在理由。

アインハルトは、自分自身をそう定義し続けてきた……

・
・
・
・

「はぁ……」

Ｓｔ．ヒルデ魔法学院。
魔法を学ぶための学校の一つであるその施設内にて、碧銀の髪・虹彩異色の瞳を持つ少女、アインハルト・ストラトスは１つ息を吐く。

別に気分が落ちているわけではない、ただ、心に重石を結び付けられているような気分だけだ。
戸惑いと言う表現が一番適当かもしれない。

記憶の中の覇王の悲願を達成するため、覇王流（カイザーアーツ）の強さを証明するために、ここ最近行ってきた路上での決闘。まぁ、悪く言えば路上喧嘩、通り魔のようなものだ。
昨夜も、同様にその決闘に勤しんでいたわけなのだが、少し妙なことになった。

対戦相手は、ストライクアーツ有段者のノーヴェ・ナカジマ。
聖王オリヴィエのクローンと冥府の炎王イクスヴェリア、この二人の事について聞くことと、自身の拳と彼女の拳どちらが強いかを見極めるために、アインハルトはノーヴェに路上決闘を申し込んだ。

結果だけを見れば、勝敗はアインハルトの勝ちだった。これまでにないくらい強い相手ではあったが、少々無茶な戦い方でその場の勝利だけはもぎ取る事が出来た。

しかし、問題はその後。どうやら、自身もかなりのダメージと疲れが溜まっていたようで、路上で気を失ってしまい、そこをノーヴェの縁者であるスバル・ナカジマ達によって拘束、言い方を変えて保護された。聞くところによると、追跡装置を取り付けられていたらしい。

結果的に一晩の宿を借りることになり、ノーヴェやスバル、それに彼女の親友であるティアナ・ランスターと今回の事件について詳細を説明し、近くの署まで足を運びこれまでの路上決闘についての説明と、厳重注意を受けた。
被害届が出ていなかったのが幸いだった。

そして、アインハルトの戸惑いの原因は、ここでのノーヴェとのやり取りで生まれた。

『お前の拳を受け止めてくれる奴がちゃんといる』

ノーヴェはアインハルトにそう言った。

覇王の記憶と、彼の悲願を乗せた彼女の拳を受け止めてくれる存在。聖王オリヴィエのクローンであるというその女の子の事を彼女は教えてくれた。

今日の放課後、ノーヴェがその女の子に会わせてくれるという事なのだが、やはり期待もあるものの、不安も大きい。このどっちつかずな自身の心の心象風景を一言で表すのなら、やはり戸惑いだろう。

「（もしも……今日会う人が……私が覇王としての拳を向ける相手でなかったら……）」

はぁ……

と、先ほどから同じ思考のループに陥っていた。ため息も、これで何回目だろうか。

そして、人間と言う生き物は中々に難しい生き物で、気持ちがブルーというより複雑に絡み合った状態になると、周りへの注意が散漫になってしまいがちだ。

それはいくらアインハルトのような、心身を鍛えた人間にでも現れてしまうもので、彼女は曲がり角の向こうから歩いてくる少年の存在に、完全に認識が追い付いていなかった。

向こうから歩いてくる少年も、少しボーっとしている、というかどこか疲れた顔をしていたようで、アインハルト同様、彼女の存在にまったく気が付かなかった。
まぁ、そんな二人が曲がり角で鉢合わせればどうなるか、答えは至極単純。

正面衝突だ。

ドンッ！

「わ？！」

「っ！？」

少し跳ね気味の朱色の髪をした少年と、アインハルトは勢いよくぶつかってしまい、両者は同時に尻餅をついてしまった。

あまり強い衝撃ではなかったが、二人とも上手く受け身を取ったようで、怪我などの心配なはい様子だ。

「ご、ゴメン！　少し、ボーっとしてて……！」

「い、いえ……。私も同じようなものなので……」

朱色の髪の少年は、アインハルトにぶつかってしまったことを認識すると、すぐに立ち上がり、すぐに彼女に自分の手を差し出す。
どうやら、掴まれという事らしい。

本当なら、別に立たせてもらうような程でもないのだが、気を使ってもらっているのにそれを無下にするのは失礼だと、アインハルト

はそう考え、少し迷った後に彼の手を取り立ち上がった。

「すみません、ありがとうございます……」

「ううん、僕の方こそ。それより……あれ？　左腕大丈夫？　怪我してるみたいだけど……？」

「え……？」

お互いに、ボーっとしていた事に対して謝り、一旦の落ち着きを取り戻す。

しかし、アインハルトは少し、目の前の朱色の髪の少年に違和感を覚える。

彼は、『左腕大丈夫？』とアインハルトに聞いてきた。その他の体の部位ではなく、左腕をピンポイントに指摘してきたのだ。

実を言うと、左腕は、昨夜のノーヴェとの激しい戦闘において、少しだが痛めていた。

その中でも、最後のリボルバー・スパイクの衝撃は相当のモノで、今もあの重い攻撃に驚いている。

小さな痛みが走る程度で、他者に分かるような仕草は出しているつもりもなかったはずなのに、この少年はそれを見抜いたのだ。

「……？　どうかした……？」

「い、いえ……。少し、左腕は別件で痛めてしまって、既に治療済みなのでお気になさらないでください。直に良くなるとも言われていますので」

「そっか。ならよかった」

言いながら、朱色の髪の少年は、尻餅をついた際に付いた埃を払う。
アインハルトも、彼に倣って埃を落とす。

と、目の前の少年の顔に、アインハルトは少し見覚えがあった。制服を見る限り、同じＳｔ．ヒルデ魔法学院の中等部一年生のようなのだが……

「あの……」

「えっと……なにか？　って、そう言えば君……どっかで見たような……」

少し気になったので、アインハルトは少し尋ねてみようとしたのだが、向こうも同じようにアインハルトに見覚えがあったようで、同じ種類のクエスチョンマークを頭に浮かべた。

そして、両者に対する答えは、意外なところから出てきた。

『マスター、こちらの方はアインハルト・ストラトス様ですよ？確か、同じクラスにいらっしゃったかと……』

「？」

「あぁ、そうか……。どこかで見た気がするわけだ」

その声は、朱色の髪の少年、どうやらホムラと言うのが名前らしい彼の胸元に光る、炎の欠片をイメージしたようなアクセサリーから

聞こえてきた。

「あ、驚かせたのならごめん……。こいつは、僕のデバイスで、『シラヌイ』っていうんだ」

『驚かせてしまい、申し訳ありません。アインハルト様』

「い、いえ！　どうぞお気になさらず」

なんだか、今日は謝ってばかりである。向こうの少年も、謝り癖が強いのか、同じ学年であるアインハルトに対してかなり低姿勢なことに、彼女自身も引っ張られているのかもしれない。

しかしながら、彼のデバイス、シラヌイがアインハルトの事を覚えていたことで、両者の頭に浮かんでいた共通の疑問は消えた。要するにクラスメイトだったわけだ。

2人は、改めてお互いの名前を名乗る。

「僕は、ホムラ・スメラギ……。改めてゴメン…」

「アインハルト・ストラトスです。こちらこそ……前方不注意でした」

お互いにクラスメイトでありながら、こうして正面衝突するまで、互いの名前も覚えていなかったというのだから、何ともおかしな自己紹介である。

しかし、自己紹介を終わらせてしまえば、話のネタは尽きてしまう。まぁ、ぶつかった相手と長々と話せるほど、このホムラと言う少年の肝は座っていないように見えるが。

「ごめんね、それじゃあ、僕はこれで……」

「はい、ごきげんよう、スメラギさん」

ホムラはバツの悪そうな顔に、困った笑顔を浮かべながらその場を後にした。アインハルトも、彼をファミリーネームで呼び、挨拶をした。

「（……あの人……）」

ホムラの去っていく姿を見つめながら、アインハルトは少し考えてしまう。

アインハルトの小さな怪我を見破った洞察力が、彼女の頭の隅にどうしても引っ掛かってしまうのだ。

彼の後姿には、疲れたようなオーラが出てはいるものの、普通に一般人に比べてどこか隙が無いようにも見える。

「（一体、何者なんでしょうか……？）」

放課後のノーヴェとの約束に加え、ホムラ・スメラギというクラスメイトに対する、なんだか妙な胸騒ぎと引っ掛かり。

アインハルトの悩みは尽きない。悩める乙女と言えば聞こえはいいが、彼女としては今現在のお悩みフォルダは、すでに一杯一杯だ。

「？　これは……？」

と、ホムラの姿が見えなくなってしまったので、気を取り直して教室に向かおうとしたアインハルトの視界に、黒いパスケースのよう

なものが飛び込んできた。

「……？」

落ちていたそれを手に取り、裏返してみると、そこには先ほどのホムラと言う少年の学生証が挟まっていた。
どうやら、先ほどぶつかった際に落としてしまったらしい。

そして、黒いパスケースの中にはもう一枚、何やら紙が挟まっていた。その紙は、写真のようでパスケースの中から、パラリと落ちかけるが、アインハルトは素早くそれをキャッチした。
その写真には……

「これは……？　家族写真……？」

そこには、笑顔のホムラ本人と、妹だろうか髪の色は彼と違って銀色ががっているが、少女、そして両親だと思われる男女。
父親と思しき男性は、厳格そうな印象、母親の方は柔和な印象を抱く事が出来る。

パッと見ただけでは、ただの温かい家族写真だ。しかし、アインハルトがその写真を裏返すと、こんな一文が書き記されていた。

『Ｕｎｏｂｔａｉｎａｂｌｅ　ｔｈｉｎｇ　ａｇａｉｎ．＞もう二度と手に入らないモノ＜』

「……これは……どういう……？」

その暖かな写真には似つかわしくない、どこか厳しく、戒めのようにも見える一文。
アインハルトは、その写真を手に、しばらくの間その場を動く事が出来なかった。

これが、アインハルト・ストラトスと、ホムラ・スメラギのファーストコンタクトだった。

Ｍｅｍｏｒｙ；０１　正面衝突から始まる何か（後書き）

Ｆ２０Ｃ「はい、と言うわけで第一話でした。どうでしたか、アインハルトさん？」

アインハルト「まだ始まったばかりですので何とも……ですが、スメラギさんは一体何者なんでしょうか……？」

Ｆ２０Ｃ「それは追々分かってきますので、少々お待ちをｗ　でも、正面衝突って、大丈夫だったんですか？」

アインハルト「しっかりと受け身は取りましたから。全く問題ありません」

？？？「ふ、甘いな……俺ならば正面衝突した際に、フェイトの胸にダイブ、もしくは鷲掴みというラッキースケベ展開に……」

Ｆ２０Ｃ「……あんた誰？」

？？？「私の正体は……続きはＷｅｂで」

Ｆ２０Ｃ「ねーよｗｗ」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；０２　仲良し三人組と最強の７歳児

Ｍｅｍｏｒｙ，０２　仲良し三人組と最強の七歳児（前書き）

ヒーハー☆！！

購入予定だったエロゲが無事にマスターアップしたぜ！！（関係ない）

来週の金曜日……朝一でソフマップに駆け込みます。我武者羅なまでに！！

全然関係ない話ですね、ごめんなさいｗｗ

さてさて、第二話でございます。ヴィヴィオ達の登場回であると同時に、前作のキャラクターが登場ですｗキャラについての説明はありますが、近い内にキャラクター紹介のページを作りますねｗｗ

ある意味、第二の主人公的な存在です……

では、本編を……ゆっくり楽しんでいってね！！

Ｍｅｍｏｒｙ；０２　仲良し三人組と最強の七歳児

「うぅ……」

『マスター？　やはり、ここ最近は少し無理をなさり過ぎなのではございませんか？　バイタルも安定しておりません、少し自重なさってください』

「は、ははは、何言ってるのさシラヌイ……僕は疲れてなんかないさ……大丈夫……今日も最後まで頑張んなきゃね……」

『……』

ホムラ・スメラギは、アインハルトとぶつかってしまったあと、教師たちが詰めている職員棟に向かっていた。
ちょっとした用事のために、今日の授業を早退する必要があるので、その申請だ。

まぁ、この申請も何回もしている事なので、先生も理解してくれているし、逆に励ましや激励の言葉まで貰っている。
期待に応えるという気持ちはそこそこにしか湧いてはこないが、教師陣から悪い意味で目を付けられるよりかは万倍マシと言うものだ。

「それにしても、さっきの……えぇと、アインハルト・ストラトスさん……だっけ？」

『はい、彼女が如何なさいました？』

「なんで怪我なんてしてたんだろうね…？　喧嘩でもしたのかな…

…？」

ホムラは、少し気になっていた事と、話しの方向を変えるために先ほどぶつかった、アインハルトの話題をシラヌイに振ってみる。
まぁ、彼女のような女の子が、ストリートファイターさながらな事をしているなど、夢にも思うまい。

『ふむ……昔から、女性には色々あると相場は決まっています。もしかすると、日曜朝８時３０分から放送されている、なんとかキュア的なお仕事でもされているのでは？　女の子だって暴れたい、そう言う事でしょう』

「何だろう、本能的な何かが、『大体合ってる』って言ってるよ……」

シラヌイの予測は、細かいところでかなり差異はあるものの、それなりに大筋は当たっていた。
まぁ、その事実をホムラが知るのはまだ少し先の話になってしまうのだが。

さてさて、教員棟までの道のりはそう遠いものではない。初等科校舎にある図書館の横を通りぬけて、真っ直ぐ行けばすぐに見えてくる。
しかし、今日のホムラはやたらと女の子に縁がある様で、図書館から本を借りてきたのだろうか、少し大量の本を抱えた金髪をツーテールにした虹彩異色の女の子と、活発そうな黒髪の女の子、少し大人しそうなグレーっぽい色の髪を二条に結った女の子、そして、その後ろをニコニコしながらついて歩いているオレンジ色の少年、見

たところ初等部の子のようだ。

「あ……」

と、ホムラはある事に気が付く。
その四人が歩いている先に、恐らく清掃員さんが水撒きのために使用しているであろう、水道に繋がったホースが横たわっているのだ。
しかも、女の子達は本を運ぶのと、お喋りで足元が全く見えていない。

足を引っ掛けて転んでしまうのでは、とホムラが思ったその瞬間……

「きゃわ！？」

案の定、一番前を歩いていた金髪の女の子が、ホースに足を取られ、バランスを崩してしまった。
本と一緒に、地面にタッチダウンしてしまうことになる事は必至だ。

「っ！」

そう思った瞬間、ホムラの体は勝手に動いていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

金髪の髪をツーテールで短く纏めた少女、高町ヴィヴィオ。
一言でいえば、彼女は少し特別な存在である。
最後のゆりかごの聖王オリヴィエ、そのクローンとして、聖王の器

として人の手によって生み出された存在だ。
ＪＳ事件においては、スカリエッティによってレリックを体内に埋め込まれ、古代の戦船『聖王のゆりかご』の制御ユニットとして組み込まれてしまった。その後、救出のために駆け付けた後の母である高町なのはと聖王としての戦闘モードで激しい戦いを繰り広げ、その末に保護されたヴィヴィオは、その後正式に彼女の娘となった。

生まれ方、背負っている背景などは確かに壮大且つ、重いものが在るが、あくまで今の彼女は高町ヴィヴィオというＳｔ．ヒルデ魔法学院・初等科四年生に在籍するごく普通の少女である。

「うわ～、思ってた以上の量になっちゃったね～……」

「貸し出しの人も、ちょっとビックリしちゃってたし」

「まぁ、ジャンルもかなり渋い感じだしね～」

そのヴィヴィオは只今本の山を抱えている。
そして、初等科一年生以来の親友である、コロナ・ティミルと三年生期末からの付き合いである、リオ・ウェズリーも、同様に少し多めの本を抱えている。

それと言うのも、ヴィヴィオが取り組んでいるストライクアーツの師匠的な存在である、ノーヴェからのメールで、シュトゥラについての歴史やシュトゥラの覇王に関することについて知りたいと連絡が来たので、それを調べるためなのだ。

図書館内で一通り目を通したのだが、必要だと思われるものだけを厳選して借り出したというわけだ。それでも、彼女たちの手に余る多さではあるが。

「はふぅ……け、結構きついかも……」

「大丈夫、コロナ？　半分持とうか？」

「う、ううん！　リオだって私以上にたくさん持ってるんだし、そんなこと出来ないよ」

少しパワー不足なのか、コロナは手に持っている本の重さで、少し辛くなってきていたようだ。
見かねたリオが、手伝おうとするもコロナは遠慮してしまう。

だが、このままでは本を落としてしまう可能性も出てくる。素直にリオの好意に甘えるべきなのだが、リオの手にうず高く積まれた本を見るとそうも出来ない。

「だったら、俺が持つね」

「わわ！？」

と、そんな時、いきなりコロナの持っていた本の山の三分の二が、誰かによってヒョイと持ち上げられた。
いきなり腕に掛かっていた本の重さが軽くなったことで、コロナは驚いてしまうが、手伝ってくれた相手の顔を見ると、その表情はすぐに笑顔になった。

「クゥちゃん！♪」

「やっほー、お姉ちゃんたち」

そこには、大量の本を蕎麦でも配達するかのような形で持ちながら、ヴィヴィオ達に手を振っている、橙色の髪が印象的な少年だった。
コロナが『クゥちゃん』と呼ぶ、この少年の名前は、クゥ・ランスター。ヴィヴィオの母、なのはの元教え子にして、現在管理局にて執務官として活躍している、ティアナ・ランスターの一人息子である。

ヴィヴィオ&リオ「「クゥ！」」

でもって、ヴィヴィオとリオもまた、彼の姿を見るとそう声を上げる。ヴィヴィオとはなのはとティアナの関係で知り合い、コロナとはヴィヴィオ経由で、リオとも同じような形で知り合った。
三人の事は、良いお姉さんとして慕っている。まぁ、コロナは別枠らしいのだが。

「ていうか、この大量の本どうしたの？　もしかして、ブービートラップでも作るとか？♪」

三人「「「違います！」」」

「ちぇー、つまーんない」

大量の本を、悪戯に使うのかと期待したクゥだったが、ヴィヴィオ達がそんなことに使うはずもなく、一言で否定されてしまった。
このクゥ、かなりの悪戯小僧であり、その度に母であるティアナから、愛の制裁を食らっている。

「ノーヴェからお願いされちゃって、ちょっとお勉強なんだ」

「ふ～ん……ノーヴェ姉ちゃんから」

クルクルと、大量の本を指の上で回転させながら、クゥはヴィヴィオから本の使用目的を聞いた。
一体どういう腕力をしているのかと突っ込みたくなるが、これはクゥがヴィヴィオ同様特別な存在であるという事が関係している。

一年と少し前、管理局を舞台にＪＳ事件以来の大事件が起こった。
その事件の中心的存在であった、人間の進化の一つの形とされる、『イノベイト・チルドレン』という者達が居た。
そのイノベイト・チルドレン達の中でも、最高の戦闘能力を持っていた『ソラ』という青年が企てた計画によって、管理局内の不正や闇が一気に露呈した。それを機に、局内では今日に及んでも改革運動が盛んになっている。

まぁ、それは表向き、ソラの目的の一つでしかなかった。ソラというイノベイト・チルドレンの本当の目的は、コミュと呼ばれる人の意識の総体、集合意識との人間の接触だった。

その計画の過程で、ソラ自身は、想い人であったティアナを残し、自身を蝕んでいた病によってこの世を去った。
その少し後に、少し特殊な過程で誕生したのが、このクゥという少年だ。

クゥはソラとティアナの遺伝子を受け継いだ、人の意識の総体によって生み出された特別なイノベイト・チルドレンであり、謂わば二人の子供である。
ティアナとの邂逅を果たし、彼女に引き取られ、息子として最大限の愛情を注がれて、今日までの成長を見せている。

イノベイト・チルドレンである彼は、常人よりも何倍も優れた身体

能力を持ち、独自固有の能力も持った存在だ。

彼の正体の事に関しては、知る者はほとんどいない。隠すつもりはないのだが、彼を人間として育てると決めたティアナは、クゥの正体や父親の事をあまり軽々しく話さないようにしている。時期が来れば、ちゃんと教えるとの事だ。

まぁ、クゥの裏事情の簡単な説明はそこそこに、話を前進させたいと思う。

「コロナお姉ちゃん、どこまで運べばいいの？　俺手伝うよ」

「え？　結構重い……って、そうでもないみたいだけど、良いのかな？」

片手で大量の本を持ち上げる馬力を見れば、クゥに任せるのは安心できるのだが、彼にも予定があるのではとコロナは思い、尋ね返してみる。

「お～い！！　クゥ～～！！　何やってんだよ～～！！　早く体育館行こ～ぜ！！」

「早くしないと、置いてくぞ～～！？」

と、やはりクゥにも遊びの予定があったようで、少し離れたところから友達であろう男の子たちの声が聞こえた。

しかし、クゥは申し訳なさそうにすると、その友達たちに手を振りながら

「ごめ～ん、俺今から、このお姉ちゃんたちとエメラルドの都までランデブーしてくるから、また今度～！！」

ヴィヴィオ達「「「（古！！？　よく分かんないけど、クゥ（ちゃん）の言ってるフレーズがめちゃめちゃ古いってことだけは分かっちゃう！！？）」」」

どこでそんな昭和臭が漂うフレーズを入手してきたのかは分からないが、クゥはそう言って友達からの誘いを断った。
友達からも、クゥの謎のフレーズに『何だそりゃｗｗ』というリアクションを貰いはしたものの、穏便に事を済ませる事が出来たのだが。

「女の子には優しくしろって、お母さんから言われてるし。そ、それにコロナお姉ちゃんにこんな重たいもの持たせてたら、今にも転びそうで見てらんないよ……」

「クゥちゃん……」

建前ではこう言っているが、コロナに対してはヴィヴィオ達に比べて少し、というかかなり優しくなるクゥ。この態度から察するに、どうもクゥはコロナに好意を持っているようなのだ。少しツンデレが入っているようだが、それは遺伝という事なのか。

「うぅ～！！　クゥちゃん、なんでそんなにいい子なの～！！　ぎゅー！」

「ちょ！！？　コロナお姉ちゃん！　落ちる、本落ちるってばぁ！！」

コロナはそんなクゥが大層お気に入りのようで、今現在のようにクゥを思い切り可愛がる。今現在、クゥはコロナに頭から抱き締められ、本を落とさないようにするので必死である。

リオとヴィヴィオは、最近お馴染みになりつつあるその光景を前に、可愛いものを見るような視線を送っていた。

閑話休題

「そ、それじゃあとりあえず、お姉ちゃんたちの教室まで行ってみようか……」

「ありがとう、クゥちゃん♪」

なんとか本を落とさずにコロナのハグを切り抜けた（本人としては役得）クゥがそう言うと、コロナがそうお礼を言って、ヴィヴィオ達は苦笑しながらも歩みを進める。

と、その時、クゥ達に話しておこうと思っていたことがある事をヴィヴィオは思い出した。

「あ、そうだ皆。今日の放課後ね、ノーヴェが新しく格闘技やってる子と知り合ったから、一緒に練習してみないかって言われてるんだけど」

ヴィヴィオの提案と言うのは、これまたノーヴェから言われていたことで、ヴィヴィオ自身、先ほどから楽しみにしていた事なのだ。どの道、クゥを含めたこの四人で放課後はストライクアーツの練習

をするつもりだったので、今の内に言っておこうと思ったというわけだ。

「どんな人なのかな……？　めちゃめちゃ強い？」

「う～ん、それは分かんないけど、ノーヴェが連れてくるくらいだからかなり強いんじゃないかなぁ……」

「ほんと！？　だったら、試合とかしてみたい！！」

「あはは……クゥちゃんは元気だね……」

ヴィヴィオにその新顔の事を聞くと、クゥは目を輝かせてテンションを上げていた。彼自身、ストライクアーツがというか、戦う事が大好きのようで、強い相手と聞くとこんな風になってしまう。上昇志向と言うか、チャレンジ精神と言うか、誰に似たのか上を目指す姿勢については定評がある。

「放課後に乞うご期待！　って感じだね」

「うん。じゃあ、また皆で練習場に……」

と、この時のヴィヴィオ達は話に夢中になって、少し注意力が散漫になっていた。足元に伸びていた、清掃用のホースに気が付く事が出来なかったのだ。

そして……

「きゃわ！？」

一番先頭を歩いていたヴィヴィオが、ものの見事にそのホースに足を取られ、バランスを崩してしまう。本を持っているせいで、立て直すことも出来ず地面に向かって体が斜めに傾いていく。

三人「「「ヴィヴィオ（お姉ちゃん）！!?」」」

クゥ達が手を伸ばすも、ヴィヴィオの転倒速度の方が早く、間に合わない。

ヴィヴィオも転倒の予測がついたのか、その衝撃に耐えるように体を強張らせた。

しかし……

トン……

「わわ?!」

ヴィヴィオの転倒は、途中で阻止された。倒れそうになっていた本も、ヴィヴィオ自身の体も、地面に転がることなく地に足が付いた状態だ。

「大丈夫?」

「え?」

見れば、彼女の体を支えるように手を貸している、朱色の跳ね気味の髪をした中等部の制服を着た少年がそこには居た。

ついさっきまではそんなところに居なかったにも拘らずだ。

しかし、結果だけを見ると、どうやらヴィヴィオはこの先輩に助け

てもらったらしい。

「わ、す、すみません！！　足元を見てなくて……」

「ううん、別に気にしてないよ。あはは、凄い本の数だ、読書家なんだね」

ゆっくりと傾いたヴィヴィオと本の状態をまっすぐにしながら、彼女の持つ大量の本に苦笑する、朱色の髪の少年。
胸元に光る、炎を象ったような形のアクセサリーが、彼の髪の色とよく合っていた。

「あ、あの！　危ないところをありがとうございました」

「そ、そんな畏まらなくてもいいからさ……。別に大したことじゃないから。それじゃあ、僕はこれで……。足元には気を付けてね」

少年は、ヴィヴィオにそう告げると、四人の横をすり抜けてその場を後にする。
一瞬の事で唖然としていたのだが、このままお礼だけを言って終わりと言うのはどうかと思い、ヴィヴィオは彼の歩いて行った方向に振り向いて、制止しようとしたのだが……

「あ、あれ？」

「い、いない？」

ヴィヴィオと同じく、クゥも朱色の髪の少年の方に振り向いたつもりだったのだが、そこには既に誰も居なかったのだ。
コロナとリオも、不思議そうな顔をしている。

「ていうかさ、あのお兄さん、ついさっきまでもうちょっと先の方に居たはずなのに、まるで瞬間移動したみたいにヴィヴィオお姉ちゃんのこと助けてなかった？　フェイトさんのソニックムーブみたいに早かった……」

「よく見てなかったけど、確かに気が付いたらそこに居たもんね……う～ん……？」

唯一、少年の存在に最初から気が付いていたクゥがそう言うのだが、リオが言う様に、他の三人はそんな事を気にする余裕もなかったようで、ヴィヴィオを助けてくれたという事実しか分からない。

「（ふ～ん……この学校、結構面白い人がいっぱいいるんだ……はは♪　なんか楽しくなってきちゃったなぁ）」

クゥは、先ほどの先輩の動きに興味をそそられたのか、少し楽しそうな表情をしていた。まぁ、放課後にももしかしたら強い存在と戦えるかもしれないという事もあるので、今すぐもう一度会いたいとは思わなかったが。

「今度会ったら、改めてお礼言わなきゃね……。この学園の中等科の制服着てたみたいだし、またすぐに会えるよ」

「だね。じゃ、今度は躓かない様に周りに注意して行こっか？」

『おーー！』

と、ヴィヴィオに次いでリオがそう言うと、他三人も声を揃えてそう返事を返し、一行は再び本を持って、教室に向かうのだった。

Ｍｅｍｏｒｙ；０２　仲良し三人組と最強の七歳児（後書き）

コロナ「クゥちゃんはいい子だね♪」

クゥ「べ、別に！！　お姉ちゃんが怪我なんかしたら、目覚めが悪いだけだもん」

Ｆ２０Ｃ「ツンデレ乙」

クゥ「つんでれってなぁに？」

？？？「ティアナみたいな感じの人の事さ。なかなかの萌えポイントなんだよ……。まぁ、俺は優しいお姉さんキャラにしか靡かないが……」

クゥ「あ！　お母さんが言ってた人だ！！　変態のお兄ちゃんだ！！♪」

コロナ「へ、変態？」

クゥ「うん！　あの人みたいになっちゃダメよ？って、お母さんが言ってた！」

？？？「……ティアナ……なるほど……そうして俺の人気投票順位を落とす作戦か……や、やるじゃないか……」

Ｆ２０Ｃ「いや、人気投票なんぞ予定にないからｗｗ　ていうか、変態のお兄ちゃんって……ワロスｗｗ」

？？？「ちくしょおおおおおおおおおおおお！！！！」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；０３　何事もまずは挨拶から

Ｍｅｍｏｒｙ，０３　何事もまずは挨拶から（前書き）

二日連続更新でございます。次回の更新は、来週の月曜日になるかと。

加えて、この度今作　とある訓練生と覇王っ子　のお気に入り登録数が１００件を突破いたしました！　皆様、本当にありがとうございますｗ

私の中では１００件到達速度で過去最高記録という事で、テンションマックスでございますｗｗ

まだまだ始まったばかりではございますが、よろしければ最後までお付き合い下さいませ。

それでは、本編をどうぞ！

Ｍｅｍｏｒｙ；０３　何事もまずは挨拶から

放課後、ヴィヴィオとクゥ、コロナ、リオの四人は予定通りにノーヴェが知り合ったという人物に会うべく、市内地のカフェに向かった。
そこで、ノーヴェと合流することになっていたというわけだ。

どんな人が来てくれるのか、どんなに強いのだろうか？　そんな期待とワクワクが止まらないという事で、ヴィヴィオを筆頭にクゥまでもが明るい表情をしている。

「ノーヴェ！　みんなー！　あれ？　スバルさんとティアナさんまで！」

「こんにちわー！」

そして、待ち合わせ場所だったカフェに到着したヴィヴィオ達御一行。そこには、ノーヴェの姿だけではなく、スバルとクゥの母であるティアナの姿もあり、さらには元ナンバーズの姉妹たちの姿もあった。

ついさっきまで話に花を咲かせていたらしく、一同に表情には楽しげな色が見られた。

「あ～、やかましくて悪ィな」

「ううん、ぜんぜん！！」

ノーヴェにそう返事をし、チンク達にも挨拶をする。コロナとリオ

もスバルたちに挨拶を済ませていた。

「お母さん！」

「クゥ、やっぱりあんたもくっ付いてきたのね？　まぁ、分かってたことだけど」

そして、クゥは母であるティアナに駆け寄り、嬉しそうな顔をする。休暇という事で、家に帰れば彼女がいると分かってはいたのだが、こうして早くに会えたのだから嬉しいのだろう。

「今日も、ちゃんと勉強したの？」

「うん、もちろん！」

「そう、偉いわね……。じゃあ、今日はどんな悪戯をしたのかしら？」

「あはは、今日はね～、教頭先生のカツラを吹き飛ばして、クラス中が大爆ｓｙ……あ……」

あまりに自然すぎる流れでティアナが尋問をしてきた所為か、クゥはツルッと今日の悪戯の内容をティアナに漏らしてしまう。こう言ったテクニックも、執務官ならではなのだろうか。

兎も角、自爆をしてしまったことに気が付いたクゥであったが、気が付いたときにはもう遅い。目の前には、先ほどまでの優しい表情の母は居らず、表情だけが笑顔で、目が笑っていない、怒っていることがよく分かる母の姿があった。

「へぇ～……今日も随分とエンターティナーな活躍をしてきたのねぇ～……」

「あ……あはは……そ、そうでもないと思う……よ？」

ティアナは怖い笑顔を浮かべながら、クゥに迫っていく。その迫力に圧倒され、クゥは若干涙目になりながら、後ずさりする。

さながら、トラに睨まれたウサギのようでもある。

「クゥ～？　お母さんいつも言ってるわよね～？　無暗に力を使って悪戯しちゃいけませんって……忘れちゃったのかな？　かな？」

「おおおおお、覚えてます！！　あ、あとお母さん？　それ多分別の番組の、中の人繋がりなネタな気がする……」

目のハイライトは消えていないが、笑顔が怖い。

一瞬、ひぐらしの鳴き声が聞こえた気がしたが、まぁきの所為だろう。うん、多分。

「あんたって子は！！　何度！　言えば！　悪戯を！　やめるの！　かしら！」

「ふにゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？」

クゥはその場でティアナに『悪い子！　悪い子！』と、尻叩きの刑に処され、情けない叫び声をあげて沈黙した。

このやり取りも、もう何回目になるのか数えるのも面倒になってしまうほどなのだが、見ている分には微笑ましいシーンである。

ちなみに、クゥの能力については追々説明していくことにする。

「全く……これで学校から呼び出しがかからないのが不思議なのよね……」

「あはは……基本的に誰がやったのか全然分からないですもんね、クゥの悪戯って……」

「ぐす……コロナ姉ちゃん……」

「よしよし……」

ため息交じりでティアナがそう言うと、リオがそう補足を入れる。ちなみに、只今、クゥはコロナに泣き付いている。これもよく見る光景だ。周囲からは、『あらあら、まぁまぁ』と言う感じの視線が注がれる。

「で、紹介してくれる子って？」

「さっき連絡あったから、もうすぐ来るよ」

微笑ましい光景を見ながら、ヴィヴィオはノーヴェに本日のゲストについて尋ねてみる。今日の本来の目的でもあるわけだし、どんな人物なのかくらいは聞いておきたかった。

「何歳くらいの子？　流派は？」

「お前の学校の中等科の一年生。流派はまぁ……旧ベルカ式の古流武術だな」

「へー！」

中等科の一年生という事は、ヴィヴィオよりも二歳年上という事で、先輩に当たる。旧ベルカ式の古流武術と言う点も気になるところだ。ヴィヴィオは、ますます今日会う人物の事が気になった。

「あとアレだ、お前と同じ虹彩異色」

「ほんとー！？」

そして、意外な共通点が見えてきた。ヴィヴィオと同じ虹彩異色、両目の色がそれぞれ違うという体質の人間はそうそういない。ヴィヴィオは興奮を隠しきれない様子で目を輝かせた。

「まぁヴィヴィオ、座ったら？」

「そうそう」

「あ……そうですね／／／」

そこを、クゥのお説教を終えたティアナに制され、スバルからも同じように落ち着けという意味で席に付くように勧められる。子供っぽい振る舞いをしてしまったと、若干恥ずかしさを隠しきれないヴィヴィオだった。

その時……

「失礼します」

凛と、透き通った声が、賑やかなカフェに訪れた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「はぁ……どうしましょう……」

碧銀の髪を二条に結った、虹彩異色の瞳を持つ少女、アインハルト・ストラトスは困った表情をしながら、ノーヴェとの待ち合わせ場所に向かっていた。

先程連絡を入れておいたので、すでにこちらが向かっている事は伝わっている。

聖王オリヴィエのクローンである存在と会える、覇王としての拳を受け止めてくれるかもしれないという期待と、同時に不安もあるにはあるが、それに加えてアインハルトには小さな気掛かりになる事があった。

彼女の手にある、黒いパスケースだ。

「スメラギさんに返しておこうと思ったのですが………早退だったなんて……」

そう、昼間に正面衝突してしまった朱色の髪のクラスメート、ホムラ・スメラギ。彼が落とした学生証と写真が入ったパスケースを返す事が出来なかったのだ。

同じクラスという事で、放課後の人の数が落ち着いた頃にでも返そうかと思っていたのだが、次の時間から彼の姿は見えず、席からもカバンが消えていた。

気になったので、先生に尋ねてみると『今日は少し事情があって早退した』との事だった。

パスケースを返すことも出来ず、収穫があったと言えば、ホムラの席が意外にも自分の隣であったという事だけだった。

お互いに言えた義理ではないが、他人の事を覚える、興味を持つという思考に少し欠けているのではないのかと思ってしまった。正面衝突するまで気が付かなかったのだから。

「（仕方ないですね……明日にでも、改めて返すことにしましょう）」

まぁ、居ないものは仕方がない。探しに行くにしても探す当てもないし、今日は今から用事だってある。

写真に記された気になる文の事もあるが、今日は一先ず置いておくことにする。

そして、しばらく歩くこと数分。目的のカフェが見えてきた。

見れば、かなりの大人数で来ているらしく、ノーヴェやスバル、ティアナ達の他に知らない顔が沢山あった。

「……」

少し近寄りづらい明るい雰囲気があり、少々身構えてしまうアインハルトだったが、ここまで来て怖気づいていては話にならない。

背筋をシャキッと伸ばして、いつも通りに凛とした態度でノーヴェ達の一段の方に向かう。

「失礼します。ノーヴェさん、皆さん」

口を開いてそう言葉を発した瞬間、一同の視線がアインハルトを捉える。別に緊張するつもりもなかったのだが、こうして複数人の視線が集まってしまうと、思わず表情が硬くなってしまった。

「アインハルト・ストラトス、参りました」

名乗った瞬間、金色の髪をした自分と同じ虹彩異色の女の子がこ知らを向き、その顔がよく見えた。とても可愛らしい、そんな形容詞がよく似合う少女だ。

「すみません、遅くなりました」

「いやいや、遅かねーよ。でな、アインハルト、こいつが例の……」

時間通りではあるが、一番最後に到着した手前、詫びの一つもないと失礼だとアインハルトが頭を下げる。しかし、ノーヴェは気にしていないと言って、先ほどの金髪の少女に自己紹介を促す。

少女は、元気いっぱいなのがこちらにも伝わるくらい勢いよく、且つ笑顔で自己紹介をしてくれた。

「ミッド式のストライクアーツをやってます。高町ヴィヴィオです！」

「（この子が……）」

パッと見ただけでも、華奢な、悪く言えば脆そうな体をしている。アインハルトも人の事は言えないが、それでもヴィヴィオの第一印

象は変わらない。

「ベルカ古流武術、アインハルト・ストラトスです」

言いながら、ヴィヴィオと握手を交わす。やはり、小さな手である。
華奢な体に小さな手。どこにでもいる、普通の女の子だ。

しかし……

「（だけど、この紅と翠の鮮やかな瞳は……覇王（わたし）の記憶に焼きついた、間違うはずもない聖王女の証……）」

覇王としての記憶にある、聖王オリヴィエの容姿と同じ存在が目の前にいる。自分の、覇王としての拳を受け止めてくれるかもしれない存在が。
そんな事を考えながら、アインハルトは気が付かない間に呆けていたようで……

「あの、アインハルト……さん？」

「っ！　――――ああ、失礼しました」

「あ、いえ！」

ヴィヴィオに声を掛けられるまで、握手している事を忘れてしまっていた。
聖王オリヴィエのクローン、彼女と同じ身体的特徴。それらの事実が、アインハルトの頭を埋め尽くしてしまっていたようだ。

「まぁ、二人とも格闘技者同士、ごちゃごちゃ話すより手合せでも

した方が早いだろ。場所は押さえてあるから、早速行こうぜ」

アインハルトの事情を知っているノーヴェは、自然に話をそもそもの目的であるストライクアーツの練習、試合と言う方向に持って行く。

アインハルトにしても、ヴィヴィオにしても彼女の計らいは願ってもないことだったので、すぐに場所を移すことになった。

道すがら、初めて顔を合わせるクゥ達とは自己紹介を済ませつつ、一行は区民センター内のスポーツコートを目指すことになった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

――区民センター・スポーツコート

「じゃあ、あの、アインハルトさん！　よろしくお願いします！」

「――――はい」

スポーツコート内に到着したヴィヴィオとアインハルトは、競技用のプロテクターなどを装備し、スパーリングの準備を完了させていた。

かなりの大人数で来てしまったので、何かのイベントなのかと誤解されそうで心配だったが。

準備を整え、ヴィヴィオを正面に捉えながらアインハルトは今朝の事を思い出す。署で、ノーヴェに話した覇王の悲願と自身の中の覇

王の記憶。

それに対して、ノーヴェは言ってくれた。『お前の拳を受け止めてくれる奴が、ちゃんといる』と……

「（本当に……？　この子が覇王の拳を、覇王の悲願を受け止めてくれる……？）」

不安はあるが期待もある、そんな妙な気持ちを抱きながらアインハルトは足元にベルカの魔法陣を浮かび上がらせる。
それを見た瞬間、ヴィヴィオの目が輝いた。強者と巡り合えたことが嬉しいのだろうか。

「んじゃ、スパーリング4分、1ラウンド。射砲撃とバインドは無しの格闘オンリーな」

アインハルト、ヴィヴィオの両名が構えるとノーヴェが今回のスパーリングのルールを説明する。
そして……

「レディ…ゴー！！」

ノーヴェの掛け声を共に、スパーリングは開始された。
トントンと、足でステップを踏み、両者は間合いとタイミングを測る。

タンッ！

先に仕掛けたのはヴィヴィオだった。ステップから、一気にアイン

ハルトへと間合いを詰め、拳を放つ。

ゴゥン！！

初撃はアインハルトは素早く反応し、あっさりと防がれてしまう。しかし、ヴィヴィオも最初の一撃ですべてが決まるなどとは毛頭考えていない。そこから彼女は、アインハルトに対して攻めの姿勢で連続攻撃を放つ。

ガッ！　ドッ！　ガキン！

「ヴィ、ヴィヴィオって変身前でも結構強い……？」

「練習頑張ってるからねぇ～」

その見事な連続攻撃と体捌きに、ティアナが感心しつつ、驚いていた。スバルはヴィヴィオがどれだけの練習を積んでいるのか知っているので、どこか我が事のように誇らしげだ。

しかし、注目すべきはアインハルトだろう。

そのヴィヴィオの攻撃を、次々と捌いて、受け流している。防御の仕方も無駄が無く、的確にヴィヴィオの攻撃に対処している。

「（まっすぐな技……きっとまっすぐな心……）」

が、そんなアインハルトの心は少し暗いものだった。

戦いながら、ヴィヴィオの事が、彼女の拳を伝って分かってしまったのだ。

「（だけどこの子は……だからこの子は……）」

ブン！

アインハルトは、少し大振り気味だったヴィヴィオの攻撃を躱し、彼女の懐に入り込む。
攻撃を放ったばかりで、ヴィヴィオのガードは完全にがら空きだ。

「（私が戦うべき『王』ではないし……）」

不安は、戦う前からあった。この目の前の少女が、自分の、覇王が求めている存在ではないかもしれないということが。
覇王の拳を向けるべき相手ではないのかもしれないという事が。

このスパーリングを通して、アインハルトは悟ってしまった。この少女は……違うのだと。

ズドンッ！！

アインハルトは、がら空きのヴィヴィオのボディに掌底を叩き込んだ。
まったくのノーガードだったヴィヴィオに、この攻撃を防ぐすべはなく、彼女は綺麗に吹き飛ばされてしまった。

オットーとディードによってキャッチされたヴィヴィオは、アインハルトの強さに目を輝かせる。

「（すごいっ！！）」

しかし、対するアインハルトは、沈んだ表情をしていた。

「（――――私とは違う……）」

自分が戦うべき相手ではなかった。覇王の拳を向けていい相手ではなかったと、アインハルトはこのスパーリングでそう感じた。感じてしまったのだ。

そして彼女は……

「お手合わせ、ありがとうございました」

そう言って、ヴィヴィオに背を向けてスパーリングを打ち切ってしまう。

沈んだ表情のアインハルトと、突然の事で戸惑うヴィヴィオ。対照的な表情の二人が、コート内でその距離を離していく。

「あの……あの！！　すみません、わたし何か失礼を……？」

「いいえ」

ヴィヴィオは自分の戦うし背に問題があったのかと思い、アインハルトを呼び止めて尋ねるが、彼女はそうではないと答えた。

「じゃ、じゃああの……わたし……弱過ぎました？」

「いえ、『趣味と遊びの範囲内』でしたら十分過ぎるほどに……。申し訳ありません、私の身勝手です」

そう言って、アインハルトは再びその場を去ろうとする。

別に、ヴィヴィオが悪いというわけではない。アインハルト自身が言う様に、これはただの身勝手だ。

ただ単に、ヴィヴィオが覇王の拳を受け止めてくれる存在ではない。
そうアインハルトが感じ、これ以上は意味がないと思ったから。
しかし、ヴィヴィオは納得できるはずもない。いきなりスパーをキャンセルされれば、自分のどこかが悪いのだと考えてしまう。
「あの！　今のスパーが不真面目に感じたなら謝ります！　今度はもっと真剣にやります、だからもう一度やらせてもらえませんか？」
ヴィヴィオは、もう一度彼女と試合をしたいと、再戦を頼み込む。
彼女からすれば、今回のスパーのキャンセルは訳が分からないことだろうし、納得も出来ない。
このまま、この勝負をうやむやにしたくはないし、このまま終わらせたくはなかった。
「今日じゃなくてもいいです！　明日でも…来週でも！！」
「……」
そのヴィヴィオの声に、アインハルトは困った表情をしてしまう。
このまま、今日戦っても、明日戦っても、来週戦っても、結果は同じなのではないか？　意味がないのではないか？　と、ヴィヴィオとの試合の意味を測りかねていた。
彼女としては、ヴィヴィオが自分の求めていた、戦うべき王ではないのであれば、これ以上彼女に相手をしてもらうのも悪いと考えていたのだ。

しかし、その時。
その嫌な雰囲気を、明るい声が破った。

「ねーねー！　アインハルトお姉ちゃん。　次は俺とやんない？」

「え…？」

その声の主は、コロナとティアナの間でアインハルトたちの対戦を鑑賞していたクゥだった。
人懐っこい笑顔と、母親譲りの橙色の髪が印象的だと、アインハルトは自己紹介の時に感じた。

「なんか、アインハルトお姉ちゃん、不完全燃焼っていうか、煮え切らないっぽい顔してるし……だったら、次は俺とスパーしようよ♪」

不完全燃焼と言う表現が適当かは分からないが、煮え切らないという感情なら僅かに理解できた。
もしかすると、とヴィヴィオとのスパーをやってみたが、結果的にアインハルトは探していた相手はヴィヴィオではないと結論付けた。

そこで、自分の中で煮え切らないところが無いと言うと嘘になる。

まぁ、だからと言ってクゥがスパーを申し込む理由にはならない気がするのだが、そこは彼の子供っぽさがそうさせたのだろう。

「えっと……その……」

しかし、相手は初等科の一年生、つまりは7歳くらいのヴィヴィオ

よりも子供だ。男と言う点が違うのみで、それ以外ではヴィヴィオ以上のモノを期待できる要素が無い。
困ったアインハルトは、ノーヴェに視線を向けてみると……

「……いいんじゃねぇか？　やっても。　クゥの実力も結構なもんだ、損はしないと思うけどな」

「……この子が……？」

が、意外にもノーヴェはクゥとのスパーを勧めて来た。それに加え、このヴィヴィオよりも少し背の低い子の実力を評価している。
アインハルトは、少々困惑していたが……

「――では、1ラウンドだけ……」

「やったぁ！！♪」

アインハルトがクゥの申し出を受けた途端、クゥは嬉しそうに飛び跳ね、テンションを上げる。
それが、余計に彼を子供っぽく見せる。

「お姉ちゃん、デバイスはどうするの？」

「いえ、私はデバイスは持っていないので…」

「そっか、じゃあ俺も要らないや。お母さん、エウロス持ってて？」

「はいはい、しっかり預かります」

クゥはアインハルトにデバイスの有無を確認すると、自分のデバイ

スであるエウロスをティアナに預ける。小さな十字架を象ったアクセサリー状に待機モードとなった相棒だが、お披露目は少し先になった。

「ごめんね、エウロス」

『お気になさらず。頑張ってくださいね、ご主人』

「うん！」

エウロスにそう告げると、クゥはコロナに『見ててねー！♪』と手を振りながら、ヴィヴィオとアインハルトの居るコート内に走って行った。

コロナも、可愛いものを見る目で手を振り返してくれたので、彼のやる気はさらに上がる。

そして、少し落ち込んだ表情で彼と入れ替わりにコートを出るヴィヴィオに、クゥはそっと耳打ちをする。

「もう一回、アインハルトお姉ちゃんと戦えるようにするから、待っててて」

「え？」

その言葉に、ヴィヴィオは思わず振り返ってしまうが、クゥはプロテクターなどを装着した上で、ピューッとアインハルトの方に行ってしまった。

ヴィヴィオとアインハルトの再戦を何とかするとクゥは言ったのだが、どうやらアインハルトにスパーを申し込んだのは、半分は自分の為、もう半分はヴィヴィオの為だったらしい。

「あの子、何か企んでるっぽいわね？」

「えっと、ティアナさん、分かってたんですか？　クゥが私のためにって……」

「なんとなくだけどね。ま、母親だし」

コート外に帰って来たヴィヴィオにそう返事して、ティアナは少し誇らしげな表情になる。

彼女にとって、クゥは何にも代えがたい宝物であり、自慢の息子だ。

こうした小さな成長も嬉しいものなのだろう。

「――――では、よろしくお願いします」

「よろしくお願いしまーす！！」

アインハルトは礼儀正しく挨拶をし、スパーの準備をする。クゥもそれに倣ってお辞儀をするが、どこかしっくりこないのが微笑ましい。

「一つ、お尋ねしてもいいですか、クゥさん」

「なーに？」

と、スパー開始直前に、アインハルトはクゥに尋ねる。先ほどのヴィヴィオとの対戦を見ていたのなら、大なり小なりアインハルトの実力は把握している事だろう。

しかし、彼は彼女に挑戦してきた。つまりは、勝機、悪くても引き

分けに持って行けるという自信があったからだと思われる。

そうでないのならば、面白半分でスパーを申し込んで来たかだ。しかし、ノーヴェの評価からすれば、クゥがそんな事をしうる人間ではないという事は推測できた。

だから、本人の口から聞いておきたかったのだ。自覚している、本人の実力を。

「クゥさんは、どのくらいお強いのでしょう？」

「どのくらいって……う～ん……こんくらい？」

クゥはそう言って両手を一杯に広げて、自分の強さを表現した。子供らしさ全開の答え方である。まぁ、『めちゃめちゃ強い』とでも言いたいのだろう。

「そうですか……」

その答えを聞き、アインハルトは構える。自分であそこまで啖呵を切ったのだ。ほら吹きならば勝負は一瞬で決まる。

だが、そうでないのならノーヴェの言う通り、彼には実力があるという事。

実に単純明快、分かりやすい。

「あはは……お姉ちゃん、やっぱり強そうだなぁ……。うん、面白い！」

そう言いながら、構えを取るクゥ。

そんな彼の瞳には、彼がイノベイト・チルドレンであることの証である、黒十字の紋様が薄っすらと浮かび上がっていた……

Ｍｅｍｏｒｙ；０３　何事もまずは挨拶から（後書き）

Ｆ２０Ｃ「さてさて、次回からはオリジナル展開という事で、クゥＶＳアインハルトをお届けいたします」

クゥ「アインハルトお姉ちゃん、よろしくね」

アインハルト「こちらこそ、クゥさん」

Ｆ２０Ｃ「クゥって、やっぱり強いの？」

クゥ「分かんない。でも、ノーヴェ姉ちゃんには筋は良いって言われたよ～」

コロナ「うんうん♪　クゥちゃんとっても強いもんね？　私も勝てないし……」

アインハルト「なるほど……次回の更新が楽しみです」

Ｆ２０Ｃ「あ……今思い出したんだけどさ……」

三人「「「？」」」

Ｆ２０Ｃ「今回、ホムラの出番が無かった……」

クゥ「……そう言えば……」

アインハルト「……作者さん？　また星になられますか？」

コロナ「あ、アインハルトさん、押さえて押さえて！！」

Ｆ２０Ｃ「次回はちゃんと出るから！！……最後ら辺に……」

クゥ「ではでは、また次回～。バイバ～イ♪」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；０４　天才児ＶＳ覇王っ子

Ｍｅｍｏｒｙ；０４　天才児ＶＳ覇王っ子（前書き）

今回はオリジナル展開でございます。

人間の進化の形である、イノベイト・チルドレン・クゥ対覇王っ子・アインハルト。

どちらがより強いのか……存分にやり合ってもらいましょうｗｗ

加えて、ホムラが学校を早退して何をしているのかも明らかになりますので……

ではでは、本編に行ってみましょうｗ

ゆっくりして行ってね！

Ｍｅｍｏｒｙ；０４　天才児ＶＳ覇王っ子

目の前にいるのは、自分よりも５つも年下の男の子。突然のスパーリングの申し出に少し戸惑いもしたが、ノーヴェの勧めと、自身の勘のようなものを頼りにその申し出を受けてみたアインハルト。覇王云々は関係なく、強い者と戦う事は有意義だと思う。なんとなくだが、アインハルトにはクゥが只者ではないという気がした。

「レディ……ゴー！！」

ヴィヴィオの時と同じく、ノーヴェがスパーリングの開始の合図を出す。アインハルトはクゥの出方を見るため、軽くステップを踏みつつタイミングを測る。

「♪」

対して、クゥは楽しそうな表情を崩さず、ヴィヴィオ達のようなステップを踏んでのタイミング取りもしない。別にしなければならないという事はないが、構えたままと言うのも、なんだか違和感があるとアインハルトは感じた。

「（それにしても……自然な構え……。どこにも無駄な力が入っていない……）」

そのクゥの構えを見ただけで、彼女は自身の勘が的中したと思った。彼女ほどになれば、構えから相手の力量を測ることは出来る。その彼女から見ても、クゥの構えは綺麗な自然体を保っている。

「っ！」

ダンッ！

「（ノーステップで！？）」

と、そこで弾丸の如く、クゥが飛び出した。ノーステップでのいきなりの加速に、アインハルトは表情には出さないようにはしたが、心底驚いてしまう。

そして、そのスピードとクゥ自身の力が乗った拳が目の前に迫っていた。

ゴゥン！！

「あは♪」

「（す、すごい……！）」

クゥの初撃を、アインハルトはしっかりと目で捉えてガードした。素晴らしい瞬発力ではあったが、それでもアインハルトの視界から消えてしまったわけではない。

十分に対応できた。

しかし、攻撃を受けてから、アインハルトは衝撃を受ける。

「（こんな小さな体で、この重い拳……。何ていう膂力……）」

アインハルトは、クゥの拳をガードして受け止めた瞬間、そう感じた。自分よりも小さな体で、これだけのパワーをどうして出せるのか、全く分からない。

「と……それ！」

対するクゥは、一撃目を綺麗にガードしたアインハルトに怖気付くことなく、パンチをガードされた状態から、拳を滑らせることで硬直から抜け出し、アインハルトの頭上を宙返りして背後に回った。

「（速い！！）」

アインハルトも、その動きを目で追っているがかなりの速度だ。クゥは彼女の背後に着地し、右手を軸にするために地面に付き、間髪入れずに足払いを掛ける。

「（でも……！）」

が、アインハルトはそれを読んでおり、クゥを視界に入れるように体をターンさせつつ、足払いを躱す。

そこで、足払いの状態から抜け出し一歩手前のクゥに攻撃を仕掛ける。

「うわっと！」

アインハルトの拳を、クゥは足払いを外した状態から、足払いを繰り出す為に、体を支える軸にしていた右手の力だけで跳躍。空中でくるっと一回転し、アインハルトから距離を取った。恐ろしいくらいに身軽なクゥだが、息一つ切らせていない。

だが、アインハルトの攻撃もそれだけでは終わらない。着地したてで体勢が整っていないクゥに追加攻撃を仕掛けるため、彼に向かって力いっぱい踏み込み、距離を詰める。

ガッ！！　ガキィ！　ドッ！！

アインハルトの猛攻に、クゥは防御に徹する。確実に彼女の攻撃の軌道を見て、腕でいなして受け流す。

「（防御も上手い……本当にすごい子だ！！）」

アインハルトは、試合前の彼への実力の有無の疑いなどすっかり忘れていた。覇王としてだけではなく、彼女個人としてもこのスパーリングに集中し、動きに鋭さが増していく。

「っ！！」

「むぅ！！」

ガキィ！！！

アインハルトの攻撃を受け流し、クゥがカウンターを入れてくるがアインハルトはそれをも防ぐ。そのまま、二人はこう着状態へ……

その様子を、ヴィヴィオ達は唖然とした様子で見つめていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「す、すごい……」

「アインハルトさんと、あんなに対等に……」

リオとヴィヴィオは、クゥとアインハルトの見事な戦いぶりに、圧巻の一言だった。スピードも然ることながら、両者共中々パワフルな攻撃を混ぜ合わせており、見ているだけでもその迫力が伝わって来るかのようだ。

「私達ともたまにスパーするけど、こんなの見てたら普段のスパーで見せてたのって、クゥの何パーセントの力なのか分かんないよ……」

「う、うん……」

リオの言葉に、ヴィヴィオは同意するも若干の心残りがあった。自分の時とは違い、アインハルトはかなり力を出し切りつつある。それも、自分よりも年下の男の子に対してだ。年齢差別をするつもりはないが、悔しいという気持ちは彼女の中に当然生まれてしまう。

「（私も……私も負けてられない……！！）」

ヴィヴィオは、その悔しさをバネに、改めてアインハルトとの再戦を強く望んだ。このままでは終われない、こんなに強く誰かと試合をしたいと思ったことはない。

彼女にとって、今回のアインハルトとの出会いとスパーには、その気持ちを刺激するという意味では十二分にあったと言える。

「クゥちゃん……頑張れ…！」

ヴィヴィオの隣では、コロナが頑張っているクゥの姿から、片時も目を離さずに応援をしている。

コロナ自身、自分でも言っていたがストライクアーツはビギナークラスだ。クゥとたまに組んでやっているところを見るが、どちらか

と言えばクゥが彼女の動きをリードしていることが多い。
まぁ、お互いがとても楽しそうなので誰も口出しはしないが。

「（コロナ、クゥの事、大事に想ってるんだ……）」

なんとなく、そんな思考がヴィヴィオの頭の中で成立した。女性の勘と言えば、信じてもらえるかどうかわからないが、そんな予感がしたのだ。

そ、ヴィヴィオがそんな事を考えているうちに、クゥとアインハルトのスパーリングに動きが見られた。
こう着状態に入った二人が、再び動き出す……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「っは！！」

「っ！？」

ドンッ！！

こう着状態にあったクゥとアインハルト。その均衡を破ったのは、アインハルトだった。
彼女は、クゥのカウンターを受け止めていたのだが、その受け止めていた拳を弾くと、クゥに対してヴィヴィオと同じように掌底を放った。

「わわ！？」

クゥは、これを何とか防御するが、体が宙に浮いてしまった。

「（よし、これで……！！）」

自身の攻撃範囲内、それも空中となれば、クゥに回避と言う選択肢はないし、防御の型も限られてくる。

対空攻撃によってクゥを叩き落せる、アインハルトにとっては絶好のチャンスだった。

アインハルトは、空中から落下してくるクゥにタイミングを合わせ、拳を繰り出す動作に入る……しかし、その時、アインハルトの目に信じられない光景が映り込んできた。

「っ！…このっ！！」

パンッ！

クゥは、空中に放り出された状態で、手を叩き合わせた。その行為に何の意味があるのか、アインハルトは一瞬測り損ねてしまったが、それはすぐに目に辛うじて見る形で現れた。

ブワ……

クゥの背後の空間が、一瞬歪んだように見えた。しかし、そんなことは起こるはずもないし、クゥも空間を歪めるようなことは何もしていない。

そう、ただ単に、自分の背後の窓から入り込んできた風を集中させ、

密度を増加させる。
ただ、それだけの事をしていただけだ。ほんの少し、風の力を借りるだけ……

ドフッ！！

「（空中に、足場を！？）」

「やあぁぁ！！！」

信じられないことに、クゥは空中で何もない空間を蹴って、アインハルトに向かって突っ込んできたのだ。
まるで、彼にしか見えない足場がそこに生まれたかのように、空中でクゥは踏み込みを行い、ただ慣性に任せて宙を舞っていた状態から、攻撃態勢へと状態をシフトさせてしまった。

そのまま、クゥは迎撃態勢を取っていたアインハルトに向かって、空中からの足技を放つ。アインハルトに向かいつつ、体を一回転させ、それによって彼の蹴りには更なるエネルギーが乗る。

「（負け……ない！！）」……はぁ！！」

対するアインハルトも、有得ない動きで空中リカバリーに成功したクゥ、その彼の攻撃に対抗するべく足技を繰り出す。
全身で練った力を、足に移動させながらアインハルトはクゥを迎え撃った。

バコォォ！！

重い衝撃が伝わるかのような音が響く。

クゥとアインハルトの足技は、お互いを完全に捉えており、技同士を相殺していた。

しかし、両者共、相手の攻撃の衝撃が体に伝わってきたようで、表情には余裕など全くない。

「っ！」

「っふ！！」

一瞬の硬直の後、クゥとアインハルトは同時に距離を取った。

お互いに、ほぼ全開の戦い。アインハルトは武装形態を、クゥはデバイスを使っていない状態ではあるが、この時の二人は間違いなく全力だった。

「（……この子は、本当にすごい……！　まるで、人間の枠を超えたような……）」

先程の空中でのリカバリーでもそうだが、アインハルトはクゥに人間以上の何かを感じていた。

覇王の件はともかくとして、アインハルト個人としてはこのスパーリングにものすごい充足感を覚えてしまうほどだった。もっと、もっと決着が付くまで続けたいと……

しかし、そこでクゥは誰もが予想だにしない行動に出た。

「……うん。今日はもう、やーめた♪」

「え？」

なんと、クゥはスパーの途中で、勝負を放り投げてしまったのだ。
構えを解いて、先ほどの真剣な様子も、一瞬で霧散し、いつものクゥに戻ってしまった。

アインハルトはもちろんの事、それを見ていたティアナとノーヴェを除く、ヴィヴィオ達も突然の展開に驚きを隠しきれないようだった。

「アインハルトお姉ちゃん、とっても楽しかった！　ありがとー♪」

「え、あ、あの！！」

言って、コロナとティアナのところに帰ろうとしてしまうクゥを、慌ててアインハルトが止めた。
突然、こんな形で勝負を切り上げられては、アインハルトも納得できないだろう。

「あの、クゥさん！！　どうして途中でやめてしまうのですか？
何か、気になった事でも？！　ま、まだ勝負は……」

「ん～……俺の負けでいいや。ついズルしちゃったし……」

ズルとは、恐らくあの空中で足場があるかのようにして行った、空中リカバリーの事だろう。彼自身も、アインハルトとのスパーの中で咄嗟に使ってしまっただけのようだ。それだけ、彼女の強さが飛びぬけていたという事だろうが。

「さっきの空中でのリカバリーは、クゥさんの力でやった事ですよ

ね？　でしたら、私は気にしませんので……」

「……」

続きをしたい……アインハルトはそう言おうとした。だが、クゥはそれを待っていたかのように、ニコッと笑ってアインハルトに言った。

「ねぇ、アインハルトお姉ちゃん？　試合が途中で終わっちゃって悲しい？」

「え…？　悲しいというか……その、なぜ途中で終われるのかも分かりませんし、納得も出来ません……」

クゥの問いに、アインハルトは今の正直な気持ちを答える。クゥがなぜ勝負を途中で投げてしまったのか、自分にどこかいけないところがあったのか。

いづれにしても、納得は出来なかったのだ。

「うん、そうだよね。でもね、ヴィヴィオお姉ちゃんも、きっと同じ様にさっき考えたと思うよ？　『なんで途中で終わっちゃうの？』って、『もっと続けたい』って」

「あ……」

その瞬間、アインハルトはクゥとのスパーリングが途中で終わったことに対する混乱から抜け出して、我に返った。

「（私は……）」

そうだ、自分の事で精一杯だったアインハルトはその時気が付いたのだ。自分も、先ほどのヴィヴィオとのスパーリングの際に、クゥと同じことをしていたと。

きっと、自分の感じている悲しさや、『なぜ終わってしまうの？』という疑問を、ヴィヴィオも感じた。

確かに、アインハルトには覇王の記憶と、覇王流（カイザーアーツ）を根元にした複雑な事情があり、それに対して彼女は必死で道を探そうと模索中だ。

彼女自身も自覚している通り、ヴィヴィオとのスパーを打ち切ったのは彼女の都合だ。そこは分かっていた。

だが、スパーを途中で打ち切られてしまったヴィヴィオの心については、彼女は何も理解していなかったのだ。

自分の抱えている事情に必死になるのは、良い事でもあるし、仕方のないことも出てくるだろう。しかし、そうは言っても何をしてもいいという訳ではない。

スパーをする以上は、相手に敬意を払って対戦するべきだし、お互いに礼を尽くすのが筋だ。アインハルトは、そのことを失念していた。

クゥに、自分がヴィヴィオにしていた事をされ、先ほどの彼女の気持ちと同じものを感じるまで。

恐らくクゥは、ヴィヴィオと彼女を再戦させるために、最初から勝負を途中で投げるつもりだったのだろう。

「『自分がやられて悲しいと思ったことは、人にしちゃいけない』って、お母さんが言ってた。だからさ、アインハルトお姉ちゃんも……ね？」

「……あ…はい……」

全ては、ティアナがクゥに日頃から口うるさく言っていることが、このような形で実を結んだという訳だ。
クゥに、（本人にそのつもりはないかもしれないが）諭され、アインハルトは自分を恥じ、彼の言葉に同意した。

そうだ、覇王流の事情はヴィヴィオには関係が無い。歴史を紐解けば因縁があるかもしれないが、彼女は何も知らないのだ。覇王流の事も、何も……

自分の探していた相手でないというだけで、途中でスパーを投げ、勝手な自己完結で終わらせてしまっては、どんな事情があろうと、覇王流の使い手という以前に、格闘技者として失格だ。
アインハルトは、その事を自覚した。

「それに、今日はヴィヴィオお姉ちゃんもまだまだ本気じゃないもんね。もう一回やってみたらわかるよ？　きっと、アインハルトお姉ちゃんが楽しいって思える相手だと思う」

「……クゥさん……」

人懐っこい笑みを浮かべながら、クゥはアインハルトにそう言った。
そして、彼女はヴィヴィオの方に視線を移す。そこには、先ほどとは違う、どこか真剣な表情のヴィヴィオが居た。
きっと、アインハルトとクゥのスパーを見てやる気が刺激されているのだろう。

そして、アインハルトは……

「ヴィヴィオさん、先程は失礼しました……。お詫びと言っては……変ですね、ケジメとしてあなたの仰ったとおり、来週にもう一度……」

「ほ、ホントですか！！？」

「――――はい」

正直な話、ヴィヴィオは覇王流の拳を向けるべき相手ではないと、自分の探していた相手ではないという認識は、アインハルトの中では変わっていなかった。彼女と自分は、違うベクトルで拳を振るっていると、その考えは拭いきれない。

しかし、格闘技者の礼儀は尽くす。受けた勝負、試合は最後までやり通す。今日の自分の行為を恥じ、アインハルトはヴィヴィオの再戦の要求を呑んだのだ。

クゥに、勝負を途中で投げられて、ヴィヴィオの悲しいと思う気持ちを理解できたから。

「よろしくお願いします！！　わぁ～～～！！　ありがとうクゥ～～～～！！！」

「ミズハスッ！！！？」

アインハルトに勢いよくお礼を言って、ヴィヴィオは嬉しいのだろう、助け舟を出してくれたクゥを抱き締めた。

クゥはいきなりの事で完全に反応できずに、奇妙な声を上げてしまった。

「ほんと、ありがとね、クゥ！！♪」

「わ、分かったってば！！　だから放してよ～～！」

「むぅ……、ヴィ、ヴィヴィオ！？　ちょっとクゥちゃんに引っ付き過ぎじゃないかな！！？」

ハグハグ～と、嬉々とした様子でクゥを抱き締めるヴィヴィオと、懸命に逃げようとジタバタするクゥ。でもって、その二人に言いようのない気持ちを抱いて、クゥをヴィヴィオから離そうとするコロナ。

何とも微笑ましい光景が、そこにはあった。

「あらら……うちの息子はモテモテね」

「そりゃあ、ティアの子だもんねー♪」

呆れたように、それでいてどこか楽しそうにそう呟くティアナに、スバルは根拠のない事を言う。しかしまぁ、今回のクゥの行動は、ティアナの教育があればこそだったのかもしれない。

「キュウ……」

「もう、ヴィヴィオやり過ぎだよ……」

「ご、ゴメン……嬉しくってつい……」

見れば、漸く我に返ったヴィヴィオが、クゥに謝っていた。当のクゥは、目を回してしまってコロナに介抱されていたが。

「クゥ、今日のあんたは、なかなかカッコよかったわよ？」

「は、ははは……そうかな……？　まぁ、クールで鰭背なナイスガイを目指す身としては……これくらいは当然……」

「あんたそんな単語どこで覚えてくるのよ……」

まぁ、クゥがクールな感じのキャラになるのはほぼ不可能だろう。今日の事を褒めながら、ティアナは息子の頭を撫でる。

がしかし、ティアナもクゥに言っておかなければならないことがある。

「でもね、あんたのしてる悪戯だって、誰かに悲しいって思わせてるかもしれないってことはちゃんと理解しなさい。自分に出来ないことを、人にさせるのもダメよ？」

「う……」

正に正論だ。

ティアナの言葉に、悪戯小僧は言葉を詰まらせる。確かに、クゥの悪戯も人に迷惑をかける以上、決して褒められたことではないし、誰かを嫌な気持ちにさせる。

アインハルトには言うだけ言って、自分は知らぬ存ぜぬ。そんなことは、ティアナお母さんは決して許しません。厳しいんです。

と、そこでクゥにある人物からの止めの一言が入った。あれほどティアナが四苦八苦していたクゥの悪戯が、この人物の発言で、これ以降はパタリと止むことになったのだ。

「クゥちゃん。私、自分の言葉に責任を持てる男の人って、とってもカッコいいと思うな」

「……！」

その人物、コロナの一言が出た瞬間、クゥの中で何かが変わった。

「俺、もう悪戯しないよ！」

「うんうん♪　クゥちゃん偉いね～～！」

瞬間、その場にいたほぼ全員がズッコケた。あれほどティアナが苦労していたクゥの悪戯が、コロナの一言を持って、終わりを告げたのだから。

クゥは、コロナに『いい子、いい子♪』されてご満悦の様子だ。

「な、何でかしら……私の苦労って一体……」

「初めからこうすりゃあ良かったんじゃねぇのか……？」

ティアナとノーヴェの疲れた声が、スポーツコート内に虚しく響いた……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

――同時刻、時空管理局・教導隊施設

スバンッ！！

非殺傷設定で行われた、訓練生同士の模擬戦。仮想フィールドを使用した、かなり実践的な模擬戦だ。

１ｏｎ１のライフポイント制、制限時間１５分。

残り時間５分に差し掛かった時、模擬戦を行っていた内の一人のライフポイントが、もう一人の一撃でゼロになった。

キン……

「ありがとうございました」

勝利した訓練生、少し跳ね気味の朱色の髪の少年が、刀身の峰の部分に黒、刃は綺麗な銀色をした刀の部類に入る刀剣型デバイスを鞘に納め、気絶してしまったらしい対戦相手に礼をした。

だが、他の訓練生もみている模擬戦であるにも拘らず、歓声も、拍手もそこには起こらない。

少年も、そんなものは求めてもいないし、あるはずもないと理解していた。

「……」

そして、少年訓練生はデバイスを待機状態に戻して、模擬戦闘フィールドを後にした。

・　・　・

・
・
「今の奴、どう思う？　なのは」
「うん、まだまだ荒削りな部分が沢山あるけど、素質は十分だと思う」
「こりゃ、同期のCランクが相手じゃ、模擬戦の意味がねぇかもな……」
鉄槌の騎士ヴィータと、エースオブエース、高町なのは。教導隊にて、魔導師たちの教導を仕事にしている彼女達は、今さっき行われていた朱色の髪の少年の模擬戦を見てそう結論付けた。
「あの若さで、ここまでできるのは才能なのかな……それとも努力の結晶なのか……」
「両方だろうな。あいつの目を見りゃ分かる。とことん、自分にはストイックなタイプだぜ？」
なのはが、彼の成績レポートと魔導師レベルのレポートを読みながら呟くと、ヴィータは確信めいた口調でそう言った。
なのはも、実際のところは両方だろうと分かっていたが。
「にゃはは、まるでルーク君の再来だね」
「あいつはまた別だろ。ていうか、最近のあいつますますフェイトに対する熱っぷりが上がってる気がしてならねぇんだが……」
「あぁ～……それは……うん、確かに……。この前も、フェイトち

ゃんが構ってくれないとかで目茶目茶落ち込んでたし……」

ルークというのは、ただの変t……もとい、金色の閃光、フェイト・T・ハラオウンの二つ年下の旦那である。

ヴィータの言う通り、基本的にフェイト命な変態である。

しかし、剣と魔導師としての技量は超一流であり、魔導師のランクもS＋だ。だが、変態である。

「ま、まぁフェイトちゃんもフェイトちゃんなんだけどね……この前も二時間くらい惚気話を聞かされちゃって……。家でもシエル君も交えて、未だに新婚さんみたいなんだ……」

「……なのは、お前もいろいろ大変なんだな……」

なのはの苦労話を聞き、思わず彼女の背中をポンポンと叩いて慰めるヴィータ。悩み多き美女、それが高町なのはである。

「っと、話が逸れたな。で、さっきのあいつのデータはどんな感じなんだ？」

「はい、これだよ」

ヴィータがそう言うと、なのはは手元の資料をヴィータにも見せる。宙に浮かぶコンソールに、先程の少年のプロフィールと戦闘能力に関する情報が映し出されている。

ヴィータはその資料に目を通し、『ほぉ～』と感心したように呟いた。

「昼間は普通に学校に通ってんのか、こいつ？　しかも、ヴィヴィオと同じとこじゃねぇか」

「うん、みたいだね。特別強化訓練生ってことで、特別枠で教導隊の訓練を受けてるみたい。志望職種は執務官みたいだから、学業の方も一生懸命なんだろうね」

「って言っても、体には限界ってもんがあるぜ？　こんな無理なダブルスクールを続けてちゃあ、いずれどっかで潰れるぞあいつ」

資料と少年の特別な措置などを見て、ヴィータはそう警告した。なのはも、無論その辺りは分かっていたのだ。

特別強化訓練生ということで、魔法学園で学習しつつ、週に何度か教導隊での訓練を受けるという制度を利用しているようだが、元々この制度はもう少し年齢を経てから希望する者が多い。

まぁ、試験さえパスすれば誰でも受ける事が出来るので、文句は言えないのだが。

このデータにある少年も、自ら志願してこの制度を利用しているであろうことは明らかだ。

「でもって、障害は何も自分の体だけじゃねぇってな……」

「……」

そうして、ヴィータは訓練生が模擬戦を観戦している待合室の映像を見る。

そこには、朱色の髪の少年が映っている。が、彼の周囲には誰も人はおらず、それればかりか遠目から嫉妬や、侮蔑を含んだ視線を注ぎ

込まれている。

出る杭は打たれると言うが、やはり見ていて気持ちの良いものではない。

「こりゃ、何とかしねぇとな」

「うん……」

ヴィータとなのはは、もう一度少年のデータを見ながら、そう呟く。

その視線の先には、以下のデータが広がっていた。

名前：ホムラ・スメラギ

年齢：１２歳

身長・体重：１５３ｃｍ・４４？

専用デバイス：シラヌイ（刀剣タイプ）

魔法形式：近代ベルカ式

魔力変換資質：炎

魔導師ランク：空戦Ｂ－

Ｍｅｍｏｒｙ；０４　天才児ＶＳ覇王っ子（後書き）

コロナ「クゥちゃん強いね～♪　カッコよかったよ」

クゥ「そ、そう……？　まぁ……応援して貰ったし、期待には応えたかったし……」

コロナ「うん、いい子いい子だね♪」

クゥ「ふにゅ……州′ー、州　マッタリ」

アインハルト「……」

Ｆ２０Ｃ「なんだかブルーだね、アインハルトは」

アインハルト「いえ……少し思うところがあって……」

Ｆ２０Ｃ「まぁ、今は悩む時期だからね。思う存分時間を掛ければいいと思うよ。次回は、ホムラとの絡みがメインだから、そっちの方もよろしく」

アインハルト「は、はい……／／／／」

？？？「ふふ……初心な反応だ……俺にも昔はこんな時期が……」

Ｆ２０Ｃ「閣下は自宅にお帰り下さい」

？？？「解せぬ……」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；０５　友達

Ｍｅｍｏｒｙ，０５　友達（前書き）

連続更新ですねｗ　次回は、木曜日か金曜日に更新したいと思いますｗ

ちょっと、地の文と会話文の行間に限り、二行空きにしてみました。読みにくいと感じた場合は仰って下さいませ。

さてさて、今回はホムラさんとアインハルトさんのターンでございます。クラス内で嫌な位置にいるホムラと、どう向き合っていくのか。アインハルトのカッコいい姿をお楽しみくださいませｗ

ではでは、本編をどうぞ～～

あ、後書きで主人公のイメージＣＶアンケートやってますｗ

Ｍｅｍｏｒｙ；０５　友達

クゥとの対戦を経て、ヴィヴィオとの再戦を約束した翌日、アインハルトは通常通り学園に登校していた。
今朝は、覇王の最も悲しい記憶を夢に見て、涙を流しながら目を覚ましてしまった。聖王のクローンであるヴィヴィオとの出会いが、覇王の記憶を刺激したのかは分からないが、無関係だとは思えない。

「（来週……か……）」

自らの失礼を正すケジメとして、ヴィヴィオとの再戦を約束したアインハルトだったが、一晩経ってもあまり彼女との練習試合は気が進まなかった。
アインハルトの中では今でも、ヴィヴィオと自分は進む方向が全く違うという考えは変わっていなかった。

「（あの子は、格闘技を楽しんでいる……わたしとは……違うんだ……）」

昨日のヴィヴィオとのスパーを思い出し、アインハルトはもう一度そう念じるように心の中で呟いた。

教室に入り、カバンから教科書などを取りだして片す。毎日繰り返してきた動作だ。明日も、明後日も、恐らくアインハルトは朝学校

に来てこの動作を行うのだろう。

ガチャ…

しかし、今思えばその日は、いや正確にはその日からは朝の風景に少し変化が現れるようになったのかもしれない。

教室のドアを開けて、室内に入って来た朱色の髪の少年。昨日、アインハルトと正面衝突をしたホムラ・スメラギだ。

「（あ、そうだ……。スメラギさんに、パスケースを返さないと……）」

彼の姿を見て、アインハルトはカバンの中に入ったままの黒いパスケースの事を思い出した。彼とぶつかった際に、落とし物として預かっていたものだ。

それを取り出そうと、アインハルトがカバンに手を掛けたとき、周囲から何やらヒソヒソと話す声が聞こえた。

「……なんで局で訓練受けてるやつが学校に来るんだよ……」

「あれだろ？　自分は才能があるんだ、お前ら凡人とは違うんだよって、そう言う事だろ？」

「けっ……嫌味な野郎だぜ……」

「（……なに……？）」

聞こえてきたのは、恐らくはホムラに対する侮蔑と嫉妬を内包した言葉だった。アインハルトは、思わずカバンに伸ばそうとした手を引っ込めてしまった。

見れば、教室の大半の生徒、主に男子がホムラに向かって邪魔なモノ、不愉快なモノを見るような冷たい視線を向けている。
女子は、そんな彼に関わりたくないのか、チラチラとこっちを見るだけで直接的な関わりを避けようとしている。

「（局で訓練という事は……スメラギさんは訓練生……？　だから、昨日も早退を……？）」

そこで、昨日ホムラが学校を早退した理由がはっきりし、アインハルトの頭の中でパズルが綺麗に解けてくれた。要するに、局での訓練のために、学校を早退せざるを得なかったのだろう。
毎日という訳ではないようだが、ホムラは週に何回か管理局にて訓練を受けているらしい。

そして、その事がクラスメイトの、主に男子達には面白くないらしく、白い目で見られている要因になっているのだ。
この時期の子供なら、自分たちと違う者に対し、排他的な態度、無視や陰口をすることも珍しいことではない。もっと悪くすれば、暴力を振るったり、典型的だが例えば教科書を破いたりだとか、根も葉もないうわさを立てるだとか。

所謂、『イジメ』に相当する行為がそこには発生してしまう事にな

る。

「……」

しかし、ホムラは男子達の陰口がまるで耳に入っていないかのように、どこどなく疲れた表情を浮かべたまま、自分の席、つまりはアインハルトの隣の席に着き、彼女と同じように教科書を机に入れ、カバンを片した。

その後は、眠いのか何なのか机に突っ伏して、ものの数秒で寝入ってしまった。

「（……わたしにも……気が付いてないんでしょうか……？）」

ホムラが寝入ってしまった後も、クラスメイト達の陰口は少しの間続いたが、やがては彼を居ないものとし始め、元の教室に戻った。どうやら、ホムラは『陰口』と『無視』と言う形のイジメの最中に居るらしい。

加えて、昨日言葉を交わしたアインハルトにも気が付かないくらい疲労しているようだ。隣の席に居ながら、新学期が始まって少し経つのだが、やはりホムラとアインハルトは、少し他人に対する関心が薄いように見える。

まぁ、ホムラの場合はただ単に疲れているだけという事も考えられるが。

「（私も、あまり人付き合いは得意ではないけれど……）」

アインハルト自身、あまり人付き合いは得意分野ではない。親しい友達を挙げてみろと言われると、言葉に詰まってしまうくらいだ。彼女の凛としていて、どこか冷たいようなイメージが、周囲のクラスメートには近寄りがたいオーラに見えるのだろう。

ここ最近は、ホムラ同様周囲を気にしている余裕もなかったので、そんな事を考えることも無かったが、彼の今の状況を見ていると少し自分に似ているような気がしてきた。

「（今は……とても返せそうにないですね……）」

そう感じたアインハルトは、疲れている様子のホムラの事、そして周囲の状態を鑑み、今パスケースを返すのはやめておくことにした。二人の時に返した方が、ホムラにとっても自分にとっても気が楽だろうと考えたからだ。

アインハルトはそう決めると、一限目の授業の用意を始めるのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

授業中、ホムラは黙々と教師の話を聞きながら、機械のように手を動かしながらノートにペンを走らせていた。

その様子は、隣でそれを見ていたアインハルトですら、その熱心さに感心するほどだった。

昨日までは、お互いの名前すら知らなかった、というか覚えていなかったのだが、こうして改めてホムラ・スメラギという人物を見てみると、『真面目』という単語がピッタリだとアインハルトは思った。

「……」

カリカリカリカリ……（以下エンドレス）

「……」

アインハルトは、気が付かない内にたまにホムラの方を見る。何故そうしてしまうのかは、今の彼女には分からなかったが、恐らくクラスで浮いている存在同士、どこかシンパシーのようなものを感じたのかもしれないし、彼もまたアインハルト同様何かを背負っているのかもしれないという予感がしたのかもしれない。

まぁ、理由付けは後から幾らでも出来る。

アインハルトにとっての問題はまた別にあった。

「（スメラギさん、昨日の事……覚えていないんでしょうか……？）」

そうなのだ。ホムラは、一限目から今日丸一日ずっと、アインハルトに一言も話さないどころか、目も合わせないのだ。
昨日の今日で、正面衝突をかました相手なのだから、目くらい合って然るべきだろう。

しかし、ホムラはまるで自分の周囲には誰も居ないかの如く、授業中もお昼休みも過ごしていた。

そこには何もないはずなのに、見えない壁がある様な、君感が断絶しているようにさえ思えた。

・
・
・

「では、皆さんまた明日」

その担任の言葉で、その日の学園が終わりを告げた。ホームルームの後は放課後という事で、生徒が各々の時間を過ごす。
部活動に力を注ぐ者もいれば、図書館で勉強する者もいる。帰宅部として帰るのも一つの選択だろう。

ホムラとアインハルトのクラスの大半も、それに漏れることなくガヤガヤと友人同士で話しながら次々と教室を後にしていく。

ガタ…

そして、アインハルトの隣に座っているホムラもまた、帰宅の準備が終わったようで、席を立つ。

「あ……」

それを呼びとめようとしたアインハルトだったが、やはり今のホムラにはどこか壁のようなものを感じて、その声を引っ込めてしまう。自分らしくないと自覚してはいるが、ホムラの持つ独特のオーラとでも言うのか、それが彼女に声を出させるのを思い留まらせた。

「……」

しかし、彼が教室を出ようとしたその瞬間、一瞬ではあるが、彼の瞳がアインハルトを捉えていた。

「（……今の……もしかすると…？）」

そのホムラの仕草を、『付いて来て』と言う意味として理解したアインハルトは、手早く教科書などをカバンに詰め、席を立った。

先程まで、周囲に誰も居ないように振る舞っていたホムラが、教室を出る前にアインハルトの方を一瞬見た。

今日一日、誰にも関心を示さなかった彼がである。アインハルトは賢い、それだけの判断材料があれば彼が目線で彼女を呼んだという事くらいは予想が出来た。

教室を出て、少し距離を測りながらホムラの5メートル後ろを付いて歩くアインハルト。

ホムラの足取りからして、恐らく向かうのは校門。帰宅するのだろうかと、彼女は勝手に考えていた。

そして、歩くこと数分。2人は距離は少し離れている形になってはいるが、学園を出て、市街地にまでたどり着いた。
ホムラは、そこまで行くと周囲を少し見渡した後、アインハルトの方に振り返って申し訳なさそうな表情を浮かべて謝って来た。

「ごめん、ストラトスさん！　その……学園では無視してたわけじゃないんだ……ただ、ちょっと……事情があって…」

そのホムラは、学園での周囲に無関心な彼ではなく、昨日アインハルトとぶつかってしまい、必死で誤っていた彼だった。
アインハルトは、そんな彼の様子を見て、なぜだか少し安心してしまった。

「いえ、私に気を使ってくれていたんですよね？」

「あ～……まぁ、その……うん……。僕と話したりしてたら、ストラトスさんまで変な目で見られるかもしれないし……」

アインハルトは、ホムラに対するクラスメートの態度などから、彼が良くない環境にある事を察していた。
同時に、今日のホムラの他人に興味を持たないような姿勢の理由も、

自分なりに考え、予想していたのだ。

昨日のホムラと今日のホムラでは、あまりにもギャップが大きすぎる。何か理由があるのではと、疑ってしまうのが自然の成り行きだ。

ホムラは、アインハルトが自分と仲良く口を利いているところをクラスメートに見られれば、彼女までもいやな目で見られるというリスクを避けるために、昨日知り合った彼女との接点を全く見せないような態度を取っていたということだ。

「別に、私は気にしません。と言うより、私も少し……クラスでは浮いてしまっていますから……」

「あ……えと……なんて言うのかな……。今日一日見てて、僕もなんとなくそんな気がしてた……」

どうも、ホムラもアインハルトをほとんど分からないレベルではあるが、気にしていたようであり、その過程でアインハルトもまた、その独特の雰囲気によってクラスで少し浮いた存在だと感じていたようだ。

「あの……お聞きしてもいいですか？」

「えっと……僕に答えられることなら」

「クラスの方たちが、噂しているように、スメラギさんは管理局で訓練を受けていらっしゃるのですか？」

お互いに、クラスでは浮いた存在だという認識を共有した二人は、一瞬バツが悪そうな顔をする。だが、アインハルトにはそんな事よりも気になる事があった。
クラスメートが、ホムラに嫌な視線をくっている原因、局での訓練の事だ。

「う、うん……。毎日じゃないけど、週に何度か……。学園と局で、そう言う制度があって、希望して試験をパスできれば航空武装隊の教導官の元で訓練が受けられるんだ」

「なるほど……。度々早退していたのは、訓練のためという事ですね？」

ホムラは、局での訓練の事をアインハルトに説明した。別に隠すことでもないし、噂としてでも、アインハルトの耳に入っていたのなら隠しても仕方ないことだ。
彼女にも、嫌味な奴と思われる可能性もあったが、嫌われるのも、陰口を叩かれるのも馴れっこだ。
今更一人や二人増えたところで、何も変わらないし、自分の為すべき事にも、人生の予定表にも、大きな変更はない。

アインハルトの質問に頷きながら、ホムラはそう考えていた。

しかし、アインハルトのリアクションは、ホムラの予想の斜め上のモノだった。

「学園の勉強だけでなく、自分から局の厳しい訓練に参加されているんですね。私は、素晴らしいことだと思います。そうそう、出来ることではありません」

「え？」

思わず、ホムラは間抜けな声を出してしまう。
学園の授業も、かなりハイレベルで、それでいて局の厳しい訓練。
自ら志願してそんなダブルスクールを望む人間は、相当の体力バカか、明確な目的を持っている者、そして超が付くほどの努力家だ。

アインハルトは、そう言った意味で、ホムラが局で訓練を受けている事を『素晴らしい』と称したのだ。
彼女自身、学園の勉強に加えて、日々の鍛練を欠かさない節があるので、通ずるところがあったのだろう。

「スメラギさんは、努力家なんですね」

「そ、そんなことは……。ただ、目的があるだけだから……」

局で訓練を受けられる立場にあるという事が学校に広まった際、クラスメートからの態度は一変した。才能を鼻にかけているだとか、自分たちをバカにしているだとか、ありもしないことを陰で嘯かれ、白い目で見られた。それは、今も現在進行形だ。

だが、アインハルトはホムラの行為を素晴らしいと、努力家だと賞

賛した。彼女にしてみれば、事実を言ったまでに過ぎないのだが、どんな形であれ、この件で褒められたのは初めてだった。

「……ストラトスさんも……そうなんじゃないの？　何か、他にやってる事があるみたいに思うんだけど」

照れ臭さと、こんな風に賞賛の言葉を貰った時にどうしていいのか分からなかったホムラは、逆にアインハルトにも聞き返してみる。彼女もまた、何かの目的のために何かをしている。昨日ぶつかった時にホムラが気が付いた左腕の怪我が、そんな気にさせた。

「私は……武術を少々。まだまだ、修行不足ではありますが……」

「へぇ～……武術っていうと、ストライクアーツ？　僕は、その方面はあまり明るくないからよく分からないんだけど……」

「え、えぇ……。そんなところです」

いきなり覇王流（カイザーアーツ）の事を話しても、ホムラを困らせるだけだと思ったアインハルトは、取り敢えずそうして話をぼかした。

お互い、何かを怪しんでいるわけではないが、知り合って間もない相手にペラペラと話すことではないと、話す内容を制限しているようにも見える。

「……」

「……」

一通り、話すネタが尽きてしまう。というか、知り合って二日目の二人に、しかもアインハルトとホムラに小粋なトークを期待する方が酷というものだろう。

そこで、ホムラは、少し気になっていた事をアインハルトに尋ねてみることにした。

「えっと……今日は、僕が局で訓練してるのかどうかを確かめに来た……のかな？」

「え？　あ、いえ、それはついでで……本当の目的はこちらです。えぇと……確かここに……」

お互いに、学園以外での副業、と言ってはおかしいがもう一つの顔を持っているという事を明かしたところで、ホムラはアインハルトの目的を尋ねてみた。

『この話をするためだけに、今日一日ホムラを観察していた』ということなら、どことなくドラマチックなにおいもするが、残念ながらアインハルトの目的はそれではない。

「あ、これです。昨日ぶつかってしまった時、傍に落ちていましたよ？」

「あ！」

アインハルトが自分のカバンから、ホムラの落とした黒いパスケースを取り出して差し出すと、ホムラはまさに探し物が見つかったという表情を浮かべた。
どうやら、彼も失くしてしまったこと自体には気が付いていたらしい。

「ありがとう……僕も探してたんだ……」

「本当なら、朝一番に返すつもりだったのですが……申し訳ありません」

「ううん！　そんなことないよ、拾って届けてくれただけで……。本当にありがとう……」

「あ……」

黒いパスケースを受け取りながら、心底安堵した様子のホムラの笑顔の表情を見て、アインハルトは何故か心が温かくなった気がした。
彼のこんな表情は、正式に知り合ったのは昨日だとはいえ、初めて見た。これが彼の本来の性格なのだと直感的に分かった。

「大事な……大切なものなんだ……。ありがとう」

「い、いえ……。当然のことをしたまでですから……」

何故か、二人して頭を下げ合ってしまう。市街地の真ん中でそんな事をしていれば、無論注目の的になってしまうこと請け合いなのだが、この時の二人にそんな事を気にしている余裕はなかった。

「（大事なもと言うのは……やはり、あの写真なのでしょうか……？）」

暗い一文が添えられた、あの家族写真。恐らく、ホムラが本当に探していたのはそちらなのだろう。

真相を確かめるには、本人に聞けば一番なのだが、会ったばかりの人間の過去を詮索するような真似は、アインハルトには出来るはずもなかった。

「ストラトスさん……？　どうかした？」

「あ、いえ！　何でもありません！」

少し呆けていたのか、ホムラに声を掛けられるまで、アインハルトは気が付かなかった。目の前には、不思議そうに彼女を見つめるホムラの姿が。すこし、恥ずかしくなった。

「兎に角、改めてありがとう、ストラトスさん。何かお礼をしたいんだけど……」

「そ、そんな、いいですよ？　見返りが欲しくて届けたわけではないので」

「そ、そう？」

「あぁ、それと、出来ればファミリーネームではなく、名前の方で呼んでいただけると……。あまり、呼ばれ慣れていないもので……」

改めてお礼を言ってくるホムラに、アインハルトは彼と話している時から気になっていた、自分の呼ばれ方に話を変える。
言葉のとおり、アインハルトは見返りを見越して届け物をしたわけではない。

加えて、『ストラトスさん』と言った感じでファミリーネームで呼ばれることは少ないので、呼ばれ慣れていないというのも事実だった。ヴィヴィオ達にも名前で呼ばれていたこともあって、どうもホムラの呼び方にシックリこない感じがあった。

「だったら、僕の事も名前でいいよ。僕も、ファミリーネームでは呼ばれ慣れてなくって……」

「わ、分かりました……」

どうも、ホムラもアインハルトと同じ様に考えていたらしい。この二人、変なところで共通点が多い。

「じゃあ……あ、アインハルト……改めて、よろしく／／／／／」

「こちらこそ……ホムラさん／／／／／」

初めてお互いの事を名前で呼び合う。別に、特別な関係になったわけでもないのに、二人して同時に顔が赤くなってしまう。

パスケースを届けるだけのつもりが、妙な事もあるものだとアインハルトは思ったが。決して嫌な気分ではなかった。

「あ、でも……学校……っていうか教室では、僕に話し掛けない方が良いと思う。アインハルトまで、変な目で見られちゃうかもしれないし……」

良い感じの雰囲気になって来たところで、ホムラは嫌なこと思いだしたという表情を受けべて、アインハルトにそう忠告しておく。

「私は、気にしませんと言いましたけど……？」

「それでもやめておいた方が良いよ……。アインハルトなら、きっとすぐ友達もできるだろうしさ。……それじゃ！　今日はほんとにありがとう！」

「ほ、ホムラさん！」

気にしないと言うアインハルトだが、ホムラは彼女まで自分と同じようになる必要はないと、素のアインハルトを見てくれる人間が居れば、すぐに友達が出来ると、そう考えて彼女にそう言った。

そして、有無を言わさないで、その場を後にしてしまった。

ホムラからしてみれば、自分の事を褒めてくれた相手を、自分の置かれている状況に巻き込むような真似はしたくないというのが本音なのだろう。

実際、イジメの対象となっている者と親しげにしていれば、セットにされて虐められる可能性もあるし、異性同志の場合なら色恋沙汰に繋げようとする短絡的な思考をしてくる輩もいる。まぁ、その場合も無きにしも非ずなのだが。

そのリスクを、ホムラは良く理解していたのだ。

「……ホムラさん……」

しかし、アインハルトからすれば、それは押しつけの優しさだ。アインハルトは別に進んで友達作りをするつもりはないし、ホムラの気遣いも正直に言えば無意味だ。

付き合うべき人間くらいは自分で判断するし、誰かに何かを言われたからと、人付き合いを変えるつもりもない。

それは、主体性の無い人間のやる事だから。

「……よし……！」

アインハルトは、何かを決意するように頷くと、家路についたのだった。

そして、翌日……ホムラのアインハルトに対する気遣いは、あっけなく崩壊することになったのだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

翌日、学園の自分自身の席にて、ホムラは朝の準備を行っていた。周囲からは、相変わらず飽きもしないで嫉妬や侮蔑の視線が飛んでくる。他にやる事はないのかと言いたくもなるが、そこまで相手にして解決する問題でもないので、いつも通り無視することにした。

今日も一日、いつもの日常が続く。

少し仲良くなった女の子が隣の席でも、自分の生活のリズムは崩れない。そう、いつも通りに……

しかし

「ごきげんよう、ホムラさん」

「え？」

いきなり、ホムラのいつも通りの朝は崩壊した。

それぱかりか、その声の主はいつもの朝の学園の教室の空気までをも凍りつかせていた。

クラスから、『局の訓練を受けながら学園に通っている、才能豊かな自分を誇示したい嫌味な奴』というレッテルを貼られ、孤立した存在であるホムラに、その凛とした姿勢と一見すると冷たいような印象を抱かせてしまうオーラが原因で、クラスから少し浮いている少女、アインハルト。

そのアインハルトが、登校して教室に入り、何とホムラに対して朝の挨拶をしたのだ。挨拶自体は珍しくもなんともないが、『アインハルト』が『ホムラ』にと言う点でかなりのレアものだと言える。

「お、おはよう……？　って、どうして……」

「言ったはずです。私は気にしないと。陰からコソコソと他人の努力も知らずに、自分にとって都合の良い妄想を口にして自己満足しているだけの人たちのことなんか、私は気にしません」

その一言で、ホムラに対して陰でコソコソ話していた男子連中の顔が引きつった。というか、完全にアインハルトの出す威圧感に飲まれていた。

まぁ、所詮はその程度なのだ。アインハルトが『気にするまでもない』というカテゴリーにランクインした者達は。

自身の矮小なプライドを満足させるために、自分たちの考えたホムラに対するマイナスイメージを、あたかも真実のように信じ、自己満足に浸っているだけ。

自己満足がいけないとは言わないが、他人を巻き込んでやるのはハッキリ言って迷惑千万だ。

「コホン……ともあれ……」

周囲の凍りついた空気などなんのその。アインハルトは咳払いを一つした後、もう一度ホムラに向き直る。

アインハルトにとっても、ここからは少しドキドキしてしまう。自分でも、今までにないくらいの勇気を振り絞っているような気さえした。

しかし、ここで引いては意味がないと、アインハルトは意を決して口を開くのだった。

「これからよろしくお願いしますね、ホムラさん？」

その日、ホムラとアインハルトの両名に『友達』が出来た。

Ｍｅｍｏｒｙ；０５　友達（後書き）

ホムラ「あ、アインハルト……ありがとう……」

アインハルト「い、いえ……思ったことを言っただけですから……」

ホムラ「で、でも……アインハルトがあぁ言ってくれて……正直嬉しかったから……」

アインハルト「そ、そうですか……／／／／」

Ｆ２０Ｃ「なるほど、これが友情発恋愛行って奴なんだね……」

？？？「青春だな……」

Ｆ２０Ｃ「お前はまた……早く帰ってフェイトさんに甘えて来い。そして帰って来るな」

？？？「フェイト……出張で居ない……（，・ω・、）ショボーン」

Ｆ２０Ｃ「あ～……さいですか……」

？？？「寂しい……寂しくて死ぬかも……」

Ｆ２０Ｃ「おのれは小動物か……

Ｆ２０Ｃ「今思ってんですが、ホムラさんとクゥのイメージＣＶどうしましょうか……。私のイメージでは、ホムラは下野　紘さんか、宮野真守さん、斎賀　みつきさんをイメージしてますｗ」

フェイト「クゥは？」

Ｆ２０Ｃ「う～ん……そこが思いつかない。ということで、読者の皆様方、二人にピッタリだと思う声優さんのアイデアを、私目にお恵み下さいませ！　結果は次回の更新でお知らせいたしますので、どんどんお願いいたしますｗ」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；０６　ホムラとアインハルト　ｉｎ　カフェ

Ｍｅｍｏｒｙ；０６　ホムラとアインハルト　ｉｎ　カフェ（前書き）

（　。∀　。）ｏ彡。おっぱい！おっぱい！

すみません、いきなりテンション上げ過ぎました。何を隠そう、今日は月末の金曜日。
エロゲユーザーの人間にとっては、戦いの本番なんですよ。

無論、開店と同時にソフマップに駆け込みますｗｗ

いくぞ、ソフマップ。ソフトの貯蔵は十分かぁ！！！

あ、買うのはもちろん一本だけですよ？　来月も再来月も買うもの有るんで……

あ、それと、ホムラのイメージＣＶですが、下野紘さんに決定いたします！皆様からのアイデア、ありがとうございますｍ（＿　＿）ｍ
クゥに関してはもう少し考えてみたいと思いますので、しばしお待ちを……
では、本編をお楽しみくださいませ～ノシ

Ｍｅｍｏｒｙ；０６　ホムラとアインハルト　ｉｎ　カフェ

アインハルトによる衝撃的な朝の挨拶があったその日。それはホムラにとっての日常、これまでずっと続くであろうと、半ば諦観していた毎日が変化する第一歩だった。

あの後、アインハルトの覇気というか、独特の威圧感というか、兎に角、彼女のキツイ一言とオーラによってホムラの陰口を日常的に言っていたグループは一瞬で沈黙し、アインハルトに圧倒されていた。

なんというか、本当に口先だけの輩ばかりだったようで、その後の授業や休み時間中もホムラの陰口は全く聞こえなくなった。女相手に情けないなど、ジェンダー論を持ってくるわけではないが、イジメにしても、その根性を見ても実に中途半端な連中である。

「本当に、口だけの方達でしたね。まぁ、これで少しは静かになると思えば上出来でしょう」

「いや……今朝のアインハルト、めちゃめちゃ怖かっｔ……あ、やっぱ何でもないです」

アインハルトとホムラは、放課後に市街地にあるカフェを訪れていた。どちらから誘ったわけではないのだが、なんとなくそういう雰囲気になって寄り道していくことになったのだ。

アインハルトはカフェオレ、ホムラはエスプレッソを頼み、サイドメニューにケーキなどを頼み、ちびちびと味わいながら、今朝の事を話していた。

「ですが、ホムラさんもホムラさんです。なぜ、あそこまで根も葉もないことを言われて何も言い返さないのですか？　あの手の輩は、放っておくと付け上がると相場は決まっています」

「う、ごめん……その…なんて言うのかな……。局の訓練と学校の授業に付いて行くので必死だったから……正直に言うとそれどころじゃなくって……」

まぁ、隣の席のアインハルトに正面衝突するまで気が付かなかったのだから、あぁ言った手合いの相手をする暇もなかったというのは事実だろう。
アインハルトも、その点に関してはホムラの事は言えない。

「それに……さ……。別にあの人たちをどうにかしたって、それが自分の目標達成に近づく要因になるとは思えない」

「ホムラさんの……目標、ですか？」

そう言えば、昨日話した時も、お互いに自分の持つ目標に関してはうやむやにしたままだった。
昨日の時点では、二人はまだ友達でもなく、ただのクラスメイトだった。アインハルトにしても、覇王流（カイザーアーツ）の事を軽々しく話す気にはな

れなかったし、ホムラも同様だった。

しかし、今は……そう、このカフェに入った時と同じく、なんとなく聞いてみたいとそう思ってしまったのだ。これが雰囲気というものなのだろうか。

「あ……うん……まぁ、隠すことでもないから言うけど、僕さ……将来は管理局の執務官になりたいんだ」

「執務官と言うと……事件捜査や、調査を取り仕切る役職でしたよね。たしか、ＪＳ事件以来、難易度が上がったと聞きます」

「うん、みたいだね。でも、なりたい……なって、やらないといけないことがあるから」

そう話すホムラの目に、少し剣呑な色が混ざる。やらなければいけないこと、それはアインハルトにもある。覇王の悲願の成就という目標が。

しかし、ホムラの目標は、執務官になりたいという目標はあくまで手段のように見える。

「やらないといけないこと……？」

「……捕まえないといけない奴がいる。僕が、捕まえないといけない……」

アインハルトの問いかけに、小さく答えるホムラ。それはまるで自分に言い聞かせるようにも、鼓舞するようにも聞こえた。

「あ……ごめん、今の無し。なんだか変な話になっちゃったね」

「い、いえ……。そんなことは……」

ホムラは自分でも妙な空気を作ってしまったことに気が付き、先程の剣呑な色を目から追い出した。
しかし、やはり一度聞いてしまうと気になってしまうのが人間だ。
アインハルトとて、それから漏れることはない。

「一番の理由は、父さんと母さんがどっちも執務官をやってたからなんだ。2人とも、優秀な執務官として、局の仕事に貢献してた……。だから、それに憧れてっていうのもあるかも」

「あ……」

アインハルトは、そのホムラの話から気が付いてしまった。
彼と初めて会った時に、ホムラが落としたパスケースの中に入っていた家族写真、その裏側に書いてあった言葉の意味を。

ホムラは、両親の事を『過去形』で話した。そこから導き出せる事実は1つしかない。

「あの、ホムラさん……。私は、あなたに謝らなければならないことがあります……」

「え？」

「私達が初めて会った日……ホムラさん、パスケースを落としましたよね？　その中に……家族写真が入っていたのを……見てしまって……」

アインハルトは、今更だと自分でも思いながら、ホムラの家族の写真を見てしまったことを打ち明け、改めて謝罪した。
どんな理由があっても、他人の過去を見てしまったのだ。謝るのが筋だろう。

「そっか……。いいよ、別に見られて困るようなモノじゃないし……」

「で、でも……！」

「落とした僕が悪いんだし、アインハルトはそれを届けてくれた……。それに、今日は僕のこと助けてくれた。感謝することはあっても、怒ったりする理由もないよ」

「ホムラさん……」

優しい人だ。アインハルトはそう思った。

しかし、恐らく自分には徹底的に厳しい人間なのだろうと、アインハルトは直感的に感じていた。

「写真を見たってことは、裏側の文字も読んだよね？」

「は、はい……」

「……アインハルトが思ってる通り、両親はもう居ない。三年前に、テロで死んだ。救助作業に参加して、逃げ遅れて」

『もう手に入らないモノ』という一文とホムラの両親を語る際に出た過去形。これから推測される事実は1つだ。

そして、その悲しい想像は当たっていた。ホムラは、両親を亡くしていたのだ。

「妹も、そのテロ以来、体を悪くして……今も病院に入院してる。僕は、母方の妹さん夫妻に引き取ってもらって、今こうしてるんだ……」

「……」

写真に写っていた少女は、やはりホムラの妹らしい。

今現在のホムラの生活は安定しているようなので、経済的な問題はないのだろうが、やはり辛い過去であることには変わりない。

「叔母さんと叔父さんも、子供に恵まれてなかったとかで、僕とユキナ……あ、ユキナってのが妹ね、僕らの事をほんとの子供みたいに良くしてくれてるから……まぁ、ドラマみたいに不幸のどん底ってわけじゃない」

ドラマなどでは、引き取り先で虐待が……などの展開もあり得るのだろうが、現実が常にそこまで酷いわけではない。
ホムラの場合は、温かい家庭に引き取られ、こうして生活を送っている。

幸せの絶対的な基準などどこにもない。不幸の基準も同様に存在しない。
それは、人がそれぞれに持つ概念に対する尺度でしかないからだ。
幸せは、数字では見えにくいし、表せたとしてもその数字の持つ幸せの度合いは人それぞれだ。

「そ、それにさ……今はアインハルトみたいな良い友達も出来たし……今の僕は、十分幸せだと思う」

「そう……ですか……／／／／」

しんみりした話からのこの方向転換は反則だと、アインハルトは内心でそう思った。どうしたって照れてしまうではないかと。

「（ホムラさんが……ここまで話してくれたんだ……私も……

！）」

ホムラの抱える過去等は、全てではないにしろ大方は把握できた。
だが、ここでアインハルトがするべきなのは、辛い過去を聞いてしまったことに対する謝罪ではない。
彼女も少し、自分の抱える問題を彼に話しておこうと、自然にそう思う事が出来た。お相子、と言えば最もシックリくるかもしれない。
なんとなくだが、アインハルトはホムラとは対等でありたいと思っていた。

「あの……ホムラさん。私の話も……聞いてもらえますか？」

「話って……昨日言ってた、格闘技に関係してる？」

「え、えぇまぁ……。ある意味、全てというか……。というか、よく分かりましたね」

「なんとなくだけど……そう感じた」

『そう感じた』とは、不思議な言い回しだとアインハルトは思った。
だがしかし、ホムラもアインハルトの事情に関しては何か思うところがあったらしく、彼女の話を聞く体勢に入った。

そして、アインハルトは覇王流（カイザーアーツ）の事、覇王の悲願と、彼の記憶について、路上決闘のことなどをホムラに話した。
ホムラ自身、最初は壮大な話だと感じたようで、少し目を真ん丸にしていたが、語るアインハルトの真剣さから、その話が出までも嘘

でもないという事を理解した。

「昨日、私が捜していた対戦相手かもしれない人と試合をしたのですが……」

「違った……とか？」

「……恐らくは……。というより、格闘技に対する姿勢のベクトルが違うというか……私が、覇王としての拳を向けていい相手ではないと、そう思ってしまって……少し失礼な事もしてしまいました」

アインハルトは、二日前のヴィヴィオとのスパーの件についてもホムラに話した。クゥに（本人にそのつもりはないだろうが）諭され、格闘技者としての礼を欠いた行動にケジメをつけるため、彼女ともう一度、今度は練習試合をすることもだ。

「あの……驚きました？　私が……その、こういう事をしていることに……」

「うん……まぁ……。怪我したりしてて、どこか変だなぁとは思ってたけど、結構アインハルトってアクティブなんだね。ちょっと意外かもしれない」

ホムラは、驚きはしたものの、アインハルトの話を一にも二にもなく信じてくれた。彼女がどれだけ真剣に覇王の悲願、記憶に対して考えているのか、それらが伝わって来たのだから疑う必要もなかっ

たのかもしれない。

「でも、アインハルトの話を聞けて……アインハルトの事を少し知れたのは、なんて言うのかな……嬉しかった。　ありがとう、話してくれて」

「いえ！　その……これでお相子ですし……それに、私もこうやって誰かに聞いてもらえれば、少し気分が楽になりますから……」

今まで、覇王に関することで周囲の他人に頼った事や、話したことなど、ノーヴェを除けばホムラだけだし、こんな風に落ち着いた所で、お互いの事を教え合うという経験も初めてだった。
そんな新鮮さと、ホムラの持つ独特の柔らかい雰囲気が相まってか、アインハルトの心は少しスッキリしていた。

ヴィヴィオとの再戦に少し戸惑いを覚えていたのだが、それもいくらか払拭された。

「本当に……ホムラさんに話しをする事が出来て……よかったと思っています……／／／／／」

「そ、そう……？　役に立てたなら……まぁ、光栄だけど……／／／／」

そうして、何故か二人で真っ赤になって俯いてしまう。
隣りの席でお茶していたお姉さん達からは、可愛いものを見る目で

『初心ね～』とか『見ていて癒される』などなど、様々なコメントを頂く嵌めになってしまったが。

「で、出ようか？」

「あ、はい……！」

少し気恥しくなった二人は、カップの中身も空になった事なので店を出ることにした。
レシートを持って、お会計を済ませるべくレジに向かう。

しかし、そこで更なる嬉恥ずかしイベントが起こるなどとは、二人は思ってもみなかった。

「お願いします」

「はい、ありがとうございます。お会計はどうなさいますか？」

「あ、分けて頂けますか？」

レジに立ち、店員のお姉さんにレシートを渡すと、商品名などを改められ、レジの機械に金額が出力される。
そして、支払形式を尋ねられるとホムラが口を開くよりも早く、アインハルトがそう言った。

「あ、僕が出しておくけど…？」

「いえ、こういう事は公平でなくてはいけませんから。男性が驕るのが当たり前、そんなものはもう古いです」

「あはは……アインハルトらしいね」

まぁ確かに、最近ではこう言った場面では割り勘になる事が多いらしい。女性からすれば、驕ってもらったことで、男性に優位性を持って行かれるのが嫌だとか何とか。

ホムラにそんなつもりは毛頭ないが、アインハルトとしては、公平な立場で彼と接したかった。

「畏まりました。では、恋人割引で……彼氏様のお支払ですが……」

「「こ、恋人！！？」」

しかし、レジのお姉さんの、『恋人割引』なる単語に、アインハルトはもちろんホムラも素っ頓狂な声を上げてしまう。

無論、カフェ内に居た他のお客さんの注目の的になってしまう。

「こここここ、恋人割引って……？」

「えっと、学生カップルの方限定で、ドリンクとケーキの割引をさせて頂いているのですが……？」

どうも、このお姉さんホムラとアインハルトの事を中学生カップルと勘違いしているようで、恋人割なるものを適用してくれたらしい。だが、ホムラとアインハルトは今日友達になったばかりで、そんなに進んだ関係ではない。

「わ、私達はその……その、お付き合いとかは……その、違って……／／／／／／／」

「そそそそ、そうですよ！　大体、僕なんかじゃアインハルトに釣り合わないっていうか……」

「む……」

「な、なんでそこで睨むのさ……？」

しどろもどろになりながら、必死で弁明？する2人。自分ではアインハルトに釣り合わない発言をしたホムラに対し、ムッとした目を向けたアインハルトだが、傍目で見る分には可愛さが勝っている。

そして、ホムラ。何とも女心の分からんやつである。実にけしからん。

「あ、あはは……。申し訳ございません、お客様。お詫びとしまして、恋人割引は関係なしでサービスさせて頂きますね」

「え……あの、良いんですか？」

「はい、こちら側のミスですし……それに、とても良いものを見せて頂きましたから♪」

瞬間、店内のお客さん（主に女性が多い）からも『うんうん』というリアクションが飛んで来て、店内が妙な一体感に包まれた。

ホムラとアインハルトの息の合ったやり取りが、変な感じにウケたらしい。

「「／／／／／／／／／／」」

と、そんなシチュエーションになってしまえば、当然このザ・初心な二人は、再び耳まで真っ赤になってしまうのであった。

結局、二人はお姉さんの行為を有難く受け、割引金額で支払いを終えるのだった……。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

店を出た2人は、まだ少し赤い顔を何とかしようと必死になりながら、帰路についていた。今日判明したことなのだが、ホムラとアインハルトの家は、かなり近所にあるらしく、必然的に帰り道が同じになるのだ。

まぁ、今の二人にとってはそんなことはあまり関係ないのだろうが。

「あ、あはは……なんだか、凄いことになっちゃったね……？」

「そ、そうですね……」

どことなくぎこちないやり取りだが、これが今の二人の精一杯だ。
だが、両者共全く嫌な気分ではなく、逆に……何と言うか、そう……こそばゆい感覚を覚えていた。

これまでお互いに、目の前の目標に向かって一直線だったためか、こう言った展開にはまったくの不慣れだった。

「……／／／／／／／」

「……／／／／／／／」

チラチラと、何度か視線がかち合う度に、同時に視線を外す。先ほどからこれの繰り返しである。
読者の皆様から『もうお前ら付き合っちゃえよ』というお声が聞こえてくるようである。

ツン……

「「！！？？」」

でもって、並んで歩いていた二人の手が少しでも当たってしまった日には、静電気でも発生したかのようなリアクションを取って距離を取る。

「ご、ゴメン……」

「い、いえ……大丈夫ですから……」

そして、またしてもこそばゆい空間が展開される。

これが、世に聞く固有結界なるものなのか。そんなことはともかくとして、兎に角この二人の初心っぷりは、天然記念物ものであるという事だけは事実だろう。

「ふえぇ～ん……おか～さ～ん……えぐ……」

2人「「？？」」

と、そんな時だった。住宅街には居る一歩手前。大型の自然公園の一角で、オロオロと泣いている女の子を、ホムラとアインハルトは見つけた。

母親とはぐれたのだろうか、キョロキョロと周囲を見渡しては、不安のあまりに泣いてしまっている。

平日の公園という事で、人はいることに入るのだが、誰しも厄介ご

とに首を突っ込みたくないのか、見て見ぬふりをする。
まぁ、昨今の冷たい社会の縮図とでも言えばいいのか……

「迷子……のようですね？　って、ホムラさん！？」

アインハルトが、『何とかしよう』と提案する前に、ホムラはその迷子らしき女の子の元に走って行ってしまった。
子供を放ってはおけない性分なのか、彼の初動は早かった。

「待ってください、ホムラさん！」

そして、元々何とかしようと提案するつもりだったアインハルトも、ホムラが開始するのであろう『迷子のお母さん捜索』に参加するべく、彼の後を追うのだった。

Ｍｅｍｏｒｙ；０６　ホムラとアインハルト　ｉｎ　カフェ（後書き）

閣下「どうも、正義のヒーローです」

Ｆ２０Ｃ「え？」

はやて「え？」

閣下「いや、なんだその反応」

Ｆ２０Ｃ「いや、変態がいきなり何を言うのかと」

はやて「いきなり仮面ラ〇ダー的なベルト片手に何をバカな事をと……」

閣下「だまらっしゃい。もうさ、俺の評判を元に戻るまでに行かなくても、多少リカバリーするには、変身系ヒーローになるしかないんだよ。」

Ｆ２０Ｃ「お前がヒーロー……ハハッ！ワロス」

はやて「仮面ラ〇ダーＨＥＮＴＡＩの誕生やな」

閣下「だからそのネーミング止めろって言ってるだろ！！！」

Ｆ２０Ｃ「さてさて、今回のお話、ホムラ&アインハルトのターンでしたね」

はやて「次回からも引き続き二人の関係に焦点を当てていく予定や。期待しといたってな」

Ｆ２０Ｃ「次回は、ホムラの見せ場あり、アインハルトまじ乙女！なシーンありなので、お楽しみに～～♪」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ：０７　二人にとってのスタートライン

Ｍｅｍｏｒｙ，０７　二人にとってのスタートライン（前書き）

最近、『僕は友達が少ない』（通称、はがない）というラノベを買って読んでいるＦ２０Ｃでございます。
アニメ化するという事で、衝動買いしたのですが、中々面白いですねｗｗ
肉、可愛いよ肉ｗｗ

金髪×巨乳＝正義

我々の業界では当然のことです。

今回のお話では、ホムラの見せ場と、アインハルトが女の子してる場面がメインでございます。

それでは、本編をお楽しみくださいませー

Ｍｅｍｏｒｙ；０７　二人にとってのスタートライン

「ふぇぇ……おか～さ～ん……えぐ……」

子供というのは、往々にして不思議なもので。
歩き慣れた街や、よく通うデパートなどでも、親や兄弟などとはぐれてしまうと、途端に不安と恐怖心が表に出てくる。
どれだけその場所に慣れていても、そこに一人で置いて行かれてしまうともうダメなのだ。

成長すれば、『あれ？　どこ行ったんだ？』で済むのが、幼い子供にとっては『どうしよう、もうダメかもしれない、怖くて堪らない』という感じで頭の中が恐怖で染まる。

「どうしたの？　何か悲しい事でもあったのかい？」

「ふぇ…？」

がしかし、今回、ブロンドの髪をショートカットにしたこの子に限っては、その恐怖が長続きすることはなかった。目の前に、少し跳ね気味の赤い髪をした少年が、人の良さそうな顔を浮かべながら、視線を低くして少女に手を差し伸べたからだ。

「ココを探してて……ひっく……そしたら、お母さんも……居なくなっちゃって……えぐ……」

「ふむ……そのココっていうのは、猫さんか犬さん？」

「うぅ……猫さん……」

朱色の髪の少年、ホムラが優しく尋ねると、女の子は涙を抑えながら自身の現状についてホムラに話してくれた。

「（なるほど、猫探しの間に母親とはぐれたってわけか……。となると、捜索対象は二つ……優先順位はこの子の安全と身元保証を考えて、母親優先だな……。猫は後回しだ）」

ホムラは、表情とは裏腹に事を冷静に判断して、何をするべきなのかをすぐに決定する。

こう言ったことならば、その辺の警備隊にでも任せて自分たちは帰宅すればいいのだが、それではいささか目覚めが悪い。

それに、今日はまだ時間にも余裕があるので、女の子の母親&猫探しに付き合うぐらいはなんてことはない。

「ホムラさん、その子は迷子ですか？」

「有体に言えば……。猫探ししてる間にはぐれちゃったみたい」

「そうですか……」

ホムラの後を追いかけてきたアインハルトは、彼から事情を聞き、

女の子に目を向ける。
少し落ち着いてきたのだろうか、女の子の可愛らしい目から流れ出る涙の量は、徐々に減少傾向にあった。

「ココぉ～……お母さん……」

「大丈夫だよ。お母さんも、ココも、僕が一緒に探してあげるからさ」

「ふぇ？」

不安げな声を上げた女の子にホムラがそう言ってやると、女の子は戸惑いと期待の入り混じった表情を浮かべて、顔を上げた。
見た感じはまだ5歳くらいだろうが、ついさっきまで一人で心細い思いをしていたのだろう。ホムラには、その姿が入院中の妹にダブって見えた。

「一緒に、探してくれるの……？」

「あぁ。僕、猫が大好きでさ、ココちゃんにも会ってみたいし。何より、一人で探すよりも、二人で探した方がずっと早く見つかるさ」

ホムラは断然犬派なのだが、こういう時にまで貫くべき意地ではないので、ココは軽く嘘をついて女の子の不安定な精神状態を、少しでもプラスに持って行こうと努力する。
いつまでも泣かれていては、捜索どころではないし、陽が傾く前に

はこの子を親元に帰したいところなのだ。

「名前、教えてくれるかな？　一緒に探すなら、何て呼んでいいのか分からないのは困っちゃうからね」

「フィナ……。お兄ちゃんと、お姉ちゃんは……？」

「なるほど、フィナちゃんだね。僕はホムラ。でもって、このお姉ちゃんはアインハルト」

「こんにちは」

ホムラが名前を尋ねると、女の子、フィナは割としっかりした発音で名前を教えてくれた。尋ね返されたので、ホムラも自分の名前をアインハルトの名前をフィナに教えてやる。アインハルトも、出来るだけ優しい声でフィナに対して挨拶をした。

「ほんとに……一緒に探してくれるの……？」

「あぁ、もちろん」

「あ、ありがとう！　ホムラお兄ちゃん！」

最後の確認に、ホムラが再度答えてやると、フィナはパッと花が咲いたような笑顔になって、嬉しそうにホムラの手を握ってくる。

どうやら、ホムラ達に対する警戒心は無事に解けたようだ。

「と、いう訳だから……ごめん、アインハルト。今日はここで……」

「いえ、私も一緒に手伝います。ここで私だけ帰っては、後味が悪いですから。それに……私も、猫は大好きです……／／／／」

ホムラがアインハルトに言い切る前に、彼女の方から母親&猫捜索の手助けの申し出があった。
少し顔を赤くしながら言った最後の方の言葉は、恐らく本心だろう。

「ありがとう、アインハルト。やっぱり、君は優しいね」

「そ、そんにゃことはにゃいです！／／／／／」

「あはは♪　お姉ちゃん猫さんになった！」

「／／／／／／／／／」

ホムラの不意打ちなひと言に、もろに?んでしまい、真っ赤っかになってしまうアインハルトであった。

兎も角、こうしてフィナの母親&猫探しがスタートした。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ホムラとアインハルト、そして迷子のフィナは、三人で手を繋ぐ形で市街地の方向に向かって歩いていた。
ホムラとアインハルトがフィナを挟んで、さながら親子のような形である。

まぁ、ホムラとアインハルトもそこまで大人っぽいわけではないので、傍目から見れば仲の良い兄妹どまりだろうが。

「ホムラお兄ちゃん……ほんとにこっち？」

「大丈夫、お兄ちゃんに任せておいてよ」

フィナに聞いた所、母親とはぐれた場所は市街地の少し入り組んだ地帯という事だ。猫の行きそうな場所を探しているうちに、自分たちが迷子になってしまったとのことで、フィナもあちこち歩き回りながら、あの公園に辿り着いたらしい。
不審者に拉致られていたらと思うと、少しゾッとしない話だ。

という事で、手掛かりらしい手がかりと言えば、母親と猫の特徴くらいだろう。

しかし、その少ない手掛かりしかない中にあって、ホムラは何か当てがあるかのごとくホイホイと道を選んで、フィナ達を先導する。
何か確信でもあるかのように、彼の歩みには迷いが無かった。

「ホムラさんは、小さな子供の相手に慣れているんですね？」

と、歩きながらアインハルトが唐突にそんな事を聞いてきた。フィナを間に挟んでいるため、彼女の頭上での会話になってしまうが、ホムラは苦笑いを浮かべながら答えた。

「昔から妹の相手をしてたからね。二つ年下なんだけど、毎日のように相手をさせられたんだよね……」

「あぁ、なるほど……。良いお兄さんなんですね……」

小さな子供に対する扱いについては、妹・ユキナとの経験が生きているらしい。今は入院しているとの事だが、聞く限りでは昔は元気だったようだ。

やはり、三年前のテロでホムラの人生は一変してしまったのだろう。

「（……）」

それを思うと、アインハルトは何故かやりきれない思いになってしまう。

別に、彼女が何か悪いわけでもないが、言いようのない無力感を感じてしまったのだ。

『もし』という単語は、世の中、人生に腐るほど転がっている。
もし、テロなど起こらなければ、ホムラの人生はもっと良いものだったのでは？　家族に囲まれ、学校でもイジメなどない普通に生活を送れたのでは？　など、考え出したらキリがない。

「（でも……もしそうなっていたのなら……私とホムラさんは、友達になる事は無かったのかも知れない……出会う事さえも……）」

『もし』という言葉を仮に実現する機械があるとしよう。それを使えば、自分の考えた『もし』の世界が現実になるというものだ。
その機械を使い、仮にホムラの人生がテロによって変貌しないモノとしてみよう。

両親は健在、妹であるユキナも元気に兄の傍で生活でき、ホムラも今のようなハードな毎日を過ごすことも無い。まさに優しい世界だ。

しかし、『もし』を実現するためには、支払わなければならない対価がある。

それは、『今』、『目の前にある現実』だ。

もしの世界を取るならば、アインハルトとの出会いがあったホムラの世界は消える。２人は出会うことも無く、友達になることも無い。

代わりに、ホムラは温かい家族と一緒だ。

どちらかを取れば、片方は立ち行かなくなる。トレードオフの関係ということになる。
結局、もしという言葉は、どこまで行っても人の思考領域を飛び出すことはなく、どうしようもなくナンセンスだ。
それが分かっていながらも、『もし』という言葉に縋りたくなるのもまた、人間なのだろう。

「アインハルト？」

「あ、いえ！　何でもないです……」

「そう…？」

またしても少し呆けてしまっていた。何故だか、ホムラの事に関して考え事すると、すぐに呆けてしまう自分が居る。
この事の意味を理解するのには、アインハルトはまだ少し人生経験が不足していた。

そして、さらに歩くこと数分。突然、ホムラが立ち止まる。

「お兄ちゃん？」

「ホムラさん？」

ホムラの突然の停止に、フィナとアインハルトも同時に立ち止まる。
ホムラの方を見てみると、どこか遠くを見ているような、そんな目をしていた。

「見つけた」

そう言うホムラの目線の先には、一匹の猫を腕に抱いた、二十代後半だろうか、長いブロンドの髪をした女性が周囲をキョロキョロしながら歩いていた。
どうやら、何かを探しているようだが……

「あ！　お母さん！！」

「え？」

その女性の正体は、フィナの口から明らかになった。どうやら、あの女性がフィナの探している母親らしい。
腕に抱いている猫を見るに、どうやらココという飼い猫も見つかっているようだ。

「おか～さ～ん！！！」

「フィナ！？」

フィナが元気よく母を呼ぶと、その声に反応してフィナの母がこちらを振り向いた。ホッとしたような表情を浮かべ、娘の無事に安堵している。
アインハルトもホムラも、取り敢えずの一件落着にホッと胸を撫で下ろした。

フィナは、母の元に駆け出し、嬉しそうに手を伸ばす。母親も、そんな彼女を受け止め、力いっぱい抱き締めていた。

「あの、ホムラさん……？」

「なに？」

「どうして、フィナさんのお母様の居場所が分かったのですか？まるで初めからここだと言わんばかりに、サクサク歩いてきてしまいましたけど……」

その微笑ましい光景を見ながら、アインハルトはホムラに尋ねる。確かに、フィナとアインハルトを先導するホムラの足取りには迷いというものが感じられなかった。
まるで、何か確信があるかのように、素早く、しっかりとした足取りだった。

「……自分でもよく分からないんだ。でも、こっちの方向に居るって……そんな気がして……」

「……はぁ…」

どうも、ホムラ自身、何故こっちを目指していたか、その根拠らしい根拠は何もないらしい。
言うなれば、直感とでも言えばいいのか。だが、実際に母親と猫は見つかっているので結果だけを見れば何の問題も無い。

しかし、本日最後の大事件は、次の瞬間に何の知らせも無く起こるのだった。

ギリッ……ギリリ……

「あれ？」

「どうかしましたか？」

「何か、変な音が聞こえない？　何かが擦り切れるような……」

ホムラにそう言われ、アインハルトは周囲を見渡す。２０メートルほど先ではフィナ親子が再会を果たしており、周囲も帰宅ムードに染まっており学生や企業戦士の方々がいそいそと足を動かしている。普段と違うところ上げるならば、建物の改修工事だろうか。大型クレーンで、大きな鉄の柱を釣り上げているだけで……

ギリ……！

「あ！」

「なんだか、嫌な予感がしてきた！」

アインハルトとホムラは、その異音の正体を把握した。何か、縄のようなものが切れかかっているような、嫌な音の正体を。
そして、ホムラはそれと同時に走り出す。

ブツンッ！

その縄の切れかかっているような異音の正体は、大きな鉄の柱を移動させている、大型クレーンのワイヤーだった。
そして、事もあろうに、ドラマやアニメの危機一髪の再現シーンが如く、そのワイヤーが劣化していたのか嫌な音を最後にブツリと切れてしまったのだ。

ワイヤーという支えがなければ、鉄の柱は重力に従って地面に真っ逆さまに落ちるしか選択肢はない。
ただ落ちるだけならまだいい。

問題は、その落下地点にフィナとその母親が居るという事だった。

「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

通行人の女性が、その事態に気が付き悲鳴を上げる。だが、悲鳴では『落下』という自然界の物理法則を止めることは出来ない。

鉄の柱は、殺人的な落下エネルギーを蓄えながら、フィナ達を押し潰さんと、グングンスピードを上げて落下していく。

「シラヌイ！　お願い！」

『畏まりました、マスター』

落下と同時に走り出していたホムラは、相棒にそう告げる。すると、ホムラの腰に銀色の柄と黒い鞘をした、刀に分類される刀剣型デバイスが現れた。

どうやら、あれがホムラのデバイス、『シラヌイ』の本体らしい。

「ホムラさん！」

アインハルトも、彼に続こうとしたが、タイミング的には完全にアウト。いや、恐らくホムラでもこの距離からではフィナ達を助けることは難しい。

柱の落下スピードと、ダッシュのスピードではまず勝負にならない。

しかし、次の瞬間、アインハルトは目を疑った。

フッ！

「消えたっ！？」

なんと、セットアップしたシラヌイを腰に構えたホムラの姿が、一瞬の内に消えてしまったのだ。

魔法での補助をした素振りも無かったので、アインハルトは完全に彼の姿を見失ってしまった。

「（間に合え！！！）」

対して、一瞬で姿を消したホムラは、超高速でフィナ達の元へ走っていた。シラヌイは鞘に納めたまま、柄に手を掛けて居合いの構えを取っている。

どうやら、頭上の鉄骨を叩き切るつもりらしい。

鉄骨が地面に突き刺さるのが早いか、ホムラの剣が早いか、正に時間との勝負だった。

そして……

――― 一刀・変則抜刀　黒椿（クロツバキ）

「このぉ！！！」

スバンッ！！！

一閃。
フィナ達親子を押し潰さんとしていた鉄骨が、空中で真っ二つになる。
そして、真っ二つになっただけではなく、その切り口から黒い炎が、さながら花のように噴き出し、鉄骨は黒い炎に包まれて地面に落下した。

ガシャァン！

落下した二つに分解された鉄骨は、フィナ達を傷つけることなく、地面に大きな音尾を立てて転がった。
鉄骨からは、未だに黒い色の炎が爛々と纏わりついていた。

おおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！

フィナ達の無事と、真っ二つになった鉄骨、そして黒い峰と銀色の刃の刀剣デバイスを持つホムラの姿を見て、周囲の人々の口から歓声が上がった。

最も、彼らにはいきなり鉄骨が真っ二つになって燃え上がり、フィナ達が助かったようにしか見えなかっただろうが。

「よ、よかったぁ～……ま、間に合った………」

『お見事です、マスター。解体業でも営んでみてはいかがですか？』

「真っ平御免被るよ……」

鉄骨を真っ二つにした張本人であるホムラは、シラヌイの冗談を流しながらも、刀を片手にヘナヘナと地面に座り込んでしまった。どうやら、ホムラ的にもギリギリのタイミングだったようで、腰が砕けてしまったようだ。

大物なのか小物なのか、本当によく分からない。

「ホムラさん！　大丈夫ですか？」

「あぁ、うん……ちょっと、腰が抜けちゃって……あ、あははは……」

慌てた様子で駆け寄ってきたアインハルトに無事を示しながら、ホムラは苦笑いを浮かべた。腰砕けになっている格好はあまり恰好のいいものではない。加えて、よく見れば膝も笑っていた。

「ほ……。……まったく、あまり心配させないでください」

「ごめん……っと、ありがとう……」

アインハルトは、少し怒ったようにそう言うと、ホムラに肩を貸して立ち上がらせる。ホムラも、彼女の厚意を有難く受け、シラヌイを待機状態に戻して首に下げた。

ホムラは、取り敢えず傍にあったベンチに座って、腰砕けの状態からの脱出を図る事にする。

「あの！　助けて頂いて、本当にありがとうございます！！」

「お兄ちゃん！　ありがとー！！」

「うん！！」

「あ、えと……気にしないでください。　フィナちゃんも、ココが見つかってよかったね」

そんなホムラに、観衆のざわめきの中から、フィナ親子たちがやって来て、かなり大袈裟にお礼をされてしまった。

猫と母親探しを手伝っていた事をフィナから聞いた彼女の母に、ひたすら感謝されてしまい、ホムラは逆にどうしたらいいものかと、若干困り果ててしまうほどだった。

その日の放課後、ホムラは図らずも親子を救ったヒーローになってしまったのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「すっかり遅くなってしまいましたね……」

「ごめん、アインハルト……。今日の予定とかあったんじゃ……」

「いえ、トレーニングは夜にするつもりでしたので、ご心配無く。それに、私が自分で行きたいと言ったことですから」

アインハルトとホムラは、とっぷりと陽が暮れてしまった住宅街の道路を並んで歩いていた。

親子を助けた後、騒ぎを聞きつけた警備隊に事情などを説明していたら、こんな時間になってしまったのだ。

加えて、フィナの母からは、何かお礼がしたいと言われ、それをやんわりと断るのに苦労してしまった。別に、何か見返りを求めて助けたわけではないので、ホムラとしては辞退する他の選択肢は無かった。

「でも……ホムラさんのあの一閃……素晴らしかったです……あの黒い炎は、ホムラさんの魔力変換資質ですか？」

「あ、うん。僕の魔力光は黒色だから、変換した炎も黒くなっちゃうんだ……。武装隊の人たちからは、『根暗のお前にはちょうどいい色だ』って言われちゃったけど」

「そんなことありません。とても、純粋な黒で……そうですね、吸い込まれそうな綺麗な色だったと思います」

「あ、ありがとう……。魔力光と炎の色を褒めてくれたのは……アインハルトが初めてだよ……／／／／」

どうやら、ホムラの魔力光は武装隊の訓練の際には、格好の弄るネタにされているようで、これまで『綺麗』だとか、褒められたことは無いらしい。
アインハルトが、それを褒めてくれたのが新鮮だったのか、ホムラは少し顔を赤くしながらそう言った。

思えば、自分の事をこんな風に見てくれる人は、今では妹とお世話になっているおばさんおじさん夫妻くらいのものかもしれない。
縁者以外で、並んで歩くことも何年振りなのだろうか……

「あ……そう言えば……。居合いを放つ前に、ホムラさんの姿を見失ってしまったのですが……何をされたんですか？　まるで瞬間移動したように、次の瞬間には鉄骨を切り伏せていたように見えてしまったのですけど……」

「あれは……ちょっとした歩法なんだ。父さんが、唯一教えてくれた技で……最近やっと出来るようになって……」

「努力の結晶……という訳ですね……。やっぱり、ホムラさんは努力家です」

「あはは……アインハルトにそう言ってもらえると、なんだか嬉しいな……」

ホムラの歩法について、アインハルトは詳しい説明を求めなかった。
というのも、今はただ彼と話が出来ればそれでよかったからだ。な

ぜこんな風に思ってしまうのかは不明だが、本当に話題は何でもよかったのだ。

それに、いずれホムラの方から教えてくれるだろうと、そんな気さえした。別に急いで聞く必要はどこにもないことだ。

「あ……」

しかし、話が出来る時間は決まっている。2人の家は近所ではあるが、いつまでも一緒という訳ではない。
当然、家が目の前にまでくれば、今日はそこでさようならだ。

「どうする？　そこまで送って行こうか？」

「あ、いえ……そこまでしていただく距離ではありませんし……」

本当は、もう少し話をしたかった。また明日会えると分かっていても、なんとなくもう少し……。
最近、この『なんとなく』が多い気がするが、アインハルトにはその気持ちの正体はハッキリとは見えていなかった。

ホムラが送って行こうかと提案してくれるが、アインハルトの家も目と鼻の先だ。そこまでしてもらえるような距離ではない。

「じゃあ、今日はここで。また、何かあったらいつでもシラヌイの方に連絡くれれば良いからさ」

「あ、はい……」

アインハルトの通信端末のアドレスと、シラヌイのアドレスなどは既に交換済みだ。面と向かってではないにしても、話すことは幾らでも出来る。

だが、何故だかアインハルトはこうして顔を合わせて話したかった。

アナログな奴だと笑う者もいるかもしれないが、不思議とそう言う気持ちが強かった。

「それじゃ、また明日ねアインハルト」

「あ、あのちょっと待ってください！」

クィ……

と、ホムラがアインハルトに背を向け、家に入ろうとするとアインハルトは彼を呼び止めた。

しかも、アインハルトは無意識の内にホムラの服の裾を掴んでいた。

そこでアインハルトはハッとする。これではまるで『行かないで』と言っているようではないかと。

「？？　どうかした？」

「えっと……その……あの……／／／／」

ホムラの疑問の瞳に、アインハルトは真っ赤になりながらあたふたする。普段のクールビューティはどこに行ったのか、そこにはただの年相応の女の子姿のアインハルトが居た。

そして彼女は、意を決して今思い付いてしまったことを、ホムラに提案してみることにした。

「あの！！　明日から……一緒に……学園に、行きません……か……？」

「え？」

アインハルトの提案は、一緒に学園に登校しないかというものだった。まぁ、友達同士で一緒に学校に来るのはそう珍しいことではないし、まったく変でもない。

アインハルトは、何故だが分からないが、そうまでしてホムラと話をしたかった。彼の事を、もっと知りたいと……気が付かない間にそう思ってしまっていたのだ。

そして、ホムラの返答は……

「うん、良いよ。あ、でも……僕、朝弱いから……待たせちゃうかも……」

「か、構いません。遅ければ、起こしに来ますから」

「あはは……だったら頑張って起きないとね……。えっと…じゃあ、そう言う事で明日は……」

「はい、よろしくお願いします」

2人は、和やかな雰囲気の中、明日からの約束を交わす。アインハルトの中では、ある意味でいじめっ子たちに啖呵を切った時よりも緊張してしまったが、上手く行って何よりだ。

「じゃあ、また明日。またね、アインハルト」

「はい、ホムラさんもごきげんよう」

そうして、今日のところは二人はそこで分かれた。
明日もまた、一緒に学園に通う。今日から始まった、新しい毎日という連続の、アインハルトもホムラも、どこか新しい何かを期待していたのかもしれない。

今日この日、二人のとある感情に行きつくまでの、少し長い旅が始まったのだ……

Ｍｅｍｏｒｙ；０７　二人にとってのスタートライン（後書き）

アインハルト「ホムラさんの剣、お見事でした」

ホムラ「ありがと、アインハルト。あはは……褒めてもらえるなんて……なんだか久しぶりな気がするよ」

アインハルト「わ、私はしっかりと見るべきところを見ていますから。事実をそのまま言っただけです……／／／／」

ホムラ「うん……でも、僕は……それが何よりも嬉しいな……。アインハルトがちゃんと見てくれてるなら、幾らでも頑張れそうだよ」

アインハルト「……／／／／　け、怪我だけはしない様に！　良いですね！！（またそう言う言い方をして……！）」

閣下「なんて言うか、見てて和むよなぁ……」

Ｆ２０Ｃ「お前もあの路線を見習えばいいんじゃないの？」

閣下「いや、無理だ……フェイトを前にすると、自分の欲望に忠実になる自分が居る」

Ｆ２０Ｃ「さらりと最低なこと言ってるなおい……」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ.；０８　ネクタイとやきもちと

Ｍｅｍｏｒｙ；０８　ネクタイとやきもちと（前書き）

誰か助けてください。
エロゲを順調に崩していると、ゲームがロード画面に映る暗転の時に、パソコンのディスプレイに２８２８しながら、アホ面下げている野郎の顔が映るというバグが……

今回もアインハルトがかわいい感じになっているかと思いますｗ
というか、アインハルトの乙女が進みまくってます……

これは乙女アインハルトブームの到来の予感！
ということで、本編にてアインハルトとホムラの絡みをお楽しみ下さいませ！

Ｍｅｍｏｒｙ；０８　ネクタイとやきもちと

「ど、どうしましょう……」

朝の通学時間、いつもよりも３０分も早くに目が覚めてしまい、自分でも何故だが分からない内に学園に行く支度を済ませてしまい、悩める覇王っ子・アインハルトは家を出た。

昨日の別れ際、学園での友達となったホムラとの約束。『一緒に登校しよう』という、どこか気恥しくもあり、こそばゆい感じのする約束を果たす為、彼女はホムラの自宅前までやって来ていた。

「ホムラさんは……起きているでしょうか……？」

先程から、インターホンを押すか押すまいかで悩んでしまっているアインハルト。思えば、男の子の家を訪ねるなど、これが初めてではなかろうか。

そんな葛藤もあり、アインハルトは玄関先で少し間誤付いていたという訳だ。

よくよく考えてみれば、昨日のやり取りだってかなり大胆な事をしてしまったのではないだろうか？

こんな風に、一緒に登校しようと誘ったり、彼を引き留める際に服の裾を摘まんだり。

「はぅ……／／／／／／」

それらが一挙にアインハルトの頭の中を駆け巡り、彼女は可愛い声を出しながら真っ赤になってしまう。
単純に、ホムラという人間に興味がある、知りたいという気持ちからこのような状況になったわけだが、傍から見れば、気になる男の子にアタックしている女の子にしか見えない。

ガチャ……

「あらあら？」

「あ……」

そして、耳まで真っ赤になってもじもじしている最中。アインハルトの目の前にある黒塗りのドアがゆっくりと開かれ、家の中から銀色の綺麗な髪をしたお姉さんがひょっこりと顔を出した。
そのお姉さんは、アインハルトが息を呑んでしまうほど綺麗で、加えてスタイルも抜群だ。圧倒的なオーラを放つ二つのメロンが、お姉さんの色っぽさを際立たせていた。

「……」

「……」

そして、何故か視線が絡み合ったまま、数秒間固まる両者。アインハルトはまずは挨拶するべきなのか、家の前でモジモジしていたことを謝るべきなのか、頭の中は混乱状態だ。

対する銀髪のお姉さん（巨乳）は、目の前で真っ赤になりながらモジモジしていた可愛らしい女の子が何者なのかを考えているようだった。

「はっ！　そ、そう言う事なんですね！？」

「はい？」

突如、銀髪お姉さん（巨乳）の頭に電球マークが灯ったが如く、彼女の表情が明るくなる。一体、アインハルトに対してどのような印象、人物的な予想を立てたのかは全くの不明だが、それはすぐにハッキリすることになった。

お姉さんは、少し嬉しそうな表情で家の中に向き直ると……

「ホムラさ～～ん！　彼女さんが迎えに来られましたよ～！♪」

「か、彼女！！？」

いや、何となく嫌な予感はしていたが、まさかここまでダイレクトに的中するとは思ってもみなかった。

どうも、銀髪お姉さんは、アインハルトの事をホムラの彼女だと勘

違いし、家まで迎えに来てくれたのだと思っているらしい。

「あ、あの！！　私はホムラさんの……かか、彼女ではなくて！」

「あら？　そうなんですか？　でしたら……ホムラさ～ん！
婚約者の方が迎えに来られましたよ～！」

「（順調にステップアップしてる！？）」

どうやら、このお姉さんの中では、二人の仲は順調に前進しているらしい。あっぱれな事ではあるが、実際はそんなことはない。
まだ、友達になったばかりのレベルでいきなり婚約者になるなど、『これなんてエロゲ？』というツッコミを入れざるを得なくなる。

「あ、あのえっと……！　私は……！！」

兎も角、目の前のお姉さんを何とかしないことには、お姉さんの脳内に限って、ホムラとアインハルトの関係がエスカレーターを三段ジャンプして行く勢いで進んでしまいかねない。
アインハルトが、必死で訴えかけていると……

「ミ、ミフユさん！！　アインハルトは彼女でも婚約者でもないですから！！」

「あらあら？　そうなんですか？」

「ほ、ホムラさん……ほっ…」

二階に部屋があるのだろう。ホムラは慌てた様子で着替えたらしい制服姿で、カバンを片手に階段を降りてきた。
どうやら、かなりギリギリに起きてしまったらしい。朝が弱いというのは事実なのだろう。

だが、銀髪お姉さん（巨乳）改め、ミフユさんというお姉さんの暴走を止めてくれたのは、素直に助かったと感謝してしまうアインハルトだった。

「あ、その……おはようございます……／／／／／／」

「う、うん……おはよう。ごめんね、なんだか困らせちゃって……」

「い、いえ！　そこまでの事では……」

靴を履き替え、アインハルトの待つ玄関にまで漸く辿り着いたホムラ。首には、相棒であるシラヌイが掛けられており、登校の準備は万端整っているようだ。

だがしかし、アインハルトとしては、このポワポワオーラ全開のミフユさんなるお姉さんに関しての説明をして欲しかった。
そして、ホムラもアインハルトの表情からそれを感じ取ったのか、ミフユを紹介してくれた。

「あ、この人が僕を引き取ってくれた、母さんの妹さんで、ミフユさん」

「えぇ！！？　と、いうことは、ホムラさんの伯母様？！　と、とてもお若いです……」

「あらあら～♪　こんな若い子にそこまで褒められちゃうだなんて……私ったら、変な自信ついちゃうわ～♪」

なんと、このお姉さんが、ホムラを引き取ってくれた伯母さんなのだというのだから、アインハルトは仰天した。
なにしろ、先程から言っている事だが、明らかにホムラと比べても伯母などではなく、姉という立場が相応しいくらいに若く、美しい。
それに加えてこの我が儘なボディだ。

一体何をどうしたら、この若さを保っていられるのか。女性の神秘というものを、アインハルトは直に見た気にさえなってしまった。

「それで、こっちは友達のアインハルト・ストラトスさん。同じクラスなんだ」

「よ、よろしくお願いいたします」

「あら、そうだったの～。改めまして、ホムラさんの伯母をしております、ミフユ・スメラギと申します。ホムラさんの事を含めまして、今後ともよろしくお願いしますね～♪」

ホムラがアインハルトを紹介してくれると、ミフユさんは柔らかい物腰をそのままに、丁寧にお辞儀。
何というか、その動作一つ一つが堂に入っているというか、どこかのお嬢様育ちのようなオーラさえ感じられた。

「それにしても、こんな可愛い女の子の友達が出来るだなんて……。ホムラさんも隅に置けませんね～」

「かか、可愛いだなんて……その、あの！」

「たた、確かにアインハルトは可愛いけど！　僕はその……隅に置くとかそんなんじゃないですから！」

「はぅ……／／／／／」

ホムラは気が付いていないだろう。自分自身の発言が、アインハルトに止めを刺してしまったという事を。
アインハルトは、昨日に続いて耳まで真っ赤になってしまっている。
カワユス。

「って、そろそろ学園に向かわないとヤバいかも……」

「あらあら、いつの間にかもうそんな時間なのね～。アインハルトさん、またお時間がある時にいつでもいらしてくださいね。大歓迎ですから」

「ありがとうございまふ……／／／／／」

時間が迫っているので、そろそろ出発しないと遅刻コースだ。余りあると思っていた時間も、かなり過ぎてしまっていたらしい。
アインハルトは、まだ顔が赤く、言葉も最後の方で？んでしまっていた。

「それじゃあ、ミフユさん。行ってきます。今日は帰りにユキナのところに寄って行くので、少し遅くなります」

「はい、分かりました。行ってらっしゃい～♪」

ホムラは、礼儀正しくミフユに一礼すると、今日の帰りのスケジュールをしっかりと伝える。どこか一線を引いているようなイメージを受けるが、気の所為ではないだろう。
引き取ってもらって、お世話になっている。そんな負い目を、ホムラは感じているのかもしれない。
それはそうとして、ユキナというのは、ホムラの妹。入院中という事なので、お見舞いに行くつもりなのだろう。

「じゃあ、行こうか、アインハルト」

「はい、行きましょう……。あ、ホムラさん、少し待ってください」

「え？」

ミフユに見送られて、学園に向かおうとしたホムラだったが、アインハルトにそれを制され、一旦停止する。
すると、アインハルトはホムラの制服のネクタイに手をやり、少し曲がっていたそれを直してくれた。

「ネクタイが曲がっていますよ？　慌てて準備したのが丸分かりです」

「あぅ……その……お恥ずかしい……／／／／」

「はい、もういいですよ。服装の乱れは心の乱れとも言いますからね、気を付けてくださいね」

生真面目なアインハルトらしい。ホムラも、少し照れながらも彼女の厚意を有難く受け取った。
というか、このやり取りはまるで……

「あらあら♪　まるで夫婦みたい。　なるほど、婚約者でもないとなると、あとはお嫁さんしかないわよね～」

２人「「ち、違います！！！！／／／／」」

初心な二人を、ポワポワオーラ全開のミフユさんにからかわれ、二人は声をシンクロさせながら否定するも、例に漏れずに顔が真っ赤になっていた……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ホムラとアインハルトは、通学路にて先程の話と言うか、ミフユさんから受けた（精神的な）ダメージを癒しながら学園を目指していた。

「あはは……………なんかごめんね？　ミフユさんって、いつもあんな感じで…………」

「いえ、優しそうで、どこか暖かい方だと思います。ホムラさんのお姉さんかと思ってしまうほどにお若いんですね……」

「あぁうん……。母さんもそうだったんだけど、ミフユさんも全然老けないっていうか、そう言うのに縁が無いというか………女の人ってすごいんだね……」

恐らく、全ての女性がそうであるわけがないのだが、全ての女性が羨むことではあるだろう。
男女問わず、老いを嫌う人は多いが、女性の場合それが特に顕著に想われる。それを考えれば、ミフユさんは反則の部類に入ってしまう。

「あ、そう言えば………。妹さん…ユキナさんのところに寄って行

かれるとの事でしたが……お見舞いですか？」

「うん。必要な物とかがあった時は、ミフユさんが届けてくれるんだけど、時間がある時は出来るだけ顔を見ておきたいから。それに、会いに行かないとものすごい怒るんだよ……」

「ユキナさんは、ホムラさんの事を頼りにされているんだと思います。良いお兄さんだと思いますよ、私は」

ホムラの語る様を見るに、兄妹仲は中々良いように感じた。まぁ、実際仲が良いのだろう。

年頃の女性というのは、異性の兄弟というモノに対して排他的な態度を取るというのがテンプレートなイメージだが、中には例外もある。

ホムラとユキナはそれなのだろう。

「あ～……それでさ……。アインハルトにお願いがあるんだ……」

「お願い、ですか？　なんでしょう？」

「うん。昨日さ、ユキナと通信で話してたんだけど、その時にアインハルトの事を話したんだ。　そしたらあいつ、アインハルトに会ってみたいとか言い出して……」

いきなりのお願い。ホムラは申し訳なさそうに、アインハルトにお願いの内容を説明した。どうやら、ユキナがアインハルトに興味を

持ったらしく、お見舞いに来るホムラに連れて来て欲しいとせがんでいるらしい。
病院内にも知り合いは居るだろうが、やはり閉ざされた環境に居ると、新しい刺激がほしくなってしまうモノなのだろうか。
そう、アインハルトは考えながら、ホムラのお願いの詳細を聞いた。

「もちろん、トレーニングとかで忙しいと思うから、全然断ってくれちゃっていいんだ。ユキナも、『アインハルトさんにお時間があったらでいい』って言ってたし」

無論、ホムラもアインハルトを連れて見舞いに行くことは一向に構わないのだが、アインハルトにもトレーニングや練習という大事な用事もあるだろうと、その旨をユキナには伝えていた。
ユキナの方も、アインハルトのスケジュールを無視してまで我を通すつもりはないらしく、時間が空いているのなら、とも言っている。
そこまでこちらの都合を考えてくれて、筋を通してくれている相手だ。アインハルトとしては、断る気にはなれなかった。

「構いません。放課後はお供します」

「あ……いいの？」

「えぇ。　えっと……その……その代わりという訳ではないのですが、私からもお願いが……」

「うん！　僕に出来ることなら何でも！」

アインハルトが、お願いを承諾してくれたので、少し嬉しそうにするホムラに、逆にアインハルトからもお願いをしてみる。
交換条件という訳ではないが、アインハルトもホムラに頼みたいことがあったのだ。

「今度の日曜日なのですが、丸一日を使って集中的にトレーニングに充てようと考えているんです。あの……それで……出来ればホムラさんに…そのトレーニングに付き合っていただきたいと言いますか……練習の手伝いをお願いしたいと言いますか……」

トレーニングを一緒にしないか？　アインハルトのお願いとはそういう事だった。お願いというか、お誘いに部類されるような気もするが。
しかし、アインハルトらしくない、少しホムラの方を窺いながらの話し方。アインハルト自身、なぜこんな風になってしまうのかが分からなかった。

「それならお安い御用だよ。日曜は武装隊の訓練も無いし……。あ、でも僕なんかでいいの？　僕は、剣なら兎も角、ストライクアーツとか拳を使った方面の戦い方は、それほど達者じゃないんだけど」

「いえ、体捌きや間合いの取り方、呼吸の合わせ方という点などでは、剣と拳でも通ずるところはありますから。その当たりの基礎が出来ているのであれば、トレーニングの相手としては十分だと思っていますから」

確かに、ホムラは拳を使った戦闘では門外漢ではあるが、基礎体力や体の動かし方などで言えば、アインハルトに遅れを取ることはない。
ガチンコ勝負をするわけでもない、トレーニングを共に行う相手としては申し分ないだろう。

「うん、そう言う事なら。場所は任せればいいのかな？」

「はい、あまり人目が付くところでは、覇王流（カイザーアーツ）の訓練は控えたいので……。場所については私に一任していただけると」

「了解。だったら、日曜はよろしくね、アインハルト」

「はい、こちらこそ、よろしくお願いします、ホムラさん」

2人は、やる気満々という感じでお互いにそう言い合う。
努力家な二人が集まれば、一体どんな練習になってしまうのか一抹の不安があるものの、意欲が充実しているという事は良い事だ。

『ふむ……ということは、日曜日はマスターとアインハルト様は二人きりという事になりますね……。……マスター、私は一日スリープモードに入っていた方がよろしいでしょうか？』

「よ、余計な気を回さなくていいから！！　ただ単にアインハルトとトレーニングするだけだって！！」

「そ、そうです！！　決してふしだらな目的でホムラさんを誘ったわけでは…！」

『分かっております、分かっておりますとも。ですが、マスター？　アレするときは、しっかり付ける物は付けてくださいね。まだまだ、お二人はお若いのですから……心配なのですよ、イロイロと』

アインハルト&ホムラ「「だから、違うってばぁ（違います）！！！」」

愉快なデバイス、『シラヌイ』によって良いように遊ばれている二人。女性型ＡＩを積んでいる彼女だが、ホムラに女性の友達が出来たことがそれなりに嬉しいようだ。
それも、両者共、ドが付くほどの初心さ。これを弄らずして何がデバイスか（シラヌイ談）。

「…………／／／／」

「／／／／／／／／／」

アインハルトとホムラは、そっち系の話に完全に出来上がってしまっており、今日何回目なのか分からない紅潮ぶりである。
まぁ、まだ12歳の彼らにはまだまだ早い話かもしれないが、性教育はしっかり受けて欲しいものだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「あ、あの……スメラギ君！」

「へ？」

と、ホムラとアインハルトが真っ赤になりながらも学校を目指して、あと少しで到着というところで、ホムラの名前を呼ぶ声が響いた。ホムラとアインハルトが、その声がした方に視線を向けると、そこには二人と同じ中等科の制服を着た女生徒が三人ばかりいた。

一人はメガネをかけた物静かそうな女の子、その間に黒髪美人な女の子、そして最後に少し小柄気味な体に青い髪をした女生徒だ。

「えっと……」

「あ、わ、私達同じクラスの……サイキと……」

「ヴィシエです…」

「クレメンス……です！」

ホムラが戸惑いを隠せないような表情で彼女たちに向き直ると、女生徒三人は自己紹介をしてきた。

というか、またしても同じクラスだったようだ。

本当に、ホムラとアインハルトは他者を気にする努力をした方が良い。

「はぁ……。それで、僕に何か……」

クラスメイトからは無視されているホムラからすれば、何故同じクラスの彼女達から声を掛けられるのかが分からなかったので、取り敢えず目的を聞いてみることにする。
少なくとも、ホムラの陰口を言っていたのは男子だけだったので、女子から何かをされる可能性は低く見積もっていた。
だが、いま現にこうして、目の前には同じクラスの女の子がいる。
若干身構えてしまうホムラだった。

そして、そんなホムラに彼女たちは……

「「「き、昨日はありがとう!!　それと、今までごめんなさい!!!」」」

アインハルト&ホムラ「「……はい？」」

女の子三人は、いきなりお礼と謝罪のステレオコンボを放ってきた。
それには、思わずアインハルトもホムラと一緒になって、間抜けな声を上げてしまう。
ハッキリ言って、彼女たちの言っている事の意味を測り損ねていたのだ。

「スメラギ君、昨日市街地でフィナちゃんっていう女の子、そのお母さんを助けてくれたんだよね？」

「あ、うん……。フィナちゃんをお母さんに届けたすぐ後に、上から鉄骨が降って来たから、思わず叩き切っちゃったんだけど……」

「その……フィナちゃんって私達の住んでる家のご近所さんで……私達とも仲が良くて、お母さんにも良くしてもらってたの……」

どうも、この三人は昨日ホムラが図らずも命を救った親子、フィナとその母親の知り合いらしい。
そこまで聞いて、ホムラとアインハルトはなるほどと思った。

「昨日、フィナちゃんたちからスメラギ君と、ストラトスさんの事を聞いて……その……どうしてもお礼が言いたくて……」

「フィナちゃんとは、とっても仲が良いから……その……私達の友達を助けてくれて……本当にありがとう」

「あと……男子達が怖かったからって……今までスメラギ君の事、見て見ぬふりしてて……本当にごめんなさい！！」

この女生徒三人は、フィナ親子たちがホムラによって助けられたと聞き、感謝と同時に、今までのホムラに対する態度に申し訳なさを感じたのだ。
ホムラは、クラス内では『自分の才能を誇示したい嫌な奴』という

勝手な設定を作られ、無視と陰口にさらされていた。

男子が主力ではあったが、女子達からすれば、関われば自分たちがターゲットに追加されると、ホムラの事を見て見ぬふりをしていた。

その事を、この三人は謝って来たのだ。

「許してほしいだなんて、虫の良い事は言わないよ？　でも、フィナちゃんを助けてくれて感謝してるっていうのは本当だから……。その気持ちだけは分かって欲しいって……」

「男子達の言ってたこと、出鱈目だったんだって分かって……スメラギ君は、本当は努力家なだけなんだって……ストラトスさんの言う通りだったんだね…」

「あ……う、うん……。僕も別に、気にしてないから。それに、わざわざお礼まで言いに来てくれて……その……少し、嬉しかったから……」

ぶっちゃけて言えば、ホムラにとってクラス内での立ち位置、人気などは果てし無くどうでもよかった。

ホムラにとっては、執務官になって目標を果たすことだけが全てだったからだ。

まぁ、アインハルトという友達が出来て、少し変化があったわけだが、人生の予定表には一片の狂いも無かった。

だが、いざこうして人から感謝されると、やはり人間嬉しいもので。

頭を下げてくる女の子達に、ホムラは気にしないでと顔を上げてもらった。

「その……もし良かったらなんだけど……スメラギ君とストラトスさんが良ければなんだけど……これから……その……仲良くしてくれたら……嬉しい……です」

「え？……あの、その……こちらこそ……よろしく……？」

友達、とまではいかないが、普通のクラスメイトになる。最初に一歩としてはそこで十分だろう。

ホムラは、一瞬困ったような表情を受けべつつも、すぐに笑顔で彼女たちの申し入れを受けた。人のコミュニティの拡大の方法には、何通りもの方法があるが、こういった物もその内の一つと言えるだろう。

要するに、結果オーライというやつだ。

「ありがとう！！　スメラギ君！！　じゃ、じゃあ私達は先に教室行ってるから！」

「ま、またあとでね！　ストラトスさんも」

「スメラギ君、また後で……本当に…ありがとう」

「うん……また、後で」

女生徒三人は、そうホムラ達に言うと、ピューッと学園の方に走って行ってしまった。どこか浮ついたような空気と、女の子独特のキャーキャーというような黄色い声。

ホムラにとっては、あまり慣れないイベントであると同時に、どのように受け止めればいいのか全く分からなかった。
だがしかし、なんとなく……悪い気分ではないのは確かだった。

『よかったですね、マスター』

「はは……だね……。何がどう良かったのか、ほとんど分かんないけど……」

シラヌイの声に、ホムラは困ったようにそう返す。ホムラ自身、どうリアクションを取ればいいのか全く分からないのだが、マイナスな事ではない。そんな気がした。

だがしかし、そのホムラの様子に、少し面白くなさそうな女の子が一人。

「……良かったですね、女の子のお友達が増えて。デレデレですね、ホムラさんは」

「え？　あ、ちょ！？　アインハルト！？」

スタスタと、アインハルトは少し不機嫌そうにしてホムラの先を歩いて行ってしまう。
大層ご立腹な様子だが、お子様なホムラに彼女の不機嫌の理由を悟れと言っても、それは酷な話だろう。

「な、何怒ってんのさ？　あの子たちは、友達じゃなくって……ただのクラスメイトで……」

「知りません（プイッ）」

「（あ、怒ったアインハルト、ちょっと可愛い……）」

必死に弁明？するホムラから顔を背け、ズンズン歩いて知ってしまうアインハルト。彼女自身、何故こんなにイライラするのかは分からない。
ただ、なんとなく、さっきの女生徒たちとホムラが仲良さ気に話しているのを見ると、面白くないと感じたのだ。

この気持ちに名前を付けるには、まだ少しアインハルトには人生経験が足りていなかった。

「あのあの！！　僕の友達は、その……アインハルトで……！」

「（っ～～～～～！！！　そういう言い方をされては、何故か猛烈に恥ずかしいではないですか！！）　プイッ」

「ま、待ってってばぁ、アインハルト～～～」

顔を赤くして、ちょっと拗ね気味のアインハルトと、若干半泣きのホムラ。

朝の通学路にて、そんな意味不明な、傍目からは仲睦まじい二人の姿が、そこにはあったとさ。

Ｍｅｍｏｒｙ，０８　ネクタイとやきもちと（後書き）

Ｆ２０Ｃ「うは～……アインハルトヤキモチやきだね～♪」

アインハルト「や、やきもちなんて焼いていません！！／／／／」

Ｆ２０Ｃ「いや、きっと読者の皆様的には、この反応が全てだと思われるかと……」

アインハルト「うぅ……／／／／」

Ｆ２０Ｃ「あ。活動報告ではすでにお知らせしたのですが、改めてご報告いたします。とある訓練生と覇王っ子　なんですけど、そろそろ更新速度を落ち着かせていこうかと思います。目標は週に二回更新。最低でも週一回の更新ということで、ご容赦していただければと思います」

アインハルト「まぁ、作者さんのテンションが上がって、筆のスピードが上がるなどした場合は、週に三回などの更新も有りうるので、これまでどおり、更新の際には前日にお知らせをしていきますので、どうぞよろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ」

Ｆ２０Ｃ「あ、向こうでホムラが知らないお姉さんに声掛けられｔ……」

アインハルト「ほ、ホムラさん！！！？」

ホムラ「ふぇ？！　な、なに？　どうかしたの？」（普通にアインハルトの隣に来ていた）

アインハルト「っ～～～～～～！！／／／／／　作者さん！！！」

Ｆ２０Ｃ「ほほほ、癒されるなぁ……（＊´∀｀＊）」

Ｆ２０Ｃ「ふむ、アインハルトとホムラのコンビは読者様からのウケもいいし、書いてて気持ちいいな」

閣下「よし、俺も清純系キャラでフェイトと接すれば、読者様からの評価も鰻登りに……！！！」

Ｆ２０Ｃ「ただし閣下、てめぇは駄目だ」

閣下「あふん（´・ω・｀）ショボーン」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ：０９　アインハルト『お義姉さん』↑ここ大事

Ｍｅｍｏｒｙ；０９　アインハルト『お義姉さん』↑ここ大事（前書き）

ここのところ、ホムラとアインハルトプッシュしまくりな気がしますね。クゥとかも出していきたいんですが、如何せんホムラとアインハルトの二人がご好評ですし、書くべき部分がまだ多いですし、覇王断空拳の餌食は真っ平御免ですし、おすし

とまぁ、そんな感じで今回も二人を前面に出してクローズアップしていますので、お楽しみ下さいませ。

Ｍｅｍｏｒｙ；０９　アインハルト『お義姉さん』←ここ大事

アインハルトがヤキモチ全開だった日の放課後。なんとか機嫌を直してくれたアインハルトと一緒に、ホムラは学校からレールウェイで約２０分ほどの位置に施設を構える大型総合病院にやって来ていた。

若干首都寄りに位置しているこの病院だが、ミッドチルダの郊外に位置しているホムラ達の学校からも近いため、郊外と首都の間に存在していると見てもらえればいい。

「あの、ホムラさん。参考までに、妹さん……ユキナさんはどのような方でしょう？」

「どのようなって聞かれると……そうだなぁ……よく、歳の割に落ち着いてるって言われるかも。昔から、手の掛からないような感じだよ」

「なるほど、ホムラさんとかなり似ていらっしゃるんですね」

「僕らは否定するんだけどね……ミフユさんとかからはよくそう言われるよ」

ホムラとアインハルトは、そんな会話を交わしながら、病院の正面玄関を潜って中に入る。温度調節は行き届いているようで、病院内の体感気温は心地良いものだ。

診察を受ける人や、薬を処方してもらいに来たであろう人、骨折し

た足をギプスでぐるぐる巻きにされて、お見舞いに来た友人たちに爆笑されている男性などなど。
病院には、さまざまな人が集まってきていた。

「ユキナさんの病室は？」

「６階の６０２号室。エレベーターで行こう」

「はい」

二人は、病院に集まってきていた人たちの観察もそこそこに、本来の目的に戻ることにする。５機あるエレベーターの元で、『→』のボタンを押してエレベーター本体の到着を待つ。

と、そんな時。ホムラに声を掛けてくる一人の男性がやってきた。

「やぁ、ホムラくん。ユキナくんのお見舞いかい？　そろそろ来る頃だと思っていたよ」

「あ、フォン先生。こんにちは」

白衣姿のその男性は、４０代前半あたりだろうか。清潔感とダンディズムの両方が揃った渋いおじ様で、ホムラから『フォン先生』と呼ばれた。
アインハルトは、そのことから彼がこの病院に勤める医師なのだと

理解出来た。

「おや、そちらのお嬢さんはホムラくんの……」

「「と、友達です！／／／／／」」

「ほほう……息ぴったりだ」

朝からミフユさんに散々からかわれた（本人にそのつもりなし）二人は、フォンの言葉の途中で、今度は自分たちから関係を説明した。顔を真赤にしながら。

しかし、あまりの息の合い具合に、フォン医師はなにやら含みのある笑みを浮かべながら、『なるほど、なるほど』と面白そうにしていた。

恐らく、二人の関係の接近具合を大人の勘で理解してしまったのだろう。こういう時、人生経験の豊かさがモノを言うものだ。

「しょ、紹介します。僕の友達で、アインハルト・ストラトスです」

「あ、アインハルト・ストラトスです。よろしくお願いします」

「これはご丁寧に。私は、この病院の医師で、ホムラくんの妹さん、ユキナくんの主治医をさせてもらっている、フォン・レフラだ」

アインハルトとフォン医師は、自己紹介の後に軽く握手を交わす。
彼の言うとおり、フォン医師はユキナの主治医をしており、この病院内、系列病院の中でもかなりの凄腕で知られているとのことだ。
ホムラも、テロで両親を失ったあとは、彼によって治療を受け、リハビリやカウンセリングなどなど、様々な方面でお世話になった。
所謂、恩人というやつだ。

「丁度良かった。実はこれからユキナくんの診察に行くところだったんだ。ユキナくんも、君が同席してくれたほうが心強いだろう」

「そうだったんですか。僕も同席させてもらえると嬉しいです」

「ふむ、なら決まりだ。と、いいタイミングでエレベーターが来たね」

二人がそう話している内に、呼び出していたエレベーターが一階に到着し、戸を開ける。フォン医師とホムラ、アインハルトは順々にエレベーターに乗り込む。

「いやはや、しかしまぁ……ホムラくんが女の子を、しかもこんなに可愛らしいお嬢さんを連れて来るとはね……。将来の義妹との挨拶というところかな？」

「ぎぎ、ぎみゃい！！？」

「あ、アインハルト！　噛んでる！　猫語っぽくなってるから！」

恐らく、フォン医師も冗談で言っているのであろうが、初心なこのお嬢さんには少々刺激が強い、というか冗談が冗談にならなかったようで。

アインハルトは噛み噛みな状態で赤くなってしまう。だが、その様子が少しカワイイと思ってしまったのは、ホムラの胸の中にだけに仕舞っておくことにする。

「わ、私とホムラさんは……まだお付き合いもしてませんから！」

カチッ！

パニクリながら、アインハルトは勢い良く目的地であるユキナの病室、6階へのボタンを押した。というか、『まだ』ということは、いずれはそうなるかもしれないのだろうか。

しかし、何事も焦っていたり混乱している状態では、物事は思う通りに流れてくれないものだ。この時、アインハルトは致命的なミスを犯していた。

「ほほう……まさか二人がもうそこまで進んでしまっているとは……」

「え？」

「あ、アインハルト！！　ボタン、行く階間違ってるから！！」

フォン医師とホムラが、リアクションの仕方はそれぞれだが、アインハルトの押したボタンに書いてある階表示を見てそう言ってくる。
何事かと、アインハルトがエレベーターのディスプレイを見てみると、そこには6階ではなく、『5階』という表示が映し出されていた。

どうやら、押すボタンを一つ間違ってしまったらしい。
しかし、5階に何があるのだろうかと、アインハルトは首を傾げながら5階にある施設の説明書を読んだ。
そして、ホムラ達の言葉の意味を理解することになる。

5階：産婦人科

「ささ、産婦人……／／／／／／／／／／　はぅ／／／／／／」

「ま、まさか二人ともその若さで親になるとは……いや、最近の子供達は進んでいるとは聞いていたが、まさかここまでとは……」

フォン医師、実はノリノリである。
まぁ、この初心な二人を見ていれば、誰でも弄りたくなる衝動に駆られてしまうのは仕方のないことではあるが。

「名前などは決めているのかい？　聞くところによると、字数に気をつけたほうがいいとか……」

アインハルト&ホムラ「「フォン先生！！！」」

「はっはっはっは！！！」

こうして、ユキナの病室に辿り着くまで、フォン医師の誤解（二人はそう思っておる）を解くのに必死だったホムラとアインハルトだった。

あ、まだ二人はそういう事もしていないので悪しからず。そういう事の中身？　言わせるなよ、恥ずかしい／／／

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

フォン医師との愉快なやり取り（アインハルト&ホムラは真っ赤だが）をしているうちに、エレベーターは目的地である6階に到着した。5階に到着した時は、アインハルトが光の速さで扉を閉じるボタンを押した。

そんな弄り甲斐のある光景は一先ず置いておいて。三人は、６０２号室、つまりはユキナの病室の前に到着した。

個室のその部屋のドアは、一般病棟のものと変わりはなく、部屋の中も間取りとベッドの数が少し違うだけで、他に特別なところはない。

コンコン……

「どうぞ～」

ホムラがドアをノックすると、部屋の中から鈴を鳴らしたような可愛らしい声が返って来る。ホムラは、それを確認すると、病室のドアをゆっくりと開いた。

「あ、兄さん、それにフォン先生も。こんにちは」

病室の中に鎮座している、白いベッドの上には綺麗な銀色の髪をストレートに下ろした少女が本を片手に座っていた。
初めて見るホムラの妹、ユキナだが。アインハルトですら息を飲んでしまいそうになるほどに綺麗で、同時に可愛らしかった。

ホムラの二つしたということで、恐らく１０歳のユキナだが、落ち着いたその風貌と雰囲気から、かなり大人びて見える。

「や、ユキナ」

「そろそろ来る頃だと思ってました♪　あれ？　もしかして、そちらの方が……？」

手を上げてユキナに声をかけながら病室に入るホムラにアインハルトも続いて行く。

すると、ユキナは見慣れない女の子が居ることに気が付き、もしかすると、というような表情を浮かべながらホムラに尋ねるように視線を向けた。

「はじめまして、ユキナさん。ホムラさんの友達で、アインハルト・ストラトスと言います」

「わぁ！　本当に来てくださったんですね！　嬉しいです♪　私、ホムラの妹で、ユキナ・スメラギです。兄がお世話になっています」

ユキナとアインハルトは、穏やかな雰囲気の中、挨拶を交わす。凛としたアインハルトに、ユキナは気後れすることもなく、わざわざ足を運んでくれた彼女に感謝の意思を込めてお礼を言ってきた。

アインハルトのユキナに対する『しっかりしている』という評価は、どうやら大当たりのようだ。

「わぁ～……アインハルトさん……兄さんの話で聞いてたけど、ほんとうに綺麗ですね～……憧れちゃいます」

「き、綺麗、ですか!?　というか、ホムラさんの話って……？」

「あ、ちょ!!?　ユキナその話は!!」

「え？　だって、兄さんこの前言ってたじゃない。アインハルトさんって言う、綺麗な女の子と友達になったって。だから私も会いたくなって……」

どうやら、ユキナとの会話の中で、ホムラはアインハルトのことを、かな～り高評価しているらしい。
その話を途中でやめさせようとしたホムラだったが、物の見事に間に合わなかった。

「あの……ホムラさん……？　私が……その……綺麗というのは……／／／／／／」

「あああ、あのあの……！！　えっと、その……僕は……思ったことを言っただけって言うか……アインハルトって、綺麗だし……可愛いから……その……／／／／／／」

「はぅ……／／／／／／」

何だこのバカップル。
いや、付き合ってもいないのだが、傍から見ればそう言われても文句は言えないだろう。

ホムラは恥ずかしそうに、しかし正直にユキナとの話のことを暴露して、アインハルトは本日何度目かの茹でダコ状態に突入してしまっている。

「ふぉ、フォン先生……兄さんとアインハルトさん、なんだか二人の世界に入っちゃったんですけど……」

「ふむ……まぁ、若いうちというのは往々にして周囲が見えなくなってしまいがちなのさ。特に、男と女の間ではね……。さて、スメラギ夫妻がこちらの世界に戻ってくるまでに、今日の診察を終わらせておこうか？」

「あ、はい。先生、お願いします」

フォン医師とユキナは、無限の糖製（アンリミテッド・シュガー・ワークス）を展開したまま、ボーッとしてしまっているバカップル（未成立）を一先ず放置し、今日の診察を始めてしまうことにしたのだった。

フォン医師とユキナの中では、ホムラとアインハルトの事が『スメラギ夫妻』という括りでカテゴライズされることが決まった瞬間でもあった。

閑話休題

「で、兄さん？　アインハルトさんみたいな美人さんをどうやって引っ掛けてきたんですか？」

「引っ掛けたって……そんなナンパした訳じゃないんだけど……。えと、曲がり角で正面衝突してさ……」

「……なんていうか、ベタっていうか、王道的な出会いですね……」

ようやくスメラギ夫妻が元に戻った頃には、フォン医師はユキナの診察を終えていた。経過は順調らしく、ユキナの体自体も安定しているそうだ。
アインハルトには、ユキナの実質的な病気のことなどは分からなかったが、目の前の少女の血色の良さや、快活な喋りぶりを見る限り、そこまで切迫した自体にはなっていないことは理解できた。

「はぁ～……どうせ前の日まで無理して、訓練と勉強で夜更かしでもしていたんでしょう？」

「うっ……そ、そんなことは」

「いや、多分そうだろうね。パッと見た感じ、ホムラくんもかなり疲れているのが丸分かりだよ」

「うぅ……」

ホムラはユキナに、日頃からの生活の乱れを指摘され、フォン医師からの裏付けもあって言葉に詰まってしまう。
ホムラがよく疲れたような表情をしているのは、局の訓練と学園の勉強で時間を使い過ぎているからということらしい。

「で、でも……最近特に訓練と学園の勉強が大変で……そうでもしないとついて行けないかもしれないから」

「それで、無理して兄さんが倒れたりしたらどうするんですか？　まさに本末転倒ですよ？　たまには休みを取ることも、訓練や学業

の仕事の内の一つだと思います」

「う……あぁ言えばこういう……」

「当たり前です」

「（ホムラさん、ユキナさんの前ではこんな表情もするんだ……。それに、妹さんには頭が上がらないみたいですね……）」

仲の良い兄妹のやり取りを見ながら、アインハルトはどこか温かい気持ちになっていた。ホムラのユキナに見せる表情も新鮮だが、妹に完全に尻に敷かれている様子もまた彼らしいと、アインハルトは思ってしまった。

「アインハルトさん、兄さんって放っておくと無理ばかりしてしまうので、出来れば馬鹿な事を使用としていたら蹴飛ばしてでもやめさせていただければ……」

「いやいや!?　アインハルトになんてこと頼んでるのさ!?」

「はい、分かりました。その場合は容赦なく……」

「アインハルト!?」

ユキナからのお願い（恐らく半分は冗談のはず）をアインハルトが聞き入れたことによって、ホムラの包囲網が確立してしまうことになった。

短い時間ではあるが、アインハルトとユキナはお互いに言葉を交わすことでかなりの親睦を深めていたようだ。女子力というのは凄まじいものである。

「はぁ……分かったよ、出来るだけ自重するから……。って、もうこんな時間だ」

「とそうだ、私もそろそろカルテをまとめなければ……」

そして、陽が傾いてきた頃、ホムラとフォン医師は時計を見ながら、かなりの時間が経過していたことに気がついた。昼過ぎに此処に来たので、大体3時間くらい話し込んでいたらしい。

「じゃあ、そろそろ帰ろうかアインハルト。暗くならない内に帰ったほうがいいし」

「そうですね。少し名残り惜しくはありますが……」

「あはは、そう言っていただけるだけで嬉しいです。よろしければ、またいらしてください」

「はい、是非また」

ホムラが帰り支度を始めると、アインハルトとユキナは仲良さ気にそう言い交わす。お互いに落ち着いた性格をしているので、妙に波長が合うようで今日だけでかなり打ち解けることができたようだ。

「じゃあ、僕たちは帰るけど、何かあったらすぐ言うんだぞ？」

「うん、分かってる。ありがとう、兄さん。フォン先生も、アインハルトさんも」

ユキナは嬉しそうにホムラたちに微笑みながら、三人のことを見送ってくれた。そんな姿を見て、ユキナが快復した際には、一緒に外にでてみたいものだとアインハルトは思った。

「では、近い内に必ずまた」

「はい、待ってます♪　……アインハルトお義姉さん」

ドアが閉まる間際、ユキナは悪戯っぽい笑みを浮かべつつ、アインハルトとホムラを見ながらそう言う。嫁入り後も、妹君との仲を心配しなくてもいいと分かった瞬間だった。

言うまでもないだろうが、ホムラとアインハルトは耳まで赤くなってしまうのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「おっと、忘れるところだった。ホムラくん、これを渡しておこう」

「あ、すみません。わざわざ持ってきて頂いてたんですね」

病院の玄関先までフォン医師はホムラとアインハルトを見送りに来てくれた。その際に、彼はホムラにこの病院のマークが入った薬袋を渡して来た。

ホムラも、あとで取りに行くつもりだったようで、迷うことなくその薬を受け取る。

「ユキナくんの状態もかなり安定してきている。この調子ならば、自宅療養に移る時期も近いかもしれない。だから、ホムラくんも自分の健康には気を付けるようにな」

「は、はい……」

ユキナの言いつけを復唱するかのように、フォン医師が釘を刺すと、さすがのホムラも反論することなく従った。

まぁ、自分の体調管理もできないようでは、人の健康など気にしている余裕など無いと、そう言い含めてくれているのだろう。

「二人が来てくれたことで、ユキナくんも喜んでいた。アインハルトくんも、出来ればまた顔を出してやってくれ」

「もちろんです。約束しましたから」

「ふふ、そうだったな……。では、よろしく頼むよ」

アインハルトには、ユキナのことを鑑みてそうお願いをしてくるフォン医師。メンタル面でのケアを考えると、今日のような楽しい会話や出来事こそがユキナに必要なものだと考えたのだろう。

「では、私はこれで。二人とも、帰り道には気をつけてな」

「はい、ありがとうございました、先生」

「失礼します、先生」

そして、アインハルトとホムラは、フォン医師に揃って一礼して、病院を後にした。
その二人の後ろ姿を見送ったフォン医師も、自らの仕事に戻るべく、手元のユキナのカルテを確認しながら、持ち場に戻った。

「アインハルト、今日はありがとね、ユキナのお願い聞いてくれて……」

「いえ、私も楽しかったですから……。同年代の女の子と、こんなふうに話すことはあまり無かったので……私自身、新鮮な気分でした」

「そっか、なら良かったよ」

アインハルトとホムラは、レールウェイ乗り場を目指して、病院敷地内の帰り道を歩く。レールウェイ乗り場そのものが、病院の敷地内にあるということで、約五分だが玄関から歩く必要があるのだ。

ホムラはアインハルトにユキナからのお願いを聞いてくれたことに対して、感謝しているようだが、アインハルトとしても同世代の女の子との会話は楽しい物だったらしく、どこか嬉しそうだった。

「あ。そういえば……フォン先生から薬を貰っていたようですが、ホムラさんはどこか悪いところでも……？」

「あぁ、これ？　……え～と、別に病気してるとかではないんだけど……」

お互いに、今日のユキナとのことが有意義だった事を理解し合うと、アインハルトは先程のフォン医師からの薬のことをホムラに尋ねてみた。

ホムラ自身に、どこか病気をしているような雰囲気は感じられないが、彼はそういう事を隠すのが上手いので、念の為に確かめてみたのだ。

アインハルトの追求に、最初は誤魔化すつもりのホムラだったが、彼女のその手が通用しないと分かると、観念したように正直に話してくれた。

「……フラッシュバックを、抑える薬なんだ」

「フラッシュバックというと……昔の辛い出来事などがを急に思い出したり、夢に見たりするという、あの……？」

「うん。僕の場合、夢で見るタイプなんだけどさ……。テロの時の記憶とかが、たまに……。夜中飛び起きて、過呼吸になりそうになったりするから……」

「あ……」

フラッシュバック。ホムラの場合は、テロと両親の死亡という惨事が、過去のトラウマになっているのだろう。

普段はそうでもないのだが、テロでの被害は、ホムラの中ではまだまだ終っていないのだ。今なお、彼の精神に大きな傷をつけて、苦しめ続けている。

「薬さえ飲んでおけば、大分楽になるんだけどね。それでも、たまに夜中に起きちゃって、布団にくるまってブルブル震えたりしてさ……はは、情けない話だけど……」

ホムラは、自嘲するような笑みを浮かべながらそう言うが、アインハルトには彼の気持ちが少しわかった。

彼女もまた、覇王としての記憶を夢に見るときがある。それが覇王の最も悲しい記憶だったときには、涙を流しながら起きてしまうこともあるほどだ。

だからこそ、過去のトラウマで夜中に布団で震えているホムラのことを馬鹿になど出来ないし、するつもりもなかった。

「情けなくなんてありませんよ。……私も、覇王の一番悲しい記憶を夢に見て、泣きながら起きてしまうことがありますから……」

だからこそ、アインハルトも自身のことを正直に話す。彼が、自分を信じて話してくれたように、彼と対等にあるために。

自分も同じだと、それを恥じる必要はないのだと。彼に伝えたかった。

「ホムラさん、この前言ってくれましたよね？『何かあったらいつでも連絡くれれば良い』と……。私にも、遠慮はしないでください。悲しい時は、私も頼らせてもらいますから……」

「アインハルト……」

アインハルトの言葉に、ホムラは一瞬呆気に取られたようなリアクションをとるが、すぐに彼女が本気でそう言ってくれているのだと分かった。

アインハルトの瞳には、嘘偽りはなかったし、何よりも彼女がこの手のことで冗談を言うような人物ではないことくらい、この何日かで分かっていたから。

「震えが止まらないからと言って、我慢なんてしないでください。これからは、私も我慢しません」

「……ありがとう……」

本当に、アインハルトは綺麗だと、ホムラは思った。

外見だけの話ではない。アインハルトの心の美しさに、ホムラは思わず彼女に心を鷲掴みにされた気分になった。

その感情に、アインハルト同様に未だ名前をつけることは出来なかったホムラだが、なんとなく、アインハルトとの距離が更に縮まったような気がした。

そして、出来ることなら……もっと近づきたいと、距離を縮めたいと、そう思ったのだった。

Ｍｅｍｏｒｙ；０９　アインハルト『お義姉さん』↑ここ大事（後書き）

Ｆ２０Ｃ「フォン医師と、妹・ユキナの登場というわけですが……。一方通行じゃない気持ち……いいねぇ……。お熱いねぇ、スメラギ夫妻は」

ホムラ「ふ、夫妻って何ですか！！」

アインハルト「私たちは……まだ、お友達で……いえ、嫌というわけではありませんが……」

Ｆ２０Ｃ「無限の糖製を展開しておいてよく言う……まぁ、閣下とフェイトさんがイチャ付く時よりも、まだ可愛い物を見る感じで楽しめると、読者様からはお声を頂いてることだし……」

閣下「俺とフェイトの熱いベッドシーンがあると聞いたんだが」

Ｆ２０Ｃ「その程度の理想しか抱けないなら……抱いたまま溺死しろ」

閣下「（，・ω・、）ショボーン」

Ｆ２０Ｃ「次回は、アインハルトの武装形態、大人モードにホムラが……」

アインハルト「ホムラさん？　なぜ目を逸らすんですか？」

ホムラ「なな、なんでもないよ！？（あ、アインハルトの大人モー

ドの服……スカートの丈が短すぎて目のやり場が……うぅ……）」

Ｆ２０Ｃ「お前も少しは彼の紳士ぶりを見習え」

閣下「だが断る。チラリズムは、男のロマン！！（＊´ω`＊）」

Ｆ２０Ｃ「その意見には賛成だが、その顔文字は流行らないし、流行らせない」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ：１０　二人だけのヒミツ特訓（非エロ）

登場人物紹介Ｖｏｌ．１（ホムラ&クゥ編）（前書き）

今更ですが、そのまんま、登場人物の紹介でございますｗ

今後も、オリジナルキャラが増えるごとに少しずつ更新していこうかと思います。

登場人物紹介Ｖｏｌ．１（ホムラ&クゥ編）

・ホムラ・スメラギ

年齢：１２歳

イメージＣＶ：下野紘さん（バカとテストと召喚獣、吉井明久役・おおきく振りかぶって、田島悠一郎役）

タイプ：セカンド（第二世代）

身長・体重：１５３ｃｍ・４４？

髪の色：朱色

瞳の色：碧

見た目：好青年を絵に書いたような感じ。（イメージで言うと、るろうに剣心に登場する、瀬田宗次郎　みたいな感じ）

専用デバイス：シラヌイ（刀剣タイプ）

好きな女の子タイプ：凛とした大人っぽい女の子。しっかりとした自分を持っている女の子。一生懸命な子。

魔法形式：近代ベルカ式

魔力変換資質：炎

魔導師ランク：空戦Ｂ－

特殊スキル：？？

備考

本編での主人公。

テロで両親を亡くし、叔母夫婦に引き取られる。両親に憧れ、同時にとある目的から執務官を目指す。

学園と局の訓練などで、ギリギリのラインの生活を送っていたが、最近ではアインハルトとの触れ合いで、かなり癒されている。

が、テロの傷跡は深く残っており、フラッシュバックによって夜中に飛び起きてしまったりする。加えて、シラヌイを抱いた状態でなければ眠れない。

紳士である。

クゥ・ランスター

年齢：７歳

イメージＣＶ：朴ロ美さん（鋼の錬金術師、エド役）

タイプ：イノベイト・チルドレン

身長、体重：１２２．５ｃｍ・２４．２ｋｇ

髪の色：オレンジ色

瞳の色：青

専用デバイス：エウロス（ローラーシューズ型デバイス）

好きな女の子のタイプ：優しいお姉ちゃん、ぶっちゃけて言えばコロナ

魔法形式：不明

魔導師ランク：測っていないので不明

特殊スキル：????

備考

前作主人公、ソラとティアナ・ランスターの息子。人間の意識の総体、コミュによって生み出された特別なイノベイト・チルドレン。天真爛漫な性格で、母、ティアナのことが大好きである。父親のことは何も知らない。自分が、進化した人間の結果の一つであることも知らないはずだが……？

ヴィヴィオの親友、コロナに好意を寄せており、特に懐いている。しかし、誰からの遺伝なのか、若干ツンデレであり少し素直になり切れない。

マスコット的なキャラクターでもある。

最強の七歳児

登場人物紹介Ｖｏｌ．１（ホムラ＆クゥ編）（後書き）

Ｆ２０Ｃ「あれ？　ホムラの好みの女の人って……アイハｒ……」

ホムラ「わーーーーわーーーーー！！！！」

Ｆ２０Ｃ「いや、でもそのものじゃない？　いやはや、お熱いことで……はっはっはっは」

ホムラ「／／／／／／／」

アインハルト「ほ、ホムラさん……／／／／」

Ｍｅｍｏｒｙ，１０　二人だけのヒミツ特訓（非エロ）（前書き）

ヒーハー！！！！
１０万ＰＶ突破しやしたぁぁぁぁぁ！！！！これも、一重に皆様のご声援のお陰で御座います。本当にありがとうございますｗｗ

今回は、トレーニング回です。またしてもアインハルトとホムラがイチャつきます。あ、クゥたちも出てきますのでお楽しみにｗ
ホムラの紳士っぷりにもご注目ｗｗ

とある訓練生と覇王っ子、イメージソング
『二人三脚』　ｓｏｎｇ　ｂｙ　ｍｉｓｏｎｏ
「テイルズオブシンフォニア　ラタトスクの騎士」より

Ｍｅｍｏｒｙ，１０　二人だけのヒミツ特訓（非エロ）

日曜日、ホムラとアインハルトは約束通り、丸一日を充ててトレーニングに励むことになっていた。
その日は朝から家を出て、市街地から少し離れた森林公園に二人は足を伸ばしていた。
森林公園の奥にある、ほとんど人の来ないポイントがあるらしく、多少暴れても大丈夫なくらいの広さもある。
まさに、隠れて練習するにはうってつけの場所というやつだ。

「へぇ～……アインハルトのトレーニングウェア姿ってなんだか新鮮だね」

「ホムラさんもですよ。今まで制服ばかりでしたからある意味当然といえばそうですけど」

二人は、予め持って来たお互いの訓練用のトレーニングウェアに対する感想を口にすると、手首のストレッチや柔軟など、運動をする下準備をしていく。こういった準備運動を欠かしていると、思わぬところで大怪我をしてしまうものだ。

柔軟を終えた二人は、軽くアップを済ませ、体を温める。周りが緑で囲まれているからか、そこまでの暑さはなく、心が静まるような気にさえなってくる。

「では、早速始めましょうか」

「うん。僕は、アインハルトのトレーニングの補助ってことでいいの？」

「はい、一人では少し難しいところがあるので、その辺りで手を貸していただければ」

「分かった」

そして二人は、早速トレーニングを開始した。

最初はランニングなど、基礎的な事から始まった。まぁ、いきなり組み手というのもおかしな話なので、ホムラは彼女の立てた練習メニューに沿って、一緒に体を動かす。

「なんだか……ちょっと新鮮かも」

「何かですか？」

「いやさ……こうやって、似たような事してる友達と一緒になってトレーニングしたことなんて一回もなかったからさ」

ホムラの主な訓練といえば、武装隊での訓練だろう。しかし、あそこではホムラは他の訓練生から妬みや嫉妬などの視線をぶつけられ、

当然ながら友達と呼べるような者と訓練出来るわけもなかった。
ただ単に、自分一人で黙々と、それが彼の訓練に対するイメージだった。

「私も、少し新鮮な気分です。ずっと一人でやってきましたから……」

「そっか。……でもさ、こういうの……なんかいいよね」

「……はい」

そして、ホムラと同じようなイメージを、アインハルトも感じていた。彼女の場合は、覇王流（カイザーアーツ）というものが絡んでいるので、一概に同じとは言えないが、一人で訓練をしていたという点では何ら変りない。

だからこそ、友だちと一緒に訓練をするということに、ホムラ同様に妙な新鮮さと、心地良さを覚えていた。

「さぁて……あと5？。頑張っていこう！」

「はい！」

シラヌイに、二人が走った距離を測ってもらい、それを目安に目標のタイムなどを算出。ホムラはとアインハルトは、目標時間内に走

りきれるように、少し走るペースを上げた。
後半、何故か二人で張り合ってしまい、最後の方はお互いに全力で走ってしまったことは、良い思い出として、二人の記憶の中に留めておくことにする。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「はっ！　やぁ！！」
「うわっと……（ヴィヴィオ姉ちゃん、やけに気合入ってるなぁ……）」

区民センターのスポーツコートにて、ヴィヴィオの練習試合の相手をしていたクゥは、彼女の動きからそのモチベーションの高さを感じ取っていた。
日曜日ということで、家で暇をしていたクゥだったのだが、いきなりヴィヴィオ達に叩き起されて、練習に付き合っているというわけだ。
今回は、ヴィヴィオも本気なのか大人モードで練習に励んでいる。恐らく、目前に迫ったアインハルトとの練習試合では大人モードで臨むつもりなのだろう。

「ふっ！」

「ぬぅ！」

ガゥン！！

ヴィヴィオの気合の入った一撃を、クゥは両腕をクロスさせて防御。
それでもかなりの衝撃だ。
今日のヴィヴィオは、特に集中し、且つモチベーションが高い。大人モード使用という、身体的な強化ももちろんだが、今の彼女はメンタル的に非常に充実している。

「すごい、ヴィヴィオのあんな真剣な顔、初めて見るかも……」

「クゥちゃんもデバイス使ってないけど、結構押されてる……？」

「今のヴィヴィオはモチベーション高いからな。クゥも油断は出来ねぇだろうさ」

その練習試合を見物していた、リオ、コロナ、ノーヴェもまた、ヴィヴィオの動きに下を巻いていた。
先日のアインハルトとのスパーリングが、彼女に火を付けたのは間違いない。

「ふぅ！！」

「隙あり！」

と、気合が入りすぎたのか、ヴィヴィオの攻撃が大振りになる。クゥに回避され、向かって伸びきった拳と腕が、完全にフリーになったところをクゥは見逃さない。

クゥは、ヴィヴィオのその手を素早く取ると、背負い投げの要領で彼女の身体を宙に浮かせ、優しく投げた。

ダンッ！！

「くぅ！？」

「はい、一本」

ヴィヴィオは綺麗に受身を取り、クゥも優しく投げたので彼女に怪我などは一切無い。

クゥは、ヴィヴィオを助け起こして一息付いた。

「ダメだよ、ヴィヴィオ姉ちゃん。あんなとこで大振りな攻撃したら、カウンターもらっちゃうに決まってるじゃん」

「うぅ……集中しすぎてた……。はぁ～……これがアインハルトさんだったら、確実にダメダメだよね……」

クゥにそう言われると、ヴィヴィオも先程の攻撃はダメだと理解していたのか、少し落ち込む。
ここぞというときに大振りになってしまうことは、よくある話ではあるし、相手にその大振りの攻撃を出させるというのも戦法の一つだ。

隙をついてカウンターを狙う、立派な戦術でもあるし、戦闘スタイルとも言える。

「ね、ねぇクゥ？　もう一回……ダメ？」

「え～？　これでもう１０回目だよ？　そろそろ休もうよ～……俺眠たい……ふぁ……」

「そこを何とか！！」

でもって、リベンジマッチに燃えているヴィヴィオとしては、練習試合の期日までに、納得のいくまで練習を重ねておきたいところ。
その相手として、日曜日ながらクゥに相手を頼んでいるのだ。しかしまぁ、いくらイノベイト・チルドレンであるからと言っても、クゥはまだまだお子様だ。

朝からぶっ続けでヴィヴィオの訓練の相手をしていれば、疲れてきてしまうだろう。先程から、若干うつらうつらしている。

「むぅ～……もう無理……」

眠気が最高潮に達しているようで、クゥはフラフラとした足取りでコロナ達の居る方に帰っていく。
そして、コロナの目の前にまで来て……

ポスン……

「すぅ……」

「あらら……クゥちゃん寝ちゃった……」

クゥは、コロナに抱きつくように倒れこむと、そのまま昼寝モードに突入。完全に寝てしまった。
コロナは、クゥを抱き止めると、その場に腰を下ろして自分の膝を枕に、クゥを寝かせてやる。立派な膝枕の完成である。

「あぅ～……クゥ～……」

「仕方ねぇよ。こいつはお前以上に身体が出来上がってねぇんだ。子供の身に、これ以上無理はさせないほうがいい」

「う……やっぱり、そうだよね……」

ヴィヴィオが残念そうな声を出すと、ノーヴェが苦笑しながらそれを窘める。彼女の言うとおり、クゥはまだまだ成長途中の子供だ。
ヴィヴィオ達とそんなに変わらない年齢のように見えても、実質生

まれてまだ一年と少しなのだから。

「なぁに、こっからはあたしが相手してやる。さっき見てたときに、気になったところとかが幾つかあったからな」

「あ・・・うん！　ありがと、ノーヴェ！」

「れ、礼なんていい・・・とっとと始めるぞ！　準備しとけ／／／／／」

クゥの後釜を引き受けたノーヴェに、ヴィヴィオが真っ直ぐな目でお礼を言うと、照れ隠しなのか、ノーヴェはそう言ってそっぽを向いてしまった。
まぁ、まだまだ彼女も大人になり切れていないということだろうか。

「ふみゅ……コロナおねえちゃ～ん……でへへ／／／／／」

「うんうん、クゥちゃんも頑張ったね～、偉い偉い♪」

「はぁ～……こっちはこっちで熱々ね～……」

リオは、真横でナチュラルにイチャイチャしているクゥ（爆睡中）とコロナを見ながら、訓練を開始しようとしているノーヴェとヴィヴィオの様子を見守る。

日曜日の昼下がり、アインハルト達と同様に、ヴィヴィオもまた自

らを高めようと努力を重ねていたのだった。
来るべき、練習試合に向けて……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ふは～……結構動いたね～」

「はい、いつもよりも効率的にトレーニングを進めることができてますね……。ありがとうございます、ホムラさん」

「いやいや、僕の方もかなりいい訓練になってるからさ。こちらこそありがとうだよ」

午前中、基礎的なトレーニングを続けていたホムラとアインハルトだったが、時間もいい頃合になったので、一回お昼休みを挟んでいるところである。
二人とも、弁当持参だったのだが、運動の後にはお腹が減るのが自然の摂理と言わんばかりに、ペロリと食べてしまった。

「それにしても、アインハルトって結構本格的な訓練してるんだね。覇王流（カイザーアーツ）って、やっぱりそこまでしないと物にならないってことなんだろうけど」

「私などまだまだです。技の完成度も不十分なところも多々ありますし、戦闘経験も自慢できる程ではありません。私からすれば、ホムラさんのあの抜刀術の完成度の方が驚きですよ？」

休憩時間の話としてはやや無骨な気もするが、二人は会話に困ることはなかった。同じ種類の趣味、目標を持つ者同士、やはり通ずるところがあるのだ。

「一瞬、ホムラさんの姿が消えたと思ったら、鉄骨は真っ二つになっていて……斬り口もものすごく綺麗なものでしたし」

「黒椿（くろつばき）のことだよね？　あれは、僕のとっておきだったんだ。シラヌイ」

『はい、マスター』

ホムラは、そう言うと相棒の名を呼び、シラヌイの本体を手に出現させる。黒い鞘に収まった、刀タイプのデバイス。
ホムラがその剣を抜くと、漆黒の峰と吸い込まれそうなくらい綺麗な銀色の刃が目に飛び込んでくる。

「……綺麗な直刃……手入れもきちんとしてありますね」

『恐縮です、アインハルト様』

「大事な相棒だからね。それで……ここから……」

アインハルトが、シラヌイの美しさとホムラの手入れの余念の無さ

に感心すると、ホムラは自身の魔力をシラヌイの刀身に付与させ……

ボ……

「あ……」

刀身に付与された魔力は、ホムラの魔力変換資質によって炎と化す。
それも、以前アインハルトが見た、吸い込まれそうな程美しい、純粋な黒色だ。

彼をよく思わない者たちからすれば、暗い色の魔力光は貶すネタにしかならないが、そうでない者からすれば、ただただ美しいと思えるような炎だった。

「黒椿は、炎を付させたシラヌイで放つ抜刀術。シンプルだけど、その分扱いやすいんだ。それと、アインハルトが僕の姿を見失ったって言ってたけど、あれは『縮地』っていううちの家に伝わる古流剣術の歩法の一つらしい」

「らしい、というと……」

「あぁ、うん。僕自身、父さんから一度だけ手ほどきしてもらって、そこからは見よう見真似だったから……正しい手法での縮地になってるか、ちょっと自信なくて……」

ホムラの高速移動、まさに目にも留まらぬ速さというべきあの動き

は、彼の家に昔から伝わる歩法の一つだったらしい。
彼自身、自分の縮地が正しいものかは分からないので、自信はないようだが。

「僕の家って、『地球』って管理世界に御先祖様がいたらしくて、こういう昔ながらの剣術とか歩法とか、そういうのが少しだけど受け継がれてきたんだって」

「なるほど……覇王流（カイザーアーツ）と少し似ていますね。昔ながらという点では。ですが、相当の鍛錬が必要だったのでは？」

「うん、本当に大変だった。兎に角必死で脚を鍛えてさ、そこに教えてもらった歩法を練り合わせて、縮地はやっと完成したんだけど、3年も掛かったちゃったからね」

移動の初速から、トップスピードに入り、相手の視界から消えたような超スピードを現実のものにする。まるで、瞬間移動の如きそのスピードは、神速とでも言えばいいのか。

移動魔法を使わない、超高速移動術。そこには才能はもちろん、言葉の通りの血の滲むような鍛錬が不可欠だ。

アインハルトが一人で厳しい修行を積んでいたのと同様、ホムラもまた同じような事をしていたのだろう。

「抜刀術と、その『縮地』の組み合わせ……完成度を突き詰めていけば、相当の武器になりますね」

「うん、それが今のところの僕の目標なんだ。噂なんだけど、局内にものすごい抜刀術の使い手が居るって話なんだけど……えっと、なんて人だったかな……？　ルー……えっと、ごめん忘れちゃった。兎も角、そういう人に手解きしてもらえればいいんだけど……やっぱり難しいだろうしね……」

「今の時点では、自力で、ということですか……」

良い師に巡り合うことが出来れば、ホムラはもっと強くなれる、アインハルトはそんな核心があった。

というか、ここまで一人で、抜刀術と縮地の完成に心血を注いできたのだ、そこに熟練者の教えが加われば、力の向上が飛躍的にアップするのは明白なことでもある。

「何にせよ……道のりはまだまだ長いね。僕も、アインハルトも」

「はい……日々精進、ですね」

ホムラは、シラヌイを待機状態に戻すと、休憩はここまでというように立ち上がった。ホムラのその意志を理解したのか、アインハルトもお弁当の箱を片付け、食休みを終えた。

そう、ホムラとアインハルトの言うとおり、この二人はまだまだ強くなれるのだ。伸びシロも十分、成長する要素など、いくらでもある。

まさに、日々精進、この一言に尽きるだろう。

「さぁて、午後の部も頑張っていこうか」

「はい、お願いします、ホムラさん」

ホムラは『う〜ん』と伸びをしてから、アインハルトにそう言い、改めてストレッチなどをする。

丸一日をトレーニングに充てるのだ、出来る限り時間は有意義、且つ効率的に使いたい。

アインハルトもまた、これからの運動のために、アップを済ませる。

「午後からは、少し組み手のお相手をお願いしてもいいですか？」

「うん、少し動きがぎこちないかもしれないけど、それでいいなら」

「問題ありません。すぐに慣れると思うので……。……えっと、それで……ホムラさん……少し、後ろを向いておいてもらいたいのですが……／／／／／」

「へ？　後ろ？」

そして、午後からのトレーニング、組み手を始める二人だが、何故かアインハルトが赤くなりながらホムラに『後ろを向いていて』とお願いをしてくる。

突然のお願いに、少し疑問を感じたホムラだったが、アインハルトの言うことなので何か意味があるのだろうと、すぐに顔を彼女から

背けて、後ろを向いた。

「はい、これでいいのかな？」

「はい、ありがとうございます／／／／　……それでは……『武装形態』」

「？？（武装形態？）」

アインハルトの呟きに、首を傾げながらも、ホムラは彼女が良いと言うまで後ろを向いていた。
背後に居るであろうアインハルトに、何が起こっているのかは分からないが、今振り返ったらそこはかとなくイケナイ展開になりそうなので、やめておいた。

そして、待つこと数秒……

「いいですよ。こちらを向いてください、あ……その、驚かないでくださいね？」

「うん。で、一体何が驚くって……」

アインハルトに言われて、クルッと彼女の方に再び視線を戻すホムラ。

その瞬間、彼の頭はフリーズしてしまった。いや、身体に電流が流

れたが如く、痺れにも似た感覚が身体を貫いたような気もした。

「その……やっぱり、驚きましたか？」

「あ……え……？　えぇ！！？　あ、アインハルト……？」

「は、はい……／／／」

ホムラは、眼の前で起こっていることが信じられなかった。というか、今眼前にある女性が、アインハルトなのかと、自分を疑った。

ホムラの目に映った女性の姿は、彼よりも高くなった身長、豊かに膨らんだ胸、ツーサイドアップに纏められた碧銀の髪、凛々しさを感じさせる服装、そして、際どすぎる短さのスカート、素晴らしい絶対領域を構築しているニーソックス。

今さっきまでトレーニングウェアで、そばにいたはずのアインハルトが、綺麗なお姉さん状態、大人な女性に変身していたのだ。

「武装形態といって……その、私の本気というか……その……／／／／／／」

「……」

真っ赤になるアインハルトに対し、ホムラは口をあんぐり開けて、間抜け全開な顔になっている。

まぁ、致し方無いだろう。なぜなら……

「あの……やはり、おかしいでしょうか……？／／／／／／／／」

「綺麗だ……／／／／／／／／」

「え……？」

不安げに、ホムラに尋ねてくるアインハルトだったが、ホムラは嘘偽りのない声でそう返した。

ホムラは、ただ純粋に、アインハルトに見惚れていたのだ。

そう、ホムラにとって、大人モードのアインハルトは……

『めちゃめちゃ、好みの直球ど真ん中ストライクな女の人』だったのだから。

「えっと……綺麗ってその……／／／／／／」

「うん……とっても……綺麗だ……／／／／／／」

「／／／／／／／／／／」

ホムラの目には、最早アインハルトしか映っていなかった。周囲に生えている木や草など、全く眼中になく、ただただ、目の前の綺麗な女性に目を奪われていた。

当然、アインハルトはホムラの生の声に真っ赤になってしまった。

「あ！　その……ごめん……見惚れちゃってて……／／／／／」

「み、見惚れて……いたんですか……？　私に……？／／／／／／」

「う、うん……／／／／／」

我に帰ったホムラだが、アインハルト同様にその顔は真っ赤だ。普段のアインハルトも、十分過ぎるほどに魅力的でドキドキさせられるのだが、大人モードになった彼女は、ホムラにとっての理想の女性そのものだった。

今現在、ホムラの心臓は、うるさいくらいに高鳴り、考えも上手くまとまらないし、気がつけばアインハルトの事を見つめてしまう。

「……あ、ちょっと待って？」

「？？？　な、なんでしょう？」

「組み手……その格好でするんだよね？」

と、そんな混乱しまくったホムラの頭の片隅に残っていた冷静な部分が、一つの警笛を鳴らした。

これから行う組み手、そしてアインハルトの姿。この二つを重ねたとき、一つの問題が浮き上がってくるのだ。

「はい、そのつもりですが……？」

「えっと……その……アインハルト……凄く言い難いんだけど……」

「はぁ……？」

ホムラの視線は、アインハルトの……短すぎるスカートに行く。

そう、組み手をするとなれば、体を思い切り動かすことになる。当然、足技も使うことになるだろう。

となれば、そう……見えてしまうのだ、イロイロと。

「その……スカートが……ね？　短すぎるから……組み手の時、目のやり場に困るって言うか……見えちゃったりしたら、アインハルトに悪いし……」

「……あ……／／／／／／／」

どうやら、アインハルトも今の今まで、そのことに気が行っていなかったようだ。ホムラに指摘され、一瞬で真っ赤になってしまったところを見ると、彼の言いたいことをすぐに理解してくれたらしい。

そりゃ、チラリズムは男のロマンであり、永遠のテーマでもある。

しかし、ホムラの紳士道的にはそういうのは……そう、けしからんのだ。だからこそ、始める前に、恥ずかしながらもアインハルトに忠告したのだ。

「うぅ～～～～！！／／／／／／」

「だ、だから、組み手するなら……いつものアインハルトの方がいいんじゃないのかなぁ～……なんて思うんだけど……」

真っ赤になって、自分のスカートに目をやり、急にモジモジし始めるアインハルト。そんな仕草をされては、こちらまで照れてしまうし、その姿に萌え殺されそうになってしまう。

さすがはアインハルト、この攻撃で軽く１０人以上は萌え死んだことだろう。

しかし、ホムラの忠告を受けたアインハルトが、真っ赤になりながらも出した結論は意外なものだった。

「……い、いいです……このままで……／／／／／／」

「Ｗｈａｔ，ｓ？」

思わず、ホムラは英語でそう尋ね返してしまった。
『いい？』・『このままで』？……いやいや、良くないだろう。必死でそう突っ込もうとしたホムラに、アインハルトがさらに続ける。

「組み手は、この姿でやらなければ意味が無いですし……その……ホムラさんになら……／／／／／／　み、見られても……その……／／／」

「み、見られてもって……／／／／／／　いやいや、でもせめてスパッツか何か履くとか……って、そんなのあるわけ無いよね……」

「はい……」

退路を絶たれてしまったホムラ&アインハルト。いや、別に何かから逃げているわけではないのだが、完全に互いに追い込まれてしまった形になっている。

ホムラとしては、いくらアインハルトが気にしないと言ってくれたとしても、やはりチラッと見えてしまうのは悪い気がしてしまう。それに、今のアインハルトの姿は、ただでさえホムラにとって魅力的過ぎるのだ。そんな状態で見てしまえば、邪な感情が生まれてしまいかねない。

しかし、アインハルトのトレーニングに付き合うと言った以上、途中で投げ出すなど以ての外だ。

ホムラは、しばらく悶々としながら頭を悩ませ、一つの結論を出した。

「分かった。じゃあ、組み手はそのままでやろう」

「は、はい……／／／／」

「そ、その代わり……僕の方でも、あんまり見えないように努力するから……／／／／／　アインハルトはいつも通りに訓練してね」

「わ、分かりました！」

ホムラは、出来るだけアインハルトの短いスカートを意識しないように、加えて彼女の上半身や表情から、彼女の攻撃を読み、組み手の相手としてそれを受け止めることにした。
相手の小さな仕草や、表情の変化、筋肉の動きから相手の動きを予測するという意味では、これはこれでホムラにとっての訓練になる。

という感じで、組み手を開始した二人なのだが……

スパァン！！

「へぶ！！？」

「だ、大丈夫ですか？　ホムラさん……？」

「ら、らいりょーぶ（だ、大丈夫）」

パコーン！！

「あべし！？」

「ホムラさん！？　やはり、無理はしないほうが……」

「の、ノープロブレム……」

バシーン！

「はみゅ！？」

「ほ、ほんとに大丈夫ですか……？」

「だ、大丈夫、問題ない……」

といった風に、ホムラは何発もクリーンヒットを頂く埴めになった。
アインハルトの上半身や表情を注視して、彼女の攻撃を読むという発想までは良かったのだが、彼は大事なことを忘れていた。

上半身を見ようとすれば、大人アインハルトの豊かな胸が揺れるところが視界に入ってしまうし、表情を見ようとすると、彼女の綺麗な顔に見惚れて呆けてしまう。

結果、もう彼女のどこを見ても同じじゃないのかという結論になってしまったのだ。

今のホムラにとって、大人モードのアインハルトは、その全てが戦略ミサイル級の攻撃力と破壊力を秘めた兵器なのだ。

結局、その日の組み手はあまり満足のいくものにはならなかったことは、言うまでもないことだろう。
そして、この事を活かして、二人は一つ賢くなった。

「今度は、スパッツか何かを用意します……」

「うん、お願い……」

スパッツという名の、絶対防御。歴史に脈々と受け継がれている、『パンツじゃないから恥ずかしくないもん！』精神に則り、今度のトレーニングではスパッツに類するモノを用意しようということになった。

ちなみに、ホムラは見事にチラリズムの誘惑に打ち勝った。アインハルトの拳や足技を数発食らう羽目になったが、彼は自らの紳士道、『男』を貫き通したのだった。

Ｍｅｍｏｒｙ；１０　二人だけのヒミツ特訓（非エロ）（後書き）

Ｆ２０Ｃ「というわけで、ホムラの好みのど真ん中ストライクが大人モードのアインハルトだと言うことが判明いたしました」

アインハルト「／／／／／／」

ホムラ「／／／／／／」

閣下「てか、ホムラの得意技が『縮地』って……お前どんだけるろ剣好きなんだよ……」

Ｆ２０Ｃ「い、いいじゃん別に！！　瞬天殺ＶＳ天翔龍閃とか、超燃えるじゃん！！」

閣下「まぁ、別にいいけどさ……。あ、フェイトから呼び出しかかったから。ノシ」

Ｆ２０Ｃ「何しに来たんだあいつは……？　まぁいいや。でもって、必死にアインハルトの短いスカートから意識を逸らそうとして、アインハルトの攻撃をもろに食らっていたホムラ……紳士ですなぁ」

ホムラ「だ、だってさ……やっぱり、その……見えちゃうのは…ダメかなって」

アインハルト「あ、ありがとうございます／／／　今度からは気をつけますから」

ホムラ「う、うん」

F２０C「大丈夫だって、その内ベッドでいろんな色の下着を……うわ何をするやm……」

閣下「あれ？作者は？」

フェイト「ついさっき、お空に向かって飛んでいったの見かけたけど……」

閣下「またなんかやらかしたな……」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；１１　再会&再試合&再ヤキモチ

アインハルト「再ヤキモチ……？」

閣下「またアインハルトがヤキモチするフラグキタ――――（。∀。）――――！！」

アインハルト「えぇ？！　そ、そんなフラグが……？」

Ｍｅｍｏｒｙ，１１　再会&再試合&再ヤキモチ（前書き）

バイト中、気が付いたら指を何かで切っていたらしく、手が血溜まり☆スケッチ状態になっていた、Ｆ２０Ｃでございます。

地味に痛てぇ……

今回は、ヴィヴィオ対アインハルト戦の一歩手前までを描いております。アインハルトの心的描写に、ホムラの存在を組み合わせると、彼女の持っているであろう女の子らしい部分を引き出せている……

と、信じて書いてみましたｗ

ではでは、本編をお楽しみ下さいませ～～

Ｍｅｍｏｒｙ，１１　再会&再試合&再ヤキモチ

ホムラとアインハルトが、合同訓練を行った日曜日から二日経った火曜。
二人はいつも通り学園にて授業を受け、放課後を迎えていた。月曜日は、ホムラが武装隊での訓練だったので、午後から席を開けていたのだが、アインハルトの一喝が効いているのか陰口を叩く者は一人たりともいなかった。

その逆で、以前のフィナ親子救出劇が意外なほど広まってきていたらしく、主に女生徒や男子の一部の者達からは好意的な印象を持たれるにまでなってきていた。
世の中、変われば変わるものだ。

まぁ、都合がいいと毒吐けばそれまでなのだが、いちいち以前の事を掘り返すほどホムラは子供ではなかったし、この状況はそう不味いものでもないのでそのまま受け入れることにした。

だがしかし、ホムラにとっての友達は、やはりお隣の席に座っているアインハルトだった。

「ホムラさん、これからお時間ありますか？」

「うん。特に予定ないけど……？」

そんな彼女から、放課後の予定を聞かれ、ホムラはすぐにフリーだと答えた。訓練も今日はないため、家に帰るくらいしかやることはなかった。

「あの……この前お話ししましたよね？　私が探していたかもしれない対戦相手と、もう一度試合をすると」

「あぁ～、そういえば……。もしかして、その試合が今日？」

「（コク）」

ホムラの問いに、アインハルトは小さく頷く。
ヴィヴィオとのスパーリングから、ちょうど一週間。今日は、アインハルトが彼女と再び試合を行う日となっていた。

「そ、それで……／／／／／　少し心細いので……その……／／／／／一緒に来てはもらえないでしょうか……？」

過程はどうあれ、先週はヴィヴィオに対して、あまり褒められたことはしていない。自分の事で一杯いっぱいで、格闘技者としてのマナーを忘れていたのだ。
恐らく、ヴィヴィオは気にしないと言ってくれるだろうが、なんとなく彼女とその友人や師匠達のグループに対面するのに心細さがあった。

毅然と振舞うことはできても、やはり女の子だ。そういった繊細さ

は言わずもがな、持ち合わせている。

「うん、いいよ。僕がいるからって、何か変わるかは分かんないけど」

「そんなことありません……！　とても……心強いです……」

ホムラの呟きに、アインハルトはハッキリとそう言ってきた。心強い、と。

そこまで言われたのだ、今日はとことん彼女に付き合わなければならないだろう。ホムラ・スメラギ、紳士として困っている女友達を放っておくことなど以ての外だ。

「……そう。　それじゃあ、早速行こうか」

「はい」

そうと決まれば話早い。二人は素早く帰りの準備を済ませると、一緒に教室を後にした。最近、放課後は二人で過ごすことが多いので、少し慣れてきた気もするが、やはり両者とも少しこそばゆい感じを覚えてしまう。

だが、悪い気はしないし、その感覚が心地良いとも思っている二人だった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「あ……」

「ん？　どうかした？」

校門を出てすぐ、アインハルトが小さく声を上げた。知り合いが迎えに来てくれという話なので、その待ち合わせの場所まで向かっていた二人なのだが、その相手はすぐに見つかった。

学校を出て少し歩いたところに、車が一台止められており、オレンジ色の髪をした女性と、青い髪をショートカットにした女性が仲良さ気に会話をしている。

「あの人達が？」

「はい。行きましょうか、お待たせしてもいけませんし」

「うん」

二人はそう言い交わすと、少し駆け足気味に車の前で談笑中の女性二人に近づいていく。

「あ、来た来た♪」

「あら？　誰かと一緒みたいね……」

向こうも向こうで、こちらの存在に気がついたようで、青い髪の女性は表情を明るくし、オレンジ色の髪の女性はホムラの姿に首を傾げながらも、アインハルトを迎えてくれた。

「ティアナさん、スバルさん。お待たせしてしまい、申し訳有りません」

「いいわよ。ていうか、約束の時間5分前だし」

「5分前行動だね、偉い偉い♪」

「あんたも少しは見習いなさい、スバル」

「う……」

アインハルトが、オレンジ色の髪の女性、ティアナと青い髪の女性、スバルに挨拶をすると、二人は親しげな雰囲気が伝わってくるやり取りを見せながらそう言ってくる。

恐らく長年の付き合いがある友人同士なのだろうと、初対面のホムラでさえ分かってしまう二人だが、見ていて気持ちのいい関係ではある。

「それで？　そっちの子は？」

「もしかして、彼ｓ……」

「いえ、僕はアインハルトの友達兼付き添いで……ホムラ・スメラギと言います」

なんとなく、このやり取りにもかなり慣れてきたようで、ホムラはスバルが『彼氏』という単語を言い切る前に、自己紹介をした。
誤解を招く前に、こちらから一手を打つ。ここ最近でまた一つ賢くなったホムラである。

「む……」

「な、なんでアインハルトは睨むのさ……？」

「別に！（プイッ）」

「「あらあら、まぁまぁ……♪」」

がしかし、その対応がアインハルト的にはお気に召さなかったようで、少し機嫌を損ねてしまった。
最適な対応だと思ったのだが、ホムラには乙女心というものが分かっていなかった。

「ん？　あれ……スメラギってどこかで聞いたような……」

「あ、私も……。ホムラって誰かと話してたときに出てきたような……」

ホムラ&アインハルト「「？？？？」」

と、スバルとティアナは、ホムラの名を聞くと、その名に聞き覚えがあったらしく、少し頭を捻る。
ホムラとしては、ティアナとスバルとは今日が初対面なはずなので、彼のことを知っているはずがないのだが……

「あ！　思い出した！　なのはさんが言ってた子だ！」

「なのはさん？」

「な、なのはさんって……もしかして、高町教導官の事ですか？」

「うん、そうそう♪　この前お話ししてる時に、訓練生の中に久しぶりに凄い子が居たって聞いたから。へぇ～、そっかそっかぁ♪　君がそうなのかぁ～」

スバルが思い出したのは、航空武装隊の教導官であり、スバル達の師でもある高町なのはとの会話でのことだった。
アインハルトは、『なのはさん』なる人物のことは知らないので首を傾げていたが、ホムラにとっては雲の上の存在であり、憧れや畏怖を抱くべき存在でもあるため、スバルの言っていることに戸惑いを隠せなかった。

『あの』高町なのはが、自分の事を評価しているなどとは、欠片も思っていなかったのだ。

「あ、え……？　その……どうして、高町教導官と……？」

「あ、自己紹介を返すのまだだったね？　私はスバル・ナカジマ、管理局の湾岸警備隊特別救助隊で防災士長をしてます！」

「それで、私はティアナ・ランスター。本局の執務官をしてるの。私とスバルは、なのはさんの元教え子で、今も連絡取ったりしてるから」

「え……、えぇ！！？」

タネ明かし、というわけでもないが、スバルとティアナは自己紹介も兼ねて自らの仕事と、なのはとの関係性についてホムラに説明した。

が、ティアナ達の自己紹介を聞いたホムラは、一瞬で青い顔になってしまい、驚きを隠す余裕さえない様子で……

「し、失礼しました！　知らぬこととはいえ、上官の方に対して、気安い口を……！！」

ホムラは、若干パニックになりながらも、敬礼した後に頭をペコペコ下げる。

まぁ、ホムラのような訓練生にとっては、目標としている執務官や、役職に就いている人間全てが上官である。

こんなところで礼を欠いた態度を取ってしまえば、後々のスケジュールに響いてしまう。

彼にとっては、今回のティアナ達との邂逅は、完全なイレギュラー。ホムラは、どうにかしてこの場をやり過ごす方法を、必死で頭を回転させて考えるが、何一つとして良い考えなど浮かんでこない。

だが、そんなホムラの様子を見て、ティアナとスバルは顔を見合わせてクスリと笑った。

「いいわよ、そんなに畏まらなくたって。今はプライベートなんだし、そんな仕事上の関係を一々引っ張ってこないってば」

「し、しかし……！」

「（あはは……なんだか昔の私たちを見てるみたい……）」

ティアナが優しくそう言うが、ふたつ返事で『はいそうですか』と言えるほど、ホムラの肝は座っていない。

そんな初々しいホムラの姿を見て、スバルはなのはと再会し、六課で活動を開始し始めた頃の自分たちのことを思い出してしまった。

「あ、あの……！　ホムラさんは、執務官志望なんです。ですから、その……」

「あ～……なるほど、変なところで転ぶわけにはいかないって感じなのね？」

「い、いえ……そういう訳では……」

アインハルトが助け舟を出してくれたおかげで、ティアナはなるほどといった様子で頷いてくれ、ホムラも少し落ち着きを取り戻した様子だ。

だが、緊張は抜けきっている様子はない。

「ま、私も同じような経験あるし、気持ちは痛いほど分かるんだけどね。……そうね……今日私たちが会ったのは、アインハルトの付き添いに来たお友達、それ以上でも以下でもない、ってことでどうかしら？」

「あ……」

「うんうん。私たちも、今日はただのギャラリーだしね♪　一緒にアインハルト達の練習試合を観戦しに来たってことで……ね？」

ティアナとスバルにそう言われ、ホムラは少し目を丸くしたものの、彼女たちが自分に気を使ってくれているのだと理解し、自分が危惧しているような事にはならないと感じた。

少なくとも、目の前の二人は、そんな詰らないことを一々気にするような人ではないと、そう思えた。

「……ありがとうございます。そ、それでは……観戦……ご一

緒させていただきます！」

「はい、どうぞ。……そうそう、肩の力抜いて行きましょう？」

「じゃあ、早速向かおっか？　アインハルトも車乗って？」

「あ、はい。よろしくお願いします」

良い雰囲気の中で、お互いに上手く折り合いがついた三人は、運転席にティアナ、ナビシートにスバル、リアシートにホムラとアインハルトという形で車に乗り込んだ。

ホムラは思った。目指すのならば、やはり彼女たちのような局員にならなければと。今まで執務官という一つの目標、謂わば役職に対するイメージと希望しか持っていなかったが、こうして実際に局員として活躍している人と話して、触れ合ってみることで、今日のホムラは大きなものを得ることが出来た。

ただ単に執務官になるのではなく、どんな執務官になって、どういったスタンスで仕事をしていくのかということを、今日改めて認識出来た。

そうして一行は、ヴィヴィオ達が待つ練習試合のステージに向かった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

アラル港湾埠頭　１３：２０
廃棄倉庫区画　試合開始　１０分前

ヴィヴィオと、彼女に付き添って集まったリオ、コロナ、クゥ、ノーヴェ。そしてシスターズ達。

どこか緊張感のある雰囲気の中、一同はティアナとスバルが迎えに行った、アインハルトの到着を待っていた。
ヴィヴィオの表情は真剣そのもので、気迫溢れるものが感じられる。

あのスパーリングから一週間。彼女はいつにもまして自身のストライクアーツの訓練に励んだ。今日は、ある意味ではその結果を見るということでもあり、何を置いてもアインハルトへの謝罪の気持ちと、もう一度自分のことを見て欲しいという気持ちが大きかった。

そして……

「お待たせしました」

倉庫が立ち並ぶこの区画に、よく通る透き通った声が響いた。

「アインハルト・ストラトス、参りました」

ヴィヴィオ達が、その声のする方に視線をやると、本日のゲスト兼主役でもあるアインハルト、そしてティアナとスバルがおり、加えてヴィヴィオ達にとって見覚えのある少年が一緒にいた。

「来ていただいて、ありがとうございます。アインハルトさん！」

まずは、アインハルトに今日足を運んでくれたことに対して、頭をさげるヴィヴィオ。だが、アインハルトの表情はどこか浮かないもので、やはりこの試合に意味を見出せないようだった。
この前の非礼の侘びの代わりにと、彼女との再試合を受けたのだが、やはりこの試合にお詫び以上の何かを感じることは出来ない。

「えっと、それで……あなたは確か……」

「あ……本好きの女の子と……その友達の……」

ヴィヴィオが、アインハルトの付き添いで此処にやって来たホムラに気が付くと、ホムラも一週間前の出来事、大量の本を持ったヴィヴィオを助けたときのことを思い出したようで、少し驚いた顔をした。

「あー！！　凄いお兄ちゃんだ！！」

「へ？」

加えて、クゥもこちらにやって来る。その様子はいつも通りの天真爛漫なそれであり、ホムラに対しても物怖じせずに近づいてくる。

「あ、あの……ヴィヴィオさんたちは、ホムラさんのことを知って……？」

「はい。少し前に、本と一緒に転びそうになったところを助けてもらっちゃって……」

「すごかったよね、あの時。お兄ちゃんが瞬間移動したみたいに消えちゃって……気が付いたらヴィヴィオ姉ちゃん助けちゃってたし……」

アインハルトの問に、ヴィヴィオは少し恥ずかしそうにしながらも答えてくれた。加えて、クゥがその時のことを思い出しながら言った話を聞く限り、ホムラは縮地を使って彼女を助けたのだろうということも理解できた。

「あ、あの！　改めて……その……／／／／／　あの時は、本当にありがとうございました」

「う、ううん。気にしないでよ。好きでやったことだし」

何故か頬を染めながらお礼をしてくるヴィヴィオに、こんな偶然が

あるものなのかと驚いていたホムラは、たじろぎながらもなんとか対応した。
ヴィヴィオは、アインハルトとは違うタイプだが、間違いなく可愛い女の子に部類されて然るべきレベルだ。
そんな女の子に、間近にまで寄られてしまえば、ホムラでなくても少し照れてしまう。

「何が起こったのかは全然分からなかったんですけど……。その、とってもかっこ良かったです……／／／／」

「か、カッコイイ!?　いやそんな……、僕はただ無我夢中で…（ギュゥゥゥ！）足が猛烈に痛いんですけどアインハルトォォォ!!　なんで踏ん付けるのさ!?」

「知りません!　（なんですか……ヴィヴィオさんが可愛いからってデレデレと……全くホムラさんは……）」

ヴィヴィオとホムラがどこかいい感じなところを見て、言いようのない苛立ちを感じたアインハルト。気が付けば、ヴィヴィオと焦りながら話しているホムラの足を踏ん付けていた。
その二人のやり取りを見て、大人組から本日二回目となる『あらあら、まぁまぁ』な視線を戴いてしまった。

「えと……改めまして、高町ヴィヴィオです!　よろしくお願いします」

「ホムラ・スメラギです。えっと……こっちこそ宜しく……」

恒例となりつつある、アインハルトのヤキモチもそこそこに、お互いに自己紹介をするヴィヴィオとホムラ。
それに、クゥやコロナ、リオ達も続いて、ひと通りの顔合わせが終わった。

それに伴って、ホムラはアインハルトの友達兼付き添いでここまで付いてきたということも説明した。

そして、ホムラの自己紹介もそこそこに、本日のメインイベントであるヴィヴィオとアインハルトの練習試合に移ることになった。

「ここな、救助隊の訓練でも使わせてもらってる場所なんだ。廃倉庫だし、許可も取ってあるから、安心して全力出していいぞ」

「うん、最初から全力で行きます」

ノーヴェが、この廃倉庫区画についての説明を済ませると、ヴィヴィオが力の篭った強い視線を以て答える。
その瞬間、ホムラは彼女から何か強い意志を感じ取った。

「（へぇ……こんな小さな女の子なのに……、アインハルトに負けないくらい気持ちが強い……。それに……なんだろ……？　アイン

ハルトに……何かを伝えたいのかな……？）」

なぜ自分がそんなことを思ったのか、ホムラ自身も分からない。ただ、このヴィヴィオという女の子の気持ちが伝わってきたというのが一番しっくり来るかもしれない。

そんなホムラの戸惑いが、ヴィヴィオに伝わるはずもなく、彼女は相棒のクリスを手にして、ヴィヴィオの全力である、『大人モード』になる。

「セイクリッド・ハート。セットアップ！」

ヴィヴィオの髪型がサイドポニーとなり、体つきも普段のそれとは比較出来ないほどに大人らしくなる。それに伴って、服装が黒を基調としたものに変化した。

これが、ヴィヴィオの全力、『大人モード』だ。

「ねぇ、なんでアインハルトは僕の目を塞いでるの？」

「ホムラさんにはまだ早いんです」

「コロナお姉ちゃん？　この手はなんなのさ？」

「く、クゥちゃんにもまだ早いの！！」

ヴィヴィオの変身シーン（サービスシーン）に際して、乙女達は、色々と大変だったようだ。

「って、ヴィヴィオって変身できるのか……（もしかして、最近は変身するのがトレンドなのかな……？）」

「アレいいよね～……羨ましいなぁ……ねぇねぇ、エウロス？　俺も変身とか出来ないの？」

目隠しを解除されたホムラとクゥは、ヴィヴィオの変身にそれぞれ感想を述べた。クゥは、ヴィヴィオの変身が羨ましいらしく、相棒のエウロスにそんなことを尋ねてみる。

『ご主人はそのままでも十分お強いかと存じますが……』

「えぇ～～！！　でも、変身カッコイイじゃん！　ほら、朝八時からやってる感じで……」

『ふむ、それにはベルトが必要になりますし……。それに、仮面ラ〇ダーなんとかかんとか～という感じで、名前も考えなければいけませんね。変身の方法も、昨今は多岐に渡っています。携帯だったり、メダルだったりと……その辺りとの折り合いも……』

このデバイス、かなりノリノリである。まぁ、主人たるクゥの教育係でもあるエウロスのことだ、こういうクゥの気まぐれの処理もお手のものなので、ティアナも敢えて口出しはしない。

「クゥちゃんが大人っぽくなったら……あわわ……カッコ良すぎてもう……／／／／／／　うぅ～～～／／／／テイクアウトしたい……／／／／」

「ちょっと待って!?　コロナは一体何を想像したの!!?」

女の子は女の子で、コロナが何かを妄想したようで、顔を真っ赤にして頭から湯気を出していた。こちらの処理は、リオに任せることにしよう。

ともあれ、ヴィヴィオは宣言通りに最初から全力で試合に望むことを、大人モードへの変身によってアインハルトに示した。
彼女もまた、ヴィヴィオの意図を理解してはいたのだが、やはりその表情は曇ったままだった。

しかし、そんな彼女にホムラが……

「アインハルト、この試合。多分、ものすごく重要なものになると思う」

「え?」

「上手く言えないんだけど……あの子から、強い意志が伝わって来るっていうか……アインハルトに、何かを伝えたいみたい。

……だから、さ？　アインハルトも、本気で……」

「ホムラさん……」

ホムラ自身も、こんなことをアインハルトに言うべきか分からなかった。だが、ここで彼女が全力を出さなければ、アインハルトにとっては勿体無いことになるという確信だけがあったのだ。
だからこそ、ホムラはアインハルトにこの試合で力を出し切るように勧めた。自分の感じた何かも一緒に。

「……分かりました。ホムラさんは、そこで見ていてください」

「うん、頑張って」

「……あ、その前に……その……／／／／　私も武装形態になるので……眼を閉じていてくださると……」

「りょ、了解！／／／／／」

アインハルトは、ホムラの言語を信じてみることにした。別に、この試合に意味を見出すことが出来たわけではないが、彼の言う事にはどこか不思議な説得力と、安心感を覚えたから。

アインハルトは、自身も本気でヴィヴィオに対峙するため、ホムラの眼を閉じてもらい、武装形態になる。

「『武装形態』」

アインハルトの身体が、徐々に変化する。体つきや髪型、服装などが一新される。

「アインハルトさんも大人モード！？」

ヴィヴィオに続いて、大人の姿に変身したアインハルトに、リオ達は若干興奮気味だ。双方、大人モードということで、間違いなく本気同士の試合になるだろう。

「……やっぱり、綺麗だ……／／／／／」

「そ、それはもういいですから……／／／（う、嬉しいですけど……）」

「……なんかさ、二人の世界に入ってない？」

「うん、それは俺も思った」

「熱々だね～♪」

またしても、大人モードのアインハルトの姿に見惚れるホムラ。両者は、顔を赤くしながら、少しの間こそばゆい感じの空気を漂わせ

る。
そんな二人の姿に、クゥ&コロナとリオが、苦笑や面白いものを見る目を交え、呆れながらもそう言った。

「では……行ってきます」

「うん、行ってらっしゃい」

アインハルトは、ホムラにそう告げてヴィヴィオと対峙する。なぜだか、今日はやけに力が漲っている。あまり、気が進まない試合なのに、どうしようもない位に心が充実していた。

「今回も、魔法はなしの格闘オンリー。五分間一本勝負。……それじゃあ試合……」

ノーヴェが試合開始の合図とルールを説明し、右手を上げる。
その手が振り下ろされた時点で、アインハルトとヴィヴィオの試合が始まる。

戸惑いや、躊躇いがないといえば嘘になる。アインハルトにとっては、やはりヴィヴィオに何か期待することはない。

しかし、ホムラが戦ってみろと、彼女の伝えたいことに耳を貸してみろというのなら……それを信じてみようと、そう思ったのだ。

「開始！！！」

そして、ヴィヴィオ対アインハルト。
二人の再試合の火蓋が、切って落とされた。

Ｍｅｍｏｒｙ，１１　再会＆再試合＆再ヤキモチ（後書き）

ホムラ「ほんと、大人モードのアインハルトって……神々しい綺麗さだよね……」

閣下「ハイキマシタヨーーー！！惚気話キマシタヨーーー！！！」

Ｆ２０Ｃ「うぜぇｗｗｗ　なんだコイツのテンションｗｗｗ」

閣下「俺の出番が……ない！！！！　ていうか、１１話まで書いて、まだコミックス一巻の内容も終われないって……」

Ｆ２０Ｃ「それに関してはすまんかった。つか、それを言ったら、二巻のオフトレ編とか、一巻と二巻の間に挟む話とかあるから、話の進むスピードってかなりゆっくりなんだよね」

ホムラ「でも、もしコミックスに追い付いちゃったら……」

Ｆ２０Ｃ「その時は、ホムラとアインハルトのえちぃ話を……」

ホムラ「え、えちぃ！！？」

Ｆ２０Ｃ「まぁ、嘘なんですけどね」

ホムラ「ｏｒｚ」

Ｆ２０Ｃ「追いついたら追いついたで、二人の少し未来のお話にシフトするのもありかなと。まだまだ予定ですし、コミックスに追いつくまでがまだまだ長いので、気長に考えていくつもりではありま

すがｗ」

閣下「そこで、俺とフェイトの出番というわけか……ふ、作者よ、こっちの準備はもういつでも万全だぜ？」

Ｆ２０Ｃ「カーッ（゜Д゜≡゜д゜）、ペッ」

閣下「よろしい……ならば戦争だ！！」

Ｆ２０Ｃ「お前は出さずに、フェイトさんだけだしてやんよ！！」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；１２　Ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ　ｏｆ　ａｌｌｏｖｅ　ｔｒｉａｎｇｌｅ

三角関係と言って何を思い出しますか？
私はマクロスですかね。

というわけで、今話で一段落です。まぁ、一章終了というところでしょうか。
次回からは、定期テストを経てオフトレ編に入りやす。

『やつ』の出番も近い……

閣下「ガタッ！」

と思ったが、そんなことはなかったぜ

閣下「（´；ω；`）」

「それじゃあ試合……開始！！」

廃倉庫区画にて、ティアナやコロナ、ホムラ達をギャラリーにアインハルト対ヴィヴィオの一週間越しの練習試合の幕が、ノーヴェの合図で上げられた。

ヴィヴィオは、静かに構えを取るとそのままアインハルトの出方を伺うように静止する。

「（綺麗な構え……油断も甘さもない）」

目の前のヴィヴィオを見て、アインハルトは素直にそう感じた。ヴィヴィオの本気が、彼女にも伝わり、一週間前とは違った印象を受ける。

しかし

「（いい師匠や、仲間に囲まれて……この子はきっと格闘技を楽しんでる）」

アインハルトにとっては、そういった印象や今日のヴィヴィオがいかに本気なのかということは問題ではない。
ただ単純に、これは格闘技に対するスタンス、認識に対する違いだ。

アインハルトは、ヴィヴィオと違って今まで一人でやってきたし、格闘技も楽しむものではなく、自分自身の存在の証明だとストイックに定義してきた。
ヴィヴィオとは、目指すものが似ていても辿り着くべきゴールは全く別のものなのだと、そう思っていた。

「（……私とは……ううん、少し前の私とはきっと何もかもが違うし……。覇王の拳を向けていい相手じゃない）」

心の中の独白ではあったが、アインハルトは最近一緒に居ることが定着化してきているホムラの事を思い出して、少し言い直した。
確かに昔は一人だったが、今は少し……違う気がすると、そう思ったから。

そして、アインハルトもまた、ヴィヴィオ同様に構えを取った。

「（すごい威圧感……。一体どれくらい、どんな風に鍛えてきたんだろう……）」

ヴィヴィオもまた、アインハルトの構えや表情から、彼女の強さや鍛錬の練度に対して尊敬すら感じていた。

「（勝てるなんて思わない。だけど、だからこそ一撃ずつで伝えなきゃ……）」

勝算は、ハッキリ言って無い。この前のスパーリングから一週間でかなり集中して練習は積んだつもりだが、一週間やそこらで差が一気に縮まるほど、この世界は甘くない。

それこそ、アインハルトの背中はヴィヴィオにとっては、まだまだ先にある、追うべきものにも見えてしまう程だ。

しかし、今日最も重視するのは勝敗ではない。ヴィヴィオにとっての一番の目的は、ただアインハルトに伝えたいのだ。

「（『このあいだは、ごめんなさい』と……！）」

ダッ！！

ヴィヴィオとアインハルトは、ほぼ同時に動き出した。

先日のスパーリングでは、ヴィヴィオが先手を打って来たが、今回は逆。ヴィヴィオに肉薄したアインハルトが、この試合の初撃を飾る一撃を繰り出す。

ドゴォッ！！！

一撃目のアインハルトの攻撃を、ヴィヴィオは両手を使ってガード。
アインハルトの攻撃は、鋭さはモチロンのこと、重みもあって両腕が痺れそうになる。

そこに、アインハルトは続けて攻撃を繰り出す。
先週の試合とは真逆に、今回はアインハルトが攻めの姿勢をとっている。

ガッ！

ゴゥ！！

アインハルトの攻撃が顔を掠めるが、続けて放たれた攻撃は左腕でガード。素早い攻撃の連続に、ヴィヴィオは防御に徹しながら機会を伺う。

正攻法でアインハルトに一撃入れようと思っても、まだまだヴィヴィオには荷が重い。ならば、相手の隙を見付け出してそこを突いていくのが定石だろう。

狙うべきは、カウンターだ。

バッ！！

「！」

そして、アインハルトのやや振りの大きくなった拳を、ヴィヴィオは身体を彼女の懐に滑り込ませながら回避、アインハルトのボディは完全にがら空きとなり、攻撃のチャンスとなる。

ヴィヴィオは、そこを見逃すことなく、自身の想いとを乗せて、この試合初めての攻撃に転じた。

「（わたしの全力！　わたしの、格闘技（ストライクアーツ）！！）」

ドゴンッ！！！

「！？」

ヴィヴィオの拳が、アインハルトにヒットする。

アインハルトの身体は、後方に押し込まれるが、なんとか踏み止まる。隙を突かれたとはいえ、かなりの衝撃と重さの篭った一撃だ。

驚いたような表情を浮かべるアインハルトだが、そこにヴィヴィオが間髪入れずに追撃を仕掛けてくる。攻撃と防御の攻勢が、先程のヴィヴィオのカウンター攻撃で均衡状態にシフトした。

ズドォッ！！

「（この子は……）」

ヴィヴィオの追撃をアインハルトは両手でガード。
同時に、彼女の中に一つの疑問が浮かんでくる。ヴィヴィオとの試合には、期待するものは何もなかったはずなのに。

ドッ！！　ガガッ！！

「～～～～ッ！！！」

そこから、アインハルトが再び攻める。ヴィヴィオも負けじと攻撃に転じ、試合は派手な拳の打ち合いに発展していく。

ガコォッ！！

「やった?!」

アインハルトとヴィヴィオの攻撃がクロスし、ヴィヴィオの攻撃が決まったように見えた。それを見て、リオ達は試合の白熱ぶりに興奮覚め止まぬ様子だ。

「（アインハルトが、少し羨ましいな……あぁやって同じ分野で競い合える人がいるっていうのは……）」

ホムラもまた、二人の試合を目の当たりにし、そんなことを考えていた。彼の身近には、剣をメインにした戦闘スタイルの知人はいな

い。
昔であれば、父に教えてもらえていたのだが、それも最早叶わない。
ホムラは知らず知らずの間に、首に下げたシラヌイを握り締めていた。

「はぁぁぁっ！！！」

ガッ！！　ガキッ！！　バキィッ！！

その間も、ヴィヴィオとアインハルトの攻防は熾烈を極めつつあった。互いに攻撃の手を緩めず、徐々にガードの頻度が落ちていき、攻撃のヒット数が双方増加していく。
ちなみに余談になるが、アインハルトの短すぎるスカート問題、今日はスパッツ装備なので、ご安心していただきたい。黒っぽい布が見えるたびに、ホムラが鼻血ぶーになりそうだが。

さてさて、ヴィヴィオもアインハルトも、お互いに文字通り全力。
腕のプロテクターなどは、既にボロボロで剥がれ落ち始めてしまっている。

「（この子はどうして……）」

「～～～～ッ！！」

全力の打ち合いの中、アインハルトの疑問は戸惑いとなって膨らんでいく。分からなかった、どうしてヴィヴィオがこんなにも……

「（こんなに一生懸命に……？　師匠が組んだ試合だから？友達が……見てるから？）」

一週間前の試合では、アインハルトのヴィヴィオへの評価は『格闘技を楽しんでいる少女』というものだった。
そんな彼女が、なぜここまで必死に、一生懸命になるのかが分からなかった。

ただ楽しむための格闘技ならば、ここまで必死になる必要はないのにと。

「（……友達が見てくれているのは……私も同じか……。でも……私もホムラさんも、ヴィヴィオさんとは目指しているものが違う……。分からない……どうしてヴィヴィオさんは……こんなにも……）」

人それぞれ、力に対して求めるものや、目指すものは千差万別だ。
ホムラにしても、アインハルトにしても、ヴィヴィオにしても。
だが、少なくとも、ヴィヴィオは使命だったり、存在証明だったり、必ずやり遂げなければならない目的の為に、格闘技をしているわけではない。

少なくとも、アインハルトの目にはヴィヴィオの格闘技に対するス

タンスはそう映っていた。だからこそ、こんなにも彼女が一生懸命になる理由が分からない。

ヴィヴィオのことは、ハッキリ言って分からないことだらけだ。しかし、アインハルトは気が付かないうちに、ヴィヴィオとの試合にどこか胸が熱くなる感覚を覚え始めていた。

対するヴィヴィオの中にある気持ちは、とてもシンプルだった。

「（大好きで、大切で……守りたい人がいる）」

思い浮かぶのは、いつも自分に幸せをくれる、大好きな母達。

「（小さな私に、強さと勇気を教えてくれた……）」

強く、勇気に溢れたその人達は、ヴィヴィオに大事なことを、たくさん教え、導いてくれた。

「（世界中の誰よりも幸せにしてくれた……、強くなるって……約束した）」

「あぁぁぁぁぁっ！！！！」

使命も、存在証明も、やり遂げなければならない目的も、ヴィヴィオの格闘技（ストライクアーツ）にはない。
だが、彼女の格闘技（ストライクアーツ）にも、強い思いが乗っている。譲れないものがある。守りたい人がいる。
その気持ちの大きさならば、アインハルト達にも負けるつもりはない。

「（強くなるんだ……どこまでだって！！！！）」

ズドッ！！！

渾身の一撃。
ヴィヴィオの強い思いが乗せられた一撃が、アインハルトを襲う。

入った

そう思える一撃だった。

しかし……

ズァ……

「！！」

アインハルトは、その攻撃をガードし、受け止めていた。

加えて、アインハルトは先程の攻撃でがら空きになったヴィヴィオの隙を逃すことなく、足先からの力を練り上げ、拳足に移動させていく。

ズ……ギャギャギャ……！！！

「（あれは……）」

アインハルトの放つ技を見るのは初めてのホムラだったが、彼女が何かの技を繰り出すことだけは分かった。
この土壇場で繰り出すということは、それなりの威力を持った技だということも。

そして……

――――覇王断空拳

ドン！！！　（ピッ！）

アインハルトの覇王流（カイザーアーツ）の技、断空拳がヴィヴィオに炸裂した。

「（やばっ！！）」

断空拳をモロに食らったヴィヴィオは、当然のことながら吹っ飛んでしまう。それを見たホムラは、後先考えずに、縮地で地面を蹴っ

ていた。

空中を舞うヴィヴィオ、その着地点にホムラは一瞬で回りこんで……

ガシィ！！

「ほ、ホムラくん？？！　って、いつの間に……？」

「まただ……また瞬間移動したみたいに……」

吹っ飛ばされたヴィヴィオを、いきなり現れたホムラがミラクルキャッチしてしまい、ティアナを始め、クゥが驚いたような声を上げた。

まぁ、タネを知らなければ、本当に瞬間移動したようにしか見えないだろう。

しかし、後先考えないで飛び出してヴィヴィオをキャッチ出来たのはいいのだが、ホムラは大事なことを忘れていた。

今のヴィヴィオは大人モード、それに伴い、彼女自身の質量もそれなりに増えているわけで。言ってしまえば、キャッチした際の衝撃と重さは、ホムラの予想よりもデカかったのだ。

二人の体は、勢いを保ったまま、エネルギーのベクトルに従って押しこまれていく。

「し、シラヌイ！！」

『ハイハイ、分かっておりますよ』

このままでは二人揃って背後の大型木箱にぶつかってしまうと思ったホムラは、瞬間的にシラヌイを呼び出して、抜身の状態の剣を手に出現させる。
そして、黒い炎に変換した魔力を纏わせたシラヌイを……

ガキュ！！！……ギャギャギャ……！！！！！！

「こんにゃろうぅぅぅ……！！！」

地面に突き刺して、制動力を生み、ブレーキ替わりにした。勢いはかなり強かったが、それによって二人の吹き飛んだ勢いは一気に落ち、ホムラとヴィヴィオはゆっくりと停止することが出来たのだった。
見れば、炎で焼き溶かされたのか、コンクリートの切り口が赤く溶けていた。

「ほ……」

「きゅう～……」

ホッとするホムラと、彼に抱き抱えられた状態で大人モードが解除され、いつもの姿に戻って気絶しているヴィヴィオ。

見ているこっちがハラハラとさせられてしまったが、二人はなんとか無事だった。

「一本！　そこまで！」

それを見たノーヴェが、試合の終了を宣言し、ヴィヴィオとアインハルトの再戦がこうして幕を閉じたのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「キュゥ・・・」

「ヴィヴィオ、大丈夫か……？」

試合が終わり、ホムラによってミラクルキャッチされたヴィヴィオは、気を失ったままディードの膝枕の上で様子を見てもらっていた。ノーヴェが心配そうに覗き込むが、ヴィヴィオは目を回しているようで返事はない。

「怪我はないようです……大丈夫」

しかし、ディードがそう言うとノーヴェを含めた全員がホッとした

表情になった。恐らく、軽い脳震盪でも起こしているのだろう。

「ホムラさん、ありがとうございました。ヴィヴィオを助けてもらって……」

「えっと……別に大したことじゃ……。それに冷静になって考えてみれば、防護（フィールド）もあったし、アインハルトもそれを破らないように気をつけてたみたいだし。……僕が出しゃばる意味無かったっていうか……なんて言うか……すみません、余計なことしました」

リオがホムラにそうお礼を言ってくれたのだが、ホムラはホムラで先程の事を冷静に考えなおしてみると、自分が手を出す必要がなかったかもしれないという結論に行き着き、どことなく気恥ずかしい様子を見せていた。
自分だけが、必死になっていたみたいで、少し恥ずかしいのだろう。

「なんであんたが謝るのよ。そりゃ、安全性は確保されれたけど、誰かにキャッチしてもらったほうが、怪我のリスクがより下がるのは当たり前じゃない。全然余計なんかじゃないわ」

「あ、うぅ……そう……ですよね……すみません」

「ま～た、謝って……変なところで小心者なんだから……」

やることは大胆なくせに、こういう場面では驚くほど低姿勢なホムラに、ティアナは苦笑しつつもそう言ってやる。

謝り癖は、恐らく彼の処世術が固定化してしまったものなのだろうが、少しもったいなくも思える。

「アインハルトさんも、ありがとうございました！」

「ありがとうッス！」

「あぁ、いえ……」

ヴィヴィオのことを気遣って技を出してくれたアインハルトにも、ウェンディやコロナ達が感謝の意を示す。
アインハルトも、こういったことには不慣れなようで曖昧な返事をすることしか出来なかった。

そんな彼女に……

「……！？」

突然、アインハルトは身体にフラつきを覚えて、バランスを崩してしまう。先程の試合の中でのダメージなのか、彼女の身体は傾いていってしまう。
しかし、彼女が地面に倒れ込むというような事にはならない。

ポスン……

「大丈夫？」

「あ……／／／／／」

そう、ホムラが倒れそうになったアインハルトの身体を受け止めていたのだ。今の二人の状況を、説明すると、アインハルトがホムラに抱きついて、ホムラも彼女のことを受け入れている形で抱き合っているように見える。

「あ……あの……／／／／」

「な、なんで赤くなるの……？」

自分の現在の状況を理解したのか、アインハルトはポッと頬を赤く染める。

恥ずかしいのだが、どういうわけかもう少しこうしていたいとか、口に出してしまうと恥ずかしすぎて失神してしまいそうな気持ちになっていた。

「ラストに一発カウンターがカスってたろ。時間差で効いてきたか」

「うぅ……／／／／」

どうやら、最後の最後でヴィヴィオはアインハルトにカウンターを繰り出していたらしい。クリーンヒットとはならなかったが、それ

でも時間を開けてジワジワと効いてきたということだろう。

「す、すみません……ホムラさん……／／／／」

「いや、僕は別に……アインハルトの方が心配だし……落ち着くまでは……」

「は、はい……。ありがとうございます……／／／／」

「ま～た二人の世界だよ……」

「なんだろう、どこかの変態とフェイトさんを思い出すんだけど、そこまでイラッと来ないこの清潔感は……」

そんな二人の様子に、クゥとティアナ親子はヤレヤレといった様子で苦笑い。コロナ達も同様で、固有結界を作り出してしまっている二人に生暖かい視線を送っていた。

閑話休題

ヴィヴィオが気を失っている間、アインハルトもまた、ホムラに身体を預けたままだった。恥ずかしさもある様子だが、同時にどこか嬉しそうな様子も見て取れ、微笑ましくもありスバル達的には目の保養（可愛い物を見る意味で）となっていた。

「断空拳はさっきのが本式か？」

「足先から練り上げた力を拳足から撃ち出す技法そのものが『断空』です。私はまだ、拳での直打と打ち下ろしでしか撃てませんが……」

「なるほどな」

と、そんな中でノーヴェがアインハルトの真面目な話を振ってみると、アインハルトも頬を染めながらもしっかりと答えてくれた。恐らく、ノーヴェなりに周囲からの生暖かい視線に晒されている二人に気を使ったのだろう。

「――で、ヴィヴィオはどうだった？」

そこに加えて、今日のメインイベントでもあったヴィヴィオとの試合についての感想を尋ねられた。ノーヴェとしても、ヴィヴィオがどれだけ努力してきたかは知っているし、アインハルトとのこともイイ方向に向かって欲しいと考えていた。

この練習試合で、ヴィヴィオのことをもう一度しっかり見てくれればと、そう思ってもいたのだ。

「……彼女には謝らないといけません。先週は失礼なことを言ってしまいました……訂正しますと……」

「……そうしてやってくれ。きっと喜ぶ」

ヴィヴィオは、先週の非礼に加えて、しっかりとヴィヴィオの事を見てくれていたようだ。拳を打ち合わせている内に、彼女がどれだけ必死に格闘技（ストライクアーツ）しているのか、強い思いが乗った拳を受けて、それを理解した。

確かに、ヴィヴィオとアインハルトでは、格闘技者としてのスタンスは違うのかもしれない。

しかし、違っているのは根っこの部分だけで、『より強くなりたい』という気持ちと、拳に乗っかっている思いの強さには、そう違いはないのだと。

「（彼女は覇王（わたし）が会いたかった聖王女じゃない。……だけど、わたしは……この子とまた戦えたらと思っている……）」

ヴィヴィオとの試合の中で、彼女の格闘技（ストライクアーツ）に対する気持ちの強さを理解したアインハルトは、試合の後半は完全に彼女とのぶつかり合いに夢中だった。

覇王としてではなく、アインハルトとしての彼女は、ヴィヴィオとの戦いを望んでいる。

ある意味では、そういった気持を持つことが出来たこの試合、アインハルトにとっては大きなプラスになったのではと思える。

自分の中にある、過去の人間の記憶ではなく、自分自身の気持ちに従って誰かと戦い、切磋琢磨していく。

格闘技者として、これほど大切な気持ちはないだろう。

「あの……ホムラさん……ありがとうございます……／／／」

「え？　何が？」

「ホムラさんの言ったとおり……今日の試合は……私にとってとても重要なものになってくれました……だから、その……背中を押してもらったので……」

「……うん、アインハルトの為になったんなら、僕の勘も捨てたもんじゃないって、そう思えるよ」

アインハルトは、ホムラにそう言って、『もう大丈夫です』と赤くなりながらも身体を離すと、未だに気を失っているヴィヴィオの方に歩み寄り、彼女の手をとった。

「はじめまして……ヴィヴィオさん。アインハルト・ストラトスです」

改めての自己紹介。儀礼的な挨拶ではなく、ヴィヴィオに対してまっすぐに向きあって、素の自分、アインハルトとしてした挨拶。

二人にとっては、今日この日が本当の出会いの日となった。

「それ、起きてる時に言ってやれよ」

「……恥ずかしいので嫌です……／／／」

ノーヴェにそうからかわれ、羞恥心から赤くなるアインハルト。赤くなりながらも、そう悪い気分ではなかった。

「どこか、ゆっくり休める場所に運んであげましょう」

「あぁ、それなら僕がおぶっていくよ。よいしょっと……って、軽いな……さすが女の子……」

「あ……」

ホムラが、ヴィヴィオをおぶると、しっかりとした様子で立ち上がる。大人モードならいざ知らず、子供Ｖｅｒのヴィヴィオはとても軽かった。

対して、ホムラにおんぶしてもらっているヴィヴィオを見て、アインハルトがどこか羨ましそうな顔をしている。そういうところがまた可愛い。

「（なんだか、ユキナをおんぶしてやったときのことを思い出すなぁ……）」

ヴィヴィオをおんぶしていると、昔のことを思い出してしまったホ

ムラ。ユキナが健康になって、もう一度外を自由に歩けるようになったら……そう思うが、恐らく恥ずかしがって嫌がるだろうなと、ホムラは内心でクスリと笑った。

「む……」

「って、なんでアインハルトはご機嫌斜め……？」

「し、知りません……（プイッ）」

「え、あ、ちょっと、アインハルト！？（なんだかこのやり取りも、最近多い気がする）」

乙女心の何たるかまでは、ホムラの直感力でも理解は出来ないようで……。

ホムラは、ヴィヴィオをおんぶしながら、ズンズンと先を歩いて行ってしまうアインハルトの背中を少し急いで追う。

その背中に、ティアナやコロナ、クゥ達の２８２８視線を受けながら……

こうして、ヴィヴィオとアインハルトのほんとうの意味での出会いとなった練習試合は、こうして幕を下ろしたのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「…………にゅ……？」

かすかな振動で、ヴィヴィオは薄く意識を覚醒させる。加えて、誰かの暖かさを感じ、どこかホッとしたような気持ちになる。

そう、まるで母であるなのはに、おんぶしてもらっているかのような感覚だった。

「も～……なんでアインハルトはそんなにムッとしてるのさ？」

「昔からムッとした顔なんです」

「でも、基本的にはいつも可愛いっていうか、綺麗な顔してると思うけど…………」

「っ～～～～～～！！！／／／／／／／　　にゃ、にゃんでそういう事を平気な顔して言うんですか！／／／」

耳には、アインハルトと、男の子の声。

思い出す、今日ようやく自己紹介できたホムラの声だ。どうやら、自分はホムラにおんぶされながら、アインハルトの隣を歩いているんだと、ヴィヴィオはなんとなく理解できた。

話の内容はよく分からなかったが、アインハルトが真っ赤になりながらあたふたしているのだけは理解できた。

「（というか、わたし……どうしてホムラさんにおんぶしてもらって……？）」

そんな疑問に行き着き、ヴィヴィオは少し記憶を辿ってみることにする。最後の、意識を失う前の記憶はなんだったのか……

「（あ、そうだ……アインハルトさんとの試合で……わたしは吹っ飛ばされちゃって……それで……）」

アインハルトの断空拳で、隙を突かれて綺麗に吹き飛ばされたことを思い出したヴィヴィオ。それに加え、意識を失う一歩手前で起こったことも思い出した。

空中に投げ出されて少ししして、誰かに、そう……今自分をおんぶしてくれているホムラが、自分のことを受け止めてくれたことを思い出したのだ。

「（わたし……また、ホムラさんに……助けてもらっちゃったんだ……／／／／）」

図書館の前でのことを数えると、これで通算二回目の救出劇である。

それに加えて、今もこうして、ヴィヴィオのことをおんぶしてくれているホムラ。

「（な、なんだろう……／／／／　顔が……熱い……？　それに、胸が凄く早く打って……ドキドキしてる？）」

ドキドキ……と、知らない間にヴィヴィオの心臓は普通よりも早く脈打っていた。全力疾走した後とは、また違う感じのドキドキ、今まで体験したことのない鼓動の高鳴りだ。

この気持がなんなのか、ヴィヴィオはよく分からなかったが。ただ、ホムラにおんぶされているこの状況が、とても幸せに感じた。

ぎゅ……

気づかない間に、ホムラに少し抱きつき気味になるヴィヴィオ。ホムラは、アインハルトとの会話に夢中で気が付いていないようだが、ヴィヴィオとしてはそのほうが良かった。

アインハルトとヴィヴィオが、本当の意味で知り合うことが出来、スタートをきることが出来たこの日。

ホムラ、アインハルト、ヴィヴィオ。

この三人を軸にした何かも、同時に始まったのかもしれない。

F２０C「というわけで、アインハルトにライバル出現……？」

アインハルト「むぅ……」

F２０C「って、なんでご機嫌斜め？」

アインハルト「ヴィヴィオさんは、おんぶしてもらえたというのに……私は……」

F２０C「……要するに、ホムラにおんぶしてもらいたかったの？」

アインハルト「にゅあ！？　ち、違います！！！」

F２０C「あぁ、お姫様抱っこの方が良かったかｗｗ」

アインハルト「おおおおお、お姫ひゃま……／／／／／／／」

ホムラ「……（ダラダラ……）」

閣下「どうしたよ、その鼻血？」

ホムラ「あ、アインハルトのスパッツがその……何度か見えてしまって……／／／／／／」

閣下「おまｗｗｗ　スパッツでそれなら、アレするときの本番一体どうするつもｒ……ヘゴッ！！？」

フェイト「大人気ないことしないの！！　そういう事するルークは嫌いだよ？」

閣下「ガ━━（；゜Д゜）━━ン！！」

ホムラ「し、師匠……？」

閣下「ふぇ、フェイトに嫌われた……もうダメだぁぁぁぁつД゛）・゜・゜・゜・゜・＊：・゜・・゜・：＊・゜」

フェイト「あらら（；・∀・）　る、ルーク？？　嘘だってば嘘！！」

Ｆ２０Ｃ「まさに男泣きだな……悪い意味で」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；１３　迫り来る定期試験と少年少女達

Ｍｅｍｏｒｙ；１３　迫り来る定期試験と少年少女達（前書き）

今月末発売のゲーム、ましろ色シンフォニーのＰＳＰ版。ＰＣ版からのサブヒロインが攻略可能、オリジナルキャラ追加ということで、胸が熱くなる今日この頃です。
ただ、今回も私の一番好きなキャラ、結子さん（ヒロインのお母様）は攻略不可ということで……それだけが心残りです。

友人にこの話をしたら、ものすごく残念な人を見るような視線を向けられました。
お、俺は悪くねぇ！！　俺は悪くねぇ！！

Ｍｅｍｏｒｙ；１３　迫り来る定期試験と少年少女達

夕暮れ時の森の中。
以前、アインハルトとホムラが秘密特訓を行っていた、穴場の特訓場。

そこに、ホムラとアインハルトの姿があった。

「……スゥ……ハァ……」

呼吸を整え、精神を研ぎ澄ませる。意識は、自身の身体と、腰に収められた一振りの剣にのみ集中させる。

瞼を開き、前方約１５メートル先にある、縦置きにされた直径５０センチほどの太さの丸太を視界に入れる。

「……」

ス……と、ホムラはゆったりとした動きで腰を小さく落とし、左手を腰の剣の鞘に、右手を柄に付くか付かないかのところまで持っていく。
全体的に、脚に力の入りやすい構え。

ホムラの技の起点であり、終着点でもある、抜刀術。

彼が今行っているのは、神速とでもいえよう歩法、縮地と抜刀術のコンビネーション技の訓練だ。一見、シンプルな技のようにも見えるが、その実、二つの技術の融合というのはこの上なく困難で、難しい。
その完成度で言えば、ホムラの技巧はまだまだ未熟な部類に入るのだ。それ故の特訓であり、今まさにホムラが技を撃とうとしているわけだ。

そして、ホムラの脚に力が掛かり……

「……っ！」

シャッ！

と、そんなかすかな音を残して、一瞬でホムラの姿が掻き消える。
離れたところで見ていたアインハルトの目にですら、彼の姿は映らない。
縮地の神速とは、まさに目にも留まらぬ、映りもしないような速さなのか。

バシュッ！！

そして、瞬きする間もなく、ホムラは抜刀した状態で丸太を挟んで、先ほどいた場所の真逆の位置に現れていた。
加えて、彼の背後では丸太が弾けるような音を立てながら、斜めに真っ二つになっていた。

パチパチパチ……

「お見事です、ホムラさん」

「うん……」

小さく拍手し、そう言いながら、アインハルトが近づいてくる。しかし、ホムラの表情はあまり明るいものではない。シラヌイの刀身を見つめて、何かを思案しているようにも見える。

その様子を見て、少し首を傾げてしまうアインハルトではあったが、今の技は中々いい具合に決まっていたように思える。技の出来に不満があるのだろうが、剣に関しては門外漢のアインハルトには、それ以上のことは分からなかった。

「でも、これじゃあダメなんだ」

キンッ！

ホムラは、シラヌイを鞘に収めると、先ほど叩き斬った丸太の傍まで寄って、その破片を拾って見せてくる。

見れば、丸太には斜めに赤いラインが引いてあった。ホムラの剣閃は、そのラインを僅かにズレてしまっている。

「これは……」

「狙っていたラインを五ミリも外した。太刀筋も少しブレてたし、縮地での加速と剣閃のタイミングもイマイチだったし……はぁ……課題が山積みだよ……」

アインハルトからすれば、瞬きしている間にホムラが消えて、丸太が斬れてしまっていたので、どこがどのように悪かったのか、剣に関しては素人の彼女にはアドバイスできることは何もなかった。

ホムラが、自身に対してどれだけレベルの高いことを要求しているのかだけは、痛いほどに伝わってきたのに……。

だが、武の道を歩く者としてなら言えることはある。

「ホムラさん、今日はここまでにしましょう。根を詰めすぎても、良い成果は上がりません。焦らなくても、私たちにはまだまだ時間がありますから」

「……うん。そう……だね」

ホムラはそう答えると、シラヌイを待機状態に戻して、切れ端になってしまった丸太の後片付けを行う。

ホムラ自身、何か時間的な制約があるわけでもないし、今すぐ強力な力を得て、強大な敵に立ち向かわないといけない。というような事もない。

アインハルトの言う通り、焦る必要はないし、急いては事を仕損じるとも言う。
自分自身の努力が、思うような成果を生んでくれないとき、人はどうしたって焦ってしまうものだ。

アインハルトにも同じような経験があるし、その焦ったままの状態で行う修練が如何に無意味なのかも知っている。
もちろん、ホムラも分かっている事なのだろうが、アインハルトの言葉でそれを再認識したようだ。

「ありがとう、アインハルト……」

「いえ、どういたしまして……」

短いやり取りではあるが、二人の間ではこれで十分だった。最近、距離が縮まっているせいなのか、ホムラとアインハルトのお互いの波長とでも言えばいいのか、兎に角それがいい感じで噛み合うのだ。
相性がいいと言ってしまえば、その一言に尽きるのだが、少なくとも当の二人にはそんなつもりは全くなかった。居心地が良い、というくらいに感じているのではなかろうか。

「あ、それはそうとホムラさん。明後日から定期テストですが、勉強などは……」

「え？　あぁ、一応パラパラとは……。まぁ、そんなに難しくはないし、なんとかなるとは思うけど」

一応、ホムラは優等生ということで通っている。無論、執務官になるためには知識も不可欠なので、勉学に対しても余念が無い。その甲斐もあってか、彼の成績は上位の方に入り込んでいる。

「あの……、それなら……出来ればでいいのですが……少し教えていただきたいところが……」

「??　あれ？　アインハルトって確か、前の学期での成績ってかなり良かったんじゃなかったっけ？　先生が言ってたんだけど……」

「そ、それはそれです！／／／／　最近は少し、覇王流（カイザーアーツ）の方に集中しすぎていたので……その……」

このホムラという朴念仁。アインハルトの乙女心を全く分かっていなかった。

アインハルトもまた、ホムラ同様成績優秀だ。確かに、彼の言うように前回のテストの結果も上々だったし、今回も無難にクリアできることだろう。

しかし、そんな彼女が恥じらいつつも、教えてくれというお願いをしているのだから、『ホムラと一緒に勉強したい』という彼女の気持ちに気が付いてもいいものを……。

こういった点で言うと、ホムラという男は唐変木で朴念仁である。

「ダメ……ですか……？」

「う！？（ドキンッ！）」

だがしかし、アインハルトの上気した頬、熱っぽい瞳、上目使いという三段構えの戦法（本人にそのつもりなし）に、ホムラの心臓の回転数が一気に跳ね上がった。

ハッキリ言って、彼女のこういった仕草は反則級に可愛い。それこそ、どんなお願いでも叶えてやりたいと思ってしまうし、何だってやれる気がしてくる程だ。

故に、ホムラの取るべき選択肢は一つだけだった。

「ぼ、僕なんかでよければ……。それに、僕もその……少し教えてもらうところがあるかもだし……／／／／／」

「は、はい！　その場合は、私が責任を持ってお教えします！／／／／／」

「うん……よろしく……あ、あはは……」

なんとなく、いい雰囲気というか、甘ったるい感じというか、二人は自分たち以外誰もいないこの訓練場で、青春というものを全身で感じていた。

ただ一緒に勉強するだけだというのに、相手がアインハルト、もしくはホムラだとここまで楽しみなイベントに変化してしまうものなのかと。

二人は全く同じことを考えながら、そのくすぐったい空気を身に受けてた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

――――そして、その翌日の放課後。スメラギ邸にて……

「えっと……ちょっと散らかってるかもだけど……どうぞ……」

「は、はい。お邪魔します」

ホムラとアインハルトの二人は、勉強場所としてホムラの家の、彼の自室を選んだ。

……いや、別に図書館でも良かったのだが、考えることは皆同じなのか、学園の図書館は満杯で使うに使えなかったのだ。

で、他にどこか落ち着いて勉強できるところはないかと思案した結果、『家でやればいいんじゃない？』という安易な発想から、二人どちらかの家に行こうということになり、結果的にホムラの家になったというわけだ。

まぁ、ホムラに女の子の家、部屋に上がり込めというのは些かハードルが高いだろう。

アインハルトが家にやって来た時、ミフユが『つ、ついにそのステップまで来たということなんですね……？／／／／　分かりました、私は今からお買い物に行ってきますから。そうですね、大体二時間くらいで大丈夫ですか？』などと、変な気を回してきたのだが、アインハルトとホムラが光の速さで『『違いますから！！！！／／／／』』とツッコミを入れた事は想像に難くないだろう。

「取り敢えず、そのテーブル使ってしようか」

「あ、はい。そうですね」

ホムラの部屋は、一言でいえばよく片付いていた。自分の口で『散らかっているかも』と言っていたが、机の上に教科書が少し置いたままになっている事を除けば、綺麗なものだった。
漫画本や文庫本等もあるようで、訓練や勉強ばかりしているイメージがあるホムラだが、歳相応のアイテムも持っているらしい。

ホムラの室内説明もそこそこにして、二人は１０畳ばかりの部屋の中心に置かれたガラステーブルで勉強することにした。

「……（ソワソワ、キョドキョド……）」

「あ、アインハルト？」

「う、あ……！　な、なんでしょうか！！」

正座座りで部屋のカーペットの上に腰を落ち着かせた二人だったのだが、アインハルトが明らかにソワソワしていた。
ホムラが声を掛けてみるが、彼女は上ずった声で返事をしてしまい、少し頬を赤らめていた。

「い、いや……なんだか落ち着かないみたいだけど、大丈夫なのかなぁと……」

「ぜぜぜぜ、全然大丈夫ですよ？　えぇ、もう冷静そのものです（キョロキョロ……）」

「そ、そうなの……？　（その割にはキョロキョロしてるんだけど……）」

ホムラが女の子（妹のユキナを除く）の部屋に来たことがないように、アインハルトもまた、男の子の部屋に来ることなどこれまで無かった。
彼女にとっては、ホムラの部屋という空間自体が珍しくもあり、気になって仕方が無いのだろう。
ホムラがアインハルトの部屋に行けば、全く逆の構図になったこと間違いなしだ。

コンコン……

『ホムラさ～ん？　お茶とお菓子持ってきましたよ～♪』

「あ、はい！」

と、二人が教科書やノートなどをテーブルの上に出していた時、ドアの向こうからミフユの声が飛んできた。どうやら、お茶菓子などを持ってきてくれたようで、ホムラはすぐにドアを開いて彼女を招き入れる。

「はいどうぞ。お勉強、頑張ってね～♪」

「ありがとうございます、ミフユさん」

「お気遣い、ありがとうございます」

紅茶とお菓子をテーブルに置いてくれたミフユに、ホムラ達は同時に頭を下げつつお礼を言う。

ミフユは、いつも通りのホンワカした笑みを浮かべながら『いえいえ♪』と何でもないような様子だ。

「それじゃあ、私は買い物に行ってきますから。二人とも、頑張ってね（いろんな意味で）！！」

「「み、ミフユさん！！／／／／」」

去り際に、余計な一言を残して、ミフユはホムラの部屋を後にした。

加えて、その後すぐに玄関が開いて閉まる音がしたので、本当に買

い物に出掛けてしまったようだ。

部屋に残ったのは、紅茶のいい匂いと、茹でダコのように真っ赤になったホムラとアインハルトだけだった。

「勉強……しようか……？」

「……ですね……」

二人は、少しぎこちない動きではあるが、ペンやノートを開いて勉強を開始することになった。

勉強と言っても、二人の頭には何故か『保健体育（実技）』の内容ばかりが浮かんできたのだが、必死になってそれを打ち消していた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「はぁ～……」

ホムラとアインハルトが真っ赤になりながら試験勉強をしているのと同時刻。自宅のリビングにて、彼らと同じように試験勉強をしていた高町ヴィヴィオは、小さく溜息を吐いた。

その溜息は、後ろ向きな気持ちからくるものではなく、どこかそう……心の中にある温かい気持ちから生まれたものだった。

先程から何度か溜息を吐いているヴィヴィオだが、その表情には僅かに朱が差している。

「むぅ～……じゃあ、ここは……こう……？」

「そうそう。そこはさっきの問題と同じ要領だね。そこから、これとこれをどうすればよかったのかな？」

「えっと……こうで……こうだ！！」

「うん、正解♪　やっぱりクゥちゃんはやれば出来るんだね」

と、今現在、リビングで勉強をしているのはヴィヴィオだけではない。一緒に試験勉強をしようと、コロナとリオ、そしてクゥといういつものメンバーが集まってきていたのだ。

試験期間前の短縮授業ということで、今日はヴィヴィオ達の帰宅時間はいつもより早いため、なのは達もまだ帰ってきていない。

クゥは成績優秀なコロナに先生をしてもらい、数学の問題に取り組んでいる。

「べ、別に！　お母さんが頭いいんだもん、俺もこれくらい出来るの！」

「あはは……でも、実際にお勉強してるのはクゥちゃんだから、やっぱりクゥちゃんが凄いんだって、私は思うけどなぁ？」

「うぅ～～～～！！／／／／／／／　つ、次！　次行くよ！！／／／／／」

思わぬ褒め殺しに遭い、クゥはツンデレ全開だった。顔を真っ赤にしながらツンツンしているが、コロナにとってはそれが可愛くて仕方ないらしく全くの無意味、寧ろ逆効果である。
先生をしてもらっているということで、必然的にクゥとコロナの距離はかなり至近距離になっている。コロナの女の子特有とでもいえばいいのか、いい匂いがクゥの頭をオーバーヒートさせつつあった。

「はぁ～……」

と、そのタイミングでまたしてもヴィヴィオの溜息。
別に、コロナとクゥがイチャ付いていたからそれに呆れて……ということではない。寧ろ、今日のヴィヴィオには、二人のイチャイチャを気にしている余裕というか、その気すら無いように見える。

「ねぇ、ヴィヴィオの様子……おかしくない？」

「だね……私もそう思った」

「さっきから溜息ばっかりだし……それに、なんだかほっぺた赤くない？」

リオ、コロナ、クゥも、流石に気になってしまうようで、顔を寄せ合ってヒソヒソと話す。普段なら、ヴィヴィオが三人の内緒話に気が付かないわけがないのだが、今日のというか最近の彼女はどうにも無反応、スルーになりがちだった。

「風邪でも引いたのかな……？」

「ん～……でも、そんな感じでもないみたいだよ？　ちゃんとお昼も食べてたし……」

「というか、こないだのアインハルトさんとの練習試合があった次の日当たりから、様子へんじゃなかった？　なんて言うの？　ボーッとしがちって言うか、心ここに在らずっていうか……」

ヴィヴィオの異変について、三人寄らばなんとやらの精神で話し合うコロナ達。

リオの言うとおり、ヴィヴィオの不調というか、変調というか、この状態になってしまったのは先日のアインハルトとの試合の直後だ。アインハルトと、改めて格闘技の道を歩くものとして知り合えたことで、嬉しくなってしまうのならば話は分かるのだが、こんな風に物憂気になる理由が分からない。

「（ん～……そう言えば、ホムラさんに助けてもらったことを嬉しそうに話していたような……あ、あはは……まさか……ねぇ……？）」

「リオ？　なにか心当たりがあるの？」

「う、ううん！　別に～」

ふと、あの学校でボーッとしていない状態のヴィヴィオと話していたときのことを思い出したリオだったが、自分の中に出てきた可能性を頭を振って無しにする。

そんなベタな展開があっていいものなのか？　と、メルヘンチック過ぎる自らの妄想を恥ずかしいと思ってしまった。

『危ないところを助けてもらった相手に一目惚れする』、などというような、アニメやドラマの中のお話がそうそうリアルであるわけがないのだ……と。

・
・
・

「（ホムラさんとアインハルトさん……今頃なにしてるんだろ……？　わたし達と同じで、勉強とかしてるのかなぁ……？）」

ところがどっこい。リオの考えていた想像は、当たらずとも遠からずといったところだった。

あの日以来、気が付くとホムラと……そしてアインハルトの事ばかりを考えている。

「（ホムラさんの背中……とっても暖かかったなぁ……／／／／／）」

ついつい思い出してしまう、ホムラにおんぶしてもらった時の事。
あの後、ティアナの車までの道中をおんぶしてもらっていたのだが、とても心地よく、終わってしまうには惜しい時間にさえ思えてしまった。

「（でも……なんでわたし……あんなに嬉しかったんだろう……？）」

しかしながら、幼心故なのか鈍感なのか、ヴィヴィオは自身の気持ちについてはいまいちその正体を突き止めることが出来ていなかった。彼女自身、こんな体験は初めてで戸惑っている節があるのだ。

「（それに……アインハルトさん……なんでだろう……？　ホムラさんとアインハルトさんが仲良くしてると……こう……胸が痛くなっちゃう……？　で、でも……二人ってどこか通じ合ってる感じもして、絵になるし……うぅ～～～！！　分かんないよ～～～！！！）」

様々な思考がこんがらがってしまい、ヴィヴィオの処理容量を超えてしまう。アインハルトとホムラの仲を羨む自分と、二人が一緒に居ることがよく似合っていると思ってしまう自分。
主観性と客観性がゴチャ混ぜになっている、相反した思考がヴィヴィオの最近の悩みの種だったのだ。

ヴィヴィオ自身、恋愛という単語や意味、それがどんなものなのかは分かっているつもりだ。
ものすごく身近に、万年新婚気分なおバカ夫婦（今朝も行ってきますのチューしてた）がいるので、お互いを好き合うということがどういう事なのかも、少しは分かる。

だが、まさか自分が恋をするなどとは考えもしていなかったのだ。
そんなモノは大人がするものだと、無意識の内にそう勝手に結論づけていたのかもしれない。

だからこそ、ヴィヴィオの中ではホムラに対する気持ちや、アインハルトとホムラの関係に対する複雑な気持ちに対する明確な答えなど出るはずもなく。こうして悶々としてしまっているというわけだ。
まぁ、言ってしまえば……ヴィヴィオはまだまだお子様だった。

「はぁ～……／／／／／」

またしても、少し頬を赤らめながら溜息をつくヴィヴィオ。その視線の先には、オレンジ色に染まりつつある空と、沈み始めた太陽が美しく輝いていた。

ヴィヴィオが自身の気持ちと、アインハルトとホムラの二人に対するややこしい気持ちに答えが出せる日はいつになるのか……それはまだ、誰にも分からなかった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

――――管理局本局・戦技教導隊本部

夕方に差し掛かった頃、教導隊所属の教官の一人である、鉄槌の騎士・ヴィータは同僚の高町なのはの元を訪れていた。

彼女を尋ねることなどそうそう珍しいことでもないし、逆に言えば日頃から一緒に居ることが多いので、あまり新鮮味はないのだが。

「なぁ、なのは。あいつ……この前言ってた、ホムラ・スメラギってガキの事、どうすんのか決めたのか？」

「う～ん…………一応、プランとしては一ついい手を思いついたんだけど…………」

ヴィータからの問に対して、なのはは少し困った風な表情を浮かべて曖昧な答えを返してきた。

ホムラの件というのは、彼の能力の高さをより伸ばすための環境づくりや、それを面白く無いと感じている同期達からのやっかみをどうするかということだ。

少々、ホムラに対して肩入れしすぎな気もするが、なのは達教導官の仕事はあくまで訓練生達の成長を促進、補助することだ。

それに、ホムラは平均的な訓練生に比べて若い。少しくらいは肩入れしてもバチは当たらないだろうし、それが結果的にホムラが優秀

な魔道士に育ってくれることに繋がるのならば結果オーライだ。
優秀な者が優遇される。競争社会ではある意味当たり前のことでもあり、普通の教育現場でもよく見られることでもある。

「へぇ、どんなプランなんだ？　もしかして、シグナムにでも弟子入りさせるのか？」

「にゃはは、それも一つの手だったんだけどね。シグナムさん、最近ははやてちゃんのお手伝いで忙しいみたいで……。でも、弟子入りっていうのは正解だよ？」

「シグナムでもないってなると……」

なのはの考えたプランは、ホムラを誰かに弟子入りさせて、マンツーマンで指導してもらうというアイデアだった。
これならば、同期たちのやっかみの心配もほとんど無くなるし、その道のプロ、言ってみれば剣術のスペシャリストの指導を受けさせることが出来る。

なのはも、魔法戦の戦闘技術の教導ならドンと来いだが、剣術となるとそうもいかない。これはもう、戦闘スタイルの問題なのだから。
そこに行くと、剣術のスペシャリストという点では、シグナムを推すのはある意味当然のことでもある。

「もう一人いるじゃない、剣術のスペシャリストで、シグナムさんよりも自由に仕事を選べる人が」

「……も、もしかして……アイツのことか？」

「にゃはは、そのまさか♪」

ヴィータが少し汗を流しながら、なのはに確かめるように尋ね返す。
そう、たしかにもう一人いるのだ。剣を使わせれば超一流で、魔道士としても凄腕の奴が。

多少、問題というか、欠陥があるのだが。

「あ、あいつに……誰かに教えるって出来るのかよ……？　果てしないほどに感覚派の天才バカだから、人に教えるには向いてないと思うんだが……」

「その辺りは大丈夫だよ。一から全部を教えないといけないわけじゃないし、ホムラくんもそれなりのレベルなんだから、その道のプロから自然と技術を吸収してくれると思う」

「そりゃ……そうかもだけどよ……し、心配過ぎる……」

「にゃはは、大丈夫大丈夫！　もうね？　今度のオフトレに二人を誘うことも計画中なんだ。偶然にも、ホムラくんとヴィヴィオが知り合いみたいで……」

心配だと気が気でないヴィータに対し、やる気満々ななのは。
まぁ、教導の全てを、『そのプロ』に任せるわけでもないし、なの

はも無責任に丸投げするわけがない。
恐らく、共同で教えていくつもりなのだろうが。

「はぁ～……にしても、あのバカ……『ルーク』に弟子入りかぁ……変な影響受けなきゃいいんだが……」

ヴィータの心配の種は、師匠となる男の根本的な部分にある問題だった。剣のスペシャリスト、魔法戦も大得意なのだが……ルーク・R・ハラオウンは……

「あいつ……フェイト命の『変態』だからな……」

・
・　・
・　・　・

「ヘクチッ！！」

「あれ？　ルーク、風邪でも引いたの？」

「うんにゃ、多分マイ女神・フェイトが俺の噂でもしてるんじゃないかと……いやはや、モテる（フェイト限定で）男は辛いぜ……」

「えと……私目の前にいるんだけど……」

Ｍｅｍｏｒｙ；１３　迫り来る定期試験と少年少女達（後書き）

Ｆ２０Ｃ「なぁ、みんな？　最後のほうでなんか変なやつが出てきてような気がするんだが、何かしらないか？」

ティアナ「私のログには何も無いわね」

なのは「私も何も見なかったよ？」

はやて「うちのログにも何も残ってないわ」

閣下「待て待て待てぇい！！！　明らかに居たじゃん！！　みんなのルークさんだよ！！　みんな大好きルークさんじゃないか！！」

Ｆ２０Ｃ「ちょっと、ちょっと？　エキストラの方が後書きブースに入ってこないでくださいよ。スタッフー！！　スタッフ～～～♪」

閣下「うわぁぁぁぁぁん！！！　フェイトーーーー。。（。´Д`。）。。」

フェイト「あ、あはは……よしよし……」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；１４　ナイトメア

アインハルト（ナースコス）「ど、どうでしょうか？　ホムラさん？／／／（モジモジ／／）」

ホムラ「す、スカートが短すぎるからダメーーー！！」

Ｆ２０Ｃ「相変わらずお固い奴だな」

Ｍｅｍｏｒｙ，１４　ナイトメア（前書き）

この小説の読み方

？ファミマに行ってファミチキを買ってくる。

？その足でソフマップに行って、機動戦士ガンダムＦ９１のブルーレイを買ってくる

？本屋で今週号のジャンプを買ってくる

？それをまとめて、Ｆ２０Ｃ宛に速達で配達してもらう

冗談ですよ？

本編どうぞー

Ｍｅｍｏｒｙ，１４　ナイトメア

記憶

目の前に広がっているのは紅い記憶

炎の記憶

血の記憶

「父さん……？」

「ぐっ……！」

目の前に広がっているのは、炎と血と、自分を守って血まみれになってしまった父の姿だ。一緒にお風呂に入ったときに見る、あの屈強で鍛えあげられた身体に、一振りの剣が突き刺さり、おびただしい量の出血を見せていた。

「あなた!?」

気を失ったユキナを抱えた、ホムラ達の母であるシラユキもその異変に気がついて思わず声を上げてしまう。

「し、シラユキ……ホムラを……連れていけ……がっ??!」

父・シエンがそう言うと同時に、彼の身体に突き刺さった剣の持ち主が、容赦なくその剣を引き抜いた。
無論、そんなことをすれば大量出血が起こるのは火を見るよりも明らか。シエンは大量の血を吹き出しながらも、ホムラを妻であるシラユキの方に投げ飛ばした。

「父さん!!!」

「はぁ……ぜぇ……ホムラ……これからは……お……前が……母さんと……ユキナを……守っ……」

ガシュ……

その言葉を言い切る前に、うつ伏せで倒れたシエンの左胸に再び剣が突き立った。
それと同時に、シエンは動かなくなる。

死んだ。

そう理解するにはまだ、ホムラは若く、子供だった。
テレビなどでよくやっている、人間の死亡シーンなどとは比べ物にならない。死というものの種類が、全くの別物だった。

「くっ……！」

それと時を同じくして、母シラユキはユキナとホムラを抱え上げて、走り出す。目尻には、大粒のナミダがあったが、彼女は走るスピードを緩めずに、全速力で脚を動かした。

走る、走る、走る、走る。
ホムラとユキナを担いで、加えてシラユキも負傷しており、そのコンディションは良くはない。
ホムラたちを襲った誰かが追いつくのは容易いことだ。

そして、場面が切り替わる。

「ホムラ、あなたは生きなさい……！　ユキナをしっかりと守って、生きて……将来は良いお嫁さんをもらって、子どもを授かって……だから、今死んではダメよ？　あなたは生きなきゃダメなの……！」

「母さん……！」

「大丈夫……貴方達のことは、私が絶対に守るから……。母親ですもの、可愛い息子と娘のためなら、いくらでも……」

ドシュ……！

「あ……う……」

「母さん！！！」

ユキナとホムラを庇うようにして覆い被さってくれていた母の身体が、父と同じ剣で刺し貫かれる。
同時に、ホムラの顔に母・シラユキの血が滴り落ちた。
その血はひどく温かく、同時にホムラにとっては恐ろしくもあった。
目の前で、剣で貫かれながらも自分たちを守ろうとする母の姿が、目から離れなかった。

「い、いいわ……ね……？　ホムラ……生きるのよ……？　自分を責めないで……自分を嫌っては……いけないわよ？　きっと……あなたの事を、好きになってくれる……人が……見つかる……から……はぁ……。……あなた……ゴメンなさい……」

「か、母さん……？」

ガクン……

その言葉を最後に、シラユキの身体から力が抜け落ち、ホムラと気を失ってしまったユキナを最後まで守るかのように、二人に覆い被さる。

「あ……あぁ……か、かあ……さ……」

何なんだこれは？

ホムラの頭を過ぎったのは、そんな疑問だった。

自分たちが一体何をしたというのか？　ただ単に、連休を使って保養地に遊びに来ていただけではないか。

それがなぜ、こんなことになっている？　一体どこで間違えた？

誰が悪いのか？

「革命の為には、時には人の血も流れる。　だが、それがいつか、弱い人々を、苦しんでいる弱者を救うためになるのだ……そう、これは正義、正義の行いなのだ……」

「っ！！」

母と父を殺した男は、酔いしれるかのように、そして使命感に駆られた声でそう呟き、剣に付着したシラユキの血液を払った。

その声を聞いた瞬間、ホムラの中にどす黒い何かが生まれた。

黒く、黒く…………どこまでも黒い。その黒は、ホムラの中を一色に染め上げていく。

「あああぁぁぁぁぁぁあぁぁぁぁぁあ！！！！！！！」

「む……？」

ホムラは、そのどす黒い感情に身を任せて、近くにあった母親のデバイスを引っ掴み、男に襲いかかる。

しかし……

ガィン！！！

「う？？！」

「子供に用はない。例え、管理局員の子供であっても、子供を手に掛けるのは目覚めが悪い」

男の剣の一振りによって、ホムラはいとも簡単に弾き飛ばされてしまう。壁に叩きつけられ、落下したホムラは、地面に蹲りながらも男を睨みつける。

もう何も考えられない、ただただ、この目の前の人間を殺してやりたい。考え得る限り残酷で、惨たらしく、痛みと恐怖を与えながら、

殺してやりたかった。憎しみと怒りしか、ホムラの頭の中にはなかった。

「絶対……殺してやる……殺してやる……お前ぇぇぇぇ！！！！！！！！」

「ふ……革命家はいつの時代も理解されない……か。より良い未来のため、お前達の両親の命はそのために摘ませてもらった。力のある者、既得権益にしがみつく者、私はそのすべての敵になる。全ては人々に『平等』を与えるためだ」

噛み合っていない。

この男は、ホムラのことなど見ていない。ただ、自分の目指すもの、欲するもの、正しいと思う自身の正義しか見ていない。

ホムラにとって、平等という言葉もその意味も、どうでも良かった。

ホムラが欲しいのはこの男を殺す手段と力だけだ。

だが、先程の衝撃で身体がまともに動くことはなく、ホムラに出来るのは男を睨みつけて呪詛の言葉を投げつけることだけだった。

「いつか……いつか絶対に……俺が……俺が……お前を……殺してやる……ぶっ殺してやる……！！」

そこで、ホムラの意識は闇の中へと落ちて行った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「っ！！？」

目を覚ませば、そこは自分の部屋の中だった。父と母の亡骸も、二人を殺した男も、周囲を埋め尽くしていた炎も、目の前にはない。いつもホムラが使っている勉強机と、本棚やテーブルなど、見慣れたものばかりだった。

カレンダーを見れば、今日が定期試験の日程二日目だということを思い出した。

「はぁ……はぁ…………………ゆ……夢か……」

『うなされておられました……またあの夢ですか？』

「……あぁ……」

ホムラは、ベッドの上で壁を背にし、シラヌイを鞘に納めた状態で抱き、胡座をかく形で眠っていた。

というか、あの事件以降は、ベッドで眠ることはおろか、こうしてシラヌイを抱いてでしか眠れなくなってしまった。

ホムラは、背中に身体を預けた状態で目を覚まし、肩に抱いたシラヌイの問いに答えた。

「う……」

見れば、身体小刻みに震えている。ホムラにそのつもりがなくても、身体は勝手に夢のなかで起こった過去の出来事に恐怖していた。カタカタと、どうしようもないくらいに震えが止まらず、ホムラはシラヌイを抱き直して、自分の腕に力を入れた。

だが、いくら止まってくれと身体に命令しても、いつも通りその震えは止まる気配がない。

「（くそ……！！）」

心の傷というものは、そういうものだ。簡単には治らないし、その傷は深く悲しいものだ。自分のことを臆病者だと言われれば、今のホムラに言い返すだけの材料はない。彼は純粋に、あの日あの時の出来事に恐怖していた。

あの時感じていた、怒りと憎悪は未だに彼の中で燻っているものの、やはり心的外傷深すぎるのか恐怖ばかりが先行していた。

「（……アインハルト……）」

そんな中、心の中に浮かんできたのは一人の女の子だった。

凛として、気高く、時に可愛いところのある最近一緒に居るのがデ

フォになりつつある女の子。
ホムラと同じように、少し悲しい夢を見てしまうという困った悩みを抱え、怖いときはいつでも頼ってくれていいと言ってくれた人。

「（……寝てる……よな、流石に……）」

時計を見れば、深夜の三時過ぎ。もう１０分もすれば四時になるくらいだ。まず、アインハルトは寝ている真っ最中だろう。
いくら遠慮しなくてもいいと言われても、こんな時間に叩き起すのは気が引けるし、ホムラはシラヌイへの通信命令を出す一歩手前で思い止まった。

「（依存するのと頼るのは別だろう……）」

その言葉は、一見ストイックに見えるが、その実、自分の弱い部分を見せたくないという自尊心の表れだということに、ホムラは気が付いていない。
いや、気がついた上で知らんぷりしていたいだけなのかもしれない。

しかし、事態は意外な展開に見せることになる。

『マスター、アインハルト様から通信が入っています』

「え？」

シラヌイからの報告に、ホムラは一瞬目を見開いてしまった。今の今まで、連絡を取ろうか取るまいかで悩んでいた相手の方から連絡が入ったのだ。

彼女の名前を聞いただけで、胸の心音がドキンと跳ね上がり、先程の憂鬱な気分が一瞬で吹っ飛んでしまうというのは、些か現金過ぎるだろうと自分でもそう思ってしまうホムラだった。

「つ、繋いで」

『畏まりました』

シラヌイに、チャンネルを開かせ、アインハルトからの通信を受け入れる。同時に、目の前に半透明のディスプレイが出現し、その中にアインハルトの姿が映し出された。

『あ……／／／／　や、夜分遅くに申し訳ありません……／／／／ホムラさん……』

「う、ううん。僕も起きてたから……。こんばんは、アインハルト……／／／」

ディスプレイ越しの深夜の挨拶になってしまうのだが、二人にとってはこのほうが良かったのかもしれない。

ホムラ自身、今さっきの夢がある分、少し情けない顔になっているからだ。

「……アインハルト……泣いてるの？」

『……えっと……私がというか……覇王の記憶が……』

と、恥ずかしイベントもそこそこに、ホムラはアインハルトの顔を見て気が付いた。彼女の目から、涙の筋が流れ出していたのだ。以前話に聞いていたが、覇王の最も悲しい記憶を見てしまうと、泣きながら起きてしまうことがあると。

どうやら、今日の彼女がまさにそれらしい。

『少し……苦しかったので……。迷ったんですけど、ホムラさんとお話ししたいと……思って……／／／／／　あ、あの……ご迷惑でしたか……？』

「ううん。僕もさ……今さっき夢見が悪くて飛び起きちゃったんだ。アインハルトに連絡するかどうかで間誤付いてたら、アインハルトの方から連絡が来て、ちょっとビックリしちゃっただけだよ」

『そう……でしたか……』

どうやら、二人とも同じような状況になってしまっていたらしい。お互いに夢にうなされ、深夜に飛び起きてしまった。

知り合う前までは、一人で何とか心の整理をつけていたのだが、こうやって誰かの顔を見て話をしたほうがよっぽど精神的には良い薬になることは間違いない。

「似たもの同士……だね、なんだか……」

『えぇ……私も、そう思います……』

二人して、困ったような表情を浮かべてしまうが、全く悪い気はしない。こうして顔が見れて、話が出来るということに心が自然と暖かくなり、ざわめき立っていた感情もスゥっと落ち着いていくのだから人の心とは不思議なものだ。

『あの……ホムラさん？　シラヌイを抱いているようですが……それは……？』

「あぁ……えっと……。僕、寝るときはシラヌイを抱いてでないと寝れなくて……ここ3年くらいベッドで横になって寝たこともなくて……。あはは……ただ単に臆病者なだけなんだけど……」

シラヌイを抱いたまま、壁を背に身体を休めていることをアインハルトに指摘されると、ホムラは迷いながらも、苦笑しつつそう返事をした。

自分で臆病者だと自覚はしているのだが、いざ人に、それも女の子にそれを打ち明けるのは多少抵抗があった。

加えて、なぜだか分からないがアインハルトにはカッコ悪いと思わ

れたくないという考えもあった。

『臆病者だなんて、私は思いませんよ……？　普通でないほど怖い思いをすれば、人は心に深い傷を負ってしまうものですし、それが当たり前なんです。それに、ホムラさんがそうなってしまったのは、あなた自身の所為ではないでしょう？』

「……う、うん……」

『なら、自分をそんな風に貶さないでください。まぁ、泣きながら連絡を入れてしまった私が言えた義理ではありませんが……』

「そ、そんなことないよ。なんて言うのかな……アインハルトにそう言ってもらえると……凄く力になるって言うか……兎に角、ありがとう……」

ホムラは、自分を卑下する発言を窘めてくれたアインハルトに感謝した。今まで、こんな弱い自分は恥ずかしいと、頑なに思ってきたホムラ。自分の弱さ、臆病な心を何とかしたいと、自分の所為なのだと、ずっとそう思ってきた。

だが、アインハルトに諭されると、自戒心が少し和らいだ気がした。彼女の言葉には、強さと暖かさが備わっているのだと、そう感じることが出来た。

『いえ、分かっていただけたのならそれで……。えぇと、それで……ホムラさん……その……こんな時間ではあるんですけど、も

う眠れそうにないので、このまま朝までお話させてもらってもいいですか……？』

「朝まで？」

『はい……。出来れば、明るい話題でスッキリしたいと……今日のテストも昨日一緒に勉強しましたから、きっと大丈夫でしょうし……』

そして、次はアインハルトからのお願い。彼女の言うとおり、定期試験の対策は、ここ数日の共同戦線によって万端整っている。寧ろ、過去最高の出来ではないかと思えてしまうほどだ。少し朝早い時間だが、アインハルトとのお喋りに興じるのに、何の躊躇いも感じなかった。

「もちろん。僕ももう寝るつもりもなかったしね。それに……こうして、アインハルトと話すのは……なんだか落ち着くから」

『そ、そう……ですか……／／／／　なら……その……嬉しいです……』

ホムラの本心からの言葉に、アインハルトは一気に赤面してしまうが、その表情には安堵の色も見られた。きっと、彼女もまた覇王の記憶を見て悲しい気持ちになっているのだろう。

ならば、少しでも彼女の心を明るい方向に持っていく手伝いができるのならと、ホムラは迷うことなくそう思った。

それから、二人は本当に朝まで語り明かした。

好きな食べ物だったり

一番恥ずかしい失敗談だったり

今考えている技に関する意見交換だったり

自分の戦闘スタイルに対する考察だったり

話す内容はめちゃくちゃではあったが、その時間は二人にとってこの上なく充実しており、朝になる頃にはホムラとアインハルトの表情は、明るいものになっていた。

二人は気が付いてもいないだろうし、そんなつもりもないのだろうが、お互いがお互いを支える関係、ホムラとアインハルトの間にはそんな関係が少しずつだが、確かに育まれてきていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

それから数時間後、二人は学園の入り口を一緒になってくぐっていた。ディスプレイ越しではなく、現実で顔を合わせて。

ついさっきまでずっと話していたので、おはようございますという挨拶も少し場違いに感じてしまいもしたが。

「アインハルト、さっきはありがとね。お陰でかなり落ち着いたよ」

「いえ、お礼を言うなら私もです。つっかえていた物が少し取れたような気がしますから。本当にありがとうございました」

二人はお互いに、改めてついさっきまでの談笑に付き合ってくれたことにお礼を言い交わす。

本当にお互い様な関係ではあるが、こうしてしっかり言葉にしておかないと気が済まない二人だった。

「テストが終われば、土日合わせて四日間の休みになるね。もう予定とか立ててるの？」

「はい、これまで通り練習時間に充てようかと。ホムラさんは？」

「う～ん……局の訓練も、その四日間は入ってないからね……、アインハルトと一緒で、僕も自主練かなぁ……」

夜のこともそこそこに、二人は試験終了後のことを話し合う。試験が終われば合計四日間という少し長い連休だ。人それぞれの時間の使い方があるだろうが、この二人はいつもと変わらず自主練に充てるつもりのようだ。

無理しろとは言わないが、少し色気がないのが残念なところである。

「よければ、一緒にやりませんか？　といっても、最近はそれが普通になりつつありますが……」

「あぁうん。僕も出来ればそうしたいなって思ってたから。よろしくお願いするね」

「はい、四日間、よろしくお願いします。私もいろいろとお手伝いできると思うので」

まぁ、二人で一緒に、ということで多少の色気は出てきたが、やることの内容はそんなにムードのあることではない。
この二人にとっては、それが普通且つ、自然なことなので、それはそれでいいのかもしれないが。

「あ……！　アインハルトさん、ホムラさん！」

と、その時。唐突に背後から声が掛かった。明るく、元気のいい声にホムラ達は聞き覚えがあり、同時に振り返る。
するとそこには、アインハルトと同じ虹彩異色の瞳と、ツーテールにした綺麗な金髪が特徴的な女の子がいた。

そう、ヴィヴィオだ。

「ごきげんよう、アインハルトさん。おはようございます、ホムラさん」

「ごきげんよう、ヴィヴィオさん」

「おはよう、ヴィヴィオ」

三人は、それぞれ朝の挨拶を済ませる。そのまま、流れというかなんというか、そこからの道のりをホムラ、アインハルト、ヴィヴィオの三人で歩くことになる。

「あの、お二人っていつも一緒に登校してるんですか？」

「ん？　まぁ、そうだね。家も近所だし」

「そ、そうなんですか……。（いいなぁ……）」

ヴィヴィオの質問に、ホムラが正直に答えると、ヴィヴィオはなるほどといった表情と、羨ましいような顔になる。

が、朴念仁のホムラに彼女のそんな表情の変化を機敏に捉えろと言うのも酷な話である。

戦闘面などでは役に立つ彼の直感も、こういった部門では全くの役立たずである。

「そう言えば、今日はコロナやリオ、クゥは一緒じゃないんだね」

「クゥはまだ一年生ですし、あの子は結構のんびり学校に来るタイプなので……。リオ達はもう教室にいると思いますよ」

と、二人が仲良さそうにそんなことを話している最中に、一年教室のある棟から……『やっほ～い！！！　俺参上！！』というどこぞの仮面ラ〇ダーの台詞をアホっぽくアレンジした声が聞こえ、それに続いて子供たちの笑い声が聞こえてきた。
その聞き覚えのある声に心当たりがありすぎる三人は、顔を見合わせてしまった。

「はぁ……またクゥは……。今日もデバイス使って窓から登校してきたんでしょうね……」

「あぁ～……なんとなくやりそうではあるよね……あの歳でデバイスを自由自在って言うのも末恐ろしいけど」

「ですね……」

ヴィヴィオは、毎度お馴染みになりつつあるクゥの専用道路を使った登校に頭を抱えていた。悪戯は、コロナの一言でパタリと止んだのだが、遅刻ぎりぎりになるとデバイスを使って通学路をショートカットする癖はそのままのようだ。

「あはは、でもヴィヴィオはクゥのいいお姉さんだね」

「知り合ってまだ一年と少しですけど、付き合いは長いですから。

でも、本人はコロナに夢中なんです」

「へぇ～……道理でよく一緒に居るなぁと思うわけだ」

「コロナもクゥのことが可愛くて仕方ないみたいなんですよ？」

という感じで、ホムラはヴィヴィオとの話が弾む。

それに伴い、覇王っ子のお嬢さんのヤキモチメーターが徐々に上昇していく。先程から、仲良さそうに話す二人と、ムッとした顔で見ている。

「（やはり……ホムラさんは明るい女性が好みなんでしょうか……？　ヴィヴィオさんのように可愛い子なら尚更……むぅ……）」

自分で考えていることではあるが、考えるほどに胸がチクチク痛む。どうしてこんな気持になるのかは分からないが、覇王の悲しい記憶を見るのとはまた別の種類の痛みにアインハルトは少し戸惑っていた。

「って、ヴィヴィオの校舎って向こうじゃなかったっけ？」

「あ……／／／／／」

と、話し込んでいる間に分かれ道を通りすぎてしまっていたようで、

ホムラが初等科校舎を指さしながらヴィヴィオにそう教えてやった。
それと同時に、アインハルトの複雑な悩み事も一旦中断される。

「それじゃあ、僕たちはこっちだから」

「それでは」

「あ……」

ギュ……

「お？」

「あ！　あ、あのあの……その」

「む……」

と、始業の時間も迫っていたのでホムラ達がそこで別れようとすると、ヴィヴィオが慌てた様子で手を伸ばし、何故かホムラの手を握っていた。

ヴィヴィオ自身、何が何だか分かっていないようだが、必死に何かを言おうと必死な様子だ。
対して、アインハルトはムスッとした顔に拍車がかかってしまう。
だが、拗ねた顔も可愛い。

「ヴィヴィオ？」

「あ……あのあの……えっと……てて、テスト！　頑張って下さいね！」

と、漸く言えた台詞がそれだった。

本当は、もっと何か言いたいことがあったのかもしれないが、それがなんなのか分からないという、ヴィヴィオ自身摩訶不思議な感覚だった。

「うん、ヴィヴィオも頑張ってね」

「あ……はい！♪　では、アインハルトさん、ホムラさん！　私はこれで！」

そうしてホムラが返すと、ヴィヴィオは満足したのか何なのか、スッと手を離して初等科の方に走って行ってしまった。

どこか浮き足立っているような、よく言えば嬉しそうな足取りに見ているこっちも心が暖かくなる気分だった。

「ヴィヴィオはいつも元気だね」

「……そうですね（プイッ）」

「って、また怒ってるの！？」

「早く行かないと、遅刻扱いになってしまいますよ」

そう言うと、スタスタと先を行ってしまうアインハルト。なぜ彼女の機嫌が急降下したのか、それを理解しろというのは朴念仁・ホムラには荷が重い相談だった。

「ま、待ってよ、アインハルト～」

「（まったく……ホムラさんは……本当にもう……なんでこう……まったく！／／／／／／）」

自分自身にもよく分からないムカムカに戸惑いながら、その原因がホムラにあるということだけは、本能的に理解していたアインハルト。

スタスタと先を歩くアインハルトの顔は、完全に乙女だった。

Ｍｅｍｏｒｙ；１４　ナイトメア（後書き）

Ｆ２０Ｃ「やっぱり、ホムラの両親は事故じゃなくて殺害されてたわけか」

閣下「で、あのナルシーなウザキャラはいつ出てくんの？」

Ｆ２０Ｃ「めちゃくちゃ先です。え～と、少なくとも少年期では出てこないです。青年期のボス的な存在なので……」

閣下「青年期？　少年期？」

Ｆ２０Ｃ「あぁ、この小説の大まかな分け方のこと。今やってるのが少年期で、それが終わったら青年になったホムラたちをメインに話が進んで、最後は社会人になってからの話……みたいな感じを予定してるわけで」

閣下「なにその人生ストーリー？」

Ｆ２０Ｃ「いやさ、君の場合は二作目で、気がついてたら親になってたからさ、今作ではその過程までをしっかり書きたいなぁと。家族って言うテーマも重要だからさ」

閣下「え？　何その優遇のされ方？俺は？」

Ｆ２０Ｃ「いや、恐らく読者様の皆さんが納得してくださるかと。逆にお前じゃ……ねぇ？」

閣下「それどういう意味だよ！！！？」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；１５　剣聖で天才で変態な男

Ｆ２０Ｃ「次回、ついに奴が動き出す・・・・・・」

ホムラ&アインハルト「「ごくり・・・・・・」」

Ｆ２０Ｃ「・・・・・・・・なぁ、二人とも？　聞いときたいことがあるんだけど・・・」

ホムラ「え？」

アインハルト「なんでしょう？」

Ｆ２０Ｃ「・・・・・・奴って・・・誰かな？」

二人「「知らないの！！？」」

Ｍｅｍｏｒｙ，１５　剣聖で天才で変態な男（前書き）

閣下語録

おっぱいがいっぱい……まぁ、そういう事だ。

ｂｙ　閣下

Ｍｅｍｏｒｙ，１５　剣聖で天才で変態な男

「「合宿……ですか？」」

試験二日目の休み時間。アインハルトとホムラは、揃って戸惑いの声を端末に向けて発していた。
連絡相手は、ヴィヴィオ達のストライクアーツの師匠的存在であるノーヴェからのもので、アインハルトへの通信のはずが、なぜかホムラも聞くようにと言われた。
そこで出てきた話題というのが、試験の終わった後に行われる合宿への参加についてだったというわけだ。

「すみません、私達は二人で練習がありますので……」

『だからその練習のために行くんだって』

が、既に試験後の予定は二人で練習に充てようと考えていたアインハルトとホムラは、二つ返事でオーケーすることは出来ない。
まぁ、ノーヴェの言うとおり、練習しに行くという意味では場所と人数が変わるくらいの違いしか無いのだが。

『あたしや姉貴もいるし、ヴィヴィオも来る。練習相手には事欠か

ねー。しかも、魔導師ランクＡＡランクからオーバーＳランクのトレーニングも見られる』

「むむ……それは興味が……」

「はい……」

ノーヴェからもたらされた追加情報に、ホムラとアインハルトは少し合宿に興味を持った。局員、即ち上官に当たる人たちとの訓練ということで、ホムラにとっては緊張しっぱなしになってしまいそうなシチュエーションではあるが、その見返りは相当に大きいように思える。

その道の超一流達の動きを間近で見ることほど、有意義なものはないだろう。

『ホムラにも、ある人から紹介したい人がいるってことらしいから、来てくれってことだ』

「ある人？」

『ま、それは追々分かるこった』

加えて、ホムラには会わせたい人もいるらしい。ここまで言われては、逆に断るのも悪いし、行ってみたいという気持ちが大きくなってくる。

『ついでに、アインハルトには歴史に詳しくて、お前の祖国のレアな伝記本とか持ってるお嬢もいる。まぁ、たった四日間だ、騙されたと思って来てみろって。つまんなかったら、お前ら二人で、予定してた練習メニューでトレーニングしててていいんだし』

「あ、あの……」

「（アインハルト、めちゃめちゃ迷ってるなぁ……）」

次々と興味津々な内容を提示してくるノーヴェに、ホムラはモチロンのことアインハルトの心は揺れまくっていた。ホムラは、この話を受けてみようかという気持ちだったので、後はアインハルト次第といったところだった。

『いいから来い！　絶対いい経験になる！！後で詳しいことメールすっから、取り敢えず今日の試験頑張れな』

「はい……」

「分かりました」

なんというか、最終的にはノーヴェの勢いに引っ張られた形になってしまったが、アインハルトもホムラ同様に合宿に参加することを決心したようだ。
ホムラとアインハルトは、ノーヴェに了解の意志を示し、通信を終えた。

「なんだか、練習の規模が大きくなっちゃったね？」

「ですね……。まぁ、その分得られるものも多そうなので、少し期待もしてしまいますが……」

ホムラがそう言うと、アインハルトは未だに迷っている節があるのか、少し考えるような表情でそう返してくる。

ノーヴェの言うとおり、練習相手が多いことに越したことはないし、歴史や伝記本にも興味がある。アインハルトにとってもホムラにとっても、この誘いは間違い無く良いもののはずだ。

「（……二人きりで練習というもの……それはそれで良かったのですが……／／／）」

アインハルトは、少し頬を赤くしながらそう思ってしまった。いや、別にノーヴェの誘いが迷惑とかではないが、少し残念な気も無くはなかったという所。

まぁ、そんな彼女の難しい表情の正体は、恐らく朴念仁のホムラに解読されることはないだろう。

それは、アインハルトの乙女心から来るものだったのだから。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

そして、試験期間は順調に経過し、土日を含めて四日間の連休が始まった。

――――高町家

「試験終了お疲れさま」

「みんなどうだった？」

栗色の髪をサイドポニーにしたカワイイ系お姉さん、高町なのはと、金色の長い髪を先の方で黒いリボンで纏めたナイスバディなお姉さん、フェイト・Ｔ・ハラオウンは、今日から始まるオフトレに参加するヴィヴィオ、リオ、コロナ、クゥに試験の出来を確認した。

「はなまる評価いただきました！」

「四人そろって」

「優等生です♪」

「でーす」

上から、リオ、ヴィヴィオ、コロナ、クゥの順でそう言いながら、四人は成績表をフェイトとなのはに見せてきた。

初等科四年の三人は、全教科で八十点以下の数字がなく、コロナなど全教科満点である。リオも、フィジカル面でSランクをとっており、ヴィヴィオもそつのない成績だ。
そしてクゥは……

「わ、クゥすごいね。フィジカル学年で一位だよ？　成績も全種９０点オーバーだし」

「そりゃそうですよ～、コロナが一生懸命になって教えてましたから」

クゥの成績表を見て、フェイトがその結果を褒めると、すかさずリオが以下にコロナとクゥが一緒になって頑張っていたのかを補足する。
そんなことをすれば、ツンデレボーイなクゥが過剰反応するのが分かってやっているのだろう。

「べ、別にコロナ姉ちゃんは関係ないし……！！　悪夢の定期試験？　はっ！　俺は負かしたければ、その三倍は持ってこい！！」

「クゥちゃん……素敵……／／／／／」

なのは達「「「「うわぁ……」」」」

どこぞの慢心王のような台詞でツンデレるクゥに、その王様然とした言い方に、何故かウットリしているコロナ。

なのは達は相変わらずな二人の関係に、苦笑いしつつも生ぬるい視線を送るに留まった。

「うん、でもみんなすごいね～♪」

「これなら、もう堂々とお出かけできるね！」

お出かけ、つまりは今日からの四日間の間に行われる、オフトレの事だ。試験の結果次第では、オフトレではなく勉強するハメになっていたかもしれないのだが、この四人にとっては杞憂だったらしい。皆、驚くほど優等生であった。

「じゃあ、リオちゃんとコロナちゃんは一旦おうちに戻って準備しないとね？」

「「はいっ！」」

「おうちの方にもご挨拶したいから、車出すね」

「あ、準備済ませて私も行く！」

さてさて、成績確認もそこそこに、なのはがコロナ達にオフトレ参加のための準備、まぁ荷造りだ。その準備を促し、二人も元気よく返事をする。

フェイトが車を出してくれるようなので、二人の家まではそう時間を掛けずに戻ることが出来るだろう。

四人が出かけるということで、ヴィヴィオも一緒に行こうとしたのだが……

「あ、ヴィヴィオはは待ってて？　お客様が来るから」

「おきゃくさま？」

ピンポーン……

『いらっしゃったようです』

なのはにそう言って止められるヴィヴィオ。お客様とは一体どういう事なのか？　オフトレに出発するこのタイミングで？　と、ヴィヴィオは少し首を傾げるが、それと当時に家のインターフォンと、レイジングハートがその来客を告げてきた。

そして、来客を迎えに行ったヴィヴィオ達が玄関で顔を合わせることになったのは意外な人物たちだった。

「こんにちは」

「どうも」

「アインハルトさん、ホムラさん!!?　それと、ノーヴェ！」

玄関先に居たのは、最近知り合った上級生、アインハルトとホムラ、

そして彼らを迎えに行ってここまで案内してきたのであろうノーヴェ。

「異世界での訓練合宿とのことで、ノーヴェさんからお誘いいただきました」

「右に同じく。ってことなんだけど……同行させてもらっていいかな？」

「はいっ！！！　も～、全力で大歓迎です！！！♪」

アインハルトとホムラがそう尋ねると、ヴィヴィオは心底嬉しそうに二人の手を握って、『よろしくよろしく』とブンブン手を振ってくれる。

一緒に訓練士に行くというだけでここまで喜んでくれると、ホムラとアインハルトとしても、気が楽だった。

「ほら、ヴィヴィオ。上がってもらって？」

「あ、うん！　ホムラさん、アインハルトさん、どうぞ！」

「お邪魔します」

「お邪魔し……ま……す……？」

と、奥からフェイトが出てきて、ヴィヴィオにホムラ達に上がって

もらうように言う。いつまでも玄関で長話というのもアレなので、ヴィヴィオは二人に中に入ってもらうようにいうと、まずアインハルトが靴を脱ぎ来客用のスリッパを履く。

そして、それに続く形でホムラも靴を脱いでスリッパを履いたのだが、改めてフェイトの顔をハッキリとその視界に映した彼は、壊れたテレビのようにスローモーションになり、最後には青い顔になりつつフリーズしてしまった。

「??　ホムラさん、どうかしました?」

「あ……え……?　ふぇ、フェイト・T・ハラオウン執務官……?」

ヴィヴィオが心配そうにしながらホムラに尋ねると、彼は心底驚いているようで、震えた声で小さくそう呟く。

「??　私の事、知ってるのかな?」

「し、知ってるも何もその……ハラオウン執務官は有名ですから!!　ていうか、ファンです!!　お会いできて光栄です!!」

でもって、名前を知られていたフェイトが聞いてみると、青い顔から憧れの人を見る目になったホムラは、若干興奮気味にそう返した。

まぁ、執務官志望の彼ならば、有名人であるフェイトのことは良く知っていてもおかしくはないし、実績からしても憧れるのも頷ける

ことだ。

「あ、あのえっと！！　今回は訓練に同行させていただいて、本当にありがとうございます！！　もう一生の自慢になりま……ゲッホゲッホ！！？」

「「（ホムラさんが興奮しすぎてむせてる？？！）」」

「あはは、そこまで大層な人間じゃないけど……そう言ってもらえると嬉しいかな♪」

ホムラの、未だかつて無いほどのテンションの上がり具合にアインハルトはもちろん、ヴィヴィオも驚いていた。
ホムラはホムラで、本物のフェイトに会うことが出来たということで、むせるほど嬉しいようだ。

「にゃはは♪　ホムラくんは、フェイトちゃんと同じ執務官志望だからね～」

「あ、そうなんだ？」

「たたたたたた、高町教導官！！？」

そして、フェイトの登場でテンションマックスになったホムラに、さらなる衝撃が走った。
いつも訓練において自分を指導する立場にある、航空武装隊の教導

官である高町なのはがそこに居た……普段着で。

いや、普段着くらい誰でも着るものだが、ホムラは管理局の制服姿かバリアジャケット姿の彼女しか知らなかったのだ。

「え？　あの……も、もしかしてノーヴェさんが言ってた、僕を訓練に誘ってくれた人っていうのは……？」

「うん、私だよ～」

憧れのフェイト、雲の上の人であるなのは。ホムラにとっては目標である人たちが一度に出てきたことによって、テンションが上がったり慌てたり、今日のホムラはこれまでに無いほどに忙しく表情がコロコロ変わる。

しかし、そんな今の彼のほうが、歳相応という気もしてしまう。

「はじめまして、アインハルトちゃん。ヴィヴィオの母です、いつも娘がお世話になっています」

「いえ……あの、こちらこそ」

「……母？」

「あ、言ってませんでしたよね。私のお母さんで、なのはママとフェイトママです」

なのははホムラにそう答えてから、アインハルトにしっかりと挨拶をし、アインハルトも少し詰まりながらもそれに答える。
だが、その会話の中で飛び出してきた単語に、ホムラはまたしても固まる。

「なのはママにフェイトママって……え？　も、もしかして女性同士で……子どもが……？」

「違います！！」

「私もちゃんと旦那さん居るからね？！」

まぁ、ヴィヴィオの言い方が悪かったが、ホムラの大ボケが炸裂してしまった。なのはとフェイトがすぐに訂正し、簡単な経緯を説明して、ホムラの納得を得るまでに少し時間を要してしまうのは致し方無いだろう。

閑話休題

「ほんとすみませんでした……てっきり、自然界の法則がねじ曲がったのかと……」

「にゃはは……分かってもらえたならそれでいいよ」

「私の旦那さんも、昔同じ間違いしてたしね……」

事情を説明してもらったホムラは、フェイトとなのはに頭を下げて、顔を真っ赤にしながら謝った。勘違いとはいえ、コレは恥ずかしすぎる。

ヴィヴィオもノーヴェも、見ればコロナやリオ、クゥ達も苦笑い状態だ。

「あ、あの……。高町教導官……自分を今回の訓練に誘ってくださったのは、一体どういう……」

「あぁ、うん。実はね？　ホムラくんは少し別系統の形で訓練を継続してもらいたいなって思って。その為に、ある人の下で直接指導してもらおうかなって。あ、もちろん、私もお手伝いするよ？」

「ある人、直接指導……ですか？」

自分の為に、あの高町なのはがイロイロと考えてくれているのは、正直言って光栄だし嬉しくもある。

加えて、彼女が紹介するほどということは『ある人』という人物はかなりの実力者なのであろうことも容易に分かる。

「フェイトちゃんのお婿さんで、ルークくんっていうんだけど、ホムラくんと戦闘スタイルが良く似てるし、魔導師ランクもＳ＋で、とっても強いんだよ？」

「うん、実力に関しては私も保証するよ。魔法も体術も剣術も超一流で、あと優しいし……カッコイイし、あと可愛いんだ……／／／／」

「は、はぁ……」

なのはの説明とフェイトの話によると、ルークなる人物はやはり相当の力の持ち主らしい。自分の旦那の話になり、若干フェイトが色ボケて見えるのは気のせいではないだろう。未だに万年新婚夫婦と呼ばれても、これでは文句言えまい。

「あの……どうして自分にそこまで……」

「当然だよ？　だって、私のお仕事は、生徒の成長のお手伝いだもん。出来うる限りの最善の選択肢と環境を提供したいし、ホムラくんはそうするだけの努力を重ねてるって分かるから」

「あ……」

なのはに、どうしてここまで自分の力になってくれるのかを尋ねるホムラ。当事者のホムラから見ても、少しなのはは肩入れしすぎかとは思う。たしかに嬉しいことではあるし、ホムラにとっては好都合なことだ。

しかし、なのはにとってはこれが仕事であって、ある意味当たり前のことでもある。生徒の可能性を伸ばし、成長させるのが教導官の仕事であって、それを潰してしまうなどありえないことだ。

なのはの言葉を聞き、ホムラはなのはが自分をしっかり評価してくれているのだと、この時改めて理解することが出来た。

「あ、えっと……ありがとう……ございます／／／／／」

「うんうん、素直にお礼。良く出来ました～♪」

撫で撫で……

流れなのかなんなのか、なのはは何の躊躇いもなくホムラの頭を撫でてくる。ホムラもホムラで、それを嫌がることもなく受け入れてしまう。なのはのこうした柔らかい姿勢が、そうさせてしまうのだろう。

しかし、それを見て面白く無いと思う子がいるわけで……

「む……」

ぎゅぅぅぅぅ！！！！

「あだだだだだ！！！？　だ、だからなんでアインハルトは足を踏んづけるのさぁ！！？」

「プイッ！（なんですか……年上のお姉さん、ヴィヴィオさんのお母様ににデレデレと……わ、私だって武装形態でなら、お姉さんになれるんですから……少しくらいは……）」

嫉妬モードのアインハルトに、足を重点的に攻撃されるという、いつものパターンに入ってしまうホムラであった。
この男、妙なところで学習が足りない奴である。

「で、件のルークさんは一体どこに？　さっきまでシエルと一緒だったはずなのに……」

「あ、ルークとシエルなら、さっき二人でお散歩に行ったよ？　もうすぐ帰ってくるんじゃないかな？」

そう言えばと、ヴィヴィオが思い出したように今を見渡しながらそう尋ねると、フェイトが外のほうに視線を送りながらそう答えた。

ちなみに、シエルというのはルークとフェイトの間に出来た子供であり、二人に瓜二つの男の子である。

ガチャ……

「ただいま～」

「おかーさーん！！♪」

「あ、言ってる間に帰ってきたみたいだね♪」

玄関からドアの開く音と、帰宅を告げる声が聞こえると、フェイトは嬉しそうに二人を迎えに行く。夫婦間の中も去る事ながら、親子間の中も良好というのがハラオウン一家である。

「ルークさん、こんにちは～」

「変態のお兄ちゃん、やっほ～」

「ルークさん、お邪魔してま～す」

「お～、コロナにクゥ、リオ。もう来てたのか、つかクゥ、その呼び方やめれ」

そして、フェイトを伴って居間に顔を出したのはフェイトと同じ金髪に、真紅の瞳をした青年とその青年を縮小コピーしたかのようにソックリな男の子だった。

この青年こそが、件の凄腕魔道士、ルーク・R・ハラオウンだ。ただし変態である。

コロナ、クゥ、リオが彼に挨拶をすると、ルークも親しげにそれに返す。

「え～、だって変態のお兄ちゃんって、変態だもん」

「おま!?　俺ほど女の子に対して紳士な生物はおらんだろうに。人畜無害とは俺の為にあるような言葉じゃん」

「じゃあ、フェイトさんが巫女服でベッドの上で寝てたら？」

「（＊´Д`）ハァハァします」

「やっぱ変態だ」

お分かり頂けただろうか？　クゥとルークのやり取り、これがルークという男なのだ。

人畜無害、まぁ女の見れば誰でも手を出すような輩ではないのだが、フェイト限定でその変態度は発揮されるというわけだ。

フェイト以外に興味がないと言えばそれまでだが、それはもうひどい惚れっぷりである。

「（＊´Д`）ハァハァした上で、口ではとても言えないようなことを……」

「え？　そ、そんなこんな子供たちが見てる前で……？　ううん、そういうプレイなら私も……／／／／」

「あぁ～もう！！　フェイトちゃんまで（＊´Д`）ハァハァし始めないで！！　話がややこしくなるから！！！」

一部訂正しよう、変態なのはルークだけではない。フェイトも少しそっちの気があるのかもしれない。

なのはが強制的に二人のピロートークを強制終了させ、話を前進させる。

この新婚夫婦、放っておくとオートでイチャ付き始めるので始末が

悪いのだ。

「……な、なんだかすごく不安……」

「私も同意見です……」

「「「あ、あはは……」」」

そんなフェイトとルークの姿を見て、ホムラとアインハルトは嫌な汗をかいてしまっていた。
対して、ヴィヴィオ、コロナ、リオはこの光景を見慣れているようで、苦笑いを浮かべている。

「って、あれ？　見ない顔がいるな」

「あぁ、うん。ルークくんにも紹介するね。こちら、ホムラ・スメラギくんと、アインハルト・ストラトスちゃん」

「「こ、こんにちは！」」

なのはが二人をルークに紹介すると、二人は同時にペコリと頭を下げながら挨拶をした。先程の桃色空間（未遂）を目の当たりにして、少し瘴気的なものに当てられそうになった二人だが、礼儀はしっかりとしておきたいところだ。

「あぁ～、ヴィヴィオの友達の。こりゃご丁寧に、ルーク・リーゼンベルグ・ハラオウンです。どうぞよろしく～」

で、変態なのはフェイト限定なルークは、二人にしっかりと自己紹介をし返す。まぁ、フェイトが絡まなければ基本的にはマトモな奴なので安心して欲しい。

ホムラもアインハルトも、それが分かったようで少しホッとしていた。

「この子らもオフトレ参加ってこと？」

「うん。それでね？　実は……ルークくんに、ホムラくんのお師匠さんになってもらいたいなぁって」

「Ｗｈａｔ，ｓ？」

ルークがなのはに確認すると、彼女はホムラの指導プランの一つである、ルークへの弟子入りの件をさりげなく言って来た。当然、ルークは鳩が豆鉄砲食らったような顔を地で行っている。

どうも、今の今までその話を彼にしていなかったようだ。

「え～と、……俺が、この子に……教えろと？」

「うん！　……ダメ？」

「いや、ダメっていうか……いきなりな話で驚いてるんですけ

ど……」

まぁ、今回に限ってはルークの反応は正常なそれだ。
いきなり師匠になってくれと言われれば、誰だって驚く。それも、ルークは誰かに何かを指導したこともないし、自分がそういったことに向いていないことも自覚していた。
加えて、彼にもいろいろと思うところがあるようで。

「お、俺なんかに教わるより、シグナムさんとか……」

「戦闘スタイル的に、ルークくんが適任なんだもん。それに、ルークくんなら良い先生になれると思うよ？」

「その自信はどこから……」

「教導官としての長年の勘、かな？」

なのはとしては、ホムラはルークに指導してもらうのが一番だという確信があるようで、『期待してます☆』的な視線で見つめてくる。
そのやり取りを見て、フェイトが若干ヤキモチを焼いていたのは内緒だ。

「……」

ホムラも、不安気に事の成り行きを見守っている。彼としては、ル

ークにような実力者に見てもらえる機会をフイにはしたくないし、出来ればお世話になりたいとも思っている。
しかし、ルークにも受ける受けないの選択の自由がある。彼の意思を曲げてまで教えを請うわけにはいかない。

「おとーさん、ししょーにならないの？」

「ん～……弱ったな……」

息子のシエルからも、期待するような視線を向けられてしまう始末だ。というか、周囲からの視線がルークに集中している。
ある意味拷問である。

「……なのはさん、ちょっと庭使ってもいいですか？」

「にゃはは、うん♪　もちろん」

そして、悩んだ挙句に出したルークの結論は、そんな言葉だった。
庭の使用を尋ねられたなのはは、こうなることをどこかで予想していたのか、一も二もなく許可を出す。

「ホムラ、デバイスは持ってるな？」

「あ、はい！」

「うし。んじゃ、ちょっと庭に出て、一撃だけ、お前の剣を見せてくれ」

ホムラにそう言って、先に庭のほうに向かうルーク。どうやら、ホムラの力を見るつもりのようなのだが……？

兎に角、ホムラも彼の後を追って家の庭に向かう。

「なのは……」

「うん、多分ルークくん自身、まだどうするか迷ってるみたいだね。だから、ホムラくんがどこまで力を持ってるのか、どんな気持ちで剣を振るってるのかを見極めるつもりなんだよ。ある意味、これはホムラくんにとって試験だね……」

ルークは、あまり自分の剣にいい思い出がない。だからこそ、そんな剣で誰かを教えるということに抵抗を覚えているのだろう。それも、今日会ったばかりの子供にだ。戸惑うのも無理はない。

だからこそ、ホムラがどれだけの力を持っているかを見ることで、彼のことを知ろうとしているのだろう。

ホムラの人となり、剣に賭ける気持ち、自分の拙い指導力で成長できるかどうかを。

ホムラにとってもルークにとっても、この出会いが有意義なものに

なるかどうか。それを見極めるための試験が、始まろうとしていた。

Ｍｅｍｏｒｙ；１５　剣聖で天才で変態な男（後書き）

Ｆ２０Ｃ「前書き意味フ過ぎんだろｗｗｗｗ」

アインハルト「ホムラさんはあぁはならないでくださいね？」

ホムラ「あ、あはは……」

閣下「いや、世界中の同志達の賛同の声があちこちから聞こえるんだが？」

Ｆ２０Ｃ「お前の場合、フェイトさんの乳オンリーだろうが」

閣下「何を言う、早見優（古い　そこはほら、絶対に曲げられない信念が、そこにあるって言うか……」

Ｆ２０Ｃ「お前一体何歳だよｗｗｗｗ　ギャグのセンスが石器時代じゃないかｗｗｗ」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；１６　天才の証明、だが変態である

閣下「そんじゃ、次回は俺回というわけで、読者の皆様からの期待の声が飛んできてるな」

『頑張れ！　真・主人公！！』

『きゃー、カッコイイ～」！！』

『やっぱり、お前がいないと始まらないよな！」

閣下「はっはっはｗｗｗ　いいねいいね！！　これこそがこの小説のあるべき姿……」

はやて「せやけどこれはただの夢や」

なのは「ちょっと……頭冷やそうか……？」

Ｆ２０Ｃ「自演乙」

閣下「ちょっとくらい夢見せてくれたっていいじゃない！！……じゃあ、また次回。バイビー」

全員「「古っ！！」」

Ｍｅｍｏｒｙ，１６　天才の証明、だが変態である（前書き）

どうも、コールオブデューティ４　ＭＷ２を購入し、ウキウキ気分でプレイしているＦ２０Ｃでございます。
スナイプが楽しくて仕方ないっすｗｗ

逆にスナイパーさんに、頭に風穴開けられ、何回死んだか分かりませんが……ちょっと顔出しただけなのに……その瞬間にズバン！ですよ……

と、どうでもいい話はここまでで、本編どうぞ～

Ｍｅｍｏｒｙ，１６　天才の証明、だが変態である

「アーカーシャ、ちょっと起きろ」

『も～……なんなのよ……人がせっかく良い気持ちで寝てたのに～……ふぁ～』

「ちょいと訳ありだ。いいからさっさと武器化しろって」

『しゃーない男ねぇ。はいは～い……』

庭に出たルークは、懐から取り出した待機状態の相棒、アーカーシャを取り出して一言二言話すと、待機状態のデバイスが鞘に収まった状態の剣に変化した。
刃は西洋剣タイプのモノにしては薄型で、ゴツさは感じられない。
無駄を削ぎ落した洗練された剣だということが、鞘に収まった状態からも分かる。

「ホムラ、お前もデバイスを出してみ。あ、バリアジャケットは要らないからな」

「はい。……シラヌイ」

『お任せを』

そして、ホムラもルークに促されてシラヌイを武器化し、腰に鞘に

収まった状態で出現させる。ルークが西洋剣なのに対し、彼のは刀。タイプは違うかもしれないが、二人の戦闘スタイルは非常に良くにている。だからこそ、なのはもホムラの指導をルークに頼もうと思ったわけで。

スラ……

「……」

「へぇ～……綺麗な剣だな。よく手入れもしてある」

『光栄です』

ホムラが鞘からシラヌイを抜くと、その銀色の刃の美しさに、ルークは感心していた。武器の手入れが良く行き届いているということは、良い戦士の証拠だと常々思っているのだ。

「そう言えば……ホムラさんの戦う所って初めて見ることになりません？」

「あ、そう言えば……」

そして、庭と今を繋ぐ窓を境界線に、ギャラリーを決め込むヴィヴィオ達。彼女達としても、ホムラの戦い方には興味があったし、ルークの力も見てみたいと思っていた。

そこに来て初めて気がついたことではあるが、ヴィヴィオとコロナが言ったように、ホムラの対人戦闘はこれが初めてではなかろうか。まぁ、今回は剣の一撃を見るという事なので、戦闘という部類に分けるべきなのかは微妙なラインだが。

「アインハルトさんは、ホムラさんの戦っているところ見たことは……？」

「いえ、戦闘と呼べるものは一度も。人助けや、私との組み手などなら何度かありますが……」

まぁ、普通に生活しているだけでは、そうそう争いごとになって剣を抜くという状況に出くわすほうが難しい。
彼らの主な活動拠点は学園なので、その周囲の治安はそれなりのものであるということも無関係ではないだろう。

「ねぇ、なのはママ？　ホムラさんって、実際のところはどれくらい強いの？」

「う～ん……そうだねぇ……。魔道士のランク自体は、空戦Ｂ－だから、一般の局員と同じくらい、もしくは少し下ってところかな？　でも、年齢を考えると十分過ぎるくらいだね。もう何年かしたら、とんでもなく強くなってると思うよ？」

「「「「へぇ～～……！」」」」

本人の知らないところで、物凄い評価をされているのだが、ホムラ達の耳には入っていない。
ヴィヴィオ達が、なのはの話しぶりから推測したホムラの能力の高さに驚きの声を挙げている中、ホムラとルークは今回の試験のような物について話す。

「やり方は何でもいい、一発撃ち込んでこい。まぁ、初対面の人間に全力で斬りかかれなんて言われて、そんなこと出来るわけ無いのは分かってるから、そう気負わずにな。お前のペースで、お前の一番得意な型でいい」

「は、はい」

ルークにそう言われ、とちりながらも返事をするホムラ。一瞬でこちらの戸惑いの心を見破られてしまい、少し驚きはしたものの、それがルークの実力の高さ、剣士としての経験の豊かさの証明になった。

「では……！」

そう言いつつ、ホムラは抜身のシラヌイを正面に構える。そして、ゆっくりとルークの身体全体に対し、身体のアンテナを全開にする。筋肉の動き、呼吸のリズム、視線の動きなどなど、相手の小さな情報から隙を見出す。

ある意味、一対一では基本的なことだろう。

「……」

対するルークは、アーカーシャを抜くこともなく、直立不動のまま何もしない。しかし、その表情には先程のようなふざけた様子もなければ、驕った様子も感じられない。
純粋に、目の前のホムラに対して意識を向けているようだ。

そして、ふたりの距離は約5メートル強の距離を保ったままになる。
そのまま……二人は硬直したまま動かない。

「……動きませんね、どっちも……」

「ホムラさんも、なんで攻撃しないんだろう……？　ルークさん、完全に棒立ちだし、剣も抜いてないのに……」

その様子を見ているコロナとリオ達が、二人がピクリとも動かないことに首を傾げる。ただ単に、ルークに一撃を放つだけという話だったので、すぐ終わると思われていたのだが、予想は大きく外れることになっている。

「いえ……あれは動かないのではなく、動けないんです」

「動けない？」

「（へぇ～……流石って言えばいいのかな……？　アインハルトちゃんは分かってるんだ、この硬直の意味が……）」

しかし、コロナ達の声に、アインハルトがそう呟く。彼女には分かったのだろう、ホムラが一歩も動くことが出来ない訳が。

なのはは、そんな彼女の洞察力を見て、思わず感心してしまっていた。

「格闘技でも剣術でも、『間合い』というものが重要なファクターになっています。ルークさんは、剣を抜いてすらいませんが、恐らくはホムラさんが立ち止まっているあの距離、五メートルほどのラインがルークさんの間合いなんです。目算ですが、あの距離に入った瞬間、ルークさんはいつでも抜刀して攻撃することが出来るのでしょう」

「「ふむふむ……」」

「私はルークさんがどれだけお強いのかは存じ上げませんが、ホムラさんは肌で感じているんだと思います、相手がどれほどの実力者なのかを。だからこそ、あの五メートルのライン、ルークさんの間合いに入ることが出来ずにいるんです」

そう、要するに間合いの問題なのだ。

ホムラが、剣を構えたまま一歩も動けない理由は、ルークの圧倒的な戦闘経験からくる間合いの広さだ。

「（ルークくんほどの使い手なら、間合いに入った瞬間と同時に攻撃に転じることが出来る。アインハルトちゃんの言ったとおり、ホムラくんはルークくんの間合いの結界を理解して、そこに入れずにいるんだね……でも、止まってるままじゃ何も進まないってことも分かってるよね？）」

なのははもちろん、そのことに気が付いていた。
が、彼女の言うとおりこのまま膠着状態を続けていても何の意味もない。ルークはホムラの一撃を見せてみろといったのだから、剣を放たなければ。

「（どこにも隙がない……剣を抜いてもいないのに……これ以上進んだら、危ないって……身体がそう言ってる……。でも、このまま止まってても仕方が無いぞ……？）」

ホムラは、緊張感のある空気の中、シラヌイを握る手に力を込めた。剣を扱う者にとって、間合いの取り方や、相手のそれを感知する能力は必須だ。
その点から言えば、ホムラの感覚は非常によく研ぎ澄まされている。

「（……ルークさんは、一番得意な型で来いと言った……

……だったら……！）」

そう考えたホムラは、一度体に入った力を抜き、構えを解いた。
そして、手にしていたシラヌイを、鞘に収める。

キンッ！

「……」

「あれ？　ホムラさん、剣を戻しちゃったよ？　もしかして、降参……？」

「ううん、違うよ。あれは抜刀術の構え、剣を鞘に納めた状態から抜き放って、一撃を繰り出す技。ホムラくんが一番得意にしてる技だよ」

剣を収めてしまったホムラを、降参したのかと勘違いしたヴィヴィオに、なのはが解説を入れて説明する。
彼女の言ったとおり、ホムラには降参のつもりなど無く、抜刀術によって一撃を放つ為に体勢を変えたに過ぎない。

「（……よし……間合いは確かに怖いけど、一撃を見せないとお話にならない……！　一番得意な抜刀術で、僕の力を見極めてもらう！）」

ホムラは、精神統一し、ルークの姿を正面に捉え抜刀の構えに入る。
足に力が入るが、余計な力は入れない。必要最低限の、最も効率的な力の配分を意識し、ルークの間合いに飛び込まなければならない。

「……」

その場に居るヴィヴィオ達が固唾を飲んで見守る中、相変わらず微動だにしないルークと、抜刀術の構えをとったホムラの二人の視線が交差する。

そして……

「っ！！」

ホムラが、強烈な踏み込みからルークの間合いに飛び込んだ。縮地は使っていないにも関わらず、その速度はかなりのもので、ルークは感心してしまった。

そのまま、その踏み込みからホムラはシラヌイに手を掛け、流れるような動きで抜刀、ルークに一撃を放った。

その一瞬の間に、ホムラの視界に、なにか赤い一閃が見えたような気がした。

キィィィンッ！！

「え？」

攻撃を放ち、ルークが受け止める。ホムラはきっとそうなるのだろうと思っていた。

しかし、結果だけを伝えよう。ホムラの放った一撃は、受け止められるどころか弾き飛ばされていた。

トス！

そんな音を立てて、空中を舞っていたシラヌイが地面に突き刺さる。

ホムラの放った抜刀術は、ルークによって剣ごと撃ち弾かれてしまったようだ。

キン……

そして、いつの間にかホムラの背後に立ち回っていたルークが、背を向けたままアーカーシャを納刀した音が聞こえる。

「（い、いま……何をされた……？）」

ホムラは、地面に突き刺さったシラヌイと、ルークの姿を見て、何が起こったのか全く分からないといった様子である。いや、正しく言えばルークがいつの間に、抜刀して自分の剣を弾き飛ばしたのか、

その瞬間が全く見えなかったのだ。

「ね、ねぇクゥちゃん……？　今の……見えた？」

「う、ううん……変態の兄ちゃんが、一瞬剣に手を掛けたとこくらいしか……」

「わ、私なんかそれすら見えなかったんだけど……」

コロナ、クゥ、リオ達もホムラ同様に今の一瞬の出来事が見えなかったらしく、何が何だかといった風になっている。

「あ、アインハルトさん……見えました？」

「い、いえ……恥ずかしながら……全く。……ホムラさんが抜刀したところまではしっかり見えていたんですが、ルークさんが攻撃した瞬間は少ししか……」

ヴィヴィオやアインハルトでさえも、この様子だ。この中で今の一瞬の出来事を理解できているのは、なのはにフェイト、ノーヴェにルーク本人くらいのものだろう。

「な、なのはさん……？」

「うん、今のは仕方ないね。ルークくんが、ホムラくんの抜刀術か

らの一撃を、それよりももっと早い抜刀で弾き飛ばした。ただそれだけなんだけど、さすがにみんなには速すぎたかな……」

「ルークも口だけじゃねぇからな。あいつの剣速は、ハッキリ言って神業だよ」

困った風なリオの声に、なのはとノーヴェが軽く説明してやる。ルークが一瞬の間に行った動作は、ひどく単純なものだ。しかし、問題はその速度。

アインハルトやホムラの目にも映らないほどの剣速。ホムラの縮地とは、また種類の違った神速が、そこにはあったのだ。

「……悪くない。スピードも申し分ないし、踏み込みから抜刀までの流れはかなり形になってる。でも、如何せんパワー不足だな」

「あ…はい…」

この一回だけの接触で、ルークはかなりのホムラに関する情報を得ることができたことだろう。

彼の長所はもちろん、課題となっているパワー不足の点まで把握することが出来た。

ホムラも、パワー不足に関しては自覚していたようで、ルークに改めて指摘され少し俯く。

「そう落ち込むことでもないだろ。パワーなんぞ、体がデカくなりゃ、勝手に付く。今お前が意識すべきなのは、踏み込みと剣閃だ」

「あ……」

ルークはぶっきら棒にしながらそう話す。少し分かりにくいかもしれないが、ホムラの足りない部分が何なのか教えてくれているのだ。

どうやら、今のホムラの一撃はルークの試験を通過したようである。それが分かったようで、ホムラはホッとしたような顔をしながらも、しっかりとルークの話を聞いていた。

「それに、お前のスピードは、あんなもんじゃないんだろ？」

「え？　どうして…」

「俺もバカじゃない。お前のマックスのスピードに、まだまだ伸びシロがあることくらいは分かるさ。今さっきの速度から予想するに、とんでもなく速いんだろ」

縮地そのものがバレタわけではないが、ホムラのスピードがまだまだ全力ではないことまで見破ったルーク。

本当に、変態ではない時のこの男はマトモ、いや一流の魔導師なのだと見せつけられてしまう。

「そのあたりはまた模擬戦で見せてくれればいいとして……まぁ、

その……なんだ……オフトレの間は、取りあえず俺が教える……」

「あ、はい！　ありがとうございます！！」

「でで、でもだな！！　俺はその……誰かに教えたことなんてないから、あんまり期待するなよ！？　細かいとことかは、なのはさんと要相談だ。　いいですよね、なのはさん？」

「うん、もちろん♪　私もそのつもりだったし」

少し照れながら、ホムラに師匠就任（仮）宣言をするルーク。だが、彼自身、教導に関してはど素人だ。そのあたりに関しては、なのはに手を借りることになるだろう。

「よろしくお願いします、師匠！」

「おおぅ……なんだこの妙なくすぐったさは……若干テンション上がってきた……」

「にゃはは♪　生徒が出来るって、何とも言えない気分でしょ？」

ホムラに師匠と呼ばれ、テンションが上がった様子のルーク。教導官としては、その気持ちが少し分かるらしく、なのはは笑いながらうんうんと頷いている。

と、そこから、なのはとルークは、そこから念話を飛ばし合い、周

囲の人間に聞かれないように話しだす。

『（で？　ホムラくんの力は、ルーク君のお眼鏡に適ったってことでいいのかな？）』

『（そんな偉くなったつもりはないんですけどね……。ただ、別にさっきの一撃がどうこうで、教導を請け負った訳じゃないんです）』

『（へぇ？　というと、どういうことなのかな？）』

ホムラについて、教導のプロ、剣のプロとして、今回の試験で思ったことを念話で話す二人。ホムラ本人に聞かれるのは、本人の為にならないし、他の誰かに聞かせるような話でもなかったからだ。

『（俺が本当に見ていたところは、俺の間合いにどういうタイミングで飛び込んでくるかどうか。そして、まず躊躇うかどうかだったんです）』

『（間合いかぁ……ホムラくんは、ルーク君の間合いに、かなり敏感に対応してたみたいだけど……）』

『（えぇ。斬りかかって来いって言ったのは俺ですけど、俺の間合いにも気がつかないでバカ正直に突っ込んできた時は、教導は降りるつもりだったんですよ。間合いの取り方は基本だし、それを感知する鋭敏な感覚って言うのが、剣を扱うやつには必須ですから）』

ルークが本当に重要視していたのは、ホムラがルークの間合いの結界に気づき、それに対して躊躇うかどうかだった。
ど素人のように突っ込んでくるのなら不合格、間合いに気がついて攻撃を躊躇ったのなら合格、という感じだ。

『（勢いって言うのも、確かに大事ですけど、自分と相手の力量差って言うのを見極められずに突っ込むのは無謀ですからね。その当たりのことを分かってるのかどうかを、見たかったんです）』

『（正面の構えから、抜刀術に切り替えたホムラくんは、間合いにもしっかり気がついた上で攻撃を放ってきた。だから合格ってこと？）』

『（そんなとこです。ていうか、一から教えろって言われると俺の方がてんてこ舞いになっちゃうんで……）』

『（にゃはは、それはルーク君の名誉のために黙っておいてあげるね）』

今回の試験の結果の分かれ目を話し合い、お互いに今後のホムラの指導をしていく立場として、考えることは山ほどある。
自分の指導で、若者の未来を分かつことになるかもしれない。少し大げさかもしれないが、人に何かを教えるという事は、非常に責任の重い仕事なのだ。
その事を、ルークはこの時少しだけだが考え始めていた。

『（でも、ホムラには、決定的に欠けてるものがあるんです）』

『（それって……パワーとかの話とかではないよね？）』

『（えぇ。剣を受けてみて分かったんですよ。あいつには、致命的に欠如してるものがある……それに気が付かないようなら……そう遠くない未来……あいつは死にます）』

剣を受けた上で、ホムラに対して感じた一つの欠点のことと一緒に……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ルークとなのはが念話で話している最中……

「むぅ～……なんだかルークとなのはがいい雰囲気……」

「知ってる！！　俺知ってるよ？　これ寝取られフラグって言うんだよね！　ほら、お昼にやってるドラマとかでよくある感じの……」

「ね、寝取られ……なのはが……ルークを……？　……だ、ダメーーー！！　それだけは駄目だよなのは！！！　ルークは私のなのーーー！！」

「ふぇ、フェイトちゃん！？」

クゥの一言で、妙な嫉妬心に火が付いたのか、いきなり涙目になりながらなのはに泣きつくフェイト。なのははなのはで、何が何だか分からないといった様子だ。

先ほどまでの緊張感あふれる空気はどこへやら、庭は一気に和やかムードに変化していった。

「く、クゥちゃん！　まだそういうテレビは見ちゃダメ！！」

「え～？　なんでさ？」

「だ、だって……そういうテレビってその……／／／／／／　ちょっと、エッチな感じのあれが……／／／／……と、兎に角、クゥちゃんは見ちゃダメなのー！！！」

クゥはコロナに必死な様子で昼ドラ観賞を禁止され、コロナは何を想像したのか顔が真っ赤になっている。恥ずかしいのなら言わなければいいのだが、お姉さんとしては……そう、放ってはおけないのだ。

「お疲れさまでした、ホムラさん」

「あはは……師匠が何したのか、全然見えなかった……ちょっ

と、カッコ悪いかも…」

「そんなことないですよ。ホムラさんの力を認めたからこそ、ルークさんは教導を引き受けてくださったのだと思いますよ？」

「そう…なのかな……」

そして、アインハルトは弾き飛ばされたシラヌイを引き抜き、鞘に納めているホムラに話し掛けていた。

ルーク達は、未だに『寝取られちゃダメだからね！？』とか『俺が寝るのはフェイトとだけだ！』とか、バカなやり取りを繰り広げている。本当に懲りない。

ホムラは、ルークの前にあっけなく剣を弾き飛ばされたことが、少しショックだったようで、バツの悪そうな顔をしている。彼としても、圧倒的な実力差があるのは承知済みだが、悔しさは当然ある。

「ホムラさん、今の私達は、まだまだ発展途上なんです。だから、今すぐルークさんヴィヴィオさんのお母様相手に勝とうとしても、戦闘経験や修練の差というものがありますから、そう簡単には勝たせてもらえるわけがありません」

「……そうだね。あはは…分かってたはずのことなのに、いざってなると頭から抜けちゃうよ……」

アインハルトにそう窘められ、ホムラは頭に手をやりながら、少し恥ずかしそうに笑う。無論、勝ちに行く、互角の戦いをして見せる、

という気概は大いに結構だ。逆に、その精神がなければ、成長などあり得ないし、その伸びも高が知れている。

ハングリー精神とでも言えばいいのか、上昇志向が強いことは決して悪いことではない。要するに、その上昇志向に、今現在の自分自身の力を認める強さが必要なのだ。

「今は、歯が立たないけど……いつかは……きっと…！」

「はい、私も同じ考えです。……だ、だから…その……一緒に…強くなりましょう……」

「……あぁ…そうだね…」

二人は、視線を交わしながら、そう言って力強く頷いた。アインハルトの頬には、若干の朱が差していたが、ホムラがそれに気がつくはずはなかった。

そして、そんな二人のことを、複雑な心境で見つめる少女のことにも……気がつくことはなかったのだ。

「ホムラさんとアインハルトさん……またなんだか通じ合ってる感じ……いいなぁ…」

二人の姿を見て、知らない間にヴィヴィオは自分の胸に手を当てていた。

少し、チクリと、胸が痛い。そんな不思議な感覚に戸惑いながら。

Ｍｅｍｏｒｙ，１６　天才の証明、だが変態である（後書き）

Ｆ２０Ｃ「おい、あのカッコイイ新キャラは誰だ？」

閣下「皆のルークさんだよ！！　みんな大好きルークさん！！！」

Ｆ２０Ｃ「ちょっと何言ってるか分かんないです」

フェイト「なのは……ほんとにルーク寝取らない？」

なのは「取らないってば……フェイトちゃんの旦那さんなんだし……」

フェイト「だ、だよね……／／／／／」

クゥ「と、油断させておいて、ある日寝室のドアを開くと、ベッドの上で変態兄ちゃんに覆いかぶさるようにしているなのはさんの姿が……」

フェイト「な、なのはーーーーー！！！？」

なのは「だ、だから違うってばぁぁぁぁぁ！！！」

クゥ「きゃはははは！！！♪　大人っておもしろ」

コロナ「だから、クゥちゃんはあぁ言うテレビは見ちゃダメーーー！！！」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；１７　不思議な出会い

次回、新キャラ登場？

アインハルト「新キャラ……また女の子でしょうか……？」

ホムラ「次元船の中でのお話だから、ルーテシアさん達とは違うんだろうけど……」

アインハルト「どちらにしろ、向こうに着いたら着いたで……大変になりそうですね……いろんな意味で」

ホムラ「？？？？」

Ｍｅｍｏｒｙ，１７　不思議な出会い（前書き）

ましろ色シンフォニーＰＳＰ版をプレイ中……

ヒロイン昇格したキャラが可愛すぎて困る……他のキャラのルート行けねぇじゃんか……紗凪が可愛すぎて生きるのが辛い

Memory;17　不思議な出会い

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

『恋の苦しみは、あらゆる他の悦びよりもずっと愉しい』

ジョン・ドライデン（英・詩人）【暴虐な恋】より

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

オフトレの拠点としてお世話になる、ルーテシアとその母メガーヌが住む世界、無人世界カルナージはクラナガンから臨行次元船で約四時間の道のりだ。

標準時差は七時間で、一年を通して温暖な大自然の恵み豊かな世界である。

その道中の次元船の中で、ホムラ達は思い思いの時間を過ごしていた。

ルーク、フェイト、シエル一家は、席に座ってお昼寝中。なのはや、途中で合流したティアナとスバル、ノーヴェは近況報告や、他愛ないお話タイムで時間を過ごしていた。

四時間という長旅なので、最後あたりは全員寝ていることだろうが。

そして、肝心のホムラ達は……

「6」↑ヴィヴィオ

「7」↑コロナ

「8」↑クゥ

「9」↑リオ

「…10」↑ホムラ

「あ、ホムラさん、それダウトです」

「orz」

平和に、ダウトに興じていた。

座ってすぐに寝てしまうというのも味気ないという事で、リオが持ってきたトランプでいろいろな種類のゲームをしているのだが……

…戦況はホムラにとって芳しいものではなかった。

アインハルトが宣言した瞬間、目の前に溜まったカードがすべて自分の手札にカムバックし、ホムラの上がりは遠のいた。

というか、これでもう何回目になるか分からないくらい、ホムラはアインハルトに嘘を見破られていた。

「ホムラ兄ちゃん……トランプめちゃめちゃ弱いんだね……さっきもばばぬき最下位ばっかだったし……」

「アインハルトさんがカード抜こうとして、ホムラさんの方を見つめると、ポーカーフェイスが崩れちゃってましたもんね……顔真っ赤にして…」

「し、仕方ないんだよ……／／／／　なんだか急に恥ずかしくなってきて……」

クゥとリオが言うように、ホムラはトランプやカードゲームといったものが苦手というか、アインハルト絡みで多少冷静さを失ってしまう事があり、そこを突かれて負けるというのがパターン化していた。

「ダウトで言えば、アインハルトさんってホムラさんの嘘よく見破れますよね？　まるで狙い澄ましたみたいに……」

「え…いえ……／／／／　なんとなく、ホムラさんの様子が怪しいなと思って、言ってみると当たってたと言うだけなので……」

「へぇ～……ホムラ兄ちゃんのこと、良く見てるんだね？　旦那の浮気に過敏な嫁のごとく」

アイホム「「そ、そんなことは！！／／／／／／／／　っていうか、嫁ってなに（なんですか）？？！」」

コロナが思い出したように、アインハルトのホムラのダウト的中率の話を持ち出すと、アインハルトもホムラ同様に顔を赤くしてしまう。
そこに、クゥの素直すぎる感想が入り、二人はシンクロしたように反論するが、まったく説得力がないという事はお分かりのとおりである。

「とういうか、ぶっちゃけて聞いちゃいたいんですけど、お二人って付き合ってるんですか？」

お二人「「えぇ！？／／／／／／」」

「あ、それは俺も気になってた。学校でもいつも一緒みたいだし、俺たちと知り合うよりも前からの仲みたいだし……」

リオとクゥのぶっちゃけトークに、アインハルトとホムラは同時に耳まで赤くなる。そんな事実は残念ながら無いのだが、妙に悪い気はしないのが不思議だ。
しかし、お互いに気を遣いあってか、二人はリオ達にその事実を否定するように返事をした。

「僕とアインハルトは……そんなんじゃないよ」

「え、えぇ……お友達ですから……お友達……そういった浮いた話は……」

「「「ふ～ん……？」」」

未だに疑うような視線を向けてくる、リオ、コロナ、クゥ。
本当に、事実を述べているだけなのに、アインハルトとホムラはこの時、胸に少し鈍い痛みを感じた。少し切ない痛みというか、言いようのない胸の痛みだった。

トランプで遊んでいて話が脱線し、恋バナに発展、お互いの関係を普通に話しただけのはずなのに……

「三人とも、そのくらいでやめておこうよ。ホムラさんもアインハルトさんも困ってるよ？」

と、そんなやり取りをそれまで黙って見守っていたヴィヴィオが、追及の視線をアインハルトとホムラに向けていたリオ達を窘める。

三人は、ヴィヴィオにそう言われてバツの悪そうな顔になり、ホムラ達に『ごめんなさい…』と申し訳なさげに謝った。

「わたしも、二人の事は……その……お似合いかなって思いますけど……／／／／／／」

「「う……／／／／／」」

が、ヴィヴィオもその手の話に興味がないわけがない。加えて、彼女自身もホムラとアインハルトの二人に関しては少し複雑な気持ちを抱えている。
今も、二人の仲を『お似合い』と形容したが、少し胸が痛くなってしまった。

「み、皆がそう思ってくれるのはその……僕としては光栄なことだけどさ、僕なんかじゃアインハルトには釣り合わないって言うか……」

「そ、そんなことはありません！」

「へ？」

「あ……／／／／／／　あの、その……そういった事実は無いにしろ……えっと……ホムラさんは十分に素敵な方だと思いますから……そう、そういうことなんです…よ？」

いや、最後だけ疑問形にされても、ホムラは困ってしまうわけなのだが。
しかし、そう言うアインハルトの表情は、真っ赤になりながらも真剣で、嘘をついて言うようには到底見えなかった。

「ねぇ、これって新手のイチャイチャ行為なのかな……？」

「多分、二人にそのつもりはないと思うよ？　きっと天然でここまでやれるんだと思う……」

「いいなぁ……こんな風に、どこかこそばゆい感じっていうの…
……ねぇ、クゥちゃん？」

「にゃ、にゃんでそこで俺の振るのさ！？」

リオが呆れ気味に、アイホムの事を見ながらそう言うと、クゥがうんうんと頷きながらそう言う。
しかし、そこから飛び火したようにコロナが少し熱っぽい視線をクゥに送って来ると、クゥは真っ赤になりながらツンツンし始める。
完全に照れまくっているようだ。

「（……なんでだろう…？　やっぱり、二人がこう……距離が近いように見えて……胸が痛い……どうして…？）」

そして、ヴィヴィオもアインハルトとホムラの様子を見て、改めて胸の痛みを認識する。キュウっと締め付けられるような、切ない痛みだ。
ヴィヴィオは、胸を押さえるようにしながら、もの鬱毛に二人の事を見ていた。

「……あ……えっと／／／／／　僕ちょっと、飲み物買ってくるから……」

「あ……」

と、その周囲からの視線に少し耐え切れなくなってしまったのか、ホムラは顔を真っ赤にしたまま、席を立って次元船の多目的ホールの方に歩いて行ってしまった。
彼自身、少し頭を冷やしたかったのだろう。
アインハルトも、それを理解してなのか一緒に行こうとしたのを思いとどまった。

「あ～あ……ホムラさん逃げちゃった……悪いことしちゃったかなぁ……」

「後でちゃんと謝ろう？　ちょっと余計なこと言っちゃったかもだし……」

「俺もそう思う。アインハルトお姉ちゃんも、ごめんね……」

「い、いえ……／／／／／　私は別に……ホムラさんも、これくらいで怒ったりはしないと思うので、そこまで深く気にすることもないと思いますから……」

リオ、コロナ、クゥがそう言って、本日二度目のゴメンナサイをすると、アインハルトも少し恥ずかしそうだったが、別段怒った風でもなくそう返事をした。

そんな中、ヴィヴィオ一人だけが、ホムラの歩いて行ってしまった多目的ホールの方向に、視線を向けたままだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「はぁ……変な感じになっちゃったなぁ……」

ホムラは、多目的ホールの椅子に腰かけながら、小さく呟いた。次元船の客席スペースに隣接するこの多目的ホールには、売店や待合室など少し気を休めたい時にちょうどいい場所となっている。

ホールには人もまばらで、少し頭の中を整理したかったホムラにとっては、それが何よりもありがたいことだった。

「アインハルトとのこと……なんでこんなに……胸が苦しかったり、くすぐったいような気持ちになるんだ…？」

クゥ達にアインハルトとの事を邪推された時、不思議と心の中はくすぐったい気持で一杯になった。彼らの言うような関係に見られることが、そう……嬉しかったように思える。

逆に、自分でその関係を否定した時、何故だか分からないほどに、胸が締め付けられた。アインハルトの切なそうな表情を見ると、余計に苦しくなった。

「あ～……どうしちゃったんだよ……僕は。……こんなの……初めてだ……／／／／／」

頭を整理するつもりが、逆にさらなる混乱を招いてしまった。ホムラ自身、こんな気持ちになるのは生まれて初めてだし、どうしていいのか分からなくなってしまった。

一人の女の子を、ここまで意識したことなど無かったし、そんな余裕すら無かった。ただ、目的を、両親の仇を探し出して……その事しか考えていなかった。

加えて、ホムラには一つ、大切な感情が欠如しかかっていた事もその原因となっていた。

その時だった。

その人物は、いつからそこに居たのか。ホムラが油断していたとはいえ、その存在に全く気付く事は無く、声を掛けられてから初めて気が付いた。

「悩み事かな、少年？」

「え？」

ホムラが、声のした方に視線を向けると、そこには一人の青年が立っていた。白いワイシャツにジャケット、スラックス姿、ツーポイントタイプのメガネを掛けた、少しフォーマルなスタイルの服装の青年だ。歳は、２０歳くらいだろうか。

「（あれ……？　この人……クゥに……少し似てる……？）」

と、その青年の顔に、ホムラは少し見覚えがった。というか、似てる人間を知っていた。

青年の顔は、先ほどまで一緒に話していた、クゥに似ており、彼が大人になった姿を見ているようだった。違うところを探せば、クゥの髪の色が母親譲りのオレンジ色なのに対し、青年の髪は黒色をしているところだろうか。瞳の色も、クゥとは違っていた。

「俺の顔が、知り合いにでも似てるかな？」

「え……どうして…」

「おや、当たりだったか。適当に言ってみただけなんだけど、正解だったみたいだ」

驚いた。まるで心を読まれたような気がした。

ホムラはいきなり現れて声を掛けてきたこの青年に、一瞬身構えてしまったが、なんとなく悪い人間ではないように感じたので、少し緊張を緩めた。

「知り合いの子に、少しあなたに似てる子がいまして……」

「……そう…。まぁ、世界には自分と同じ顔をしたやつが三人居

るとか居ないとか言うから、そういう偶然もあるんだろう」

「ははは…、えぇ、きっとそうだと思います」

青年は、小さな笑みを浮かべ、ホムラにそう返した。
取り留めのない話ではあるが、妙にこの青年の声には清涼感というか、爽快感というか、心に風を送り込まれたような気分になる力があるように感じた。

「で？　さっきから溜息ばかりついてるようだが、何かあったのか？」

「あ……えと……すこし……」

話が最初に戻り、目の前の青年はもう一度ホムラに訪ねてきた。本当ならば、見ず知らずの人間に相談するような事柄ではないのだろうが、逆に知人には相談しにくい事柄というものは往々にして存在する。

こうして話したのも何かの縁だと感じたホムラは、この青年に少しだけ自分の悩みを話してみることにした。

「一ヶ月くらい前から、仲良くしてる女の子がいるんですけど……あ、仲良くって言っても友達として、で……。最近、その女の子の事が妙に気になるっていうか……心の中に引っかかるというか……」

気恥ずかしい話ではあるが、他に聞いている人もいないので、心の中に燻っている物を言葉にして吐き出してみる。
こうするだけでも、かなり腹につっかえていたものが少なくなったような気さえした。

「ほぉ～……要するに、惚れてるってことか？」

「ほほほ、惚れて…！！？　い、いや、そういうことじゃなくって……！！　だいたい、僕なんかじゃ、全然釣り合わないくらい綺麗で、凛としてて……」

青年のどストレートなリアクションに、ホムラは瞬間湯沸かし器のように顔を赤くして、それを否定した。まぁ、誰の目から見ても説得力は皆無だが。

「その子のことばっかり考えて、辛いんじゃないのか？」

「そ、それはまぁ……そうかもしれないです……でも、なんでそうなるのかが、分からなくて……こんなことも初めてなもので……」

「なるほどねぇ……恋なのか友情なのか、はたまた憧れなのか。良く分からんというわけか。（ま、第三者から見れば明らかに恋なんだが……）」

青年は、ホムラの内情を考慮し、あえて言い方をぼかして可能性を列挙した。まぁ、人の感情というものはデリケートなものだ。与える衝撃が少し強すぎるだけでも、心の在り方、生の感情というものは移ろってしまう。

「まぁ、なんだ。まだ出会って一カ月なんだろ？　だったら、もう少し時間を掛けて相手の事を見て、知ることから始めるのもありだとは思うけどな」

「それは確かに……」

「焦りまくって出した結論なんて、いいもんじゃないって相場は決まってる。まだまだ若いんだ、結論を急がずに自分とその子に、ゆっくり向き合ってみるのが一番じゃないのかなと」

加えて、こういった問題は人から答えを貰うべきことではない。青年も、その当たりの事は熟知しているようで、ホムラに対して『時間を掛けて考える』という選択肢を提示してみる。

「でも、今もかなり考えてはいるんですけど……どうにも……」

「そりゃ違う。今のお前は、その子との事を考えてるんじゃない。ただ単に、同じ思考をグルグルとループしてるだけだ。自分の頭の中で袋小路に陥ってる時点で、それは『考えてる』事にはなってないんだよ。その事を、人は総じて『悩み』って言うんじゃないかと、俺は思うね」

「う……そう言われてしまうと…返す言葉もないです……」

『考えること』と、『考えているように錯覚すること』は全くの別物だ。思考の袋小路というのは、自分は考えているんだと錯覚しているにすぎない。

言ってみれば、思考停止している状態と何ら変わりない。青年は、その事をホムラに諭すように言った。

「それと、ついでに言うとだな。お前はさっき、その子と自分は釣り合ってないって言ったよな？　それは誰かにそう言われたのか？」

「い、いえ……ただ、どう考えても僕なんかじゃ……」

「じゃあ、それはただのお前の決め付けだろう。お前が勝手にそう思い込んで、可能性を狭めてるだけ。実に非生産的な考え方だと思うね」

青年は、さらにホムラの悪い点を指摘してきた。人の事をよく観察していると、ホムラは話の流れも考えずにそんな事を思ってしまった。

「その女の子も、お前じゃ自分に釣り合わないって、そう言ったか？」

「いえ、アインハルトはそんなこと言う人じゃなくて……！」

「なら、お前は自分の頭だけで考えた、自分勝手な認識をそのアインハルトって子に押し付けたことになる。今頃、その子も悩んでるかもしれないなぁ…？」

「あ……」

青年の言葉で、ホムラは頭をハンマーで叩かれたような衝撃を覚えた。確かに、アインハルトはホムラに対して、『自分とでは釣り合わない』など言ったこともないし、逆に否定していたほどだ。

事実、彼女もホムラとのことで悩んでいる節がある。ホムラの勝手な決め付けが、その悩みの一因になっていないとは言い切れない。

「分かったか？　お前のそのネガティブ思考、お前自身にとっても、アインハルトって子にとっても何のメリットにもなってない。そのくせ、結論を急ぎすぎてる。少しはゆっくり、前向きに歩く方法を覚えたほうがいい」

「前向きに……ゆっくり……」

そう言われ、ホムラはアインハルトとの会話を思い出した。縮地と抜刀術の複合技の練習で焦っていた時、アインハルトにも『焦らずゆっくりと練習すればいい』と、そう言われた。

きっと、それは精神的な面でも同じことなのだろう。その事を、目の前の青年は言っているのだ。

『急がば回れ』と言っては少し妙かもしれないが、何事も急ぎすぎ

ては良い事はない。アインハルトにしても、目の前の青年にしても、話の核はそういう意味なのだ。

「……少しは、心のモヤモヤが晴れたみたいだな。ま、最初から必要なことは分かってたみたいだが」

「……はい。少し、大事な事を忘れてたみたいで…それを改めて認識できたっていうか…」

「ならよかった……っと」

ホムラが少し晴れやかな顔でそう答えると、青年は座っていた椅子から腰を上げて立ちあがる。
そして、ホムラに背を向けて歩きだしてしまう。

「あ、あの！！　話を聞いてもらって、ありがとうございます！
えっと……僕はホムラって言います、あなたは……」

「あ？　あ～、そういや名乗ってなかったよな、お互いに」

ホムラが、その背中に声を掛けると、青年も思い出したように振り返ってそう呟いた。
が、彼の顔は少し困った風になってしまう。名前を明かすのに、何か問題があるのだろうかと、ホムラは首を傾げる。

「ふ～む……名乗りたいのは山々なんだが、生憎と名前がなくってね。昔はちゃんとあったみたいなんだが、その名前は、もう俺のじゃないんだ」

「え？　名前がないって……？　昔はあった？」

「俺はもう、終わってしまった存在だからな」

「……？」

不思議な事を言う人だなと、ホムラは思った。何か訳ありで、名前をホイホイ名乗れない身分なのかと考えれば辻褄が合うかもしれないが、それでも少し不自然ではあった。なにより、『終わってしまった存在』とはどういう事なのか。分からない人だと、そう思うしかなかった。

「そうだなぁ……んじゃ、『ミール』とでも呼んでくれ」

「呼んでくれって……そんなアバウトな……」

「別に、俺にとっては名前なんぞそう重要なもんじゃない。あったら便利、くらいなもんだからな」

「はぁ…？」

本当に、よく分からない人だ。ホムラはそう思いながらも、このミールという青年が悪い人間には見えなかったし、なんとなくだが、

また会うような気がした。

不思議な物言いと、すべてを理解しているかのようにホムラに助言してくれたミール。たまたま同じ次元船に乗り合わせただけだが、袖摺り合うも多少の縁という、この出会いにも何かしらの意味があるのではと、漠然とそう考えていたホムラだった。

「あ、あの！　また……会えたりしますか？」

「……？　さぁ、どうだろうな。お前が会いたいと思うなら会えるし、そうでないなら会えない。俺はどこにでもいるし、どこにもいない」

「あはは……やっぱり、ミールさんは面白い人ですね。不思議な事ばかり言う人です」

「バカにされてんのか、そうでないのか……。まぁ、いいや。んじゃ、精々そのアインハルトって子の事で頭捻って考えてみるこった。また分からん事があったら、話くらいは聞いてやる」

ホムラとそう言い交わしたミールは、背を向けた状態で手をぷらぷらと振りながら、歩いて行く。

ホムラは、そんな彼に黙って頭を下げていた。

「……期待してるよ、セカンド（第二世代）くん……」

ミールのその小さな呟きは、ホムラの耳には届かなかった。

「あ、居た居た！　ホムラさ～ん！！」

「え？……って、ヴィヴィオ？」

「やっと見つけました～……探したんですよ？」

ミールを見送っていたホムラだったが、聞きなれた声が自分の名前を呼んでいる事に気が付き、下げていた頭を上げて、声の主の方に向き直る。
そこには、金髪をツーサイドアップにした虹彩異色の少女、ヴィヴィオの姿があった。

どうやら、帰りの遅いホムラを心配して探しに来てくれたらしい。

「あ、ごめん……ちょっと、ここで人と話してて……」

「話って……誰とですか？」

「あぁ、うん。ミールさんって人で、向こうに……あれ？」

ヴィヴィオにも分かるように、背中を向けて歩いているであろうミールの姿がある方向に視線を向けたホムラだったのだが……

「???　向こうって……誰もいませんけど……」

「あれ……おかしいなぁ……？」

先ほど別れたばかりのミールの姿は、もうすでにどこにもなかったのだ。

Ｍｅｍｏｒｙ，１７　不思議な出会い（後書き）

Ｆ２０Ｃ「新キャラ登場、ってなわけで、謎の人物・ミールさん登場ですな」

ホムラ「でも、ホント不思議な人だったなぁ……なんだか、ずっと先を見ているって言うか、なんでもお見通しっていうか……」

Ｆ２０Ｃ「このお話のキーパーソンの一つでもあるから、今後も出番が出てくるはずだよ。基本的に、君らの味方でアドバイザーみたいな役柄だからな」

ホムラ「あと、今回出てきた次元船の内部構造は……」

Ｆ２０Ｃ「完全に私のオリジナルです。まぁ、未来っぽい船だし、それくらいあってもいいかなぁと」

ホムラ「で？　前書きは一体なんなのさ？」

Ｆ２０Ｃ「いや、まじで萌え死にそうなんだよ。ルート入るまでにかなり時間かかったんだけど、それまででも……もう素晴らしい……」

ホムラ「はぁ……？」

Ｆ２０Ｃ「ＰＣ版では、非攻略キャラだったのが嘘みたいな話だったし……昇格してくれて正解だったな、うんｗｗ」

ホムラ「まぁ、楽しめるゲームなら何よりだと思うよ」

アインハルト「ホムラさんはプレイ禁止ですが」

ホムラ「わわ！？　ど、どこから出てきたのさ、アインハルト……」

アインハルト「これくらい……修行の成果です」

ホムラ「どんな修行！？」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ：１８　おいでやす、カルナージ

登場人物紹介Ｖｏｌ．２　（ルーク＆ミール編）（前書き）

タイトル通り、キャラ紹介でございます。

閣下と、謎の青年ミールさんのプロフィールということで、設定資料としてお時間があれば読んでいただければ幸いでございます。

登場人物紹介Ｖｏｌ．２　（ルーク＆ミール編）

・ルーク・リーゼンベルグ・ハラオウン（またの名を閣下）

年齢：２１歳

イメージＣＶ：櫻井孝宏さん（テイルズオブグレイセス；アスベル・ラント役、コードギアスシリーズ；枢木スザク役）

タイプ：人間

身長・体重：１７８？・６８？

髪の色：金髪

瞳の色：真紅

見た目：一応、カッコいい部類には入るが、変態である。フェイト

曰く、『可愛い男の子』

専用デバイス：神剣・アーカーシャ、神剣・ダモクレス（一応二刀流だが、普段は一刀流）

好きな女の子のタイプ：フェイト、（＊´Д`）ハァハァ　可愛いよフェイト……（：．：；。：；．：）ハァハァ

魔法形式：ベルカ、ミッドチルダ式という括りがない世界で魔法を習得したため、形式的な制限はない。遠距離も近距離もそつなくこなすタイプ、だが変態である

魔力変換資質：雷

魔導師ランク：空戦Ｓ＋　だが変態である

特殊スキル：幻術とか、絶対破壊魔法とか……色々できますが、このお話では幻術くらいしか使わないかもです。

備考

前々作、『Ｌｏｓｔ　Ｍｅｍｏｒｙ』での主人公。今作では、ホムラの師匠となる。

唯一の肉親である姉共に、両親から激しいＤＶを受けいた。が、そ

の両親に殺されそうになった間際、能力に目覚めて両親を殺害してしまう。そこからは姉との二人暮らしを始め、神剣・アーカーシャにマスターとして選ばれ、故郷であるガリア帝国の最強の四人である『四聖剣』の一人となり一躍国民のヒーローになる。

が、様々な陰謀や不幸が重なり、最も大事なものを失い、精神崩壊。その後は、ガリア帝国の核とも言えるＡＩである、『イヴ』の操り人形となり、暗殺・虐殺など、四聖剣の裏にて汚れ仕事などを担当していた。

一連の出来事の真実に気がついた彼は、イヴを破壊しようとするが失敗。記憶を自分で封じ、他世界に逃走、その逃走先の世界、ミッドチルダにてフェイトと出会う。

徐々に記憶を取り戻しつつ、フェイトとの触れ合いで心の傷を癒していく。そして、再び真実に近づき、フェイトを筆頭に機動六課と共にイヴを完全破壊。

事件解決後はフェイトと結婚し、シエルという一人息子を授かり、管理局への客員魔道士として働いている。四聖剣の一人ということで、こんなでも一応は貴族である。

剣の才能に愛されていると言っていいほどの天才。戦闘能力、バトルセンスだけで言えばフェイトやなのは達を軽く飛び越すものを持っている。しかし変態である。

基本的には、フェイト命の変態。フェイト以外にはセクハラに相当する行為は滅多にないが、フェイトに対しては欲望の向かうままに変態行為に走る。死ねばいいのに。

読者様からの愛称は、『エロティック大統領』・『閣下』・『変態』など、本名を全く呼ばれない。

今作において、再び自分の罪と向きあうことに……

・ミール

年齢：不明、２０歳くらいに見える

イメージＣＶ：福山潤さん（コードギアスシリーズ；ルルーシュ役、ＷＯＲＫＩＮＧ！！；小鳥遊役）

タイプ：不明

身長・体重：１７５？・６０？

髪の色：黒

瞳の色：黒

見た目：ミステリアスが服を着たような感じ。が、口調は割と砕けている。常に余裕を持った態度で他人と接する。ホムラ曰く、『クゥに似ている、クゥを少し大人にした感じ』

専用デバイス：なし

好きな女の子のタイプ：不明

魔法形式・魔力変換資質・魔導師ランク：すべて不明

特殊スキル：不明

備考

神出鬼没で、たまにフラっと現れてはホムラやアインハルト、クゥ達に助言を残して、またフラっと居なくなる、謎の多い人物。ホムラ曰く、『よく分からないが、良い人』

ホムラのことを『セカンド（第二世代）』と呼ぶなど、人の考え及ばない事までを知っている様子。

本人曰く、自分はどこにでもいるし、どこにもいない存在。

『終わってしまった存在』である。

登場人物紹介Ｖｏｌ．２　（ルーク＆ミール編）（後書き）

Ｆ２０Ｃ「あれ？　これだけ見ると、閣下スゲェかっこ良くない？」

閣下「ふふふ、そうだよ、フェイトの旦那さんであり、元祖主人公である俺の真の姿がこれなんだよ！！！」

フェイト「ルーク……素敵…／／／／」

閣下「でへへ／／／／」

Ｆ２０Ｃ「やっぱり変態だ……」

あ、この小説、とある訓練生と覇王っ子の総合ＰＶが３０万ＰＶを突破いたしました！！

皆さん、本当にありがとうございます！！！

Ｍｅｍｏｒｙ，１８　おいでやす、カルナージ（前書き）

ぬらりひょんの孫のテレビシリーズ第二期が始まりましたね。今期のほっちゃん枠として、毎週全裸待機決定でございます。
今期期待しているのは、バカテス、ぬら孫……あとは気分ですね。いつか天魔の黒ウサギとか観るかもですが、予定は未定です。

Ｍｅｍｏｒｙ；１８　おいでやす、カルナージ

船での長旅を経て、約四時間。ホムラ達一行は、オフトレ拠点となっている無人世界カルナージに到着した。
温暖な気候からくる、気持ちの良い空気、多くの緑が心を清らかなものにしてくれるような気さえした。

「「みんな、いらっしゃ～い♪」」

「こんにちわー。お世話になりまーす♪」

カルナージの住人にして、なのはやヴィヴィオ達にとっては友人でもある、ルーテシア・アルピーノと、その母であるメガーヌが明るい笑顔と共に、ホムラたち一行を迎えてくれた。
親子ということもあるのだが、ルーテシアとメガーヌは容姿が非常によく似ている。バイオレットの長い髪と柔らかい物腰が大きなポイントだ。

「みんなで来てくれて嬉しいわ～♪　食事もいっぱい用意したから、ゆっくりしていってね」

「ありがとうございます！」

なのはやフェイト、スバル達はメガーヌとそんなやり取りをしなが

ら、久しぶりの再会を喜び合う。
そして、ちびっ子たちの方でも、同じような光景が見られた。

「ルーちゃん！」

「ルールー、久しぶり～！」

「うん、ヴィヴィオ、コロナ♪」

既知の間柄であるヴィヴィオとコロナ、ルーテシアもまたこれが久しぶりの再会だ。モニター越しの会話ならよくしているが、やはり直接あって話すのとはわけが違う。

「リオは直接会うの初めてだね」

「今までモニターだったもんね」

そして、今まではずっとモニター越しでしか会ったことがないリオとルーテシアは、今日が正式な初顔合わせということになった。
モニター越しでの会話があったので、初めましてという訳ではないが、少し妙な感じでもある。

「でもって……悪ガキ・クゥはっと……」

ササッ！

「あらら……」

そして、今度はルーテシアがクゥの姿を探すのだが、その瞬間、クゥはティアナの背中に隠れてしまった。
どうしてこうなってしまうのか、ルーテシアにしてもティアナにしても覚えが無い訳ではないので、あらら困った、程度の問題にしかならないのだが。

「ほ～ら、クゥ～♪　こっちおいで～。　また可愛い服の着せ替えにんg……モデルになって欲しいなぁ～」

「フカーーーーッ！！！」

ルーテシアがフレンドリーにクゥにそう言うも、クゥは全身の毛を逆立てて威嚇する猫のごとく、警戒心全開である。
会話の一片から、クゥが以前どんな目にあってしまったのか、想像するのはそう難しいことではないだろう。

「クゥちゃん、猫さんみたい……カワユス（＊´σ｀）エヘヘ」

「ていうか、今着せ替え人形って言いかけてなかった？　……クゥが何をされたのか、少し予想できちゃった……」

「可愛いと思っていろいろ考えたんだけどねぇ～……お気に召さなかったみたい」

コロナは猫化しているクゥにハートキャッチされ、リオはそんなクゥに同情の視線を送っていた。
主犯のルーテシアは、特に気にした様子も無いようで、あっけらかんとそう言った。というか、反省の色はないようだ。

「あ、ルールー。このお二人が、メールでも話した……」

「アインハルト・ストラトスです」

「ホムラ・スメラギです」

そして、漸くというかなんというか、ずいぶん遠回りになってしまったが、ヴィヴィオがアインハルトとホムラをルーテシアに紹介してくれた。
二人は、お辞儀をしながら自分の名前を名乗り、簡単な自己紹介とした。

「ルーテシア・アルピーノです。ここの住人で、ヴィヴィオの友達、１４歳」

「ルーちゃん、歴史とか詳しいんですよ？」

「えっへん！」

ホムラたちの自己紹介に、ルーテシアも同様に答える。歳で数えれば、ルーテシアはホムラ達よりも2才年上のお姉さんということになるのだが、コロナに煽てられて意気揚々と胸を張っているあたり、陽気な性格なのかお調子者なのかの判断が難しいところだ。

「あれ？　エリオとキャロはまだでしたか？」

「あぁ、二人は今ねぇ…」

と、スバルが現地合流する予定となっている、エリオとキャロの姿を探しながらキョロキョロしていると、メガーヌがおっとりとした声で教えてくれようとしたのだが……

「おつかれさまで～す！」

「エリオ、キャロ♪」

どうやら、探していた二人の方からこっちにやって来たらしい。赤毛の男の子と、少し背の小さい桃色の髪をした女の子が、薪を抱えながら嬉しそうにこちらに駆けてくる。
桃色の髪の少女、キャロは可愛い声でフェイト達に向かって挨拶をしながら。

「わーお！　エリオ、また背伸びてる！」

「そ、そうですか？」

「わたしもちょっと伸びましたよ！？……1．5センチくらい……」

エリオの成長を喜び、スバルが彼の方をバシバシ叩くと、キャロも自身の成長をアピールするが、パッと見では全く分からないほどの変化である。

彼女の身長が、平均的な女性のそれにたどり着くことが出来るのか、少し心配である。

「ルークさんも、お久しぶりです」

「フェイトさんと仲良くやってますk……って、聞くまでもないですよね」

「いやいや、エリオ&キャロ（略してエリキャロ）の熱々っぷりに比べれば、俺なんてまだまだでございますよ……全く、最近の子供ときたら、迫力満点・奇想天外だよ」

「「る、ルークさん！！？」」

「ＨＡＨＡＨＡ☆　この程度で動揺するとは……お主ら、それでもバカップル予備軍の一員か」

でもって、エリキャロの二人はルークにも挨拶したのだが。フェイトとのネタを絡めたのが間違いだった。

小粋なトーク風にエリキャロはからかわれてしまい、真っ赤になってしまう。正直、今の会話のルークはウザかったと思います。

「そんな事言って……こないだフェイトさんとケンカして、一週間口利いてもらえないとかで、公園のベンチでいちご牛乳片手にこの世の終わりのような顔をしてたのはどこの誰だったかしら？」

「ちょ！！？　ティアナさん！！？　何を言ってくれやがってるんですかね！！？」

「「へぇ～……（ニヤニヤ……）」」

が、ティアナの横槍が見事に決まり、ルークの優位性は一瞬で崩れ去った。エリキャロからは、お返しと言わんばかりにニヤニヤオーラを身に受けることになってしまった。ざまぁｗｗ

「おにいちゃん、おねえちゃん！！」

「あははっ。シエルも元気みたいだね」

「相変わらず、ルークさんを縮小コピーしたみたいにソックリだねぇ♪」

そして、エリキャロにとっては弟的な存在になる、シエルも嬉しそうに二人に駆け寄っていく。普段から会えるわけではないが、シエルはこの二人のことが大好きなようで、二人が休暇で会えるとなる

と、その喜びようは見ているこっちが嬉しくなってしまうほどだ。
エリオはシエルの頭を撫で、キャロはルークにソックリなシエルに相変わらずと言うようにそう呟いた。

「アインハルト、ホムラ、紹介するね。ふたりとも、私たちの家族で……」

「エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシエと、飛龍のフリードです」

家族間の温かい再会もそこそこに、フェイトがアインハルトとホムラにエリキャロのことを紹介しようとすると、二人の方からは自己紹介をしてきてくれた。キャロは自身の頭に乗っかっているフリードのこともしっかりと紹介してくれた。

「一人ちびっ子がいるけど、三人で同い年」

「なんですと!!?　1．5センチも伸びたのに!!」

そこで、ルーテシアがキャロの身長ネタをからかうと、キャロは若干涙目になりながら小さい体を全力で使った抗議を行うが、やはり如何せん体が小さいので迫力というものに欠ける。
エリオも、二人のやりとりを見て苦笑するばかりだ。

「アインハルト・ストラトスです」

「ホムラ・スメラギといいます。よろしくお願いします」

「うん、こちらこそ、どうぞよろしく」

「よろしくね、アインハルト、ホムラくん」

そして、アインハルトとホムラも、エリオとキャロに自己紹介を済ませる。二才年上ということで、二人にとってはお姉さんとお兄さんだ。……身長の話は置いておくとして。

と、緩やかな空気の中会話を進めていた時。林の中から『ガサッ』っと何かが動く音が聞こえた。

「！」

いち早くその物音に気がついたアインハルトが、音の発生源の方向に視線を向けると、そこには人形の……しかし異形の何かが立っていた……背中に食材を満載した荷物を背負いながらという、シュール過ぎる姿で。

「？！」

その何かの姿を認めた瞬間、アインハルトはすぐさま戦闘態勢に入る。無人世界ということで、野生の原生生物か何かだと思ったのだろう。
しかし、アインハルトがそうするのと同時に、傍にいたホムラが動いた。

「ホムラさん……？」

「大丈夫だよ。危ない感じはしないから」

戦闘態勢に入ったアインハルトを制するように、彼女の前に手をやりながらそういうホムラ。
見れば、謎の原生生物？　は襲いかかって来る様子もない。

「あ、そっか！　アインハルトさんはガリューのこと知らないんだった！」

「え？　が、がりゅー？」

アインハルトの様子を見て、ヴィヴィオが思い出したようにそう言う。
前もって教えてもらっていてもビックリしていたとは思うが、それは言わないでおこう。

アインハルトたちには、ヴィヴィオに代わってルーテシアがガリューを紹介してくれる。

「わたしの召喚獣で、大事な家族。ガリューって言うの。まぁ、初めてだとびっくりするのも無理ないから」

「し、失礼しました！！」

「あはは……わたしも最初はビックリしました～…」

ルーテシアがそう言うと同時に、ガリューは彼？なりの礼儀なのだろうが、執事の取るようなポーズで礼をしてきてくれた。

話を理解したアインハルトは、すぐにルーテシア達に謝ったが、コロナが言うように最初は誰でも驚くということなので、ルーテシア達もそんなに気にはしていないようだ。

「でも、ホムラはどうしてガリューが危なくないって分かったの？見たことはないのよね？」

「えっと、何となくそんな感じがしたから……大丈夫かなと……」

ルーテシアに尋ねられ、ホムラは思ったままに答える。いつものことなのだが、こう言うことはままある。以前のアインハルトと行った、フィナの母親探しの時もそうだったように、今回も彼の直感に従っただけということだ。

「（へぇ……勘がいい奴だとは思ってたけど……直感力に優れて

るってわけなのか？　俺の間合いにも敏感に反応してたし……）」

ホムラのそういった場面での秀でた能力を目の当たりにし、ルークは表情には出さないが、そんなことを考えていた。

ホムラの大きな武器の一つは、その直感力にある。剣の腕はまだまだ荒削りではある、体も出来上がっていないし、魔法だってどの程度なのかは予想できるレベルだ。

しかし、彼の直感というか、感じる心というものの強さというものは、ルークにもない武器だ。

「（ま、追々分かることか……。今は剣の荒い部分を見ることに集中だな、教導素人の俺が、一度に二つのことを器用に教えれるわけでもなし……）」

ルークは自分の身の丈に合ったところから始めるしかないと考え、思考を閉じた。今の彼に出来ることといえば、直感力という眼に見えないものではなく、もっと具体的な結果。ホムラにとっては、剣の技術を押してもらってレベルアップを図りたいという思いに応えてやることだけだった。

「さて、お昼前に大人の皆はトレーニングでしょ？　子供たちはどこに遊びに行く？」

「やっぱり、最初は川遊びかなと。お嬢も来るだろ？」

「うん！」

と、メガーヌが午前中のみんなの予定を確認する。遊び場所を尋ねられたノーヴェは、ルーテシアも誘い、川遊びを提案した。

「アインハルトとホムラもこっち来いな」

「はい――――」

「はい……って、川遊び？！」

アインハルトとホムラにも声をかけるノーヴェ。アインハルトは戸惑いながらも彼女に付いて行くようだが、ホムラは若干のノリツッコミの形で川遊びという単語に反応した。

どうやら、まさかトレーニングで川遊びするなど思っても見なかったのだろう。

「えっと……大人はトレーニングなんじゃ……」

「お前もバッチリ子供だろ。アインハルトと同い年なんだし」

「あ、そういえば……。し、師匠はどうされるんですか？！」

「ん～？　フェイトが際どい水着着てくれるんなら喜び勇んでそっ

ち行くけど、トレーニングウェア姿のフェイトを愛でるのもアリかなと。ほら…こう……Tシャツが汗で張り付いて～的なイベントがあるかもだし……言わせんなよ恥ずかしいｗｗ」

「もう……ルークったら……／／／／／」

どうやら、ホムラも川遊びに行くしかないようだ、退路が完全に絶たれてしまっている。

ルークがなにか別メニューで何かをするつもりだったのなら話は別だったのだが、彼はどうしようもなくフェイト至上主義であった。

「俺も、少し体動かしたいしな。お前はアインハルトの水着姿見ながら目の保養でもしとけ」

「めめめ、目の保養って……／／／／／」

「／／／／／／／／／」

「それに、川遊びだって立派な訓練になる。騙されたと思って、はしゃいで来てみろ。午後は何かしらする予定なんだしな」

「は、はい……／／／／／／／」

ルークにそう言われ、ホムラとアインハルトは真っ赤になる。確かに、ホムラにとって、アインハルトの水着姿は目の保養だろう。しかし、それ以上に戦略ミサイル級の兵器にも早変わりする可能性がある。

彼が失血死しないかが、今から危ぶまれてくる。

「クゥちゃん、水着はちゃんと持ってきた？」

「うん、この袋に入ってるよ」

「そっか♪　じゃあ、わたしが着替えさせてあげるね？」

「そう？　じゃあお言葉に甘え……られるわけないじゃん！！！？？　一人で着替えるよ！！」

「え～……」

「そ、そんな残念そうな顔してもダメ！！」

クゥとコロナも、お姉さんオーラ全開なコロナに、クゥがタジタジになってしまっている。思わず身を委ねそうになったあたり、もしかするとコロナに手取り足取り、着替えを手伝って欲しいみたいな願望があるのかもしれないが。

「コロナ？　クゥのこと、『色々』よろしくお願いね？」

「はい、任せてください♪　ティアナ（お義母）さん！」

「ちょ！？　お母さん！！？」

ティアナがコロナに、含みのある笑みを浮かべながらそう言うと、コロナも笑顔でそれに応える。少し、ルビがおかしいような気もするが、まぁいいだろう。

……将来的な展望もあるということで。

「ホムラさん！　わたし、新しい水着買ったんです♪　ちゃんと見てくださいね？」

「へぇ～、ヴィヴィオの水着ってことは、きっと可愛いのなんだろうね」

「……ムスッ」

そして、無邪気なヴィヴィオのセリフに、下心ゼロでそう返したホムラ。まぁ、彼にとって年下のヴィヴィオたちは、妹であるユキナと同じことで、そういったイヤラシイ対象にはならないのだろう。

無論、彼の朴念仁レベルが高いということもあるのだが。

が、そんなホムラの姿を見て、アインハルトはデレッとしていると感じたのだろう。嫉妬モードに入りつつある。

「ほ、ホムラさん！！　さぁさぁ、さっさと川に行きますよ！」

「え？　ちょ！？　アインハルト引っ張らないで～～～！！？」

ズルズル……

嫉妬ハルトにジョブチェンジしたアインハルトに、首根っこを引っ張られてズルズル引きずられていくホムラ。いきなり彼女が不機嫌になった理由は、相も変わらず無自覚なようで、されるがままに彼は引き摺られて行ってしまった。

大人組「「「「「「おやおや、まぁまぁ……／／／／／／」」」」」」

「（……もしかして……アインハルトさん……ホムラさんのこと……特別に思ってるのかな…？）」

大人組からの、面白いものを見る視線と、ヴィヴィオからの疑惑の視線をその背に受けながら。

「さぁ～て、クゥ？　このルーお姉さんが、手取り優しく着替えをサポートして……♪」

「フカーーーーーッ！！！！」

「あぁん、クゥってばつれない……」

「る、ルーちゃん！！！　クゥちゃんを誘惑しちゃダメーーーー！！！」

クゥのルーテシアに対する苦手意識が、このオフトレ期間中に改善されるかは非常に微妙なラインであった。
コロナの慌てた様子と叫びを合図に、一行は午前中のスケジュールを開始することになった。

Ｍｅｍｏｒｙ：１８　おいでやす、カルナージ（後書き）

Ｆ２０Ｃ「アインハルトの尻に敷かれるのがデフォになりつつあるホムラくん」

ホムラ「べ、別に敷かれてるわけじゃ……」

Ｆ２０Ｃ「まぁ、恐妻家、またはかかぁ天下の方が、ある意味いいのかもね……」

ホムラ「きょ、恐妻って何さ！？　アインハルトは、良いお嫁さんになるとおもうよ！」

アインハルト「え？」

ホムラ「あ」

Ｆ２０Ｃ「まぁ、それが誰の嫁なのかは言わないでおこう……２８２８」

アイホム「「／／／／／／／／／／」」

Ｆ２０Ｃ「さてさて、次回は水着回でございます。あ、閣下は出番なしね」

閣下「ガッデェェムゥゥゥゥゥゥ！！！！！」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ：１９　川原に舞い降りた天使たち

Ｍｅｍｏｒｙ；１９　川原に舞い降りた天使たち（前書き）

あの……落としものですよ？

・∧＿，，∧
（´・ω・｀）
（つ夢と）
｀u―u´

あなたのすぐ後ろに落ちていましたよ？

なんだか、これ見ると切なくなりました………

小学生の時の夢………なんだったたっけかな……？

※携帯電話からご覧の方、見難かったら申し訳ないです（；・∀・）

Ｍｅｍｏｒｙ；１９　川原に舞い降りた天使たち

オフトレ最初のイベント。ホムラにとっては、訓練というと文字通り厳しいものを予想していたのだが、それはカルナージに到着した後、ものの数分で崩れ去った。

まさか、トレーニングとして『川遊び』が来るなどとは、夢にも思っていなかった。

「川遊び……か……」

「どったの？　ホムラ兄ちゃん、もしかして泳げなかったりする？」

「あぁ、いや……そんなことはないんだけど、トレーニングって聞いてたから、まさか川原で遊ぶなんて思っても見なくて……」

半ズボンタイプの、一般的な水着とパーカーを着たホムラと、同じような格好をしたクゥは一足先に川原でボケーッとしていた。

そんな中、ホムラの呟きを聞いたクゥがそう尋ねてきたが、ホムラはすぐに言い直した。

『たまには良いのではないですか？　ルークさんも、これはこれで訓練になると仰っていたわけですし』

「そりゃまぁ、たしかにね」

ホムラの首に掛かったままの、待機状態のシラヌイからもそう言われ、一応の同意は見せてみるが、ホムラの気持ちはどちらかというとフェイトやルークたちの方に混ざってみたいというのが本音だった。

「ク～ゥ！！！　ホムラさ～ん！！！」

と、川の流れを眺めながらホムラがボヘーっとしていると、漸く着替えが終わったのか女性陣が川原にやって来た。
ヴィヴィオが元気にクゥとホムラの名前を呼びながらこちらに走ってきており、コロナやリオ、ルーテシアもそれに続いている。ノーヴェとアインハルトは、彼女たちの後ろをゆっくりと付いてきていた。

ちなみに、シエルは旅行疲れという奴が襲いかかって来たらしく、メガーヌによって宿泊ロッジにて爆睡中である。今年で三歳ということなので、無理も無い話だろう。

「お待たせ～」

「クゥ～♪　ほらほら、私の水着姿どう？」

「フカーーーーーッ！！！！」

「あれま」

リオとルーテシアがそう言いながらこちらにやって来ると、クゥは相変わらずルーテシアに対して警戒心剥き出しで、猫モードになってしまっていた。
まぁ、相変わらずルーテシアは気にしていないようだが。

「く、クゥちゃん……私の……水着……どうかな？」

「……ま、まぁいいんじゃないの…／／／／／　露出も少ないし……」

「そしてこの変わり様である」

「リオ姉ちゃんうるさいよ！！／／／／／」

が、反面コロナの水着姿を見るや、若干ツンとしながらも彼女の水着を誉めそやす。リオにその態度の変わり様を突っ込まれ、顔を真赤にしながら反論するところを見ると、やはりクゥもまだまだ子供ということなのだろう。

「あ、あの／／／／　ホムラさん……私のは……どうでしょうか？」

そして、次に水着の感想を尋ねてきたのはヴィヴィオ。それも、相手はホムラにだ。ヴィヴィオによく似合った可愛らしいデザインの水着であり、ハッキリ言ってダメな所を探すまでもない。

流石に、朴念仁のホムラでもここでの評価は分かりきっていた。

「うん、ヴィヴィオの明るい感じによく合ってる水着だと思うよ。それに、とっても可愛い」

「あは…♪　あ、ありがとうございます／／／／／」

ホムラは、照れることも物怖じすることもなく、ヴィヴィオの頭を撫でながら、スラスラと水着の感想を述べて見せる。まぁ、妹のユキナに接するのと同じ要領なので、ヴィヴィオ達年下の女の子に対しては照れる必要がないのだろう。

ヴィヴィオにとっては、それはそれでなんとも言いがたいところなのだが……

そして、ホムラにとって、最も危険なのはやはりこの方である。

「お、お待たせしました……／／／／」

「あ…／／／／／」

ホムラに、少し遠慮気味に声をかけてきたのは、黒色の水着に着替え、恥ずかしいのかホムラと同じようにパーカーを羽織ったアインハルトの姿だった。

いつもと違うところは、水着だということだけではない。碧銀の綺

麗な髪も、今日は少し結い方が違っており、彼女にいつもとは違った魅力を作り出す。

「あの、変じゃ……ないですか？」

「いやいやいや！！　全然変じゃないし！！　めちゃめちゃ似合ってるから！　可愛いから！！　ほんとゴメンナサイ、在り来りな感想しか思いつかなくて！！」

「そ、そこまで力説されると……ちょっと恥ずかしいです……／／／／／／／／／」

アインハルトは恥じらいながら、ホムラは若干テンションが暴走しそうになりながら、微笑ましいやり取りをしてから、お互いに気まずそうな、それでいてなんとも言えないムズ痒い空気を作り出した。

本当に、オート且つ天然でここまでイチャつくのは勘弁してもらいたいのだが、彼らにそれを言っても恐らく無駄だろう。

「……（キョドキョド…／／／／）」

「ほ、ホムラさん？　どうかしたんですか…？　どこか落ち着きがないようですけど……」

「あ、うぇ！？　なな、なんでもないよ！！？」

しばらく向い合っていたホムラとアインハルトだったが、今日はホムラの方がやたらとソワソワしている。
それもそのはず、水着×パーカーということで、アインハルトの上半身はあまり露出度が高くはないのだが、下は別だ。

彼女の綺麗な生足が、ホムラの視界にダイレクトアタックをかましてくる。つまりはそういう事だ。

水着とパーカーが微妙に重なった先から見える、綺麗な肌色。スラっとした脚をしているアインハルトのそれは、ホムラのＨＰ（精神的な）をガリガリとマッハで削り取っていく。

「（いかんいかんいかん！！！！　アインハルトをそんないやらしい目で見るなんて！！！！　煩悩退散！！　消え失せろ煩悩ぅぅぅぅぅぅ！！！！！）」

ガスッ！！　ガスッ！！　ガスッ！！

「ほ、ホムラさん！！？　木に頭を打ちつけてなにしてるんですか？！　どこか具合でも…」

「いやいやいや、全然だけど！！？　もうこれでもかってくらい、元気溌剌で冷静沈着ですけどなにか！！！？　うん、ちょっと世界石頭コンテストの大会に向けてトレーニングをね！！」

ヴィヴィオ達「「「「ホムラさん（兄ちゃん）が壊れた！！？」」」」

若干危ない感じの人になってしまったホムラは、目をぐるぐるさせながらいきなり近くにあった木に頭をぶつけ始めてしまう。
アインハルトが慌ててそれを止めようとするが、彼は支離滅裂な事を言いながらやめようとしない。
ヴィヴィオ達がホムラが壊れたと思ってしまっても無理は無いだろう。

ホムラにとっては、アインハルトに対してのイヤラシイ感情を脳内から叩き出す為の行動なのだが、いくらなんでもやり方が原始的過ぎる。
年頃の男の子ということで、アインハルトの水着姿に邪な感情を抱いてしまうのは仕方のないことではあるが、ホムラとしてはそう言うのはＮＧらしい。不器用な生き方しかできない男である。

「ちょっと落ち着け、この純情１００％」

スパァァン！！

「ヘブッ！！？」

そんなホムラを、どこから取り出したのかよく分からないハリセンで叩き止めたのは、呆れ顔のノーヴェだった。
結果的に、それでホムラは木をへし折らん勢いだった頭突きを止めることができたのでいいのだが、ノーヴェも呆れるほどのホムラの異性というか、同年代の女の子に対する耐性の無さには感動すら覚えてしまう。

「あ……あれ？　僕は今まで何を……？」

「はぁ～……ルークみたいな変態も問題だけど、お前みたいな純情派もある意味問題だらけだな……」

「だ、大丈夫ですかホムラさん？　あ…おでこが赤くなってます……」

先程までのことが頭から吹っ飛んだのか、ホムラは今まで自分が何をしていたのか覚えていないようだ。アインハルトは彼に怪我がないかチェックし、ノーヴェはやれやれといった風に肩を竦めた。

「というか、ヴィヴィオ姉ちゃんたちの時と、アインハルト姉ちゃんの時で反応に差がありすぎるような……」

「そこはほら、年頃の男と女の間にはイロイロあるものなのよ」

「ホムラさん、妹さんが居るって話しだし、多分それでじゃないのかなぁ？　同世代ならともかく、年下相手にはそういう感情は持てないんだよきっと」

クゥ、ルーテシア、リオがそう言いながら、アインハルトに介抱されているホムラに苦笑いを含んだ視線を送っている中、ヴィヴィオは少し複雑な気持ちだった。

「（確かに……私の水着を褒めてくれた時も、妹さんに接する時と同じ感じだったのかもしれない……でも、アインハルトさんは……なにかが違うんだ……。それが、なんでかな…？　ものすごく羨ましいな……）」

確かに、ヴィヴィオの水着姿を、ホムラは可愛いと評して、頭も撫でてくれた。

嬉しかった。あぁして頭を撫でてもらえるだけで、心がポッと温かくなる気がした。

だが、やはりホムラはアインハルトに対しては……言葉ではうまく言い表せないが、ヴィヴィオ達とは別枠での『女の子』として見ているように思える。

ヴィヴィオは、嬉しいと思う反面、その事実にどこかもどかしい思いを抱いていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

気を取り直して、一行は川遊びを開始した。川遊びと言っても、出来ることはそれなりにあって、普通に泳ぐもよし、ボールを持ち出して遊ぶもよし、競争するのもありだ。

だが、水の抵抗力というのは、思った以上に負荷がかかる。プールなどの流れのない場合でも、水中での運動というものは、陸上のそれとはまた違ったものになる。

「それ！！　ホムラさん！！」

「オーライ……っと、コロナ！！」

「はい！　ルーちゃん！！」

「お任せ～♪　クゥ～！」

「フカーーーーーッ！！」

たかがボール遊びといえども、やはり水中と陸上ではワケが違う。ヴィヴィオからトスされたボールが、順々に宙を舞いながらそれぞれの手を渡っていく。ただこれだけのことなのだが、ホムラ達の運動量、筋肉に対して掛かる負荷というものはいつもとは全く毛色が違う。

「行きますよ！　アインハルトさん！！」

「どうぞ！！」

ポスン！！

リオからアインハルト、そしてノーヴェにボールが繋がれる。ヴィヴィオ達の動きは、ホムラとアインハルトの二人から見ても、明らかに元気そのものだった。泳ぎにしても、かなり泳ぎ慣れていると

いうか、元気が良すぎるようにすら感じられた。

アイホム「「（み、皆（皆さん）ちょっと元気すぎるような……？）」」

あまり川遊びなどしたことのなかったアインハルトとホムラは、ヴィヴィオ達の運動量に驚きながらも、必死でボールに食らいついた。

で、その結果……

「はぁ……はぁ……ヴィ、ヴィヴィオ達……すごいな……」

「はい……私も……体力には少し自信があったのですが……はぁ、はぁ……」

「いや、大したもんだと思うぜ二人とも」

ヴィヴィオ達よりも一足早く岸に上がり、荒い息を落ち着けなければならない状態になってしまっていた。

だが、ノーヴェの言うとおり、二人に体力がないというわけでは決して無い。

「あたしも救助隊の訓練で知ったんだけど、水中で瞬発力出すのはまた違った力の運用が要るんだよな」

「じゃあ、ヴィヴィオさんたちは……」

「なんだかんだで週2くらいか？　プールで遊びながらトレーニングしてっからな。柔らかくて持久力のある筋肉が自然に出来てんだ」

「な、なるほど……だからあんな運動量こなしてるのに元気一杯なわけなんですか…」

ノーヴェの話に、アインハルトとホムラは納得したように頷きながら、未だに元気にボールで遊んでいるヴィヴィオたちの方を見る。五歳も年下のクゥも、息一つ切らしていないのを見せ付けられると、少し気持ちが焦りそうになるが。

「どーだい、ちょっと面白い経験だろ？　何か役に立つことがありゃさらにいい」

「はい…」

「師匠も、これを見越して川遊びに行って来いって言ってたんですね……」

水中での瞬発力、力の運用、筋肉の質の違い。これだけでも、かなり有益な知識だ。川遊びを薦めてきたルークも、こういったことは織り込み済みで、敢えてホムラをヴィヴィオたちと一緒に行かせたのだろう。

まともならばこんなにも頭も回るのに、非常に残念な男である。いろんな意味で。

「んじゃ、折角だから面白いもんを見せてやろう。ヴィヴィオ、リオ、コロナ、クゥ！！」

そう言って立ち上がったノーヴェは、ボール遊びをしている四人の名前を呼ぶ。面白いものとはなんなのか、少し気になったが、どうもヴィヴィオ達が何かしてくれるようだ。

「ちょっと『水斬り』やって見せてくれよ！」

「「「「は～いっ！！！！」」」」

「「水斬り？？」」

「水斬り」という聞きなれない単語に、首を傾げるアインハルトとホムラ。

ノーヴェは、二人に『水斬り』の簡単な概要を目的を説明してやる。

「ちょっとしたお遊びさ。おまけで打撃のチェックも出来るんだけどな」

ノーヴェがそう説明する間、まず最初に水斬りをやって見せてくれ

たのはコロナだ。
ゆったりとしたモーションから、なめらかに上体を捻り……

「えい！！」

シュパァッ！！

コロナが拳を放つと、川の水面が飛沫と共に少し割れたではないか。

シュザァァァ！！

コロナに続いて、リオも拳を放つと、走るように川の水面が飛沫を上げつつ割れて行った。コロナに比べると、格段に威力の高さがあることが分かるが、これぱかりは個人の適正だろう。

「いきますっ！！」

ズシャアァァァァァァ！！！

ヴィヴィオの水斬りも見事なもので、その勢いたるやリオのそれをも上回っているようにも見えた。
彼女の拳を放つモーションは、見ているだけでも滑らかで綺麗なものだった。

「セイコラァ！」

ドシャアアアアアア！！！！

が、クゥの水斬りはそれよりもさらに凄まじかった。というか、川の向こう岸に届かんばかりの勢いで、彼の末恐ろしさを証明してくれる。

成長して、体が出来上がったクゥが水斬りをしたのなら、この川を真っ二つに割ることも出来るのではないだろうか？

「……すごい……」

「ですね……」

ホムラとアインハルトも、四人の水斬りを見て、素直にそう感想を口にした。傍目から見ても、ただ馬鹿正直に拳を放ったわけではないことが分かる。

恐らく、先程のノーヴェが言っていた、『水中での力の運用』というものが関係しているのだろう。

「アインハルトも格闘技強いんでしょ？　試しにやってみる？」

「はい」

ヴィヴィオ達の水斬りを見て、ルーテシアがアインハルトにもやってみないかと薦めてくる。まぁ、彼女としてもやらないわけはなかったので、すぐにタオルを置いて川に入って行く。

アインハルトが水斬りをするということで、ヴィヴィオ達四人はワクワクという顔で注目して、ホムラも座った状態から立ち上がって、アインハルトの動きの観察に集中していた。

「（水中じゃ大きな踏み込みは使えない……）」

川の水に体を慣らしながら、普通の状態で放つ拳との違いを見付け出していくアインハルト。

川の水を割るなど、これまでやったこともないので上手く行くかは分からないが、先程のヴィヴィオ達の実演から大方のやり方は理解できているつもりだ。

「（抵抗の少ない回転の力で……できるだけ柔らかく……！）」

ドッパアアアアア！！！

アインハルトが拳を川面に向かって放つと、大きな音を立てながら水の柱が立ち上った。上空に打ち上げられた水が、重力に従って振り落ちてくる。

少し、ヴィヴィオ達がやっていたのとは違っていたようだ。

「あはは……すごい、天然シャワー！」

「水柱、五メートルくらい上がりましたよ！」

「……あれ？」

降り注ぐ天然シャワーの中、大はしゃぎのリオとヴィヴィオ達。が、アインハルトは自分の水斬りと、ヴィヴィオ達のそれとの違いに首を傾げてしまっていた。

まぁ、初めてで五メートルもの水柱を発生させられたのは、彼女の力の一端なのだろうが、少しやり方を間違ったのだ。

「お前のはちょいと初速が速すぎるんだな」

それを見たノーヴェが、アインハルトにアドバイスするべく同じく川に入って行く。

ヴィヴィオたちとアインハルトとの水斬りの違いを、彼女は一目で理解していたというわけだ。

「はじめはゆるっと脱力して、途中はゆっくり……。インパクトに向けて鋭く加速、これを素早くパワー入れてやると……」

シュパアァァァ！！！

「こうなる」

ノーヴェの足技から放たれた水斬りは、見事に川を真っ二つに割り、川底がその姿を見せてくれた。
流石というべきか、ノーヴェの水斬りは精度もさる事ながら、技を放った彼女には余裕が見て取れた。

「（――構えは脱力……途中はゆっくり、インパクトの瞬間にだけ……）」

アインハルトは、ノーヴェにもらったアドバイスを元に、もう一度構えを取り、先程よりもゆったりした動きで水斬りの体勢に入る。
先程の水斬りは、初速が速すぎた。意識を向けるべきなのは、拳速ではなく……インパクトの瞬間を見誤らないことだ。

「（撃ちぬく！！）」

ズバシュッ！！！

「あ！　さっきよりちょっと前に進みました！」

「すごいっ！」

二度目のトライで、先程よりも川面に生まれた割れ目は、水柱を上げるだけではなく、前方に進んだ。

ヴィヴィオ達は、アインハルトの飲み込みの速さに嬉々とした様子だ。

そして、それと時を同じくして……

バシュゥゥゥ！！！！

「あ、出来た……」

いつの間にか、アインハルト達と同じように川に入り、少し離れた場所にて、恐らくは上流から流れてきたのであろう棒切れを振り抜いて、川面を斬り裂いていたホムラの姿がそこにはあった。

「ホムラ兄ちゃんスッゲー！！　なんだっけ？　ばっとう…じゅつ？　あれで水斬りやったの？！」

「あ、うん…。力の入れるタイミングを変えれば、剣でも出来るかなと思って。クゥみたく向こう岸には届かなかったけど……」

「い～や、大したもんだぜ？　まさか棒切れでやるなんて思っても見なかったからな」

「ホムラさんも凄いですよ！！　流石だなぁ～♪」

クゥとノーヴェ、ヴィヴィオの賞賛の声が、ホムラに向けられる。

もしかしたらと思ってやってみたのだが、案外なんとかなるものだ。
まぁ、それなりのスキルが要るのは言うまでもないことなのだが、
ホムラはそのレベルにまでは出来上がっていたということだろう。

「アインハルト、もうちょっとやらせてもらおっか？」

「そうですね。少しコツが掴めかけてきましたから……ヴィヴィオさん達は、構わないでしょうか？」

「はい！」

「どんどんどうぞ～！！」

ホムラはアインハルトとそう言い交わし、二人で距離を取りながら剣と拳による水斬りの特訓に入る。
ヴィヴィオ達も、二人の動きを興味津々という様子で観察しており、ノーヴェがちょっとした遊びと称した水斬りではあったものの、ホムラ達にとってはまた新たな発見に繋がったようだった。

ドシャアアアア！！！

ザシュウウウウウウ！！！！

そのまま、アインハルトとホムラは、しばらく無心で川面を切り裂くことに心血を注ぐのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

一方、その頃……トレーニング中の大人組はというと……

「はひ・・・！！　これは……なかなか……！！」

「ひ、久しぶりとはいえ……このぉ！！！」

フェイトとティアナの、執務官コンビは高町鬼教か………もとい、なのはの立てた練習メニューに、少し鈍り気味だった体が悲鳴を上げていた。

「真っ赤な顔でハァハァ言ってるフェイト………これはこれでエロい……やっぱり、俺の目に狂いはなかったな……」

「あんたはなに馬鹿なこと言ってんのよ……？　ていうか、私たちと同じ距離走ったり、飛んだり跳ねたりしてるはずなのに、なんで息一つ切らしてないわけ！！？」

「ほ、ほんとだよ……はひゅ……ルーク……疲れてないの……？」

ハードな練習に、ヒーヒー言っているフェイトの姿に、エロティシズムを見いだしているルークに、ティアナとフェイトはそう聞かず

にはいられなかった。

確かに、ルークも二人と同じメニューをこなしていたはずなのだ。しかし、息一つ乱すことなく、フェイトの萌えシーンを心のファインダーにゲットしようとしているのだから、一体どういう体力しているのかと思うのは無理ないことだ。

「フェイトのスーパーシャッターチャンスのためなら、例え火の中水の中だよ。それに、フェイトとのニャンニャンの方が体力持って行かｒ……ゲフンゲフン！！！」

「も、もう……ルークったら／／／／／　またそんな事言って、私のこと一杯虐めるんだもん……／／／／／　……うん、そう…冷たい目で蔑むような視線を向けられると……えへへ……／／／／／／」

「もうヤダ、この夫婦……」

おバカな万年新婚夫婦（奥さんがドＭ）の、いつもどおりのやり取りに、ティアナは辟易とするばかりであった。

この後、ルークにはなのはから特別メニューとして、先程のメニューの２０倍の運動をさせられる地獄のコースが言い渡され、ルークは半泣きになりながらそのメニューをこなす羽目になったのだった。

ざまぁｗｗｗ

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「はぁ………はぁ………」

「ぜぇ……ぜぇ………」

再び所変わって、川原。
岸の一角で、ホムラとアインハルトの二人は息も絶え絶えという様子で、呼吸を整えていた。

いや、決してニャンニャンとかしてて、それで疲れたとか、そういう訳ではないので誤解しないで頂きたい。

あの後、二人は黙々と水斬りに勤しんでいたのだが、何事もやり過ぎは禁物ということなのだろうか。（ニャンニャンとかではなく）慣れない水中での動きによって、体力をごっそりと持って行かれてしまったのだ。

「ふぅ……はぁ……アインハルト……大丈夫？」

「え、えぇ……なんとか………」

ちなみに、川原には既にヴィヴィオ達の姿は無い。お昼時に近づいてきたということで、川遊びは少し前に切り上げられ、宿泊ロッジに戻ろうということになっていたのだ。

しかし、ホムラとアインハルトはこの有様なので、先に帰ってもらったというわけだ。
ヴィヴィオがなにか言いたげな表情だったが、結局リオ達に引っ張られる形で連行されてしまった。

「お、お互いに……集中しすぎちゃったね」

「はい……夢中になってしましました……川遊び……中々侮れません……」

二人は川遊びを立派な訓練になると、認識を改めることにした。
まぁ、後半は二人が水斬りに集中しすぎたがゆえの自業自得ではあるが……

しかし、いつまでもここでヘバッているわけにもいかない。早くヴィヴィオ達に追いつかなければ、食事の時間に遅れてしまうことになる。

「アインハルト、立てる？」

「問題、ありません……」

ホムラは、よいしょっと言う感じで腰を上げ、アインハルトもそれに続くように立ち上がる。黒い水着は相変わらずホムラにとって、アインハルトを刺激的且つ、魅力的な女の子として否が応でも認識

させる。

二人きりというシチュエーションであることは、両者ともに理解していたが、疲れからかそういったイヤラシイ思いは全く湧かなかった。

ホムラにとっては、疲れに助けられたというところだろう。

「よし、じゃあパパっと着替えて、ヴィヴィオ達に追いつこう」

「ですね。では、早速……あぅ……？！」

と、ホムラにそう返事をしようとしたアインハルトだったが、少し疲れが残っていたのか、脚を縺れさせてしまう。

気がついた時はもう遅く、アインハルトの体は、並行状態を失っていた。

「危な…！！」

ギュゥ……

倒れそうになったアインハルトの姿を見たホムラは、側面から手を伸ばし、体をターンさせる。結果、彼女の体を正面から抱き留めるような形でキャッチする事に成功した。

「あ……／／／／／／」

「あ」

が、ある意味では、二人は別の意味でのピンチに陥っていた。
ホムラも、アインハルトも、今は水着姿。つまりは、素肌率が通常よりも高いというわけだ。
お互い、柔肌を晒している部分が多い状態で、抱き合うような体勢になってしまえば、当然素肌同士がコンニチワしてしまうわけで。

「（あ、アインハルトの……肌が……直に！！？）」

「（ホムラさんの……素肌に……私……／／／／／）」

ホムラは、アインハルトを抱きしめるような体勢になっているため、その手は彼女の背中に回されていることになる。
アインハルトで言えば、彼女の顔は、現在ホムラの胸辺りに押し付けられている。

「（アインハルト……っていうか、女の子って……こんなすべすべな生き物なの…？／／／／）」

「（ホムラさんの体温が……暖かくて……。それに、私と違って、結構しっかりとした体つき……これが、男の人……／／／／／／）」

お互い、素肌の異性に触ったことなど無い。故に、こんな状態にもかかわらず、すぐに離れることが出来なかった。
いや、そんな理屈はどうでも良かった。なぜだか、この瞬間の出来事が、とても貴重なものなような気がして、離れ難たかったのだ。

「だ、大……丈夫……？」

「だだ…大丈夫……れす……／／／／／」

が、いつまでも抱き合っていられるほど、二人は肝が座っていないし、そういった関係でもない。
どちらかからでもなく、自然にゆっくりとお互いに体を離す。
どうしようもない位、後ろ髪を引かれる思いを残しながら。

「ごめん……咄嗟だったから……」

「いえ……助けていただいて……ありがとうございます……」

気まずさとは別の、しかし微妙な空気が二人の間を支配する。
嫌な感じは皆無なのだが、どこかもどかしくもあり、先程の出来事を何度も頭の中で思い返してしまう。

奇しくも、この時二人は同じことを考えていた。

「「（（もう一度……さっきの感覚を……感じてみたい……））」」

どうしようもない、言葉ではうまく言い表せない願望、気持ち。
もう一度抱きしめ、抱きしめられたいなど、そんなことは思っても言えない二人は、しばらくの間、そのまま川原から動くことが出来なかった。

Ｍｅｍｏｒｙ，１９　川原に舞い降りた天使たち（後書き）

Ｆ２０Ｃ「……ラッキースケベイベントにも見えるはずなのに、まったく不潔感がない」

閣下「俺とフェイトのようだな」

Ｆ２０Ｃ「さすがはアイホム。で？このあとシちゃったの？　ヤっちゃったの？」

アイホム「「な、何もしてません！！！」」

Ｆ２０Ｃ「ま、そうだと思ったけどね。けどほんと、君たち順調にフラグ建築してるよねお互いに」

ホムラ「フラグって……」

アインハルト「ホムラさんは確かに……ヴィヴィオさんにもフラグたってますし……」

Ｆ２０Ｃ「ちょっとネタバレすると、実はもう一人フラグが立つ予定なんですよね」

アインハルト「ホムラさん！！　一体どういう事ですか！！！？」

ホムラ「ぼ、僕に言われても～～～～！！（，；ω；、）」

Ｆ２０Ｃ「今後の展開のどうぞご期待くださいｗｗ」

閣下「……完全にシカトされてた件について……わ、わたし、へこたれへん！！！」

Ｆ２０Ｃ「さて、どうやって閣下の出番を削ろうか……」

閣下「つД゛）・。・。・。。・＊：・。・・。・：＊・。」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；２０　凍り付いた瞳

次回、ちょいとシリアス……

Ｍｅｍｏｒｙ，２０　凍り付いた瞳（前書き）

もう一台、パソコンお姉ちゃんが欲しいなぁと思う今日この頃。
デスクトップタイプで、ＣＰＵにＣＯＲＥ　ｉ７の良いやつ積んだり、メモリ８ＧＢにしたり。
そんな妄想を、ネットにてＶＡＩＯのタイプＬ（自分で載せるＣＰＵとかメモリとかを選べるやつ）でシュミレーションしたら、２０万円軽く超えたでござるの巻。

お高い女だぜ……（´；ω；`）

Ｍｅｍｏｒｙ；２０　凍り付いた瞳

午前のスケジュールを消化して、お昼ごはん。
川原に出ていた子供組も、トレーニングに勤しんでいた大人組も、全員がロッジの大きなテラスに集まり、メガーヌが振舞ってくれる昼食に舌鼓を打っていた。

川原で水斬りに夢中になっていた者、変態行為を働いた罰として地獄の追加メニューを言い渡された者。
皆が一堂に会し、楽しく昼食をとっている中、明らかに様子のおかしな男女がいた。

「……（チラ…）」

「……（チラリ）」

「（チラ……）……」

「（チラチラ……）」

「「っ！／／／／／／／／」」

視線をお互いに牽制し合うように、断続的に向け続ける。視線が絡むと同時に、パッと顔を背け、赤くなる。
お互いを意識し過ぎて、逆に、傍からみると不審な部分しか見えな

い二人がそこには居た。

「ねぇ……あの二人、一体どうしたの？」

「さぁ？　川から帰ってきたと思ったら、そこからずっとあぁなんだもん」

お互いを意識しあって、おかしなことになっている二人。アインハルトとホムラの様子を見て、ティアナが隣に座っていたクゥにヒソヒソと尋ねてくるが、クゥも彼らよりも先に帰ってきてしまったので、詳しい事情はよく分からなかった。

「う～ん……これは、私たちが先に帰った後、『何か』あったわね……」

「な、何かって……何？　ルーちゃん？」

それなりの声量で話しているのにも拘らず、アイホムは全く気づいた様子がない。どうも、お互いの存在にしか気が回っていないようだ。

ルーテシアが、その様子から『なるほど』といった様子でそう呟くと、その言葉の真意が気になるのかコロナがそう聞き尋ねる。

「何って……決まってるじゃない……男と女が二人きり……しかも、

現状のあのお互いを意識し合った状態……即ち！！」

「「「す、即ち？？」」」

ルーテシアの溜めの効いた話し方に、コロナに加えてリオとヴィヴィオまでが興味津々という様子で、身を乗り出してくる。なんだかんだ言っても、彼女たちも女の子。そういう話題には興味の出てくる年頃なのだ。

そんな彼女たちに対し、期待を持たせた上でルーテシアが出した結論は……

「ふふ…♪　ここからはビジネスジャンプが読める歳になってから出直してらっしゃい……大人の世界は刺激が強いの……」

「大人の……世界……／／／／」

「え？　え？……もしかして、もしかするの！！？」

「はぅ／／／／／／」

とまぁ、流石のルーテシアも、お子様相手にその手の話をひけらかすわけもなく。はぐらかすだけに留まった。

コロナは顔を真赤にし、リオは脳内での妄想で邪推しているのようだ。ヴィヴィオもヴィヴィオで、二人のことは気になって仕方ないのだが、ルーテシアの言う『大人の世界』という単語に当てられたようで、耳まで赤くしてしまっている。

「いやいや……ほんと最近のお子様ときたら……少しは慎みというものを……」

「はい、ルーク。あ～ん♪」

「あ～ん……はむ……慎みというものを……まぁいいや」

「ルークくん……その体勢じゃ、全然説得力無いってことに途中で気がついたんだね……」

そんなお子様たちの様子を見ていたルークは、やれやれといった様子で、フェイトのあ～んを受けながら、苦言を呈していた……途中でキャンセルしてしまったが。

なのはも、彼の変り身の速さに苦笑するばかりだ。

そんな興味津々な視線と、暖かく見守る視線を知らず知らずに受けているアインハルトとホムラだったが。結局、食事中はずっとお互いのことが気になって仕方がなかったようで、メガーヌの料理の味を楽しむ余裕もなかったとのことだ。

「（……アインハルト……さっきの事気にしてるのかな……？　怒ってないかな……？　で、でも、アインハルトって……あんなに柔らかいって言うか……繊細っぽいって言うか……だぁぁ！？　お、思い出しちゃダメだ！！！）」

「（ホムラさん……もしかすると、私のドジに呆れてしまっているんでしょうか……？　恥ずかしいことだったはずなのに……おかしいくらいに嬉しいのは……何故なんでしょうか……？　まだ、ホムラさんに抱きしめてもらった感覚が……ふにゅ）」

といった感じで、アインハルト&ホムラは、脳内に至ってもお互いを意識しあい。恐れたり、ニヤケそうになったり、真っ赤になったりと、忙しい時間を過ごしていた。

二人にとって、先程の川原での出来事はそれだけ大きな事件だったというわけだ。

「はぁ……」

「はふ……」

そして、アイホムは同時、同じタイミングで小さく、可愛らしい溜め息を吐き、落ち着かない昼食を進めていくのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

昼食を食べ終わった一同は、皆で後片付けをした後、休憩時間を思い思いの方法で過ごしていた。

ルーテシア、リオ、コロナ、クゥは過去の覇王に関する資料を探し、彼に関する史実的な事を読み解いていた。

ヴィヴィオとアインハルトの二人と言えば、お皿の片付けを仕上げて、アインハルトの、覇王の悲願と彼の記憶、受け継いだものに関して、初めて詳しく語り合っていた。

ヴィヴィオも、アインハルトの背負っているもの、果たそうとしている目標の大切さを知り、彼女との関係がより深いものになったわけなのだが……

過去の戦争、人の死、ゆりかご、聖王と覇王の別れなど、話題としては年頃の女の子にはそぐわない内容だった。当然、ヴィヴィオも少し表情を暗くしてしまった。

「（何か……この子が喜ぶような話は……何も思いつかない）」

ロッジへの道すがら、何かヴィヴィオに対して明るい話題をふろうと必死だったアインハルトではあったが、彼女にヴィヴィオの喜ぶような話題が捻り出せるのかと聞かれれば、それは難しい相談なわけで。

二人は、どこか固い雰囲気の中、一緒に歩いていた。

「（困った……どうしよう……）」

困り果てるアインハルト。ここにホムラでも居てくれたのなら、少

しは話題が出てきたのかもしれないが、生憎と彼は後片付けが終わった後、ふらりと何処かに行ってしまい、どこに居るのかも分からない。

それに、川での一件もあり、今はまともに会話も出来なそうだった。

「お、ヴィヴィオ！　アインハルト！！」

「あ、ノーヴェ！」

と、その時。アインハルトにとっての救世主が現れた。暗い雰囲気が降りてしまっていた中、彼女の声が一気にそれを吹き飛ばしてくれたようだった。

アインハルトには、ノーヴェの背後に後光が見えたとか何とか……

「ブラブラしてるんなら、向こうの訓練見学しにいかねーか？　そろそろスターズが模擬戦始めるんだってさ」

ノーヴェがそう提案した瞬間、ヴィヴィオの表情は一気に晴れ上がる。アインハルトも、思わず目を見開いてしまったほどだ。

大人組の訓練という、レベルの高い魔法戦を間近で見ることが出来るということなので、アインハルトの気持ちも分からないでもない。

「アインハルトさん、見に行きませんか？」

「――はい（あぁ、よかった……笑ってくれた…）」

笑顔でアインハルトを誘ってくるヴィヴィオ。その彼女の笑顔を見て、アインハルトはほっと胸を撫で下ろした。
ノーヴェにそのつもりはなかったのだろうが、アインハルトとしては彼女のアシストに救われた形だ。

「ありがとうございます、ノーヴェさん」

「？？」

小さくアインハルトがお礼をするが、当然ながらノーヴェは『なんのことやら』という様子だ。
その後、彼女はリオやコロナ達にも誘いを出し、スターズの模擬戦を見学しに行くことになったのだが……

「あ、そう言えばホムラさんは？」

「あぁ、あいつなら部屋で寝てるぞ？　昨日寝不足だったから、少し仮眠取るんだって。あ～、そろそろ起こしてやった方がいいかもな」

ホムラのことはどうしたのかと、ヴィヴィオがノーヴェに尋ねると、どうも彼はお昼寝中らしい。
大人組の模擬戦ということなら、彼も是が非でも見たいはずだ。そ

う思ったヴィヴィオは、思い立ったが吉日と言わんばかりに……

「わたし、ホムラさんの事起こしてくる～！！」

「あ……」

「お、おい！」

言うが早いか、ヴィヴィオはピューッとロッジの方に走って行ってしまった。それを見たアインハルトは、少し胸がチクリと痛んだ。

何故そうなったのか、全く分からない。奇妙な痛みだった。

「しゃーねぇ……あたしたちは先に行って待ってようぜ？」

「そう……ですね……（何なんだろう……この感覚……？）」

アインハルトは、その胸の痛みに首を傾げつつ、ノーヴェに続いてなのは達が模擬戦の場としている陸戦場に向かった。

ホムラとヴィヴィオが二人になってしまうということに、小さな焦燥感を覚えながら……

・　・　・　・

・
・

「……ホムラさ～ん……？」

所変わって、宿泊ロッジ。
その中の、ホムラに宛てがわれた部屋のドアを小さくノックした後、ヴィヴィオは彼の名前を小さく呼びながら扉を開いた。

ノックにも、彼女の声にも全く反応がなかったところを見ると、爆睡中らしい。

「ホムラさん……？……え？」

戸を開け、ヴィヴィオが中を覗き込むと、ベッドの上で眠っているホムラの姿を見つけた。
しかし、彼の寝ている姿は、凡そ普通の寝る体勢とは言いがたいものだった。

ベッドの上という点では問題ないのだが、体を横にすることなく、壁を背に預け、武器化したシラヌイを肩に抱きながら眠っているホムラの姿がそこにはあり、ヴィヴィオの虹彩異色の双眸に映り込んでいた。

「スゥ……」

「（なんで……シラヌイさんを抱いて……？）」

寝息は立てているが、彼の肩に抱いたシラヌイを握る手にはかなりの力が入っているように見える。
恐怖に耐えるためなのか、絶対に放すわけにはいかないのか、その真意をヴィヴィオに図ることは出来ないが。

「お邪魔しま～す……ホムラ…さん？」

彼の寝相はともかく、さっさと起こしてあげないと模擬戦が始まってしまうということで、ヴィヴィオはゆっくりと寝入っているホムラに近づいていく。
見れば、ホムラの表情は決して春の陽気によってもたらされる快眠というわけではなく、苦しげに歪んでいるではないか。

「（……嫌な夢でも見てるのかな……？）」

表情から彼がどんな夢を見ているのか推測するのは難しいが、良い夢ではないことだけは確かだ。
自分も嫌な夢や怖い夢を見ることはある。今のホムラも、それと同じような夢を見ているのだろうかと、ヴィヴィオは考がえていた。

「……ごめ……ん……、とう…さ……かあ…さん……俺の……せいで……俺が……」

「（……『俺』？　ホムラさんが……自分のことを……）」

ホムラは、苦しげな表情で小さく呟く。悪夢の中にあって、彼は苦しい思いをしているようだ。その断片が、寝言として零れ落ちているのだろう。

ホムラの一人称が今と違うことは気になるが、ヴィヴィオにはその理由も、経緯も分からない。

「（起こしてあげよう…！　辛い夢なら、覚めちゃったほうがいいよ……）」

苦しげな表情を浮かべるホムラを見ていられなくなったヴィヴィオは、彼を起こそうと手を伸ばす。どんな夢なのか、何をそんなに苦しんでいるのかは分からないが、今のヴィヴィオに出来ることは一つだけ。彼を起こして、悪夢を終わらせてやることしかなかった。

と、ヴィヴィオが手を伸ばしたのと同時に、苦しそうな表情を少し浮かべてホムラが何かを呟いた。

「……たす……て……アイ……ルト……」

「っ！」

その小さな、断片的な呟きと同時に、ホムラに手を伸ばそうとしていたヴィヴィオの体は固まってしまう。途切れ途切れだったが、聞

こえた気がするのだ。碧銀の髪の、ヴィヴィオにとって憧れの少女の名前が。

「……」

苦しそうな表情、見ればホムラの体は少し震えている。普段の温厚な彼からは予想もできない、この妙な寝る体勢。起きたら訳でも聞いてみようかと、そう思いながらヴィヴィオがホムラの体を揺すろうと、再び手を伸ばした瞬間……

「っ！？」

バッ！！

「きゃ！？」

突然、眠っていたホムラが飛び起きたと思ったら、手にしていたシラヌイに手をかけ、流れるような動きで抜刀の構えに移った。いきなりのことに、ヴィヴィオは驚いてしまい、思わず尻餅をついてしまった。

「ホム…ラ……さん？」

「はぁ……はぁ……」

が、もっと驚くべきところは他にもあった。抜刀の体勢で警戒心を全開にしている彼の眼だ。
何かに怯えている色や、怒りの色、悲しい色、そしてそれらをすべて包括した冷徹な、異様なまでに冷たい眼。

優しいという単語が代名詞とも言えるホムラには、とてもではないが似合うことのない眼。まるで別人のようなホムラが、そこには居たのだ。

「はぁ……はぁ……あ……ヴィ…ヴィヴィオ……？」

「は、はい……」

しばらくして、ホムラがヴィヴィオの存在を認めると、彼の冷たい眼はすぐにナリを潜めて、いつもどおりの優しく、温かみのある眼に戻る。
そして、自分が何をしてしまったのか、どういう状況にあるのか、すぐに把握したホムラは慌てた様子でヴィヴィオに駆け寄った。

「ご、ゴメン、ヴィヴィオ……怪我はない？」

「はい、大丈夫ですけど……ホムラさんの方こそ、大丈夫なんですか……？　一体どうしたんです……？」

「あ、あはは……大した事じゃないんだよ。ちょっと、変な夢見ちゃって、体が勝手にさ……あはは……。…本当に……ごめん…

…」

ヴィヴィオに謝りつつ、彼女を抱き起こしたホムラは、誤魔化すようにそう言って、ヴィヴィオの問にしっかりとした答えを返すことはなかった。

ヴィヴィオには、彼に事の真意を問い詰める権利がある。いきなり驚かされたわけなのだから、しっかりとした理由くらい聞きたいというのが人間だ。

「……そうですか。あ、そうそう！　なのはママ達が、陸戦場で模擬戦を始めるみたいですよ？　見に行きませんか？」

「あ、そうなの？　も、もしかしてそれで起こしに来て……」

「えへへ……ホムラさんだけ仲間はずれは可哀想ですもん♪　さ、早く行きましょう！」

しかし、ヴィヴィオはそれをしなかった。聞く権利があったとしても、それを行使するか否かはヴィヴィオ次第。

彼女には、権利に甘んじてホムラの暗い部分を問い詰めるということは出来なかったのだ。

ホムラのあまりにも辛そうな顔を見てしまうと、それに追い打ちをかけるような事はしたくないと。

だからこそ、ヴィヴォオは質問の代わりに自身の手を差し出した。
手を取って、一緒になのは達の模擬戦を見に行こうと、『さっきのことは気にしていないと』そういう意味を含めてだ。
いや、そうして誤魔化すしかなかったのかもしれない。その場の空気を、ホムラの冷たい眼のことも、自分自身のことを。

ホムラが、『彼女』の名前を、悪夢にうなされながらも呟いたことを。

「ありが……とう……ヴィヴィオ」

「いえ、どういたしまして。じゃ、早速行きましょうか？」

「……うん、そうだね」

そうでもしないと、誤魔化さないと、ホムラがとても遠くにいる存在のように、そんな風に見えてしまいそうになったから。

そして、その遠くにいる彼の隣には、別の誰かがいるような気がしてしまったから……

Ｍｅｍｏｒｙ；２０　凍り付いた瞳（後書き）

閣下「ふむ……ヴィヴィオ……辛いなぁ……」

Ｆ２０Ｃ「ホムホムの心の中では、アインハルトの存在がかなり大きくなってるみたいだな。うなされるように名前呼んでさ……」

閣下「一体あいつに何があったのやら……で、次回はどうなるんだ？」

Ｆ２０Ｃ「次回は……キミが珍しく、『珍しく！！』真面目だ」

閣下「なんで２回言うんだよ？」

Ｆ２０Ｃ「大事なことなので二回言いました」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；２１　ルーク先生の剣術指南（心構え編）

Ｆ２０Ｃ「お前が先生？　ハハ！　ワロスｗｗ」

閣下「ちょっと屋上行こうぜ……久しぶりにキレちまったよ……」

Ｆ２０Ｃ「おう。お前の出番が今回で最後になるとは……寂しいな」

閣下「うん、もう先生でなくてもいいや。その辺のフェイトの旦那でいいや」

F20C「そこだけは譲らないのね」

Ｍｅｍｏｒｙ，２１　ルーク先生の剣術指南（心構え編）（前書き）

～前回までのあらすじ～

近所から仲良し姉弟ということで良く知られていた、パソコン（姉）とワイヤレスマウス（弟）。めんどくさがりなワイヤレスマウスを持ち前の明るさでグイグイ引っ張っていくパソコン、血は繋がっていないが仲の良い姉弟。これが彼らのスタンダードだった。

そんな中、父の隠し子であるワイヤレスマウスの妹、ＵＳＢフラッシュメモリが同居することに。ツンツンしながらも、ワイヤレルマウスの優しさに惹かれていくＵＳＢメモリ。しかし、マウスとＵＳＢメモリは互いに直接は繋がることは出来ない（ＵＳＢポート的な意味で）。そうマウスが繋がれるのは、パソコンとだけだったのだ。

そんな中、ＵＳＢメモリの願いを叶えてやろうと、『閣下』という怪しさ全開の男が彼女の前に現れ……（続きを読む）

Ｍｅｍｏｒｙ；２１　ルーク先生の剣術指南（心構え編）

白がよく映える、特徴的なバリアジャケット。加えて、どこか神々しさをも覚えてしまう、デバイス。栗色の髪をサイドポニーにした女性、高町なのははその両方を身につけ、空中にて砲撃魔法を展開していた。

『Ｓａｃｒｅｄ　ｃｌｕｓｔｅｒ』

「拡散攻撃（クラスター）来るよ、ティア！！」

「オーライ！　コンビネーションカウンター、行くわよ！」

そのなのはを、展開したウィングロード上で迎え撃つスバルとティアナがそう言い交わす。それと同時に、いくつもの桃色の魔力スフィアからなのはの魔力光である、ピンク色の砲撃が次々と放たれる。

その数たるや、数えている暇など与えてはくれないほどだ。

「シュート！！」

しかし、その大量の誘導弾を、ティアナはクロスミラージュによってすべて撃ち落とす。変化する軌道もすべて計算に入れて。

「おおおおおおぉ！！！！」

ティアナの迎撃によって生まれた道を利用し、スバルがなのはに肉薄していく。マッハキャリバーからもたらされる瞬発力と突進力、その二つが合わさり、スバルは弾丸のように直進。

ドォン！！！！

スバルのリボルバーナックルと、なのはのレイジングハート（正確にはシールド）が衝突し、衝撃波で周囲の大気が震えた。

同時に、その模擬戦を目にしていたアインハルト達の心も、大きく打ち震えていた。

そしてさらに、大型の竜となったフリードに乗ったキャロとエリオ、そして自ら空を飛ぶフェイトの姿が加わる。

「あれは、アルザスの飛龍……？！」

「キャロさん、竜召喚士なんです」

「エリオさんは竜騎士！」

「で、フェイトママは空戦魔道士で執務官をやってます……っていうのは、前にホムラさんとのことで知ってますよね？」

フリードの成長した姿に驚くアインハルトにコロナとリオ、少し遅れてホムラと一緒にやって来たヴィヴィオが説明してくれる。

大人組の模擬戦を目にし、やはり一番に感じたのはレベルが高いということだった。練度も、戦略の高さも、一つひとつの何気ない動作が洗練されているようにも見えた。

「局の魔道士の方達は、皆さんここまで鍛えていらっしゃるんでしょうか……？」

「ですね」

「ま、まぁな」

模擬戦を終え、なのは達が次のメニューに移り、魔法訓練やフィジカルトレーニングなどを目にしたアインハルトは、ノーヴェ達にそう尋ねてみる。

「スバルは救助隊だし、ティアナは凶悪犯罪担当の執務官。他の皆も、頻度の差はあってもみんな命の現場で働いてるわけだしな」

そう、局の仕事、魔道士としての仕事というものは一歩間違えば命に関わることもある。魔法というツールが存在することで生まれた殺人や犯罪などは勿論、過去の遺物を巡る事件なども多い。

それらに対応するためには、それ相応の力を持っていなければとても長生きなどは出来ない。

「力が足りなきゃ救えねーし、自分の命だって守らなきゃならねー」

「ノーヴェさんも、救助訓練はガッツリやってますもんねー」

ノーヴェがそう話すと、リオが彼女自身もなのは達同様頑張っている人たちの一人だということを教えてくれる。
ノーヴェは恥ずかしがって視線を逸らしてしまったが。

「で、そんな頑張ってる皆の中で、変態兄ちゃんは何してんの？」

頑張っている一人、ティアナの息子の一言共に、一同の視線は傍にあった木の木陰で死んでいるルークに向けられた。
見れば、ところどころボロボロになっており、とてもではないが転んだと言い訳できるようなレベルではない。

「さ、さっきまで……なのはさんのアクセルシューターを延々と避け続けてた……」

「「「「あぁ～……」」」」

どうも、ルークもまた、頑張っていたようだ。あまりのなのはのスパルタ式に、ダウンしてしまったようだが。

「いや、もうさ……『弾幕は、パワーだぜ！』みたいな勢いでシューターが襲いかかって来てさ……グラ○ィウスで鍛えた俺の反射神経をナメるなと思ったんだけど、流石に無理だった……スンマセン、ツイ○ビーからやり直してきます……」

「いやいやいや！！？　明らかに頑張る方向性って言うか、自信の出元がおかしいですよね！？　どれもシューティングゲームじゃないですか！！」

ルークに何があったのか、想像するのは難しくはない。ただ、横・縦スクロールゲームと同じ勢いで、なのはのシューターを避けようとしたのはただの馬鹿だろう。
リオがこれまでで最もキレのあるツッコミを入れたのも、ある意味仕方のないことだ。

「……」

「（…？　ホムラさん……？）」

そんな中、アインハルトの視線の先にいたホムラは、一心不乱になのは達の練習風景を見つめていた。
見れば、手を握る力がかなり強まっているのが分かる。恐らく、彼自身も体を動かしたいのだろう。

「（それにしても……ヴィヴィオさんと……何かあったのでしょうか…？　二人とも、どこか様子がおかしいような……？）」

アインハルトは、ホムラが体を動かしたいのだろうと予想するだけではなく、ヴィヴィオとの距離が少し離れていることにも気がついていた。
二人とも、というか、ホムラのほうが少しヴィヴィオのことを気にしているように見えた。

ホムラを起こす過程で、何かあったのだろうかと思うと、アインハルトは少し胸が痛くなった。

「（……さてっと……俺もお仕事始めますか……）」

アインハルトがホムラのことを気に掛けているところを見ていたルーク。彼もまた、彼のヴィヴィオに対する気まずさのようなものを感じていた。
何があったのかまでは分からないが、あの様子だ、良いことではないだろうと予想も立てて。

そんな彼だが、体力も回復したのか背中を預けていた木から立ち上がり、よっこいしょという風にホムラ達の集まっているところまでやって来て……

「なのはさ～～～～ん！！！　ちょいと陸戦場の一部貸してもらっていいっすか～？！」

「う～ん！！　大丈夫だよ～！　私たちも、一旦休憩しようと思ってたから～～！！」

訓練を一段落させようとしていたなのは達に、ルークは声をかける。ちょうど休憩に入ろうとしていたらしいなのは達は、ルークのお願いを勿論と言う感じで快諾してくれた。

まぁ、なのはとは事前に打合せしていたので、ある意味訓練スケジュール通りなのだが。

「うし。んじゃ、ホムホムや。いっちょ模擬戦だ」

「へ！？　模擬戦、ですか？」

ルークにいきなりそう言われたホムラは、鳩が豆鉄砲食らったような顔、というものを綺麗に再現したような表情をしながら、ルークに聞き返した。

自分のニックネームが、『ホムホム』に固定化されてしまったということに気付くこともないくらいに驚いていたようだ。

「言ったろ？　こっちに来てから模擬戦するって。今度は一撃だけじゃなくて、思う存分暴れてオッケーだからな」

「あ、は、はい！！」

「よろしい。じゃ、さっさと陸戦場に行こう。なのはさんたちも場所空けてくれたし、多分観戦するつもりなんだろうなぁ……はぁ……なんかプレッシャー…」

言いながら、ルークは飛行魔法で空中に舞うと、なのは達が使用していた陸戦場に降りて行った。

対するホムラは、緊張と興奮が入り交じったような様子である。

「ホムラさん、頑張ってください」

「ホムラ兄ちゃん、頑張ってー！！」

「応援してます！」

「頑張ってくださいね、ホムラさん♪」

「うん、ありがとう！　期待に添えるかわかんないけど、僕なりに頑張ってくるから」

アインハルト、クゥ、リオ、コロナの順に、ホムラはエールを貰う。そして、一瞬ヴィヴィオの方に視線を向けると、少し申し訳なさそうな顔をしてから、ルーク同様に飛行魔法で陸戦場に向かって飛んでいってしまった。

「ヴィヴィオ？　ホムラくんと、何かあったの？」

ホムラと入れ替わりで帰ってきた、なのはやフェイト達。ヴィヴィオの様子が少し暗いことに気がついたなのはは、彼女にそう尋ねてみたのだが……

「う、ううん！　なんでもない。　ホムラさん、大丈夫かな……？　怪我とかしないといいんだけど……」

「……ヴィヴィオ……」

しかし、ヴィヴィオは誤魔化すようにそう答え、陸戦場にて向き合っているホムラとルークに視線を来ることに集中した。

異性とのことで悩むことは悪いことではないと、なのははそう考えていたのだが。ヴィヴィオの様子を見ると、やはりどうしても気になってしまうものだ。子離れは、しばらくは絶対にできそうになかった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「アーカーシャ、ダモクレス」

『はいは～い♪』・『御意』

「シラヌイ」

『畏まりました、マスター』

陸戦場に降り立ったルークとホムラは、まずはデバイスをセットアップする。今回は、剣だけでなく、お互いにバリアジャケットまでをしっかりと展開し、模擬戦に臨むようだ。

ルークのバリアジャケットは、黒っぽい外套のような作りで、どこかフォーマル且つ、気品の高い感じの意匠になっている。その外套の腰には、アーカーシャ、背中側の腰にはダモクレスが鞘に収まった状態で現れた。

対するホムラのバリアジャケットは、書生風とでも言えばいいのか。なのはの出身世界である地球、その中の和の文化というものをイメージしたような意匠だった。靴こそデザインを殺さないような近代的なものだが、機能重視なので見た目は少し厳ついかもしれない。そして、腰にはシラヌイが差してある。

彼自身も、先祖が地球にいたということなので、その名残なのかもしれない。

ホムラのバリアジャケットを一言で表すのならば、『軽装』この一言に限るだろう。

「ホムラさんのバリアジャケット……かなり軽装ですね……」

「ホムラくんはスピード重視だからね。ほら、フェイトちゃんだって、ソニックフォームとかでは若干R指定掛かるくらいの格好してるし……」

「あ、あれはそう言うのじゃないもん！！　そ、そりゃ、ルークはあの格好喜んでくれるけど……／／／／／」

リオがホムラのバリアジャケットに対する素直な感想を口にすると、なのはがフェイトを引き合いに出して、軽装のもたらすメリットを説明する。
というか、なのはもフェイトのソニックフォームのエロさは常々感じていたらしい。

「体のラインバッチリ出ますもんね……フェイトさんくらいスタイル良くないと、とてもじゃないけど着れない代物ですよ……」

「ていうか、あれってバリアジャケットっていうか、最早レオタードで……」

「も、もうその話題はやめよう！！　私のガラスのハートが、皆からの視線でマッハだから！！」

ティアナとスバルの追撃に、フェイトさんは涙目＋顔真っ赤になり、腕をブンブン振り回して抗議する。あぁ、もう可愛いなぁ！

と、フェイトさんのソニックフォームのエロさの話題もそこそこに、

模擬戦を進めることにしよう。

「さてっと……模擬戦のルールを説明するぞ？」

「はい、お願いします！」

「よし。基本的に、飛ぶのも魔法も使い放題だ」

まぁ、模擬戦のルールと言っても、そうややこしい物を設定するつもりはない。要するに、全力でお互いにどつき合いしようぜ！　的なノリで戦えばいいだけだ。

無論、ルークには魔力の制限が掛けられているため、お互いに全力というわけではないが。

「勝敗は……う～ん……そうだな、お前が俺に一発入れたら勝ち。それでいいだろ？　あぁ、あと俺を殺すつもりで掛かって来い。俺の力はある程度理解出来てるだろうから、そうでもしないとダメだってことは、分かってるよな」

「は、はい」

この模擬戦、一見すると勝敗条件とルークの抱えるハンデから、ホムラが圧倒的に有利だ。しかし、ホムラの表情には余裕など全くない。理解しているのだろう、自分とルークの間にある、大き過ぎる

差というものを。
此処に来る前に行った、試験においてルークの戦闘能力の高さは証明されている。

「ま、ルールはそんなとこか……。んじゃ、早速始めるわけなんだが……ホムラ、これがお前への最初の教導になるんだけど……最初に言っておくことが何個かある」

「言っておくこと、ですか？」

ルール説明を終え、早速模擬戦に移ろうとしたルークとホムラ。その前に、これが二人にとっての初めての教導になるということで、ルークとしては予め伝えておくことがあるらしい。

「まぁ、お前も剣を扱ってる以上は重々理解してるとは思うから、言うまでもないことかもしれないけど……。　まず、剣術は人を殺すための方法、つまりは殺人術だ」

「……」

「自分の身を守ることも、誰かを助けたり守るために剣術に頼ったとしても、それはただの結果だ。過程として、足元には肉の塊が転がってることもある」

それは、十年以上も剣を振るい、人の命に関わってきたルークが至った剣術の本質的な部分なのか、経験則なのか、いや恐らくは両方

だろう。
彼にとっては、剣術というのは戦争の真っ只中で生き残るため、如何に効率的に敵を殺せるかというものでしかなかった。
殺らなければ殺られる、そんな世界にいたからこそ見えてしまった答えなのかもしれない。

「何よりも俺とお前が手にしてるこの剣。これも人を殺して、傷つけるための凶器だ。非殺傷設定があるからこそ、そういう認識が薄くなりがちだけど、絶対に忘れるな」

「……（コク）」

ホムラは、ルークの話に真剣な表情で頷く。彼も、その点に関しては嫌になるほど理解していた。
目の前で、父と母は剣によって刺し貫かれ、命を絶たれた。あの時ホムラが見ていた剣と剣術は、間違いなく凶器と人を殺すための術以外の何ものでもなかった。

そこには、人を守るだとか、活かすだとか、そういったものは皆無。ただただ純粋に、人を死に至らしめるための術としての剣があったのだ。

「この剣を振るえば、相手に怪我も負わせりゃ、死なせることにもつながる。例え、その相手が憎い敵だろうが、守りたい人だったとしても剣はそれを区別しない。どこまで行っても剣は剣、つまりは物であり武器。誰もを平等に傷つけ、殺す」

「……ルーク…」

思い出しているのだろうか。昔のことを。
自分の手で、唯一の肉親だった人を手に掛けてしまったこと。

あの時、もしも剣が不平等で、ルークの味方をしてくれていたのなら……最早どうしようもないことだが、考えずにはいられないのだろう。
フェイトは、ルークの心情を理解してなのか、少し苦い表情になった。

「だからこそ、剣と剣術。この二つを使って戦うときは、目の前にいる相手が誰なのか、剣を向けるべき相手なのか。その判断を疎かにするなよ。でないと、お前は一生後悔し続けて、いずれはお前自身を殺すことになる」

そこまで話し終えたところで、ルークは『フゥ』と一息つく。恐らく、最初に話しておくことというのはそれで全てだったのだろう。
次の瞬間には、彼の表情はいつも通りのルークに戻っていた。

「とまぁ、堅っ苦しい注意事項はここまでだ。剣を扱う上での心構えって奴だな」

「はい」

経験者は語る、ルークの場合はまさにそれだろう。だからこそ、自分が教える相手には同じような事にはなって欲しくなかった。それゆえに、最初の注意事項としてこんな重い話をしておいたのだ。

スラ……

話し終えたルークは、腰のアーカーシャを抜き正面に構えた。ホムラもまた、彼に倣ってシラヌイを鞘から抜いて、右手でシラヌイを、左手は鞘に掛けた状態で構える。

ここからは言葉ではなく、在り来りな言葉で言えば、剣と剣で語るということなのか。

「いつでも来い」

「はい！」

ルークに元気よく返事をするホムラ。緊張は勿論だが、焦りは感じられない。いい具合に集中していることが見て取れる。

ルークは彼の様子に感心しつつも、この模擬戦に対する裏の目的を頭の中で考えていた。

表立った目的はひどく単純明快、ホムラの全力がどの程度かを把握

することと、彼自身のレベルアップのためだ。
裏の目的というのは、どちらかというとルークの個人的なものだ。

「（この前の抜刀術の打ち合いで……ホムラには欠けているものがあった。でも、気になったのはそれだけじゃない……こいつには……何かある。あの一撃の中に紛れ込んでいた違和感が気になって仕方ないんだ）」

一撃を受けただけで、ホムラの全てを理解したとは言えない。
しかし、その一撃の中には多くの情報が眠っているのも確かだった。
ルークが気になったのは、剣閃の中に紛れ込んでいたノイズ、違和感、不連続的な何かだった。

この模擬戦にて、ルークはその紛れ込んでいた何かの正体を見極めるつもりだった。

「（こいつの中にある何かを、引き摺り出す！）」

こうして、ルークの様々な思惑とアインハルト達の期待が混じり合った模擬戦が開始された。

Ｍｅｍｏｒｙ；２１　ルーク先生の剣術指南（心構え編）（後書き）

閣下「前書きいい加減にしろｗｗｗ」

ホムラ「あの……ＵＳＢメモリさんに何するつもりなんですか師匠？」

アインハルト「なにか、そこはかとなく酷い事をするような気が……」

閣下「いや、今問題なのは、そこじゃなくて作者って言うか……」

Ｆ２０Ｃ「擬人化って言うの？　ちょっとそう言うの分からないです、はい」

閣下「おいいいいいいい！！！　人が本編で真剣になった途端にこれだよ！！」

Ｆ２０Ｃ「計画通り（キリッ（　ー、Д－´）…あ、ホムラのバリアジャケットですが、るろうに剣心の宗次郎の服装をイメージしていただければ」

閣下「まぁ、技とかからそんなこったろうとは思ったよ…」

次回　ルーク先生の剣術指南（実戦編）

次回……非常に遺憾ながら、閣下が活躍します。読者の皆様には、大きなご迷惑をおかけすることとなり、誠に申し訳ありません。

閣下「なんでそこまで低姿勢?!　謝ることでもないでしょうに！！」

Ｍｅｍｏｒｙ，２２　ルーク先生の剣術指南（実戦編）（前書き）

今分かっている、９月に買うゲームリスト

一般ゲーム枠
・テイルジオブエクシリア（沢城みゆきさん出演ということで胸熱）
・碧の軌跡（前作プレイ済み・竹達ボイスキャラが登場で胸熱）

エロゲー枠
・Ｌｕｎａｒｉｓ　Ｆｉｌｉａ～キスと契約と深紅の瞳～（なずなんボイス＆絵買い）
・恋騎士Ｐｕｒｅｌｙ☆Ｋｉｓｓ（絵買い・声優発表待ち）

計四本

諭吉を四人、ソフマップのレジにシュウゥゥーッ！！

超！エキサイティン！！

お願いだから、どれか延期してください。

Ｍｅｍｏｒｙ；２２　ルーク先生の剣術指南（実戦編）

陸戦場にて、赤い刀身の剣を構えるルークと、銀色の刀身を持つ刀を手に相対するホムラ。
両者とも、これが二回目の戦闘になるが、戦闘能力差・経験の差、何を以てしてもルークの方に圧倒的アドバンテージがある。
勝利条件や、ルークの魔力制限などがあると考えても互角の勝負とまではいかないだろう。

「……」

そんな不利な条件下の中、ホムラは右手でシラヌイを、左手を鞘に掛けた状態でゆっくりと歩き出す。

「（師匠相手に、正攻法じゃまず勝ち目はない。一撃を入れるためには……）」

スゥ…

「！」

ただ歩いていただけのホムラ。だが、瞬きの間に彼の姿が陽炎のよ

うに二人に増える。その人数は徐々に増えていき、ルークに向かってきていたホムラの数が一人から五人にまで増えていた。
ルークも、ホムラの分身に少し驚いていた。

「（魔法陣も何も出てこないとなると、幻術の類じゃない……となると…体術……いや、歩法か？）」

目の前で突然分身したように見えたホムラ。しかし、ルークは冷静に今ある状況から、そのからくりに対する可能性を探り当てる。
こう言った冷静な分析力というものも、戦闘に際しては大きな武器になる。

「ホムラさん、分身の術でも使えるの？！」

「幻術じゃないよね、あれ？」

それを見ていたリオやクゥ達も、ホムラの分身に驚いていた。これがホムラの正式な初戦闘になるわけなので、当然といえば当然だが。
その間にも、五人にまで増えたホムラは、そこで移動スピードを一段階早め、ルークに向かってダッシュした。

「っ！」

キィィィン！！！！

分身のような技を使ったホムラの攻撃は、攻撃の起点が読みづらい。視覚的には五人分の剣戟の中から、実体だけを見極めて防御する必要がある。

しかし、ルークにとってはそれはあまり難しいことではない。ホムラもまた、この分身を交えた初撃でルークに人たちを浴びせられるとは思っていない。ルークの間合いに、馬鹿正直に入り込むのは危険なので、せめてもの目眩ましにでもなればいいと、その位のつもりで仕掛けた攻撃だ。

「っふ！」

「くぅ！！」

ガキィ！！　ギィン！！

一度剣が打ち合わさると、そこからはお互いに剣の攻防にしのぎを削る。ホムラの一撃目を捌いたルークは、上段からホムラに斬りかかる。

ホムラは、その攻撃をシラヌイで防ぎ、ルークの剣をシラヌイの刀身を滑らせるようにいなし、反撃に出る。金属がこすれ合う音が鳴り響き、次いで剣同士が衝突しあう衝撃音に。

剣戟の雨の中では、様々な音が発生していく。

ガィン！！！

「うわっ？！」

その剣閃のラッシュが、ルークの重い一撃によって一旦途切れる。
ルークの斬り上げ攻撃を捌こうとしたホムラだが、勢いを受け止めきれずに後方に体を持って行かれてしまった。

「と！……ふぅ！」

空中で一回転した後、ホムラは地面に着地。ルークとの間には１０メートルほどの距離が生まれた。
ここまで、両者とも飛行魔法は使っていない。基本的に飛行魔法だろうが、攻撃魔法だろうが好きに戦えばいいのだが、剣士の性というものなのか、二人とも地上戦を好んでいるようだ。

「今のは、『そういう歩き方』か？」

「えぇ、まぁ……僕では五人分に見せるのが限界ですけど……『影法師（かげぼうし）』って言います」

「なるほどね……（殺し屋みたいな技使いやがるな……将来が恐ろしいよ……）」

ホムラの扱える体技である縮地、その派生技として生み出されたの

が『影法師』だ。歩行速度に緩急を与えるという変則的な歩き方によって、残像を生む歩法である。
分身のように見えたのは、実際はただの残像だったというわけだ。

「でも、あくまで攻撃する奴はお前だけだ。だから、寸前まで引き付けてから、攻撃に転じる本体を叩き返せば済む話」

「えぇ。師匠にはやっぱり通用しませんでした……やっぱり、凄いです」

「ま、お前よりも長いこと生きてるし、経験もそれなりに積ませてもらってるからな。それだけのことだ」

そう言って、二人は再び剣を構える。
やはり、ルークは普段は残念だが、こう言った場面になるとその本性を見せる。恐ろしく冷静で、清々しいまでに完璧だ。

「（やっぱり、師匠に小手先の技術は通用しない……。だったら、ここからはスピードレンジを上げていく！）」

ホムラは、少し上体を倒し、ダッシュのような構えをとる。剣は右手で構えたままで、左手は鞘から離された。

「（なにか仕掛けてくるな……？　あの構え……突進か？）」

「……行きます！」

ルークは、ホムラの少し前傾姿勢気味の体勢への移行を目にし、そこから考えられる攻撃方法を考えていたが、ホムラはそこから足に体重を掛け……

ヒュン！

「？！」

ババババババッ！！！！

一瞬、ホムラの姿が消えたと思った次の瞬間、ホムラとルークの間にある地面が、機関銃の掃射を受けたような音と共に、途切れ途切れで小さい範囲で爆ぜていく。

ホムラの姿を見失いかけたルークだったが、彼の目は辛うじてこちらに向かって高速、いや神速とでも言えばいいのか、兎に角超人的な速度で肉薄してくるホムラの姿を捉えていた。

キィィィン！！

「おいおい……どういうスピードしてやがる？」

ヒュン！

ババババッ！！！！

超高速での突進と共に、ルークに対して撃たれたホムラの剣戟は、その速度に反応することが出来たルークの目と剣によって迎撃、防御された。

しかし、防がれた後のホムラの動きはまた速い。再び高速移動に転じ、相変わらずの機関銃の発砲音のような音と共にルークの周囲を駆け回る。

「（このスピード……俺やフェイトと比べても負けず劣らずだぞ……？　しかも、これ……魔法じゃない、こいつ自身の脚力か……一体どういう訓練してきやがったんだ）」

ガキィ！！

ホムラの健脚に心底驚きながらも、またしても神速の移動から繰り出される剣戟を弾くルーク。

ホムラの姿は、途切れ途切れ見えるくらいで、地面を蹴り叩く音と、剣が繰り出される一瞬の剣気に反応できなければ、まず捌くことは難しい。

ババババ……ババババッ！！！

ギィィィン！！

「（凄い……！　縮地の手前……半縮地の速度もかなり速いはずなのに、師匠は普通に反応を……やっぱり、この人は本当にすごい人なんだ！！）」

地面だけでなく、設置された擬似ビルの壁、縦横無尽に縮地、いやその手前の状態である半縮地で駆け回りながら攻撃するホムラは、ルークの底知れない実力に恐怖すると同時に、圧倒的な尊敬の念を感じていた。

これで、ルークはまだ魔力制限や、恐らくだが手加減もしているのだろう。そんな状態でもホムラの攻撃を観察しつつ迎撃しているのだ。良い師匠に巡り会えたとしか思えない。

ババババババッ！！！

ホムラは、ルークの経験、力量に感激しつつ、半縮地でビルの壁を駆け上がり、クルリと宙返りする。そのまま空中でシラヌイを納刀し……

「シラヌイ、カートリッジロード！」

『はい、マスター』

ホムラの掛け声と共に、シラヌイの鞘から一発の薬莢が飛び出す。

次いで、ホムラの魔力が爆発的に高まっていく。
刀というデリケートな意匠を持っているシラヌイは、本体にカートリッジシステムを積めないため、鞘にその機構を組んでいるのだ。

ぼ……ボァァ！！

ホムラは高まった魔力をシラヌイの刀身に。自身の魔力を変換して生み出した、黒い炎を発生させる。その炎の質も量も、以前彼が鉄骨を真っ二つにするために放った『黒椿』とは比べものにならないものだった。
ホムラは、そんな大量の炎を宿したシラヌイを、ルークの頭上。空中での不安定な体勢から抜刀の要領で、勢い良く振り切った。

「鳳仙花（ほうせんか）！！！」

ゴアァッ！！！

「わお♪」

ルークが少し嬉々とした様子で、自身に迫り来る黒い炎の奔流。ホムラの技、鳳仙花と相対する。
ホムラが空中で振り抜いたシラヌイから、猛々しい黒い炎が大量に放たれ、それがルークを丸ごと飲み込まんと迫ってきている。

そして……

ドォォォォン！！！！

見事に着弾。ルークが立っていた地点は、黒い炎が渦を巻き、その範囲にあるものを焼き尽くしていく。
無論、非殺傷設定なので、ルークが死んだりする心配もない。まぁ彼の場合は殺傷設定だったとしても問題ないだろうが。

バチ……バチチチ……

「炎の性質変化か。お前の名前にぴったりだな、ホムホム」

「どうも。って、そのホムホムっていう名前は勘弁して下さい……」

地面に着地し、鳳仙花の着弾地点を注視していたホムラだったが、やはりというか当然というか、ルークは無傷だった。
アーカーシャを地面に突き立て、自身をシールドで覆った状態で鳳仙花の炎を完全に防御していた。見れば、アーカーシャの刀身には赤い雷光が迸っている。

「（鳳仙花もダメか……半縮地からの攻撃も見切られてるし……困ったな……）」

「（今のはヒヤッとした……しかも、あのスピードからの攻撃も捌くことには問題ないが、まだなにか隠し玉があると見て間違いないだろうな……）」

ホムラとルークは、ここまでの戦闘によって得た情報と結果を元に、次の攻撃の手立てを模索する。やはり、状況は圧倒的にホムラにとって不利だ。
加えて、ルークは未だに自分のほうから攻撃を仕掛けることはしていない。
彼が攻勢に転じれば、状況はまた変わるだろう。

一方、二人の模擬戦をギャラリーしていたヴィヴィオ達は……

「ねぇ……ホムラさんの動き……一瞬見失っちゃったんだけど……」

「わたしも……」

「うん……たまにチラッと見えるくらいで、後は全然……」

ホムラの縮地、正確には半縮地だが、彼の見せた超高速移動に目をまん丸にしてしまっていた。
リオ、コロナ、ヴィヴィオの目には急にホムラの姿が掻き消えて見え、地面を蹴り叩く音と、たまに現れる彼の姿を捉えるのがやっとだった。

「凄いですね、ホムラくんのあのスピードは……ソニックムーブ

みたいな魔法を使ってるわけじゃないのに……」

「うん、目で追うのがやっとだったよ……」

エリオとフェイトも同じスピードアタッカーとして、ホムラのあの能力には感心していた。彼らと違い、ホムラのスピードは魔法を使っていないため、少し毛色は違っているものの、戦闘スタイルとしてはこの二人に近しいものがある。

「なのはさん、あのホムラくんの速度はどういう？」

「うん、あれはホムラくんの一番大きな武器でもある『縮地』っていう体技なんだって。強力な脚力が必要になるんだけど、初速からトップスピードで移動することで、まるで瞬間移動したみたいに間合いを詰めることができるんだって」

「気ぃ張ってないと、ほんとに瞬間移動したようにしか見えねぇよ……目で追うだけでも一苦労だってのに」

スバルがなのはに尋ねると、彼女はホムラ自身から聞いたのであろう説明を、そのまま教えてくれた。

しかし、からくりが分かったとしても、やはりあの速度は目で追うのがやっとのようだ。

ノーヴェが言うように、なのはもフェイト達も、気を抜くとすぐに彼の姿を見失いそうになるレベルなのだから。

「ホムラさんの本気は、もっと速いです」

「「「「え？」」」」

と、突然のアインハルトの呟きに、なのはを除く全員がギョッとしたような表情になった。今のままでもあそこまでの速度を出せるのに、これ以上の速さがあるのかと、そう思わずにはいられなかったのだろう。

今のホムラより早く動こうと思えば、それこそフェイトやエリオのソニックムーブを使う以外に無い。

それが、まだこの速度に伸びシロがあるというのだから、驚かないほうが難しい。

「アインハルトちゃんは知ってるんだ？　ホムラくんの縮地のこと？」

「はい。何度も見せてもらいましたから……二人で訓練していた時も、いつも必死で練習していました」

「あ……（やっぱり、アインハルトさん……ホムラさんのことよく分かってるんだ……）」

なのはとアインハルトのやり取りを見て、またしても少し心が曇り空になるヴィヴィオ。単純に彼との付き合いの長さの違いというだけのことなのだが、やはりそんな言葉一つでは心は納得させられな

いものだ。

「ホムラ兄ちゃん、もっと早く動けるの？」

「今でも目で追うのがやっとなのに、これ以上……？」

ヴィヴィオの葛藤が心のなかでひしめき合っている中、クゥとティアナ親子が、アインハルトにそう尋ねる。

クゥも、イノチルとしての身体能力の高さにより、ホムラの半縮地の速度に目は追いついていた。

しかし、流石にこれ以上となると大人組と同じく、ホムラの姿を捉えるのは難しい。

「というか……そうですね……ホムラさんが本気で縮地を使用した場合……本当に消えるんです」

「消える？」

「はい。縮地を使ったホムラさんは……目に映りませんから」

アインハルトの話を聞いて、クゥを筆頭に皆が息を飲んだ。縮地の驚異的な速度、それに加えてそんな体技を習得するまでに掛かった時間と努力は計り知れない。

フェイト達が驚いた点は、ホムラのスピードだけではない。その境

地にまで辿り着くために払った、ホムラの対価を含めての話だ。

そして、それと時を同じくして、膠着状態であったホムラとルークの戦況が、大きく動き始めたのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「さってと……たまにはこっちから攻めてみますか……」

「…！」

先程までの戦闘を大雑把に見るのならば、間違いなくルークは防戦一方という評価を下されてしまうだろう。二人の剣閃の雨の中に含まれた、実力の差と、ホムラからルークが引き出した技などの情報という、目に見えないリザルトを無視すればの話だが。

シャッ！

「？！」

攻撃に転じた後のルークの行動は速かった。

まずは、ホムラの縮地のお株を奪う様な速さでの高速移動、これはもちろんソニックムーブを使用してでの速度なのだが、魔法発動から加速までのタイムラグは殆ど無いように見えてしまう。

それ故に、ホムラは一瞬ルークの姿を完全に見失ってしまった。

次の瞬間に彼を襲う、背後からのルークの一撃を彼が防げたのは、本当に奇跡的だった。

「（背後から、気配！！）」

キィィン！！

背後に僅かに感じた剣気に、ホムラは脊髄反射でシラヌイを以て反応した。視線を後ろに向けるのは後回しにして、何よりも先に背後に迫るルークの攻撃をシラヌイで防御した。

ホムラの感覚は見事にルークの剣気を捉えており、背中に回したシラヌイの刀身に、アーカーシャがぶつかり、耳をつんざくような金属音が発生する。

「（捌いた！　ここから……！）」

「と、思うのはまだ早いんだなこれが」

ガッ！！

「うぐ！？」

背後からの一撃を捌いたホムラは、そこからカウンターに打って出ようとシラヌイの刃を返した。
しかし、ルークの心の中を読まれたかのような声と共に、ホムラの体は派手に吹っ飛ぶことになる。

ガシャアァァン！！

「くっ……つぅ……」

ルークの剣での一撃を捌いたところまでは良かったホムラ。だが、ルークの攻撃は剣だけではなく、ガードされた直後に繰り出された回し蹴りも込みだった。

剣気だけに意識を集中していたホムラは、ルークの意表をつく蹴りをモロに横っ腹に食らうことになり、擬似ビルの壁に叩きつけられる。

「背後からの一撃を捌いたのは上出来だ。でも、攻撃は剣だけで行うとは限らない。剣気にだけ反応するんじゃなく、俺の一挙手一投足全部に気を張っておけ」

「は、はい……！」

ホムラは、瓦礫から体を起こし、ルークに応える。恐らく、ルークが上手く加減してくれたのだろう、怪我などは欠片もない。

「（凄い……一瞬、完全に師匠のことを見失った……。高速移動魔法も、使う人が違うとここまで速いのか……）」

立ち上がり、再びシラヌイを構えるホムラ。

ここだけの話、ホムラは一応、スピードだけには自身があった。縮地と、半縮地の速度に付いてこれる訓練生は今まで同期の中ではいなかったし、移動魔法を使って高速移動を使用する相手とも模擬戦をしたことはある。

が、その全てにおいてホムラが反応しきれなかったことはなかった。

高速移動魔法、フェイトやエリオの得意分野でもあるこの魔法だが、使い手によってその精度や有用性は大きく変化する。三流が使えば移動しようとした場所よりも行き過ぎたりするし、制御しきれずに地面とディープキスする羽目になることも。魔法なので、コンマ数秒ではあるが発動までのタイムラグもある。

その点から、そういった予備動作が全く必要ない縮地にとっては高速移動魔法は驚異ではないと思われた。そう、今日この日までは。

「（これが……Sランク魔道士の……超一流の魔道士なのか……）」

しかし、今目の前にいるルークを筆頭に、フェイトやエリオ達。彼らのような実力者が使用すれば、ここまで差が出るのだ。

半縮地の速度よりも、彼らの使用するソニックムーブの方が僅かに

速いと、先程の一撃によってホムラは理解することが出来た。

「（でも……僕の武器は……やっぱりこれだけだから……！）」

ヒュン！

ババババババッ！！！

ホムラにも、プライドはあるし負けたくないという負けん気がある。スピードという点においては、いくら相手が自分よりも実力の高かったとしても簡単に負けを認めたり、諦めたいとは思わなかった。再び、半縮地でルークに肉薄するホムラ。今度は馬鹿正直に正面からであり、少し三次元的な動きも交えながらルークの意識をそらそうと試みる、しかし……

シャッ！！

「速度だけに頼るな！　攻撃の瞬間には剣気を絞れ！　どこから攻撃が飛んで来るか丸分かりになるぞ！」

ガスンッ！！

「ぐっ！！？」

半縮地でルークの側面に移動したはずなのだが、次の瞬間にはルークの姿は掻き消えており、逆に自分の側面に回りこまれていた。

ルークの声と同時に、下段から斬り上げるように繰り出されたアーカーシャの一撃をホムラは何とかガードしようとするが、体と思考の相対速度はイコールではない。
僅かに遅れた反応の落とし穴に、ルークの一撃は綺麗に決まった。

ガッ！　ドサァ……

ルークの剣閃に、ホムラの体は軽々と弾き飛ばされる。空中を舞ったホムラの体は、受身をギリギリ取ることが出来たようだが、それでも地面を転がることになった。

速度においても、剣に乗せられたパワーにおいても、完全にルークが優位性を持っている。その結果が、先程のカウンター攻撃ということだ。

「確かに、お前の高速移動、いんや神速は驚異的だ。でも、姿が見えないほど早く動けても、どこから攻撃が来るか分かるくらいに気配を放ったままじゃ、誰にだって避けられちまう。お前の課題は、そういう繊細な剣の扱いだ」

「はぁ……ぐ……」

ホムラは、ルークの教えに頷きながらもう一度立ち上がる。やはり、直接的な怪我はなくとも痛いものは痛い。加えて、疲れも出てくれば、精神的な疲れも然りだ。

「（スピードでも、剣の扱いでも全く歯が立たない……。剣気を絞るなんて……考えたこともなかったな……）」

ルークのアドバイスには、正直ホムラも気がつかなかった部分を突いてくれる効果があった。

確かに、いくら早く動くことができても、攻撃のタイミングと方向が分かれば使い手次第では反応されてしまう。加えて、半縮地での速度はソニックムーブには及ばないし、ルークの目にはホムラの姿が捉えられているのだ。

この状況下では、ホムラの動きを完全に見切り、さらにカウンターを加えることはルークにとっては至極容易いことだった。

「（……だったら……アレを……まだ一回も成功したことないけど……試してみよう……）」

「フゥ……」

……キン！

ホムラは、そんな絶望的な状況から、シラヌイを鞘に収めて一息つく。

剣を扱うに当たっての技術という点でも、経験でも、ホムラでは逆立ちしても勝てない。しかし、一つだけ。ホムラの一番自身を持っ

ているスピードという点においては、まだ彼には伸びシロがある。
何か一つでも、突出したところがあるのならば、そこで勝負するほかない。

「（繊細な剣の扱い方……師匠の言うとおりだけど、それはやっぱり一朝一夕で手に入るものじゃないから……今の荒削りな僕の剣で、師匠に一撃を入れるためには……賭けてみるしか無い）」

スッ……

「……抜刀術か……それも、さっきの神速を絡めての突進技ってとこか」

ホムラが抜刀術の構えを取ると、ルークはなるほどといった様子でそう呟く。彼自身も、剣を扱う技術に関して、この試合内で一瞬で身につくような物だとは考えていない。そういったものは経験と共に、時間を掛けなければ培われないものだ。

だからこそ、今のホムラに出来る唯一の対抗手段は、速度という一点のみでルークのそれを上回ることだけだった。
総合力で負けている相手に対しては、突出したところで勝負して勝つしか無い。

速度という点では、未だホムラには、本気の『縮地』が残っている。
アインハルトが『目に映らない』と形容するほどの速度を秘めた、超神速が。
目にも映らない速さ、つまりは反応すら出来ないはずの速度が、ホ

ムラの縮地だ。そこから繰り出される抜刀術。
超神速を以て、抜刀術に繋げる連続技。

「……『黒百合（クロユリ）』……行きます！」

Ｍｅｍｏｒｙ.；２２　ルーク先生の剣術指南（実戦編）（後書き）

閣下「ふふふ……いいねいいね！！　俺の活躍の場が活き活きとしてるね！！」

フェイト「ルーク！！　カッコイイ！！　抱いて！！」

閣下「ヒーーーーハーーーーー☆！！！」

Ｆ２０Ｃ「はぁ～……まじで９月が戦争だわ……お金的な意味で……もう閣下の行動に突っ込む余裕もないぜ」

ホムラ「どれか一つ諦めたら？」

Ｆ２０Ｃ「それは出来ん。自分に負けたことになるだろう」

ホムラ「いや、勝ち負けの問題じゃなくって……」

Ｆ２０Ｃ「ヤダヤダ！！　買うの買うの！！！　絶対買うのー――ー！！！（ジタバタ）」

ホムラ「どうせ積みゲーするだろうから同じだと思うんだけどなぁ…」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ.；２３　縮地ＶＳ神速抜刀　～ホムホム対ルーク決着～

次回……またしても閣下が活躍します。もう、ほんとごめんなさい。
その代わり、アインハルトとヴィヴィオも女の戦いを開始しますので……

Ｍｅｍｏｒｙ；２３　縮地ＶＳ神速抜刀　～ホムホム対ルーク決着～（前書き）

～アイホムからのお願い～

この小説を読むときは、部屋を明るくして、パソコンｏｒ携帯のディスプレイから目を離して、閣下には出来れば温かな視線を送りながらご覧になってください。

番組の最後に、プレゼントのお知らせがあります

Ｍｅｍｏｒｙ，２３　縮地ＶＳ神速抜刀　～ホムホム対ルーク決着～

「『黒百合（クロユリ）……行きます』

ホムラは抜刀術の構えをとりつつ、ルークとの間合いを測る。黒百合という技がどういった性質の攻撃なのかは、彼の使う縮地、そこから来る超神速の移動スピードから簡単に推測することは出来た。

しかし、あくまでどういった攻撃なのか。分かったのはそれだけだ。

「（さっきよりも、いや比べ物にならないくらいの速度からの突進、そこから抜刀術に繋げる連続技……仮にクリーンヒットしたら、一瞬で意識持って行かれるな……）」

ルークが考えたとおり、どんな攻撃なのかは一目瞭然、予測するのが如何に容易であったとしても、その攻撃に反応して避ける、若しくは防御することが出来なければお話にならない。

ホムラの全開の速度は、先程の半縮地から推測するにソニックムーブに匹敵するか、悪くすればそれ以上のものとも考えられる。

反応できないほどのスピードから繰り出される抜刀術。決まれば勝負は一瞬である。

「いやはや、末恐ろしいガキンチョだこと」

キン……

「！」

ルークは、ややあってからそう呟きながらアーカーシャを鞘に収めた。

そして、ホムラ同様に、彼も抜刀術の構えを取る。以前の試験では、構えを取ることなく神速の抜刀でホムラを圧倒したルークだったが、ホムラの本気を見て、対応を変えたのだろう。

つまり、ルークが抜刀の構えを取らなければならないほど、ホムラの速さは本物であるということだ。

「（こいつは強くなる……俺よりも、ずっと……。だからこそ、今は負けとけ！！）」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ルークさんも抜刀術の構えを……」

「抜刀術対抜刀術……ホムラくんは、多分全力の縮地との複合技で来るつもりだね」

アインハルトが、ルークもホムラ同様に抜刀術を撃つ構えを取ると、息を呑んだように呟く。無論、彼女はホムラが撃とうとしている技が何なのか分かっている。
同じくなのはも、この展開でホムラの放つであろう技を理解していたようだ。

「もしかして、さっきアインハルトが言ってた、『完全に消える』っていう……あれ？」

「はい。ルークさんでも、絶対に反応は出来ないはずです……視界から一瞬で消えてしまうので」

「決まれば一瞬で勝負が付くってことだね……でも、ルークだってホムラが撃とうとしている技は理解してるはずだから、何の考えも無しってわけじゃないはず……！」

ティアナの問に、アインハルトは自らの目で見てきた、彼との訓練での全てを思い出しながらそう答える。
縮地は何度か見せてもらったが、一度たりとも反応は出来なかった。
対して、フェイトの言うとおり、ルークもまた何の策も無しにホムラを迎え撃つわけがない。きっと、何か考えがあっての抜刀術だと考えるのが妥当だろう。

「勝負は文字通りに『一瞬』だね……」

そう呟くなのはの視線の先、ホムラとルークはお互いに抜刀術の構えをとったまま微動だにしない。二人とも、今はかなりりレベルの高い集中に入っていることだろう。

一対一の勝負ということで、相手の表情や体への力加減、体重移動などなど、次のアクションを知らせる要素に集中力を回せる。

・　・　・

「……」

・　・　・

「……」

そして……その場に小さく風が吹き……新緑の木の葉が宙を舞ったその瞬間……

「っ！」

フォン！！

「消えた?!　本当に…！」

「これが……ホムラさんの全力の……」

消えた。

ホムラの姿が、完全にルークやギャラリーをしていたなのは達の視界から掻き消えてしまった。半縮地のように、地面を蹴り叩く音などもなく、瞬間移動したように消えたのだ。

ホムラが消えてしまったことに驚くリオ、コロナ。それに次いで、ルークが動く。

シャッ！！

ルークもまた、彼に出来うる最高のスピードで飛び出した。ホムラのように消えるとまでは行かないが、そのスピードはかなりのもの。

キンッ！

ホムラとルーク、同時に剣に手を掛け、鞘走りの段階に移る。

ダン！！

次いで、同時に踏み込み足。

動き出す前の両者の間にあった距離は、約８メートル。

その中心地点にて、超神速と神速の抜刀術が衝突した。

キィィィィィィン！！！

――ピッ！！

タン……

トッ……

一瞬の勝負。甲高い金属の衝突音と共に、それは意外なほどに静かに、いやいっそのこと無音と言ってもいいだろう、静寂さを纏って決着が付いた。

立ち位置が入れ替わり、お互いに背を向けた状態で抜刀術を放ったままの姿勢で地に足を落ち着けた。

「……」

その場にいた全員が息を飲む。傍目からは、突然消えたホムラが剣を振り抜いた状態で現れ、ルークも同様に抜刀した後という事実だけしか見えてはいない。

コンマ何秒、いやそれ以下かもしれないが、その超短時間の中にどれだけの意味と策が盛り込まれていたのか。

その結果は、すぐに分かることになる。

ザス！

「うっ……」

「ホムラさん!?」

シラヌイを地に刺し、片膝を付いたのはホムラだった。よく見れば、彼のバリアジャケットの胸元部分に少し切れ目が入っている。どうやら、ルークの剣閃がヒットしたようだ。

アインハルトは、まさかと言うように、ホムラが地に膝をついてしまったことに驚いている。彼の縮地のもたらす速度を、良く知っていたが故の驚きだった。

「はぁ…はぁ……（完全に……読まれた……？　縮地でスピードにおいては完全にアドバンテージがこっちにあったのに……？）」

ホムラ自身、訳がわからないという表情だった。真剣勝負で勝てるとは最初から思っていないが、黒百合を使えば一太刀くらいは……と、そう考えていたのだ。

しかし、結果はどうだ？　縮地を使って、反応できないスピードと一緒に放った抜刀術も、ルークに届くことはなく、カウンターとして一発を頂くことになってしまっているこの状況。

「なんでカウンター食らって片膝付いてんのか分かんない、って顔してるな？」

「あ……はい……」

そんなホムラに、ルークはアーカーシャを納刀しながらそう言ってくる。ルークの方には傷ひとつ、バリアジャケットにも汚れひとつ見られない。

それを確認したとき、ホムラは改めて自分が完敗したのだと理解できた。ルークがどうやってホムラの黒百合に反応できたのかは分からないままだったが。

「正直言うと、お前の姿は完全に見えなかった。ていうか、冷や汗モノだったよ実際」

「……」

「でも、目に映らないほどの速さなら、最初から目で追おうとしなければいい。お前の速度に反応するためには、視覚に頼らないのが一番なんじゃないかと俺は踏んだ」

「は、はぁ……？」

反応のために、視覚に頼るのを止める。ある意味、矛盾したような物言いにも聞こえるが、実際ルークはホムラの速度に反応してカウンターを食らわせたのだ。実際にやってのけたのだろう。

「で、攻略法として閃いた方法が一つ。魔力を使うことだ」

「魔力を使う……？」

「あぁ。俺の剣の間合い一杯にまで、自分自身の魔力を放出しっぱなしにする。もちろん、お前に気付かれないように、可能なかぎり薄く、繊細にな」

つまり、先程までルークは自分の間合いの範囲内に魔力を張り巡らせてあったということだ。

ホムラの目の写らないように、繊細な魔力コントロールを駆使しながら。

「お前のスピードはたしかに速い。でも、抜刀速度は俺のほうが上だ。だから、お前が俺の間合いにさえ入ってくれれば、その瞬間に勝負はつくわけだ。が、お前のデタラメスピードは『間合いに入るタイミング』を完全に分からなくする。間合いに入った瞬間が分からないと、俺も抜刀に移れないからな」

「はい」

「だからこそ、お前の速度によってかき消された、間合いに入るタイミングを、薄く張り巡らせた魔力によって感知させることを思いついた。お前の取っておきの技が、さっきの速度と抜刀術を組み合わせた技だってことが予測できたからこその作戦だったが」

視覚に頼らずに、ホムラの速度に反応するとはつまり、魔力を目に代わりに、センサーのようにして使うという思い付きだったらしい。

抜刀速度では、ルークに圧倒的なアドバンテージがある為、ルークの勝利条件はホムラが自分の間合いに入ってくることだけ。しかし、ホムラは縮地という武器を使うことで、間合いに入るタイミングを断つことが出来る。反応できないほどの速度とは、そういうものだ。

が、ルークの間合い一杯にまで張り巡らされていた魔力のセンサー（簡易）によって、そのタイミングを図ることが出来たというわけだ。間合いに入る瞬間さえ分かれば、ルークの攻撃速度がモノを言う。

カウンター気味、（まぁ実際はホムラの攻撃を潰したわけだが）の抜刀術で、ホムラを撃ち落としたというわけだ。

「モノは何でも使いようってことだ。魔力だって、攻撃のためだけじゃなく、もっと応用が効く。一つ賢くなったな？」

「は、はい！（本当に……師匠はほんとうに凄い人だ！）」

ホムラは、ニッと笑いながらそういったルークの姿に、彼への尊敬度がまたしても上がってしまった。

本当に、常日頃からこの状態を維持してくれれば、なのはも安心して教導を任せられるのだが……いや、今は言うまい。

「それと、黒百合だったか？　あの技、まだ未完成だろ？　剣閃がブレてたぞ」

「あう…！」

「あれじゃ、反応できなくても、それなりの使い手が相手だと通用しないな。姿が見えなくなる一方で、そのブレがかなり目立ってたからな」

加えて、ホムラの技がまだ未完成なことも見破られてしまった。アインハルトとの訓練でも練習していた技なのだが、やはり今一歩完成には近づけていなかったのだ。

「なるほどなるほど……やることは山積みだな？」

「はい……縮地も、全開の連続使用は五回が限界ですし……」

「それ以上は、脚への負担が掛かるって訳か。だから、序盤では全開の一歩手前でやってたのか」

「はい、体が出来上がれば話は別なんでしょうけど、まだ体が小さいので……知り合いの医師にもそう言われてしまって」

縮地は、超人的なスピードを実現させてしまう代わりに、使用者への、主に脚に対する負担が大きい。半縮地ならともかくとして、全力の縮地に関しては妹・ユキナの主治医であるフォン医師に『日に五回まで』という忠告も貰っている。

体が成熟していけば、改善していく問題ではあるが、こればかりは

どうしようもないことだ。

「魔力なしであんなデタラメな速度出せるんだ、それくらいの縛りがないとおかしいさ。……さて、一回目の模擬戦は俺が勝ったわけだが……」

「？？」

模擬戦での反省会やネタ明かしなどを終えると、ルークはホムラに『一回目の』というニュアンスを含めてそう告げてくる。

ホムラの力を把握するという、ルークの表の目的はこれで果たせたわけだ。しかし、模擬戦前に彼が考えていたように、ホムラの中の違和感の正体を引きずり出すという目的がまだ残っている。

「どうだ？　お前にその気があるなら、今日はとことんまで付き合ってやるが」

「ほ、ホントですか？！」

「おぉ。ていうか、俺は理論から教えるとかは無理だから。実戦で教えていくしか無いんだなこれが。理論とか小難しい話は、なのはさんを頼ってくれ」

あくまで、表向きは模擬戦の延長という形で。ホムラ自身も、まだ

戦い足りないという気持ちがあるだろうから、確実に乗ってくるだろう。
良くも悪くも、ホムラも剣士ということだろうか。

「（幼気な少年を騙すような感じで、ちと心は痛むが……悩みの種はハッキリさせておくに越したことはないだろ……）」

ルークの気のせいなら、それはそれでいい。だが、ホムラとの試験、先程の模擬戦の中でもルークは彼に違和感を覚えていた。
より一層の確信を持って、ルークはホムラの中にある何かを確かめなければと考えていた。

「よし、んじゃ。二回戦と行きますか」

「よろしくお願いします！」

ホムラは、ルークの考えていることに気付くはずもなく。ただ単純に、実力者との模擬戦という、他にはないくらいの経験値を積めることに喜んでいた。

そうして二人は、元気よく模擬戦の二回戦目に突入し始めたのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「凄いものを見た気がするね……」

「うん……ホムラさんもルークさんも……上手く言えないし、言葉に出来ないんだけど……」

「でも、変態兄ちゃんもこういう場面ではマトモなのにね……勿体無いって言うかなんて言うか……」

「る、ルークはやれば出来る子なんだよ？　ちょっと不真面目っていうかエッチなだけで……ほんとに……」

リオ、コロナ、クゥがそう言う中、模擬戦の二回戦を始めてしまったルークとホムラ。今さっきの激しく、内容の濃い模擬戦の後だというのに両者とも全く疲れを感じさせない動きで剣を踊らせている。

そんな中で、フェイトはルークの評価を少しでもよくしてやろうと、可愛く頑張っていた。本当に、よく出来た嫁である。変態には惜しいくらいだ。

「ホムラさんの縮地を……あんな方法で攻略してしまうなんて……」

「ルークくん、あぁ言う閃きに関しては天才的だから。経験からくる応用力っていう見方も出来るけど、やっぱりセンスがモノを言うところだね」

「でも、ホムラさんの縮地も凄かったです！　本当に瞬間移動したみたいで！」

アインハルトが縮地が攻略されたこと、その方法に驚いていると、なのはがルークのその方面の才能について語ってくれる。
応用力、閃き。ルークの類まれな戦闘センスを支えているのは、剣の才能は勿論だが、こういった頭の回転の速さ的な要素も否めない。

ヴィヴィオはヴィヴィオで、以前自らの危機を二回も救ってくれた技の正体と、実際にホムラがその技を使うところを見れたからか、興奮気味にそう話す。
その様子からは、先程のような落ち込んだオーラは感じられなかった。恐らく、それを忘れてしまうほど気持ちが昂っているのだろう。

「でも、ホムラもルークさんも元気が有り余ってるみたいね」

「だな。ホムラも、ルークみたいな実力者が相手だから、気合入りまくってるみてぇだし」

ルーテシアとノーヴェも、模擬戦の二回戦を戦っている二人を見ながらそう呟く。両者とも、先程以上の運動量に魔法戦や飛行魔法なども使って、攻防にしのぎを削っている。
これは、もう少し見ているのも面白いかもしれない。

ホムラはともかく、ルークの一対一での戦闘など、普段では見ることは余り無いため、ノーヴェ達にとってもレアな見物なのだ。

「らあぁぁぁ！！」

「おっと」

ガキィン！！　ギィン！！　ドゴォッ！！

「……（うず…）」

と、二回戦目に入ってより一層の激しさとシビアな内容になりつつある、ホムラとルークの戦闘を見て、アインハルトは心の中に湧き上がる何かを感じた。

その気持ちを言葉にするのなら、『ホムラに負けてはいられない、自分も頑張らなければ』という彼女らしい前向きな気持ちだった。

真剣に、加えて充実した表情でルークの剣戟を捌きつつ、自身も攻撃に転じているホムラの姿に、二重の意味で胸が熱くなってしまっていた。

ちょいちょい……

「？」

と、そんなアインハルトの心中を察した、いや同じ気持になっていたのであろうヴィヴィオが、彼女の服の袖を小さく引く。

ヴィヴィオもまた、アインハルト同様に火が付いてしまったという

ことだ。

「（アインハルトさん、見学抜けますか？）」

「（あ…えぇと……）」

「（こういうの見ちゃうと、体動かしたくなりますよね。ですから、よければ向こうで軽く一本！）」

ヴィヴィオからのお誘い。お互いに、気持の昂ぶりを持て余している同士、訓練に汗を流すのもいいかもしれない。

いや、寧ろこのまま見ているだけでは我慢出来ないというのが本音だった。

「はい……是非」

アインハルトの答えは、勿論Ｙｅｓ。ヴィヴィオの誘いに、遠慮なく乗ることになった。

アインハルトはヴィヴィオとホムラの、此処に来たときの微妙な空気のことに関して少し気にはなっていたものの、今の彼女からは先程のような暗さは全く感じられなかったので、敢えて考えないことにした。気のせいなのかもしれないことを、わざわざ掘り返すことはないと。

「（……アインハルトさん……。……うん、確かめて……みよう……）」

が、対するヴィヴィオは、そんな決意を胸に、アインハルトとの抜け駆け訓練に望んでいた。

確かめたい。自分が何故こんなにも二人の関係が気になって仕方ないのか。ホムラが苦し紛れに呟いたアインハルトの名前の意味を。

それはアインハルト一人に聞いたところでハッキリすることではない。しかし、一つだけだが彼女にしか聞けないことがある。

彼女の、アインハルトの気持ちを。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

二人は、ノーヴェ達に事情を話して模擬戦の見学を抜けだして、森の拓けたスペース、二人で訓練するのにはちょうどいい場所にまでやって来た。

ミット打ちの為のミット、訓練用のグローブもセットで持ってきたので少し荷物が多くなってしまったが、周囲の気温は春らしい適温を保っているので、汗を流すこともない程度だ。

パンッ！　パンパンパンッ！！

アインハルトが、ヴィヴィオが支え持っているミットに、グローブを装備した拳を放つ。ミットと拳のぶつかり合う乾いた音が、森の中に反響していき、その音は絶えることがない。

素早く、鋭さのあるアインハルトの拳が次々とミット目がけて打ち込まれていく。

「どーです？　こういうミット打ち、練習になります？」

「古流の型打ちとは、だいぶ勝手が違いますが……」

ストライクアーツとカイザーアーツでは、やはり練習方法に差異があるらしく、アインハルトにとってはこのようなミット打ちは初めてだった。

自分の行ってきた練習方法とはまた別のアプローチということで、新鮮な感覚がある。

ドドドドンっ！！！

「良い練習になりそうです」

「良かったです！」

続けざまにミットに叩き込まれた、ひと味違う重みのある拳。先程の乾いた音とは違い、ミットに命中した時の音も、重さが増していた。

二人はしばらく、夢中になりながらミット打ちに励んでいくことになった。アインハルトの放つ拳は、続けていくごとに鋭さと重みを増していく。ミットを持つヴィヴィオも、気を抜いてはいられないほどだ。

「（アインハルトさん、やっぱりすごいな……！）」

この自身の腕に伝わる衝撃だけで、彼女に対する尊敬の念は深まってしまう。しかし、同時に考えてしまうことがあるのだ。

「（だから……ホムラさんも、アインハルトさんを頼りにしてるのかな……？　強くて…優しいこの人を……）」

ホムラの部屋での一件。あの時確かに、ホムラはアインハルトに助けを求めていた。

それに対し、自分は警戒ラインに踏み込んでしまい、彼を驚かしてしまうことになった。まぁ、ヴィヴィオ自身も驚いてしまったわけなのだが。

それはともかくとして、ホムラにとってアインハルトがどこまで大きな存在なのかという、そんな疑問が生まれてしまったわけだ。

ドド…ドドン！！

「……ホムラさん……頑張ってましたね……」

「フッ……！　え……あぁ、はい。今までにないくらい強い対戦相手に巡り会えて充実しているように見えました」

その疑問は、今は置いておこう。それはホムラにしか分からないこと。

ここでヴィヴィオが確かめたいことは、アインハルトの内心について、彼女はホムラの名前を出しながら、アインハルトの拳を受け止める。

「今まで……私と同じで、ずっと一人で努力していたみたいですから……ルークさんのような、良い師匠が付けば、きっとホムラさんの成長は早まるでしょうね……」

バババッ！！　ドドンッ！！

「私も……負けていられません！　置いて行かれないように、必死で走っていかないと！」

「……」

ドドドッ！！！

アインハルトは、気が付いているのだろうか？

ホムラのことを話しながらミットを打つ自分の表情が、それまでよ

りもずっと充実している事に。
頬に、運動に依るものとは別の意味を持った朱が差していることに。

「（……アインハルトさんは、ホムラさんと対等でいようとしてるんだ……拳と剣では全然違うジャンルなのに……その枠を超えて、同じラインに立とうと一生懸命で……）」

事実、アインハルトはホムラとの間に優劣を出したくないと考えている。同じラインに立って、対等な関係でいたいと。
そうでなければ、夜中に涙を流した状態で、通信など出来るわけもない。

「アインハルトさんにとって……ホムラさんって、特別なんですね……」

「？　特別というか……ホムラさんは、大事な友人ですから」

「……そういう事じゃ…無いんです……」

ドドドッ！！

ミットを受けてくれているヴィヴィオの様子が、少し変わったことをアインハルトは感じた。真剣さの度合いというか、真に迫ろうとする迫力というか。
今までの、良い言い方をすれば牧歌的な、悪く言えばノホホンとしたヴィヴィオとは違っている。

そして、アインハルトはそんな彼女の変化に戸惑いつつも、再びミットに拳を放つ……つもりだった。
つもりだったのだが、次の瞬間にヴィヴィオの口から出た呟きに、アインハルトの拳は振り上げられたまま、動けなくなってしまった。

「アインハルトさんは……ホムラさんのこと、好きなんじゃないですか？」

Ｍｅｍｏｒｙ；２３　縮地ＶＳ神速抜刀　～ホムホム対ルーク決着～（後書き）

閣下「おい、前書きのアレは一体どういう意味だ」

Ｆ２０Ｃ「決まってるじゃないか。最近のキミの、あまりに悲惨な扱いを嘆いたホムホムとアインハルトが気を使ってくれたんだよ」

閣下「……あれ、なんでだろ……？　前が霞んで見えないや……」

Ｆ２０Ｃ「子供にまで気を使ってもらうとか……本気で可哀想になってきたでござるの巻」

閣下「ていうか、プレゼントって結局なんだったの？　前書きにあった奴」

Ｆ２０Ｃ「あぁ。閣下のセミヌード写真集とかどう？」

フェイト「ガタッ！！」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；２４　アインハルトの気持ち

次回もこのチャンネルでファイナルフュージョン承認！

ホムラ「ガオ○イガーｗｗｗ」

Ｍｅｍｏｒｙ，２４　アインハルトの気持ち（前書き）

何年ぶりかにアニメでポケモンを見ることが出来ました。

知ってるポケモンがピカチュウしか居なかった件。

あれ？ていうか、カスミは？　タケシどこいってしもたん？

あと、声優陣豪華過ぎワロタｗｗ

Ｍｅｍｏｒｙ；２４　アインハルトの気持ち

「アインハルトさんは……ホムラさんのこと、好きなんじゃないですか？」

静寂。

そのヴィヴィオの一言が、アインハルトの拳だけでなく、この世界の時間さえ求めてしまったのではないかと思うほど、一瞬だが辺りが静寂に包まれた。

ヴィヴィオの言葉の意味を理解するのに、そう時間は掛からなかった。しかし、理解はできても、その言葉の意味を自分に当て嵌めることは上手く出来なかった。無理も無い話だ。今までの人生では、経験したこともなかったのだから。

「……」

「……っ…」

静寂を切り裂いたのは、アインハルトの一際大きな心音だった。ドクンドクンと、激しく彼女の心臓が脈を打つ。同時に、顔は紅潮し、耳まで赤くなってしまう。

ヴィヴィオの真剣な表情と口調、そして緊迫した雰囲気にも拘らず、

『ホムラ』・『好き』という二つの単語が脳内に嫌になるほどに浮かび上がってしまい、自分でもどうしていいのか分からない。

「ど…どうして、そんなことを……考えて……？」

そんな、自分自身がおかしくなってしまいそうな一歩手前の状態で、アインハルトが口に出来たのはそんな呟きだけ。文法もクソも知った事ではない。そんなことを考えている余裕が、脳の空き容量を充てている余裕が無い。

「いつも、お二人のことを見てて、お似合いだなって。そう思ってたんです。特にアインハルトさんが、やけにホムラさんのことを見ていることも……さっきの模擬戦の時も、ホムラさんの姿を見て、頬が赤くなってました……」

「う……」

ヴィヴィオは、そこで漸く真剣な表情を少し柔らかく崩す。別にケンカするわけではないのだ、相手を威圧するような態度に意味はない。ただ、最初の一打はこちらが真剣だということを示すために、敢えて威圧的な空気を作った。

ヴィヴィオにとっては慣れないことで、変に疲れてしまった。

「私には、恋とか愛とか……そう言うのはまだ、ドラマとか本の中

でのことだって、そういう認識で、ハッキリ言ってアインハルトさんの気持ちがどういう形のものなのか、責任をもって言い当てられるわけじゃないんです。ただ……フェイトママが、ルークさんに向けてる、視線に似てる気がしたから……」

「フェイトさんと……ルークさんの……？」

万年新婚夫婦として有名なフェイトとルーク。優しく、しっかり者な姉さん女房と、ちょっとだらしない年下旦那という、ある意味ではベストな組み合わせとも言えるあの二人。

その二人を、近くで見ていたヴィヴィオだからこそ気付いた、アインハルトとホムラの二人の組み合わせと通ずる視線があったらしい。

それは、愛しさだとか、恋慕の情だったりとか、保護欲だったりとかをすべて引っ括めたような、そんな視線だとヴィヴィオは感じていた。

「二人とも、これでもかってくらい、お互いのことを好き合ってて……理解し合ってて…その、愛し合ってるんだと思うんです。だからその……アインハルトさんがホムラさんに、フェイトママたちと同じ視線を送っていたのを見て……もしかしたらそうなのかなって……」

「わ……私は……その……」

ヴィヴィオの言葉を選びながらの、辿々しい言葉ではあったが、アインハルトの心は大いに乱れていた。

ヴィヴィオの言葉の向こう側にある、彼女自身の気持ちなど感知する余裕もない。

ただ、自分とホムラの関係と、少し朧気なこれからのこと、もし『そういう関係』になった場合のことしか考えられなかった。

「……あ……っ…」

結果、アインハルトはヴィヴィオに何も答えることが出来なかった。単純に、自分の気持に折り合いなど付けていなかったし、今すぐここで答えられることでもなかった。

この胸の中の気持ち、たまに感じる言いようのない苛立ちや、胸の痛み、微かな焦燥感。それを塗り潰してしまうかのような温かな気持ち。

アインハルトは、その気持ちに未だに真剣には向きあえてはいなかった。

「……ごめんなさい。こんなこと、本当はこんな風に問い正しちゃいけないことなのに……忘れてください」

「……」

アインハルトの困り果てたような、答えに窮している様子を見て、ヴィヴィオはそう言って質問を取り下げた。

これがなければ、アインハルトは延々と何も言えないでいたかもし

れない。

ヴィヴィオ自身も、こんな風に人の心の中を広げさせるようなことをしてしまった事を後悔しているようだ。

「（こんな風に、アインハルトさんを困らせてまで……私の気持ちを押し付けるなんておかしいよね……私の好奇心だけで人を振り回すのは……）」

実際、アインハルトにヴィヴィオが、ホムラのことを尋ねたのは好奇心ではなかったのかもしれない。アインハルトとホムラの関係が妙に気になってしまった、自分でも変なくらいに。

他人と他人との関係、友人の恋愛事情を聞かされると、なぜか焦ってしまったり、嫉妬してしまう感情に近いかもしれないが詳しいところはやはり分からなかった。

しかし、自分の持て余す感情の整理のために、アインハルトを困らせるのは違うのではないかと、ヴィヴィオはそう思ったが故に質問を取り下げたのだ。

「わたし、先に戻ってますね……本当に……ゴメンナサイ……」

「あ……」

ヴィヴィオは申し訳なさそうにアインハルトに頭を下げると、そのまま小走りでその場を後にしてしまった。

彼女を呼び止めようとしたアインハルトだったが、彼女の口から意味のある言葉が出ることはなく、ヴィヴィオの姿は消えてしまう。

「私は……ホムラさんを……」

残されたアインハルトは、その場で呆然と立ち尽くしながら、自分の乱れた心を落ち着かせようとすることしか出来なかった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……私は……」

ヴィヴィオが去ったあと、アインハルトは手頃な木を背にして座り込んでいた。
別に立っているのが疲れたとか、そういう事ではない。ただ、少しだけゆっくりと考え事をしたいと思っただけだ。

ヴィヴィオの言う、『自分がホムラのことを好きなのではないか』ということに付いて。

「……ホムラさん……」

思えば、出会ってから既に一ヶ月近くが経とうとしているのか。時間が過ぎるのは速いものだ。

しかし、決してその？日が薄っぺらいものだったわけではない。逆に、新しい発見だったりとか、人間関係などが生まれた。ある意味、今までの人生の中では最も濃い時間だったのかもしれない。

その？日の中で、ホムラと出会って友人になって……気がつけば一緒にいることが多くなって……

「あの人を見ている時間が……多くなった？」

こういう場合、惹かれているのだとか、意識しているのだとか、気になっているとか、表現の仕方は様々だ。しかし、そのどの表現を取ったとしても、自分がホムラのことを自然と目で追っているという事実はどの表現にも当て嵌まる、共有的な事象だ。

加えて、思い返してみる。

今までは、覇王流（カイザー・アーツ）の事、覇王の悲願、そのことばかりを考えていた。その他ことは全部かなぐり捨てる勢いで。

しかし、最近はどうだ？　こうやって、ホムラのことで悩んだり、悶々としたり、恥ずかしくてモジモジしてしまったり、彼と一緒に訓練などした日は、その時のホムラのことを寝る前の時間にずっと考えたりもしていた。そうすることで、心に不思議な暖かさが宿るというか、ホッとするのだ。

その感覚が、アインハルトには心地良く、同時に得難い幸福感となって体に沁み込んでいった。

「～～～～～～～っ！！！！」

そこまで考えてしまい、アインハルトは顔を真っ赤にしながら、頭をブンブンと振るが、顔の紅潮はそんなことではどうにもならない。

それと同時に、心の中ではホムラとのことに関する考えが、どんどん深まっていく。

もっと一緒に居たい。

彼が何に苦しんでいるのか知りたい。

癒してあげたい。

自分のことも……助けて欲しい…

そんな欲求が、頭の中では渦巻いていた。

「私は……ホムラさんが……好き……？」

ドクンッ！　ドクンッ！

そう口にしただけで、胸の鼓動が跳ね上がった。ヴィヴィオに言われるのと、自分の口で言うのとでは全く次元が違う。

自分の感情を、素直に認めてしまったようで心地良くもあったが、

五月蝿いくらいに胸が脈を打つ。

「好き」という単語が、嫌になるくらい頭の中で踊り始める。

「これが……誰かを好きになるということ……？」

この感情が、恋なのか。自分だけでは判断できない。

しかし、何か心の中の不覚の、自分自身の根元にある何かが、その認識が正しいを囁いてくるように感じる。

本当にそうなのか？

それでいいのか？

これが正解なのか？

「正解とか不正解とか、良いのか悪いのかとか……そう言うのはどうでもいいと思うけど。ていうか、要はお前がどう在りたいかって問題だ」

「っ？！」

と、その時。まるで自分の心の中の疑問を吹き飛ばすような答えが、自分の声ではない、他の誰かの声で飛んできた。

周囲に気を張ることなどしていなかったアインハルトにとっては、完全に自分のテリトリーに誰かの侵入を許してしまったような形だ。

そして、その侵入者は、意外なほどあっさり見つかった。

「ま、そういう繊細な問題は、扱いが難しくて然る物なんだろうけど。まぁまぁ、人間って言うのは相変わらず面倒くさい生き物だ」

「誰です！！」

その声の主は、アインハルトが背中を預けていた大木の真正面に位置する、もう一回り大きな木の太い枝に腰掛けていた。
黒いジャケットに、同じ色のスラックス。黒髪黒眼でメガネを掛けた青年。ミステリアスが服を着たような男だ。

「（……？　この人……クゥさんに……似てる？　気の所為か……）」

アインハルトは知らないだろうが、以前次元船の中でホムラが知り合った、ミールと名乗る青年だった。

「あらら…怖い怖い……んなことじゃ、ホムホムくんもビビっちゃうよー」

「誰かと、聞いているんです！！」

この世界、カルナージは無人世界である。メガーヌとルーテシアが生活していることを除けば、彼女たち以外に人はいないはず。
加えて、此処に来るために利用した次元船の乗客の中には、アインハルト達を除いてこの世界に降り立ったものは居なかった。
故に、目の前にいる青年はこの世界にいるはずのない存在なのだ。

アインハルトは、その青年に対して警戒心を全開にし、いつでも戦えるように構える。しかし、青年は余裕を絶やさない表情を浮かべて、少しずれてしまったメガネを指で押し上げる。そして……

「……キミの意中の人、ホムラくんの命を狙ってる悪い人……って言ったら？」

「っ！！」

ダンッ！！

ミールがそう答えた瞬間、アインハルトは地面を蹴っていた。一直線に、大木の枝に腰掛けている彼にアインハルトは全力の一撃をお見舞いする。
彼がホムラに害をなす存在だというのなら、このまま放っておくわけにはいかない。

しかし

トン…

「うん、悪くない」

「なっ！？」

アインハルトの全力の力を込めた拳は、ミールの右手、その人差し指一本で止められてしまったのだ。

指一本で止められるほど、甘い拳ではなかった筈だ。アインハルトは確かに全力で攻撃した。

「（び、ビクともしない……！？）」

しかし、その指一本の力によって、アインハルトの拳は確かに止められていた。

アインハルトは、一旦距離を取るために、拳を押し返して空中で一回転。そのまま地面に着地して、青年・ミールを睨みつける。

どう攻勢に出るべきななのか、ハッキリ言って分からない。自分の攻撃を指一本で止めてしまうほどの相手なのだ。ハッキリ言って、どの程度格上なのか推し量ることも難しい。

「なかなかの良い反応と思い切りの良さ。身体能力も相当のもんだね」

「……（どうする…？　どうすれば……？　ホムラさん……）」

混乱気味のアインハルトに対し、ミールは現れた直後と同じ余裕を持った態度を崩さない。あらゆる部分で、完全に優位性を相手に持って行かれてしまっているこの状況。ハッキリ言って、最悪の状況というやつだ。

が、相手の狙いがホムラである以上は、このまま逃げおおせる訳にもいかない。

「っ……」

「不利だということは理解できても、退く気はない……か……。それだけホムホムくんのことが大事なのかな？」

「あっ…うぅ／／」

ミールの言葉に、一瞬だが頬を赤らめてしまう。事を構えている最中に、隙を見せてしまうことがどれだけ恐ろしいかよく理解しているはずのアインハルトだったが、今日の彼女はやはりどこかおかしかった。

「可愛いねぇ～、青春だねぇ～♪　（パチンっ！）」

「？」

心底楽しそうにそう言うミールが、指を弾き鳴らした。その行為に

何の意味があるのか？　アインハルトは分からなかったが、次の瞬間に自分の体を以て理解することになる。

ドフンッ！！

「うぅっ！！？」

突然、アインハルトの体が重くなる。いや、これは彼女が重くなったわけではない。アインハルトの体に、何か大きなものが伸し掛っているような、そんな感じだ。
その『何か』の重さに耐え切れず、アインハルトは地面に膝をついてしまい、そのまま身動きひとつ取れなくなってしまう。
まるで、何トンもの重りを体に巻き付けられてしまったかのようでもあり、アインハルトの額には嫌な汗が出ていた。

「な、何を……？！　うぅ……」

「大した事はしてないよ。ただちょっと、空気とか大気のベクトルを弄っただけ。あぁ、怪我もしないけりゃ死にもしないから安心しな」

天気予報の内容を話すが如く、さらりととんでも無いことを言うミールに、アインハルトは少し呆気に取られてしまう。
しかし、このままでは身動きがとれないまま何も出来ない。

アインハルトは、どうしようもない状況下に思考停止しないように必死だった。このまま何もしなければ、ホムラが危ないと思うと居ても立っても居られないのだ。

「なるほどなるほど……こんな時でも、ホムラくんの心配か……よっぽど大事なんだな？」

「あ、当たり前……です！！　彼は……私にとって……一番…！！」

そこで、アインハルトは言葉を止める。自分自身の口から出そうになった言葉に、唖然としてしまった。

意識したわけではない、完全な無意識での発言。つまり、心の奥底に隠れてしまっている、紛れもないアインハルトの本心が、漏れそうになったのだ。

「……そうかい。（パチンッ！）」

フッ…

「あ……！？」

そのアインハルトの答えを聞いたミールは、再び指を打ち鳴らして、アインハルトの自由を奪っていた、謎の拘束を解いた。

いきなり自分を縛り付けていた何かが消えたことで、アインハルトは驚いてしまうも、敢えて自分の拘束を解いた目の前の青年の思惑

が、全く分からなくなってしまった。

「どういう……つもりですか？」

「いやいや、悪ふざけが過ぎた。俺がホムラの命を狙ってるってのは嘘、大嘘」

「嘘……？」

手品のネタばらしをするかのような軽さ。ミールは、樹の枝に腰掛けたままの状態で、アインハルトを見下ろす形でそう言った。
しかし、いきなりそんな事言われても、すぐに信じれるわけがない。少なくとも、アインハルトはそこまでバカでもなければ、お人好しでもなかった。

「それを……どうやって信じろと？」

「俺とお前の力の差はハッキリしてるだろ？　人間じゃ、逆立ちしたって俺には勝てないよ……いや、そういえば一回だけ負けたんだっけな……」

「？？？」

「なんでもない、こっちの話だ。　ともかく、俺はそれだけの力は持ってるけど、別にキミらをどうこうしようってつもりはないよ。ただ単に、肩に力を要れて悩みまくってたキミを見て、少しストレスを発散させてあげようと思った、それだけだよ」

疑うような視線に対し、一瞬だけ懐かしいことをもいだしたような顔になるミール。しかし、その表情も一瞬でナリを潜めて、すぐに元の余裕のあるそれに戻る。
アインハルトの悩んでいる姿を見て、少し肩の力を抜かせるつもりだったらしいのだが、本当のところはよく分からない。

「好きなのか？　ホムラのこと？」

「っ……！！　な、なんでそんなこと……大体、あなたはホムラさんのことを…」

「知ってるよ。知り合いだもん」

「え？」

またしても、アインハルトの言いかけたことに先回りして答えてしまうミール。思えば、最初の登場の際も、彼女の心の中の思考に直接答えを投げつけてきたのだ。
本当に、謎の多い人物である。

「ま、知り合いと言っても、少しお喋りしただけだけどな」

「……そのホムラさんの知り合いのあなたが……どうしてこの世界に？　この世界には、私たち以外は誰も居ない筈です。次元船の乗客の中にも、ここで降りた人は他には居なかった……」

ミールから、殺気や何かしてくる気配がないことから、アインハルトは警戒のレベルを一つ下げてから、彼がどうしてここにいるのかを尋ねてみる。

が、彼からの答えは意味不明なものだった。

「俺はどこにでもいるし、どこにも居ない。今は、お前が俺を『観ている』からここにいるだけだ」

「？？？」

「ま、分からなくてもいいさ。大した問題でもないし。で？　お前はホムラのどこに惚れてるんだ？」

そんな訳の分からない返し方をしてきた後、ミールはいきなり核心を突くような強烈なボディーブローを放ってきた。

それだけで、アインハルトのミールへの警戒心が一気に吹っ飛んでしまった。

またしても、先程のように顔を真っ赤にしてしまい、あたふたと落ち着きを失ってしまう。その様子に、可愛い小動物を重ねてしまうのは仕方のないことだろう。

「ほほほほ、惚れてなんか……！！」

「ん？　違うのか？　さっきはその彼を守ろうと、あんなに必死だったのに？」

「あ…う……」

そう言われては、アインハルトには返す言葉もない。守りたいという意思と好意は必ずしもイコールではないとしても、アインハルトの頭の中には『彼を好きなのかもしれない』という気持ちがある。

それがアインハルトをあんなにも必死にさせた事と何の関係もないとは言い難い。

「そ、そんな事言われても……分からないんです……！　ホムラさんのことが好きだというこの気持ちが正しいものなのか……不正解なのか……。だからこんなに苦しいんです……」

「さっきも言ったな。正解とか不正解とかじゃなくて、問題はお前がどう在りたいかだって。ホムラのことが好きだってことが合ってるのか間違ってるのか……そんなことはどうでもいいんだよ。お前があいつを好きでありたいのかどうかってことだろ」

「好きでありたいかどうか……？」

気持ちの整合性や、妥当性などどうでもいい。正解不正解という枠に捉えることからして間違っているのだ。

人の気持など、簡単に揺らいで変わってしまうものだ。そんな流動

的な物に一々良し悪しを付けていてはキリがない。愛だの恋だのと、燃え上がっては冷めやすいものもまた然りだ。

要するに、自分がどう在りたいか、どうしたいのか、どういう気持ちを持っていたいのか、『ｗａｎｔ』・『ｈｏｐｅ』の気持ちが大切ということだ。

「想像してみろ……ホムホムとめでたくリア充の仲間入り……楽しいデート、お喋り、手を繋いでの登下校、たまにしてしまう喧嘩、ヤキモチ、そして激しい夜のいとなｍ……いや、これはまだ早いな……まぁ、その他もろもろのリア充にのみ許されたイベントを思い浮かべてみろ……」

「……」

ミールにそう言われ、先程の警戒心はどこに言ったかと突っ込みたくなるほどだったが、アインハルトは想像してしまった。

・
・
・

「……ボフンッ！！！」

「おぉ～……人間瞬間湯沸かし器……環境にいい子だこと」

アインハルトは、少し妄想の世界に走ってしまったようで、頭から湯気を出してしまう。ミールの言うとおり、さながら瞬間湯沸かし

器のようでもあり、見ているだけなら微笑ましい物だった。

「うぅ～～～～！！！」

「そこまで妄想できるなら、もう確定的だと思うけどな……」

「たたたた、例えそうだったとしてみょ！！！」

「あ、噛んだ」

「五月蝿いです！！」

噛んでしまった事を指摘されるが、力技でそれを押しのけるアインハルト。今の彼女に、普通の道理などは通用しないようで、完全に熱に浮かされた、恋する乙女のような状態だ。

「か、仮に……私がホムラさんのことが……その……好きだったとしても……私なんかを…ホムラさんが好きになってくれるかなんて……」

「……」

それは、アインハルトの不安の声だった。未だに、確定的でない気持ちに振り回されつつも、もしその気持が本物だった場合、当然夢見るのは好いた相手とより近しい関係になることだ。

しかし、そのためには相手にも自分を好いてもらわねばならない。

その手の詐欺師な方々には当て嵌らないことではあるが。

「私は……無愛想ですし……可愛気もないです……。ホムラさんも…本当はヴィヴィオさんのような、明るくて可愛い……女の子らしい子のほうが……好みかもしれませんし……」

「ふむ……」

まぁ、確かにアインハルトは物静かな性格をしているので、それを無愛想と取る者もいるだろう。しかしながら、今の彼女を見れば分かるとおり、可愛げがないなどとんでも無い。
今ここにいる、顔を真っ赤にしながら悶々としているアインハルトは、紛れもない女の子であり、可愛げの塊のような存在だ。

しかし、それを言葉で説明したところで、知り合ったばかりのミールの言葉では、それを信じさせることは出来ない。

だからこそ、ミールは彼女に一つの指標、『考え方』を教えてやることにした。

「『愛せよ、さらば汝も愛されん。およそ愛は代数方程式の両辺のごとく数学的に公正なり。』」

「え…？」

ミールが口にしたのは、とある哲学者、思想家、詩人である人物の

言葉の一つだった。
アインハルトにとっては初耳な言葉ではあるが、どういう意図でミールがこの言葉を彼女に贈ったのかは図ることは出来ない。
訳が分からないという表情のアインハルトに、ミールはニコリと笑いながら話す。

「愛情を持って接してれば、相手もお前の愛情を感じ取って、好意を持ってくれるかもよ？　ってことさ。自分は駄目だ、あの子のほうが魅力的だ、無理だ、敵いっこない。そんな非生産的な思考で自分を縛るよりも、そうやって自分の気持を相手に向けてみるほうがよっぽど建設的だって思わないか？　お前の気持ちが伝われば、ホムラがお前を気に入ってくれる可能性は、この言葉通りにあるってのに」

「それは……」

「自分で自分を殺してても、楽しい人生なんて送れやしないさ。だったら、ダメで元々、玉砕覚悟で突っ走ってみたほうがよっぽどスッキリすると思うし、意義のある時間になる。成功者って奴は、いつだってそんな連中ばかりさ」

自分で自分の可能性を狭めてしまうことほど、勿体無いことはない。
しかし、その可能性に突っ込んでいくのもまた怖いものなのだ。
それが感情ある人間の習性なのだから、仕方ないといえば仕方が無い。
しかしながら、その可能性に突っ込んでいかなければ、スタートラ

インにも立つこともない。まずは決めて、やってみる。そういった心意気がアインハルトには決定的にかけていた。
まぁ、アインハルトにとっては恋愛方面の話題でのみ適用されることではあるが。

「少し、積極的になってみろ。何も今すぐ関係をどうこうしなきゃいけない訳じゃない。ホムラに自分の気持を少しずつ開いてみれば、何か進展があるかもな」

「……」

その言葉が、何故か耳にストンと入ってくる。妙な納得感と、ココロのもやもやが少し晴れたような感覚。
さっきまで警戒していた相手に、結果的に恋愛相談をしてしまった形だが、そんなことすら今はどうでも良かった。
自分がどうして行けばいいのか、いや、どうしたいのかが少しだけだが、分かった気がしたから。

「アインハルトーーーー!!?」

「アインハルト、どこまで行っちゃったの～～?」

「居たら返事しなさーーい!!」

「あ……ルーテシアさん、スバルさんに、ティアナさん……」

と、その時だった。森の茂みの向こうから、ルーテシアとスバル、ティアナの声が聞こえてきた。どうやら、帰りが遅いアインハルトを心配して探しに来てくれたようだ。

「……」

ミールもまた、その声が聞こえたようなのだが、どこか自嘲的な笑みを浮かべていた。ほろ暗い井戸の中のような、そんな瞳がメガネの向こう側で揺れていた。

「さて、俺はここで退散するよ。　あ、そうそう……さっさと戻ってあげないと、ホムラくんがヤバイことになるよ」

「え……？　退散って……あの…！　ホムラさんがヤバイことって？」

「行けば分かるさ。彼が戻れなくなる前に、君が何とかするんだね。それじゃ、バイバイ」

スゥ……

「？！　き、消えた……？」

言いたいことだけを言ってから、ミールの姿は陽炎のように消えてしまった。幽霊のような、幻のような……よく分からないが、そう

いう消え方だった。

彼が何ものなのかという謎はかなり残ってしまったが、少なくとも自分の悩みに対して相談に乗ってもらった。悪い人では無いのだろう、アインハルトはそう思っていた。

「あ、いたいた！　も～、心配したんだよ？」

「ヴィヴィオだけが帰ってきて、どうしたのかと思ったら……」

「す、スミマセン……」

茂みの向こうから顔を出したスバルとルーテシア。心配気にそう言う二人に、アインハルトは直ぐに頭を下げた。

理由はどうアレ、かなり心配させてしまったようなので、謝るのが筋だろう。

「???　ねぇ、アインハルト……今ここに……誰か居た？」

「え？　あ……えっと…あの……」

「誰かと話してるみたいだったけど……」

そこで、探しに来てくれていたも一人、ティアナが周囲を見渡しながらそう尋ねてくる。

ここで会った青年のことを説明するべきなのだろうが、その場合芋

づる式で、自分の恋愛相談のことがバレてしまう。
流石に、それはアインハルトとしても恥ずかしいので、彼女は答えに窮してしまう。

「あ……えっと……ただの独り言です……少し考えたいことがあって、それが口に出てしまったようで……」

「ふぅん…？　ま、いいわ。こんなところで一人でいちゃ危ないわよ。さっさと訓練場まで戻りましょ？　さっきから、なんだかルークとホムラの模擬戦が変な感じになってきてるのよね……」

「え……？　それって……」

何とか、苦しい言い訳ではあったが、その場を凌いだアインハルトに、ティアナの口から気になる言葉が飛び出した。
ホムラとルークの模擬戦が、変な感じに……

先程のミールの最後の言葉、『ホムラがヤバイことになる』というセリフが嫌な音を立てて、頭の中に浮かんできた。

「っ！！」

「あ、ちょっとアインハルト！？」

「どうしたのかな……？　急に血相変えて……」

ミールの言葉と、ティアナの言っていた模擬戦の変化。その二つの妙な繋がりを感じたアインハルトは、その場から一目散に駆けて行ってしまった。
呼び止めるスバルとルーテシアの声も聞こえていないようで、彼女の姿はすぐに見えなくなってしまった。

「ルールー、ティア。私たちも急いで戻ろ？」

「了解～♪」

「……そう…ね……」

そして、その場に残される形になった三人も、スバルの言うとおり、その場を後にすることにした。
しかし、ティアナはその場所に何か感じるものがあるのか、少し立ち止まって周囲を見渡す。

「……誰も……居なかった……？　……まぁいいか…」

しかし、結局自分の気のせいだと判断した彼女は、スバル達の後を追ってその場を後にした。

Ｍｅｍｏｒｙ；２４　アインハルトの気持ち（後書き）

Ｆ２０Ｃ「なぁ？　ツタージャってなんぞ？」

閣下「御三家の内の一匹らしいな。ブラック・ホワイトのやつ（ネットで調べた）」

Ｆ２０Ｃ「私の最後のポケモンの記憶といえば……バーローな声の人とポケモンリーグでバトッてたとこなんだが。あれ？　おかしいな……私が知ってるポケモンどこ行った？」

閣下「作者……あなた疲れてるのよ…（面倒になりそうだし、適当に相手しとこ）」

次回、Ｍｅｍｏｒｙ；２５　ホムホム裏モード～もう一つの断空～

ホムラ「これで決まりだ！」（恥ずかしそう）

閣下「イケメンで強いのね！！　嫌いじゃないわ！！」

Ｆ２０Ｃ「これはヒドイ」

Ｍｅｍｏｒｙ；２５　ホムホム裏モード～もう一つの断空～（前書き）

「プテラ！」・「トリケラ！」・「ティラノ！」…「プットッティラァーノザウルゥース！！」

オーズのプトティラコンボかっこ良すぎんだろ……

あ、でも後藤さんのバースも好きです。

Ｍｅｍｏｒｙ；２５　ホムホム裏モード～もう一つの断空～

最初の変化は、ほんの些細なものだった。

ガィン！！　ギィン！！

「ほらほら、どうした？！　太刀筋が段々甘くなってきてるぞ？」

「っ！！　あぁぁ！！！」

ギィィン！！

これでも何回目になるのか分からない剣戟。昼からぶっ続けで戦っているのだから、数えているはずもない。
ホムラの太刀筋には、徐々に疲れが見え始め、模擬戦開始初期の鋭さが少しずつ鈍くなり始めていた。体力的な面を考えれば、ホムラの場合は仕方のない部分が多い、それどころかよく動けている方なのだ。

ガィン！！

「ぐっ！！」

ルークの重い一撃を捌ききれず、ホムラは蹈鞴を踏んだ後、尻餅をついてしまう。息は絶え絶えといった様子で、シラヌイを頼りに何とか立ち上がろうとする。

「はぁ…はぁ…（駄目だ……集中しろ……！！　もっと、もっと……師匠に一撃入れることだけに集中…！！　それ以外は…どうでもいい……）」

ホムラは自分自身に集中しろと活を入れ、もう一度立ち上がる。バリアジャケットも、既にそこかしこが破れてしまっておりボロボロの状態だ。

対するルークは、汚れ一つ無い。このことが、ホムラが全くルークに攻撃を決めることが出来ていないことのなによりの証明になるだろう。

「ふぅ…！！　集中……集中…もっと……ブツブツ…」

ヒュン！！

ババババババッ！！！

ホムラは、気合を入れなおして縮地に地を駆け、ルークに肉薄する。より深い集中、一つの目的だけに脳の情報処理能力を回す。

段々と、思考がクリアになり、自分が何をするべきなのか、どうす

れば一番なのか、それが直感的に分かるようになる。

キィィィン！！

「？？」

半縮地の超高速からの攻撃だが、これは既にルークには読まれてしまった攻撃だ。彼がその攻撃を捌くのは容易いこと。
しかし、そのホムラの剣を受けたルークは、一瞬表情を変えた。

「（剣に鋭さが増した……？　いや、それ以上に……さっきまではホムラになかった何かが……剣に上乗せされた感じだ……）」

ホムラの剣閃に、ほんの少し生まれた違和感。それは、ルークが正体を見極めようとしている、この前の抜刀術の打ち合いの際に感じたものでもあった。
剣を受けただけとはいえ、剣士にとっては、それだけで会話にもなるし、情報を引き出すための手段にもなる。
ルークは、その感覚を頼りにホムラの剣に現れ始めた変化がなんなのかを見極めようとする。

「ふっ！！」

ガキィ！！

「っ！」

ルークの突きを、ホムラは後方に宙返りしながら、剣で捌く。そのまま、着地したと同時にカウンターに打って出る。左薙の一撃だ。

ギィン！！

「（まただ……剣が変わってきている……より鋭く、険しい……いや、これは……殺気か…？）」

その左薙の一撃を、ルークはアーカーシャで受け止め、またしても感じた違和感の正体にまた一歩近づく。
鋭さの中に見出したのは、冷たい何か。研ぎ澄まされたと言ってもいいような、ルークにとっては慣れ親しんだ、戦士特有の感情であり、武器でもあるもの。

「ハッ！！」

ギィィン！　ガキィ！！

「（まただ……段々と、ホムラの何かが……変わってきてる……！
恐ろしいくらいに冷たい何かに……）」

ホムラは、素早く納刀した後、抜刀術で斬りかかって来る。が、ルークがそれを片腕のみで剣を扱い易々と弾き返し、ホムラを剣ごと

吹き飛ばす。
空中に弾き上げられたホムラだったが、彼は再び素早く納刀。弾き飛ばされた先にある擬似ビルの壁を足場にして、再びルークに突っ込んできた。

パシッ！　グンッ！！

「っ！」

しかし、抜刀術を放つ一歩手前で、ルークはホムラのシラヌイに手を掛けた右腕を掴み、そのまま投げ飛ばしてしまった。
抜刀術に移る前に、攻撃の起点ごとホムラの剣をキャンセルさせたのだ。

ドシャアァ！！

「くっ…はぁ……はぁ……」

当然、ホムラはそのまま地面に叩きつけられ、少しの間地を転がった後に停止する。自分の考えている以上の力が出ているのか、その呼吸は荒く、顔も俯き加減のまま。かなり疲労しているように見える。

そして、それ以上にホムラの攻撃の中に、不協和音のように紛れ込んでいたものが、徐々に表に出てき始めていた。ルークが引きずり出そうとしていた、何かである。

「（こいつ……今の攻撃、ハッキリと俺の急所を狙うつもりで剣を放つつもりだった……。温厚な奴だから、殺すつもりでやれなんてこと出来るはずないと思ってたけど……）」

自分で言っておいてなんだとは思うが、ルークはホムラが自分の急所を狙って、言ってしまえば殺すつもりで攻撃してくるとは思っていなかったし、そんなことが出来る奴ではないと思っていた。

普段というか、会って間もないが大体の人となりは理解できたつもりだ。ホムラという少年は、お人好しで女性関係には鈍い、努力を苦に思わない非常に真面目な奴、という評価だった。

試合前に言った、『殺すつもりで掛かって来い』という言葉を、地で実行出来る度胸もなければ、それだけの覚悟もないと、ある筈がないと思っていた。１２歳そこそこの子供に、そんなモノを要求するほうが間違っているのだ。

「はぁ、はぁ……」

「……（目付きが……変わったな……）」

息を整えながら、顔を上げたホムラ。その彼の目を見て、ルークは一瞬背筋がゾッとした。

途方もなく冷たい眼、憎悪や怒り、悲しみなどの負の感情を凝縮したような、そんな冷徹な眼だ。

先ほど言った、ホムラの人となりからは欠片も見えてこないような、

似つかわしくない目付きに、彼はなっていた。

「ふぅ…」

「（抜刀術の構えは崩さず……あくまで速さで勝負か……。少しだけ、揺さぶってみるか？）」

目付きが変わったホムラは、立ち上がって抜刀術の構え。対するルークは、今までとは違うホムラに対し、少し揺さぶりをかけてみることにした。
先程までとはどこがどう違うのか、それを確かめるのだ。

「アーカーシャ、カートリッジロード」

『オーライ！』

鞘に収めたアーカーシャから、薬莢が二発飛び出し、ルークの魔力がグンと上がる。その魔力を、ルークはアーカーシャに流し込み、剣を抜き放った。

ガシュガシュガシュ！！！

剣が鞘から抜けたと同時に、アーカーシャの刀身が分裂。合計八つの刃となって分裂したそれは、『ファング』と呼ばれるルークの得意とするオールレンジ攻撃だ。

分裂した八つのファングが、四方八方から魔力弾、または魔力刃を纏った状態での刺突の攻撃など、三次元的な戦略、攻撃が可能な武装である。

「（これにどう反応する？）」

ファングをコントロールし、ホムラを包囲しようとするルーク。八方向からの時間差、或いは同時攻撃。

攻撃のバリエーションも多彩で、完全に避けきるにはかなりの空間把握能力と、情報処理能力が必要とされる。この武装を操っているルークも、彼の能力無くしては、コントロールしながらが難しい物なのだ。

「……」

タンッ！

ファングによる包囲に対し、ホムラは飛行魔法で空に上がる。その選択肢は最初からルークの中にもあったため、ファングはホムラを追って空を舞って行く。

それぞれが生き物のような、俊敏な動きをしながらも、陣形と相対位置を完全に把握しながら空中のホムラを追い詰めていく。

「ほら行くぞ！！」

そのルークの声と同時に、ファングから赤い魔力弾が雨のように発射される。中には、魔力刃を纏いながらホムラに直接攻撃を仕掛けるものもある。
遠近攻撃を折り重ねたオールレンジ攻撃、これを回避或いは防御するためには、前述の通り、それなりの空間把握能力がいるのだが…

「……っ」

ホムラは、四方からの同時攻撃を目だけではなく、感覚的な何かでも捉えているかのように、全てのファングの位置を把握していた。その間も頭の中がクリアになっていく。どう体を動かし、どう迎撃すればいいのかがハッキリと頭の中でイメージできる。
空中で、踊るかのように体をコントロールし、次々とファングの攻撃を回避していくホムラ。

「おいおいおい……ニュータ○プかあいつは」

その光景を、地上から見ていたルークは、予想以上の結果にそう呟く。全弾命中は期待していなかったが、普通なら四方からの攻撃に反応しきれずに、2、3発はヒットするものなのだが。

今のホムラには、心底驚かされてしまうルークだったが、同時に彼の冷たい眼が余計に気になってしまった。

「（今のホムラからは、いつものアイツのような暖かさは感じられない……。まるで、少し前の俺みたいだ……）」

目的のためには手段を選ばす、ただ自分の目的のためだけにその剣を振るって、何人もの命を奪い去って行った過去。今でさえ、その事実にどう折り合いをつけるべきなのか、何が出来るのか、答えは出せていない。

が、過去のルークは確かに人を斬っていた。

その昔の過去の自分が、目の前にファングの攻撃を回避し切って地上に戻ってきたホムラが、冷たい眼をした彼に重なって見えてしまった。

「なんか……とんでもないもんを覚ましちゃったかな……こりゃ？」

「……」

着した後、すぐさま抜刀術の構えを取ったホムラに対して、ルークは「う～ん」と唸りながらそう呟いた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「はっ！　はっ！！　はぁ！！」

ミールと出会ったあの森から、止まることなく走り続けていたアインハルト。彼女の心の中は、嫌な予感で一杯になっていた。
あの青年が言っていた言葉が、心の中に引っ掛かって仕方なかった。

「ホムラさん……！！」

『彼が戻れなくなる前に』。青年は確かにそう言った。その言葉が、何を意味しているのか、本当に何かが起こるのかは定かではない。
しかし、胸を穿つような不安感がアインハルトを走らせたのだ。行きしはそこまで遠く感じなかった道のりが、今はやけに長く感じてしまう。
早く早くと思うほどに、道が長くなっていっているようだ。

「はぁ！…はぁ……はぁ……」

そして、そのまま走ること数分。森の茂みを抜けて、アインハルトは数時間前までいた陸戦場に戻ってくることが出来た。
息を整えながら、先程までなのは達と模擬戦を観戦していたところまで足を運ぶ。

ガキィン！　ギィン！！

耳には、絶えず金属同士が衝突する甲高い音が響いてくる。そのこ

とから、ホムラとルークが未だに戦っているのとだけは簡単に予想がついた。

「あ、アインハルトさん！」

「よかった、ちゃんと帰って来れたんですね」

「心配したよー、全然帰って来ないから」

「リオさん、コロナさん…クゥさん…」

先程まで模擬戦の観戦スペースになっていた場所には、ずっとその様子を見ていたのか、リオ、コロナ、クゥの姿があった。

いや、よく周りを見ればフェイトやなのは達、エリオ達もいるではないか。

ヴィヴィオも、アインハルト達から少し離れて、なのはの傍でホムラとルークの戦闘を見ているようだ。

「それにしても、ホムラ兄ちゃんどうしちゃったんだろ……？」

「え？」

「さっきから、少し様子が変なんです」

クゥの言葉に、アインハルトの中の嫌な予感が確定的なものになる

が、出来ればそうであって欲しくはなかった。
彼女の戸惑った様子に、コロナが不安そう表情で陸戦場の方を見る。
アインハルトも、恐る恐るという風にそちらに視線を向けてみる。
そこでは…

バキィ！！　ギィィン！！　ギギギ…！！

「っふ！！」

「っうぅ！！」

恐ろしいスピードと身のこなし、そして剣戟の嵐。ルークとホムラが、まるで映画の中の殺陣のようなスピード感と、エキサイト感をリアルに持ってきたような動きで切り結んでいるではないか。

「すごい……」

「さっきまでとは、何か違ってきてるんだよね……まるで、本当に殺し合ってるように見えて」

時折、ホムラの姿が半縮地でフッと消えることはあっても、ルークはそれにしっかりと反応していく。
傍から見れば、シビアな剣術合戦にも見えるが、同時にかなり危険なゾーン、命懸けのレベルにまで踏み込み始めているように見える。

「いきなりホムラくんの様子が、少し変わってきて……こんな感じになっちゃったんだ。ルークくんも、これを見越してたようなフシがあるみたいなんだけど」

「うぅ…見てるこっちがハラハラしちゃうよ……ルークってば、あんまり無理しないで……」

なのはやフェイト達も、アインハルト同様にこの模擬戦の異様さを感じていたようで、自分達の訓練を切り上げて、二人の様子を観ているらしい。

それだけ、今の二人の模擬戦からは目が離せないということだろう。

何か起こった時のために、なのはやフェイトの手には相棒のレイジングハート、バルディッシュが握られている。

「あ、ルークさんがファングを……！」

「これじゃあ、ホムラくんにも逃げ場がないよ！」

エリオとキャロがそういった瞬間、ルークの手のアーカーシャの刀身が分裂。八つの刃に分かれたそれらが、空中に退避したホムラを追いながら、彼を包囲して行った。

ファングの厄介さは、エリオ達はよく熟知しているので、さしものホムラもこれでは…と思ったのだろう。

しかし、その予想が大きく外れる事になる。

「嘘?!」

「初見であの攻撃を避けちゃった?!」

「凄い…!」

ホムラは、八つのファング全ての位置、速度、攻撃タイミング、攻撃方法などが視界に映らなくても全て把握できているかのように、空中を舞いながらその攻撃を全て躱してみせた。
これにはエリオとキャロは勿論、フェイトも驚いてしまった。

タン…

「……」

ファングを回避しきった後、ホムラは地上に降り立ち、再び抜刀術の構え。その彼の目を見て、アインハルトは背筋が凍る思いになった。
途方もなく冷たい眼、少なくともホムラと出会ったこの約一ヶ月の中では見たことがない眼だった。

「（あれが……本当にホムラさん……？　まるで……修羅のような……あの人が…？）」

今のホムラに最も当てはまるイメージは、アインハルトが言ったとおりの『修羅』であろう。
戦うことだけに意識を集中し、それ以外は何も考えていない。自分がどうなっているのか、どうなってしまうのかも気にせず、ただただ戦って戦って、敵を殲滅する。そんな普段の彼のイメージからは考えられない姿だ。

「（もしかして…今のホムラさんの状態が……あの人が言っていた、『ヤバイことになる』ということ……？）」

森で出会った青年、ミールの言葉。彼は、ホムラのこの状態のことを危惧し、アインハルトに警告してきた。
彼が何ものなのかは今はどうでもいいし、考える暇もないが、ミールは知っていたということだ、ホムラがこうなってしまうことを。

ギュウ…

「……っ！！」

知らず知らずの間に、アインハルトの握っていた手に力が入る。同時に、悲しいという感情が心の中に生まれてきた。
目の前で、ルークと殺し合いと言っても過言ではないような戦闘を繰り広げているホムラ。戦うことだけに集中し、その単語しか頭には残っていないようにも見える今の彼を見ていられなかった。

「（ホムラさんが……消えてしまうような……そんな嫌な感じが……）」

ミールはこうも言っていた。『戻れなくなる前に、君が何とかするんだね』と。

だが実際のところ、何をするべきなのか、どうすればいいのかさっぱり分からない。

今すぐこの模擬戦を終わらせるべきなのか、若しくは止めに入ればいいのか。

「（いや、違う……。模擬戦を止めるだけじゃ、ホムラさんはもとに戻らないかもしれない。元のホムラさんを呼び戻すためには……）」

模擬戦を止めるでもない、止めに入るでもない。ただ、彼のことを呼び戻せばいい。そう考えたアインハルトの取った行動は、実にシンプルなものだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……」

「……フゥ」

剣を正面に構えるルークと、抜刀術の構えのホムラ。両者の距離は3メートルほどしかなく、ホムラもルークも既にお互いの間合いに入ってしまっている。

そんな状況の中で、ホムラは一呼吸をいれ、体の荷重を脚に移動させる。

「（どう来る……？　黒百合は…さっき失敗したばかりの技だ、まず使ってこないだろう……抜刀術にまだ技が残っているかが重要だな）」

ルークも、彼の攻撃をどう捌いたものかと思案する。超神速の抜刀術・黒百合は、彼が言うようにまだ未完成。

それも、つい今しがたルークに破られたばかりの技をもう一度使ってくるはずはないだろう。

まぁ、ホムラの手がどうであれ、ルークには捌いてみせるという気概はあった。基本的にパワーでは圧倒的な差があるため、ホムラは速度で勝負するほか道はない。パワー勝負に持ち込んだところで、逆に弾き飛ばされるのが関の山なのだ。

「どうするのかな……？」

「抜刀術みたいだけど……まだバリエーションがあるのかな……？」

フェイトやなのはも固唾を飲んでその様子を見守る。なのはも、ホムラに関しての情報はこれ以上持ち合わせていないため、彼の次の手は分からない。

その場にいた全員が、ホムラの一挙手一投足に注目する。五分かそこらの経過時間が、やたらと長く感じてしまう錯覚を覚えながらも、目を離さ訳にはいかなかった。

そして……

ダンッ！！

ババババッ！！

「全力の縮地じゃない…？」

ルークは一瞬怪訝な顔をするも、即座にホムラの攻撃を見極め、剣を構える。半縮地からの突進、黒百合の時とはスピードレンジがガクンと落ちているがやはり速い。

ガシャンッ！！

ホムラは、ルークを射程の収め、同時に力強く地面を踏み込む。地面の舗装が砕け散るほどの踏み込み。しかし、それくらいではルークは驚かない。

スピード勝負でもなければ、パワー勝負ということかと、ホムラの太刀筋を見極め……

ギュ……ギャギャギャ！！！

「？！　（なんだ？　踏み込み足から力を練って……？）」

が、問題はそこからだった。ホムラは、地面の舗装を踏み砕くと同時に、その際に生まれたエネルギーを逃がすことなく、足先から腕に移動させる。
その練り上げられた力、エネルギーは、腕からさらに抜刀術として放たれるシラヌイの剣閃に付与され、破壊力とパワーを一気に跳ね上げる。

「あ、あの技って！？」

「アインハルトさんの……断空拳？！」

そう、足先から練り上げた力を拳足から撃ち出す技法、『断空』。
アインハルトの覇王流（カイザー・アーツ）での核となっている技だ。
それを、ホムラは剣でやろうとしている。言うなれば、断空拳の剣バーション。覇王断空剣とでも言えばいいのか。

キンッ！

「らあぁ！！！」

「ぬぅ！！？」

ガキィィィィィン！！！

断空を利用しての抜刀術。鞘走りの威力と共に、脚から練り上げられた力が剣に上乗せされるこの技。その威力は、ルークの想像以上のものだ。

アーカーシャでなんとかガードするも、その破壊力は手を通して伝わってくる。まともに食らっていれば、非殺傷設定でも肋骨全部を持って行かれかねない。

パワー勝負では、楽勝などとはとんでも無い油断。断空を混ぜ合わせたホムラの抜刀術の威力は、彼の小さな体からくるパワー不足を補って余りあるものだ。

そして、その結果……

グンッ！！

「っち！！」

ガシャアァァァァン！！！

「ルーク！！？」

「凄い……」

パワーで完全に押し負けたルークは、勢い良く弾き飛ばされ、擬似ビルに突っ込んでしまう。その衝撃でビルは倒壊し、ルークはもろとも瓦礫と化した。

まさかの展開に、フェイトはルークの安否を、なのはは『今の』ホムラの底力に心底驚かされてしまう。

「はぁ…！！　はぁ……うっ」

ドサ…

ホムラは、体が限界に近かったのか、その場に膝をついてしまう。見れば、膝が笑っている。

半縮地に加えて断空の技法。相当の負荷が脚に掛かっていたことが分かる。

しかし、ホムラの眼は未だに冷たいままだ。瓦礫とかしたビルに視線を送ったまま、鋭い眼光を維持して元に戻る気配もない。

「ほ、ホムラさん……ちょっと怖い…」

「う、うん……いつもの兄ちゃんじゃないよ……」

コロナとクゥが、そんな様子のホムラに少し当てられてしまったの

か、お互いに身を寄せ合ってしまう。こんな状況下でナチュラルにイチャつける真剣の図太さの方が恐ろしいと思うが。

とその時、冷たい視線のままのホムラに対して、普段は滅多に聞くことの出来ない大声が陸戦場に反響した。

「ホムラさん！！！！」

声の主は、アインハルト。普段は物静かな彼女だが、この時の彼女の声は、それを思わせないほどに大きく、同時に凛とした張りがあった。

アインハルトは、いつの間にか陸戦場に降り立ち、ホムラの背後から彼の名前を叫んでいたのだ。

「はぁ…はぁ……」

そのアインハルトの声に、ゆっくりとホムラが彼女の方を向く。その眼は、やはり冷たいままだ。いつものお人好しで、優しい、ちょっと情けない彼の面影はどこにもない。

「ホムラ…さん。もう……終わりましたよ？　もう、いいんですよ…？」

そんな彼の姿に臆することなく、ゆっくりと、優しい口調でそう言うアインハルト。不思議と、恐怖心はない。
ただ単に、いつも通りに話掛けるつもりで、アインハルトはホムラに相対していた。

――――すると

「はぁ…！　はぁ…・・あ、アイン…ハルト…？」

スゥっと、まるで憑き物が取れたように、ホムラの冷たいままだった眼が元の温かなものに戻っていったではないか。
同時に、少し戸惑った様子で、ホムラはアインハルトの名前を呟いていた。

「元に……戻ったのかな……？」

「みたい……だね…」

「……」

その様子を見て、フェイトとなのははホッとしたような思いで、そう言い交わす。その間で、ヴィヴィオがどこか『やっぱり』と言うような表情でいたが、その時は誰にも気づかれる事はなかった。

「……はぁ、はぁ……あれ…？　なんで陸戦場が……爆心地みたいになってるの……？」

「覚えてないんですか…？」

「師匠を、ぶっ飛ばしたところは覚えてるんだけど……」

ホムラは、地面に腰を下ろし、アインハルトに介抱されて始めて、周囲の惨状に今気がついたようだ。
陸戦場は、ルークとホムラの激戦によって、どこぞの世紀末な世界の都市と化していた。

倒壊した擬似ビルに、爆ぜた地面。今の今まで戦っていたホムラだが、本当に戦っていたことに関しての内容しか頭に入っていなかったようだ。

「（それくらい凄い集中力……？　でも、それじゃああの氷みたいな眼はどういう…？）」

ホムラの話を聞いた限りでは、ハッキリしたことは何も分からず仕舞い。今までのホムラの状態は一体なんだったのか……疑問だけが残ってしまった。

「って、そう言えば師匠は！？　思い切りふっ飛ばしちゃたけど」

「あぁ、それなら今フェイトさん達が……」

頭が落ち着いてきたのか、ホムラは今しがたぶっ飛ばした、ルークの無事を心配した。擬似ビルとは言え、派手に吹き飛んでしまったので心配になってしまうのは仕方ない。
ホムラの問に対し、アインハルトは空中を飛んでいるフェイトの方を指さした。どうやら、ルークの捜索を行っているようだ。

「ルーク～？　大丈夫～～？」

空中から、ルークの名前を読んでみるフェイト。魔力反応があるので、無事なのは分かるのだが中々返事が帰って来ないので、少し心配になってしまう。

と、返事を待っていたフェイトだったが、ガラガラと少し瓦礫が崩れる音を耳にした。
それと同時に…

ガシャアァァン！！

瓦礫の山が、大きく爆ぜる。そして、その中から少しボロボロになったルークが姿を現した。見れば、アーカーシャの他に、左手にもう一本剣を持っている。白い刀身を持つ神剣、ダモクレスだ。

「イタタタ……あ～……死ぬかと思った……」

『防御が間に合わなければ、危ないところでしたねルーク様』

「あぁ。まさかあんな方法でパワー不足を補ってくるとは……ほんと末恐ろしい奴だよ……」

ダモクレスの声に答えながら、ホムラの方を見るルーク。あちらも、ルークの姿を見て安心したようなので、取り敢えず、手を振っておいた。

最後のあの抜刀術は、ルークもほんとうに驚いた。諸手で剣を持っていなかったとはいえ、あんなにあっさりと吹き飛ばされるとは思っていなかった。

「ルーク、大丈夫？」

「あぁ、フェイト……怪我はないよ。ていうか、空中から見下ろされると、下着（黒）が丸見えなわけで」

「はう！／／／／」

「ごっつぁんです」

フェイトのナイスショットを有り難く頂戴したルーク。フェイトは顔を真っ赤にし、バリアジャケットのスカートを手で抑えながら、ルークの隣に降り立った。

無用心というか、ガードが緩いというか、フェイトのこういう天然な部分は何時まで経っても治らない。だがそれがいい！

「ねぇ…？　ホムラのさっきのは…なんだったのかな？」

「何なのか…ハッキリしたことは分かんないけど………殺意の塊みたいだったなぁ……ちょっとブルっちゃったし…それになにより……」

ルークはアインハルトに加えて、なのはにも介抱され、ゆっくりと立ち上がらせてもらっているホムラを見ながら、一旦言葉を切った後、昔を思い浮かべながら呟いた。

「人斬りだった時の、俺みたいだった」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

事の顛末を、ミールは離れたところから眺めていた。

ズレたメガネを指で押し上げ、フゥと一息つく。自分が何もしなくても、アインハルトに与えた忠告を、彼女が理解していればホムラが元に戻る。

確信はあったが、一か八かの賭けでもあった。

結果的には、賭けはミールの勝ち。ホムラは、アインハルトの声で元の彼に戻ることが出来た。

「そうそう、そうでないと困るんだよ。折角の種なんだ、こんなにあっさり潰れてもらっちゃお話になんないからな」

ミールは、誰に言うでもなく一人そう呟く。余裕のある表情はそのままに、腰を掛けていた樹の枝の上で足をプラプラとさせながら。

「アインハルト・ストラトス、いや、ハイディ・E・S・イングヴァルト。覇王の血を継ぐ覇王っ子……君には、セカンド君の鞘になってもらうよ」

彼の中では、今のところは全てが順調だった。いや、彼にとっては彼らの事を見守ることが主な仕事の一つである以上、ベストな結果を求めるのは至極当然のことなのだが。

「さて……次はどんな感じでお話を進めようか、『ソラ』？」

ニコニコと笑いながらそう呟いた後、ミールの姿はその場から掻き消えるように見えなくなってしまった。

Ｍｅｍｏｒｙ.；２５　ホムホム裏モード～もう一つの断空～（後書き）

Ｆ２０Ｃ「アインハルトの声で正気に戻ったホムホムなのであった」

閣下「アインハルトは見事なまでにヒロインしてるよな」

Ｆ２０Ｃ「そりゃ、真・ヒロインだからな」

フェイト「あれ？　じゃあ、私とルークは？」

Ｆ２０Ｃ「主人公（笑）と、ヒロイン（女神）っていう感じじゃなかろうかと」

閣下「ちょっと待って？！　俺とフェイトで差ありすぎだろこれ？！」

Ｆ２０Ｃ「はぁ（　゜Д゜）ハァ？　お前もしかして、フェイトさんと同等とか思ってたのか？　冗談はよし子さんだぜ……」

閣下「古い上に笑えない冗談はやめよう……冗談……だよね？」

Ｆ２０Ｃ「さてさて、次回はギャグ＆萌え回でございます。皆様どうかお楽しみに～（＾―＾）／~」

閣下「え？……え？」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ.；２６　お揃いという名の罠

Ｍｅｍｏｒｙ；２６　お揃いという名の罠（前書き）

閣下『お前に足りない物、それは！情熱、思想、理念、頭脳、気品、優雅さ、勤勉さ！そして何よりもー！』

ｍ９っ、Д,）　ビシッ！！

閣下『エロさが足りない！！』

ホムホム「（　。Д。）ポカーン」

Ｍｅｍｏｒｙ，２６　お揃いという名の罠

ホムラとルークの激戦（傍から見れば殺し合い）が、ホムラの新技？『覇王断空剣（仮）』によって幕が下ろされ、一行は宿泊ロッジに戻り、休憩時間をとっていた。
この後は露天風呂でスッキリしようと言うことになっている。
ちなみに、フェイトとなのはは、練習の仕上げということでまだ陸戦場に残っている。

「本当に、どこも痛くないんですか？」

「大丈夫だよ。擦り傷とかはさっき治療してもらったし。心配してくれてありがと、アインハルト」

「い、いえ……そんなに畏まらなくても……私が気になってしまっただけですから……」

ルークとの戦闘で、所々に擦り傷などを作ってしまったホムラは、メガーヌに手早く消毒などの治療をしてもらった。傷は小さいかもしれないが、そこから菌が侵入しないとも言えない。
そういったリスクは、なるべく避けるのが吉だ。
アインハルトの気遣いに感謝しながらホムラがそう返すと、彼女は

マジマジと目が合ってしまったからなのか顔を真っ赤にしながらアタフタし始める。
先ほどから、ずっとこんな調子なのは、恐らく彼女が自分の気持に気付き始めているからであろう。

「なんか……アインハルト姉ちゃんの様子……変じゃない？」

「うん、それは私も思った」

「なんだか、女の子してる感じだよね♪」

その二人のやりとりを見ながら、クゥ・リオ・コロナの三人がニヤニヤしながらも、少し離れたところからアインハルトとホムラのことを観察していた。
三人から見るに、どちらかというと意識の度合いが強いのはアインハルト。明らかに、ホムラに対しての視線だとか、表情などが午前中とはどこか違っていることが如実に見て取れる。

「ムムム…これはもしかすると…もしかするのかもしれないわね……」

「も、もしやお昼に行ってた、ビジネスジャンプが読めてからの展開なの？」

「いえ……これはもう、大人の遊園地に週三通い出来るような身分になってからのお話かもしれないわね……」

「「「お、大人の遊園地！！？」」」

その三人の会話に、意味深な笑みを浮かべ、さらに意味深なセリフを口にしながらルーテシアが参加してくる。
見れば、ティアナやスバル、エリオやキャロもそれとなくアイホム達の方を見て『おやおや、まぁまぁ』な視線を送っている。ここにいる全員、あの二人の様子に興味津々というわけだ。

「な～にやってんだ？　悪ガキ共」

「「「「うひゃぁ！？」」」」

と、隠れてコソコソとしていたルーテシア達に、こちらも軽いケガをメガーヌに治療してもらってきたのであろう、ルークが後ろから声を掛けた。
いきなりのことでビックリしたのか、四人は揃って奇声を発してしまい、結果的にアイホム達の視線もこちらに注目させてしまうことになった。

「あぁもう！　変態兄ちゃんのバカ！！　折角面白いところだったのに！！」

「ルークさん、今のは流石にどうかと思います」

「ちょっとＫＹでしたね……ルークさん」

「もうちょっと、場の空気に敏感になってください」

「え、あの……これなに？　泣いて良いの？　これ泣いていいんだよね？」

ただ単に声を掛けただけなのに、クゥ・リオ・コロナ・ルーテシアの順に、言葉と視線で虐められるルーク。

子供に追い詰められて、若干涙目になっている大の大人が、そこにはいた。

「あ、師匠。えっと……大丈夫でしたか…？」

「え？　あぁ、そこは心配ご無用ってな。一応ガードはしたつもりだったし、かすり傷で済んだよ」

「そ、そうですか……よかった……」

涙目になってｏｒｚになっていたルークに、ホムラが心配そうに先ほどの戦闘での怪我の有無などを尋ねてみる。

ホムラとしても、断空剣の威力によってルークがそこまで派手に吹っ飛ぶとは考えてもいなかったというか、考えることが出来ない状態だったようだ。

まぁ、ルークは寸前でダモクレスで絶対防御の盾を展開しており、ほぼ無傷だったようなのでホッとするに終わったが。

「でも、最後の一撃はなかなか良かったぞ？　完全に力負けしちまった。あれ、なんて技なんだ？」

「あぁ、えぇと……」

ルークが、最後にホムラが見せた技についてそう尋ねると、彼は少し困ったような顔をしてしまう。
その間、チラリとアインハルトの方を見たりしていたのは、恐らく彼の技の原点に、アインハルトの断空があるからだろうか。

「えっと……無我夢中で、自分でもよく分からなかったんですけど……体が勝手に、あの技って言うか、攻撃をしていた感じで……技の名前とかは特には…」

「ほぉ…？　体が勝手にか……（まぁ、あの時のホムラはどこかおかしかったからな……考えるより先に体が動いたってことか…？）」

ホムラの話を聞く限り、あの時の彼には、技など意識している様子は見られなかった。ただ、目の前のルークに一撃を叩き込むだけに意識を集中させ、体がそのための最適な解を実践していたように見える。
実のところ、本能だけで戦っていたのではないだろうか？

「でもでも、あれって確かにアインハルトさんの覇王断空拳でしたよね？」

「あ…う…」

「？？？」

が、リオの指摘に、ホムラが少したじろぐのをルークは見逃さなかった。リオ達は、アインハルトがヴィヴィオとの試合で見せた、断空拳を覚えている。

それ故、ホムラが放ったあの技が、アインハルトの技と同質のものだということには気がついていた。

「どゆこと？」

「えっとですね？　ホムラさんがさっき撃った技なんですけど、アインハルトさんの覇王断空拳っていうスゴイ技と根元って言うか、土台が同じみたいなんです」

「足先から練り上げた力を、拳足に乗せて放つ…でしたよね？　アインハルトさん？」

「あ、はい。そのとおりですが……」

彼女たちの練習試合のことを知らないルークは、リオとコロナに説明を求める。リオが、自分で感じたホムラの技とアインハルトの技の共通点を説明し、コロナがアインハルトの技の特徴と原理を聞いたままに伝える。

それを聞いただけで、ルークは『あぁ、なるほど』という表情にな

った。

「そう言えば、抜刀の瞬間に踏み込み足で、ものすごい力が練り上がってたな……。もしかして、あのエネルギーが剣に上乗せされたってことなのか？」

「そんな感じです。アインハルトさんの断空拳も、ものすごい威力でしたから！」

「確かに、断空という技法を、剣技に乗せた技に見えましたけど……まさか、断空拳を拳ではなく剣で再現するなんて思い付きもしませんでした」

ルークの予想を、リオと、そして断空拳の使い手であるアインハルトが肯定する。原理としては分かるものの、アインハルトの言う通り、拳と剣では勝手が違うことは明白だ。そこを曲げて、あの断空剣（仮）を放ったホムラに心底驚かされている。

「アインハルトの断空拳を……見よう見真似でやってみたんだけど……ダメ…だったかな？」

「いえ、ダメということは…。こんな方法があるのかと逆に感心させられたというか……すごいことだとは思います」

「あ、うん…完全に無我夢中だっただけだけどね……」

ホムラがリオ達に、断空拳の事を指摘されて少したじろいでしまったのは、オリジナル断空拳の使い手であるアインハルトに対して、勝手に技法を技に組み込んだことに後ろめたさを感じてしまったからだろう。
アインハルトとしては、その発想と技として実現できる彼の技量に感心していたほどなので、特に気にした様子もないが。

「ていうかさ……ホムラ兄ちゃんと、アインハルト姉ちゃんの技って、同じ断空だよね？」

「そう…なります？　まぁ、断空『拳』と断空『剣』の違いだけだとは思いますけど……」

そこで、クゥが何を思ったのか、アインハルトにそんなことを尋ねてくる。彼女が少し考えてから、半ば肯定とも取れる返事をすると、クゥは『ということは？！』という感じで表情を明るくして、とんでも無い爆弾を落としてきた。

「じゃあさ、じゃあさ！！　二人とも、『お揃い』の技を使うってことだよね？」

アイホム「「えぇ！！？」」

『お揃い』

この単語に、アインハルトとホムラは一瞬フリーズしてしまうが、

すぐさま再起動。しかし、その言葉の意味を即座に理解してしまい、顔を真っ赤にしてしまう。
お揃い……つまりは仲良さというか、親密さというか……男と女の間でその単語が使われるということには、かなり大きな意味があるわけで……

「にゃにゃにゃ！！　にゃにを言ってるんですか！！　別に、私たちはそういう風な関係でもにゃいですし！」

「ちちちち、違うからね！！？　べ、別にお揃いとか、そう言うの意識したわけじゃないんだからね！！？」

テンパッた二人は、アインハルトはいつも通りの猫語、そしてホムラは何故かツンデレキャラになって、クゥの『お揃い』発言に抗議する。
まぁ、二人とも内心では、どこか嬉しい気持ちがあったわけなのだが……

「「「アインハルトさんとホムラさんが同時に壊れた！？」」」

「あらあら……青春ね……」

「ティア、なんだかオバサンっぽいよ？」

「（＃　。Д。）　（ギュウゥゥゥゥ！！！）」

「にゃあぁぁぁあ！！？　ゴメンナサイ！！　もう余計なこと言わ

ないから許してぇぇぇぇ！！」

コロナ・クゥ・リオが二人の壊れっぷりに驚いている傍ら、少し大人な発言をしたティアナに余計な一言を口にしたがために、愛の鞭・アイアンクローを頂戴するハメになったスバルの姿がそこにはあった。

そんな中、少し空気の読めない男が、またしてもキラーパスを放ってくる。

「そう意識することなんて無いんじゃないか？　俺だって、フェイトと同じような魔法使ってるわけだし……ほら、プラズマランサーとか、トライデントスマッシャーとか」

「そ、それはルークさんとフェイトさんは……ご夫婦ですし……」

「ということは……アインハルトとホムホムも……その内……」

アイホム「「～～～～～～っ！！」」

本日、空気読めない率絶賛更新中のルークのキラーパスを、ルーテシアが華麗にシュート。そのシュートは、気持ちいいくらいに見事アイホム二人を撃沈させてしまった。

二人とも、赤面数値が過去最高値を更新しており、下落の様子が全く見られない。

ちなみに、ルーテシアは二人が撃沈した瞬間、クゥ達に向けて『ど

やぁ』という感じでドヤ顔していた。

加えて、このお揃いの話題は、意外なところにまで飛び火してしまう。

「……ねぇ？　エリオ君も、フェイトさんと同じソニックムーブ使うよね……？」

「え？　えっと……それは……戦闘スタイル的なものが……って、キャロ！！　顔が怖いよ！！？　何で眼のハイライトが消えてるの！？　ち、違うからね？　僕はその…！」

「え、エリオ君！！　フェイトさんと夫婦になりたいんだね！？同じ技使ってるもん！！」

「なんでそーなるの！？　ていうか、フェイトさんはもう結婚してるから！！　ほら、ルークさんも何とか言ってくだｓ」

妙な感じでお揃い談義がキャロに火を付けてしまったようで、ヤンデレさながらの迫力でエリオに迫るキャロ。
エリオは、なんとか誤解を解こうと、フェイトの旦那であるルークに、助けを求めるのだが……

「キャロ、お仕置きなら俺も手伝おう。取り敢えず、今すぐに拷問道具を用意するから、三分間だけ待ってくれ」

「ありがとうございます、ルークさん……えへへ……エリオ君……？　覚悟してね？（黒笑）」

「ルークさん！！！！？」

完全に裏モードになってしまったキャロを説得してもらおうと思ったエリオだが、頼む相手が悪い。

ルークは、キャロ同様に黒い笑顔を浮かべながら、彼女に協力を申し出ていた。

そして、涙目で逃亡を試みようと必死なエリオの肩に、『ポン…』と優しく手を置き……

「Ｎｉｃｅ　ｂｏａｔ．」

「いやいやいや！！？　そんな展開ないですからね！！？　これそういうお話じゃないですから！！　明るいテーマソングが流れるようなお話で……」

『か～な～し～みの～♪　むこ～へと～♪』

「あ、友達からメールだ……」

「クゥ！！？　そのエウロスへのメール着信の歌やめて！！？　もうタイミング的に狙い澄ましたような、選曲だよねそれ！？」

ルークの爽やかな笑顔と共に放たれた、ゲームオーバー（人生の）

を表す言葉に、エリオは男泣きしながらも、この流れを何とかしようと必死だ。
ちなみに、彼の体はバインドで縛り上げられている。

そのタイミングで、クゥのデバイス・エウロスへのメール着信と共に鳴り出す、不吉過ぎる着信音に、エリオのライフはマッハの状態だ。

そして、エリオに最期の瞬間（とき）が迫る……

「エ～リ～オ～く～ん……♪」

「は、……はい……」

「ちょっと……Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ……しようか……？」

「いやあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？」

エリオ、轟沈。
また一つ、若い命の灯火が、その火を散らしてしまった……

「ねぇ、アインハルト？　その……あの技……ほんとに使ってもいいのかな？」

「わ、私は別に構いません……ホムラさんが私の技から、何かを見つけてもらえたなら、それは光栄なことですし……（お、お揃

い…ですし…）」

皆が、エリオとキャロの騒動に掛り切りになっている中、アインハルトとホムラの二人は、コソコソとそんな会話をしていた。
ホムラとしては、一応オリジナルである断空拳使用者のアインハルトにはこの技の使用を断っておかなければという気持ちがあった。
本当に、生真面目な奴であるが、アインハルトはそれを彼らしいと思いながら、了承した。

彼女としても、同じ系統の技を気になる相手が使うという展開は…
…そう、悪くないのだ。

「ありがとう。　あの技、僕の一番の得意技にするから、また練習とかに付き合ってくれると嬉しい」

「い、一番……あ、う……。　れ、練習は、それは勿論……いくらでも付き合います……」

『一番の技』。自分の技法を織り込んだ技が、一番……アインハルトはなんとも言えない心の浮遊感に襲われた。
もう、ベッドとかがあったなら、枕を抱きしめてゴロゴロしていたかもしれない……あれ？メチャ可愛い……

「で、ですが！　あの、ホムラさんの『黒百合』の方もしっかりと練習しないとダメなんですからね！？　自分の元から持っている技を疎かにするのだけは許しませんから！」

「は、はい！　了解です…」

と、そんな風にフニャフニャした自分を奮い立たせるように、アインハルトは若干ツンキャラになりながら、ホムラにそう忠告し、プイッと明後日の方向を向いてしまった。

未だに、恋している自分を素直に受け入れきれない彼女だが、恐らくは時間の問題だろう。

「ん？　どうしたヴィヴィオ？　さっきからダンマリじゃねぇか？」

「え？　そ、そうかな…？　あはは……ちょっと訓練で疲れちゃったのかも……」

「そうか？　まぁ、今日はそこそこ体動かしたからな。この後の風呂で体力回復といこーぜ？」

「うん……」

そんな中、元気のないヴィヴィオに声をかけるノーヴェ。

先程から、というかアインハルトとの訓練から帰ってきてから、どこか表情が暗い。心配になってしまうのは勿論だが、本人に追求したとしても『なんでもない』と誤魔化されてしまうのがオチだろう。

師匠的な立ち位置にあるノーヴェは、ヴィヴィオのそういった性格のことはよく理解できているつもりだが、もどかしい気持ちを捨てきれないノーヴェだった。

Ｍｅｍｏｒｙ；２６　お揃いという名の罠（後書き）

閣下「相変わらず自重しない前書きだな……」

Ｆ２０Ｃ「自重しないのはお前だろｗｗ　ていうか、ホムホム、「（　。д。）ポカーン」ってしてるだろうがｗｗ」

閣下「俺に言うなよ！　ネタ担当お前だろうが！」

クゥ「ねぇ、ホムラ兄ちゃん。このセリフ読んでみて、力を込めて」

ホムホム「ん？どれどれ……？」

ホムホム「速さが足りない！！！」

クゥ「うん、兄ちゃんなら言いそうだね。スタイル的に」

ホムホム「？？？」

Ｆ２０Ｃ「被ってる所がスピードしか無いじゃん。あそこまで早口じゃないだろホムラは」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；２７　露天風呂での恋バナ【ボーイズサイド】

次回は、ホムホムの恋愛相談其ノ二です。今回の相談相手は、エリオ・クゥ・ルーク（比較的真面目な方）になります。

……あれ？　スゲェ不安です…

クゥ「正義の力が嵐を呼ぶぜ！」

閣下「マイトガ○ンとは懐かしいｗｗ」

Ｍｅｍｏｒｙ；２７　露天風呂での恋バナ【ボーイズサイド】（前書き）

ずっと待ち焦がれてたんだろ、こんな展開を！　アイホムの可愛い絡みだけじゃなくて、お前とフェイトさんのラブラブな日常シーンを！！

てめぇのその手で、たった一つの主人公の座を勝ち取ってみせるって誓ったんじゃねぇのかよ！！

ずっとずっと主人公になりたかったんだろ！？モブキャラなんかで満足しやがって！！今のお前は元主人公でもねぇ、清純だったルークでもねぇ……ちっとぐらい冷たい待遇と読者様からの白い目で絶望してんじゃねえよ！！

手を伸ばせば届くんだ。いい加減にはじめようぜ、本編！！

Ｍｅｍｏｒｙ；２７　露天風呂での恋バナ【ボーイズサイド】

さてさて、約３０分後、夕食前に一行は予定通り露天風呂で一息付くことにした。
それぞれ、洗面用具や着替えなどを持って、お風呂場の男女別更衣室の前に集まり、各々が温泉に対する期待に胸を膨らませていた。

そこで、やはりというか、予想通りというか……一悶着が起きてしまうわけで……

「クゥちゃん、一緒に入ろ？♪」

「や、やだ……！」

そう、コロナによる、クゥ女風呂へ強奪作戦だ。
コロナとしては、やはり可愛い弟分であるクゥと、洗いっこなどをしたいというお姉さん属性全開な思いでの誘いなのだが、ツンデレボーイ・クゥ的には、そういうお誘いは素直に受け入れることは出来ない。

「お姉さんが手取り足取り、体の隅々まで洗ってあげるわよ？」

「フカッーーーーー！！！」

「やっぱり、ルーちゃんは苦手なんだね……」

ルーテシアが誘ってみるも、火に油というか、全くの逆効果。嫌っているわけではないのだが、過去の……あの着せかえファッションショーのトラウマが体を勝手に動かしてしまうのだろう。

「だ、大体！！　七歳になって、そ、その洗ってもらうとか、女風呂に入るとかあり得ないし！！」

「うっ！（グサッ！！）」

「え、エリオ……ドンマイ……」

クゥの必死な言い分が、エリオのライフポイントを直撃した。ｏｒｚになってしまったエリオに、スバルがドンマイと声をかけるが、立ち直る気配はない。

恐らく、六課時代の地球での出張任務のでのことを思い出したのだろう。あの時、彼は１０歳だった。

７歳のクゥの言葉が、グサリと来たのだ。

「大丈夫だよ、クゥ♪　エリオ君は１０歳の時に女風呂に入ってたから♪」

「ぐはっ！！？（グサグサッ！！）」

「キャロ！！　もうやめてあげて！　エリオのライフはとっくにゼロよ！！」

「……ルークさん、もしかしてそれ言いたかっただけなんじゃ……」

「……そ、ソンナコトナイヨー」

止めのキャロの一言に、エリオは完全に撃沈されてしまう。どうも、未だに先ほどのお揃い事件のことを怒っているようだ。

ルークがネタを絡ませてくるが、リオのツッコミに彼は明後日の方向を向きながら、口笛を吹いてごまかした。

「ね？　クゥちゃん、一緒に入ろ？」

「～～～～～っ！！　へ、変態兄ちゃん、こういう時……どうすればいいの？」

「いや、その呼び方やめてくんない……地味に傷つくんだけど……まぁいいや……」

クゥに助けを求められたルークは、少し頭を捻り逡巡する。

まぁ、クゥだって女風呂に興味がないわけではない。母親であるティアナとは、何度か一緒に入ったことだってある。

しかし、今回はコロナやリオ、ヴィヴィオにアインハルト、ルーテシア、ノーヴェにスバル、キャロ達までいるのだ。

特に、気になっている相手であるコロナが一緒となると、ホイホイ一緒になど入れたものではない。
クゥ・ランスター、7歳。この年にして慎み深い（単に恥ずかしがり屋）お子様だ。

「クゥよ……女風呂ってのはな……大人になると、自然に入れなくなってしまう、男にとっては聖域（サンクチュアリ）なんだ。それも、向こうから誘ってもらえるなんて、それはもう光栄なこと、加えて据え膳にも等しいイベントだ」

「でも、変態兄ちゃん。この前、フェイトさんと一緒にお風呂入ってたよね？　ていうか、その前なんか覗いてたし」

「……よし、クゥ！！　今日は男風呂で流しっこでもするか！！　ほら、男同士の付き合いって奴！！　うん、素晴らしいよね、そういうの！！」

女性陣「「「「……」」」」

ルーク、女子側に味方してクゥを説得にかかるが、もの数秒で陥落。
女性陣からの白い目を浴びながら、必死な様相でクゥに男風呂に入るように進めだした。日頃からの行いというのは、こういう所で裏目に出てくるものだ。

「皆？　あぁいう大人にだけはなっちゃダメよ？」

子供たち「「「「は～い！！」」」」

「ジィィィザアァァァァスゥウ！？」

極めつけの、ティアナのお母さん的な発言に、クゥ・コロナ・リオ・ヴィヴィオ達は元気に返事を返す。
ルークが天を仰いで絶叫していたが、今の彼に手を差し伸べてくれるモノなど、彼の嫁以外にはいないだろう。

「おとーさん……」

「し、シエル……？　そ、そうか……お前は俺の味方だもんな……そうだｙ……」

「もう、おかーさんにさわったらダメ」

「ノォォォォォォォォォォォ！！？？」

自分ソックリな息子からのキツイ一言に、ルークのライフポイントはゼロに。
彼は、風呂場の傍にある椅子に腰掛け、どこかのジョーよろしく、真っ白になってしまった。
自業自得、因果応報という言葉がこれほど似合う男、そうそうお目にかかれない。

そして、そんな中ホムホムとアインハルトは……

「ホムラさん、湯船に浸かる前にちゃんと体を洗わないとダメですよ？　そ、それから、ちゃんと１００数えてから出ないと駄目ですからね？」

「は、はぁ……？（あれ？　何この状況？　お母さん？）」

ミールから、自分の気持というか、ハッキリとしない恋愛感情を指摘されたアインハルトは、ホムラへの仄かな好意を、取り敢えず少しずつ彼に向けてみようと努力しているようだが、与えるべき好意のベクトルを完全に間違ってしまっている。

そんな感じで、風呂にはいる一歩手前でゴタゴタしてしまったが、一行は男女に分かれて脱衣所、お風呂に入る事になった。

ちなみに、シエルはキャロと一緒に入るということで、女風呂に行ってしまった。

クゥは……気がついたら逃げていた。

「も～！！　クゥちゃんのバカーーー！！！」

そんなコロナの悔しそうな声が、お風呂場前で反響した。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

満天の星空の下、高温のお湯から生まれた、薄く広がったモヤ。岩造りになっている湯船は、手作りとは思えないほどの壮厳さを演出しており、高級旅館のそれを見ているかのような錯覚を利用者にもたらしてしまうほどだ。

お湯の加減も申し分のない、入れば一気に疲れが飛んでしまうような幸福感と爽快感、癒しのオーラというものを一度に感じることが出来る。

「ふへ～……生き返る……」

「今日はかなり動きましたからね～」

「ふぃ～……」

「いい湯加減ですね……気持ちいい…」

男風呂に入った、男性陣。ルーク、エリオ、クゥ、ホムラの四人は、お湯加減や温泉独特の開放感などに思わず気の抜けた声を出してしまう。

こういう場合、実年齢関係なく、何故か年寄りのような事を口走ってしまうのは何故なのか。まぁ、それはともかくとして。四人は露天風呂に大いに満足していた。

と、その時……

バッシャーーーーン！！！！

「わわっ？！　何事？」

「今……誰か空に向かって吹っ飛んで行かなかった？」

「ルークさん……今のって……」

「あぁ、セインだったな……。大方、ティアナたちにセクハラ紛いの事してぶっ飛ばされたんだろ……」

突然、女風呂の方から大きな音がしたと思ったら、空に向かって水着姿の女の子らしき影が星になる勢いで飛んでいってしまった。
ホムラとクゥが驚いている中、そんなことをする人物と、チラッと見えたシルエットに見覚えがあった。

元ナンバーズで、今は聖王教会のシスター見習いをしているはずのセインだ。

「あ…あの…お知り合いなら、助けに行ったりは……？」

「大丈夫、大丈夫。ちょっとやそっと事じゃ、ビクともしない奴だし。それに、妙なことをするアイツが悪い」

「変態兄ちゃんみたいだね？」

「……」

ホムラにそう説明したわけなのだが、やぶ蛇というかなんというか、クゥの放ったキレの良いアッパー（言葉的な意味で）が綺麗に決まり、ルークは湯船で半泣きになりそうになった。

と、そんな風にアウトロー過ぎる露天風呂の楽しみ方をしていると、女風呂の方向から、なにやら声が飛んできた。

『ルーク!?　覗いたらＳＬＢでぶっ飛ばすからね～!!』

「ぶへ!?」

恐らく、ティアナからだろう。本当に、悪い意味で信頼されまくっているようで、ルークは軽く涙目になった。

だがしかし、ルークとて『まだ』何もしていない。いや、何かするつもりはないのだろうが。

ともかく、少しカチンと来たルークは、そのティアナの警告に対してしっかりと抗議しておく。

「言われなくても覗いたりせんわ!!!　ていうか、俺が覗くのはフェイトのお風呂シーンだけだ!!　せめて、フェイト並みのおっぱいに成長してから出直してきやがれ!!」

どうやら、どちらにしてもフェイトの入浴シーンだけは譲れないら

しい。

スカーン！！！

「あべしっ！！？」

まぁ、そんな返事をするもんだから、女風呂からは恐らくはティアナがぶん投げて来たのだろう。鋭いスピードで桶が飛んできて、見事にルークの頭にクリティカルヒットした。

彼は、そのまま湯船に浮かんで『プクプク』と泡を吹いたまま動かなくなった。

「今のはルークさんが悪い……」

「ですよねー」

湯船に浮かぶ死体（仮）を見て、エリオとクゥは口を揃えてそう言った。

まぁ、抗議するにしてももう少し言い方があるだろうに……。しかし、もう一人の男ホムホムは、持ち前の気遣いスキルを全開にして……

「し、師匠……あ、あのえと……でもそうやって、自分の奥さん一筋なところとか、すごく誠実で、カッコイイと思います！！」

「ホムラ兄ちゃんどんだけイイ人なのさ!!?　ていうか、気遣い
し過ぎだから!!」

かなり無理矢理なこじ付けのように聞こえるが、ホムラは少し頑張
って師匠であるルークのフォローをする。
というか、弟子にフォローされる師匠ってどうなのと思うが、真面
目な時のルークの実力があればこそだということとか。

「うぅ…ありがとう、ホムホム……そう言ってくれるのはお前だ
けだ……ヨヨヨ…」

「い、いえ……あ、あと出来れば、『ホムホム』はやめてもらえれ
ば……」

「あ、そうだホムホム。お前に聞きたかったことがあるんだけどさ」

「（スルーされた!!?　ていうか師匠フリーダム過ぎるぅぅ!!）
」

自由過ぎる師匠に、取り敢えず『ホムホム』というあだ名が最早覆
らないということに、諦観を含んだ納得をしたホムラ。
まぁ、少しカワイイあだ名なので、男らしさに欠けるがどうしよう
もない。

ホムラは、諦めながらも、ルークの聞きたいことという質問がなん
なのかを聞いてみる。

「お前、アインハルトの事好きなのか？」

「……（ボフンッ！！）」

その質問の内容を聞いた数秒後、ホムラはのぼせるのとは別の形で顔どころか、全身が真っ赤になってしまった。見れば、湯気が出る勢いで顔は真っ赤、視線はあたふたと、あっちへ行ったりこっちへ行ったり。

それに加えて、手をぶんぶん振り回して、傍から見れば面白い踊りを踊っているようにも見えなくもない。

「なななな、なんでそんな話になるんですか…？！」（ヒソヒソ…）

「いやぁ、なんだか今日一日見てて、お前らの間にただならぬ熱い何かを感じたわけよ……ほらなんて言うの……？　中学〇日記見てる時の気分？」

「変態兄ちゃん、その例えはちょっと微妙かも……」

「じゃあ、未成〇の主張で、好きな女の子に告白する男子を見ているときの気持ちとか？」

「もうそこどうでも良くない！？　ていうか、何でそんなに懐かしいのばっかなのさ？」

話が段々と脱線し始め、クゥが必死にツッコミ、軌道修正を図る。

というか、クゥ。母親からのツッコミ遺伝子をしっかりと受け継いでいるらしい。
声のトーンを落として話しているため、女風呂には恐らく聞こえてはいないだろうが、ホムラとしては内心ヒヤヒヤモノだ。

「ま、兎に角だ。お前のアインハルトに対する……気持ちの向かい方って言うか、接し方って言うか。そう言うのが、他の女の子たちとは違ってるように見えたんだよ」

「そ、そう……見えました…？」

ルークが自分の思ったままをホムラに話すと、彼は顔を赤くしたまま恥ずかしそうに聞き返してきた。熟れたトマトのように赤くなった頬にばかりに目が行ってしまうが、彼の双眸も戸惑いの色に染まっていた。

自分の思いに、しっかりとした答えを出せていないという風な表情だ。

「俺も、次元船の中で言ってたよね？　二人が付き合ってるように見えるって」

「う～ん……僕もルークさんとクゥと同意見かな。なんだか、二人ってお互いに意識してるように見えるし」

「あぅ……」

エリオとクゥからも、ルーク同様の意見を貰うことになり、ホムラはますます赤くなってしまう。
既に、お湯でのぼせたという言い訳も通用しない。アインハルトとの関係、恋バナによって彼の心の中は一杯である。

「好き……だとは思うんです……」

「ふむ」

「でも、それが友達としての好きなのか、女の子として好きなのか……それが分かんなくて」

ホムラは、以前ミールにも話したように、自分の中のあやふやな気持ちをルーク達に話してみる。
ミールは、ゆっくり自分の気持に向きあえばいいと言っていた。こういう風に、誰かに自分の悩み、アインハルトとのことを話すことも、遠回りではあるがそれに繋がっているのかもしれない。

エリオとクゥを始め、ルークも、ホムラの話をおふざけの気配を消してしっかり聞いてくれた。

「『男女の間に友情は生まれない』って言葉が本当なら、お前の気持ちは友情としての『好き』じゃなくて、異性を意識しての『好き』になるんだけどな……実際はそうそう単純な話でもないよな」

「ですよね。僕達も日常的に、なのはさんやフェイトさん、スバル

さん達と仲良くさせてもらってるわけですし……」

「俺も俺も～。ノーヴェ姉ちゃんとか、ヴィヴィオ姉ちゃんとか、リオ姉ちゃんとか。仲いいと思ってるし、友達だと思う」

ルークの第三者からの意見に、エリオとクゥは自分達を当て嵌めてそう言い加えていく。二人とも、エリオならキャロ、クゥならコロナの名前が出てこなかったところを見ると、つまりはそういう事なのだろ。

ここではあまり突っ込まないでやることにする。

「『Ｌｉｋｅ』なのか『Ｌｏｖｅ』なのかの区別って……一体どうやって付ければいいんでしょう……？」

そう、詰まるところ、ホムラが悩んでいるのは、彼自身が言ったように、そういう事だ。単語としての意味合い的には、この二つは相似関係にあると言ってもいい。無論、すべての人がそうとは言えないが。

が、ホムラの場合はその『好き』という気持ちの種類分け、カテゴライズのところで足ふみ、悩みを抱えて動けない状態なのだ。

「……これは…さ。別に惚気ける訳じゃないんだけど……」

三人「「「？？？」」」

そこで、ルークが少し躊躇いというか、照れながら話を切り出す。他の三人は、ルークが何を話しだすのか、興味津々といった様子で彼の方を見つめる。

ルークは、満天に輝く星を見上げ、独り言を呟くかのように話し出す。

「俺も最初はさ、フェイトのことは綺麗で優しいお姉さん、ってことで好感は持ってたさ。でも、好きとか愛してるとか、そういう事なのかって聞かれれば、初めからそうだったわけじゃない」

「え？　そうなんですか？　あんなに……その……ラブラブ？なのに……」

それは、ルークがフェイトに出会った当初の話。フェイトと出会って、そこから変わっていく彼の気持ちの話だった。

その話に、フェイトとルークのイチャイチャっぷりを目の当たりにしたホムラは、意外そうな顔をした。

「まぁ、イロイロあったんだよ。フェイトってさ、俺の、死んだ姉さんにソックリで。最初の頃は、フェイトに姉さんの影を重ねていただけだった。だからこそ、一緒にいて安心できたし、嬉しかった」

彼の場合、記憶喪失などの諸問題などが絡んでいたため、姉の死の

真相なども思い出しはしていなかったが、フェイトと姉が似ていることだけは思い出したのだ。
その過程で、姉をフェイトの重ねて慕っていたという点も否定しきれるものではないし、ルークも今では自覚していた。

「でも……フェイト一緒に事件解決に奔走したり、一緒に訓練したり、慰めてもらったり、守ってもらったりして……少しずつだけど、気持ちが別の何かに変わってきたんだよな。好感じゃなくて…もっとこう、内容の濃い何かにさ」

「変わる……？」

「あぁ、変わったんだよ。決定的だったのは、……そうだな、俺がバカだったせいで、一回フェイトが死に掛かったことがあったんだ……フェイトが居なくなるって思ったら、急にどうしようもなく不安になって、どうしようも無くなって……一人で突っ走りそうになったりした」

フェイトの存在が大きくなり始めていた矢先、彼女は戦闘の合間、ルークを庇って重症を負った。その時の重症というのは、普通のものではなかったのだが、ここではあまり重要ではないので割愛させていただく。

それが切っ掛けというか、気持ちが固まるトリガーになったといえばいいのか、ルークはフェイトへの想いをハッキリと自覚するようになった。
姉への憧憬ではなく、一人の女性として好きになった。

「そこを、まぁ兄貴分の奴とか、なのはさん達に助けてもらって……。自分のフェイトへの気持ちが、今までとは全然違うものに、『好きだ』って気持ちになってたってことに気がついた。そこからはまぁ、今みたいな感じになっていくんだけどな」

「……」

ルークの話を、ホムラは真剣な表情で聞いたいた。赤面もいつの間にか治っており、ルークの話しに聞き入ってしまっていた。

ルークと自分の境遇や、それぞれの女性との出会い、関係の構築、想いなど、それらは多少の共通項を含みながらも、全くの別物だ。

しかし、今のルークの話の中には、ホムラが感じ入る何かが眠っていた。

「俺の経験談になっちまうけど、そういう気持ちの分かれ目って言うか、自分の中の相手への想いって言うのは勝手に成長してるんだと思う。もちろん、その成長の方向が友情になるのか恋になるのかはそいつ次第だけど。言ってみれば、『気がついたらなんとやら』ってやつさ」

「俺も……成長しているんでしょうか…？」

ルークの話に、ホムラがそう言って来る。しかし、その答えをルークは持ち得ない。

なぜなら、ホムラの気持ちを直に理解できるのは、彼自身だけだか

らだ。いくら口頭で自分の気持を一生懸命説明したところで、ほんとうの意味での理解には遠く及ばない。

結局のところ、ルークの言うとおり、気がついたら、気持ちがより深い『好き』になっていたということなのかもしれない。

「さてね……俺はお前じゃないからな。それに、さっきも言ったがこれは俺の経験談から考えた、俺の勝手な推測だ。お前もこれに当てはまるのか、自信を持っては言えない。そういう考え方、気持ちの発展の仕方もあるんだってことを知って、覚えておくのもありなんじゃないかってことだ。知識は、戦いでも人間関係でも何よりも頼りになる武器だからな」

「知識は……武器……」

経験者は語る、ということだろうか。

しかし、ルークはあくまでも自分の話を鵜呑みにするのではなく、そういう考え方、ケースがあるという事を覚えておけと言った。

「これはあくまで、お前とアインハルトとの事だしな。最終的には、お前ら両方の気持ちの向かい方でしか何も決まらんよ。大したアドバイスしてやれないで申し訳ないけどな」

「いえ、そんなことはないです。なんだか、自分の中の考える視野が広まった気がしますから」

狭い視野だけでは、中々見えてこないものもある。ホムラの場合、異性を意識するというイベント自体、あまり経験してこなかったことだ。
今までが、ずっと自身の鍛錬などに時間を費やしていただけに、そう言った感情などには鈍感だ。まぁ、それを言うのならアインハルトもそうなのだが。

しかし、こうして様々な人の経験談や考え方に触れていくことで、恋愛、引いては人間関係に対する考え方や視野を広めるということは非常に有意義なことでもある。

「まぁ、マイワイフ・フェイトを超えるおにゃのこなんていないだろうけどな！！」

「「結局それが言いたかっただけじゃ……？」」

「うるさい、人の惚気話聞いてたら、こっちも対抗しないと負けた気分になるだろ。ていうか、フェイト、可愛いよフェイト」

「うわぁ……ていうか、『おにゃのこ』って言い方……キモイ」

「ｏｒｚ」

最終的に、フェイト至上主義に辿り着くルークなわけで。そこを、エリオとクゥに呆れられたような視線を向けられてしまう。
最後のクゥの強烈な口撃に、最終的には沈められてしまうわけだが。
確かに、流石に『おにゃのこ』は無い。

と、そこで珍しくホムラが強い口調でルークのフェイト至上主義に反論してきた。

「あ、アインハルトだって！！　可愛いし綺麗ですよ！！　物静かな性格も、清楚な感じで良いし、しっかり者で優しい女の子です！！　しょ、小動物みたいな可愛さもあるし……」

三人「「「……」」」

ホムホムのアインハルト至上主義論展開に、ルーク達三人は一瞬呆気に取られてしまうが、この発言を聞くかぎり、先程話していた恋なのかどうなのかという議論は、案外早く決着が突くのではないかと思えてしまった。

というか、今のホムラの大声、間違いなく女風呂まで届いていること間違いなしだ。お風呂から上がってからの展開が楽しみである。

「この顔を真っ赤にして、アインハルトを猛烈リスペクトしているホムラを見てくれ……こいつをどう思う？」

エリオ&クゥ「「すごく……色ボケです……」」

「あ……っ～～～～！！？」

ルーク達の、どこかのなんとかテクニックのようなやり取りに、ホムラは自分の発した言葉を飲み込めたのか、火山が噴火したような

勢いで再び顔を赤くしてしまうのだった。

Ｍｅｍｏｒｙ；２７　露天風呂での恋バナ【ボーイズサイド】（後書き）

閣下「前書き……俺のことか！？　俺のことなのかこれ！？　ていうか最近どうなってんだよこの小説の前書きは！」

Ｆ２０Ｃ「まぁ、あそこまでフラグを立てても、君が主人公になれないのは世界の真実なわけなんだが」

閣下「だったら前書きの茶番の意味は…？　ていうか、ちょっとくらい冷たい待遇って、これちょっととってレベルじゃねぇぞ！！」

Ｆ２０Ｃ「ついカッとなってやった。後悔はしている」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；２８　露天風呂での恋バナ【ガールズサイド】

次回は、少し切なかったり、ニヤニヤしたり、笑えたりするお話です。

アインハルトが昇天します。

アインハルト「ゑ？」

Ｍｅｍｏｒｙ，２８　露天風呂での恋バナ【ガールズサイド】（前書き）

名探〇コナンのコナンくんって、メガネを取ったら工藤新一くんの子供の頃にそっくりですよね？

あれ？　もしかして、コナンくんの正体って……？

ガチャ！

うわなにをするやｍ……

作者は黄金郷に招かれました。

Ｍｅｍｏｒｙ；２８　露天風呂での恋バナ【ガールズサイド】

「はぁ～……色々ありすぎて疲れそうになっちゃったけど……やっぱりこの温泉最高だわ～…」

「う……ご、ごめんなさい……」

湯船に使って一息つくティアナに、同じく湯船で大人しくチョコンと座っているセイン。

男風呂でホムラ達が彼女たちと同じように、この温泉を楽しんでいる最中にセインは悪戯心から、ティアナ達の胸やお尻などを、自身のＩＳであるディープダイバーを使用してまぁ、タッチや揉んだりなどのセクハラ行為に及んでいた。

当初は温泉に住み着いた新種の生物、またはルーテシアのペットか何かだと思っていたティアナ達だったのだが、最後の標的となってしまったリオにセインが後ろから胸を鷲掴みにしたところ、驚いたリオが大人モードに変身。

結果、セインはリオの『絶招炎雷砲』によってぶっ飛ばされ、星になった上でここにリターンしてきたというわけだ。

正体が分かってホッとした女性陣だったが、一歩間違えば怪我人が出た可能性もあるとして、セインに厳重注意をしたところだった。

彼女が大人しく湯船に浸かっているのはそういう訳だ。ちなみに、セインにはペナルティというか罰というか、今夜と明日の朝の食事を作るというルーテシアの示談交渉が持ちかけられ、彼女もそれに

ありがたく同意。事件は一応の解決を見せた。

「まぁまぁ。あんまりイジメないであげましょうよ……セインも十分反省しているんですし」

「分かってるわよ。イロイロっていうのは、向こうのバカルークのことも入ってんの」

「あぁ～……あれはまぁ……ルークさんの自業自得でしょうね……桶、帰って来ないところを見ると、クリーンヒットしたみたいですし……」

「スコーンって、めちゃめちゃいい音してたしね」

ティアナをルーテシアがまぁまぁと宥め、傍らにシエルを抱いたキャロが先ほどのティアナとルークのやり取りを思い出しながら苦笑する。

スバルも、ティアナの強肩とコントロール、男風呂から聞こえてきた衝撃音とカエルが潰れたような声を思い出して、思わず破顔していた。

「ったくあのバカは……会う度会う度、フェイトさんラブ度が増してるのよね……」

「まぁ、仲が良いのは喜ばしいことじゃねーか……たまにリボルバー・スパイクかましたくなるけどな」

「あはは……ノーヴェ、それかなり危ない人の発言だからね…？」

ティアナが呆れ気味にそうつぶやくと、ノーヴェも思うところがあるようで溜め息混じりで物騒なことを言う。

ヴィヴィオが苦笑しながら宥めるも、ヴィヴィオ自身もルークとフェイトのイチャイチャ度には少し参っているので強く言えないのだが。

「あ……」

とそんな話の最中、なんとなくティアナの方に視線があったアインハルトは、あることに気がつく。

ティアナの胸にキラリと輝く、十字架のような形に、青色の宝石のようなものが埋め込まれたアクセサリー。普段は服の中で見えないだけなのかもしれないが、アインハルトにとってはティアナがアクセサリーを身に付けていることが、とても新鮮に思えた。

「？？　どうかした、アインハルト？」

「あ……えっと…」

その視線に気がついたティアナは、アインハルトにそう尋ねてくる。

一瞬、聞いていいものか迷った様子のアインハルトだったが、このままお茶を濁すのも悪いと思ったので、少し思い切ってアクセサリーのことを尋ねてみた。

「えっと……ティアナさんの、そのアクセサリーが……綺麗だなと思って」

「……っ……そう…。あ、ありがと、アインハルト……」

アインハルトの言葉に、ティアナは一瞬息を呑んだ後、そう返事をした。だが、普段と同じように見えた彼女の表情に……一瞬だけ悲しいような色が見えた。

見れば、スバルやノーヴェ、ヴィヴィオも少し視線を泳がせている。

『聞いてはいけないことを聞いてしまったのか？』そう思ったアインハルトだったが、次の瞬間にはそれどころではなくなっていた。

『私からもお礼を。光栄です、アインハルト様』

「しゃ、喋った？？！」

なんと、ティアナの首から下げられていたアクセサリーからお礼を言われたのだ。まぁ、デバイスなどであれば、喋ることに何の不思議もないのだが、アインハルトは今の今までこれをただのアクセサリーだと思っていたのだから無理も無いだろう。

「驚かせちゃったわね。こいつはオルクスって言って、デバイスなのよ。普段は殆ど喋んないから、ビックリするのも無理ないわね」

「そ、そうだったんですか……」

「私も知りませんでした……」

「わ、私も……」

ティアナがアクセサリー改め、デバイスのオルクスを紹介すると、アインハルトに準じて、コロナとリオも同じようにそう呟いた。
どうやら、彼女たち二人もオルクスがデバイスだとは知らなかったようだ。

「あれ？　でも、ティアナさん……さっきのなのはさんとの模擬戦ではクロスミラージュしか使ってませんでしたよね？」

「オルクスは、私には使えないのよ。それに、オルクスはデバイスだけど……そうね、今は引退して、ただのお守りってとこかしらね」

「「「お守り……？」」」

リオの疑問に言葉を選びながら答えるティアナ。オルクスは、ただのデバイスではない。それこそ、人間には扱うことすらかなわないデバイスだ。ここにいるメンバーで扱えるとすれば、それは今は隣の風呂場にいるクゥくらいだろうか。
まぁ、クゥにはエウロスというデバイスがあるので、彼がオルクスを使うことは絶対にないだろうが。

ティアナの答えに、アインハルト達三人は声を揃えて小首を傾げる。デバイスがお守りとはどういうことなのか？　三人にはよく分からなかった。

「誰かからの……贈り物…とかですか？」

おずおずと、そう尋ねたのはコロナだった。ティアナが、オルクスを大事そうに手に取っているところを、彼女は何度か見たことがあった。

そこから、誰かからの、強いて言えば……そう、恋人か誰かからの贈り物なのかと思っていたのだ。

そして、コロナの予想は大筋正解で……

「そう…ね……。贈り物と言っても、雰囲気もへったくれもない渡し方だったけど……確かに…あいつが私にくれた……」

「あいつって……クゥちゃんの…お父さん、ですか？」

「……そうよ」

コロナにそう答えて、ティアナは天を仰ぐ。視線の先には、数えきれないほど沢山、想像できないほど遠くにある恒星からの何千、何万、何億年もの前に発せられた光があった。

一つ一つは小さな点だが、その光源たる星の大きさは想像もつかない。

「（そう言えば……クゥさんのお父様のことを……誰も知らないし……口にしたことがない…？）」

アインハルトがそんな疑問を抱くのも無理はない。
クゥの父親については、コロナも、果てはヴィヴィオでさえもよく知らされていない。一年前に起こった、とある事件に関わった者たちだけが、『彼』のことを知っている。
ヴィヴィオもコロナも、リオも、クゥとティアナが普通の親子ではないことは分かっていた。
ティアナは今年で二十歳、しかしクゥはどう見ても七歳ほどの子供だ。そう考えても、年齢の計算がおかしくなる。

それでも、彼女たちがティアナに父親のことやクゥとの詳しいことを聞かなかったのは、聞くことが憚られるような、そんな気がしたからだった。抽象的な勘だが、軽い気持ちで聞くべきことではないと思っていた。

「私にこのオルクス…お守りをくれた……クゥの父親。……私にとって、人生で最初で最後に本気で好きになった奴」

「「「……」」」

単なる惚気話、そういったもので無いことはアインハルト達にとっては肌で分かるレベルだった。
切なそうなティアナの表情、事情を多少は知っているスバルやヴィ

ヴィオ達の表情を見れば嫌になるくらいに。

「あの……その人は……」

アインハルトは、敢えて聞いてみた。
切なそうなティアナの表情だったが、そこに拒絶だったりとか、悲しみ一色の感情はなかった。彼女の表情には切なさと同時に、愛おしさや納得という感情が見られたのだ。
無理に聞き出そうとは思わない。話したくないと言われれば身を引くつもりだった。

「今は、もういない。……病気でね、このお守りをくれた後、『居なくなっちゃった』」

「「「……」」」

居なくなった。
つまりは、この世にはもういない。死んだ。そういうことだ。
ストレートに死んだと、そう表現しないのは、アインハルトたちのことを気遣ってのことなのだろうか。そこは、ティアナ本人にしか分からない。

いや、彼の最期を知っているものになら分かることだが、その表現が最も適切なのだ。

「めちゃくちゃ強いやつでね……私とスバル、フェイトさんにルーク。四人掛かりでも全然歯が立たなかった……でも、そんなめちゃくちゃな力を持ってからこそ…居なくなることになった……」

「よ、四人掛かり……それもフェイトさんやルークさんも一緒で……？」

「凄い……」

ティアナの話に、アインハルトとリオは信じられないという表情になりながら、搾り出すような声でそういった。

ティアナやスバル、それにフェイトやルークといえば、今日の訓練などを見ても分かる通り、一流の魔道士だ。そんな彼ら四人を一度に相手して、全く寄せ付けもしない人物。

実際に会ったことはないにも拘らず、背筋がゾクッとした。

そんな人が、クゥの父親であり、ティアナの愛した人というのだから、驚きはなお一層大きくなった。

「頭の良い奴でもあったかな……それこそ、やること成すことえげつないくらいに計算ずくで。私たちも、最後まであいつの手の平で踊らされてた。それに猫かぶりだし、嘘も平気で吐くようなちゃらんぽらん男。何で好きになっちゃったんだろうって、何度も思ったわね」

悪態をつく様なセリフだが、ティアナの表情には苦々しいものなどは全く見られない。逆に、少し頬が赤くなっていた。

温泉による紅潮なのか、それともその男を想っての事なのか……それは彼女にしか分からない。

「本当に好き……だったんですね」

「まぁね。多分、あいつ以上の男なんて、もう居ないだろうなぁって思うくらい。そう言えば、アイツの事ではスバルにまで励まされちゃうくらいだったのよね」

「あはは。そう言えばそうだったね♪　もうティアったら、ものすごく女の子してて……はぁ～……あの時のティアの可愛さときたら……」

「「「「（うわぁ…めちゃめちゃ見てみたい……！！）」」」」

アインハルトの呟きに、苦笑交じりで答えるティアナ。思い出したように、あいつ、ソラのことでスバルに励まされた時のことを話してしまい、スバルが思い出し笑いをしながら『はふぅ…（´―`）』という感じで萌え萌えしているところを目の当たりにし、ティアナがどれほど女の子していたのか、この目で見てみたいと思ってしまった一同だった。

「もう少し素直になってればなぁって、今になって思うこともあるわね。まぁ、タラレバの話だからどうしようもないんだけど。どの道、あいつは長くなかった……」

彼の死は、ティアナにとっては確かに悲しく、忘れることなどとうてい不可能な出来事ではあった。
しかし、彼女は悲嘆や絶望に押し潰されることなく、今まで通り凛として生きている。
ソラの死を、彼女はある一定のラインで納得、理解することが出来ているのだ。

それは、彼女自身の心の強さ、そしてクゥという存在、ソラの願い……諸々が可能にしていることでもある。

「だから……アインハルト？」

「は、はい？」

「あんたも、素直になるのは早いほうがいいわよ。男なんて、ちょっと綺麗で優しくしてくれる子の方に、ホイホイついて行っちゃうんだから。好き好きビームとまでは言わないけど、少しくらいは気持ちを向けたほうが男は振り向いてくれるもんよ」

「ふぇ？！　あ……うぅ……」

そこで突然のティアナからの強烈なパス。アインハルトは妙な声を上げながらも、顔を赤くしながら湯船に沈んでしまいそうになる。
素直に、気持ちを向けてみろと、今日も不思議な人にそう言われたばかりだったので、ティアナにも同じようなことを言われるとは思っても見なかったのだ。

「わぁ……アインハルトさん顔真っ赤……♪」

「意中の彼は一体誰なのか……２８２８ｗｗｗ」

「あぁ～、ティアもだけど、なんでこうも恋する女の子は可愛んだろう……ムギューってしたくなるよぉ～」

「す、スバルさん？　ちょっと目が怖いです……」

コロナが、アインハルトの乙女化に良いものを見たという表情に。その裏では、ルーテシアが『意中の彼』が誰か分かっているにも拘わらず、わざとらしい口調で２８２８していた。

スバルはスバルで、可愛らしいアインハルトにハートキャッチされてしまったようで、目をハートにしてしまい、傍にいたリオがドン引きしていた。

「あ、あにょ！！　わたしはその……！！」

噛みながらも、必死で弁明しようとするアインハルト。しかし、そんな彼女に止めの一撃が……思いがけない方向、ホムラ達が入っている男風呂から飛んできた。

『あ、アインハルトだって！！　可愛いし綺麗ですよ！！　物静かな性格も、清楚な感じで良いし、しっかり者で優しい女の子です！！　しょ、小動物みたいな可愛さもあるし……！！』

「……（ボフンッ！！）」

アインハルトを除く女性陣「「「「「「……」」」」」」

後半ロスタイム、あと数秒でホイッスルというところでドラマチックな逆転シュートが決まったような、ホムラの魂の叫び。

数秒遅れて、アインハルトは頭から湯気を出ししながら、真っ赤な顔が更に赤くなった。

そんな彼女を、女性陣はポカーンとしながら見ていたわけで……

「キュゥ……」

バッシャーーーーン！

「「「「あ、アインハルト！！？」」」」

あまりの恥ずかしさから、アインハルトはその場で気絶。

彼女は湯船に派手な音を立てながら倒れ込み、意識を失ってしまった……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

で。

「キュゥ……」

「あの……何故僕はアインハルトをおんぶしているんでしょうか……？」

お風呂から上がり、着替えを済ませた男女全員がお風呂場の前で集合したところで、突然ホムラは、ぐったりとしたアインハルトをおんぶさせられた。

頭の上にはてなマークを浮かべながら、ティアナたちに説明をお願いしてみると、女性陣からはそれぞれ……

「決まってるでしょ、あんたのせいでアインハルトがぶっ倒れたからよ。責任とって、ベッドまで運んでやんなさい」

「確かに、アレはホムラさんが悪い……」

「弁護の余地なしです」

「その一言でアインハルトの意識を奪ってしまう……まさにジゴロね。将来悪い男になること間違いなしだわ……ホムホム、恐ろしい子！！」

「責任は取らねぇとな」

「「責任責任～～♪」」

「あはは……ホムラ君……これは仕方ないよ…」

「で、ですね……あはは……」

上から、ティアナ、リオ、コロナ、ルーテシア、ノーヴェ、スバル&セイン、キャロにヴィヴィオと。

若干攻めるようなお言葉と、生暖かい視線を頂いてしまったホムラ。

まぁ、スバルとセインに限って言えば、一緒になって「責任責任～♪」と歌っているだけなので、そこまでの威圧感はないのだが。

「し、師匠～……」

堪らず、後ろのルーク達に助けを求めるホムラ。

やはり、こういう場合は同じ性別の力を借りるのが一番。きっと、困ったホムラをバッチリ助けてくr……

「ホムホム、する時はちゃんと避妊しろよ？　お兄さんとの約束だ（≧ω≦）b」

「ホムラ君……人間、時には諦めも肝心なんだ……これはいい機会なんだよ（遠い目）」

「ホムラ兄ちゃん安心して？　明日の朝まで、部屋には近づかないから。俺、空気を読むことに関しては定評があるから！！（＊、д、）b」

「こ、孤立無援ですか……うぅ…」

全然役に立たなかったでござるの巻。

ルークとクゥは満面の笑みで、エリオは何故か悟りを開いたような表情で、ホムラにそう言って来る。四面楚歌とはまさにこのこと。

「ほら、さっさと連れてけ。アインハルトが湯冷めしちまうだろ」

「うぅ……わ、分かりました。責任をもって運びます……（い、嫌ではないし…）」

孤立無援となってしまったホムラに、選択の余地など無い。背中に感じるアインハルトの柔らかさと暖かさ。

加えて、お風呂上りなこともあって、彼女からは女の子独特のいい匂いと、仄かにシャンプーの匂いがした。

それがまた、ホムラの脳を痺れさせる。

「（い、いかんいかんいかん！！！　気を失ってる女の子に対して、不埒な妄想をするなんて男として最低だ！！　心頭滅却……兎に角気を逸らすんだ……羊の数を数えて……あれ？　違ったかな……？　こういう場合、何を数えればいいんだっけ……？？）」

答えは素数だ。

そんな感じで、アインハルトに対して邪な感情を必死に殺し、押さえ込みながら、彼女をおぶって廊下をゆっくりと歩いて行くホムラ。

ザ・紳士の称号（即席だが）を持つホムラとしては、ここはアイン

ハルトをベッドまで丁重かつ紳士的にエスコートしなければなるまい。

こういう時でも、自身のルール、紳士道を貫き通す男、それがホムホムである。

「さってと……私たちも一旦、部屋に行きましょっか？」

「ですね。洗面用具とかも置いてこなきゃダメですし」

「あとで広間に集合ってことでいいよね？」

アイホムの姿を見送ったティアナやルーク達も、いつまでもそこにつっ立っている訳にはいかない。ヴィヴィオの言うとおり、手に持った洗面用具を片付ける必要もある。

一度解散して、スバルの言うように、もう一度広間に集まろうと言うことになった。

「……」

「？？　何？お母さん？」

と、そんな中。お風呂場でソラのことを話したからか、ティアナは思わずクゥのことを見つめてしまっていた。

ソラと瓜二つの、彼女の子供。クゥも、ティアナからの視線に気が

付き、小首を傾げて尋ねてくる。

その仕草が、愛らしく思えた。……そして、少し心の中に生まれてしまった寂しさと愛おしさを誤魔化すティアナ。

「なんでもないわよ。そうだクゥ、今日は一緒の布団で寝る？」

「は、はぁ！！？　な、なんでそんなこと！！」

「そうですよ！！　ティアナさんだけズルイです！！」

「そういう問題でもないからね、コロナ姉ちゃん！！？」

ティアナ、母の提案に、ツンデレクゥは顔を真っ赤にしながらも、素直になれずに反論する。

そこに、コロナも加わってきたのだが、クゥとは反論する論点が全然違っていたのが残念だった。

「なによ～、この前だって、怖いテレビ見たとかで、『怖くて寝れないよぉ……おかあさぁぁん……。。（。´Д`。）。。』って言いながら、私の布団に潜り込んできたくせに……」

「く、クゥちゃん！！？　それホント？？！」

「なななな、なんてこと言うのさお母さん！！？　あ、アレは別に……別に俺が怖いとかじゃなくて、お母さんが怖がってないか見に行っただけだもん！！　全然ビビってないし！！　幽霊なんてい

るわけないしぃ！！！」

そこに続く、ティアナの爆弾投下。コロナはヤキモチ全開で、クゥはツンデレ全開で抗議する。
どうやら、幽霊番組のようなものを見て、それがトラウマになってしまったらしく、ティアナのベッドに逃げ込んだという歴史があるようだ。

「あ、クゥ！！　窓に血だらけの女が！！？」

「にゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？？」

ヒシッ！！

「あらま」

そこで飛び出す、ルークの嘘。
幽霊的な存在が完全にダメなのか、クゥは猫のように飛び上がった上で、ティアナにしがみついて涙目になっている。
と、自分の行為に一瞬で気がついたクゥは、顔を赤くしながら（ティアナにしがみついたまま）なんとか弁明しようとする。

「ちちちちち、違うから！！　別にビビったとかじゃないし！！！　これはその……そう、お母さんの心臓の音の検査を！！　だだだ、大体、このクールで鰡背なナイスガイな俺が、びびびびび、ビビるとかあり得ないジャマイカ！！」

「「「「（クゥ、その言い訳は苦しすぎるよ……ていうか、言葉がおかしくなっちゃってるし…）」」」」

クゥの言い訳に、その場にいた全員が心の中でそう呟いた。

弁明しながらも、目はあっちこっちを泳ぎまくり、足はガタガタ震えている。クゥ、幽霊関連の話題が大の苦手な七歳児ということが判明したわけだ。

「仕方ない子ね……コロナ、今日は『ビビリのクゥ』のために、三人一緒に寝ましょうか？」

「そうですね。『怖がりのクゥちゃん』のために、私たちが一肌脱ぎましょう♪」

「だーかーらー！！！　俺はビビリでも怖がりでもなーーーーい！！！！」

本日のベッドの振り分けの一つが、『ティアナ・クゥ・コロナ』になったと当時に、クゥの男のプライドは、無残にも複雑骨折してしまったのであった。

「……ま、まぁ？　お母さんとコロナ姉ちゃんが、俺という抱枕を使いたいって言うなら話は別だけどね！！　勘違いしないでよ！！？　あくまで二人のためなんだからな！！？」

「「はいはい、ツンデレ乙」」

「ちくしょおおおおおおx！！！（ ゜皿 ゜）キーッ！！」

Ｍｅｍｏｒｙ；２８　露天風呂での恋バナ【ガールズサイド】（後書き）

閣下「おい、前書き……今更すぎるだろ。ていうか、地味にうみねこネタｗｗ」

Ｆ２０Ｃ「まぁ、名探偵云々は置いておいても、君は明らかに捕まえられう方だろうね。盗撮とか、セクハラとか、フェイトさんに対する痴漢行為とか、セクハラとかで」

閣下「性犯罪者限定で考えンのやめてくんない！！？」

Ｆ２０Ｃ「お黙り、全身男性器」

閣下「どこがだあぁぁぁ！！！？」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；２９　ｅｍｂｒａｃｅ

次回、アインハルトがマジで嫁です。目標は、読者様に『もうお前ら結婚しろよ』と言わせてみせるという感じで。

Ｍｅｍｏｒｙ，２９　ｅｍｂｒａｃｅ（前書き）

記者：最近、フェイトさんに対するセクハラ行為や、変態閣下としての色が濃すぎるなどの読者様からの苦情が届いていることについて何かコメントを。

閣下：（チッ、ウッセーナ……）反省してまーす

スンマセン、正直これがやりたかっただけです。

Memory,29　embrace

「ん……あれ……私は……？」

目を開けば、真っ白な天井が視界いっぱいに広がり、少し視線を傾けるととっぷりと日が暮れてしまい、そのと風景は深夜であることを示すような暗さが星灯でわずかに照られている。
加えて、自分がベッドに寝かされ、タオルケットを掛けられていることに気がつく。

目が覚めたアインハルトは、自分がどうしてベッドで寝かされているのか、外は完全に深夜なのか。若干の混乱を覚えた。

「スゥ……ん…」

「あ……」

だが、その混乱も、窓側と反対の方向に視線を向けることで解決した。
窓際のベッドで寝かされていたアインハルトだったが、となり据え置かれているもう一つにベッドの上で、シラヌイを抱き、壁に背を預けながらホムラが眠ってしまっていた。
その体に悪そうな寝方は、夜の会話などでアインハルトにとっては既に馴染み深いものではあるが、直に目にするのはこれが始めてだ。

「そうだ……私、お風呂場で気を失ってしまって……」

ホムラの顔を見た瞬間、自分がお風呂場でどうなってしまったのかを思い出す。ティアナ達からの２８２８視線に、極めつけのホムラからの謎の叫び。

その２つが絶妙な合体をした上で、アインハルトの恥ずかしがり屋メーターを振り切らせてしまったということを。

「うぅ……じ、自分が情けないです……」

自分がベッドで寝かされている、そしてホムラはとなりのベッドで休んでいる。この２つの状況から、気を失ったアインハルトをホムラがここまで運んでくれたという予測はすぐに出来た。

服装が寝間着になっているのは、ティアナ達が着替えさせてくれたのだろう。

「で、でも…！　ホムラさんもホムラさんです……いきなりあんな……あんなことを……大きな声で……」

そう呟くアインハルトの声は、徐々に小さくなってしまい、それに反比例する形で頬が紅潮してしまう。

同時に、あのお風呂場でのホムラの言葉が頭の中をループしてしまう。

『あ、アインハルトだって！！　可愛いし綺麗ですよ！！　物静かな性格も、清楚な感じで良いし、しっかり者で優しい女の子です！！　しょ、小動物みたいな可愛さもあるし……』

「可愛い……綺麗だなんて……そんな事言われたら、どうしていいか分からないじゃないですか……！」

脳内で繰り返し再生されてしまうその一文に、アインハルトは眠ってしまっているホムラを少し睨みながらも文句を垂れるが、彼女の表情には負の感情などは全くない。
というか、嬉しいのか頬が緩みっぱなしである。

「……物静かな性格も清楚でいい感じ……しっかり者で優しい……か……」

フニャフニャしっぱなしのアインハルトだが、ホムラの叫びの一文。特にアインハルトの内面について触れている部分を思い出すと、少しだけ落ち着きを取り戻す。
加えて、上半身を起こした状態から、ベッドの端に腰掛けるように座り、ちょうどホムラの対面になる位置を取る。

「ホムラさんは……私の性格を、そんなふうに思っていてくれたんですね……」

外見などの見てくれを褒めてくれたのも、無論嬉しい。女の子らしいと言ってくれたこともだ。

だが、彼女としては自身の内面、性格面をホムラがどう評価してくれているかのほうが重要だった。人間、顔と性格、どちらが大切か？　という選択肢に対する答えは、それこそ人それぞれバラバラだ。

そこへ行くと、アインアルトの場合は、性格面を重視しているということなのだろう。

ここだけの話、アインハルト自身は、自分の性格は良いものではないと自己評価を下していた。

森で会った青年にも言ったが、無愛想、可愛げがない。アインハルトは自分の性格をそう見ていたわけだ。

「……本当に優しいのは……ホムラさんの方ではないんですか…？」

そんな自分を、清楚でいい感じ、優しいしっかり者。そんな風に見てくれる彼の方が、よっぽど優しいのではないだろうか。

そんなふうに思って、口に出したりしてみるも……やはり、口元が少しフニャッとしそうになってしまう。

「……」

ギシ……

ベッドが少し沈む音と共に、アインハルトはさっきまで使用していたベッドから降り、ホムラが眠っているベッドに近づく。
一歩、また一歩と、ホムラの近くに歩みを進める。

アインハルトは知らないだろうが、昼間にヴィヴィオが同じように寝ているホムラに近づいたところ、彼は自分にとっての害を成す何かと勘違いしたのか、ヴィヴィオに対して抜刀しそうになったのだ。神経が研ぎ澄まされすぎているホムラ故のことなのか、過去のトラウマか何かなのか。それは今のところ分ってはいない。

が、アインハルトはそんなことは知らずにホムラに近づき……彼の警戒区域の内側に……入った。

ギシ……

「……」

しかし、ホムラはピクリとも動かなかった。同じようにシラヌイを手に眠っているにも拘わらず、誰かが自分の間合いに入ってきても、そのまま眠ったままだ。

そんな事情など知らないアインハルトは、ホムラの隣に腰を落ち着かせ、彼の寝顔を横から覗く。無防備で、未だに幼さの抜けない、だが髪さえ長ければ女だと言っても大丈夫な中性的な顔立ちだ。本人が聞いたら嫌がるだろうが。

「……ふぅ……」

ホムラの横顔を見つめ続けて何分経っただろうか？　熱に浮かされたような双眸になったアインハルトは、どこか熱っぽい吐息を吐くと共に、自身の胸のあたりで右手をギュッと握る。
気がつかない間に頬には朱が差しているが、今の彼女には些細なことだ。

「（どうしましょう……？　ずっと見ていても……飽きないかもしれない……ホムラさんの横顔と寝顔を見るの……）」

熱っぽい視線のまま、そんな事を考えてしまうこのお嬢さん。
知らない内に、彼女の体は先程よりもホムラの方に近づいて行っており、あと数センチでも体を動かせば腕がぶつかってしまう。
至近距離から、ジィっと……飽きることなく、アインハルトはホムラの寝顔を堪能していた。

「（な、何なんでしょうか……体が妙に熱くて……頭が上手く回ってくれません……。それに、何故かホムラさんの唇にばかり視線が……うぅ……）」

自分はどこか病気なのではないかと、アインハルトは若干の恐れを抱きつつも、また徐々にホムラとの距離を縮めていく。
彼女の目には、何故かホムラの唇ばかりが映ってしまう。いや、そこしか見れない、そこに『何かをしたくて堪らない』、そんな状態だ。

あと5センチ…・・

4センチ……

3センチ……

2センチ……

「（わ、私……何をしようと……？　こ、このままだと…私とホムラさんの……唇が……当たって……！）」

俗世間では、その行為とキスだとかチューだとか、難しく言うと接吻だとか呼ぶらしい。と、そんなどうでもいいことばかりが頭を駆け巡る。

だが、アインハルトが眠っているホムラに今正にしようとしているのは、正にそれらの行為にジャストミートなわけで。

詰まるところ、ただ今アインハルトさん、ホムラにキスしようとしているのです。

「（ほ、ホムラさんが寝ているのに……私はなんてことを……？！

あぅ…でも体が止まって…くれない……）」

心とは裏腹に、体は素直にホムラとの繋がりを欲していた。

心の中では、彼とのことで悩んでいるアインハルトだが、体のほう

では完全に答えが出ているようにも見える。
アインハルトが、ホムラのことを好きなのだと。

その間も、アインハルトとホムラの唇はゆっくりと接近していく。
その距離、既に1センチ。遠くから見たのであれば、完全にキスしているように見えるレベルだ。

「（どうしよう……もう、自分自身を……抑え込めない……うぅ…ホムラさん……）」

心の中で、歯止めが効かなくなっている自分自身を必死に止めようとするアインハルト。
対して、呑気に爆睡中のホムラ。
状況的に対照的な二人の距離は、ほぼ完全にゼロになりつつあった。
そして、両者の唇が触れ合いそうになった……その瞬間…

「……うぅ…あ……ぐ……」

「っ！？」

突如、ホムラの唇から漏れた声に、アインハルトは思わず体を飛び下がらせた。
ついさっき迄の体の火照りや、歯止めの効かない感覚も一瞬で吹き飛んでしまうほどだった。

そして、その声を出したホムラの表情を見ると、アインハルトの先ほどまでのフワフワした気分は一気に心配の色に変わることになる。

「あ……ぐぅ……んん…」

「ホムラさん……？　うなされて……？」

見れば、ホムラの表情は苦しそうに歪んでおり、額には嫌な汗が出ている。口から漏れる声も、呻くようなものでとても良い夢を見ているようには見えない。

シラヌイを握る手には、先程よりも強い力が込められており、体全体が強ばってしまっている。

『最近は、少し多いようですね』

「シラヌイさん……って！？」

戸惑うアインハルトに、ホムラの手に握られているシラヌイがそう告げてくる。というか、今まで休止状態とばかり思っていたのだが……だとすると、アインハルトが危うくホムラにキスしようとしていたことも、シラヌイは知っているわけで。

『先程のキス未遂については、私のメモリーの奥深くに隠しておきますので、ご安心を』

「あぅ……お、お願いします……」

アインハルトの心を読んだかのようにそう言って来るシラヌイ。無論、アインハルトの顔はまたしても赤くなりそうになるが、今は目の前のホムラの異常が目を引いてしまうため、すぐに紅潮は消えてしまう。

「あの……ホムラさんは、フラッシュバックの夢を？」

『恐らくは。薬もしっかり飲んでいらっしゃるようですが、どうしても昔のことを見てしまうようで……飛び起きないだけまだマシです』

「そうなんですか……」

以前話していた、フラッシュバックを抑える薬。ホムラは処方された薬をしっかりと服用しているようなのだが、やはり完全に悪夢をシャットダウンできるという訳ではない。

人間の体や精神、心というものは難しい物で、未だに分かっていないことが多い以上、完璧に症状を無くす薬や治療法などは中々あるものではない。

『間違いなくご両親の亡くなった事件のことでしょう……。当然と言えば当然ですが、トラウマとでも言えばいいのか……随分と根深い問題のようです』

「シラヌイさんは、いつからホムラさんに？」

『私が作られたのは、三年前ですね。事件の三ヶ月後だったかと。マスターからは、そういった事件があったということしか知らされておりません』

シラヌイも、ホムラにここまでの精神的苦痛を与えるトラウマの内容がなんなのか知らないらしい。

目の前のホムラの様子を見ていると、両親がテロで殉職したとアインハルトは聞いていたが、それ以上の何かがあったのではないのかと、そう思えて仕方がない。

「うぅ……」

『……主人が苦しんでいるにも拘わらず……デバイスである私には何もすることは出来ません。強いて言うなら、こうして、マスターの手に収まっていることくらいです』

「シラヌイさん……」

ホムラの呻くような声に、シラヌイは声のトーンを少し落としてそう言う。デバイスにもデバイスなりの葛藤というものがあるのだろうか。

ＡＩが創りだした擬似的な人格とは言え、シラヌイはとても人間臭い。作り手の設計プラン上でこうなったのか、はたまたホムラの希望だったのは分からないが、シラヌイは彼にとっては良きパートナーだ。

『マスターが本当に握るべきなのは、誰かの手…なのだと思います。眠る時くらいは、デバイス(わたし)ではなく、誰か大切な人を傍にして寝てもらいたいものです』

それは、シラヌイなりの主人への希望なのだろう。ホムラの睡眠のとり方が間違っているのは誰が見ても明らかだ。
成長期の子供が満足に体を横にして眠れないなど、体に悪影響が出かねない。
どうせ一緒に寝るのなら、心安らぐ相手と一緒に……。

『というわけで、アインハルト様。マスターを抱いてください』

「にゅえ!!?　だだだだ、抱く!!?」

『シー…！　マスターが起きてしまいますよ?』

「あ、すみません……でで、でも抱くってそんな……」

いきなりのシラヌイからの提案に、思わず大きな声でリアクションしてしまったアインハルト。幸い、ホムラが目を覚ます事にはならなかったが、内心肝がヒヤヒヤした。

「というか……その、わ、私としては、どちらかと言えばホムラさ

んに優しく……」

『……アインハルト様？　抱くと言っても、男女の夜の営みの方ではありませんよ？　こう、抱擁的な意味合いでの『抱く』で……』

「……」

アインハルトは、瞬間凍り付いた。
シラヌイの言い方も言い方だが、『抱く』というフレーズを……男女の営み的な意味で想像してしまったアインハルト、なかなかの耳年増というか、おませさんというか……。
本当に、最近のお子様は迫力満点である。

『もちろん、ここでアインハルト様にマスターの貞操を奪っていただいても、私としては一向に構わないのですが……やはり、始めての体験はお互いの同意を得てからのほうがよろしいかと。　あ、避妊具もありませんしね……って、アインハルト様？』

「……もう……ホムラさんに清楚と言ってもらえる資格がありません……うぅ…」

アインハルトはベッドの上でｏｒｚになって、ぶつくさ言いながら塞ぎこんでしまった。
まぁ、勘違いは誰にでもあるということで、そんなに深く思いつめないほうがいいのだが、生真面目さが災いしてか、なかなか彼女はこっちの世界に帰ってくることが出来なかった。

「で、では……！！」

『どうぞ、ガバーっと行っちゃってくださいませ』

落ち着きを取り戻したアインハルトは、シラヌイの本来のお願い通り、ホムラを抱く（抱擁的な意味合いで）ことにした。
苦しげな表情の彼を何とか救ってあげたいと、顔は赤くなってしまっているが、そのことは念頭から消えてはいない。

ホムラのすぐ隣に腰を下ろし、彼の方を向く。先ほどと同じように、ホムラの横顔が見えるが、今は少し気分が苦しそうな顔になっている。

「（……ホムラさん……怖いんですか…？　それとも…苦しいんですか…？）」

その心の中での彼女の問いに答える者はいない。
その答えは、ホムラの中にしか無いからだ。

第三者に出来ることは、驚くほどに少ない。しかし、少ないだけで

あって何も出来ないわけではない。

「……」

ギュ……

アインハルトは、ホムラの頭を包み込む様に抱きしめ、自分の胸の辺りに持っていく。
ホムラは起きる様子もなく、自分の体勢が変わってしまったことに気がついてはいないようだ。
心なしか、若干ではあるもののホムラの苦悶に歪んだ表情が、少し和らいだように見えた。

「（こんなに、体が強ばって……それに、少し震えている……？
そうか……怖いんですね……夢の内容が、怖くて仕方ないんですよね……？）」

彼の体の状態から、なんとなくの予想ではあるが、ホムラが怯えて、怖がっているのだと感じたアインハルト。
彼をこんなにも怖がらせる夢の内容に、腹が立ってしまうアインハルトであったが、今は夢に文句を言っている時ではないし、そんなことをしても仕方がない。

彼女がするべきなのは、したいと思っていることはもっと別の、優しいものだった。

「大丈夫ですよ、今は私がいますから……。私が、守ってあげますから……」

「……う…んん……スゥ……」

アインハルトが優しい声でそう囁きかけると、驚くことにホムラの強ばっていた体から一気に力が抜け、震えも収まり、ホムラの苦しそうな表情も穏やかなそれに落ち着いていった。
同時に……

ガチャ……

彼が手に持ったまま放すことがなかったシラヌイが、ベッドのシーツの上に転がる。
ホムラが、体から力を抜いた事で、シラヌイを持っていた手から滑り落ちたのだろう。

更に、アインハルトはホムラを抱きしめたまま、そのままベッドに体を横にする。
両手で優しく、しっかりと抱きしめながら、安心させるように抱きしめる。

『これはこれは……想像以上です……』

シラヌイが驚く。
ベッドで横になって眠ることが出来なかった彼が、シラヌイを抱いてでないと寝れない彼が。デバイスを手放し、ベッドで横になって、気持よさそうに眠りに着いているではないか。
アインハルトの抱擁と、その心の優しさ、暖かさがホムラに安心を与え、強ばらせていた心に本当の意味での休息を与えたのかもしれない。

「……あれ…？　なんだか……私も……急に眠たく……？」

そして、アインハルトもまた、ホムラを抱きしめた状態で、彼の温もりを感じながらゆっくりと瞼が下がっていく。
アインハルトも、この抱擁で癒しを得ているということなのだろうか。

『ふふふ……♪　これは…本格的にアインハルト様にはマスターの嫁になって頂きたいと思ってしまいますね……』

最後に聞こえたのは、シラヌイのとても嬉しそうなそんな呟きだった。
そのまま、アインハルトの意識はまどろみの中に沈んでいき、二人は抱擁という形を保ったまま、眠りに付くことになった。

その日、約三年ぶりに、ホムラはベッドでまともに寝ることが出来

たのだった。

女の子と一緒に、それも抱きしめられながらという特典付きで。

Ｍｅｍｏｒｙ；２９　ｅｍｂｒａｃｅ（後書き）

Ｆ２０Ｃ「アインハルト……恐ろしい子！！」

アインハルト「うぅ～～～～～……」

Ｆ２０Ｃ「キス未遂に加えて、あっちの方の想像まで……さすがは真ヒロイン……今までのヒロインとはスケールから違うぜ…」

アインハルト「もう、煮るなり焼くなり好きにしてください…」

Ｆ２０Ｃ「あれま……自暴自棄になっちゃったよ……まぁ、ホムホムの三年ぶりの安眠を与えてあげたっていうのは、それを補って余りあるくらいの働きだったと思うけどね」

アインハルト「そ、そうですか…？　ひ、ヒロインっぽいでしょうか？」

Ｆ２０Ｃ「えぇ、ますます嫁っぽいと思います。……ホムホムが」

アインハルト「ｏｒｚ」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；３０　ｒｅｍｅｍｂｅｒ

次回は、コロナとクゥのお話でございます。コロナとクゥが出会ったばかりの頃のお話で……今度はコロナが嫁っぽいかもしれません。

コロナの優しいお姉さんっぷりをお楽しみにノシ

Ｍｅｍｏｒｙ，３０　ｒｅｍｅｍｂｅｒ（前書き）

閣下語録

『変態と一般人の違い、それは躊躇うか躊躇わないかである』

ｂｙ　閣下

ホムホム紳士道

『据え膳であっても、謙虚な心を忘れるべからず』

ｂｙ　ホムホム

Ｍｅｍｏｒｙ，３０　ｒｅｍｅｍｂｅｒ

懐かしい夢を見た気がする。
いや、現在進行形で見ているという方が正しいか。

それは少し昔のことで、とても大切な事で、忘れられないことでもあり、今の二人を形作る為のキッカケとなったことだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

～コロナｖｉｅｗ～

私がクゥちゃんと出会ったのは、一年と少し前。まだ、冬も開けてもいない季節でした。
最初は、今みたいにクゥちゃんは私と仲良くはしてくれなかった。

というか……

「も～……クゥもいい加減、コロナと仲良くしなよ～」

「（プイッ！）」

出会ったばかりの頃は、何故かクゥちゃんは私に心を開いてくれなかった。いつも、ヴィヴィオかティアナさんの背中に隠れてて……何故か、少し私を怖がっているようにも見えた。何となくの感覚だったけど、そう思った。

「ごめんね、コロナ……。クゥって、ちょっと人見知りっていうか、なんて言うか……」

「ううん、大丈夫だよヴィヴィオ。クゥ君もまだ私に慣れてくれてないだけだと思うし……」

気まずそうに謝ってきてくれるヴィヴィオに、私は苦笑いを浮かべながらそう返した……けど、やっぱり年下の男の子に怖がられるのは、少し傷ついちゃうかも……
私、そんなに怖いかなぁ……？

「はぁ～……私とかティアナさん、ルークさんやフェイトさん達には普通にしてくれるんだけど……」

「出会ってまだ2、3回しか会ってないからだよ、きっと。多分、時間をかければお友達になれると思う」

「う～ん……そうならいいんだけど……」

ヴィヴィオも少し困ってるみたいだけど、実際私とクウ君は、まだ会って間もない。

小さい子なら、人見知りするのも仕方ない……よね？　きっと……。

うぅ……でもやっぱりへこんじゃうかも……

「あぁえっと……兎に角、気を取り直して、早速お買い物行こうよ？　時間も限られてるわけだしさ」

「……（コク）」

「うん、そうだね。行こっか？」

私が少し落ち込んでしまったのをヴィヴィオには気付かれてちゃったみたいで、今日集まった目的でもある、お買い物に行くことに。

本当に、ヴィヴィオには気を使わせてばっかりだなぁ……。

それはともかくとして……春物の服だったりとか、新学期からの文具とか……今日はその辺りを見に行こうってことで、二人を誘ってお買い物に出ることになっていた。

「クゥ君は、今日は何を買うのかな？」

「……別に…（ツーン）」

「あーもう……クゥってば……」

「あはは……」

市街地に向かうレールウェイの中でも、私は頑張ってクゥ君とお話しようとしたんだけど……結果はこの通りで、あんまり芳しくなかった。
やっぱり、ヴィヴィオの手を掴んだままだし、話す時も視線を合わせてくれないし。

でも、さっきから少しだけだけど、チラチラと私のことを警戒してるのかな…？　少しだけど視線を感じることはあった。う～ん……男の子って難しいのかな…？

ううん、弱気になっちゃダメだよね！！　ここは年上のお姉さんとして、私が歩み寄って行かないと！
ガンバレ、私！

ということで……

「はい、クゥちゃん♪　これなんか似合うと思うよ？　あとこれとか…これとか」

「う……あぅ…」

まずは呼び方を『君』から『ちゃん』付けにしてみたり。お買い物の手伝いだったりとかを頑張ってみたりした。
何故か、私が近くに来ると、クゥちゃんは顔を真っ赤にしちゃうんだけど……熱いのかな？　それとも熱？

「クゥちゃん、顔赤いけど……熱でもあるの？　ちょっとごめんね？」

風邪引いた状態で、連れ回しちゃうのも可哀想だし、そうならすぐに家に返してあげないと……。
まずは、熱があるか確認しないとね……

「ん～……熱はないみたいだけど……」

「あ……うぐぅ…」

あれ？　おでこで熱を測ろうと思ったのに……クゥちゃんの顔が更に真っ赤になっちゃった？？！
し、しかも、何だかクゥちゃん目を回しちゃってる？
え、これ私の所為？　私の所為なのかな？？

「あはは♪　クゥってば、コロナに心配されて照れてるんだ～？」

「ち、違うよ！！　そんなんじゃない！！」

ヴィヴィオにそうからかわれると、クゥちゃんはもっと顔を赤くして私の手をおでこから外しちゃった。
でも、ヴィヴィオが言ってたように……クゥちゃん、もしかして照れてるのかな…？

「ふ、フンッ！！（プイッ）」

「あ、あはは……」

う～ん……やっぱり男の子って難しい……。
また顔を向けられちゃった……。でも何だろう……？　クゥちゃん、別に私のことを嫌いって言うことじゃないのかな……？　それならそれで、私は嬉しいんだけど……。

だったらどうして、もっと仲良くお話とか、その、手を繋いだりさせてくれないんだろう……？

その後も、イロイロと頑張ってはみた私なんだけど……

「はい、クゥちゃん。あ～ん♪」

「～～～～っ！！」

クゥちゃんにお昼食べさせた上げたり……（クゥちゃんはやっぱり顔を真っ赤にしちゃった）

「迷子にならないように、手、繋ごうよ？」

「うぅ…」

一緒に手を繋ぐことに挑戦してみたりした。（なぜだか、クゥちゃんと手を繋いだ瞬間、クゥちゃんの動き方がロボットみたいにギクシャクしちゃったんだけど……強く手を握りすぎたのかな……？）

あ、それとも子供扱いされるのが嫌だったとか…？　う～……学校の勉強なんかよりよっぽど難解だよぉ…。

そんな感じで、その後も私とヴィヴィオ、クゥちゃんの三人でいろんなお店を回って、目的のものの大半を揃えることが出来た。

というか、少し調子に乗って買い込み過ぎちゃったりして……。

それを思うと、クゥちゃんの買い物は少ない。それに、私たちと違って選ぶ時もほんの数秒くらいしか悩んだりしなかった。

やっぱり、男の子と女の子で、買い物の仕方も違うんだなぁとか、そんなどうでもいいことを考えていた。

そんな時だった、あの出来事が起こったのは。

「あ、ゴメン……私ちょっとままから頼まれてたものあったんだった……ちょっと行って買ってくるから、二人はここで待っててて？」

「あ、ちょ？！」

「は～い、じゃあ待ってるから～」

「お願いね～♪」

どうも、なのはさんかフェイトさんから買い物を頼まれていたヴィヴィオは、帰る間際にそのことを思い出したみたいで、言うが早いか、そのまま走って行っちゃった。

ヴィヴィオが居なくなっちゃったからか、クゥちゃんは少し肩身が狭い様な感じで、少しキョドキョドしてる。……ちょっと可愛いと思ってしまったのは内緒だ。

でも、これはいい機会なのかもしれない。
何故、私に対してあまり心を開いてくれないのか、もしも私の方に非があるのならば治したいとも思ったから、思い切って聞いてみることにした。

「ねぇ、クゥちゃん…？　その……どうして私には…ヴィヴィオやフェイトさん、なのはさんに対してみたく、お話とかしてくれないのかな…？　もしかして、私クゥちゃんに何かしちゃったのかな…？」

「……何も」

「じゃあ……もしかして…私のことが嫌い……だったり？」

「……（フルフル）」

私の質問に、クゥちゃんは短く、簡潔に答えてくれた。嫌いなのかという質問には、すぐに首振って否定してくれたから、少しホッとしちゃった。
う～ん……だったら、何がいけないんだろう……？　分かんないよ、クゥちゃん……。

「あ……そ、その……」

「？？？」

少し落ち込んだような表情をしてしまったみたいで、クゥちゃんはそんな私を気遣ってか、何かを伝えようと口を開いてくれた。
でも、言い難いことみたいで、すぐの言葉にならないみたい。ここは焦らず、クゥちゃんのペースでお話をさせてあげよう。

ガッシャアアアアアアアアアン！！！

そう思った時……一際大きな、何かが割れるような破壊音が私たちの頭上から聞こえた。
私もクウちゃんも、その音に驚いてすぐに上に視線を持っていく。

「え？！」

「げっ！？」

思わず、私もクゥちゃんも変な声で呻いてしまった。というか、呻かずにはいられなかった。だって……傍にある高層ビルのもの凄く高いところの窓が何故か割れちゃって……その破片が私たちに向かって、ううん、私たちの周囲にいた人達目掛けて落ちてきてるんだから……。

「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？」

どこかの女の人が、いきなりのことに叫び声を上げながら、手で頭を覆いながら地面にうずくまる。
でも、そのくらいじゃどうにもならないレベルの落下物だってことは誰の目にも明らかだった。高層ビルというだけあって、そのビルの高さはかなりのもの、そこから生まれる位置エネルギー、ガラスの破片という鋭利な刃。
当たればそれこそ……『死んでしまう』

「クゥちゃん！！」

私は、何とかしてその場を離れようと、クゥちゃんの名前を呼ぶ。こうなったら、クゥちゃんだけでも安全そうな場所に逃してあげないと、そう思って普段出さないような大声を出したんだけど……

「……しゃあないか…」

？？

今、クゥちゃんの様子というか、雰囲気が……変わった？　いつものクウちゃんらしさっていうか、子供っぽさが無くなったっていうのかな…？

「エウロス、セットアップ」

『了解しました、ご主人』

「え？」

クゥちゃんは、逃げるどころか、大量のガラスの破片の落下点、その中心に飛び込み、首から下げていたアクセサリーを手にしてそう呟いた。

え？　あれって……デバイス？

クゥちゃんみたいな小さい子が……？

そんな風に私が驚いている間、一瞬の内にクゥちゃんのデバイスはセットアップを完了してしまった。

クゥちゃんのデバイスは、剣とか杖みたいな一般的なものとはだいぶ違う。

ローラーシューズって言えばいいのかな……？でも、ウィールは左右に二個ずつ……それに後ろの方のウィールの形が独特……鳥さんの羽をイメージしてるみたいな……。

「……ったく、手の掛かるガキンチョだ…」

『―Ｂｕｎｉｓｈｍｅｎｔ　ｃｈａｒｇｅ（バニッシュメント・チャージ）』

ギャ……ギャギャギャギャギャ……！！！

ガキンチョ…？　わ、私のことかな…？　で、でもとしは私のほうが上なんだけど。

あ、でもなんだろ……？　今のクウちゃん……クゥちゃんじゃないような感じがする……？

何だか…別の人みたいな感じが…。う～ん…変なの。

って、そんなことはどうでもよくって！！

クゥちゃんは、左足の膝を地面につけて、腰を落とす。右足はしっかりと地面を踏みしめローラーシューズ型のデバイス、その後輪ウィールはものすごい勢いで回転し始め、地面を削り取ってしまうんじゃないかと思うくらいの音が響いた。

そして……

『―Ｃｈａｒｇｅ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ《チャージ、コンプリート》』

「っ……フレイム・ロード！！」

ゴアァッ！！！

「凄い……」

次の瞬間、強烈な回転をしていたウィールと、地面の接地面から強烈な炎が迸った。

あれは……地面とウィールの摩擦熱で……炎を…？　で、でもそんなことが……？

でも、私がほんとうに驚いたのは、ここから。

ブアァッ……

「あ……ガラスの破片が……？」

多分だけど、クゥちゃんの作った炎が……上昇気流を生み出して、ガラスの落下速度が落ちたのかな？

更にそこから、クゥちゃんは左足のデバイスを落下速度が急激に下がった破片の山に向けて……

「らぁ！！」

『ゲイル（風爆の道）・ロード』

ドアァッ！！！　（ザシュ！）

クゥちゃんの周りに巻き起こった炎を吸収しながら、クゥちゃんの左足にすごい勢いで風の塊……？　みたいなものが生まれた。
それは、竜巻と炎が合体したような技で……降ってくるガラスを跡形もなく焼き尽くして、吹き飛ばすには十分な威力を持っていた。

「……すごい……ガラスが全部……無くなっちゃった……」

さっきまで数えるのも嫌になるくらいいっぱい、ガラスの破片があったのに……クゥちゃんの風…？で全部消えちゃった……。

ビキ……バキ……

「あ～あ……やっぱり、試作機じゃこの技はダメか……つうかこいつもこいつで、力の使い方がまるで分かってない……」

さっきの技を放ったせいなのかな……エウロスってデバイスに全体的にヒビが入っちゃってる……試作機ってことは、完成品じゃないんだ……？
どっちにしても、さっきの技は凄かったけど……クゥちゃんの独り言…何だか気になるなぁ…。

ガヤガヤ……

って、何だか人が集まって来ちゃってる?!

「な、何だったんだ今の……?」

「いきなりガラスの破片が吹き飛んじまったみたいだが……?」

「な、何にせよ助かったぁ……あと少しでミンチになるところだったわよぉ……」

クゥちゃんがガラスを吹き飛ばしたってことはバレてないみたいだけど、このままじゃややこしいことになりそうだし……。
ここは……三十六計逃げるに如かず!!

「クゥちゃん、こっち!」

「うわぁ!?　って、あれ?　俺今……何を…?」

私は、クゥちゃんの手を取って、その場からダッシュした。あんまり運動は得意じゃないけど、そうも言ってられない。
厄介なことに巻き込まれる前に、ここを離れてヴィヴィオと合流しよう。
クゥちゃんがの様子が少しおかしいけど、今は逃げること優先だよ!
後で分かったことなんだけど、あのガラスの破片は清掃用ロボットの誤作動が原因だったとか……何でもかんでも機械の手に頼るのは良くないって、改めて痛感した。

私とクゥちゃんは、少し走ってさっき居た場所から少し離れた自然公園にまで足を伸ばした。ヴィヴィオには端末にメールを入れておいたから、多分すぐに合流できると思う。

「っ……！」

「クゥちゃん…？　その手の怪我どうしたの！？」

公園のベンチに座って、一息つけたと思ったら全然そんなことはなかった。クゥちゃんの手の甲がパックリ切れてしまって、そこからすごい量の血が出てる……。

「もしかして、さっき切っちゃったの？！」

「……そうみたい…」

「と、兎に角そのままにしてたら、菌とかが入っちゃう……早く消毒しないと。ちょっと見せて？」

クゥちゃんの手の傷は、さっきのガラスが落ちてきた時に、風で吹き飛ばしきれなかったガラスで切っちゃったみたい……。
見るからに痛そうなのに、クゥちゃん痩せ我慢して……もぅ！
男の子って何でこう意地っ張りなのかな！！

そんな風に、私はちょっとだけ怒りながらクゥちゃんの手を取って傷の具合を見ようとした……んだけど。

「だ、ダメだよ！！　見るな！！」

「え？」

クゥちゃんは、私の手を弾いて無事な方の手で、怪我したところを隠そうとした。
でも、私には見えてしまった。
クゥちゃんの手の甲の傷が……

シュゥ……

「あ……」

「嘘…？」

手の甲の大きな傷が……あんなに血が出てた傷が……まるで魔法みたいに（魔法はあるけど）一瞬で塞がっちゃった……？
傷の治りが早いってことはあるけど、これはいくら何でも速すぎるっていうか……まるで瞬間的に再生したみたいな……。

「……」

クゥちゃんは、私に今の光景を見られたのがショックだったみたいで、ちょっと目に涙を溜めて、俯いてしまった。

そんなクゥちゃんに、私はなんて言ってあげればいいんだろう……？　何を……してあげれるんだろう……？

「変……だよね、こんなの……？」

「え……」

「こんな風に……怪我が直ぐに治っちゃう……俺の体……こんなの、変だよね…？」

クゥちゃんが、搾り出したような小さな声で、ブルブル震えながらそう呟いてくる。

怖いんだ……苦しいんだね……私の反応とか、声とか表情が……。

気味悪がられるとか、そんなことを考えちゃってるんだね…？

「こんなの……こんなの……普通の人間じゃないよ……だから……お母さんとか、ヴィヴィオ姉ちゃんとか……知ってる人以外には……見られたくなかった……」

「あ……もしかして、私のこと少し警戒したり、あんまり仲良くし

てくれなかったのって……」

「……怖かった……『誰かに怖がられること』が……それなら、初めから仲良くなんかしなきゃいい……だから……」

自分の体のことを、クゥちゃんは人に知られたくなかったんだね……。自分から、誰かが遠ざかっていくのが怖かったんだ……。

でも、ということは、昔誰かに……気味悪がられたりとか……したってことなのかな？　それがトラウマになって…？

「……誰かの……俺じゃない誰かの思い出が……たまに見えることがあるんだ……。その人は、もの凄く強くって……でも、その力が強過ぎて人から気味悪がられて……みんな離れて行って、裏切られて……ずっと一人だった……。だから、俺もそうなるんじゃないかって……」

誰かの思い出……それが何なのかは、私にはわからない。

でも、クゥちゃんの体の秘密とその思い出が、クゥちゃんの心に少し殻を作っちゃってるんだ……。

ヴィヴィオやティアナさん達は、もともとクゥちゃんのことを知ってたから……普通に接することができてたわけで……。

あはは……何だか、ホッとしちゃったなぁ……私、別に嫌われてるわけでも、怖いわけでもなかったんだ…。

「クゥちゃん、私は別に、クゥちゃんの体のこと、変だなんて思わないよ？」

「嘘だ……」

「嘘じゃないよ。だって、クゥちゃんの体がちょっと特別だからって、私とクゥちゃんが友達になれない理由にはならないもん」

だったら、私がクゥちゃんにしてあげられることは1つだけ。

今の私の気持ちを、クゥちゃんにそのまま教えてあげることだよね……。真正面から、正直に……クゥちゃんと仲良くしたいっていう気持ちを示してあげればいいんだ。

「でも……俺は普通の人と……違うみたいだし……」

「違いがあるのは当たり前だよ？　足の遅い子もいれば、速い子もいる。勉強が得意な子がいれば、苦手な子もいるし。健康な人がいれば、病弱な人もいる。ほら、世界には同じ人なんていないよね？」

世界に、完全に同じな人なんて絶対にいない。

みんなそれぞれ、「違い」を持って生きてる……その所為で、たまに喧嘩とかしちゃうけど。違いがないっていうことは、なんて言うのかな……寂しい気がする。

皆が、何から何まで一緒だなんてことになったら、喧嘩も戦争なんかも絶対無い。

皆が同じになったら、コミュニケーションを取る必要がないから、

いざこざも起きない。
でも、それは世界に自分一人しかいないのと同じ。それはやっぱり、寂しいし孤独なんだと思う。

「違い」は怖がるものなんかじゃないんだよ、クゥちゃん。

「それに、例えば体が弱い子がいたとするよね？　だったら、その子の体が弱いのは、その子がなにか悪い事をしたからなのかな？　生まれた時から体が弱くて苦しい思いをしているその子は、何か悪いことしたから体が弱くなったのかな？」

「それは……悪いことはしてない……と思う」

「うん。じゃあ、クゥちゃんもそうだよ。クゥちゃんの体が少し特別なのも、別にクゥちゃんが悪いわけじゃない。だったら、堂々としてればいいと思うな」

元からそこに在るものを、初めからそうだったものを、『おかしい』・『変』・『気味が悪い』って言葉で暗い色を付けちゃうのは、やっぱり悲しい事だと思う。
クゥちゃん自身、あんまり自分の体のこと好きじゃないみたいだし。クゥちゃん、もしかすると心の奥の奥、その隅っこのほうで自分のことを嫌っちゃってるのかもしれない。

だから、まずは誰かと繋がることに慣れてもらって、自分のことを好きになって欲しい。
そうすれば、ちょっと違いがあるからって、それを理由にして自分

の殻に閉じこもることもないし。

「クゥちゃんのちょっと特別な体のことも、恥ずかしがり屋さんなところも、とっても強いところも、ツンツンしてるところも、全部全部引っ括めて、私は大好き♪　少なくとも私は、クゥちゃんのことを変だなんて思わない」

「だ、大好き!!?」

わわ?!　なんだか急にクゥちゃんの顔が真っ赤に!?
え、えっと……私何かしちゃったかな?　もしかして、何か変なコト言っちゃったかな?

で、でも、これが私の正直な気持ちだし……どこもおかしくない……よね?

「あ……あの!!」

「うん?」

あ、でも真っ赤になりながら、クゥちゃん何か言おうとしてる……?
はぁ~…顔赤くしながら、困った顔してるクゥちゃん……可愛いなぁ……お持ち帰りしたいかも……ジュル…あっと、ヨダレが…

とと、こんなお馬鹿なお姉ちゃんじゃダメだよね!　ここはしっかり、優しい大人なお姉さんとしてクゥちゃんのお話を聞いてあげな

いと……何だか手遅れな気がするけど……

「あ……あ……」

「あ…？」

「アンチマテリアルライフル……」

「……た、対物ライフル……？」

えぇ！？　あの話から何で対物ライフルのお話になっちゃったの！？
分かんない、やっぱり男の子って難しすぎるよぉ……。

あ、でもここからどんなリアクションを取れば……？　ここは素直に、『あぁ～、バレットＭ８２とかカッコイイよね～♪』って言えばいいのかな！？
ていうか、何でこんなライフルの名前、私知ってるんだろう……？
質量兵器はご法度な世界なのに……

そんな感じで、私が混乱していると、クゥちゃんが慌てた様子で、もう一度……今度は大きな声でハッキリと……

「あ、ありがとう！！　コロナ姉ちゃん！！！」

初めて、私の名前を呼んで、お礼を言ってくれた。

何でだろう……？　クゥちゃんにちゃんと名前を呼んでもらえたことが……どうしようもないくらいに嬉しい……。
うぅ……このままクゥちゃんを抱枕にしてベッドを転がったりしていたい気分……。

あぁ、ダメダメ！！　折角クゥちゃんが、お礼まで言ってくれたのに！
ここは淑女として、お姉さん的な感じで答えてあげないと！！……
…やっぱり、何だか手遅れな気がするけど……。

「どういたしまして、クゥちゃん♪」

こうして、私とクゥちゃんは初めて名前を呼び合って、友達に慣れた。クゥちゃんも、少しずつ私に甘えてくれたりして……他の同年代の子達とも積極的に関わるようになってくれた。

初等科一年に上がる頃には、今みたいな元気一杯の子になってくれて……。

今になって思う。
あの時、クゥちゃんの話を真剣に聞いてあげることができて、本当に良かったって……。

それに……なんだか最近、クゥちゃんのこと……可愛いだけの男の子っていう枠だけで捉えられなくなって……

コロナＶｉｅｗ　ｅｎｄ

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

夜、クゥ＆コロナ、ティアナのベッドにて……

「にゅふふ～♪　クゥちゃあ～～～～ん……えへへ……♪」

「んーーー！！？　んーーーー！！？　（訳：息が！！　息がぁぁぁ！！？）」

「何を遊んでるのよあんたらは……？」

クゥを胸に抱きしめ、緩み切った表情、いや悦に浸りながら爆睡中のコロナお姉さん（自称）。
彼女の胸では、クゥが窒息寸前という危機に陥っており、如何にコロナが強烈な力でクゥを抱きしめているかが分かる。
ティアナが呆れ顔になりつつ、なんとかクゥの気道だけは確保してやる。

「ぷはぁ！！？」

「この年で女に溺れるのね……全く、誰に似たんだか……」

「溺れてないし！！　ていうか、窒息死しそうになってたわ！！」

呼吸できる有り難さを再確認したクゥは、ティアナにそう突っ込んだ。いや、無論クゥとしてもコロナの柔らかさとか、いい匂いだったりとか……若干テンションが上がりそうになりはしたことは認めるが。

「やぁ～ん……逃げちゃだめぇ～～～」

「にゃあああぁぁぁ！！？」

「全く……本当に、誰に似たんだか……」

逃げたクゥをもう一度ハグしながらご満悦のコロナ。そして、再び抱枕にされてしまったクゥ。

今夜は長くなりそうだと、そんなことを考えながらティアナは掛け布団を二人に掛けてやりながら、自身も布団に入るのだった。

Ｍｅｍｏｒｙ；３０　ｒｅｍｅｍｂｅｒ（後書き）

Ｆ２０Ｃ「ということでいかがでしたでしょうか？　この章より、キャラクターの目線からお話を展開する『○○ｖｉｅｗ』を導入していきたいと思います」

ホムホム「アドバイスにあったことを、作者なりに実行に移してみたわけだね。最初は少し慣れないことをしている感じが滲みでているとは思いますが、ご容赦ください」

Ｆ２０Ｃ「そ、そこまで言わんでも……」

ホムホム「いや、それよりも前書きだよ。なにさ、紳士道って…？　まぁ、あの言葉には大いに賛成だけども」

Ｆ２０Ｃ「キミの紳士道語録も作らないと、閣下と比べて不公平だしね。ちょっとやってみた」

閣下「……なんだろ、前書きの度に俺の人気が下がっていってる希ガス」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；３１　刺激的な朝の一幕

次回、ホムホムが目を覚まして・・・おっと、ここからはノクターンだぜ（嘘です

Ｍｅｍｏｒｙ，３１　刺激的な朝の一幕（前書き）

閣下語録
『自ら見せる乳に価値は無く、ポロリにこそ価値はある』

ｂｙ　閣下

ホムホム紳士道
『『男が女性を泣かせていいのは、嬉し泣きの時だけである』

ｂｙ　ホムホム

一徒さん、鮮血の刻印先生！
面白い語録アイデア、ありがとうございますｗ

Ｍｅｍｏｒｙ，３１　刺激的な朝の一幕

ホムラｖｉｅｗ

……とても温かい何かに、包み込まれているような感覚……それでいて安心できて……ホッとして…心が落ち着く…。
それに、なんだろ……？　もの凄くいい匂いがする……。
あと、何だか顔に微かな柔らかさが……？

「ん……？」

「……ううん……うにゅ……」

「……ぬ？」

……ど、どうやら僕、アインハルトを部屋に運んでその後に寝ちゃったみたいなんだけど……まぁ、そこはいい。大丈夫だ、問題ない。

同じ部屋に若い男女が一晩一緒っていうのも……限りなくアウトに近いけど……うん、今日のところは一万歩譲ってセーフにしてもいい。というか、セーフにさせてください。
でも、本当の問題というか、僕にとっての差し迫った危機というの

はそのことではなく、もっと『イケナイ』匂いのする問題だった。

「むにゅ……私が……まも…すから……」

「（何で、『アインハルト』と『同じベッド』で『抱きしめられながら』寝てるんだ僕はあぁぁぁぁぁ！！？）」

はい、そうです。
つまりはそういうことなんです。僕にとっての、今現在最も脳内サミットに掛けるべき懸案は、何故か僕と同じベッドで、僕を抱きしめながら眠りに着いている女の子。アインハルト・ストラトスのことだ。

……アインハルトって、すごくいい匂いがするなぁ……って、いかんいかん！！　そういうのは無しにして、まずは現状把握だ…
……落ち着け…取り敢えず冷静に世界そのものを分析するんだ……

※ホムホムの現状把握（Ｖｅｒ１）

・昨夜、逆上せてしまったアインハルトをベッドまで運んだ

・彼女が目を覚ますのを待つ（眠っているアインハルトの唇や、呼吸で上下する胸、スラリとした綺麗な生足を視界から外しながら）

・自らも睡魔の圧倒的な戦闘力の前に敗北

・アインハルトに抱きしめられながら起床（今ここ）

「（って、分析もへったくれもない！！？　明らかに４つ目で異次元の扉開いた感じになってるじゃないか！！　３つ目から４つ目への間に一体何があったの！！？）」

いくら落ち着いて考えても、流石に寝ていた間に何があったのかなんて、意識のない状態で把握できるわけ無いし……ていうか、そんな人がいるならお目に掛かりたいわけで……と、兎に角……流石にこのままっていうのは……まずいよね…？
それ以前に、こ、こんなに女の子に…接近というか最早密着ってレベルで、こんな近距離だと……その……やっぱりドキドキしちゃうよ……。

昔なら、ユキナと一緒に寝たことならかなりあるけど……やっぱり、家族と『女の子』は別なんだよ…だって、ユキナの時はこんなにドキドキなんかしなかったし……

「んん……うにゅ……」

うわあぁぁぁぁ！！！？　アインハルト、お願いだから今は動かないで！！
ただでさえこんなに密着してるのに、動かれちゃうとこう……想像してはいけないこととか、ものが頭の中を駆け巡っちゃうから！！

とととと、取り敢えずもちつけ……もとい、落ち着けホムラ！！
　まずはこの密着状態、アインハルトのハグから何とかして抜けだすんだ！！
じゃ、じゃないと……自分の意図しない所が反応しそうになる……。

「っと……まずは……アインハルトの腕を……」

差し当って、一番のネックというか、唯一の拘束部分であるアインハルトの腕を何とかしないと……。
アインハルトを起こさないように……ソォ～っと……。
万が一起きちゃったら……うん、間違いなく断空拳をプレゼントされるだろうなぁ……。

あぁ、でも……このままこうしてアインハルトに抱きついていたい……って、そういうのは無しだ！！
そういうのは、その……ちゃんと『そういう関係』になった人達だけのものであって……僕とアインハルトはそんなんじゃないんだよ！！　オーケー！！？

誰に話してるんだ……僕は…？

「むぅ～……」

グワシィ！！

「あふぅ！？」

って、アインハルトさん！！？　何故、その綺麗且つ艶かしいお御足を、私のような下賤な輩めに絡ませてくるのでございましょうか！！？

何！？　ちょっとでも動くとダメなの？　このままジッとしてろって事なの？　いやいや、無理無理無理。

アインハルトのいい匂いとか、柔らかい感触、綺麗な太ももが体に擦りつけられる度に、煩悩が……！

このままじゃ、僕の寿命が煩悩でマッハなんですけど……。

「スゥ…スゥ……」

「どないせぇっちゅうねん……」

思わず、どこか他の世界の方言で喋ってしまうくらい、というかさっきからパニックになりつつあるのか、自分自身の口調が中々安定しないなぁ……。

少しでも動けば、更に拘束が強まる……何だろ、この『どうあがいても絶望』的な状況……？

これで、師匠やルーテシア達がこの部屋に入ってきた日には……

「おーす、起こしに来たぞ、可愛い弟子よ。アインハルトとはどんなかんｚ……」

「ルークさん、そんないきなり入っちゃダメですよ♪　もしかしたら、まだ二人共合体したままっていうか、愛しあったままの状態でそのまま寝てるってこともあｒ……」

「あ……」

その瞬間、僕の人生が終了するような音が聞こえた。
具体的には、ドアが開く音と、師匠たちの声。今まさに、アインハルトと密着状態でしかも足を絡められた状態になってる僕を見て、二人共同時に固まってしまっている。
正直、僕も固まってしまいたかった。
固まった上で、粉々に粉砕して欲しいとさえ思ってしまう。

「あぁ～……その…なんだ……。まさか本当に『してる』最中だとは思わなかったわけでな……うん、取り敢えず謝っとくわ……すまん」

「ホムホム……あなた、意外と肉食系だったのね……」

「え、あ…ちょっと…？」

マズイマズイ！！　これは二人共完全に勘違いっていうか、邪推っていうか……兎に角よろしくない方向に話が進んでいってる感じだ。いやいや、ここで慌てちゃダメだ。大丈夫、まだあわてるような時間じゃない。

ここは冷静に…自分の現状を把握して、なんとか師匠たちに事の真偽を説明しないと。

※ホムホムの現状把握（Ｖｅｒ２）

・昨夜、逆上せてしまったアインハルトをベッドまで運んだ

・彼女が目を覚ますのを待つ（眠っているアインハルトの唇や、呼吸で上下する胸、スラリとした綺麗な生足を視界から外しながら）

・自らも睡魔の圧倒的な戦闘力の前に敗北

・アインハルトに抱きしめられながら起床

・抜けだそうとするも、アインハルトの足が絡められ脱出不可

・絡み合い、抱き合っているようにしか見えない状態を師匠とルーテシアさんに見られた（今ここ）

いや、完全に詰んでるじゃん……パッと見、これ完全に一晩の過ちにしか見えないし……。

これ…言い訳しても信じてもらえないっていうか、気を使われまくるパターンなような気がする…。それで、こういうタイミングでアインハルトが目を覚ましたりして……

「……ほ、ホムラ…さん……？」

「……おはようございます」

僕の人生、終了のお知らせ。
いや、振りでもなんでもないつもりだったのに……最悪のタイミングでアインハルトが目を覚ましちゃった…未だに僕に抱きついて、足を絡ませたままの状態で……。

「る、ルークさんに……ルーテシアさん……？」

二人「「お、おはよー」」

師匠とルーテシアさんの存在にも気がついたアインハルト……うわ、二人とも完全に笑顔が引きっ攣ってる……きっと、僕らがこんな状態になってるだなんて思ってなかったんだろうなぁ……いや、僕が一番そう思ってたわけなんだけどさ。

「あ……あう……ふえ……」

「あ、アインハルト……とりあえず落ち着こう……それと、出来ればその手と足を退かしてくれると……非常にありがたいと……」

自分の状態と、周囲の状況を確認して、アインハルトは今この時、この部屋の中で起こっていることが、如何に恥ずかしく、加えて少しイヤラシい想像が出来てしまうことに繋がるかを理解してしまっ

たみたいで、顔が、僕の目の前でどんどん赤くなっていく。

必死に落ち着くように説得するんだけど……うん、全然効果なさそう。

心なしか、アインハルトの目元に涙みたいなのが……もとい、本物の涙です、本当にありがとうございました。

「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？？」

「ふべらっ！！？」

その数秒後、僕がアインハルトの断空拳によってぶっ飛ばされ、開いていた窓から、朝の日差しの気持ちいい空に向かって飛んでいったことは言うまでもない。

あれ？　何でこんなことになったんだっけ……？

ホムラＶｉｅｗ　ｅｎｄ

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ほんっとーーーーーーーに、ごめんなさい！！！　寝ぼけていたとは言え…元はと言えば、私がやったこのなのに……あんなことを…」

「あはは……だ、大丈夫大丈夫……朝から空中散歩を楽しめたと思えば……」

朝の一件、羞恥心のあまり思わず放ってしまったアインハルトの断空拳の餌食になり、朝っぱらから空を飛ぶことになったホムラ。

まぁ、朝からアインハルトの体を堪能……いや、これでは表現が本格的にエロいのでもとい、朝から役得だったホムラにとっては払うべき対価なのかもしれない。

朝食を食べ終わって、午前の訓練が始まるまでの休憩時間になっても、流石に今回ばかりは、アインハルトは自分のしてしまったことが許せないのか、ずっと謝り通しだった。

「それにさ……朝ごはん……食べさせてくれたりしたし……」

「そ、そんなことは……せめてもの罪滅ぼしというか……当たり前というか……」

ホムラが照れた様子で、朝食時のアインハルトの甲斐甲斐しい姿を思い出したのだろう、朝ごはんを全て食べさせてくれた事に対する礼をする。

対するアインハルトとしては、自分の所為で朝から空を舞うことになったホムラへの罪滅ぼしという意味もあったし、少し食事が辛そうだった彼を放ってなど置けなかったから。

心の奥底では、そんなこと抜きで食べさせてあげたり……言ってし

まえばアーンとかしてあげたかったり……。

「それに……さ…ベッドで横になって眠れたのって…多分三年ぶりくらいなんだ。もしかしたら…アインハルトが一緒だったから……なのかな？」

「あ……えと…私にはなんとも言えませんが……その……お役に立てて何よりです…？」

が、今回の朝の騒動は、ホムラにとっては三年ぶりのベッドでの安眠という、何にも代え難いものをもたらしてくれた。
これから？日、寝る時はアインハルトと一緒……という訳にはいかないが、ベッドでゆっくたりと眠れたことは、ホムラにとっては最大級の休息になったと言える。

「……アインハルトの…暖かい感じとか…いい匂いとかさ……なんて言うのかな……存在感がもの凄く安心できるっていうか……。兎に角、全然怖くなくって……いつも寝る時に感じてた不安感が欠片も感じられなかった。ホントに、アインハルトはすごいよ……」

「そ、そんなに持ち上げないでください……。それに、あったかい感じとか…いい匂いって……少し恥ずかしいですよ……」

「あ…そうだよね……ごめん……ちょっと変なコト言って……」

自分でも気恥ずかしいことを口走ってしまったのを、ホムラは自覚

し赤面する。
だが、その言葉に嘘偽りは全くない。素の彼の心が、アインハルトの存在に『安心』と『温かさ』を感じた。
だからこそ、ホムラはベッドで横になって、それにシラヌイを手から離して寝ることができたのだ。

ホムラも、それを恥ずかしいながらも理解しているようで、あえて訂正したりはしなかった。

「そ、その……言ってもらえれば……くらいは……」

「え……？」

と、恥ずかしいのを隠すように照れてしまっていたホムラを見て、アインハルトが少し詰まりながらも小声で何かを伝えようとしてきた。
その顔には、ホムラ同様の紅潮が見られ、アインハルト自身も今からかなり恥ずかしいことを言うのだということが分かった。

無論、朴念仁のホムラにはそれを悟るだけの鋭さは期待できなかったが。

「お、お昼寝するときくらいなら……手を握ったり……膝を貸してあげることくらいは……出来ます……」

「え…あの……マジ……ですか…？」

「ま、マジ……です。そ、それに、今朝のお詫びはまだまだ終わってませんから！！　精一杯、その……『ご奉仕』させてもらいますから……」

ちょっとアインハルトさん、その言い方は恥ずかしさからくる間違いだと信じたいのですが、些かエロ過ぎやしませんか？

ホムラは、心の中でそんな風に呟き、危うく頭の中に生まれそうになった『ネコミミ×ミニスカメイド服姿（ガーターベルト有り）のアインハルト』の妄想を振りほどく。

危うく、非道なご主人様の如く、いろんなえっちぃ命令を出す自分を想像しそうになった。

まぁ、『ご奉仕』に関してはもう少し将来に持ち越しておくとして、今は昼寝の際に手を握っている、膝枕の提供を申し出てくれたアインハルトに、誠心誠意お礼を言うべきところだろう。彼女からの厚意に、ただされるがままというのは駄目だ。

そこはホムラの紳士道に反するわけだ。

「ご奉仕は…ともかくとして……コホン……。アインハルト……その、今朝っていうか夜のことも含めて……本当に色々ありがとう」

「あ…うぅ……ど、どういたしまして……（その優しい笑顔は…反則です…）」

アインハルトに向けられたホムラの感謝の言葉と、独特の優しい笑み。

そのダブルコンボに、アインハルトはものの見事にハートキャッチされてしまい、ポーッとしてしまう。
傍から見れば、完全に恋する乙女以外の何者でもない。

「あ、今日のチーム別模擬戦も、一緒にがんばろうね♪」

「はい、それはもちろん。敵になった場合は、容赦しませんからね？」

「うん、それは僕も望むところ」

コツンッ

ホムラが今日予定されている、チーム別模擬戦のことを付け足すと、やはりそこは流石のアインハルト。即座に頭のスイッチを入れ替え、途端にいつもの凛とした表情を取り戻し、差し出されたホムラの拳に、自身の拳を軽くぶつけたのだった。

「（私も……ホムラさんから、元気をもらってるみたいです……）」

突き合わせた方の手を、胸のあたりでギュッと握るアインハルト。
アインハルトからホムラへ、という一方通行ではない。ホムラからもアインハルトにもたらすものが確かにそこにはあった。
相互的に、お互いを補い合い、支えあう……ベストパートナーの二人が人気のないロッジのテラスにあった……

「もう、お前ら結婚しちまえよ……」

「る、ルーク？　その呟きは一体……」

「いや、読者様のお声を代弁してみた」

「め、メタ発言はやめようね……」

そんな二人を、盗み見、というわけではないが薪割りをしていたルークとフェイトが、たまたま見ていたことには、アイホムの二人は当然気が付いているはずもなかった。

ルークが鉈で薪を割り、フェイトがそれを並べていく。先ほどまでは、順調に進んでいた薪割りのペースが、ここに来て完全に止まってしまったのは言うまでもない。

「……」

「…？？　どうかしたのルーク？　何か気になることでもあるのかな？」

「あ…うん、まぁ……」

と、ホムラを見つめるルークの視線に、何か感じる所があったのか、フェイトはそう尋ねてくる。
やはり、フェイトにだけは隠し事は出来ないな、そんな風に心の中で苦笑しながらも、ルークは自分の考えていた事をそのまま話すことにした。

「昨日の模擬戦でさ……ホムラが若干おかしくなったの、覚えてるよな？」

「うん……何だか、人が変わったみたいに怖い感じだった。冷たいっていうか、痛いくらいにさっきが集中してたっていうか……」

ホムラとルークの模擬戦。
昨日のことではあるが、やはり記憶は鮮明に、彼らの殺し合いと言われても文句の言えない戦闘が残っていた。
その最中、ホムラは人が変わったように、冷酷な表情でルークを叩きのめすことしか考えられなくなってしまった。そう、後から本人に聞いたのだ。

「あの時のあいつは……確かに俺と戦ってたんだけど、剣の向かう先は誰かまた別のやつに向かってたんだよな」

「……別の人……？　それってどういう……？」

「う～ん……上手く言えないんだけどさ、実際に戦ってる俺を通して、また別の誰かと戦ってるような……そんな感じ。俺を見ている

ようで、本当のところは全然別の相手と戦おうとしてたんだよ、あいつは」

それは、完全に剣士としての勘のようなもので、論理性も何も無い、抽象的なもの。言ってみれば、感想のようなものだった。

だが、以前から感じていたホムラの剣にある『ブレ』。それとルークの感じた違和感が全くの無関係だとは思えない。

現に、ホムラは豹変したかのような戦いぶりを見せたのだから。

「何か……悪いことの前触れ……っていうことなのかな……？」

「それはまだ分かんないよ……。思い過ごしかもしれないし。……でも、笑って誤魔化してばかりもいられないかも」

「というと……？」

少し不安げな表情のフェイトに、ルークは真剣な表情で自分の中の漠然とした勘から引き出した、一つのパズルのピースを提示する。

それは、少し穏やかではない、ルークの悪い予想を少しだけ後押しすることになるものだった。

「あいつの必殺技っていうか、持ってる中で未だに形になってない、超神速の抜刀術の名前……覚えてる？」

「うん、確か…黒百合（くろゆり）だよね？」

「そう。でもって……その黒百合の花言葉は……」

そこでルークは一旦言葉を切り、一呼吸置いてから、フェイトにその先を、黒百合に含まれた意味を口にした。

「花言葉は、『恋』、『呪い』……でもって……『復讐』だ」

Ｍｅｍｏｒｙ；３１　刺激的な朝の一幕（後書き）

Ｆ２０Ｃ「前書きにて、閣下語録とホムホム紳士道のアイデアをくださった皆様、本当にありがとうございますｗ　他のアイデアも順次掲載していきたいと思いますので、お楽しみにｗｗ」

アインハルト「やっぱり、ホムラさんは言うことがカッコイイです……」

Ｆ２０Ｃ「加えて、彼はそれを有言実行に移すからね。そこが真主人公たる所以な訳で」

アインハルト「うぅ……それなのに私ときたら……寝ぼけていたとは言え、ホムラさんにあんなひどい事を……」

Ｆ２０Ｃ「まぁまぁ、その分彼に『ご奉仕』するんでしょ？　それならホムホム的にはお釣りが来るくらいのイベントになるだろうし、気にしないでもいいと思うけど」

アインハルト「そ、そうでしょうか……では、少し気合を入れて……」

Ｆ２０Ｃ「そうそう。その調子で、このフリフリメイド服×猫耳＆尻尾を装備してほｓ……（断空剣！！）　アッーーー！！！」

アインハルト「……あれ？　作者さんはどこに……？」

ホムホム「さぁ？　トイレにでも行ったんじゃないかな？」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；３２　寄生プレイは許さない、絶対にだ

次回は、練習回のお話に入ります。
一回戦は原作そのままのお話を、ホムホム視点でお送りします。
ホムホム・ルーク・クゥは二回戦からの出番ということで……

では、次回もお楽しみに～

Ｍｅｍｏｒｙ，３２　寄生プレイは許さない、絶対にだ（前書き）

ホムホム紳士道

『二兎追う物は一兎も得ず、優柔不断になるより一人の女の子を大切にすべし』

ｂｙ　ホムホム

マグネス先生、アイデアありがとうございますｍ（＿＿）ｍ

Ｍｅｍｏｒｙ；３２　寄生プレイは許さない、絶対にだ

眩しく、気持ちの良いくらいに晴れ渡った空の下。
無人世界カルナージのアルピーノ一家特製、レイヤー建造物で組んだ陸戦場にて今日も元気な声と、軽快な破壊音、魔法による衝撃などなど、凡そ普通に生活している間はあまりお目に掛かることのないようなものや出来事が、各ポジション同士の戦闘によって起こっていた。

強化合宿の二日目、午前の部。
大人子供入り交じっての練習会ということで、赤組青組の二チーム別れたなのはやフェイト達が、お互いに手に汗握る戦闘を繰り広げている。
アインハルトやヴィヴィオ、コロナ、リオ達ちびっ子達も（本人に言えば怒られるかもしれないが）なのは達の戦闘に混じって、非常にいい動きをしている。

そんな中……ホムラとクゥ、ルーク達野郎三人はというと……

「うわぁ……アインハルト達も凄いなぁ……ヴィヴィオやリオ、コロナもそれぞれの特性とか得意分野で上手く戦ってるし……。高町教導官やハラオウン執務官も、言葉にならないや……」

優等生のホムホムは、戦乙女達（約一名男）の戦闘に一喜一憂、更にその動きから何かを学ぼうと、ホロウィンドウに映しだされている戦闘映像を見て、かなりテンションが上がっている。

勉強熱心な彼としては、ハイレベルな魔法戦は何よりの糧になると考えている。

見ているだけでも、どんな攻撃を、どんな防御を、回避方法、戦略、立ち回りなどなど、様々なことを吸収できるチャンスになる。

それに対して……クゥ&ルークの不良二人組はというと……

「あ、スラッシュアックスのゲージ管理ミスった……！」

「って……ま～たピッケル折れた……まだ一回しか使ってないのに……」

PS〇片手に、モ〇ハンに興じていた。

「っていうか、変態兄ちゃんもちゃんと戦ってよ！！　なんで俺一人であぐにゃん（アグナ〇トル）の相手してんのさ！！？　炭鉱夫になるなら採取ツアーでやってよ！！」

「いやいや、俺の装備をよく見てみろ……双剣だろ？　つまりは、乱舞でお前の攻撃の邪魔をするかもしれん……だからこそ、俺はこうして離れたところでお守りを狙ってだな……ってブレスキターーー！！？」

「ざまぁｗｗｗ　マジざまぁｗｗｗｗ　乱舞厨ワロスｗｗ」

「ムキーーーーッ！！（＃・∀・）」

ワイワイやりながら、というか若干お馬鹿な会話を挟みながら、カチャカチャとＰＳ○を操作し、（主にクゥが）モンスターに攻撃を加えていく。（寄生プレイは嫌われるからやめようね！！　お兄さんとの約束だ！！）

ルークはお守り欲しさに、必死にピッケルを消費しているが、中々出てこないようだ。ゲームでもリアルでも、妙なところで運がない男だ（スケベイベントを除く）。

「あ…えと……お二人とも……試合観戦はしなくてもいいんですか……？」

まぁ、ゲームに興じるのも良いのだが、やはりここは試合の観戦をしたほうがいいのでは？　そう思ったホムラは、一応モン○ンに集中している二人に声を掛けてみる。

すると二人は……

「「だってさ～……俺らの出番無いですし、戦えないですし、朝ごはん食べて眠いですし、モン○ンしたいですし、おすし……」」

「単純に拗ねてるだけ！！？　って……出番とか戦えないとかは仕方ないですよ……じゃんけんで決まったんですから……」

「「ぶーぶー！！　ヽ（、Д´）ノプンプン」」

このルークとクゥ、とことんまで子供であった。
まぁ、クゥはリアルに子供なので、仕方のないことではあるが。
練習会の一回目の模擬戦への参加者は、じゃんけんで決められた。
ホムラ、クゥ、ルークの三人はそこから物の見事に漏れてしまい、
次の二回戦目からということになったわけだ。

「あ。あぐにゃんの尻尾切れた」

「ナイスカットー、ってちょっと砥石で研がないと……」

「変態兄ちゃん、そのタイミングは絶対に……」

「うぎゃあぁぁぁぁぁ！！！　背後から一撃とか……あぁ、一乙した……」

砥石で切れ味を回復させていたところを、あぐにゃんの一撃で屠られてしまい、一乙。ねこタクシーに、ルークの操作するキャラ（どことなくフェイトさんに似ている）が乗せられ運ばれてくる。
エリア移動すればいい話なのだが、やはり時間は惜しい物で……敵との交戦中は砥石高速化が欲しいところだ。

まぁ、モン○ンの話はどうでもいいとして。
そんな感じで、余り物のホムラ達は出番までの時間を過ごしていた。
その間も、アインハルト達の戦闘は激しさを増し、勝負は白熱したものへと変わっていく。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ホムラＶｉｅｗ

「ソニックシューター・アサルトシフト！！」

ヴィヴィオの虹色の魔力光が煌き、魔力弾を形成していく。すごい数だな……格闘だけの勝負では、アインハルトには勝てなかったみたいだけど、魔法戦になれば戦闘の性格は一気に変わる。

クロスレンジだけでなく、ミドルからの攻撃手段があるのなら、ヴィヴィオの戦術にも広がりが生まれる。拳を振り回すだけが魔法戦じゃないからね。

魔力弾を目隠しに、アインハルトの側面に回りこんで攻撃に転じれば……

「ソニックシューター、ファイア！！」

ヴィヴィオの掛け声と同時に、彼女の背後に浮いていた虹色の魔力弾が放たれた。

アインハルトは、何かをするつもりなのかな…？　少なくとも、回避する感じじゃないな……。

僕ならどうする……？

シラヌイで全部叩き落すか……ヴィヴィオが回りこむ先に、縮地で更に先回りするか……
どっちにしても、アインハルトの返し手は……？

「覇王流…旋衝破（せんしょうは）」

バッバッバッ！！！

う、受け止めた？！
魔力弾を…弾殻（バレット・シェル）を壊さずに…？　回避じゃないなら、てっきり弾き返して、反射（リフレクト）するのかと思ってたけど。

って、アインハルト……受け止めたヴィヴィオの魔力弾を……

――覇王流・旋衝破

ドドドドドッ！！

凄い……あの技、ヴィヴィオの魔力弾を受け止めるだけじゃなくて、それをそのまま投げ返すことが出来るのか……。
というか、覇王流（カイザーアーツ）……見れば見ると程凄い武術なんだな……。いろいろ参考にできるものがあって、ほんとうに勉強になるなぁ……。

「っふ！！」

「っ！？」

ドコォ！！

アインハルトが魔力弾を投げ返し、自分自身の魔力弾でダメージを負ってしまうことになるヴィヴィオ。

何とか防御はできたみたいだけど、ヴィヴィオのＨＰは１８００にまで減った。

その防御の隙を見逃さないアインハルトは、やっぱり流石だ。綺麗に追加攻撃が決まって、ヴィヴィオのＨＰは一気に７００まで下がった。

でも……ヴィヴィオも負けてないね。

「っ？！」

アインハルトの追撃に合わせて、ヴィヴィオが放ったカウンターが、アインハルトにヒットしてた。それに伴って、アインハルトのＨＰが２３００まで減った。

あの不安定な体勢とタイミングから、よく撃てた。少しでもズレて

たら、ＨＰが大幅に減ってたのはアインハルトの方だったかも……。

っていうか……ここまで何とか我慢してたんだけど……

「アインハルト……スパッツ履いてくれてるのはいいんだけど……それでもやっぱり、チラチラ黒いのが見えると……は、鼻血が……」

そうだ。

ハイレベルな戦闘を見て勉強になるのはいいのだけれど、そのなんというか……アインハルトやハラオウン執務官達女性陣のスカートの短いバリアジャケットを装備されている方たち……本当に目のやり場に困るんですけど……。

戦いに集中してるのは当たり前で、まぁスカートの事気にすることはないのは当然なんだけど……うぅ、観戦してる側からすると、やっぱりただ事じゃ済まないんですよ……。

やっぱり、その、偶然でも見えちゃったら悪いし……

でも試合はしっかり見たいし……この二律背反的な問題が、この練習会の観戦の際の意外な盲点だった。

「はい、ティッシュどうぞ～♪」

「あ、ありがとうございまふ……」

うぅ…笑顔でティッシュを差し出してくれるメガーヌさんの眩しい笑顔が……僕の心には少し痛いです……。
はぁ…僕、欲求不満か何かなんだろうか……？　いや、無いな！！
うん、ないない……だって、朝だってアインハルトに抱きしめながら起きて、足とか絡められても平気だったし！！

かなり、煩悩が生まれちゃったけど……

「なんだろ……物凄い自己嫌悪……」

「おやおや～？　なに落ち込んでるのさホムホム～♪　ホラホラ、アインハルトが今度はなのはさんと一戦交えようとしてるよ～？」

「は、はい！　って、ほんとだ……そうか、ヴィヴィオは後退したのか……」

セインさんが、少し自分の煩悩の多さに辟易としていた僕を気遣ってくれたのか、はたまた彼女自身が楽しいのかは分からないけど、背中をバンバンと叩きながら、再び意識を陸戦場に向けてくれた。
どちらにしても、少し意識が煩悩からこっちに帰ってきたことは喜ばしい。セインさん、本当に有難うございます。

心の中でセインさんにお礼を言いながら、再びホロウィンドウに映しだされた映像には、高町教導官とアインハルトが一騎打ちを繰り広げている様子が写り込んでいた。

ヴィヴィオの姿は、ルーテシアさんの近くに、７００まで減ってしまったＨＰを回復させてもらっているのか……

「アクセルシューター、弾幕集中……シュート！！」

「っふ！」

高町教導官のアクセルシューター、訓練でよく見るけど、やっぱり数と精度が段違いだ。その攻撃を、アインハルトもさっきのヴィヴィオに使った技で上手に捌きながら、自分の間合いに教導官を捉えようとしてる。

でもアインハルト気をつけて……攻め一辺倒だと、高町教導官の近接封じのコンボ技をお見舞いされることになるから……うん、僕もそうでした。

気持ちいいくらいにぶっ飛ばされて、仮想ビルの残骸の中で生き埋めになってました。

『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｓｍａｓｈｅｒ』

「ファイア！！」

徐々に距離を縮めていくアインハルトに、高町教導官は砲撃魔法を放ってアインハルトを牽制する。

だけど……

「っ！！」

ドゴォォォン！！

「あら？　ぱ、パンチで相殺！？」

その砲撃は、アインハルトに着弾する一歩手前で、彼女の拳から撃ちだされた一撃で相殺。砲撃は虚しくも消滅し、その隙を見逃さずにアインハルトは高町教導官を間合いの中に……捉えた！

ドギャアアアアア！！！

うわ、強烈……。

パッとみた感じでも、かなり重い一撃がアインハルトの小さな拳から撃ち出されると、高町教導官はその一撃を綺麗にガードしていた。

でも、アインハルトも一撃でこの勝負が着くなんて考えていない。

そこから、怒涛の連続攻撃に移っていく。あぁ、あぁまずい……このままだと僕と同じように瓦礫の山の生き埋めに……

ガッガッガ！！　ドゴゴッ！！

その嫌な予感は的中してしまい……怒涛の攻めのアインハルトに対し、高町教導官はアインハルトの拳を受けながら、彼女のことをよ

く観察しているようだ。
あの人程の魔導師なら、戦闘中でも相手がどれだけの修練を積んでいるのかなどは、簡単に推測できるのだろう。
多分、アインハルトの情報は、もうかなり教導官に筒抜けになってるかも……
そして……

ガキィィィィィン！！！

「！？」

「あ！」

思わず、僕は声を上げてしまった。
アインハルトの撃ちだされた拳に、絡まるように広がる桃色の鎖。
捕縛盾（バインディングシールド）、高町教導官のクロスレンジ封じの必勝パターンの一つだ。
攻撃一辺倒で攻めつづけた挙句に、この盾によって身動きを封じられ、あとは成す術なく砲撃の餌食になってふっ飛ばされる。
完全に少し前の僕と同じだ。
動きを封じられたアインハルトと対象的に、教導官は再度砲撃にはいる。魔力光が眩しいくらいにレイジングハートさんに集中していき、放たれるであろう砲撃の強力さに、背中に悪寒が走った。

非殺傷設定でも、怖いものは怖いんです。（経験者談）

「アインハルト！！！」

僕が叫んでもどうにもならないのは分かっている。でも、彼女がこのまま撃墜されるのは……練習会でも見たくなかった。どうしてなのか分からないけど……兎に角嫌だった。

すると、アインハルトが捕縛盾で拘束されたままの状態で、何かアクションを起こそうとする。
その動作は、昨日。河原にて僕達が一緒になって、馬鹿みたいに練習していた、『水切り』の動きそのものだった。

脱力した静止状態から、足先から下半身へ、下半身から上半身へ、回転の加速で拳を押し出す……

ドゴォォォォォン！！！

「……あ……」

一瞬、何が起こったのか分からなかった。
捕縛盾の鎖を千切り、そのまま拳を振り切ったと思ったら……高町教導官にダメージが通っていたのだから。

え？　ていうか、今アインハルト何したの……？　彼女自身も少し

ビックリしてるみたいだけど……？　他の皆さんも唖然としてるし……。

「って、アインハルト！！　余所見したらダメだって！！」

またしても、思わずそう叫んでしまった僕。
というのも、一瞬呆けていたアインハルトに、高町教導官はいち早く我に帰ったようで、即座に反撃に移り砲撃の体勢に入っていたからだ。
教導官も、アインハルトの一撃に驚いていたみたいだけど、そこは流石に超一流の魔導師。直ぐにカウンターに移れる辺り、不測の事態に対する対応が早い！

ドコォォォォ！！

「っ！」

一撃目の砲撃を、何とか既のところで交わすアインハルト。
でも、それじゃダメなんだ……空中に飛んでよければ、飛行魔法でも使えない限り、次の回避行動が取れなくなる。

多分、最初の一撃は高町教導官にとってはブラフ……その次のデカイので決めにかかる。

「ストライク・スターズ！！！」

ドゴゴゴゴォォォン！！！！

僕の読みは大方当たっていて……空中に逃れたアインハルトを待っていたのは、教導官の言葉の通りの『ドデカイ』砲撃の奔流。
アインハルトは今度こそ成す術なく、その奔流に飲み込まれ地面に倒れ伏すことになる。

残りＨＰは４０。撃墜にはならないけど、ルール上、ＨＰが１００以下だと治療してもらえるまで戦闘には参加できない。

でも、さっきのアインハルトの攻撃……本当に凄かった……。そ、そうだ！！　師匠に今の一撃について説明とかを……

「し、師匠！！　今の一撃見てましたか……」

「ほらほら！！　そんな空にばっか逃げてないで、地上に降りてこいよリオレ○ス！！」

「来いよ、レウス！！　空中退避なんか捨てて掛かって来いよ！！！」

「んがぁ！！？」

思わず、ずっこけてしまった僕。

というか、師匠とクゥ、未だにモン○ンに熱中してる?!　でもって、モンスター変わってるし……さっきのモンスター狩猟できたんだ……。

「ったく、ヘタレウスめ……そんなことだから、空の王者（笑）とか言われるんだよ……」

「僕と変態兄ちゃんの、双剣&ランスコンビに完全にビビっちゃってるんだよ……まったく、これだからレイア姐さんの尻に敷かれてる旦那は……」

師匠とクゥの二人は、どうやらモンスターが空に滞空したまま中々降りてこないのに、かなりフラストレーションが溜まっているらしい。あと、クゥはスラッシュアックスからランスに装備を変えたらしい。

というか、双剣&ランスコンビ……正直どうかと思います……お互いに邪魔し合うのが目に見えてるっていうか……。

いや、そんなことはどうでもいい……

今僕がやるべきことは一つだけ……それは……

「いい加減に、ゲームばっかしてないで真面目に練習会を見てくださいよ!!　ていうか、どんだけ狩りしたいんですか!!」

「「あぁ～～!!　な、何をするだホムホム～～～～～!!!?」」

「ホムホムはやめてくださいってば！！！」

二人の手にしているＰＳ〇を没収し、ガリューさんに預けておくことだけだった。

ていうか、僕のあだ名、もう『ホムホム』から動きそうにないなぁ……

「ていうか、真面目にしてないと、後でハラオウン執務官とコロナに言いつけますよ！！？」

二人「「それだけは勘弁して下さいｍ（＿＿；）ｍ」」

模擬戦に参加していないのに、変に疲れてしまった僕だった……。

Ｍｅｍｏｒｙ；３２　寄生プレイは許さない、絶対にだ（後書き）

閣下「ていうか、モン○ンネタが多すぎな希ガス」

Ｆ２０Ｃ「あ、これ作者の実体験です……思い出しただけでも泣けてくる。砥石高速化さえあったら……くっ！！」

閣下「いや、『くっ！！』じゃねーよｗｗ」

Ｆ２０Ｃ「あの手のゲームはホント寄生プレイが仲間というか、友情の輪をぶっ壊しちゃうんだよ……私が必死にジンオウガの帯電状態を阻止しようと必死だったのに……別のエリアで素材集めとか……まぁ、初めて初期だったから多めに見ますけどね」

閣下「お、お前も色いろあるのね……まぁ、全然知らない人との協力プレイの最中にそれされたら、間違いなくブチルだろうけどさ」

ホムホム「ていうか、モンハン談義になってしまいましたね……」

Ｆ２０Ｃ「というわけで、次回予告でございます」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；３３　絶対に見逃せないシーンが、そこにはある（笑）

さぁさぁ、おまちかね！！　みんな大好き、フェイトさんの脱衣フ

ォームの時間だよ！！

フェイト「だ、脱衣じゃないもん！！（＊￣＊；」

閣下「キタ――――（ﾟ∀ﾟ）――――ッ！！」

Ｍｅｍｏｒｙ，３３　絶対に見逃せないシーンが、そこにはある（笑）（前書き）

久しぶりに、『ニニンがシノブ伝』という神アニメを見る機会がありました。
水樹奈々様、川澄綾子さん、釘宮理恵さん、若本規夫さん、関智一さん、小野大輔さんと、そうそうたる面々が揃ったギャグアニメなんですが……はい、久しぶりに見て腹筋崩壊しました。

２００４年放送のアニメなんですが、今見ても十分すぎるほどおもしろ作品でございますｗ

「んんーっ！！？　誰！？　誰なの！？　僕のエッチピストル付近をもしもししてるのはっ！！」

これを若本さんが言うんですよ？　笑わないほうが無理です。

Ｍｅｍｏｒｙ；３３　絶対に見逃せないシーンが、そこにはある（笑）

アインハルトｖｉｅｗ

ヴィヴィオさんのお母様との一戦……『本物の砲撃』で叩きのめされてしまった私。
今は、キャロさんの召喚魔法で後方に移され、ＨＰを回復してもらっているところです……が、未だにさっきの攻撃……捕縛盾で捕まってからの一撃のインパクトが、体全体を震わせている。

水切りで覚えたことを参考にした、あの技……。
バインドもシールドも無視して、ヴィヴィオさんのお母様にダメージを通すことができた。やり方は、体が覚えているが、気持ちの面での高揚感が大きい。

驕りや慢心は無いが、新しい技を得たこの感覚は、私の前線への早期の復帰を早らせる。
もっと自分の技と拳を試したい、もっと戦いたいと。

それに……

「（ホムラさんに……私のことを見てもらいたい……）」

なんて、そんな、まるで女の子のような気持ちが、私の心の中の片

隅、いや片隅なんてものではない。かなりの面積を、すでに占有しつつある。

朝の一件は、完全ではないにしろある程度は自分の中でも折り合いをつけることができたけど……やっぱり意識してしまう。

森の中で出会った、あの変な人の言うとおり少し自分の気持を開いてみたつもりなんだけど……心のもやもやは消えなくて。

でも、少し前みたいな嫌な感じのもやもやじゃない。どちらかというと、心がホカホカするような、そんなちょっとおかしなモヤモヤだった。

「そう言えば…ホムラさんやルークさん達は……」

じゃんけんで、一回戦での参加メンバーを決める際、ホムラさんとクゥさん、それにルークさんが外れることになってしまったわけなのだが、出来れば一緒に、または相手として立ち回ったりしてみたかったのだが、皆で決めたことなのでなんとも出来ない。

皆さん、ちゃんと観戦してらっしゃるんでしょうか……？

ホムラさんはともかく、ルークさんとクゥさんは……

そう思って、私は視線を少し外し、ホムラ達が観戦しているであろう場所に視線をやる。するとそこには……

「……な、なんでルークさんとクゥさんは正座させられているん

でしょう……？」

真剣な表情で私たちの戦闘を見守るホムラさんは、まぁ思っていた通りなんですが……。何でルークさんとクゥさんは、若干震えながら正座なんでしょうか……？

もしかして、アレがお二人流の観戦方法……いえ、伝統的なしきたりか何かだったり……？

謎ですが……今はそれどころではありませんし、如何ともしがたいですね……。

「……よし！！　（ＨＰが回復でき次第、もう一度切り替えて、気合を入れていこう）」

さっきの攻撃の流れを忘れないように、今の内に頭の中でイメージを焼き付けておく。回復の時間でも無駄には出来ませんからね。ヴィヴィオさんとの立ち会いも、恐らくあるでしょうし……

ホムラさんが見ている前で、無様な戦いぶりは見せられませんから。

「……あれ？」

と、最後にもう一度ホムラさんの方を見る私の目に、おかしなものが見えた。

というか、さっきは気がつかなかったのですが……

戦闘を観戦しているホムラさんの鼻の下あたりに……なにか赤い筋が……？　気のせいでしょうか……？

も、もしかして、どこかに鼻をぶつけたとか？！　それで出血が止まらなくなっているんだとしたら……あぁ、どうしましょう……！！一刻も早く、ホムラさんのところに飛んでいって、ちゃんとした治療を……。

その時だった。

ババッ！！

「あ…！？」

突然、青組の皆さんのフォーメーションが急激に変わっていく。ノーヴェさんには、スバルさんとヴィヴィオさんが。フェイトさんには、ヴィヴィオさんのお母様とエリオさんが、そして私を治療中のキャロさんにはルーテシアさんとリオさんがそれぞれ付く形になる。

こちらの後方に控えている、ティアナさんとコロナさんを無視した、２ｏｎ１のフォーメーションがあっという間に完成した。

２ｏｎ１に持ち込んだ相手を速攻で叩けば、後はコロナさんとティ

アナさん、そして手負いの私が残るだけ。戦況は一気にこちらに不利になる。
これが青組の作戦というわけですか……

「アインハルト、防護バリアで守るから、そこでじっとしててね」

「ですが……」

確かに、今ＨＰが危険域にまで落ち込んでいる私が援護に回っても、逆にキャロさんの足を引っ張ってしまうかもしれない。
ですが……このままなにもしない訳には……！！
私たちが潰されれば、コロナさんとティアナさんが討ち取られるのは時間の問題になってしまいます……！

「赤組のメンバー、そう簡単に落ちたりしないよ！　そうだよね、コロナ！？」

『その通りです！！』

だけど、キャロさん達の戦意は落ちてはいない、通信越しのコロナさんの声にも力強さが感じられた。
確かに状況はピンチ以外の何物でもないけど……まだ終わったわけじゃない……！
それに、ティアナさんやコロナさんがフリーになっているということ

とは、今この時に限っては、二人の行動の自由度がより高まる。
その利点を生かせれば、まだまだ逆転のチャンスは残っている……。
今の私にできることは、ＨＰを回復させて、一刻も早く戦線に復帰することだ。
ここは、キャロさん達のことを信じて待つしか無い。
その時来たら、しっかりと自分の仕事をするためにも！

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ホムラｖｉｅｗ

「うわ……何だか物凄い大乱戦になってきたなぁ………」
「だね。何だか猛烈に、スマブ◯やりたくなってきたよ」
「あ、じゃあ俺はカ◯ビィを………」
「カ◯ビィとかｗｗｗ　流石変態兄ちゃん、変態兄ちゃん、汚い」
正座しながらしっかりと観戦モードになっている師匠とクゥだけど……やっぱりゲーム大好きなんだ……ちなみに、僕はサム◯を使いたいところ……ってそうじゃなかった……。

青組の必勝の策。
戦闘を２ｏｎ１に持ち込み、その相手を速攻で叩き、電撃的に赤組の数を減らし戦況を一気にひっくり返す作戦。
さっきのアインハルトと高町教導官のやり合いをキッカケに、一気に戦闘の流れが変わった感じだ……。

「でもこれ……お母さんとコロナ姉ちゃんでカバーしないとヤバくない？」

「うん……２ｏｎ１になって皆がやられちゃったら、赤組の勝機は一気に薄くなるよ…」

クゥも僕と同じ事を考えていたようで、コロナの方を心配しながら見つめている。やっぱり、何だかんだ言っても好きな子のことが気になって仕方ないらしい。
うん、青春って素晴らしい。　って、何だかもの凄くおじさん臭い事言っちゃったような気がする……。

「う～ん……でも、ティアナは別のプランで攻めるつもりっぽいぞ」

「「え？」」

そこで師匠の放った言葉に、クゥと僕は顔を見合わせてからそちらに視線を向ける。未だに正座で観戦している師匠は、ボケーッとし

ているようにしか見えないけど、やっぱり見ているところは見ているみたいだ。

「フィールドの魔力散布率は十分だし……もしかしたら、集束砲（ブレイカー）で一気に決め掛かるんじゃないか？　でもって、なのはさんはティアナの集束砲を見越して、同じく集束砲で一網打尽を狙う……」

「集束砲対集束砲（ブレイカーブレイカー）……」

「ほら、フィールド上の皆の動きが変わってきた。２ｏｎ１で抑えこまれた赤組の三人が、防御しつつフィールドの中央に相手を引きつけてる。こりゃ、ビンゴだな」

集束砲の撃ち合い。

恐らく、いやほぼ確実に、この陸戦場が終末戦争のような光景に変わってしまうであろうことだけは予想できた。うぅ……考えただけで背筋に嫌な汗が……

師匠の言ったとおり、ハラオウン執務官にノーヴェさん達が、防戦に回りつつフィールドの中央にすこしずつ移動してる……。

多分、高町教導官やランスター執務官達が、それぞれの組のメンバーにそういう指示を出したんだ……。

そして、２ｏｎ１の状態で、それぞれの戦闘は加速して行って……

「ハラオウン執務官……エリオさんと高町教導官にかなり追い詰め

られてますね……」

「エリオも強くなったしなぁ……そこになのはさんが加わったんだ、そうそう簡単には抜かせてくれんさ」

「クゥちゃん、飲み物はいかが？」

「あ。ありがとー、メガーヌさん♪　変態兄ちゃんと、ホムラ兄ちゃんの分ももらってくね～」

高町教導官の誘導弾タイプの砲撃を回避しつつ、エリオさんの攻撃を捌くハラオウン執務官の戦闘が、師匠と僕の見ているホロウィンドウのメイン画面に映される。
やっぱり、ハラオウン執務官のスピードは凄い。
僕の縮地で追いつけるかどうか、試してみたいなぁとか、そんな事も思ってしまったり。

視界の端では、クゥがメガーヌさんから炭酸飲料だろうか？　何か飲み物を受け取ってこっちに走ってきていた。

「ソニック！」

と、高町教導官とエリオさんの猛攻に耐えかねたように、ハラオウン執務官がそう呟く。
それと同時に、バリアジャケットの造形が一気に変わっていく……？

え？　もしかしてこれ……ここからが執務官の本気…？

そして、バリアジャケットの換装はモノの数秒で終わり……そこには……。

「……レオタード…？」

にしか見えない、というか装甲ほぼ無しの明らかにスピード重視の……それももの凄く露出の高いバリアジャケットに身を包んだ（包めているのかは疑問だけど）ハラオウン執務官の姿があった。

と、その時だった。

炭酸ジュースを手に、こちらに走ってきていたクゥが……

「お～い、変態兄ちゃん～、ジュースもらってきたよ～……おぉっと、両手両足が物の見事に滑ってしまったー！（棒読み）」

炭酸ジュースを持って走っていたクゥの体が、何かに躓いてしまったようで、一瞬で傾いてしまう。

そして、その手に持ったジュースは、綺麗な軌跡を描いて……師匠の方に落下していく。

というか、今のってもしかして……ワザと？

ビチャーン！！

「んぎゃあぁぁぁぁぁぁぁ！！？　た、炭酸が、炭酸がぁぁぁぁぁぁ！！！！？」

そして、案の定というかなんというか。
炭酸ジュースは、師匠に、正確には師匠の目にクリティカルヒット。
炭酸ジュースをモロに目に食らった師匠は、ゴロゴロと地面を転がり回る。

「あ～あ～目がぁ～目がぁ～！！？」

「大佐ぁぁぁぁぁぁぁ！！」

どこかの天空の城に出てくる、王様の末裔（笑）のように、目を覆う師匠。そして、そのリアクションを待っていたかのように叫ぶクゥ。
この二人、よっぽどジ○リが好きならしい。

それと同時。師匠が炭酸で目をやられている最中、ハラオウン執務官の戦闘にも新たな動きが見られた。

ズバァッ！！

「あ」

「あ…」

「え…？　何？　何があった？」

高町教導官の攻撃を超高速で回避したハラオウン執務官。だけど、そこに生まれた一瞬の隙を突いて、エリオさんが槍型のデバイス、ストラーダで連撃を放った。

その攻撃は見事にクリーンヒットし、ハラオウン執務官のＨＰを全て消し飛ばした。

ＨＰと一緒に、装甲ほぼゼロの、あの露出の高いバリアジャケットも切り裂いて……。

無論、バリアジャケット下に、何かを着ているということなどあるわけもなく……破けたバリアジャケットからは、ハラオウン執務官の女性らしい体が見えてしまうわけで……。

「のはぁ！？（ブシャアアアアア！！！？）」

「ほ、ホムラ兄ちゃあぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！？」

一瞬で僕の脳の処理限界がメーターを振り切り、大量の鼻血と共に、僕は地面に倒れていく。

周囲の風景が、やけにゆっくりに感じられ、今までの人生での出来事が……次々と脳内を駆け巡る。
何故か、アインハルトとの思い出が多かった気がする。

「ちょ！！？　マジで何が起きた！！？　ま、まさか、フェイトの脱衣スタイルか！！？　脱衣スタイルがかなり際どい破れ方したりしてるのか！！？　ノォォォォ！！！　今すぐＲＥＣだ！！　ＲＥＣボタンを押すんだ！！！」

「いや、んなもんねーからｗｗｗ……ふふ、計画通り！
（　一、д一、）キリッ」

「え？　今、クゥ。計画通りって言わなかった？　計画通りって言ったよね！！？　だぁぁぁぁ！！！　フェイトの脱衣シーンが、ご褒美シーンがぁぁ！！！」

薄れ行く意識の中……師匠とクゥのそんなやり取りが聞こえる……。ていうか……あれ？　なんだかもの凄く眠いよ……すごく眠いんだ、パト○ッシュ……。

「あああああ、慌てるな俺！！　まだ慌てるような時間じゃない！！　こんな時こそ、俺の第三の目、邪気眼を発動する時！！！」

「はいはい、厨二病乙」

「フェイトお願い！！　俺の目が回復するまで、もう少しだけそのままで！！　そのままの君でいて！！　マイスィートハニー！！！」

うぅ……もう……だめ……。

アインハルト、ユキナ……ごめん……僕はここまでみたいだ……………ガク。

ホムラview　end　(鼻血による大量出血で強制終了)

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「アルケミック・チェーン！！」

キャロの魔法、アルケミック・チェーン。彼女の足元に展開する魔法陣から、いくつもの鎖が飛び出し、2on1の相手になっているルーテシアとリオを襲う。

鎖の動きは三次元的ではあるものの、ルーテシア達はそれらを器用に回避し、キャロに反撃するタイミングを窺っていた。

「うっふふふ～♪　当たらない、当たらない」

「それはそうだよ。当てるためじゃなくて……撃墜のための布石だから！」

しかし、キャロも闇雲にチェーンを放って、ルーテシアたちを捕縛しようなどとは思っていない。
どちらかと言えば、アルケミック・チェーンは、タダの囮。二人の意識を、こちらの作戦、本命の攻撃から逸らすための布石に過ぎなかった。

「ナイスです、キャロさん！！」

リオ達二人の意識が、キャロに向いているこの隙を、フリーになっていたコロナが見逃すことはなかった。
２ｏｎ１は確かに数を潰しにかかるのには良い作戦だと言えるが、その分のリスク。残った相手チームが完全にフリーになってしまうというデメリットがトレード・オフの関係で存在している。

「ゴライアス、パージブラストッ！！」

コロナの得意魔法、ゴーレム創成（クリエイト）によって創りだされたゴーレム、ゴライアス。
その彼…と言っていいのかは不明だが、兎に角、ゴライアスの右腕部がコロナの声と同時に激しく回転し始める。
岩石がこすれ合う音と共に、コロナはキャロが足止めをしているルーテシア、リオに向かってとっておきの一発をお見舞いした。

「ロケットパーーンチッ！！！！」

「「へ？」」

回転していたゴライアスの腕部。
それが勢い良くパージされ、遠距離攻撃に早変わりし、ルーテシアたちの方に向かって猛然と飛んでいく。
溜めや準備に時間がかかるゴライアスのロケットパンチではあるが、その分威力は折り紙つきというわけで、クリーンヒットすれば間違い無くリオ達のＨＰは一気に消し飛ばせるだろう。

ルーテシア、リオは、自分達目掛けて飛んでくる石の塊出できた腕を見て、「「ヤバ…」」と内心で呟いたのだが……時すでに遅し。

「「ウソーーーーーーッ！！？」」

激しい轟音と共に、ロケットパンチがルーテシアたちを襲い、周囲の建物諸共を破壊しながら、二人のＨＰは一瞬でゼロにしてしまった。無論、リオ達は撃墜扱いとなった。

「撃墜成功！！」

「勝利の！　Ｖ！」

囮となって、ルーテシア達の意識を集めていたキャロと、ド派手な技で二人を撃墜したコロナ。二人はそれぞれ、作戦の成功を喜び、

その場で勝利宣言をした……のだが、戦いというものは、勝利した瞬間が最も危険という言葉あり……。

カコーン！

「へう！！？」

「っ！？」

キャロはどこからともなく飛んできた魔力弾を小気味いい音と共にいただくハメになり、ルーテシア達同様ＨＰがゼロに。
コロナはコロナで、桃色の鎖、バインドによってその小さな体を拘束されてしまった。

果たして、実行犯は……

「はい、キャロ撃墜。コロナちゃん捕獲！」

「えーっ！　なのはさん、いつの間に……？」

「勝ったと思った時が危ない時！　現場での鉄則だよ～♪」

そう、我らが白い悪ｍ……もとい、白い天使、高町なのは様でございます。

勝利の瞬間という、一瞬気の緩んでしまった空白の時間。キャロとコロナの心の隙を見逃すことなく、なのはは二人をそれぞれ撃墜、捕獲したというわけだ。

流石はエースオブエース。止ん事無きご活躍にございます。

「（……よし、タイミングは今！）　ブラスター１！！」

更に、赤組の二人を撃墜したタイミングを見計らい、なのはは勝負を決める、最後の攻撃に転じる。

フィールドの魔力散布が十分なものになっていることに気が付いていたのは、ティアナだけではないということだ。

「（私の魔力も残り少ないけど……マルチレイドで一網打尽！！）」

なのはは、集束砲（ブレイカー）を放つため、集束に入る。

無論、なのはティアナが同じく集束砲（ブレイカー）を放ってくることを予想していた。

彼女の目標は、ティアナの集束砲を相殺しつつ、赤組残存勢力を殲滅すること。

「（なのはさんが集束にはいった！）　赤組、生存者一同！！！」

なのはが集束砲の体勢に入ったのを確認したティアナ。
彼女もまた、同じく集束砲のために待機中に散布された魔力を集束しながら、自軍のメンバーに指示を出す。

「なのはさんを中心に、広域砲を撃ち込みます！　コロナはそのまま！　動ける人は合図で離脱を！！」

集束砲同士の衝突、恐らくかなりの被害、広範囲へのダメージ判定が予想される。
自軍を巻き込んでしまっては元も子もないので、ティアナがそう指示したのは、ある意味当然の処置と言えるだろう。

「分割多弾砲（マルチレイド）で敵残存戦力を殲滅、ティアナの集束砲を相殺します！！」

対するなのはは、離脱しようとする敵の戦力への攻撃と共に、ティアナの集束砲を潰しにかかる。
集束砲対集束砲。
超高威力の砲撃同士の激突である。
そして……

「「スターライトブレイカー！！！」」

なのははモード・マルチレイド、ティアナはシフト・ファントムストライク。
恐らく、お互いの全力を以てのスターライトブレイカー。
師弟による、集束砲ガチンコバトルが、二人の掛け声と共に開始された。

「「ブレイカーーーッ!!!!」」

瞬間、周囲は強烈な光りに包まれた……

「ねぇ!!?　今何がどうなってんの!?　フェイトの脱衣は!?　まだ脱衣ってる!!?　フェイトの柔肌見えてる?!」

「あぁもう、変態兄ちゃんうるさい!!　ホムラ兄ちゃんに輸血してるんだから邪魔しないでよ!!」

「（、・ω・、）」

そんな集束砲同士の大激突の最中、ルークは炭酸の攻撃によって未

だに苦しみながらも、フェイトさんのサービスシーンを見ようと必死で、大量の鼻血で意識を失ってしまったホムラに輸血を施しているクゥに一喝されていた。

7歳児に怒られ、シュンとなっている21歳既婚者の姿が、そこにはあった。

Ｍｅｍｏｒｙ；３３　絶対に見逃せないシーンが、そこにはある（笑）（後書き

※作者の地元では、スマ○ラで遊ぶ時、カー○ィを選ぶともの凄く白い目で見られます。

Ｆ２０Ｃ「というわけで、見事に閣下がフェイトさんの脱衣シーンを見逃したわけなのでした」

クゥ「ざまぁｗｗｗ」

Ｆ２０Ｃ「ｍ９（＾Д＾）プギャー」

閣下「ちくせう…きょ、今日のところはこれくらいで勘弁してやる！！」

クゥ「もう勝負ついてるから」

Ｆ２０Ｃ「そう言えば、ホムホムは？　一命は取り留めたの？」

クゥ「今向こうで、大人モードのアインハルト姉ちゃんに『手厚く』看病してもらってる」

Ｆ２０Ｃ「また鼻血出さなきゃいいけど・・・・・」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；３４　頑張ったご褒美

次回で、一回戦目終了です。その次からは、ホムホム達を交えた戦闘に入って行きますのでお楽しみにｗ

Ｍｅｍｏｒｙ；３４　頑張ったご褒美（前書き）

私の小説……そろそろ原作に追いついてしまいそうなんですよね（；・、д・´）

加えて、お話の構成と執筆を少しゆっくりしたものにしたいという気持ちもあって……

少しですが、更新速度を落とそうかと考えております。
週二だったのを週一更新くらいにしようかと……

今すぐに遅くなるというわけではありませんが、また決まりましたらご連絡させて頂きます。
私の勝手な都合で更新速度が落ちてしまい、本当に申し訳ありませんｍ（＿＿）ｍ

Ｍｅｍｏｒｙ；３４　頑張ったご褒美

「「スターライトーーーーッ！！　ブレイカーーーーッ！！！」」

桃色と橙色の光の奔流。

膨大な魔力の塊同士の衝突は、陸戦場の中心部をさながら最終戦争のごとく演出し、その圧倒的な迫力を際立たせていた。

レイヤー建物の大半は吹き飛び、瓦礫の山に早変わりしていく…。

――――そして

光が徐々に弱まり、魔力の奔流が薄くなっていくと共に、周囲へのダメージ判定はその脅威を弱わめていく。

この集束砲同士の衝突によって、一体誰が生き残り、誰が撃墜されたのか……。その結果は、魔力の光と破壊された建物の土煙が晴れていくと共に、徐々に明らかになっていった。

赤組のフェイトは、ＳＬＢ着弾の直前、エリオの攻撃によって撃墜され、そのエリオもティアナのＳＬＢによってＨＰを根こそぎ持って行かれ、撃墜・戦闘不能になっていた。

『大丈夫ですか、マスター？』

「な、なんとか～……」

赤組コロナは、ゴライアスを防御に回すも、なのはのＳＬＢの威力を防ぎきれずＨＰを３０を残したものの、回復担当のキャロがすでに撃墜されているため、復帰は不可（ＨＰが１００未満の場合、戦線に復帰できないため）。惜しくも撃墜ということになった。

「あ～ん！！　や～ら～れ～た～！！」

そして、ＳＬＢの出所の一人、なのははティアナのＳＬＢ・ＰＨを相殺しきれずにＨＰがゼロに、あえなく撃墜となった。

ここまでで、フェイト・エリオ・コロナ・なのは・リオ・ルーテシア・キャロの戦線離脱が確認できる。
果たして、残りの五人は……。

「な、なんとか……生き残った……」

ＳＬＢ・ＰＨでなのはのＳＬＢをなんとか相殺できたティアナが、土煙舞うフィールドにその姿を現した。
しかし、残りＨＰは１１０と僅か。一撃でも食らえば即撃墜である。

ティアナは、周囲の状況、生き残りを確認するため周囲をスキャン。
目の前に現れたホロウィンドウに、生存者が光点として表示された。

その数、ティアナ自身を含め三人。

「残ってるのは、あたしと……あと二人…？」

３つの光点、ホロウィンドウの中心で光っているのがティアナだ。
そして、よく見ると他の光点の一つが、猛スピードでこちらに向かってきているではないか。

「近づいてくる…！！　この速度…スバル！？」

「じゃなくて、ヴィヴィオです！！」

「うそぉ！！？　何でほぼ無傷！！？」

ティアナに向かって猛然と突進してくるのは、ＨＰがほとんで減っていないヴィヴィオ。ＳＬＢによるダメージ判定はかなり広範囲だったのにも拘わらず、ヴィヴィオのＨＰは１８００。

さすがのティアナも、自分の雀の涙ほどの残りＨＰを見て、ヴィヴィオの追撃に焦りを隠せない。

「えへへっ！　見たか、特救魂（レスキューだましい）！！」

「あーくそ！　やられた」

ヴィヴィオのＨＰがほぼ無傷だったのは、スバルの身を張ってのレスキューという実に単純なからくりだった。まぁ、その単純さがベストな結果を生み出したわけなのだが。
スバルによってＨＰを温存することが出来たヴィヴィオは、ＳＬＢ着弾後にノーヴェを撃墜し、残ったティアナの殲滅に掛かってきたというわけだ。

「このっ！！」

ティアナは、猛スピードでこちらに向かってくるヴィヴィオに、クロスミラージュで迎撃するが、ヴィヴィオはそれをことごとく回避、ティアナとの距離を一気に詰めてくる。

「ティアナさん、行きます！！」

「来なくて……いいけどっ！！」

ヴィヴィオの間合いに、ティアナが捉えられる。
ティアナの残りのＨＰでは、一発もらった時点でゲームオーバーだ。
ヴィヴィオが攻撃態勢に入り、ティアナはそれを迎撃しようとする。

だが、そこに、ヴィヴィオの攻撃に割り込む形で……

――――覇王空破断（仮）

「うあぁぁ！！？」

生き残りのもう一人、アインハルトが先ほどなのははになった新技に、仮の名前を付け、ヴィヴィオに攻撃を放ってきた。
その攻撃をモロに食らったヴィヴィオは、綺麗に吹き飛ばされ、地面を転がる。

「ヴィヴィオさん！　ティアナさんはやらせません」

ティアナの危機を救ったアインハルトは、悠然とヴィヴィオの前に立つ。
クールビューティ、そして短めなスカートが悩ましい覇王っ子……
今の姿は成熟した大人な女性のそれだが、この時の彼女はいつにも増してかっこ良かった。

のだが……

「ご、ごめん……アインハルト。　さっきのでもうやられちゃった…」

「えぇっ！？」

かっこ良くティアナを助けたと思われたアインハルトだったのだが……実は、覇王空破断（仮）食らったヴィヴィオが、その機に乗じて単発のソニックシューターをティアナに向かって撃っていたのだ。

軽い一撃ではあったが、ティアナの残り少ないＨＰを削りとるのには十分すぎる。

結果として、ティアナは撃墜。フィールド上の生存者は、奇しくもアインハルトとヴィヴィオのみという状況になったわけだ。

となれば、今後のゲーム展開は１つだけ。

アインハルトとヴィヴィオのガチンコだけだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

アインハルトｖｉｅｗ

ティアナさんがやられてしまった以上……両チームの生き残りは私とヴィヴィさんのみ。

でも、さっきの攻撃の瞬間にティアナさんにソニックシューターを決めてくる辺り、やっぱりヴィヴィオさんは……

「ヴィヴィオさん、私たちが最後の二人のようです」

「はい！　行きますよ、アインハルトさん！！」

私とヴィヴィオさん、すでに戦える人は私たちしか居ない。どちらが勝つかで、チームとしての勝敗も決まってしまう。

でも、不思議とプレッシャーはない。ただ、目の前のヴィヴィオさんと、全力で向き合って、全力で撃ちあいたい……！

ダッ！！

私とヴィヴィオさんは、構えた状態から同時に動き出す。
このチーム戦も含めて、ヴィヴィオさんと立ち会う回数もかなり多くなってきた。
そこから、私が感じたヴィヴィオさんの才能、そして戦闘スタイル。

「（相手の攻撃を覚えて学習する対策能力。速くて精密な動作……）」

私の放った拳を、ヴィヴィオさんはさっき撃ち合った時よりも、段違いに速い反応を見せてガード。そして、そこから素早く攻撃に転身。
そこから、鋭いカウンターを放ってくる。

「（何より、相手の攻撃を恐れずに、前に出て打ち込める勇気！）」

ヴィヴィオさんも私も、徐々に防御よりも攻撃に比重が傾いていく。
傍から見れば、乱打戦にも見えるかもしれない。
クリーンヒットだけは避けて、ヴィヴィオさんの隙を誘うように戦闘を持って行こうとする……けど、やっぱりヴィヴィオさんの反応は、時間と共にその正確さを増していくようだ。

「（それらが重なって出来上がる、この子の戦闘形態（ファイトスタイル）……）」

やっぱりそうだ……。
これがヴィヴィオさんの才能、そして……ヴィヴィオさんにとってのストライクアーツ！

「（カウンターヒッター！）」

ガコォン！！

その瞬間、私の攻撃を紙一重で交わしたヴィヴィオさんが、鋭いカウンターを放ってきた。
今まで見てきた中で、一番鋭いそのカウンター。当然、私には避けることも出来ず、その攻撃をモロに食らってしまい、一瞬体が止まってしまった。

そこに、更にヴィヴィオさんの追撃が入る。

「一閃必中……！！　アクセルスマッシュ！！！」

ゴゥン！！！

重い、とても重い一撃が……私を完全に捉えた。
その攻撃に……私の意識は完全に削ぎ取られる……でも……でも！！

まだ、これで終わりには……しない！！

ズギャアッ！！

「っ！？」

意識を失いながら放った足技。
どうやら、ヴィヴィオさんに届いたらしく……彼女もまた、私同様に意識を失いつつ……地面に倒れ付した……

アインハルトｖｉｅｗ　ｅｎｄ

以下試合結果

アインハルトＨＰ：０

ヴィヴィオＨＰ：０

赤組：行動不能一名、撃墜五名

青組：行動不能一名、撃墜五名

試合時間：１９分３５秒

結果：全員戦闘不能につき、【引き分け】

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ホムラｖｉｅｗ

「それでは皆さん」

「「「「「お疲れさまでしたーっ！！」」」」」

高町教導官の掛け声と共に、さっきの模擬戦に参加した全員が揃ってそう声を上げた。

結果は引き分けという、試合の内容を知らない人からは『微妙』と

いう一言を引き出してしまうかもしれないが、実際はそんな事は全くなく、内容の濃い、見ているだけでも勉強になる接戦だった。
引き分けという結果が妥当とも言えるレベルだったのだ。

僕は、何故か途中からの記憶がない。
アインハルトの戦闘を見ていたことは覚えているのだが、何故か…ハラオウン執務官と高町教導官、エリオさんの映像が頭の片隅に、砂嵐の掛かったような状態で残っているのが最後だ。

よく分からないのだが、どうやら僕がきをうしなっていたらしく、クゥとメガーヌさんに介抱してもらってしまったらしい。うぅ、また迷惑をかけてしまった……。

だがわからない。
なぜ、気を失っただけなのに、クゥとメガーヌさんは輸血用パックや、小型のＡＥＤなどを手にしていたのだろうか……？
う～ん……謎だ……。

「クゥちゃん♪　私頑張ってたでしょ～？　どうだった？見ててくれたよね？」

「ま、まぁ、頑張ったほうなんじゃないの？　ゴーレム操作ももの凄くうまかったし……」

「ホント…！？」

クゥはコロナに戦闘の内容について感想を求められていて、顔を真

っ赤にしながらもしっかりと答えていた。
クゥが褒めてくれたのが嬉しかったのか、コロナは瞳を輝かせながら、彼に尋ね返す。

「う、うん……。で、でも!!　俺なら皆まとめてぶっ飛ばせるんだからね!!　俺のほうがコロナ姉ちゃんよりも強いんだからな!!　……コロナ姉ちゃんよりも強くなきゃ……守れないし…（ボソッ）」

「え？　ごめん、最後のほう聞こえなかったんだけど……」

「な、何でもない!!　フンッ!!」

う〜ん……クゥって俗にいうツンデレを地で行ってる感じだなぁ……。コロナもコロナで、クゥに対して凄く気持ちをオープンにしてるし……。
二人とも、あんなに仲良いなら、そういう関係にならないのかな…？　ふむ……これが鈍感ってやつなのか……？
全く、まだまだ二人も子供なんだなぁ。

あれ？　何でだろう……？
どこかから、『お前が言うな!!』って言われた気がする……。

「グスン……畜生……俺ってやつは……俺ってやつは……なんてダメな奴なんだ……。あのシーンを見逃すとか、完全に駄目じゃん、世界ダメ野郎コンテストで楽勝でトップ取れるレベルだよ…

……。クソゥ……」

そして、隅のほうでどんよりとした空気と共に、地面にのの字を書きながらイジケまくっている師匠。
一体何があったのか不明だが（思い出そうとすると、頭痛が…）、どうやら師匠を落ち込ませるほどの何か大きな事があったのだろう。
僕が気を失っている間、ホント何があったんだ……？　思い出しちゃいけないって、本能が言ってるような気がするから、深くは考えないようにしよう。

「ホムラさん、ホムラさん！！　私のストライクアーツ、どうでした！？」

「あぁ、ヴィヴィオ。うん、カウンターのキレとか、最後の一発……えっと、アクセルスマッシュだっけ？　凄く良かったと思うよ。頑張って訓練した甲斐あったね」

「っ！　ありがとうございます♪」

皆の様子を見ていると、ヴィヴィオが元気いっぱいの様子で、僕にそう尋ねてくる。
最後の方の試合内容は、映像で確認したのだけど、本当にいい勝負だった。
在り来りな言葉かもしれないけど、素直に言葉として出てくるのは、凄いの一言だったほどに。

ヴィヴィオの負けん気、前に踏み込んでいく勇気、それらが上手く咬み合って生まれた戦闘スタイルなんだろうけど、こういうのを才能っていうのかな。
いや、ヴィヴィオはそんなものを気にしないくらいに、一生懸命訓練してきたんだろうな……。努力家なんだ、この子は…。

「あ……」

気がつけば、僕はヴィヴィオの頭をそっと撫でていた。大人モードの場合は、僕よりも身長が高くなってしまうので出来ないが、今のヴィヴィオは小さいので、ユキナにやっていたように自然な流れで頭を撫でてしまった。

そんな僕のいきなりの行動に、ヴィヴィオは一瞬驚いたような顔をしたけど、直ぐにパッと花が咲いたような笑顔を浮かべてくれた。

「あ……ごめん……。妹にやってた流れで……つい……」

「いえ……嬉しいです、こうやって頭撫でてもらえるの……何だかホッとしちゃって……♪　えへへ……頑張ったご褒美みたいで……」

よかった……。
いきなりで嫌がられると思ったけど、そんな事はなかったみたいで……。

でも、僕も僕だな……ヴィヴィオがユキナに被って見えちゃうんだ

よなぁ……性格はあんまり似てないんだけど……。でも、どっちも可愛いしね……シスコンではないと、改めて言っておこう…。

「ヴィヴィオ～！！　ちょっとこっちに来てくれるかなぁ～！！？」

「あ、なのはママが呼んでる…私、行きますね？」

「うん」

「あの……頭撫でてもらって、ありがとうございました。その……よかったらまた……」

高町教導官の声に、ヴィヴィオは声のする方に半身を向けながら、少し頬に赤みを帯びた状態でポツリとそう呟く。
突発的にやってしまったことではあるが、ヴィヴィオは頭を撫でられるのが好きらしい。

うん、ヴィヴィオが良いなら……僕も別に断る理由はないかな。

「また、頑張った時には……って事でいいんだよね？」

「はい！　それじゃあ、ホムラさん、またあとで♪」

「あんまり走って、転ばないようにね～！」

僕の答えを待っていたようで、ヴィヴィオは本当に嬉しそうにしな

がら、飛んで行きそうな勢いで高町教導官の元に走って行ってしまった。
あそこまで嬉しそうにされるとは……ヴィヴィオはよっぽど頭を撫でられるのが好きなんだろう。きっと、高町教導官やハラオウン執務官にも、褒めてもらう時は目一杯撫でてもらったりとか……。
ちょっと羨ましい……。

「……ジィ」

「はっ!?　……って、アインハルト……ビックリさせないでよ……」

と、その時。
僕の後ろから、もの凄く冷たい視線を感じたので、慌ててそっちに視線を向けてみると……案の定、ものすごぉ～く冷たい視線をこっちに向けたアインハルトの姿があった。

え?　なに……?　何だか、もの凄く怒ってるっていうか、拗ねてるっていうか……ご機嫌斜めっていうか……。

僕、何かしましたでしょうか……?

「コホン!　あ、あのですね、ホムラさん?」

「は、はい!」

「な、何でそんなに身構えるんですか…？」

「いや、体が勝手に……」

白い目線で、『私、拗ねてます』と目で訴えていたアインハルト。
その彼女が、スゥっと表情を変えて、何か恥ずかしいことを頼むときのような顔をしつつ、僕に何かを伝えようとする。

思わず、体がビクッとなってしまったのは、今朝の『空中観光～覇王断空拳に揺られて～　ツアー』での事が体に残っているからだろうか？

「えぇとですね…？　その、試合はしっかりと見てましたよね？」

「うん、そりゃまぁ……」

あんな凄い模擬戦、しっかりとこの目に焼き付けておきたいくらいだ。
学ぶべき点、新しい発見も多々あった。

それは、アインハルトも分かってると思うけど……。

ま、まさか！？
ぼ、僕が……アインハルトのスカートの中……スパッツだけど、それを見たとかで怒ってるとか…？　いや、確かに興味がないわけじゃないけど、そんなに凝視したりはしてないよ……？

「ホムラさん？　何でそんなに震えているんですか？」

「いいいい、いやなんでも！！？　うん、見てないからね？　見たって言っても本当にチラッとだからね？！　二秒くらいしか見てないからね！！？」

「はい…？」

あぁ、駄目だ駄目だ！！
こんなに慌てちゃ、アインハルトに怪しまれちゃうじゃないか！！
うぅ……どうしよう……アインハルトの白い目が怖い……。

「その……ヴィヴィオさん同様……私も頑張ったわけですよ……」

「あ、うん…？　それは分かってるけど……？」

あれ？　スパッツのことじゃない……？
ということは……別にスカートの中を、『故意ではないにせよ』見てしまった僕へのお仕置き……とかではないのかな……？

でも、それならアインハルトは一体何を……？

「だからその……頑張って、自分の力の精一杯を出して、戦ったんですよ？」

「うん……？　そう……だね？」

「……」

「……」

そのまま、数秒見つめ合ってしまう僕達。

分からん、アインハルトは、何を言いたいんだ……？

と、そう僕が頭を捻っていると、何やら『もう我慢ならんという表情』になったアインハルトが、捲し立てるようにこう言ってきた。

「～～～～っ！！！　だから、私も……！　頭……を……にゃでて……欲しい……です……！！」

「へ？　撫でる……頭を……？」

猫語になってしまっていたけど、その言葉の意味するところは理解できた。

要するに……試合で頑張ったから、頭を撫でて欲しいってこと……？　ヴィヴィオと同じように……？

「えぇ！？」

「にゃ、にゃんでそんにゃに驚くんですかぁ…！？」

「だ、だって……！　アインハルトって……そういうのあんまり、やられるの好きじゃなさそうって……思ってたから……意外で……」

アインハルトは、基本的に落ち着いた物腰で、下手な大人よりもずっと落ち着いた性格だ。だからその……ヴィヴィオには悪いが、頭を撫でるといった子供っぽいコミュニケーションの仕方は気に入らないのではと、そう思ってしまっていたのだ。

だってホント、アインハルトって大人っぽいんだもん……。

「別に……嫌いとかではありません……。ホムラさんだから、撫でて欲しいんです……（ボソッ）」

「え？」

「な、何でもないです。と、兎に角……頑張った……そのご褒美というか、賞与というか……頭……撫でてくれませんか……？」

いや、勿論頭を撫でるくらいなんてこと無いし、別に断るような理由もない。

でも、その上目遣いと少し潤んだ綺麗な双眸のツインコンボは、男の子保護法（今考えた）に抵触するのではないかと思える破壊力を秘めているわけで……。

僕は、少しの間アインハルトの…可愛さにボーッとしてしまい、動けなかった。

そこに……

「頭……撫でてくれないんですか……？」

グハァッ！！？

そ、その一言はダメですよ……！　もう、僕の中のライフポイントはゼロ振り切ってマイナスにまで行く勢いだからね？！

目を潤ませて、上目遣い、そこにおねだり口調でそんな事言われたら……！！

なんて言うかその……うん、今の目の前のアインハルトに言葉がでない。

その……もう、どうしようも無いくらいに可愛くて……。

あれ……？　何だか……意識が……？

バッターン！！

「ホムラさん！！？」

「ほ、ホムラ君！！？」

二話連続となる、走馬灯を見ながら薄れ行く意識を感じる。

ていうか、二話連続ってなんだよ…？

僕は、その場に倒れてしまったようで……心配そうなアインハルトの声と表情。

何か意味深な、そして困ったような笑顔を浮かべる高町教導官……。

あぁ、すみません……今……今起きますから……あぁでも……

…また眠いんだ……もの凄く眠いんだ……パト○ッシュ……

ホムラｖｉｅｗ　ｅｎｄ　（二話続けて強制的に）

――余談

「ねぇ…？　ホムラってさ……普段は頭よさそうなのに、妙なところでもの凄く馬鹿になる感じじゃないかしら？」

「あはは……ティア、その表現ストレート過ぎ……否定しないけど……」

目を回しながら倒れ、またしても意識を失ってしまったホムラを蘇生する一同を見ながら、ティアナはそう呟く。

スバルも、変な汗とともにそう言葉を重ねた。

アインハルトのあまりの可愛さに萌死。
ある意味、男の理想とも言える死に方ではあるが、ここで彼に死んでもらってはお話にならないわけで……。

「はぁ……アインハルトも、ホムラ相手じゃ苦労しそうね……」

苦笑しつつティアナがそうつぶやくと同時に……

「あはは♪　ティア、また何だかオバサンくｓ……あだだだ！！？　ごめんにゃしゃい！！　ごめんにゃさい！！　言いません、もう余計なこと言わないから、アイアンクローから解放してぇぇ！！！」

またしてもスバルが余計なことを言って、ティアナの愛のムチ・アイアンクローの刑に処されてしまったのだった。

ちなみに、ホムラは無事に息を吹き返し、その後改めてアインハルトの頭を撫でてあげたそうな。

その時のアインハルトの顔は、いろんな意味で蕩けていたらしいのだが、その表情はまた別の機会でもお目に掛かることだろう。

Ｍｅｍｏｒｙ；３４　頑張ったご褒美（後書き）

Ｆ２０Ｃ「というわけで、アインハルトに萌え殺されたホムホムなのでした」

ホムホム「あ、アインハルト……もう、可愛すぎて……」

閣下「ったく、最近のガキときたら、迫力満点だなおい……その内デキ婚とかしてそうで」

Ｆ２０Ｃ「少なくとも、お前にそれを言う資格はないと思う」

閣下「（；　・、д・´）……」

前書きでも話しましたが、更新速度が落ちてしまうかもしれない件、本当に申し訳ありません。
更新速度の速さくらいしか取り柄のない私の作品なのですが……最近少し時間に追われ気味で、徐々に構成に向ける時間などがなくなってしまって……。
読者の皆様には、重ねてお詫び申し上げます。

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；３５　ブリーフィング《打倒・なのはさんチーム》

ホムホムとアインハルトが《バキューン！》するとき、物語ははじまr

アイホム「「ノクターン行きのお話しか始まらないでしょうが！！？」」

Ｍｅｍｏｒｙ；３５　ブリーフィング《打倒・なのはさんチーム》（前書き）

今月号のコンプエース……表紙がましろ色シンフォニーじゃなイカ！！

愛理ととさなきち……可愛い（　・∀・）イイ！！

ちらっと読んだんですけど、ＤＯＧ　ＤＡＹＳの漫画で我が嫁、ユッキーのお願いシーンがあったわけですが……ハートを撃ちぬかれちまいました。

加えて、ＶｉＶｉｄ最新話……アインハルトがふつくしい……。

でもって、コロナが頑張っていたので心がホンワカとした気持ちに……。

情報をくださった皆々様、本当にありがとうございましたｍ（＿）ｍ

Ｍｅｍｏｒｙ；３５　ブリーフィング《打倒・なのはさんチーム》

オフトレ二日目のイベント、大人子供入り交じっての練習会。
その一回戦目が、引き分けという結果に終わり、陸戦場を再構築、二時間の休憩をはさんだ一行は、再び陸戦場に集合していた。

各自、先ほどの戦闘に参加した者達は体力の回復などはバッチリのようで、その表情に疲れなどはない。
クゥ、ルーク、ホムラの三人は言わずもがなだろう。

「というわけで、今から二回戦をはじめようと思います！」

「「「「はーい！！」」」」

なのはの声に、全員元気に返事をする。皆、一様にやる気に溢れており、見ていても気持ちのいい光景である。

ちなみに、二回戦はホムラ達、一回戦目はお休みだった三人が参加することはすでに決定済みで、一回戦に出ていた者の中から、三人が交代という形になる。
そこから、更にチーム分けをしなければならないわけなのだ。

「で？　どうやってチーム決めんのさ？　一回戦は予め決めてたみたいだけど」

「にゃはは、勿論二回戦の分も考えてあるよ？　それで、ちょっと申し訳ないんだけど……」

ルークが、チーム編成のことをなのはに尋ねると、彼女は答えながらエリオ・スバル・ノーヴェの方に向き直る。

「二回戦はホムラ君とクゥ、ルーク君の出番になるから、スバルとエリオ、ノーヴェに交代してもらいたいんだけど……いいかな？」

ホムラ達三人が一回戦が見学だったように、二回戦は交代という形で、誰かが二回戦から降りる必要がある。
無論、その要請を受けた三人は残念な気持ちもあるが、そこは公平に行かなければならないだろう。ホムラ達も一回戦は我慢していたのだから。

「えぇ、僕は構いませんよ。見学でも勉強になりますし」

「私も右に同じくです♪」

「あたしも。それでいいですよ」

「うん、ありがとう三人共♪」

エリオ、スバル、ノーヴェの順に快く交代要請を受け入れてくれ、

なのははニッコリ笑いながらもう一度お礼を言う。

まぁ、三人としても他の人の戦いっぷりを見ることで、何かしら得られるものはあるだろう。ホムラ達がそうであったように、そこは同じ事である。

「ありがとー、スバル姉ちゃんたち」

「ありがとうございます、代わって頂いて……」

「うむ、大儀である」

「「「……ルーク（さん）だけ、一発殴ってもいいですか？」」」

代わってもらった当人たちの中で、無駄に態度のデカかったルークが、スバル達からシバかれたことは、想像に難くないだろう。

「ということで、二回戦のチーム分けはこんな感じで～す♪」

そして、なのはがレイジングハートに出してもらったホロウィンドウに、二回戦のチーム分け、参戦メンバーを表示する。

一同、どのような組み合わせになっているのかを確かめるため、その表示を一斉に見つめる。

赤組
なのは、キャロ、リオ、ヴィヴィオ、コロナ、フェイト

青組
ルーテシア、クゥ、ティアナ、アインハルト、ホムホム、変t……
ルーク

「ちょっと待って！　ねぇ待って！！？　なんで俺の名前表記こんななの！！？　レイハ姐さんどゆこと！！？」

「う～ん……レイジングハートさんにまで僕の名前が、『ホムホム』って覚えられてるのか……もう諦めたほうがいいかもなぁ……」

ホロウィンドウに表示された各々の名前。一回戦と比べて、多少チームの性格的なバランスは変わっているものの、総合力ではそれなりにいい勝負だろう。

ただ、レイジングハートにまで名前を間違って覚えられているホムラに、真っ先に不名誉な名詞が付きそうになったルークに関しては、それぞれ困ったリアクションを見せていた。

『ホムホムさんに関しては、その方が可愛いからと、マスターが。ルーk……変態様に関しては、日頃の行いとフェイト様に対するセクハラ、セクハラ係数を鑑み……』

「今言い直したよね！！？　明らかに今、正しい名前言おうとして

から言い直したよね！！？　ていうか、セクハラ係数って何？！
エンゲル係数の親戚？」

名前表記の原因、どちらがより不名誉なものなのかは、火を見るより明らか。
というか、可愛さで名前登録しているなのはもなのはだが。

さらに言えば、デバイスであるレイジングハートにさえ、変態扱い……ルークがいつ樹海に姿を消してしまうかが心配でならない。

『それを…ＡＩとは言え女の私に言わせるのですか？　流石は変態様……そこに痺れもしなければ、憧れもしない程の鬼畜っぷりですね』

「ねぇ、これ泣いていいよね！　明らかにフェイトの胸に包まれて泣いていいレベルだよね！！？」

その場にいた全員（フェイトとホムラを除く）「「「「ダメですね」」」」

「ガッデエエエエムウウウ！！！」

レイジングハートからの口撃、そして一糸乱れぬ周囲からの連携攻撃。
さしものルークも、これには参ってしまったようで、またしても隅っこのほうでイジケテしまった。
最近、ルークのキャラの立ち位置というものがかなり危ういものに

なってきたような気もする。

「俺なんて……俺なんて……へへへ、どうせ俺は一作目の主人公で、今作ではサブキャラなんですよーだ……今、人気投票とかしたら、12位とかその辺にノミネートされて、一位はホムホムとかアインハルトでワンツーフィニッシュなんですね、分かりますよ～だ……（イジイジ以下エンドレス）」

だが、こんなアホな元主人公にも、優しく手を差し伸べてくる奴がいる。

荒んだ世の中にあって、他人のことを気に掛ける事が多いやつほど、損をすることがあるが、それはいずれ巡り巡って何らかの形で帰ってくるものだ。

まぁ、そういう人種ほど、自分にもたらされるメリットに対して無関心過ぎる所があるものなのだが。

「そ、そんな事ないですよ師匠。僕なんて、まだまだ新米のペーペーですから。それに……ほら、師匠にも良いところいっぱいありますよ！」

「ホムラ、あんたどんだけ気ぃ使いなのよ……」

「良い子なんだよね、単純に……」

そう、海よりも深く、空よりも広い心の持ち主である、ホムホムだ。

彼の場合、単に気の回し過ぎというか、気を使い過ぎているというか……。兎も角、ティアナやフェイトが言うように、良い子ではあるものの、お人好しと呼ばれるべき人種なのだろう。

「良いところって……例えば？」

「え……えっと……一晩考えさせてもらっていいですか？」

「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！」

が、行き当たりばったりな、というか無計画な慰めは、逆に相手の傷に塩を塗りこむ行為に等しいわけで。

結果として、ホムラはルークに止めをさしてしまう形になったわけだった。

「と、とりあえず、今からチームごとに分かれてブリーフィングだよ！　１０分後に、模擬戦を開始します！」

「「「はい！！」」」

一悶着あったものの、一行はなのはの声と同時にチームごとに分かれて、模擬戦へ向けての作戦会議に移ることになった。

ルークは……ちょっと半泣きだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【ホムラ視点】

「っしゃあ！！！　というわけで、目指せ・打倒なのはさんチーム！！　作戦名、オペレーション【昨日の友は今日の敵、でもやっぱり友達だから、明日の朝からはまたいつも通りに笑っておはようを言いたい】に関するブリーフィングを始める！！」

「師匠、いつの間にか復活しましたね」

「回復速度には目を見張るものがあります……」

「ただ単にバカなだけだと思うんだけどね」

僕、アインハルト、ティアナ、クゥ、ルーテシア、変t…師匠で構成されている青組一同は、自軍の陣地というか適当な場所に集まっただけなんだけど、そこで今回の戦闘における作戦会議を始めることにした。

ちなみに、アインハルトはすでに大人モードになっている…………綺麗だ…。

作戦名を、速くも復活した師匠が提示すると、僕とアインハルトは乾いた笑いを浮かべながら、ティアナさんは呆れながらそれぞれ呟

いた。

「で、まず第一になんだが……二回戦目は少し趣向が変わってくるらしい」

「というと……？」

「なのはさんの話によると、それぞれのチームの総大将を決めて、どっちかの総大将が討ち取られたらゲームセット。ＨＰ制なのは変わらんが、いくら多く生き残ってても総大将が討ち取られた時点で勝負ありってことだな。総大将は、この赤いカードを体のどこかに忍ばせておくってことらしい」

総大将ルールの追加。師匠が、総大将が持つことになる赤いカードを取り出しながら、説明してくれる。

二戦続けて同じことはしないということか……でも、それならそれで戦略にも工夫が必要になってくる。

さっきと同じようにやっても必ずしもいい結果は出ない。

「加えて、なのはさんやティアナは集束砲とかは使用禁止。まとめてぶっ飛ばす戦法も使えないってことになってる」

「まぁ、その辺は当たり前かもね。総大将が誰なのか、それを探り当てるのも試合の目的の内だし、逆に誰が総大将なのかを隠すことや、相手に誤認させるっていうのも戦略の内に入ってくる」

「そゆこと。両チームの総大将が誰なのかは明かされないってこと

になってるからな」

師匠の言葉に、ティアナさんはその言葉の裏にある意味までを読み取って、先回り気味にそう言う。師匠もその言葉を肯定した。

相手チームの誰を倒せば勝ちなのか、この二回戦はそれが重要になってくる。

まぁ、一人ひとり潰していけばいずれ答えにたどり着くのだけど、恐らく高町教導官率いる赤組は、そんな大雑把な作戦は許してくれるとは思えない。

僕達、青組がそうなように。

総大将を誰か分からないようにして守りつつ、相手の総大将が誰かを探り当て、撃墜する。

「なかなかに、一筋縄では行きそうにない戦いですね」

「向こうには、なのはさん&フェイトさんの親友コンビがいるし……これはキツイ戦いになりそう」

「あぁ、でもやるからには勝つ、なのはさんチームの総大将を討ち取って、ドヤ顔してやろうじゃないか」

「あはは……」

アインハルトとルーテシアさんの言う通り、確かに一筋縄では行き

そうにない。
師匠も、冗談めかしてはいるけれどその辺りのことは重々理解しているはず。

相手は、エースオブエースの高町教導官に、ハラオウン執務官のコンビ。召喚魔法と支援魔法に長けたキャロさん。リオ・コロナ・ヴィヴィオの仲良し三人娘と、かなり強力な布陣だし。

「で、作戦はどうするの？」

「あぁ、まずは俺の案なんだけど……」

クゥの言葉に、作戦会議らしく師匠が分かりやすく、二回戦の作戦を口頭で説明していく。
作戦の基礎になるのは、さっきも言ったかもだけど『こっちの総大将が誰かを隠し、誤魔化しながら、相手の総大将を探し当て撃墜する』、これが作戦の基礎部分になってくる。

騙し騙される、心理戦や駆け引きなども要求されるだろう。そこに加えて、相手戦力を削ぎ落とすための戦闘。
かなり忙しく、難易度が高い。こんなの、局の訓練でもやったことがない。

「ってな感じが、大まかな作戦」

「そうね、そこまでは私も賛成。そこに、幻術とかも組み合わせていけば」

「うん、ティアナの得意分野だし、その辺は任せたよ。クゥとホムホム、アインハルトは基本的に攻めて攻めて、相手の戦力を削るのと、総大将を撃墜することだけを考えてくれ。ルーテシアは、三人の後方で支援。俺とティアナで、総大将を探しながら、敵チームを撹乱させる」

幻術か……ティアナさんの得意分野なら、こっちのチームにとってはかなりのアドバンテージになるし。これは心強い。

師匠の指示に、僕達は揃って『はい！』と返事ををする。僕とクゥ、アインハルトの役目はサッカーで言うフォワードってところかな。でも、高町教導官のチーム相手なら自分の力がどこまで通用するのか……試す良い機会かもしれない。

「フォワード陣はの攻め方は、三人に任せる。自分達で考えて、ベストな結果を出すように心がけてくれ。ただし、深追いと油断だけは注意な？」

「「「はい！」」」

こういう時の師匠は、本当に頼りになる人だなぁ……たまに変にならなければ、もっといいんだけど……。

そこから、相手チームのメンバーのそれぞれの特徴や注意点などなど、ブリーフィングは滞り無く進んだ。

ただ、高町教導官やハラオウン執務官クラスになると、弱点とかが

分かっていてもそこに付け入るだけの力が僕達にあるかは少し怪しいところ。
慎重且つ、大胆に………矛盾してるかもしれないけど、そこはしっかり見極めて行かないと。

「でだ……これが一番重要………総大将の証である赤いカードを誰が持つかなんだけど………」

そして最後に、僕達青組の総大将を決めて、ブリーフィングは恙無く終了した。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

10分後……

「それじゃあ、ルール説明は以上！　では両チームとも一度解散、試合開始の合図を自軍の陣営で待ってください」

一同「「「はい！！！」」」

両チームは一度フィールドの中央に集合して、改めて今回の二回戦、追加された総大将ルールなどに関する概要を高町教導官から聞き、

お互いに礼をした後、再びフィールドの両サイドに移動。
戦闘開始の合図を待つことになった。

「……よし」

「???　師匠？」

「何でもない。さ、行くぞ」

両チームの顔合わせの時、師匠はそう呟いてから、自軍の陣営に戻っていった。
一体なんだろう……？

「ホムラさん」

「うん？」

青組の陣営に戻って、シラヌイの様子とかを確認していると、大人モードのアインハルトが声を掛けてきた。……綺麗だ…。

っと、そうじゃなくて…う～ん……どうにも僕は、大人モードのアインハルトに目を奪われやすい。それだけ、アインハルトが綺麗なんだってことなんだろうけど……。

「あの……一緒のチーム……ですね……？」

「うん……そう……だね……」

表情の変化は少ないけど、今のアインハルトには少し……照れのような感情が見られた。頬も少し赤くなっているし、それが彼女の美しさと相まって……もの凄く可愛い……。

あぁ、まずい……心臓の音が早くなってきた……。

同じチームだということを言い合っただけなのに……何でこんなにこそばゆいんだ……。

「……」

「……」

そして、何故か見つめ合ってしまう僕達。

今は、アインハルトの方が、僕よりも少し身長が高いので、僕が見上げるような形になってしまっているけど……アインハルトの透き通った瞳に、自然と目を奪われそうになる。

それくらい、本当にアインハルトは綺麗だった。

今のアインハルトはその……どこかお姉さんっぽい雰囲気があって……うん、僕の理想の女性像そのものなわけで……。

あれ？　僕って実は……年上好きだったりするの……？

「あの！」

「あのさ…」

僕の女性の好みはソこそそこにして、ものの見事にハモってしまう僕達。少し気恥ずかしいが、悪くない。

アインハルトも、少し困ったような顔をしたけど、すぐに穏やかそれに戻る。

何でだろうか…？　今、アインハルトが何を言おうとしてるのか分かる気がする。

そのまま僕達は、また同時に口を開いて……。

「絶対勝とうね！」

「絶対勝ちましょう！」

気のせいじゃなかった。確かに、同じ事を考えていたんだ。

それが、なんだか……猛烈に嬉しい。　体の底から、いくらでも力が湧いてくるみたいに。今すぐにでも、動き回りたいくらいだ。

やっぱり、アインハルトが一緒なら……どんなことだって出来る気がする。

「……ホムラさんを見下ろせるのって……何だか良いです……」

「ｏｒｚ」

でもやっぱり、身長は早めに伸びて欲しい。
そう切実に願わざるを得ない僕だった。

ホムラｖｉｅｗ　ｅｎｄ

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

見つめ合ったまま、まるで以心伝心な二人、アインハルトとホムラ。
二人は自分達の事で一杯だったのだが……当然、周囲の人間は彼らを見ているわけで……

「あの二人、ま～たナチュラルにイチャついてるよ……」

「ま、仕方ないんじゃないの？　あの二人、自然と惹かれ合ってる感じだし。磁石みたいなイメージね」

クゥとティアナは、アイホム二人のイチャイチャ空間を傍から見せ付けられ、少し胸焼けを覚え始めていたが、試合開始までの辛抱と

何か口を出したりはしなかった。

というか、今の二人には声が届かないことを理解していたのか、諦めていたと言ったほうが良いかもしれない。

「あんたは残念だったわね？　愛しのコロナお姉ちゃんと別チームになっちゃって？」

「べ、別に！！　そんな事無いし！！　残念じゃないし！！」

「はぁ～……ま～たそんなにツンツンして……誰に似たんだか」

ティアナさん、あなたです。

とは、口が裂けても言えないので、ここは読者様の胸の内に閉まっておいていただきたい。

子は親の背中を見て育つ……つまりはそういう事です。

「でも、コロナを守っていいトコ見せたかったんじゃないの？」

「あぐっ…！　そそそそそ、そんな訳無いじゃん！　このクールで鰡背なナイスガイな俺が、そんな打算的な考えを……」

「今日の朝、トイレでシミュレーションしてたわよね？　ピンチの女の子を助ける時のカッコイイポーズと決め台詞。丸聞こえだったわよ？」

「……」

このクゥという少年。

クールで鯔背なナイスガイになれるのは一体いつのことになるのか……？　正直、望み薄なようにも見えるが、子供の可能性を潰してやるようなことは言ってやらないのが大人の優しさというものだ。

「まぁ…その……あれよ……正直、『大丈夫かな？　子猫ちゃん☆』はセンスゼロ＆前時代過ぎるってことは、覚えときなさい」

「ふえぇぇぇぇぇぇん！！！　。　。（ ゜、゜Д゜、　゜）　゜。　お母さんのバカァァァァァ！！！」

クゥは半泣き（確実に大泣きしていたが、彼の名誉のために）になりながら、ティアナをポカポカと叩いていた。

そんな可愛らしいやり取りもそこそこに……

大人子供入り交じっての模擬戦、パート2がその幕を開けようとしていたのだった。

Ｍｅｍｏｒｙ；３５　ブリーフィング《打倒・なのはさんチーム》（後書き）

Ｆ２０Ｃ「というわけで、珍しくオチがクゥでしたでござるの巻」

アインハルト「クゥさんなりに、頑張ってたみたいですね」

ホムホム「微笑ましいね……」

Ｆ２０Ｃ「それを尻目に、イチャイチャと……全く君たちは」

アイホム「「イチャイチャなんてしてませんよ？　普通に話してただけで」」（真顔）

Ｆ２０Ｃ「駄目だこいつら…速く何とかしないと…」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；３６　猛攻！デコボコトリオ

クゥ「大丈夫かな？　子猫ちゃん？」

コロナ「お持ち帰りしてください……ポッ」

クゥ「な～んだ、やっぱこれイケてるんじゃん」

Ｆ２０Ｃ「いや、多分違うと思う」

Ｍｅｍｏｒｙ；３６　猛攻！デコボコトリオ！（前書き）

凸と凹って、何だかエロいですよね……すみません、ちょっと言ってみただけです。

凸は幼稚園からの幼馴染である凹に、最近自分でもよく分からない気持ちを感じ始めていた。彼女を見る度、何故か心がざわめき、心臓の鼓動が加速する。

そんなある日、閣下が原因のトラブルで、凸と凹は体育館倉庫に閉じ込められてしまう。当然、凸は最近気になる凹と密室で二人きりということで、終始緊張しっぱなし。

駄菓子菓子、自分と同じ思いを、凹も抱いていようとは彼も考えていなかった。

そして、凹の口から放たれた衝撃の一言。それが、二人の関係を更に接近させる。

凹『あなたと、合体したい』

続きは劇場にて……

Ｍｅｍｏｒｙ；３６　猛攻！デコボコトリオ！

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【二回戦ルール説明】

その一：両チームとも、総大将を選出し、証として赤いカードを持たせること。

その二：総大将が撃墜された時点で、撃墜した方のチームの勝利。

その三：総大将の途中交代は不可。赤いカードを、他のチームメイトに譲渡してはいけない。

その四：今回に限り、敵がどこにいるか・敵の現在位置などはモニターできない。センサーにも反応しない。

その五：ただし、味方陣営内に敵勢力が侵入した場合はその限りではなく、誰がどこにいるのかがモニター可能となる。

その六：一度でも遭遇、または交戦した相手は、無条件で現在地がリアルタイムで捕捉可能になる。

その七：集束砲、並びに広域砲撃魔法などは使用禁止。

その八：フルバック以外のメンバーの最大ＨＰは３０００で固定。フルバックは２０００。

その九：アインハルトはスパッツの着用を義務化（ｂｙ　ホムホム）

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【アインハルト視点】

ジャアァァァァァァン！！！

と、けたたましい音を響かせる、どこかの世界のドラムのような道具。

その音と共に、模擬戦・パート2の火蓋が切って落とされた。

一回戦とは、チーム構成もルールも、フィールドの構築物も少し違っており、さっきと同じという所がほとんど見当たらない。

それになにより……

「よし、それじゃあ二人共。Ｂ地点までは、一気に行くよ？　途中でどんなトラップや奇襲があるか分かんないから、その辺りは気を配っていこう」

「はい！」

「合点承知♪」

私、そしてクゥさんに簡単に指示を出して、敵陣に向かおうというホムラさん。
そう、今回の模擬戦では彼と同じチームで戦う。
なんだろう……？　もの凄く心強くて……心がホッとする。それに、力がどんどん湧いてくるような……。兎に角、今回の私はさっきに比べても絶好調だった。

「何だか、敵地に潜り込んだエージェントみたいで面白いね♪」

「あはは……まぁ、似たようなもんだけどね」

クゥさんは、さっきの戦闘とは全く雰囲気と性格が違う、この二回目の模擬戦をそれなりに楽しんでいるみたいだ。

一度目の模擬戦は、かなり派手さが目立つもの。戦略的な要素も奥が深いと感じたけど、今回のは、よりスマートさが求められている様に思えた。
総大将を探し出して、撃墜する。そこには、総大将を隠したり、誰か分からなくしたりと、駆け引きや心理戦のようなものも入ってくる。

その辺りのことを含めて考えると、一回戦と二回戦は、まるで毛色が違う。

「それにしても……俺はともかくとして……ホムラ兄ちゃん、アインハルト姉ちゃんに身長負けちゃってるね？」

「うっ……」

移動しながら、クゥさんはにこやかに、ホムラさんの今触れて欲しくない話題にズバリと食い込んできた。

彼の言うとおり、今の私は武装形態……ヴィヴィオさんたちの言う所の【大人モード】という状態にあり、体が大きくなっている。

１２歳ということで、ホムラさんの身長も普段は私と同じくらいなのだが、今は完全に私のほうが上だ。

ホムラさんはそれをかなり気にしているようで、クゥさんの何気ない言葉に若干表情をしかめた。

「うぅ……僕も、大人モードとかしてみようかな……？」

「ってことは……兄ちゃんが大人っぽく成長するってことだよね……？　う～ん……」

二人の話を、傍で聞きながら思わず想像してしまいます。

大人モードのホムラさん……。身長は私より高く、体格も痩せ気味ながらしっかりしている。

優しげな顔にも、少し鋭さが見えてきて……

はぅ！？　め、めちゃめちゃカッコイイじゃないですか……！！

「大人モードってどうやってなれるんだろ？」

「その辺のことは、俺も知んない。あとでヴィヴィオ姉ちゃんたちに聞いてみれば？」

「だだ、ダメです！！」

「「へ？」」

と、私は思わず二人のお話をキャンセルしてしまった。ホムラさんの大人モード……想像してみたけど、これはかなりの高威力。

妄想の中だけにせよ、あのカッコイイ大人ホムラさんに……言い寄られでもしたら……間違いなく堕ちてしまいそうです。

「ほ、ホムラさんが……い、いきなりかっこ良くなってしまったら、私がどうしていいか分かりません…！　ですからその……ゆっくり成長して行ってください」

「は、はい……？……うぅ…しばらくはアインハルトに見下ろされる日々が続くのか……」

「ホムラ兄ちゃん……なんて言えばいいのか分かんないけど……取り敢えずドンマイ。今日のところは、デコボコトリオになっちゃうけど頑張ろうよ」

「うん……」

あ、あれ…？　何だかホムラさんがもの凄く落ち込んで……？
それにクゥさん……デコボコトリオってもしかして、三人の身長がバラバラだからデコボコってことなんでしょうか……？

なんというか、もうちょっとカッコイイというか響きの良いネーミングはなかったんですか…？

そのまま、隠密行動とでも言えばいいのか、一回戦の時とは打って変わって、慎重に敵陣地に接近する私達。
二回戦は、新ルールの性格上、先ほどと同じように馬鹿正直に突っ込んでいってもいい結果は得られない。最大の目標は、総大将を撃破することで敵を全滅させることではない。もちろん、削れるのであれば敵戦力を無力化するのも仕事の内だけれど。

加えて、相手側からもいつ先方が飛び出してくるか分からないし、トラップの可能性も考えられる。
周囲を警戒しつつ、目標としているポイントまで進むことが、今現在最も大事なこと。

「フンフ～ン…♪」

と、言ってはみたものの、クゥさんは鼻歌交じりで、スバルさんと同じようなローラーシューズ型のデバイスで地面を滑るように走っている。

あれが、クゥさんのデバイス…【エウロス】……一体どんな性能を秘めているんでしょう…？

「さて…と……この辺……かな？」

「B地点……敵防衛エリア境界線。この先は、多分フェイトさんやなのはさんが待ってるだろうね……罠とか一杯ありそうで、何だかワクワクする♪」

「ですが、見たところ、敵勢力の姿はないようですが……」

第一目標、B地点。敵陣営のテリトリーとの境界線。
ここまでは、予想はしていたけど襲撃、敵との遭遇はなかった。

「ルーテシアさん、味方陣営に敵の反応はありますか？」

『いいえ、無いわね。これは、ますますルークさんとティアナさんの読みが当たってるかも』

ホムラさんが、後方支援を任されているルーテシアさんに、通信越しにそう尋ねると直ぐに返事が返ってくる。
自軍エリア内に敵勢力なし、このことから一つ、ルークさんとティアナさんの読みが当たっていること確定的になった。

「赤組は、守勢に回ったということですね」

「うん。敢えて、自軍エリア内から出ずに、攻めてきた僕達を迎撃する。そのほうが、トラップや待ち伏せが確実にできる。此処から先、一歩でも足を踏み入れれば、多分……」

「なのはさんたちのお城の中ってことだね」

冒頭にあった、ルール四と五。

この二回戦では、敵勢力の現在地、分布などをモニターすることができない。しかし、自軍エリア内に侵入した敵ならば、現在位置をリアルタイムで把握可能になる。

さっきのルーテシアさんからの報告、青組エリア内に敵勢力は侵入していない。ルール四と五から考えると、つまり、相手側からは攻撃部隊が向かってきていない。

ということは、赤組は自軍エリア内で私達青組が攻めてきたところを迎撃する、守りを意識した戦術を選択したと考えられる。

クゥさんの言う通り、このB地点、赤組エリアとの境界線から向こう側は、完全に赤組チームの城ということ。ホムラさんが言うように、待ち伏せやトラップなどで私達の戦力を削りに来るだろう。

「なのはさんが守りに回ったってことは……？」

「そう、僕らが攻めてくるのは予想済みってことだね。腹の探り合いが、試合前から始まってたってことかなぁ……」

ティアナさん達が、攻めの姿勢で来ることは赤組の皆さんに予想されていて、そう予想するだろうと、逆にティアナさんたちも予想していた。
裏の裏の裏を考える。そんな大層なものではないかもしれないけど、クゥさんとホムラさんの言葉通り、試合は始まる前から水面で進んでいたということなんですね…。

「さてと……待ち伏せ・トラップがあるのが分かってても、僕らは突っ込んでいくしか無いわけだけど……二人とも、用意は？」

「いつでもバッチコーイ♪」

「私も、覚悟の上です」

だけど、ここで足を止めていても、膠着状態に陥るだけ。無闇に時間を消費するより、思い切って攻めてみたほうが面白いことになる。乱戦になってくれれば、総大将が誰なのか、それが明るみになる切っ掛けにもなるかもしれない。
相手陣地を引っ掻き回すのも、私達の役目の一部。ここは、思い切って踏み込んでみるのが吉…！

「それじゃあ、行くよ！」

「おー！」

「はい！」

ホムラさんの声と同時に、私達三人は敵地に足を踏み入れた。

それと同時に……

「「「っ？！」」」

その気配に気が付き、私達三人は一斉に散開。

それぞれ、自分達目掛けて飛んできた『桃色の魔力弾の嵐』を躱すべく、回避行動に移る。魔力弾の数、総数１８発。

いきなりトラップ……！　恐らく、敵の侵入を感知することをトリガーにした魔法。それに、この桃色の魔力弾……ヴィヴィオさんのお母様！！

けど…！！

「――――旋衝破！！」

１８発の魔力弾は、私達三人に対し、均等に６発ずつに分かれて格目標を追尾。

魔力弾の総数は多いけど、分散してくれるのなら対処するのは容易い！！

私は、魔力弾を旋衝破で受け止め、そのまま他の二人が被弾しないような方向に投げ飛ばした。レイヤー建物に被弾した魔力弾は、建物を破壊した上で消滅する。

「そいや！」

ゴアッ！！

一方、クゥさんは自分目掛けて飛んできた魔力弾を前に、デバイスを装備した右足を向ける。
そして、そのローラーシューズ型のデバイスを中心に、風が急激に渦巻き始め……小さな台風のようにも見えるものになっていく。

クゥさんは、その小さな台風を向かってくる魔力弾に放ち、そのすべてを撃ち落とした。
凄い……あれは……魔法…？　それとも……？

そんな私の疑問の傍ら、残りの魔力弾６発がホムラさんを襲わんと、猛スピードで彼に迫る。
対して、ホムラさんはレイヤー建物を背にして仁王立ち。
一瞬、回避出来ないと思った私だったけど……どうやら、それは杞憂だったようで。

ババババッ！！！

「ふぅ……」

ホムラさんは、着弾の寸前で縮地で（地面を蹴り叩く音がするので、半縮地だろう）魔力弾を全弾躱し、瞬間移動したように別の場所に現れる。目標をいきなり失った魔力弾は、そのままレイヤー建物にまっしぐら。
またしても瓦礫を生み出しながら、消滅した。

「あはは、今の何？　めっちゃオモロイ！！♪」

「感知式の設置型魔法かな？　ていうか、こんな砲撃有りなんだ……」

「流石は、ヴィヴィオ様のお母様ですね……」

無邪気に先ほどのトラップを面白がるクゥさんに、神妙な顔つきのホムラさん……。あぁ、考えこむホムラさんも素敵で……って、そうじゃなくて。
感知式の魔法に引っ掛かった事に加え、ここは既に敵エリア内。

つまり、私達の位置などは赤組の皆さんに筒抜けということ。恐らく、すぐにでも迎撃部隊が現れるはず。
それも、このトラップだらけのフィールドで。さっきのような設置型魔法が、一回だけとは考えにくいし、当然自軍メンバーには当たらないように、もしくは反応しないように設定されているはずなので、地の利は完全に向こうにある。

「これ、確実にこの先のあちこちに張り巡らされてるだろうけど……」

「どうにか回避しながら行きたいところですね。ですが、ヴィヴィオ様のお母様が簡単に回避できるようなものを設置しているわけがないですし……」

「ふむ……」

クゥさんに同意しながら、ホムラさんに何か案があるかと視線を向けてみると、彼は少し考えるように周囲一帯を見渡す。

ついさっきの一回戦でみた、捕縛盾の時もそうだったけど、全くと言っていいほど魔法発動に際する予兆だとか、見分けがつかないくらい洗練されているヴィヴィオ様のお母様の魔法技術から考えるに、罠を一つ一つを判別して進むのは至難の業だろう。

「一つ閃いたアイデアがあるには在るんだけど……」

「「だけど？」」

「その前に、敵さんのほうが来ちゃったみたい」

アイデアがあるといったホムラだったが、続けた彼の言葉に私とクゥさんは、視線を敵エリアの奥に向ける。

未だに、人影など見えないのだけど……？

いや、居た……ホムラさんの指摘がなければ気が付かなかったけど、かすかに人の気配が……。

「見つかっちゃいましたね……」

「う～ん……ホムラさんの感覚って、一体どうなってるんだろう……？」

「確かに……でも、これ以上は進ませないよ！」

敵エリアの奥から姿を表したのは、大人モードになったヴィヴィオさんとリオさん、そして黒い戦斧型デバイスを手にしたフェイトさん。

どうやら、この三人が迎撃部隊と見て間違いない。そして、この三人と遭遇した時点で、ヴィヴィオさんたちの動きはこれ以降どこからでもモニターできることになる。

ヴィヴィオさん達は、すぐに臨戦態勢に。同時に私達も、それぞれ構えを取り、デバイスを構える。

人数はちょうど三対三……でも、向こうには高速戦闘を得意とするフェイトさん、カウンターヒッターとしての才能が豊富なヴィヴィオさん、独特の格闘技と魔法を組み合わせた戦闘スタイルのリオさん。

形勢はややこちらに不利といったところでしょうか……。

『クゥ、アインハルト……。今から、僕の言う通りに動いて？』

「…？」

「ホムラさん…？」

けど、ホムラさんはさっき閃いたアイデアを実行に移すつもりのなのか、私とクゥさんに視線はヴィヴィオさんに向けたままで、念話を飛ばしてくる。

アイデアの中身は、未だにホムラさんの頭の中にしかないわけですが、このトラップだらけのフィールドで、あの三人を相手にするのは至難の業。

思い切って、ホムラさんのアイデアに賭けてみるのも面白い。

『オッケー、んじゃ命令をよろしくであります大佐殿』

『わ、私もいつでも大丈夫です……た、大佐殿』

『いや、大佐殿の部分は真似しなくていいからね、アインハルト？』

クゥさんも、私と同じ結論に辿り着いたようで、軍隊じみた返答でホムラさんに応える。

私も、空気を読むべきなのかと思って、クゥさんの真似をしてみたわけですが……見事に滑ってしまいました。

普通に恥ずかしい……。

『じゃあ、僕とアインハルトでハラオウン執務官を抑える。クゥは、

ヴィヴィオとリオの相手を。相手するって言っても、防戦に回ってくれて構わない』

『守ってばっかでいいの？　それじゃあ、勝てなくない？』

『うん、だから僕の合図を待ってて欲しい。合図と同時に、さっきと同じように風の攻撃を指示するポイントに撃って』

『う～ん……何か意味深な感じ……うん、了解～♪』

フェイトさんに対しての２ｏｎ１、それに伴いクゥさんにはヴィヴィオさんとリオさんの相手をしてもらう。最初の指示としては、少し驚きだったものの、フェイトさんの戦闘能力はやはりこの場では頭一つ飛び抜けている。
それを考えれば、ある意味妥当な選択とも言える。

そして、最も重要になってくる『合図と同時に風の攻撃を』という指示。
フェイトさんたちに対する布陣も、この指示を出す上では必要なものということか。

兎に角、方針は定まった。あとは……全力で相手にぶつかるのみ！

「じゃあ……行くよ！！」

「うん！（はい！！）」

そうして、私達三人が飛び出す。地面を蹴り叩き、目の前に広がるトラップだらけのフィールドに立つヴィヴィオさん達向かって一直線。
それと同時に、相手チーム三人もそれぞれ行動開始。

「――――鳳仙花！！」

「「「っ！！」」」

行動を開始したヴィヴィオさん達三人に対し、ホムラさんは牽制の意味を込めてであろう、黒い炎による攻撃、鳳仙花を放つ。
もちろん、その攻撃に牽制以上の意味はないし、それほどの威力も込めていないのが分かる。

鳳仙花の炎は、ヴィヴィオさん・リオさんと、フェイトさんを綺麗に分断。
その機を見逃さず、クゥさんはヴィヴィオさんとリオさんの方に回りこみ、私とホムラさんはフェイトさんを、正面と背後から囲むように立ち回る

これでまずは、２ｏｎ１の状態を作り出すことが出来た。あとは、合図があるまでフェイトさんの動きを抑える！！

「へぇ～？　クゥ一人で私とヴィヴィオを相手にするんだ？」

「ちょっと、甘く見過ぎじゃないかな、クゥ？」

「何言ってんのさ？　俺は、あと三回も変身を残してるんだよ？
二人の相手をするのには十分。二人まとめて昇天させてやんよ！！」

「「どこのフ○ーザ様！！？　ていうか、ちょっと表現がイヤラシいから！！」」

ヴィヴィオさんとリオさんの相手を任せてしまったクゥさんのことも心配だったけど、どうも杞憂に終わりそうだ。
変に撃墜を意識しなければ、二人同時に相手をしても攻撃をやり過ごすことは可能。何より、クゥさんとは一度手合わせをしているから、その実力の高さはよく分かっているつもりだ。
フ○ーザ様というのが誰なのかは、あとでホムラさんに聞いてみよう。

そんな事よりも今は……！！

「はぁぁ！！！」

「ふっ！！」

ガキィィ！！

「っ！！」

ホムラさんと私の同時攻撃を、フェイトさんはとんでもない速度でシールドを展開し受け止めてしまう。
けど、二人分の攻撃の重さ、拳と剣の二重攻撃を捌くのは容易ではないようで、小さい事だけど、フェイトさんの足を一歩だけ後退りさせることになった。

『Ｈａｋｅｎ　Ｆｏｒｍ』

「ハーケン……セイバー！！」

一歩後退することになったフェイトさん。しかし、そこからの立て直しは速く、即座に空中から金色に光る魔力刃が飛んできた。
ホムラさんと私は、その攻撃を避けることは出来たのだけど……

「いいのかな？　相手は私達だけじゃないんだよ？」

「っ！！」

そう、フェイトさんの仰る通り、このフィールドないで気を付けるべきなのは、敵勢力だけではなく、この場に仕掛けられたトラップなのだ。
忘れていたつもりは毛頭ないが、意識していても、体は自然に目の前の対戦相手に集中してしまう。

いけない…！　フェイトさんの言葉通り、なのはさんの設置型砲撃魔法が発動してしまって……

「アインハルト！　６時の方向から８発！！　その場で伏せて回避！　クゥは１２時の方向から１０発来てる！！　ギリギリまで引き付けてから避けて、後ろの壁に着弾させて！！」

「は、はい！！」

「わ、分かった！！」

けど、トラップ発動と同時に放たれたホムラさんの指示が、私とクゥさんの耳に飛び込んでくる。

私は、疑うことなくその場に体を伏せる。すると、その数瞬後、私の頭上を本当に魔力弾が掠めて行ったではないか。

「えぇ～と……この辺！！」

もう一方のクゥさんも、ホムラさんの指示通りに、魔力弾を惹きつけ、背後の壁に着弾させることで事無きを得た。

けど、トラップばかりに気を取られていると……

「「油断大敵だよ、クゥ！！！」」

クゥさんの背後から、双龍炎舞を伴ったリオさんと、ソニックシュ

ーターを放ってくるヴィヴィオさんの姿。
まずい…！　いくらクゥさんでも、あのタイミングでは……！！

「油断…？　これは、余裕と言うもんだ！！　バ～イ、志○雄様」

パンッ！！

ヴィヴィオさんとリオさんの攻撃を背後に、振り向きざま、クゥさんはいつかのように手を叩き合わせた。
すると……

「キャッ！！？」

「わわっ！！？」

ドフンっと、まるで空気の塊が二人を襲ったかのような音と共に、ヴィヴィオさん達が吹っ飛ばされてしまう。
ヴィヴィオさんのＨＰが３０００→２８００に、リオさんのＨＰは３０００→２９００に減少した。

凄い…！！

カコーン！！

「ふべ！！？」

と、クゥさんの謎の技に驚いていたのも束の間、恐らくヴィヴィオさんが既の所で放っていたのであろうソニックシューターが、クゥさんの顔面に直撃。

クゥさんのＨＰが３０００→２７００にまで削り取られた。痛そう……

キンッ！！

「――――八重桜（やえざくら）」

抜刀の金属音と共に、ホムラさんが私が回避した八発の魔力弾を、超高速の八連撃、【八重桜】で全て叩き落す。

八重桜は、威力ではなく手数勝負の技。一発の威力はそう高くないが、その命中率と手数の多さからなかなか使い勝手が良い技とのことだ。

全部、二人で特訓していた時に教えてもらったことなのだけど。

「助かりました、ホムラさん！」

「ううん、それより、今度はハラオウン執務官の攻撃が来るよ！！」

「はい、今度は見えてます！！」

『Ｐｌａｓｍａ　Ｓｍａｓｈｅｒ』

休む間もなく、今度はフェイトさんからの砲撃魔法。
金色に輝く砲撃が私目掛けて襲いかかってくる……けど、この攻撃は完全に見えています！

「はぁっ！！」

ドゴォォッ！！

ヴィヴィオさんのお母様の砲撃を防いだ時同様、拳だけで砲撃を相殺する。
攻撃のラインさえ見切れていれば、この程度のことは造作もない……のだけど、驚くべきはやはりホムラさんか……。

視野がもの凄く広い…！　この辺り一帯の戦況を完全に理解・把握している。
いつも全体を見ているというか、自分だけでなく、私やクゥさんの動き、敵の動き、魔力弾の動きと軌道などを瞬時に把握して、それに対するベストな対処法を指示・実行する。

これぱっかりは、私も持っていない才能かもしれない。
でも、同時に……もの凄く心強い！

「さぁ、ここからガンガン攻めてくよ、アインハルト！！」

「はい、ご一緒します！！」

模擬戦二回戦……。

試合はまだ、始まったばかりです…！！

アインハルトｖｉｅｗ　ｅｎｄ

Ｍｅｍｏｒｙ；３６　猛攻！デコボコトリオ！（後書き）

ホムホム「凸凹さんたち……上手くいけばいいんですけど」

アインハルト「幼馴染からのステップアップというわけですか……いいものですね」

Ｆ２０Ｃ「さりげなく閣下が恋のキューピッドみたいになってるのは少し腹立つけどな」

閣下「お前の妄想に勝手に使われただけなのに、どうしてこうなった」

今回登場した、なのはさんの設置式のシューターですが、完全な思いつきでございます。本編ではこう言った技はなかったように思うので、こんなのもありじゃないかなぁと思ったしだいですｗ

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；３７　お説教とスパッツと

アインハルト「というか、スパッツの着用、義務化されてたんですね」

ホムホム「ごめん、でも命に関わるから」

アインハルト「それならば、フェイトさん達のようなスカートの短い方全員にそうするべきなのでは…？」

Ｆ２０Ｃ「ホムホムはアインハルトのスカートの中だからこそ、命に関わるって、そう言いたいんだよ」

ホムホム「ちょ、ちが！！」

アインハルト「……もう少し、かわいい下着に着替えてきます」

Ｍｅｍｏｒｙ；３７　お説教とスパッツとお尻（前書き）

高いところにあるものを、必死で背伸びしてとろうとしてる女の子ってもの凄く可愛いと、最近思うようになった私です。

試しにアインハルトで想像してみてください。

一生懸命背伸びして、ちょっと顔を赤くしながら手を伸ばして……。

そいでもって、届かないから「えい！」とか「や！」とか言いながら可愛くジャンプしちゃうんです。

でも、それでも届かなくて……最終的に、ちょっと涙目になってしまうんです。

可愛い。

これだけで、ご飯三杯はいけます。

あ、すみませんまたしても妄想が過ぎましたねΣ（ﾟ∀ﾟ；）

それでは、本編どうぞ～

※タイトルに関してですが、間違えて次回の分のタイトルを前回コールしてしまっていました。ほんとゴメンナサイｍ（＿＿）ｍ

Ｍｅｍｏｒｙ，３７　お説教とスパッツとお尻

なのはｖｉｅｗ

戦闘開始約五分。
一回戦からは考えられないような、静かな五分という時間。この時間こそが、一回戦と二回戦のルールの違い、性格の差というものを分かりやすく示してくれていると思う。

一回戦はどちらかと言えば、力比べがメインのガチンコ勝負。ただ全力で、相手チームを叩くことに力を注げばいい、非常にシンプルなものだ。
対して、二回戦は総大将ルール等の追加によって、より戦略性が深まり、頭脳戦も必須なものになっている。

チームの総合力としては、かなりいい具合に配分できているはず。勝負を決めるのは作戦の奇抜さだったり、その効果の大きさ。そこに、チームとしての連携の高さだったりが介在してくる。
これは、一回戦よりも面白いことになること間違いなしだよね……

そして、そんな中……

『アインハルト！　６時の方向から８発！！　その場で伏せて回避！　クゥは１２時の方向から１０発来てる！！　ギリギリまで引き

付けてから避けて、後ろの壁に着弾させて！！』

私は、つい先程赤組のテリトリー内に侵入してきたことで、そのモニターが可能になったホムラくん、アインハルトちゃん、クゥと、その三人を迎撃に向かったフェイトちゃん、ヴィヴィオ、リオちゃんの戦闘を見ていた。

傍らには、コロナちゃんが控えている。キャロは、フェイトちゃん達支援として、三人の後方に布陣している。多分、青組のルーテシアも同じような感じでポジショニングしていることだろう。

モニター内で、元気に、そしていきいきと暴れまわっている皆の姿を見ながら、私たちは自分達に回ってきた仕事をこなすべく待機中というわけだ。

その観戦中、最も目を引いたのはやはりホムラくんだろうか。

「ホムラさん、凄いですね……背中にも目があるっていうか、３６０度全部が見えてるみたいで。それに、あそこにいる全員分の動きを全部把握してるみたい……」

「実際、そうなんだろうね。空間把握能力っていうか、周辺の空間を頭の中で全部立体的に把握して、指示を出せる。個人戦ではあんまり見えなかった素質かも……」

きっと、ホムラ君は空間把握能力と脳内での物体に対する立体的思

考能力に突出したものがあるみたい。
剣の才能はルークくんよりは一歩劣るけど、この才能に関しては断トツで優秀。

う～ん……局の訓練ではまだ個人戦しか見てあげられてなかったから、この才能は完全に見逃してたなぁ……。
リーダーや隊長、チームのブレインになれる素質十分だし、指揮官メニューも考えておいたほうがいいかも？

「それに、直感力だね。フェイトちゃん達の接近にいち早く気がついたのも含めて、花まる。勘が良いっていうか、それだけじゃ語り切れない何かがあるって考えるべきかな……」

感じる力、直感力。ルークくんも言ってたことだけど、ホムラ君はさっきの空間把握能力のことも含めて、感覚的な能力が異常に高い。
勘が良いだけって言えばそれまでだけど、それだけで言い止めちゃうのは勿体無いし、早計過ぎる。
ルークくんと相談した通り、ゆっくり……ゆっくり見極めた上で考えないと……。

「あ、クゥちゃん……顔面にソニックシューター……痛そう……今すぐ撫で撫でしてあげたい……」

「にゃはは……それは、模擬戦が終わってからね？　ていうか、クゥ……またバリアジャケット着てないし……」

ホロウィンドウに、ヴィヴィオの放ったソニックシューターを顔面に受けてしまったクゥの姿が映ると、コロナは堪らずといった様子で彼のことを心配していた。
今は敵同士なわけなんだけど……う～ん……ちょっとチーム分けで可哀想なことしちゃったかなぁ……？
コロナって、クゥに対してお姉さんって感じなんだけど、たまにルークくんに対するフェイトちゃんと言動とかが被っちゃうんだよね……ちょっと将来が心配かも。

それはそうと、問題はクゥのことだ。
あの子は、バリアジャケットをデバイスに設定しているのにそれを着たがらない。本人曰く、『めんどい』、『暑苦しい』、『何かスーパー戦隊みたいでヤダ』、『魔王っぽい感じのがいい』、『仮面○イダーみたいのなら考えてもいい』などなど……。
魔導師のイメージアイテムでもある、バリアジャケットの意味がゲシュタルト崩壊しそうな事ばかりを言うらしく、ティアナも困り果てているのだとか。
今も、さっきまでティアナが着ていたのと色違いのトレーニングジャージのまま、閃光吹き荒れる戦場を飛び回っているわけで。

「コロナちゃん、今度クゥにジャケット着てって頼んでくれないかな……？」

「えっと……さっきもちゃんと言ったんですけど、『退かぬ！媚びぬ！省みぬ！』って意味分かんないこと言いながら逃げちゃって……」

「それどこの聖帝！？　なんだか、終いには『愛などいらぬ！！』とか言いそうで怖いよ……」

はぁ……クゥの我侭っていうか、拘りっていうか……まだ子供だから仕方ないことだけど、ティアナも大変だなぁ……。

まぁ、クゥは私達よりも体は頑丈にできてるから、怪我の心配とかは大丈夫だけど……。

「わわ！　クゥちゃん、危ないよ！！」

「にゃはは………」

こんな風に、心配性なお姉さんがいることを忘れちゃダメだよ？

さぁ〜て………フェイトちゃんたちの戦闘も、そろそろ動きがある頃かな……？　多分それに便乗して、ルークくんとティアナも動いてくるはず……！

私達も、ここからが本当の出番だね。相手の総大将が誰なのか……しっかりと見極めて、撃ち落としちゃうから！！

【なのはview　end】

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【フェイト　ｖｉｅｗ】

「せ～……」

「のぉっ！！！」

ガキィィ！！！

「くっ…！」

ホムラの剣とアインハルトの拳。阿吽の呼吸、以心伝心、シンクロ、言い方は色々あるけれど、二人の攻撃のリズムは驚くくらいピッタリだった。

お互い、戦闘スタイルは全く違うのに、どこか同じ匂いというか気配というか。どこか共通項が多いように感じられてしまう。

ババババババッ！！

「速い……！！」

そして、ホムラの使うこの縮地。目で姿を追うのがやっとで、完全に捉えるのはかなり難しい。これでまだ全力じゃないというのだから、この歩法の恐ろしさは身を以てでしか分からないというものなのかもしれない。

ルーク、よくこんなスピードについて行けて……やっぱり、私の旦

那様は凄いね…。

ルーク自慢はともかくとして、重ねて言うことになってしまうけど、アインハルトの覇王流とホムラの神速、そしてそれらが上手く重なりあった連携。ハッキリ言って、私でも脅威に感じてしまう。

片方を捌いたと思ったら、すぐに次の攻撃が流れるようなタイミングで来るから、こっちから攻勢に出れない…！

完全に、防戦一方。でも……付け入る隙が全くないわけじゃない！

「はっ！！」

ホムラの攻撃を捌いた私に、間髪入れずにアインハルトの攻撃が迫ってくる。

けど、ホムラに比べて、アインハルトはスピード面では一歩劣る…

…付け入るのは……アインハルトのが攻撃を放ってから私にヒットするまでのコンマ数秒！

『ソニックムーヴ』

「っ！？」

アインハルトの拳が、私の目の前にまで迫った瞬間、ソニックムーヴによる加速でわたしは一瞬でアインハルトの背後に回りこんだ。

悪いけど、スピード勝負じゃまだまだ私もホムラには負けていられない。二人同時に相手するのは難しいけど……どちらかを沈めてし

まえば話は簡単。まずは、アインハルトから落とす！！

『Ｈａｋｅｎ　Ｓｌａｓｈ』

「うっ！！？」

ハーケンモードのバルディッシュで、アインハルトのがら空きになった背後を狙う。けど、流石というか、アインハルトはしっかりとその攻撃に反応し、振り向きざまに腕をガードに回してきた。

それでも、この近距離からの攻撃は受け流しきることは不可能。アインハルトの体は、力の向きにと大きさに従って弾き飛ばされ、派手な破壊音と共にレイヤー建物に突っ込んだ。

アインハルトのＨＰが３０００→２４００にまで削れ、レイヤー建物に突っ込んでしまった彼女はしばらく動くことができなくなった。

そこに追加攻撃として……

「アインハルト！！」

「っ！？」

アインハルト目掛けて飛んでいく、大量の魔力弾。なのはの設置型シューターが、アインハルトの存在を感知して、彼女に向かって降り注ごうとしている。

ホムラが声を出すけど、アインハルトは未だに動けない。

これで、アインハルトは撃墜……

「くっ！」

と、そう思った私だったけど、ことはそう単純じゃなかった。アインハルトから約２０メートルほど離れた場所に立っていたホムラの姿が、一瞬にして掻き消えた。

いや、消えたと思った次の瞬間には、迫り来るシューターの嵐と倒れたアインハルトとのちょうど中間辺りにホムラの姿がった。

これが……全力の縮地…？！　見えなかった……本当に、瞬間移動したみたいで。

それでも、シューターの標的がホムラに変わっただけで、状況の悪さは二人にとっては何も変わってない。アインハルトのが後ろにいる限り、ホムラはさっきみたいに縮地でシューターを躱すことはできない。一体どうするつもりで……？

「逃げられないなら……弾き返してやれば…！」

「嘘っ？！」

私は思わず素っ頓狂な声を出してしまう。いや、出さざるを得なかった。

ホムラは、自分とアインハルトに向かって飛来する桃色のシュータ

ーを、シラヌイで弾き返し始めたのだから。

シラヌイの刀身に、自身の黒い魔力を少し纏わせ、次々と向かってくるシューターを刀身で受け止め、その勢いを殺すことなく弾き飛ばす。シューターを偏向させていると言ってもいいだろか。

反射神経もそうだけど、シューター全ての軌道とスピードを全て把握していないと難しい。私なら、シールドを張ってやり過ごすけど、あのタイミングで飛び込んだホムラにはそこまでの余裕はなかった。

多分だけど、あんまりシールドや防御系の魔法は得意じゃないんだろうな…。

「ホムラさん…！」

「大丈夫……！　いや、やっぱキツイ……かも…」

アインハルトがダメージを受けた体を何とか立ち直らせている間も、ホムラはシューターを弾き返し続けている。

けど、やっぱりあんな大量のシューター、全部を処理するなんて絶対不可能だ。その証拠に、さっきからホムラにシューターが当たって、彼のＨＰがいつの間にか３０００→１５００にまで削られている。

「――旋衝破っ！」

そこで、アインハルトも加勢に入り、旋衝破でシューターを受け止め、投げ返し始める。

あ……何だか、嫌な予感が……。

「ホムラさん！」「アインハルト！」

その予感は的中したみたいで、アインハルトとホムラは、お互いに名前を同時に呼び合うと、最後に飛来した分のシューターを、一方は拳で、もう一方は剣で受け止めて……

まずい…！　防御…を！

「「せりゃあ！！！」」

「ば、バルディッシュ！！」

『Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ』

アインハルトとホムラは、それぞれ受け止めた最後のシューターの何発かを、私目掛けて投げ返し、あるいは偏向して来た。
咄嗟にラウンドシールドを張ってやり過ごしたけど、完全に油断してた……！
うぅ……やっぱり、デスクワークばっかりしてると鈍ってきちゃうのかな…？で、でも、ルークは『フェイトっていつになってもスタイル抜群だよね』って言ってくれてるし……太ったとかは…無い……うん、きっと無い。そう信じたい。

でも……これで二人の反撃もやり過ごした……！　向こうにダメージが残ってる間に、ここはちょっと大きめの砲撃でまとめて撃墜できるかも…？

「……ここだっ！！」

「え…？」

けど、私の考えとは裏腹に……ホムラはこの状況を待っていたかのような様子で、そう呟いた。
この状況下で、一体なにを…？　なのはの設置式シューターは、まだある上に、私やヴィヴィオたちにどう対処するつもり…？

と、そんな事を考えていた時、私の耳に……どこかで聞いたような女の子たちの悲鳴が聞こえてきた。

「「きゃあぁぁぁぁぁぁ！！！？　フェ、フェイトママ（さん）！！　危なぁぁぁぁい！！？」」

「ふえ？」

声のする方に向き直って見ると……。そこには、小さな竜巻によって吹っ飛ばされたヴィヴィオとリオが……私に向かって飛んできていて……。

あ、これ……回避も無理っぽいかも……

ゴチン！！

「ふみぃ！？」「あみゅ！！？」

そんな鈍い音共に、私とヴィヴィオ、リオの三人はものの見事に小さな竜巻に飲み込まれてしまう。鈍い音の正体は、多分私とヴィヴィオの頭がぶつかった音だと思う。

正直、もの凄く痛かった……ヴィヴィオ、意外と石頭なんだよね……。

ミニ竜巻によって吹っ飛ばされてしまった私とヴィヴィオ、そしてリオ。その最中、私の視界にローラーシューズ型デバイスを履いたクゥが、どや顔しているのが飛び込んできた。

あ…そっか……この竜巻、クゥの技だったんだ……。ヴィヴィオとリオだけじゃなくて、私もまとめて攻撃範囲に入るように、機会を待ってた……？

ううん、多分これはホムラがタイミングと射線を指示したんだ。ていうことは……私っていいように誘導されてた……。

ホムラは、この辺り一帯の空間にある動体の動き全てを把握して…タイミングと風の射線を考えていたってことなんだね。

あはは、流石はルークの弟子で、なのはが目を掛けるだけのことあるね……！　ここは一旦……体勢を立て直して方がいいかな…？

【フェイトｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【ホムラｖｉｅｗ】

「ふぅ……間一髪…」

狙い通りに、ヴィヴィオとリオ、そしてハラオウン執務官を纏めてクゥの風で吹き飛ばすことが出来た。
僕とアインハルトとハラオウン執務官、そしてクゥとヴィヴィオ、リオ達との位置関係を図りながら戦ってたから、かなり危ないところまで追い込まれちゃってたかも。

しかも、ハラオウン執務官達を吹き飛ばせたはいいけど、途中で脱出されちゃったみたいだし。きっと、一旦退いて体勢を立て直すつもりなんだろう。

「ホムラ兄ちゃん！！　あんな感じでよかったんだよね？」

「あぁ、うん。タイミングも方向もバッチリだったよ、クゥ。それに、ちゃんと第二目標も破壊できたことだし……」

「第二目標？」

でも、体制を立て直すのを黙ってみているつもりはない。その間に、僕達は敵エリア内をさらに進んで、中を引っ掻き回していかないと。まだ、高町教導官やキャロさん、コロナの姿を見てない。前線に出てきていないこの三人の中の誰かが総大将という線も勿論だけど、高町教導官を何とか倒さないと、設置式のシューターもそのままだし、高町教導官の場合、固定砲台になられるとそれだけでも脅威だ。

だからこそ、出来るだけ早い内に、高町教導官を撃墜しておきたい。その為に、途中までシューターに感知されずに進む方法として、思い付いた手段がある。

「ほら。さっきのクゥの風の攻撃で、あそこにあった少し大きめのレイヤー建物のビルが根元からポッキリ倒れてるよね？　あの中を通って行けば、多分シューターに感知されずに先に進めると思う。準備時間を考えると、建物の中にまでシューターを設置できるとは考えられないしね」

「あぁ、なるほど……。フェイトさん達を吹っ飛ばすだけが目的じゃなかったんだ？」

「まぁね、でもクゥやアインハルトが頑張ってくれたから上手くいったんだ。ホント、ありがとね」

でも、実際かなり綱渡りな作戦だと思う。ハラオウン執務官達を除けなければ先には進めなかっただろうし、仮にレイヤー建物の中を進んでいくとしても、こちらの居場所は敵にモニターされているの

で、そこで待ち伏せされる可能性もある。

まぁ、待ち伏せを相手が使ってくる場合は、こっちと交戦していなくて居場所が分からない高町教導官やコロナたちしか無理だから、ある意味来るなら来いなんだけど。

あくまで、設置式シューターを回避するためだけの作戦なので、このゲームを制する上での課題はまだまだ多い。

「それじゃあ、さっさとあのビルの中を通って、なのはさんやコロナ姉ちゃんたちを討ち取りに行こうよ♪」

「うん、勿論そのつもり。その前に、ルーテシアさんとも合流しおこう。ここからは、本格的なサポートが欲しいし。アインハルトも、それで大丈夫だよね？」

「はい……ですが……」

クゥが元気に先導して、目的地としているビルの方向を指さしながら走りだそうとするけど、ここにいる三人とも、少しダメージ量が気になるところだ。

少し時間を取ってしまうことになるが、一旦ルーテシアさんと合流して、ＨＰを回復させていったほうが懸命だろう。

此処から先は、またどんなことが起こるか分かったものじゃないから。

そう思って、アインハルトにも了解を得ようとして、そう言ったんだけど……。なんだか、アインハルトがムッとしてるっていうか

……少し怒ってる？
さっきから全然喋らないし……どうかしたのかな……？

「あの……アインハルト？」

「……えい……！」

ポム！

「あいた…！　な、何するのさ、アインハルト……」

何故か、僕はいきなりアインハルトに頭をチョップされた。力なんて殆ど入ってなかったから、あんまり痛くなかったけど、いきなりのことに少し驚いてしまった。
え？　何なの…？　僕、アインハルトに何かしたかな……？

彼女を怒らせてしまったのかと、少しビクついてしまった僕。対して、アインハルトは少し表情を固くして、僕に言って来た。

「あの時、私がフェイトさんに弾き飛ばされて、設置式シューターの攻撃に晒されそうになった時……私を庇ってくれましたよね……？」

「あ……うん……あんなの食らったら、流石にアインハルトでも一発でＨＰ根こそぎ持って行かれちゃうと思ったし……結果的に全然庇えてなかったけど……あはは……」

「助けてもらったのにはお礼を言いますけど、ホムラさんは少し無茶しすぎです！　こんなにボロボロになって、下手をすれば、ホムラさんが撃墜されていたところだったんですよ？」

確かに、そこを突かれると痛い……。アインハルトが危ないと思ったら、体が勝手に動いてたんだけど、今だから思うけど、あれは自分でも無謀な行動だと思った。
アインハルトは、僕のそんな無謀な行動に少し怒っているということみたい。

僕も、これには口答えはできない。事実、僕のＨＰは半分近くにまで下がっているのだから。

「今回は模擬戦ですけど……将来、執務官になってこういう戦闘になった時、今みたいな無茶をしたら怪我では済まないんですから。もうちょっと、自分を守ることも覚えてください」

「は…はい……」

あれ？　なんだろう……？　アインハルトが大人モードだからなのかもしれないけど……何だか、悪いことした弟がお姉さんに怒られてるみたいな感じだ…。

それに、アインハルトの言い方が優しいから……何だかこう……素直に従ってしまう感じになる。
あれ？　僕って本格的に、年上のお姉さん好きなの？　それともアインハルトの大人モードだからこうなっちゃうの？

じ、自分で自分がわからない……！！

「……それに、あんなふうにかっこ良く助けられてしまったら……もう、戦闘中なのにドキドキが止まらなくなってしまいます…（ボソッ）」

「え？　なんか言った？」

「にゃ、にゃんでもにゃいですよ！！　さぁ、ルーテシアさんとの合流ポイントを決めて、速く合流しますよ！！」

「う、うん……？」

何なんだろうか……？　怒ったり真っ赤になったり猫語になったり……アインハルトって物静かなイメージが強いけど、実はかなり感情豊かなのかな……？
というか、やっぱり女の子っていうものもよく分からん。

「いやぁ～、青春じゃのぉ～……ふぉっふぉっふぉ♪」

クゥが僕達を見て、見た目と全く合わないおじいさん口調になってそう言ってたけど……。今のって…青春なのかな……？
よく分かんないけど、取り敢えずアインハルトには、さっきの件も合わせてもう一度謝っておこう。

「アインハルト！！　その……さっきはゴメン、心配させて。僕も……無茶しないように心掛けるよ」

「……は、はい……分かってくだされればいいんです……」

僕のそんな言葉に、アインハルトは背中を見せたまま振り返らないでそう答えてくれた。

でも、無茶をしないとは言っても……やっぱり目の前で誰かが怪我したり、死んだりするのは……もう二度と見たくないと思ったから。

だからこそ、アインハルトを安心させるには、もっと力を付けなくちゃいけない。もっと強くならなくては。

そうだ……そうすれば……。

「だから、無茶しなくてもアインハルトのこと守れるように強くなってみせるから！！」

「へぁ？！」

僕の決心をアインハルトに告げた瞬間、何故か彼女は何も無いところで物の見事にコケた。

前のめりになりながら、倒れてしまったアインハルト……。

だが、問題はもっと他にあった。

僕の目の前を歩いていたアインハルトがコケてしまったのだ、しかも前のめりに。

それと同時に、アインハルトのバリアジャケットの短いスカートが……思い切り捲れてしまって……その……黒いスパッツに覆われた綺麗で形の良いお尻が……。

「ぐはっ！！！？」

瞬間、僕は洪水のような鼻血を出しながら、仰向けになって倒れた……鼻血を出したからと言って、ＨＰは増減しないし、撃墜扱いにはならない。……でも……やっぱり一時的に意識が遠のいていく……。

ちくしょう……折角、スパッツの着用の義務化をルールにまで表記したのに……。
僕ってやつは……。

「わ、私のことを守るって……強くなるって……あぅ……うぅ～～！！！」

「あ、アインハルト姉ちゃん落ち着いて！！？　ていうか、ホムラ兄ちゃんのバイタルが、バイタルが一気に急降下してる！！　兄ちゃん、寝るな！！　寝たら死ぬぞぉぉぉぉ！！」

アインハルトの声と、クゥの叫びが聞こえる……でも、うん……
…もうこれで何回目のか分かんないけど……眠いんだ、パト○ッシ

ユ……。

あ、でも……アインハルトのお尻（スパッツ越し）……とっても綺麗でした……ガクッ。

その後、僕は気を失う一歩手前で、クゥとルーテシアさんによってなんとか一命を取り留めることができました。
ホント……何とかして女の人に対する耐性を付けないと……。
そんな事を考えつつも、具体的な方法が全く思いつかない僕だった。

【ホムラｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

Ｍｅｍｏｒｙ；３７　お説教とスパッツとお尻（後書き）

ホムホム「前書きのアインハルト……可愛すぎる……」

アインハルト「そ、そうですか……？」

ホムホム「だ、だってさ……アインハルトがピョンピョンジャンプして……それでも届かないんだよ？　ちょっと恥ずかしそうに顔を赤らめられでもしたら……それだけでもう……」

Ｆ２０Ｃ「ホムホム……お前…消えるのか？」

閣下「むむ？　どうやらこの私の出ｂ」

三人「「「ねーよ」」」

閣下「（＊、ω、＊）」

Ｍｅｍｏｒｙ；３８　総大将はいずこ？

コロナ「クゥちゃん、ちゃんとバリアジャケット着なきゃダメだよ？」

クゥ「や！」

コロナ「カワユス（；´Д`）ハァハァ」

Ｍｅｍｏｒｙ；３８　総大将はいずこ？（前書き）

テイルズに没頭している、Ｆ２０Ｃでございます。

ミラ様、マジマクスウェル
エリーゼたん、まじ天使

レイア、登場まだー？

あ、特典のチャームフィギュアはノーマルのミラ様でした。やった、これで勝つる！！（ー、ﾛｰ´）キリッ

Ｍｅｍｏｒｙ；３８　総大将はいずこ？

【ティアナｖｉｅｗ】

目の前のホロウィンドウには、ここから数百メートル先で行われている戦闘が映しだされている。
その映像は、青組のフォワードであるアインハルト、ホムラ、クゥ達が、私達の作戦上Ｂ地点と呼ぶ場所。即ち、敵軍エリアとの境界線を超えた時点からモニター可能となったもの。
フェイトさんやヴィヴィオ達が現れた後、ホムラたちは一言二言念話で話したような素振りを見せた後、激しい戦闘を続けていた。

そして、今現在の戦況はというと……。

「なのはさんのシューターを剣で弾き返すやつ……そんな馬鹿なことするのはあんたくらいだと思ってたんだけどね、ルーク？」

「いやはや……ジェ○イの騎士かあいつは……。俺だって、やろうと思えばできるけどシールド張ったほうが安全だろ。ホムホムは防御系魔法が大の苦手っていうか、下手くそらしいからな。あの場で即興で思い付いたんだろ」

「どっちにしても、とんでもないわよ。空間把握能力もそうだし、立体的思考による作戦へのアプローチ。この２つの能力の高さをもって、戦闘フィールド内のほぼすべてを把握して、全員の動きを予

測した上でクゥたちに指示を出してる。個人的な戦闘の才能はあんたよか低いけど、チームや小隊規模の統率力とかリーダーシップ。そういう点じゃ、将来の有望株ね」

私は思ったことをそのまま口にした。

確かに、ホムラの剣術はかなり洗練されてはいる。だが、ルークのような天才の振るうものと比べると、やはりどうしても見劣ってしまう。

そも、普通の人間が十年掛かる道を、このルークという変態は一年少しでモノにした。言ってしまえば化け物染みた才能だったというだけのこと。

ホムラにも才能はあるが、ただ単にルーク程ではないというだけで決してレベルが低いわけじゃない。

それに、言った通り。チーム・小隊を率いての集団戦に於いては、恐らくホムラは才能の原石というものを持っている。

磨けば光る、なのはさんが嬉々として彼を鍛えようとしている気持ちが少し分かってしまった。

「で……ホムラのことはいいのよ……問題は……」

「問題は？」

「クゥよ！！　あんのおバカ…！　またジャージのまま戦闘になんか出て……！　あ～もう、何度言ってもバリアジャケットを着ようとしないんだから……！！」

ルークが隣で、『あ～、なるほどね……そりゃ心配だわな』と、呑気にそう言っている。まぁ、実際こんな模擬戦で過度な心配をするのも私自身どうかとは思うけど……やっぱり、心配にはなってしまう。

いくらイノベイト・チルドレンで体が人の何倍も頑丈に出来ているとしても、血管が破れれば血が出るし、骨だって負荷係数が大きすぎれば折れてしまう。

治りが早いと言っても、母親として子供のそんなシーンは見たくはない。過保護だろうが、親バカと言われようが構わない。死んだり、居なくなってからでは『心配してあげること』も出来なくなってしまうんだから……。

私は、あんな思いはもう二度としたくない。

「にしても……クゥのやつ、デバイスもそうだけど、技もますますソラに似てきたな」

「まぁ…ね。デバイス自体は、エステルが組んでくれたものなんだけど……能力的な面はあいつの影響が大きいわね。ちょっとは私にも似てくれれば……」

「大丈夫だって、あいつはお前の血、ガッツリ継いでるし」

「……？　どこがよ？」

ルークは、変に気を使って私の前で、あいつの名前を出さない。な

どということは全くしない。今みたいに、普通にあいつの話題を振ってくる。
私としては、変に気を使われるよりルークのようにしてくれる方が気持ち的に楽だった。

と、それはさておき……。
私とクゥが似てるところ……髪の色以外で何かあったかしら……？

「ほら、ツンデレなとことか……ふべ！？」

「殴るわよ？」

「殴ってから言うなよ！！？」

全く失礼ね……私のどこにツンデレの要素があるっていうのよ……？
たしかにクゥは素直じゃないし、コロナに完全に惚れてるくせにツンツンしてばっかりだけど……。
私はツンツンなんてしてないわよ！

あれ？　今どこかから、『ダウト！』って聞こえた気がするけど……気の所為かしら…？

「まぁいいや。んじゃ、ここまでの流れから、ちょっと相手方の動きを整理してみるか……。ぶっちゃけ、総大将が誰か…予想ついてるか？」

「まだちょっと判断材料にかけるけどね。ある程度の場合分けは出来てる。一番のポイントは、なのはさん達赤組が自軍エリア内での防衛・迎撃戦を選択してきたことね」

「パッとみた感じ、向こうのフォワード…迎撃組の中心はフェイト・ヴィヴィオ・リオって感じだし……キャロはその三人を後方からバックアップってとこだろうな。で、今んとこ姿が見えていないなのはさんとコロナなんだけど……」

守勢に回ったということなら、何かを守ることに重点を置いたと考えるのが普通。この場合、守る対象として最もしっくり来るのは勿論総大将だろう。

それを考えれば、迎撃組の三人は総大将候補から除外することが出来る……でも、そう簡単な話なんだろうか？　反対に、その逆を突いて迎撃組の中に総大将を紛れ込ませて、敵を自軍の奥にまで誘い込んだ上で分断、各個撃破するという手もあり得る。

更にそう思わせておいて、実はオーソドックスに後衛に総大将を回しておく……うん、やっぱり、今の情報量じゃこんなとこかしら……？

袋小路に迷いみそうになるのだけは避けないと……クゥ達フォワードは私たちが総大将を突き止めるのを待ってくれてるわけなんだし。

「なのはさんが総大将、または総大将を守るための最後の砦役だった場合は……自動的にコロナが総大将なわけだけど……。その場合、なのはさんはきっと空中、または高台から固定砲台みたいに砲撃をかましてくるだろうな。コロナが一緒にいると考えれば……陣取ってるのは少し背の高いビルってとこか……う～ん…でもこれもまだ

決め手に欠ける」

「何にせよ、もうちょっと戦況が慌ただしい感じになってくれないとなんとも言えないわね」

ルークが、今のところ最も可能性として高い、後方に総大将を布陣させた布陣で相手方の作戦を読もうとするけど、やっぱり彼の言うとおり、決め手に欠ける。なのはさんとコロナ、キャロの居場所、行動が…その予兆でもいいから分かればなんとかなるんだけど……。

「……んじゃ、この辺で第二部隊投入ってとこかな……？」

「何言ってんのよ、元々その予定だったでしょうが……。あの子達が相手戦力と交戦状態になった時点で、あんたが前線に出るって」

「ま、そうなんだけど……ほら、真打ち登場～、みたいな演出が欲しいなぁとか……」

「バカ言ってないで、さっさと行きなさいよ。私も、モニターしながら後から行くから」

ルークがアーカーシャを腰にあるのを確認しながら、動き出す準備を始める。

ホムラたちも気がついているとは思うが、彼らは敵陣を引っ掻き回す役目と同時に囮の役目も帯びている。

相手戦力がホムラたちに方に集中しているのならば、その隙に相手陣地の奥にまで切り込んでいくことも可能だろう。無論、相手陣地

に入った時点でこちらの行動は丸分かりなわけだが、そこは電撃戦法だ。スピーディーに物事を進めればいいだけのこと。

元々、攻め手に回ると決めた時点で、長期戦になるのはこちらに不利だとは分かっていたことだ。

ならば、ここはもう少し敵エリア内を騒ぎ立てて、相手の出方を観察し、作戦や動向を見極めなくちゃね……。

「じゃ、頼んだわよ？　あぁ、それと『保険』のことも抜かりなくね？」

「大丈夫だって、それはもう準備済みだから。ティアナも、サポートよろしく～」

そう言って、ルークは最前線に向かって駆けていった。

空をとぶこともできるが、今回は隠密行動も重要になってきているので、目立った移動方法は使えない。

きっと、ルークはホムラたちとはまた別のルートから敵エリア内に侵入するつもりなんだろう。

ならば、私の仕事は決まっている。相手の様子を観察し、分析すること。

そして、いち早く総大将を見つけ、撃墜することだ。

最後に……いくら言ってもバリアジャケットを着用しないバカ息子に、きついお仕置きとお説教をしなければならない。

オフトレに入っても……何だか多忙なのは変わらない気がするわね

……トホホ……

【ティアナview　end】

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【アインハルトview】

ホムラさんの考えたアイデア、へし折ったレイヤー建物の構造内を進んで、ヴィヴィオさんのお母様の設置式シューターに感づかれることなく先に進むというアイデアは、結果から言うと大正解だった。

ただ、このレイヤー建物のビル、根元からへし折れてしまった構造体が、隣接する一回り小さいビルに伸し掛るような形で倒れているようで、少し傾斜がついてしまっており、走るのが少し大変といえば大変なんだけど。

ともあれ、彼の予想通りレイヤー建物の中にはシューターの影も形もない。いちいちレイヤー建物の中全てにトラップを仕掛けるのも、考えてみれば無理がある。

そこへ行くと、建物外の道や見通しの悪い、不意打ちが狙いやすい場所にピンポイントで設置しておくのがベストというわけだ。

フェイトさんやヴィヴィオさん、リオさんの相手をするだけでも大変なのに、そこにあのシューターが加わると、状況は文字通り最悪になってしまうため、トラップを回避するこの手段はまさにナイス

アイデア。
さすがはホムラさんです……でも……。

『だから、無茶しなくてもアインハルトのこと守れるように強くなってみせるから！！』

「（はぅ……）」

思い出すたびに、心が熱くなり、心臓の鼓動が早くなる。頭の中は、ホムラさんとその口から発せられた先ほどの言葉で一杯になり……まともに彼の顔を見れない。
本当に、もの凄く意識してしまっているのが、自分でもよくわかる。
まるで、病気にでもなってしまったかのような……そんな感覚。

「（私のこと……守るって……）」

そんな事を言ってくれた男の子が、今までの人生の中でいただろうか？
どちらかと言えば、私は守る側に立つくらいの力を持っている。それくらいの自覚はあるし、そうでなければならないとも考えている。
弱ければ…弱いままでは……覇王の悲願は達成できないし、自分の存在証明すら危うくなってしまうのだ。
強くなるため、今までの人生を捧げてきたと言っても良いかもしれない。

「（でもホムラさんは……そんな私を……）」

守ると言ってくれた。今まで考えたこともなかった、誰かに守られるということ。

それはどこか新鮮な響きで……同時に心の底から、嬉しくて。でも多分、きっとそれは誰でもいいというわけではなくて、その……ホムラさんがそう言ってくれたからこそ……こんなにも嬉しくて、心が暖かくなってしまうのだと思う。

「ふにゃ……」

「何だか、アインハルトがヘニャってるように見えるんだけど……気のせい？」

「き、気のせいじゃ……ないんじゃない……？」

「クゥ、そこまでルーテシアさんを警戒しながら答えなくても……」

「そうよぉ……お姉さん…ちょっと悲しいＺＯ☆」

「ヒィッ！！？」

？？？

何だか、ルーテシアさんが私の方を見てなにか言ってるみたいだけど……？　よく聞こえないな……。
それに、何故かクゥさんがルーテシアさんの満面の笑顔を見て涙目になってる……本当に、昔一体何をされたんでしょう……？

守ってもらうということは、どこか情けない。そんなふうに考えていた時期が、私にはあった。その私が……こんな気持になるだなんて、少し前は思いもしなかった。
これも、ホムラさんに会ったこそからの変化だというのだろうか……だとしたら……彼の存在はどこまで私にとって特別なのか……
そんな事すら思ってしまう。

「（でも……一方通行なのは……私は認めないです）」

だけど、私が一方的に守ってもらうような、そんな弱い女だとは思って欲しくない。特に彼には。
あくまでも、彼とは対等な立場に立っていたいし、ましてやホムラさんに一方的に守ってもらってばかりの自分というものは絶対に許せない。
それは、頼ることではなく、ただ依存しているだけだ。本当の意味で、彼の隣に立てているとは到底言えない。
それに彼は、重度のお人好し。人を守ったり助けたりすることには尽力を惜しまない。さっきのことだって、まさにそれだ。

「（なら、あなたのことは……一体誰が守って、助けてくれるんですか？　ホムラさん……？）」

思い出すのは、昨日の夜のことだ。
シラヌイさんを抱いて、ベッドに座り込んで眠っていたホムラさん。
そこまでしないと、怖くて眠れない彼。心に大きな傷を抱えた彼を、人のことばかりで、自分を大事にしない彼を守って、助けるのは誰なのか？

「……（その誰かに……私はなりたいんです。私が守って、助けてあげたいんです）」

答えは、簡単だった。
考える前に、既に頭の中にその気持ちがあったのだから。だからこそ、昨日の夜はあんなに大胆に……その、ホムラさんを抱きしめて……寝ていたわけで……。

あの時の感触、ほんとうに癖になりそうで怖いです。

兎に角、私はそう決めて……そうなれるように、自分に出来ることから始めてみようと思う。まだ、何が出来るかなんて全然分からないけど……。
少なくとも、彼に安眠の時間をあげることくらいは出来るみたいだから。

ガラ…ッ！

「「「!?」」」

とその時、少し先のフロアから物音がした。勿論、根元の方からへし折られたビルなのでそこかしこにガタが来てしまっていて、その影響で出た音ならばそこまで脅威ではない。
でも、私達が身構えてしまったのは、その物音のする先に、先ほど交戦状態になり一時的に追い払うことが出来たヴィヴィオさんとリオさんの姿があったのだ。

これは……待ち伏せ…?!

でも、こっちはルーテシアさんも合流して四人。見たところ、相手側はヴィヴィオさんとリオさんの二人しかいない。数の優位性からして、こちらに有利だ。
モニターにも、周囲にはフェイトさんの反応はないので、ヴィヴィオさんのお母様、コロナさん、キャロさんの誰がか一緒にいる可能性はあるのだけれど……。

「に、逃げるよ、リオ!!」

「う、うん!!」

「あ!? 逃げた!!」

「追いましょう!!」

「えぇ！」

と、お二人も自分達が劣勢であることと待ち伏せが失敗してしまったことに気がついたようで、私達に背を向け一目散で離脱しようとする。これは即ち、この場には彼女たち以外の二人はいないと判断していいところだろうか……？

でも、４対２という好条件が揃っているこの状況。むざむざと逃してしまうのは勿体無いし、落とせるものは落としておきたいというのが本音だ。

私、クゥさん、ルーテシアさんは同じ結論に至り、すぐに彼女たち二人の後を追った。

二人とも瞬発力があるので追い付くのは一苦労だけど、ここは踏ん張りどころというものでしょう。

「……おかしい……」

と、そんなホムラさんの呟きが気になったけど、彼もまた私達同様に彼女たちを追っていた。

このホムラさんの呟きの意味を、私たちは数十秒後に思い知るハメになった。

真剣な表情で考えこむホムラさんの表情が何度見てもかっこ良くて、少し頬が熱くなるのを感じた私だけど、それは心の奥の隅っこに納めておいた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「そこの暴走娘二人組〜〜！！　制限速度何キロオーバーしてると思ってるんだ〜！！　さっさと道路の左側に止まって免許証見せなさ〜い！！！」

「免許証って何！？　制限速度って何！？　クゥいつから地球のケーサツの人になったの！！？」

「ていうか、誰が暴走娘二人組よ！！？　この暴走ツンデレチビ助！！」

「は〜い、公務執行妨害で逮捕〜！！　俺の豆腐メンタルをちょっと傷つけた〜！！」

目の前で、逃げおおせるヴィヴィオさんとリオさんを先頭にたって追うクゥさん。彼はデバイスの設計上、屋内などの悪路を走るのは苦手なのかと思われたけど、これがなかなかどうして器用にローラーシューズ型デバイスを履いた状態で、障害物の多い建物の中を走っているのだ。

下手をすれば、普通に走っている私達よりも早いかもしれない。

なんというか、普通に追跡する分にはいいのだけど、クゥさんはなんというか追いかけっこの延長線のような感じで、ヴィヴィオさん達を追いかけるのを楽しんでいる節がある。

追いかけながらも、二人をからかいながら走っているところからそ

うとしか思えないのだ。

「このままま っすぐ進めば……地図の上では隣の一回り小さいビルの屋上に出ることになるのか……」

そんな中、ホムラさんはホロウィンドウに周辺の地図を呼び出し、現在位置を読み取っている。隣接するビル構造体に伸し掛るように倒れたビル。

今のところ、あの二人を追ってまっすぐ進んできており、頂上の窓からとなりのビルの屋上に出られるようになってしまっているようだ。

なんというか、これが俗に言う、『ダイナミック☆お邪魔します』というものなんだろうか？ルークさんが言っていたセリフなので、その意味はよく分からないままなのだけど。

「待ち伏せ……二人の撤退……追いかける僕ら……ビル……屋上……」

ホムラさんは、走りながらも頭を素早く回転させ、何かを思案している。この追跡劇に、やはり彼はどこか違和感を感じているようだ。

私も、ヴィヴィオさん達が待ち伏せしていたあたりから、どこは変な感じがするのを覚えていた。

けど、ホムラさんのようにそれを具体的な何かと結び付けられるほどのものではなかった。

逃げまわるヴィヴィオさん達を捕まえることだけならば、ホムラさんの縮地で一瞬で片が付く。
けど、彼がそれをしないのは、きっと何か嫌な予感というか、相手側の何かの意図を感じ取っているからなのだろう。

「……ん…？」

「ホムラさん？　どうかしましたか……？」

「いや……何だこれ……もの凄く大きい……何か……？」

？？

ホムラさんは、あさっての方向、とは言っても構造体内部なので目線の先には壁しか無いけど、その方向を凝視する。
大きい…？　何か？

「ヤッホ～イ！！！♪」

「クゥ、一人で先行しちゃ危ないわよ？」

と、ホムラさんとそんなやり取りをしている内に、ヴィヴィオさんとリオさんは、構造体の窓から、伸し掛かる形で今このビルを支えている、となりのビルの屋上に飛び移った。
クゥさんとルーテシアさんも、それに続き、私達二人も同様に窓からお隣さんに飛び移った。

「…！！　しまった！！　罠だ！！」

「「「え？」」」

飛び移った直後、ホムラさんがそう叫ぶ。

私、クゥさん、ルーテシアさんは首をかしげてしまうけど、ホムラさんのその言葉の意味は、もうすぐそこまでやって来ていた。

そう……強大な桃色の閃光、長距離からの砲撃魔法が。

「ヤバい！！　まんまと誘い込まれた…砲撃が来る……！！　クゥ、ルーテシアさん、さっきのビルに飛び込んで！！」

「キャッ！？」

「っ！！」

「のわ！！？」

ホムラさんは、叫ぶと同時に私を抱きしめながら、さっきのいたビルの窓に飛び込もうとする。

けれど、その瞬間……。

私たちは、桃色の光りに包まれた。

【アインハルトｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

Ｍｅｍｏｒｙ；３８　総大将はいずこ？（後書き）

Ｆ２０Ｃ「エリーゼたん（＾ω＾）ペロペロ」

閣下「……なぁ、いつも俺のことを変態というけど、これはどうなんだ？」

ホムホム「……まぁ、病気みたいなものなんじゃないでしょうか？……あなたと同じで☆」

アインハルト「さすがはホムラさん、作者の動きを牽制しつつ、ルークさんの偽物にまで精神的ダメージを与えることを忘れない……」

クゥ「そこに痺れる、憧れるぅ！！」

閣下「この敗北感は何だろう……？」

Ｍｅｍｏｒｙ；３９　年上おねーさんの役割

次回、ルーテシアとクゥの間に……？

コロナ「え？　これなに？」

Ｆ２０Ｃ「クゥのフラグが増えるよ！」

閣下「やったね、たえちゃん！！」

クゥ「おいばかやめろ」

Ｍｅｍｏｒｙ，３９　年上おねーさんの役割（前書き）

ついに、とある訓練生シリーズ、１００万ＰＶ突破致しました～！！
皆様、本当に有難うございますｍ（＿＿）ｍ

つきましては、記念小説の一つでもやってみようかと思います。
今のところ、企画としましては

・ホムラ大人モードのお話（アインハルト歓喜）

・ルークへの一週間フェイト禁止令（ルーク涙目）

という感じで今のところ２つでございます。このどちらか、またはこんな企画をやって欲しいというアイデアなど、ございましたらご意見お聞かせいただければと思いますｗ

Ｍｅｍｏｒｙ，３９　年上おねーさんの役割

【アインハルトｖｉｅｗ】

目の前を一瞬で覆い尽くした桃色の閃光。その光は、私、ホムラさん、クゥさん、ルーテシアさん全員を撃ち落とさんとする勢いで降り注いだ。

だけど、集束砲の使用が禁止されている今回の模擬戦。これは恐らく普通の砲撃なのだろう。

けど、これは砲撃と呼ぶにはあまりにも強大で、恐ろしい光。ある意味、トラウマにもなりかねない光だ。

「ってて……大丈夫、アインハルト……？」

「は、はい……なんとか……ホムラさんのおかげです……」

その強大な光の奔流、砲撃を避けるため、先ほどまで移動に使っていたレイヤー建物の構造体の中に再び飛び込んだ私とホムラさん。

どうやら、なんとか回避できたらしく、私達二人のＨＰは２８００→２５００と損害は軽微だった。

まともにあの砲撃に晒されていれば、一瞬でＨＰのすべてを持って行かれていたことだろう。それを思うと、今更になって空恐ろしくなる。

「周囲に敵の反応は……。無いな……。ヴィヴィオもリオも、どこかに隠れたか、撤退したのか……いや、キャロさんの召喚魔法か？」

「それより、さっきの砲撃は……」

「うん、多分高町教導官だ……。でも、今さっきの砲撃の発射地点の情報は上手く利用できるかもしれない。早速、師匠に転送しておこう」

ホムラさんは、周囲をサーチングしながら、先ほどの砲撃が放たれたであろう発射地点のデータをすぐにルークさんに送った。
転んでもタダでは起きない。

砲撃を撃ったヴィヴィオさんのお母様も、自身の居場所を教えることになることを承知で攻撃を仕掛けてきたはず。ヴィヴィオさん達を囮に、私達を射程距離まで誘い込んで。

「そう言えば……クゥさんとルーテシアさんの姿が見えませんが……」

「……あ…ホントだ……。一瞬、クゥをルーテシアさんが庇ってるように見えたんだけど……無事かな……」

ヴィヴィオ様のお母様の砲撃ポイントのデータをルークさんに送ったホムラさんは、私と同じタイミングで、クゥさんとルーテシアさ

んが居ないこと気がついたようだ。
同じビルの中に飛び込んでいたように見えたんですが……。

一体どこに……？

「う……う～ん……」

「クゥの声！？　クゥ！！　どこだ！！？」

「クゥさん！？」

と、その時。私達の逃げ込んだビルの同じフロアの奥のほう。砲撃の余波でほとんど瓦礫の山になってしまっていた方から、かすかにクゥさんのうめき声のようなものが聞こえた。

私とホムラさんは、すぐに声のする方に駆け寄り、彼の名前を読んでみる。レイヤー建物の構造体は、見た目は本物そっくりだけど、構成している材質は非常に軽く、間違っても押し潰されたりするようなものではないので生き埋めになったところで大事には至らないが、できるだけ早く助けてあげたほうがいいに決まっている。

ホムラさんと私で、山になっている構造体の瓦礫を押しのけ、クゥさんの声を頼るに彼を探す……。すると……。

「うぅ……」

「いたた……」

「クゥに……ルーテシアさん?!　良かったぁ……二人とも無事で……」

「はい……ホッとしました……」

瓦礫の中から、クゥさんを自分の体を盾にするような形で庇った状態のルーテシアさんの姿を発見し、同時にクゥも救出することが出来た。
どうやら、ホムラさんの見た通り、ルーテシアさんがクゥさんを庇いながら、さっきの砲撃を回避してくれたようだ。
でも……

「あ、ルーテシアさんのＨＰ……」

「あちゃ～……あはは、撃墜されちゃったわね～…」

私が気がつくのと同時に、クゥとホムラさんも、ルーテシアさんのＨＰを見た。
つい先程まで、２５００という数字を表示していたＨＰタグが、今は０という無情な数字を表示していた。

ＨＰが０になる。
それ即ち、模擬戦においての撃墜を意味し、ルーテシアさんはここ

で戦線を離脱しなければならないということだ・
恐らく、さっきのヴィヴィオ様のお母様の砲撃からクゥさんを守るために、ＨＰなどを無視して庇ったのでしょうが……クゥさんはほぼ無傷なのに対し、ルーテシアさんのＨＰは全損。
やはり、さっきの砲撃をまともに食らっていれば、私も同じく撃墜されてしまっていたのかもしれない。

「……なん……で……」

「ん？」

と、私が砲撃の脅威を改めて感じていると、俯き加減になったクゥさんが、搾り出すような声でそう呟いた。
普段の元気な彼からは全く思いもしないような、その小さな声は、自分自身を守ってくれたルーテシアさんの方に向かっている。

クゥさんは、昔のトラウマ？か何かで、ルーテシアさんのことを苦手としていた。そんな相手に、体を張って助けてもらったということに、少し動揺するのと同時に、バツが悪い気分になってしまっているのだろう。

「なんで……俺を助けてくれたの…？　いっつも……逃げてるのに……俺…」

近づくだけで、体の全部の毛を逆立てる猫のようになるクゥさんの姿は、もはや名物にもなりつつある。

でも、クゥさんも出来ればあんな態度でルーテシアさんとは向き合いたくなったはずだ。

まだ会って間もないけど、クゥさんは少しくらいのことでは、人を本当の意味で嫌いになったりはしない。

そんな、優しい心を持った、少し素直ではない子。根っこの部分は、とても真っ直ぐで純粋だ。

「なんでって……私はおねーさんだからね。クゥみたいなちっちゃい子は、守ってあげないと♪」

「守るって……」

「ま、私が勝手にやったことなんだけど。前に、おもしろがってクゥにいろんな服着せまくって、泣かしちゃった時の罪滅ぼし……みたいなのもあるかな？　流石の私もさ、会う度にあそこまで嫌われちゃうと悲しいしね」

「うぅ…」

なるほど…着せ替え人形とはそういうわけですか……クゥさんが泣いてしまうまで続けられるとは……一体何着試着させられたんでしょうか……。

まぁ、それは置いておくとして。

クゥさんは、嫌っていなかったにせよ、少し苦手としていたルーテシアさんに助けられてしまった。それに対して、何か思う所があるみたいですね。

「……」

ホムラさんも、ここは二人に任せてみるつもりなのか口出しする気配もないし、一瞬視線がぶつかった際、『大丈夫だよ』とそう伝わってきた気がした。

彼がそう言うのなら……きっと問題ないのでしょう。私も、事の成り行きをそのまま見つめることにした。

あれ？　今私、ホムラさんと目と目で話していたような……？

……ちょっと嬉しい……。

「……りがと……」

「ん？　どうかした、クゥ？」

と、クゥさんが顔を赤くしながら、何かをルーテシアさんに伝えようとしている。

ルーテシアさんも、クゥさんが口を開くのを黙って待っている。無理のその先を聞き出そうとしないのは、クゥさんならきっと自分から言いたいことを言うのだと、そう確信しているからなんでしょうね…。

「ありがとう……ルー……お姉ちゃん……」

「……あ…ぅ～……あはは！！　まぁまぁ、気にしないでって！！♪　戦闘力的にも、此処から先の展開としては私よりクゥが生き残ってたほうがいいしね。私の分まで頑張ってよ、クゥ。それにホムホムとアインハルトもさ」

「はい、もちろんです」

「必ず勝ってみませます」

クゥさんは、小さく、けれどしっかりとルーテシアさんにお礼を言った。

その言葉に、一瞬だけどルーテシアが言葉をつまらせ、すぐに立て直して私達全員を激励してくれた。

戦力が一人かけたこの状況。先程よりも雲行きは芳しくありませんが……だからといって諦めるような材料には成り得ない。

最後まで、私達にできるベストを尽くさなければなりませんね……。

「俺も……ルー姉ちゃんの……分まで頑張るから。だから……見ててよ」

「……うん。クゥの頑張ってるところ、ちゃんと見せてもらうからね。勝てたら、ご褒美を進呈しちゃおうかな♪」

「……うん」

少し、ルーテシアさんの顔が赤いですが……何か、二人の間に良い空気が漂っている。なんだか、見ているだけでお腹いっぱいというか……見せ付けられている感じというやつでしょうか？

そして、クゥさんが前進する前にエウロスさんにお願いをする。

「エウロス。バリアジャケット出して」

『はいはい、準備はいつでも出来ておりますとも。ですが珍しいですね？　ご主人はあまりバリアジャケットがお好きではなかったように思っていたんですが』

「そうなんだけどね……この勝負、絶対に勝ちたくなったかから……ちょっと本気モード」

『……左様でございますか。では、どうぞ』

瞬間、クゥさんの体は光りに包まれ、あっという間に着ていたスポーツジャージが消失、黒っぽい色のバリアジャケット……よく見れば、ティアナさんのバリアジャケットのデザインを男の子用に改造したようなものに変わっていた。

これが、クゥさんのバリアジャケット……彼が言うように、本気モードというわけですか……。

「ホムラ兄ちゃん、次の作戦は考えてあるの？」

「……勿論。その為に、クゥの力を貸してもらいたいんだ」

「うん、了解。じゃあ……ルーお姉ちゃん、行ってくるから……」

「えぇ。頑張ってきなさい。二人も、クゥのことよろしくね」

「「はい！」」

私たちは、ルーテシアさんにそう答えると同時に、再びビルの窓から外に飛び出し、反撃のための行動を開始した。
ここからが、私達のターンです！！

あ……そう言えば、私……砲撃から助けてもらった時、ホムラさんに抱きつかれて……その時、胸がホムラさんの顔に当たっていたような……。

き、気の所為ですね、気の所為！！　さぁさぁ！！　気合を入れて攻めていきましょう！！！

お、大人モードの胸なら……恥ずかしくないはず。うん、大きさも結構あることですし。

【アインハルトｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

【ｓｉｄｅ　ｏｕｔ】

「も、もう……クゥったらいきなり『ルーお姉ちゃん』って……それはいろいろ……反則だと思うわけなのよ……」

クゥ達が行った後、ルーテシアは胸に手を当てながら、少しかを赤らめつつそう呟いた。
その姿には、いつもの飄々とした彼女の姿は全く見えず、何か心の中に生まれた波を必死に沈めようとしている風にも見える。

「ルー……お姉ちゃんかぁ……あはは……嫌われてると思ってたんだけどなぁ……あ～まずいなぁこれ……ホント、嬉しい……」

理由は、まぁ見ての通り、クゥとの関係というか、身から出た錆なのだが、ルーテシアを警戒してばかりだったクゥが、初めて自分に対してお礼を、そして『自分の分まで頑張る』というさして珍しくもない……だが、彼女にとっては嬉しいクゥからの言葉だ。

言われた瞬間、一瞬心の中の何かを鷲掴みにされたような気がした。
それくらいのインパクトがあったのだ。

「あ、あはは……いやいや、待ちなさいルーテシア……クゥは七歳で、コロナっていう好きな相手も居るわけで……だ、ダメ……だよね……？」

口ではそう言っても、心は自分の中にある何かに、既に形と名前を与えていた。

こういうものは、理屈ではないとはよく言ったものだ。今まさに、ルーテシアはその理屈ではない何かが、自分の心の中に芽生え始めていたのを感じていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【なのはｖｉｅｗ】

私達の作戦、ホムラ君達をヴィヴィオたちに誘い込んでもらって、長距離砲撃で狙撃するという、至ってシンプル且つ、豪快な戦法は一応の成功を見せた。

ビルの頂上に誘い込んだ上で、ホムラ君達が飛び出してきた瞬間に砲撃を放つ。シンプルゆえの一撃必殺の威力の高い作戦だったのだけど、ヴィヴィオ達が上手く囮役を果たしてくれたので、作戦の大筋は上手くいったと言っていい。

でも、一気に四人を殲滅できるものと、最初は高望みしていたんだ

けど……流石というか、やっぱりホムラ君の直感力を騙すまでには行かなかった。

「う～ん……落とせたのはルールーだけだったかぁ～……作戦自体は良かったんだけどなぁ……」

「設置型シューターの範囲外の屋内のクゥちゃん達を落とすには、いい戦法だったんですけどね……。流石というか……」

「でも、そうでないと面白く無いよね♪　ふふ……やっぱり、ホムラ君素質タップリだなぁ……鍛え甲斐があるよ」

傍にいたコロナと一緒に、自軍エリア内の一際高いビル構造体の、上層階層の一角のフロアから、さっきの砲撃を放ったわけだけど……。

作戦自体は良かったんだけど、結果的に撃墜できたのはルールーだけ。

あとはダメージは軽微といった様子で、ホムラ君たちはまた元気に走りだしている。

恐らく、同じ手はもう二度と通用しないだろう。

それに……。

「さっきの攻撃で、多分こっちの位置が割れちゃいましたよね……？　このままここにいてもいいんでしょうか……？」

「にゃはは、確かにそうだね。相手に与えた情報量は大きい。多分、ホムラ君たちとは別の部隊がこっちに向かってくるだろうし、ホムラ君達自身もここの目指してくるはず……」

長距離狙撃は、一撃目を相手に悟られることなく打ち込めるというメリットが大きいのだけど、同時にいざ回避されてしまった場合、こちらの位置や砲撃の精度、射程、威力などの情報を大幅に露呈させることにも等しい。

結果として、ルールーだけでも落とせたわけだけど、これで相手が全員あの砲撃を躱していたと思うと踏んだり蹴ったりな気持ちになっていたに違いない。

こちらの位置が割れた以上、ポジジョンを帰るのがベストなんだろうけど……。

「でもね、位置が割れるかもしれないってことは予め予測済み。こっちに向かってくるホムラ君たちは、途中でキャロ・ヴィヴィオ・リオちゃん部隊と交戦になる。そして、向かってくるであろう相手のもう一方の戦力にも手は打ってあるんだ」

「……あ！　もしかして……」

「そうそう♪　コロナちゃんの考えてるとおりだね。それに、それぞれが交戦状態に入ってくれれば、足止めが出来る。底をここから私が砲撃で狙撃……場所を変えるのは、まだ早いって言うこと」

まだ、ここで私にやるべき仕事は残ってる……。

打てる手は打っておいたし、後はみんなの力を信じるだけ。
ルールーが抜けた穴……このアドバンテージも、ヴィヴィオたちの方で生かすことが出来る。バックアップが居るのと居ないのではまるで違うから。
それに、相手方の奇襲にも、対応できるだけの人を向かわせた……。あと気になるのは……向こうの作戦の中核かな……？　ルークくん達が、ただ突っ込んでくるだけの戦法を取るとは思えないし。
一体どんな作戦で来るのか……楽しみだね！

【なのはｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【ルークｖｉｅｗ】

「なるほど……ルーテシアが撃墜されちゃったか……」

ホムラから送られて来た、なのはさんの砲撃発射ポイントとルーテシア撃墜の一報。さっきの桃色の閃光を見た瞬間、『あぁ、なのはさんの砲撃だ』と分かるのに数秒を要したが、ホムラからの報告がその事実を一層深めてくれた。

ホムラ、アインハルト、クゥはダメージ軽微な状態で無事なようだが、クゥをかばってルーテシアが撃墜。
まぁ、結果としては最高ではないが最悪でもないといったところか。
それに、とっさの判断ですぐになのはさんの位置データを送ってくるあたり、なかなかに冷静・落ち着いているではないか。

これで、なのはさんの陣取っているポイントに強襲をかけることが出来る。戦場はかなり混乱するだろうから、ティアナが相手の総大将を見つけるのは時間の問題だ。
どちらにしても、なのはさんの砲撃はこう言った防衛戦では脅威の一言、早いところ排除しておきたい。

さてさて……んじゃ、早速なのはさんのところに……」

そう言って、俺はホムホムからのなのはさんの現在地と思われる敵陣地の一際大きなビル構造体を目指すことにした……のだけど、その歩みは僅か二歩で止まってしまうことになった。

そうだ、よく考えてみれば、あのなのはさんが何の対策もなしに自分の位置が割れる可能性のある長距離狙撃を使ってくるはずがないんだ。
そこには、俺達が取ってくるであろう戦法や作戦などを読んで、保険を掛けておいて然るべき。

でもって、俺がというか、別働隊がなのはさんたちの強襲をかけることは、織り込み済みだったようで……。

「フェイトか……」

「あはは……バレちゃってた…？」

と、俺の声と同時に、ビルの影に隠れていたフェイトが空中に現れた。ジャケットはインパルスフォームで、軍服チックな意匠と、短すぎるスカート、黒ニーソの絶対領域が眩しい。

やはり、フェイトは分かっているとしか言いようがない。

「俺のフェイトセンサーを舐めるな。あ、それとまた気持よく空中から登場してくれるのはいいんだけど、見えてるから」

「へ……？　はぅっ……！」

「ほう、今日はピンクか……それにいつもより布の面積が少ないような……」

「べべべ、別にこれ、勝負下着とかじゃないからね！！？　本物の勝負下着は黒のレースで……！　これはその、たまには可愛い感じで勝負するのもいいかなって思っただけで！！！」

いや、そこまで否定せんでも……。

ていうか、確かにフェイトの勝負下着は黒がメインだ。このピンク色も、慌てて口にした通り可愛い路線を狙っているつもりなんだろう。

うむ、俺としてはナイスセンスとしか言いようがない。ただ、やっぱり黒のほうがフェイトのイメージに合っているということは、ここに宣言しておこう。

「まぁ、フェイトが露出魔なのは分かったとして……」

「ろ、露出魔じゃないもん！！」

「ほぉ？　なら、あの際どすぎる、もはやレオタードと言われても仕方のないソニックフォームはなんなのさ？　今だって、スカートの短さ全然意識してなかったし……もう、見せたくて仕方ないのかと……」

「そ、そんなことないよ！！　もぉ～…！！　昔はあんなに素直で可愛かったのに……こんなに意地悪になっちゃうなんて……あ、でも意地悪されるのは嫌じゃｎ……ってそうじゃなくって！！！」

もう、フェイト一人で漫才出来るんじゃなかろうかと思えるくらいのノリツッコミ。

あぁ～……こういうフェイト見てるともの凄く癒される。なんて言うの？　マイナスイオンを振りまいてくれてる感じ。

ていうか、昔は可愛かったって、俺が１７の時に出会ったわけだから、そこまで変わってないはずなんだけど……？

思えば、フェイトは出会った時から全く変わってない……といえば少し嘘になる。

年々、その美しさに磨きが掛かっているというか、女性としての戦

闘力……女子力がもの凄く高くなっているように思う。
あ、もちろん、そのご立派なおっぱいも素敵です、えへへ。

「ととと、兎に角！！！　なのはのところには行かせないからね！！　もう、最近のルークはちょっと目に余るから、そのお仕置きも兼ねちゃいます！！！　フルボッコにしてあげるから！！」

「顔真っ赤にしながら言われても全然説得力っていうか、迫力に欠けるんだけど……」

うん、今日のフェイトもカワイイ。
でも、今は敵同士で、俺はなのはさんを撃ち落としに行かなければならない。
加えて、目の前のフェイトが総大将である可能性も、限り無くゼロに近いが、ありえなくもない……。
ここは、久しぶりにフェイトとのガチンコ勝負と行きましょうか……。

悲しいけどこれ、模擬戦なのよね。

「まぁ、お仕置きということなら……俺も最大限に抵抗させてもらおうかな。逆に返り討ちにして、口では言えないような恥ずかしいことをしてもらおうか」

「え…？　口では言えない恥ずかしいことって……ちょっと興ｈ……って、違う違う…！！　そ、それなら私も、ルークをボコボ

コにして目一杯恥ずかしいことしてもらうから！！」

そうして、俺は腰の鞘からアーカーシャを、フェイトは手にバルディッシュを持ちなおして、それぞれ同時に構える。
フェイトとの勝負はかなり久しぶりだ。

最後にやったのは……2年前くらいだろうか？　あの時は……
あぁ、そうだ、途中でフェイトがソニックフォームになって、鼻の下伸ばしてる間にボコボコにされたんだった……。

ふふふ、フェイト……今の俺を、ついこの前までの俺と思って掛かってきたら、痛い目に会うってことを調ｋｙ……教えてあげようじゃないか。

「ルークとのガチンコ勝負……久しぶりかな……？」

「あぁそうｄ……いんや、夜のベッドでは一週間ぶり……あの時のフェイトはすごかった……」

「あ、あれはその！！　出張から帰ってきて、久しぶりだったから……」

「ひどいわ……私、初めてだったのに……グスン」

「それどっちかって言うと私のセリフだよね！！？　男の子が言うことじゃないからね！！？」

いやはや、やはりフェイトは弄り甲斐がある。もう、年がら年中弄り倒していたいくらいだ。
勿論、エロい意味ではない、ホントだよ？

「……もう、本気で怒ったから！！　泣いても許してあげないから！！」

『Ｚａｎｂｅｒ　ｆｏｒｍ』

「オーケーオーケー。じゃあ俺も、フェイトが泣いて、自分からスカートをたくし上げてくれるまで許してあげないから」

『うわ、鬼畜～……』

「おだまり、アーカーシャ」

お互いに、表情だけは真剣に、口ではそんな事を言い合いながらデバイスを構える。
フェイトは、バルディッシュをザンバーフォームに切り替え、大剣状態になった愛機を手に、俺に襲いかかろうとタイミングを図り、俺も同様にこのお喋りなデバイス、アーカーシャを正面に構える。

ここからは、本気の本気。さてさて、フェイトに勝てるかどうか……。

「行くよ！！　ルーク……覚悟してね…！！！」

「そっちこそ！！　１０秒で昇天させてやらぁ！！！」

そうして、俺とフェイトが同時に飛び出し、お互いに斬撃を放ち合い……アーカーシャとバルディッシュが、けたたましい金属音と共に激突した。

その瞬間……周囲の大気が震え、レイヤー建物の幾つかが倒壊した。

久しぶりのフェイトとの戦闘……全力で楽しんでみようかな！！

【ルークｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

Ｍｅｍｏｒｙ；３９　年上おねーさんの役割（後書き）

Ｆ２０Ｃ「うわぁ……閣下がまたしても……」

ホムホム「綺麗な師匠を返してくださいよ偽者さん」

閣下「ふふふ、久しぶりの出番、みすみす返すわけが」

Ｆ２０Ｃ「あ、次回はクゥメインの話だから。あと、このあとは基本的にルークさん真面目かつカッコイイからｗｗ　オメーの出番ねーからｗｗ」

閣下「（´・ω・`）」

Ｍｅｍｏｒｙ；４０　誕生！　二代目・風の王

ルーテシア「クゥ……頑張りなさい…」

コロナ「クゥちゃん？　あのルーちゃんの乙女な視線はどういうことなのかな？（＃・∀・）」

クゥ「ひぃっ！！？ヒィー（（（（ ゜Д゜）））） ガタガタ」

Ｍｅｍｏｒｙ；４０　誕生！　二代目・風の王（前書き）

秋物の服がほしいです。

でも、服買いに市内に出るのが面倒過ぎる件について……バイト終わりにでも買いに行こうかとか思うんですが、疲れてそれどころじゃないんですよね（；　・、д・´）

それに、家にハンガーの予備もないので……。必要ないときは余ってたりするんですけどね。

肝心な時に姿を見せず、変なタイミングで出てきて何も無いところでこけたりしちゃう、ドジっ子図書委員のハンガー。

しかし、ミスをするたびに、ちょっと涙目になってごめんネと謝るその姿には誰もが寛容な心で許してしまうんだ。

そんなドジっ子な彼女が、どんなことにもいつも一生懸命なのを誰もが知っているから。

うん、こう考えると、ハンガーって結構かわいい（ｒｙ

Ｍｅｍｏｒｙ；４０　誕生！　二代目・風の王

【ホムラｖｉｅｗ】

一瞬、大気が震えた後。僕らの入り地点から８００メートルほど離れたあたりから、轟音が聞こえ、レイヤー建物が土煙を発生させながら、数棟崩壊した。

それが、師匠一人だけで構成されている別働隊と、ハラオウン執務官が戦闘を始めたことによるものだと分かったのは、それからすぐのことだった。

ホロウィンドウに、師匠とハラオウン執務官が、お互いのデバイスを巧みに操りながら、凄まじい戦いを繰り広げている……アレが、Ｓランク魔導師同士の戦いというものなのだろうが……僕達とは、やはりどこかレベルの違いを感じさせられてしまう。

そして、僕が送った高町教導官の現在地と思われるポイントを目指している師匠の方にハラオウン執務官が現れたのと同様に……僕達が走る道の前にも、それを阻む者たちが出現した。

「此処から先は、行かせませんよ。ホムラさん、アインハルトさん、クゥ！！」

「今度こそ、落としちゃうからね！！」

「私も、今回はサポートに回るからね」

ヴィヴィオ、リオ、そして今まで姿を隠してサポートに徹していたキャロさん。

高町教導官達が陣取っているビル構造体に通じる道の上に、その三人が現れたと同時に、僕とアインハルト、クゥは進めていた足を止め、それぞれ構えを取り武器を手にする。

この展開で、この三人が最後の砦になってるってことは……益々、敵の総大将は高町教導官かコロナってことになるな……。どっちがそうなのかわまだ分からないけど、可能性として高いのは、砲撃で居場所が割れてる高町教導官よりも、未だに姿を見せてないコロナかな……？

「ホムラさん」

「うん、どっちにしても、この三人を落とさないと前に進めなさそうだ。それに、ここは高町教導官の射程範囲だから、三人を相手にしてる間に狙撃される可能性もある……当然、設置型のシューターもね」

アインハルトも、同じ結論に至ったようで、視線だけをこちらに向けてくる。

さて……人数的には三対三。形勢は互角に見えるけど、ハッキリ言って状況的には最悪だ。

ルーテシアさんが居てくれれば、まだやりようはあったんだけど、今更無い物ねだりをしても致し方ない。

けれど、意外なところから状況は変わってくる。これがドラマならば、ある意味では燃える展開というやつなのかは分からないけど、この状況を打開し、高町教導官と恐らくだがコロナが居るであろう敵本陣に斬り込むためのアイデアを、僕達三人の中で最年少の彼が打ち出してきた。

「ホムラ兄ちゃん、アインハルト姉ちゃん。ここは……俺一人でやる」

「クゥ？」

「クゥさん……？」

瞬間的に『そんなの無理だよ！』と言いそうになった僕だったけど、クゥの目を見てその声は一瞬で引っ込んだ。

今のクゥからは、いつものオチャラケている彼の雰囲気は全く感じられない。言ってみれば、戦士のオーラというか、覇気というか……七歳という齢からは全く想像もつかないものを確かにはなっていた。

今目の前に居るクゥは……いつもとはまるで別人。本気モードとは、バリアジャケットを着るだけではなく、恐らく心構え的な要素も含んでいるんだろう。

「勝算は……あるの？」

「ないけど……作る。なんか今は、妙に絶好調なんだよね」

そう、クゥが言った瞬間、彼の周りの大気が震えたような気がした。
いや、気の所為じゃない、実際に風が震えて、大気が踊っている。
まるで、クゥの覇気に呼応するかのように。

本当に……クゥって一体何者なんだろうか…？　普通、七歳の子にここまでの戦闘能力はあり得ない。
なのに、クゥは身体能力だけでもずば抜けたものを持っている。当然、将来的に伸びる分を考えれば、底なしと言ってもいいものだ。

「……わかった。じゃあクゥ……まずは僕の指示する方向に風を撃って。そのあとは、全部クゥに任せるから」

「ホムラさん……？　いいんですか…？　流石に三対一は……」

「でも、この状況はあんまりよくない。一人が敵を引きつけて、その間に僕達が敵本陣に乗り込むほうが、状況は変わる。ここで足止めを食らうよりはずっといいよ。それに、クゥには任せられるだけの力がある」

信頼、そんな言葉で形容すれば綺麗なものだけど、実際傍から見れば、僕はクゥを捨て駒にして先に進もうとしているに等しい。
僕が指揮官なら、これが本当の戦場なら……こういう場合、どうい

った決断を下すべきなのか……未熟な僕ではまだ分からない。けれど、今この時、ルールという枠で守られているこの模擬戦において勝利するには、最も合理的な手段だとも思えた。

最低限、クゥが生き残れるような作戦を立てることはできるけど、今のクゥにはそんなものは必要ないように見えた。

「大丈夫だよ、アインハルト姉ちゃん。言ったでしょ？　今の俺、絶好調なんだって」

「……クゥさん…」

そのクゥの言葉に、アインハルトも納得……というか、彼の自信の表れに何かを感じたのか、それ以上反対する様子はなかった。

「よし、じゃあ作戦は決まったね」

「……はい！」「ドンと任せといてよ！」

取り敢えず、指針は決まった。二人の気合の入った返事が、僕の気持ちまでも高ぶらせる。

あとは……上手くこの場をかき回すために……行動を起こすのみ。

多分……そろそろこの模擬戦も決着が付く……。僕らが勝って……終わりにするんだ！！

「行くよ、クゥ、アインハルト！！」

「はい！！」

「うん！！」

そうして、僕達はほぼ同時に地面を蹴った。それを見たヴィヴィオたちも、地面を踏み込み、勢いよく突進しながら肉薄してくる。まずは、僕とアインハルト、そしてクゥとヴィヴィオ達を分断させる必要がある……その為には……！！

「クゥ！！　二時の方向、仰角２５度！！」

「りょーかい！！」

その言葉と同時に、クゥは僕が指示した方向に、寸分違わず勢い良く風の攻撃、小さな竜巻を放った。

その竜巻の子供は、ヴィヴィオたちの頭上を突っ切り、傍にあったレイヤー建物、そこそこ背丈の高いものを半分にへし折ってくれた。そして、支えを失った構造物は、グラっと揺れると、一直線に地上に向かって降り注いでくる。

「アインハルト！！」

「はい！」

それと同時に、僕はアインハルトを抱えて縮地で一気にその場から離脱。大人モードのアインハルトを抱えたわけだけど、全く重くなかった……やっぱり、女の子って不思議だな……。

と、そんな感想は一先ず置いておいて……僕とアインハルトは縮地で戦闘フィールドを一気に突き抜ける。
それに気がついたヴィヴィオ達だったけど、時既に遅し。

ガシャアアアアアン！！

僕とアインハルト、そしてクゥとヴィヴィオ達のいる地点を繋いでいた道は、クゥが破壊した構造物が落下したことによって、完全に塞がれてしまっていた。
これで、戦力の分断は完了した。あとは……クゥの力次第だ……！
クゥ、さっきの自信の真価……しっかり見させてもらうからね！

「行こうか、僕らにも仕事がある」

「えぇ。必ず、総大将の方……ヴィヴィオ様のお母様か、コロナさん……そのどちらかを……いえ、どうせなら両方を討ち取ってしまいましょう」

「うん、その意気だよ。行こう、アインハルト！」

そうして、この場をクゥに託し、僕達はクゥに掛けられた信頼、そして総大将を討ち取るという役目を帯びて、敵本陣の構造体の中に侵入への侵入を開始した。

模擬戦も終盤戦…………ここからは、魔力の出し惜しみも、技の出し惜しみも無しだ！！
アインハルトと一緒に、総大将を討ち取ってやる！！

【ホムラｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【クゥｖｉｅｗ】

ホムラ兄ちゃんの指示通りに、目標の建物をぶっ壊したら、気持ちいいくらいスムーズに戦力の分断が完了した。
もう少し手間が掛かるのかと思ったんだけど、最小数の手で状況を変化させるあたり、流石はホムラ兄ちゃんだって言うことかな……？
さぁて、ここからは俺一人での戦い…………相手はヴィヴィオ姉ちゃんにリオ姉ちゃん、それにキャロさんの三人…………まともに考えたら、アインハルト姉ちゃんの言うように無茶かもしれないけど……

…。

「やられた…ね」

「うん、まさかクゥが抑えに回るなんて……それも一人で」

「戦力が分断されちゃったのは痛いけど……どうしよう……？
ここは、二手に分かれて、ホムラ君達を追ったほうがいいのかな…
……？」

「でも、この瓦礫の山を登ってる間に、もう二人ともかなり先まで
行ってると思いますし……」

ヴィヴィオ姉ちゃん達も、この展開は予想外だったみたい。キャロ
さんが、二手に分かれて追跡するかという提案をするけど、それは
ハッキリ言って面白くない、というか困る。
リオ姉ちゃんが言うように、瓦礫をどうにかしている間にあの二人
なら敵本陣に切り込めているだろうけど、設置型シューターで時間
を食ってるかもしれないし。

ここは、どんな手を使っても、俺の相手をしてもらわないと……。

あ、そーだ…！　ここは総大将ルールをちょっとだけ利用してみよ
う…！

「二手に分かれんのはいいけどさ。『総大将の俺』を放っておいて
もいいのかなぁ～？」

「え…？」

「クゥが……青組の総大将……？」

よし、まずは食いついてくれた……。ここから、なんとか俺の方に注意を向けていきたいところなんだけど……ヴィヴィオ姉ちゃんたちはともかく、キャロさんを騙すのは難しそう……。

「クゥが総大将って言うなら、赤いカードを持ってるはずだよね？」

「あぁ、もちろん。でも、敵にそれを見せないといけないってルールはないからね。どうしても確認したいなら、俺をぶっ飛ばして確認すればいいんじゃないかな？」

「……」

赤いカード、総大将の証明としてのアイテム。

これは、別に相手に提示しなければいけないというルールはない。

だったら、口だけでは総大将として振舞っておけば、三人は俺のことを放っては置けなくなる。

キャロさんたちも、俺が嘘を吐いているのかどうか、それを判断しようとしてるみたいだけど、カードの提示義務がない限りは、状況・俺の行動からそれを推測するか、言った通り俺を撃墜して確かめるくらいしか方法がない。

可能性がゼロじゃない、というか俺達全員が総大将になり得る場合、その可能性が僅かでも高まった人から倒していくのは定石だ……って、お母さんが言ってた。

「うう～ん……でも、今から二人を追っても追いつけるかは微妙だし……」

「ここは、総大将…かもしれないクゥを撃墜するのが優先……かな……？　キャロさん、どう思いますか……？」

「……うん、私もそれでいいと思う。疑わしきは罰せず、の逆バージョンだけど、可能性が高い選択肢から潰していこう…！」

ヴィヴィオ姉ちゃんとリオ姉ちゃんが、キャロさんの指示を仰いで、素早く行動指針を見定める。やっぱり、この中で一番の経験豊富なキャロさんの存在は大きい。

うんうん。ここはお母さんの言うとおりにして良かった……。俺じゃ、どうしていいか分かんなかったし……。

さてと……今日は本気モード……三人相手はしんどいけど、やるからには勝ちに行くよ…！！

「じゃあクゥ？　今度こそ、覚悟はいいよね？」

「御託はいいから掛かってきなよ、この前、『お菓子の食べ過ぎで体重が×××？に増えたー！！』って半べそ描いてたヴィヴィオ姉ちゃん☆」

「（カチン…！）……クゥ～？　いつの間にそんなに悪い口を叩くようになったのかなぁ……？　おかしいな……いつのも良い子のクゥなら…そんな事絶対言わないのに……」

おぉ～…挑発のつもりが、ヴィヴィオ姉ちゃんを本気で怒らせちゃったみたい……。リオ姉ちゃんとキャロさん若干引いてるし……。あ、ヴィヴィオ姉ちゃんの目から、若干ハイライト消えてる……ちょっと怖い。

「クゥ……？　ちょっと…頭冷やそうか……？」

「やれるもんなら、いつでもどーぞ！！」

「それじゃあ……遠慮なく行くよ！！　リオ、キャロさんも！！！」

「「は、はいぃ！！！」」

なんだか、ヴィヴィオ姉ちゃんが親子相伝的なセリフを言った気もするけど気の所為だろう。

文字通り、鬼の形相で構えを取り、傍にいる二人を脅す勢いで声をかけ、ヴィヴィオ姉ちゃんが俺に襲いかかってきた。

リオ姉ちゃんとキャロさん……完全にビビってたなぁ……。

「クゥゥゥゥ～！！！！」

「やぁあ！！！」

「ぬぅ！？」

ガコォォン！！！

ヴィヴィオ姉ちゃんとリオ姉ちゃんの、左右からの同時攻撃。タイミングは息を合わせたように思えるくらいで、両腕で受け止めたのに、痺れそうになった。

この二人、前にスパーした時よりも段違いで強くなってるなぁ……。それに、この拳の重さは二人の自力だけじゃない。キャロさんの強化支援魔法（ブースト）が働いてるんだ……。下手すれば瞬殺されそう…！！

「こんの…！！」

「おっと！！」

「同じ手は食わないよ、クゥ！！」

俺が風を使って二人をふっ飛ばそうとしたところ、ヴィヴィオ姉ちゃん達は素早く後退。手を叩き合わせることで生まれる風の衝撃波は、虚しく空振りに終わる。

自分でも、なんでこんな攻撃ができるのか、風を操ることが出来るのかは分からないけど、この力自体には信頼を置いているつもりだ

った。
けど、ヴィヴィオ姉ちゃん達は俺のことをよく知っている。だからこそ、俺の反撃のパターンや、その手法など。多くの手の内をしられてしまっている。
う～ん……これ、思ってたよりもきついかも……でもね、俺にも啖呵切った以上は意地があるんだよね！！　男の子だからさ！！

「逃さないよ！！　二人とも！！」

俺は両手を二人の方に向け、何か目に見えない壁のようなものを掴む。そう、感覚的に言ってみれば空気の壁……風の境界線というものだろうか？
その正体はよく分からないけど、本能的にこうすればいいと、頭の中に浮かんできた。
すると、その選択肢は正解だったみたいで……。

「きゃぁ！！？」

「うわわ！？」

バフン！！と、そんな音を立てながら、大きめの風の衝撃が発生し、後退していたヴィヴィオ姉ちゃん達を地面にたたき落とした。
そのダメージ分が差し引かれ、二人のＨＰは揃って２５００にまで落ちた。

なんだろ……？　いつもはこんなに広範囲に衝撃波は出せないのに……。やっぱり、今の俺はノれている……というか、やっぱり絶好調みたいだ！！

「ヴィヴィオ、リオ！！」

「おっと…！！」

けど、やはり三対一という形勢はそう簡単には変わってくれない。二人を動けなくしても、後方にキャロさんが残っているから、簡単に俺の攻撃が途中で邪魔されてしまう。

キャロさんの放ってきた、アルケミックチェーンを既の所で回避して、俺は一旦後退。

その間に、生み出した風の衝撃破は掻き消えてしまい、ヴィヴィオ姉ちゃんとリオ姉ちゃんが自由の身になってしまった。

むぅ…ちょっとダメージ与えられただけか……。

「ソニックシューター！！　アサルト・シフト！！」

「双龍円舞！！」

「くぅ！！」

後退した俺を逃すことなく、一呼吸空けることもなく相手方フォワード二人の足元に魔法陣が出現。
ヴィヴィオ姉ちゃんの背後には、虹色に輝く魔力弾の集団。リオ姉ちゃんは周囲に魔力で練り上げた、炎と雷を宿した龍が出現した。

「～～～っ！！　エウロス！！」

『Ｂｕｎｉｓｈｍｅｎｔ　ｃｈａｒｇｅ』

それを迎え撃つために、俺も体の動くままにエウロスに命令。即座に、右足のエウロス、その後ろのウィールが地面を削り取る勢いで、激しく回転を始め『ギャギャギャ！！！』と凄まじい摩擦音が耳に届いた。

そして、そのウィールの周囲に、僅かにボボボッと炎が灯り始める。

『Ｃｈａｒｇｅ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ』

「風爆（ゲイル）の道（・ロード）」

俺は、そのエウロスからの声を聞くと、間髪入れずに右足を蹴り上げるように振り抜いた。
同時に、ヴィヴィオ姉ちゃんのソニックシューターと、リオ姉ちゃんの双龍円舞が俺目掛けて放たれた。

虹色の魔力弾＆炎雷の双竜、それに対するは風と炎を組み合わせた

風爆の道。

「ファイア！！！」

「いっけぇ！！！」

「らぁあ！！！」

ほぼ同時に放たれた3つの攻撃。
それらは、片方は二人の技とが組み合わさった形でコンビネーション技となり、もう片方は風と炎が組み合わさることで生まれた技として、俺とヴィヴィオ姉ちゃん達の間で真正面からぶつかり合った。

「くぅ……うぅ……決め…切れない！！」

「嘘でしょ……！！　こっちは、二人がかりなのに……！！！」

「うぅぅぅ～～～～っ！！！」

ヴィヴィオ姉ちゃんとリオ姉ちゃんは、俺の攻撃の重さに驚いたような声を出すけど、逆に俺には、そんな声を出す余裕さえなかった。
流石に、二人の攻撃を同時に相手にすると、どうしたって力負けしそうになる、というか今まさに力負けしている。

そうか、ヴィヴィオ姉ちゃん達はキャロさんのブースト魔法によって、攻撃に乗る威力を上乗せされているんだ……！！

ノーマルでも受け止めきれるかギリギリなのに……強化魔法まで施されちゃ……！！

「っ……！！」

そのまま、俺の風と炎の道は、二人の攻撃によってジリジリと押され出し始める……。

駄目だ……！！　これは流石に……支えきれない……！！！

「うわあぁ！！？」

そして、ついに二人のコンビネーション技の威力を抑えきれなくなった俺の攻撃は、明後日の方向に軌道をズラされる。

勿論、そうなれば俺の体を守るものは何も無いわけで……。

俺は、虹色の魔力弾の応酬と、炎雷の龍の攻撃によって、派手に吹き飛ばされてしまった。

ガシャアアァァァン！！！

「ぐぅ…！！」

吹っ飛ばされたい勢いのまま、俺は近くにあったレイヤー建物に突っ込んでしまい、構造体の幾つかを崩壊させた上で、瓦礫の山の中

に突っ込んでしまった。

ていうか、あの二人……手加減ゼロじゃん……。俺もだけどさ……。

これが本物の建物なら、俺怪我とかじゃ済まなかったかも……。

見れば、２５００まであったＨＰがさっきの攻撃で、一気に６００にまで減ってしまっていた。うわぁ……これ、ヤバいよ……。

「ケッホ！！　うえ、土煙がひどい……」

何とか立ち上がった俺だけど、魔力ダメージから地面に片膝をついてしまう。ＨＰと同じく、さっきの攻撃はかなり効いた…。

不快感しか湧かない土煙だけど、これのお陰でヴィヴィオ姉ちゃん達は俺の居場所、出方を測れないみたいで、追撃はしてこない……。

でも、やっぱり、三人を相手にするのは、いくら絶好調でも……。

あぁもう…！！　このまま万事休すってわけには、絶対に行かないし……！！　何よりも、ルー姉ちゃんと約束したじゃん……。お姉ちゃんの分まで頑張るって……！！

「何か……何かないかな……？　もっと、もっとすんごい力でもあれば……」

『なぁ～に、言ってんのこのガキンチョは？　すんごい力なら、お前の中に初めからあるじゃんか。相も変わらず、力の使い方が下手

くそな奴……』

「え……？　だ、誰……？」

そんな時……俺の頭の中に、どこかで聞いたような、だけど身に覚えのない人の声が響いた。

一瞬、すぐ近くに誰がいるのかと思ってあたりを見渡したけど、土煙で視界はゼロ。

それに、念話に近い感覚だったので、多分声の主はこの場には居ないのかもしれない。

けど、それ以上に声の主の言っていることには興味が出た。

『俺が誰なのかはどうでもいい。それより、このままじゃお前負けるぞ？』

「負けるぞって……そ、そんな事分かってるよ……。誰かも知らない人に言われなくてって……」

自分の頭で考えていた、敗色濃厚という事実。自分の考える分にはそこまで悔しくなかったけど、人入に言われると不思議とムッとしてしまう。

けど、この声の人の行ってることは、ハッキリ言ってその通りなわけで。

キャロさんのブースト魔法と、ヴィヴィオ姉ちゃんとリオ姉ちゃんのコンビネーション。今のままでは、勝利するのは難しい。

『勝つ方法があると言ったら、お前はどうする？』

「勝つ方法って……そりゃ、勝ちたいから使えるもんなら使うけどさ……」

『そうか……じゃあ、単刀直入に言おう。お前は、自分の力のことを理解していない。理解出来ない力を本能に任せて使ってるだけ。だから中途半端な力しか使えない』

勝つ方法。今の俺には渡りに船な話。この状況を打開するには、どんな事でもいいから縋り付きたい気持ちだった。

けど、声の主から返って来た言葉は、俺には全くチンプンカンプンで……。

理解できていない……？　自分の力を？

『剣術や格闘技でも同じだろう。剣術や格闘技という『技術』の存在を知っているだけでは意味が無い。その技術を理解して身に付けないことには、その技術は力を発揮することはない。お前は、本能的に力を使っているだけだから、風を少しだけ操るだけの力しか使えていない』

「う～……つまり、俺は何も分かってないおバカってこと？」

『おぉ、分かってるじゃないか』

「今すぐ、あんたの顔に俺の右ストレートぶち込みたくなったよ」

ムカつく……。ここまでどストレートにバカにされたの、生まれて初めてかも……。
でも、話の軸だけは理解できた。
確かに、俺は自分のこの力がなんなのか、それを知らずに振り回していただけかもしれない。
イタズラに使ったり……戦闘でのちょっとした裏技として使ったりと……。
思えば、この力がなんなのか、知ろうとしたことすら無かったかもしれない。
でも、この人が言うように、俺の力がなんなのか、それをしっかり理解できれば、今よりももっと効率的に、大きな力が使えたりするんだろうか……？

『いいか？　お前の力は何だ？　もう一度、よく考えてみろ』

「俺の力……？　って…風をちょっと操作できたり……、ちっちゃい竜巻作ったり、衝撃波出したり……う～ん……？」

考える。
いつも、自分はどうやってこの力を使っていたのか……。その時、自分は何をしていたのか……？
何かを理解するには、考えるという行動が必要だ。何の考えも無しに全てを理解できるような奴は居ない。
お母さんは、よくそう言っている。

この声の人も、おんなじ事を言っているように感じた。……て

いうか、ほんとに誰なんだろ…？

そうこうしている間に……俺の頭の中で、小さな答え。欠片のようなものが生まれた。

う～ん…ホムラ兄ちゃんなら、こんなのすぐに分かっちゃうんだろうけど……。

「えっと……風を操る時も、竜巻を作る時も、衝撃波を撃つ時も……なんて言うのかな……？　空気の流れっていうか、風の流れ、生まれるポイントっていうのが見えて……それの少し手を加えて……自分の好きなように使ってる感じ……？」

『そうだ……。なんだ、ちょっとは分かってるんじゃないか。つまり、お前の能力は簡単に言うとだ……【風や空気、大気の流れを認識して、制御する能力】ってことだ』

自分の考えた辿々しい答えを、声の主はしっかりとした言葉として形にしてくれた。

その瞬間、俺の中で、何かがカチッと音を立ててハマったような感覚があった。

【風や空気、大気の流れを認識して、制御する能力】……聞いただけは、うん？と首を傾げそうになるけど、実際に俺はそういう力を使っているんだ。

うん……なんだか、自分の中のモヤモヤしてた霧みたいなものが吹っ飛んだ感じ？

『よし。それじゃあ、ここからは実践セミナーだ。レクチャーしてやるから、俺の言うとおりにやってみろ』

「や、やってみろって…！　そんないきなり……！！」

『出来なきゃ負けるだけだ。それに、あいつの子供ならこんなところで弱音を吐く訳ないと思ったんだけどなぁ？』

あいつ……？　それってお母さんのこと？
この人、お母さんっていうか、俺の事良く知ってるのかな……？

いや、今なそんな事どうでもいい。出来なきゃ負け、それにお母さんの子供ならこんなところで弱音を吐いてる場合じゃない……。
確かに、その通りだと思った。　うん……どうせダメかも知れないなら、当たって砕けろ、だよね！！

砕けたくはないけどさ。

「……そこまで言われたら、意地でも勝って見せたくなった。いいさ、教えてくれよ。力の使い方と、この戦闘の勝ち方」

『……そうこなくっちゃな』

声の人は、少し笑うような様子でそう言う。
けど、すぐに声をさっきと同じトーンに戻すと、すぐに指示を……
というか、抽象的と言われても仕方のないようなことを言って来る。

『まずは集中しろ……。周りの風や空気、大気は全部お前の味方だ。それでもって、風はお前で……お前は風……よくイメージしてみろ。意識を研ぎ澄ませてな。あとは、お前のデバイスがやってくれる』

「……風は俺で……俺は……風……？」

言われるまま、俺は意識を鋭く集中させる。
そして、体の感覚を、今の自分とは全く別のもの……空気や大気、風といった目には見えないけど、確かにそこにあるものを感じるために使う。

風は……空気も、大気も……俺の味方……。
なんだろ……？　もの凄く、心強いっていうか……なんて言うのかな……？

うん、ヤバい……力がもの凄くみなぎってくる感じがする……！！！

そして……
いつものように、風を掴む感覚を忘れずにエウロスに中心に竜巻を……風の集中する力場のようなものをイメージした……

瞬間、俺の周囲の土煙は一瞬で霧散。加えて、瓦礫の山すらも、瞬きする間もなく消し飛んでしまうほどの、巨大な竜巻、いや嵐とい

ったほうがいいかもしれない、風の奔流が俺を中心に発生した。

「きゃぁ…！？」

「こ、これ……なに……？！」

「クゥ……？」

土煙が晴れた先。そこには、驚きを隠せない様子のヴィヴィオ姉ちゃんとリオ姉ちゃん、キャロさんの姿がある。

でも、今は不思議と……負ける気がしなかった。今さっき、気持ちいいくらいに吹っ飛ばされてしまった相手なのに……。

「スッゲェや……！！　もうこれ……誰にも負ける気しないんですけど！！」

そんな俺の声に呼応するように、周囲の嵐は更に力を増した。

力を理解するのとしないので……ここまで違うものなのか……！！でも……これで、この状況を打開できるかも…！！

「よ～し！！　気合入れて、第二ラウンド行ってみよーか！！！」

そうして俺は、嵐を纏った状態でヴィヴィオ姉ちゃんたちに対して、
勢い良くそう宣言してやった……。
うん、今の俺、超かっこいいかも……えへへ。

【クゥｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

Ｍｅｍｏｒｙ，４０　誕生！　二代目・風の王（後書き）

閣下「前書きｗｗｗ　また病気が発症してるぞｗｗ」

Ｆ２０Ｃ「病気とは失礼な。病原菌の君に言われたくないな」

ホムホム「アレですよ、Ｔ－ウィルス的なやつですよね？」

アインハルト「え？　じゃあ、閣下さんに観戦すると……」

Ｆ２０Ｃ「そう……全然笑いがとれなくなってしまう、つまらない人間になってしまうということなのさ！！」

アイホム「な、なんだってー！！！」

閣下「何なんだこの流れは？（´・ω・、）」

次回は、お知らせしておりました１００万ＰＶ記念小説を更新したいと思いますので、本編は一回お休みになります。
内容としましては、ホムホムが薬で大きくなってしまい、アインハルトが大フィーバーするお話です。

あと、嫉妬ハルトもいたりいなかったり……。基本的に、ギャグ中心にな予定なので、お楽しみいただければ幸いですｍ（＿＿）ｍ

次回　番外編　大人になってから思うことがある～皆でやったっけ、あの夏の日～

コロナ「今日のクゥちゃん、かっこよかっｔ…」

ルーテシア「クゥ、今日はかなりかっこよかったじゃない？」

クゥ「せやろ……って、頭撫でないでよ！！（；　・、　д・，）」

ルーテシア「いいじゃない、頑張ってるクゥにご褒美、ご褒美～♪」

コロナ「（＃・∀・）」

番外編　大人になってから思うことがある～皆でやったっけ、あの夏の日～（前編）

この番外編を作ったのは誰だぁ！！

そう叫ばずにはいられないような番外編でございます。本編とは全く時間軸が違うので、アインハルトが既にアスティオンを受領していたりしますが、そこはご容赦ください。

基本的に、大人になったホムホムにアインハルトが悶々しながらハァハァするお話です。というか、アインハルトのキャラが崩壊寸前でございます。

ところで、番外編というと、たまにしかできない特別なお話って感じしますよね。そう、例えるなら、容姿端麗で成績優秀なんだけど、その病弱な体のためにたまにしか学園に来ることができない、病弱系美人キャラ。でも、決して自分の優秀さを鼻にかけたりしないその大らかな性格ゆえ、クラスの皆から愛されていた彼女。

そんなある日、彼女は学園でも札付きの悪と有名な男、『本編』と出会い……その本編こそが、幼い頃に、子供心ながらに結婚の約束をした幼馴染だと知る……（続きを読む）

番外編　大人になってから思うことがある～皆でやったっけ、あの夏の日～

とある日の午後……。
優雅なティータイム……と洒落込みたくなるような時間帯。高町家リビングにて、ある少年の、いろんな意味での危機が迫っていた。

「ふふふふ……ホムラ兄ちゃん……観念しようね？」

「ホムラさん……ゴメンナサイ……でも、どうしても見てみたいんです」

「大丈夫ですよ。副作用とかはないって、ルーちゃんも言ってました」

「もうここは、大人しく身を任せちゃいましょう♪」

上から、クゥ、ヴィヴィオ、コロナ、リオの順に、椅子に座らされている……もとい、拘束されている少年、ホムラ・スメラギに手をワキワキさせながら迫っている。
見れば、ホムラはいつもの学園の服ではなく、なぜか二回りほど大きなサイズの服を着せられた状態で椅子に縛り付けられている。
その彼の表情にはもちろん、恐怖というか不安というか。少なくともポジティブなそれは欠片も見えない。

『この一時間だけ大人の姿になれる薬で……ホムラ兄ちゃんの大人モードを見てみよう！』

全ての元凶は、クゥがルーテシアにもらった、何やら怪しさ満点の薬だった。

大人モード。ヴィヴィオやリオ、今は少し遅れてここには居ないアインハルトが使う、身体強化魔法のようなものなのだが、それによって子供である彼らは一時的に大人の姿に変身することが出来る。

ホムラは、その魔法を組み込んでいないので、そういったモノに縁はなかったのだ……だが。

「え……いや…みんな？　目が怖いっていうか……そのワキワキさせた手をやめようよ……？」

四人「「「「却下♪」」」」

「だ、誰か助けてぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

今まさに、ルーテシア経由で送られて来た、『大人になってから分かるあの時間の大切さ～皆でやったっけ、あの夏の日～』というラベルが貼られた薬によって、ホムラは一時的に大人モードのなろうと、いや、強制的に変身させられようとしていたわけだ。

これは、ホムラが大人モードになることによって起こった、とある

日の事件簿である。

四人「「「「はい、せーの！」」」」

「あ、う…いや、やめ……アッーーーーーー！！！！」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【アインハルトｖｉｅｗ】

ピンポーン♪

そんな聞きなれたベルの音が、インターフォンのボタンを押した瞬間に流れてくる。

目の前には、ヴィヴィオさんのお宅、高町家の玄関。

今日は、いつものメンバーでお茶でもしようということになって、ヴィヴィオさんの家に集まることになっていた。

けど、私は少し学園の用事があったため、少し遅れて合流、家にお邪魔することになってしまった。

ホムラさんは、『待ってるから一緒に行く？』と言ってくれたけど、少し時間がかかる用事だったので、遠慮しておいた。

「随分、遅くなってしまいましたね……」

時間としては、２０分ほどの遅れだけど、遅刻は遅刻。用事があったのは事実だけど、

そして、待つこと数秒。ヴィヴィオさんがインターフォンに気がついてくれたのでしょう、ドア越しに誰かが応対しに来てくれる音が聞こえてきました。

さて、まずは遅れてきてしまったことに対して謝らないｔ…

「待ってたよ、アインハルト」

「すみません、少し遅くなっｔ……る？」

だけど、その声は途中で止まってしまう。

だって……ドアを開けて現れたのは……少し赤色っぽい髪に碧色の瞳の……そう、青年。

歳は、１８～２０歳というくらいだろうか？

身長は１７０センチ台後半、体つきは線が細いようにも見えるけど、それなりにガッシリしている。顔立ちを見れば、優しげな顔の造形の中に鋭く輝くオーラを感じさせる。

そう、あのいつものホムラさんを、大きくしたかのような人物が、

私の目の前にいたわけだ。

「えっと……どちら様でしょうか……？」

「あ～……やっぱり、分かんないよね……。えっと、僕だよ僕。ホムラ」

「え？」

え？

似てるとは思いましたけど……ホムラさん……？　ちょ、ちょっと待ってください？私の知ってるホムラさんは、身長も私とあまり変わらないくらいで、頼りなさ気なのに実は強くて、結構なお人好しで、私をいつもドキドキさせて……。

あの、可愛い中にかっこ良さを持っていた……ホムラさん……？

ど、どういうことなんですか……？　というか、なんで私はここまで体が熱くなって、心臓の鼓動が今日最高値を更新しているのでしょうか……？

「あはは、いつもは身長そんなに変わんないし、アインハルトが大人モードの時は見下ろされてばかりだったけど、いざ身長が高くなってみると、アインハルトってやっぱりちっちゃくて可愛いね？」

「はぅっ！？」

ホムラ…さん？　は私の頭をポムポムと撫でると、身長差のことを楽しげに、そして少し照れながら話してくれる。
私の武装形態のことを知っているということは……やっぱり、この人はホムラさん……。

この、もの凄くかっこ良くて……頭を撫でられているだけで、心臓がうるさいくらいに高鳴ってしまうのが……？
でも、根っこの部分は変わらない……いつものホムラさんの感じがして……。

あれ……？　なんだか、意識が白んできて……？

「きゅう……」

「あ、ちょ？！　アインハルト！！？」

私は、体の異常発熱と、心臓の激しい鼓動を感じながらその場で意識を手放してしまった……。
薄れ行く意識の中で、私の体は大人のような姿になったホムラさんの腕に抱き抱えられて……彼のいつものいい匂いが鼻孔をくすぐる。

あぁ……何でしょうかこの感覚は……？　いま、ものすごく幸せです……。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「え？　一時間だけ大人になれる薬……ですか？」

「うんそう。ルーテシアさんから送られて来たものらしいんだけどね………。それを飲んだら……」

「見事に大人になってしまったと？」

「そゆこと……」

気を失ってしまった私は、気が付けばホムラさんに運んでもらっていたらしくヴィヴィオさんのお家のソファの上に寝かされていた。目を覚ました私の前に、やはり大人モードのホムラさんがいた時には、いい意味で心臓が止まりそうになってしまったけど、何とか堪えることが出来た。

まずいですよ……大人なホムラさん………かっこ良すぎて……胸が勝手に熱くなってしまいます………。

そうして、今回の事の経緯をホムラさんから聞いてみると……どうやらルーテシアさんから送られて来た薬が原因とのこと。

恐らく、ヴィヴィオさんたちに無理やり飲まされたんでしょうね……

……普通ならここでお説教ですが………

ま、まぁ今日だけは大目に見てあげることにしましょう。人間誰だって、子供の頃は悪戯や悪さをするものですから。

「いや～、でもさ、分かってたことだけど、ホムホム兄ちゃんって大人モードになるとかっこいいよね～。普段だと、ちょっと頼りない感じだけど、大きくなったらなったで凄く力強いっていうか」

「そ、そうかな……？　僕としては、ちょっと視線が高くなったくらいしか変わった所がないから……」

「いえ、クゥさんの言う通りカッコイイですよ、ホムラさん！！」

その場にいた全員「「「「「え？」」」」」

し、しまった……！！

思わず拳を握って、ものすごく力を込めてクゥさんに同意してしまいました……。なんだか、皆さんからの視線が……もの凄く生暖かいです……。

は、恥ずかしい……。

「あはは……ありがとう、アインハルト。でも、今の視線の高さから見るアインハルトもやっぱりいつも通り、もの凄く可愛くて魅力的だと思うな」

「クハァッ！！！？」

ヴィヴィオ達「「「「あ、アインハルトさん！！？（姉ちゃん）」」」」」

大人モードのホムラさんが、爽やかな笑みと共に私にそう囁きかけてきた瞬間……私は吐血した。（比喩だけど）

いつもとキャラが違うと言われてもおかしくはないけど……私のキャラ、性格というものを簡単に崩壊させるような威力が、今のホムラさんの表情、言葉、仕草の随所に詰め込まれているわけで。

ハッキリ言って、これは思った以上に危険……！！　落とされてしまいそうです……。

あれ？今どこかから、『もう落とされてるからｗｗｗ』、『手遅れですね、わかります』という感じの声が聞こえたような……？

気の所為でしょうか……？

「はぁ…はぁ……ほ、ホムラさん……やはり、中々出来る人ですね……これは、私も本気を出さなければいけないようです……」

「え？　ちょっと、アインハルト……？　よく分かんないけど、あんまり無理しないほうがいいんじゃ……？」

「あ、甘く見ないでください？　私は後一回変身を残しているんですよ？」

「それどこのフ○ーザ様！！？　ていうか、張り合う意味なくない？」

あ、甘いですよホムラさん……私ばっかりがこんなにドキドキして、悶々とした気持ちになってるんですから、ホムラさんも同じように悶々と萌え萌えしてもらわないと不公平なんですよ……！！

ヴィヴィオさんたちから『アインハルトさんがおかしくなった…』とか『ご乱心！　ご乱心じゃ！！』とか、よく分からない声が聞こえますが、気にしません。寧ろ、もうここまで来たら引き下がれませんから…！！

「行きますよ、ティオ！！」

ここは、私も武装形態になって対抗するしか有りませんね。こんなコトもあろうかと、今日はバリアジャケットの下にはスパッツは無しです……。これがどういうことか、お分かりですかホムラさん……はぁはぁ……？

そして、私は武装形態に変身すべく、八神司令、ひいてはその一家の方々に作って頂いた私のデバイス、アスティオン（通称ティオ）にそう呼びかけ、変身を……

「にゃ～♪」

「よ～しよしよし～……こうか？　ここがいいのか？」

「にゃ～ん……ごろごろ」

「ンな！？」

相棒の名前を呼んでもなかなか返事がないと思ったら……ティオはあろうことか大人モードのホムラさんと楽しそうに戯れていた。
ホムラさんも、ティオのお腹をくすぐったりしながら、かなりご満悦な表情である。
というかティオ……あなたのモデルはシュトゥラの雪原豹なのに……今の姿、完全に猫以外の何物でもないですよ？

まぁ、そんな事はこの際置いておいて……正直、かなり面白くない。

さっきまで私の肩の上で気持よさそうに爆睡していたのに、ホムラさんに会った途端にこれですか？
彼に異常に懐いているのは、かなり前からわかっていたことですが……。

「にゃぁ～♪」

「むむむ……」

「「「あ、アインハルトさんが怖い……」」」

「嫉妬なんだろうね……ていうかこの女の人と同じくらい怖い……」

自然と、ホムラさんと戯れるティオに、何やら言い用のない感情が芽生えてきてしまった私。ヴィヴィオさん達は部屋の隅で肩を寄せ合ってブルブル震えており、クゥさんはソファに寝転がりながら、ドロドロ展開で有名な昼ドラを視聴している。

「にゃ？」

「っ！！」

そして、一瞬、私とホムラさんに遊んでもらってご満悦なティオの視線が交錯した。
ここは、マスターとしての威厳を魅せるためにも、ガツンと言ってやらなければなりませんね。

というか、そのホムラさんに遊んでもらっているポジションを譲れと……

だけど、次の瞬間、ティオの取った行動は、私の想像の遥か斜め上を行くものだった。

「……にゃあ♪（　・ω・）ドヤァ…」

「なっ！！？」

ど、ドヤ顔！！？

今、ティオが私の方を見てドヤ顔しましたよ!!?　デバイスなのにドヤ顔って……!!

ふ、ふふふ……な、なるほど……ティオ…流石は私のデバイス……

…なかなかどうして侮れませんね……。ですが教えてあげましょう、あなたと私の決定的且つ、圧倒的な違いというものを!!!!

「……アスティオン、セットアップ!!」

「にゃぁ!?」

「ぬわぁ?!　い、いきなり何?!」

私の武装形態への移行は、別にティオが離れているからと言ってできないわけではない。音声認証さえクリアすれば、変身は可能。いくらホムラさんと戯れている途中であっても、それを中断させるなど造作もない事!!

ふふふ、ティオ……最後の最後で、詰めが甘かったですね……。

そして、武装形態へと移行した私の姿は、１２歳の少女のものから、ホムラさんと同じくらいの年の頃の成熟した女性のそれへと変化する。

胸も……うん、このくらいまで成長するなら許容範囲内。お尻や腰のクビレも、いずれはこうなってくれると嬉しい……。

「にゃ～……」

「そんな残念そうな声で泣いてもダメです。全く、あなたという子は……ちょっと目を離すとこれなんですから……」

「ま、まぁまぁ……ティオだって、ただ遊びたかっただけなんだろうし……」

「ホムラさんは甘いです。そんな事言って、この子を過度に甘やかすのは、良い子育てとは言いません」

「子育て!!?　これ子育てなの!!?」

あれ？　なんだかさっきから、頭ないつものように回ってくれないというか……逆にいつも以上に回り過ぎてしまって、変な感じになっているような……？

ちょっと頭もポーッとしています……やはり、ホムラさんの大人モードの力は侮れません……。

「子供に甘い父親と、それを尻に敷く厳しい母親……なるほど、これがかかぁ天下というものか……」

「う～ん……なんだか違うようなきがするけど……。でも、今の二人のやり取りは、完全に我が子の教育方針についての話にも聞こえるような…」

クゥさんとリオさんが、何やらコソコソとお話ししているようです

が、一体何なんでしょうか……？
いえ、そんな事よりも、これで私も大人の姿……！！　これから存分にホムラさんにドキドキしてもらいましょう……！！
そうですねまずは……軽いアクセントとして、押し倒すところからはじめましょうか？
あれ？　全然軽くないような……？

「というか、アインハルト大丈夫？　さっきからちょっと変だよ、熱でもあるんじゃないのかな……ちょっとごめんね？」

コツン…

「へぁ！！？　にゃ、にゅ……にゃう……？」

「つ、ついにアインハルト姉ちゃんの言語を司る部分までがおかしくなってきた…！？」

「まぁ、おでことおでこで熱を測るって、かなり恥ずかしいイベントだしね……羨ましいかも」

ほほほほほほ、ホムラしゃん！！？　にゃ、にゃにをしてくれやがっておられるのでしょうでございますか！！？

お、おでことおでこで熱を測るって……！！　お、おでことおでこ、その接触は顔と顔が至近距離に来ることを誘発することにもつながるわけですよ！！

そう…その…傍から見たら、キスしているようにも見えてしまう、ドラマや小説などでは、第三者がそれを見て誤解が生まれるフラグにも使われるものですよ！！？

そ、それを何の躊躇いもなく……は、はぅ……ほ、ホムラさんの顔が、唇が……それもいつもとは違う大人の風貌のカッコイイホムラさんのが……直ぐ近くにぃ！！！

「わ！？　これ、かなり熱いよ！？　アインハルト、熱があるならなんで言わないのさ！！？　ちょ、ヴィヴィオ？　ちょっとベッドとか貸してくれない！？　アインハルト寝かせちゃうから！！」

「あ、はい！！　それなら、二階の私の部屋のものを！」

「ありがとう！！　それじゃあ、アインハルト、ちょっとごめんね！」

おでことおでこで熱を測ったホムラさんは、私から発せられる異常な熱に、血相を変え、ヴィヴィオさんにベッドを貸して欲しいと頼んでいる。

か、風邪とかではなく……純粋にホムラさんの行動が招いた結果なのですが……。

そして、ホムラさんは熱があると誤解したまま、私をベッドに運ぶため、私の体を……？

「よっと……。ゴメン、ちょっと脚とかに触っちゃうけど、勘弁し

てね？」

「ふにゃあ……」

「ま、まさかアレは！？」

「で、伝説の…！」

「イケメンと美女にのみ許された幻の秘奥義にして……！！」

「二千年前のガルガンダル大戦にて、共和国を壊滅寸前にまで追い込んだ、帝国の最終兵器！！」

ヴィヴィオさん達「「「「お、お姫様抱っこだとぉぉ！！！？」」」」

コロナさん、ヴィヴィオさん、リオさん、クゥさんの順に『ドドドド！！』という感じの擬音が浮かび上がりそうな演出を背景に、四人が口を揃えて、どこか演技がかったように言葉を紡ぐ。

そう、今私は……ホムラさんにお姫様だっこされている……。

抱っこの際に、脚を触ることに対して、先に謝る当たりが良くも悪くもホムラさんらしいといえばらしい……。

でも、その手つきはもの凄く優しくて……まるでガラス細工を扱うように優しく、私を抱いてくれていた。

「ほ、ホムラ…さん……」

「大丈夫。僕が責任をもって、アインハルトのこと、ずっと面倒見るから」

「せ、責任……！！　面倒を見る…！！？」

そ、それというのはまさか……！？　けけけけ、結っk……

あぁ、これはダメです……反則です……。お姫様抱っこに、こんな形でプロポーズまで……私達はまだ、お友達の関係なのに……。奪われるんですか、私の純潔！！　いえ、寧ろ奪ってくださいと私は声を大にして言いたい……！！　絶対に言わないけど。

でもでも、その…結婚の申し入れに対する答えは……多分…というか絶対……！！

「ほ、ホムラさん……不束者ですが……末永くよろしくお願いします……（ガクシ）」

「あ、アインハルトォォォォォ！！！？」

そのホムラさんの言葉を最後に、私は完全に意識を失ったのだった。

【アインハルトview end】

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【side out】

余談だが、ホムラの姿は一時間きっかりでもとに戻り、若干おかしくなってしまっていたアインハルトも、目を覚ますといつも通りの彼女に戻っていた。

それも、高町家に来てからの記憶が完全に吹っ飛んでしまっており、なぜ自分がヴィヴィオのベッドで寝かされているのか分からないという様子で、キョトンとしていたそうな。

これ以降、一時間だけ大人の姿になれる薬、『大人になってから分かるあの時間の大切さ~皆でやったっけ、あの夏の日~』はなのはによって没収され、二度と陽の光を見ることはなかった………。

のだが……。

「はい、クゥちゃ～ん♪　このお薬飲んで、ちょっとだけ大人になってみようね～♪」

「ちょ、まっ！！　コロナ姉ちゃん、ゴーレム使って拘束してだなんて……！！　や、やめよう！！　い、今ならまだ戻れｒ」

「だ～め♪　はい、お薬の時間ですよ～……ゞ（≧≦）ノ」

「いや、ちょ……あ、あ……らめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

終わり……？

番外編　大人になってから思うことがある～皆でやったっけ、あの夏の日～（後編）

Ｆ２０Ｃ「はい、という訳でオチはクゥが綺麗に収めてくれましたとさ」

クゥ「収まってないよ！！　ていうか、また前書きで発作起こしてるし！！　なんだよ、番外編と本編って！！？」

Ｆ２０Ｃ「ついカッとなってやった、反省はしている」

ホムホム「あれ？　続きを読むをクリックしても、続きが表示されない…？」

アインハルト「そ、そういう仕様なんですよ（まだまともに目を合わせられない……ｍ（＿＿；）ｍ）」

次回は、ちゃんと本編に戻りますｗ
次回　Ｍｅｍｏｒｙ；４１　王様の全力全壊

コロナ「クゥちゃん……大人モードになるの、そんなに嫌？」

クゥ「や！！（プイ）」

コロナ「じゃあじゃあ、私も大人モードになって、良い子良い子してあげるから。ダメ？」

クゥ「……や、やだ」

閣下「今考えたよ、一瞬頭の中で考えて、『ちょっといいかも』とか思ってたよこの子は」

クゥ「うるさいよ！！」

Ｍｅｍｏｒｙ；４１　王様の全力全壊（前書き）

僕は友達が少ない　７巻買えました～！！　まぁ、通常版なので安心して買えましたけどｗ

でもって、表紙ですよ！！　肉！！　肉！！
肉が可愛い！！　表紙開けば、水着姿の肉だし……ホント、ブリキさんの絵はエロ可愛いので大好きです（∀、＊ゞ）エヘヘ、

アニメイトで買った所、クリア栞が付いて来ました。他の店では何が付いたんでしょうか…。私的には、栞は重宝するのでアニメイトで買ってよかったわけですがｗ
ゆっくり読んでいきたいと思いますｗ

Ｍｅｍｏｒｙ；４１　王様の全力全壊

【ホムラｖｉｅｗ】

「アクセルシューター……！！」

「アインハルト、来るよ！！　避け切れないやつは弾き返して！！」

「はい！！　ホムラさんも！！」

僕とアインハルトの目の前には、桃色のシューターを展開し、レイジングハートさんを構えた高町教導官の姿がある。
クゥに背後を任せた後、僕達二人は赤組の敵本陣、高町教導官がさっき長距離砲撃を放った構造体に侵入した。

けど、流石は高町教導官。僕達が、三人の中の誰かを残してここに攻め入ってくることは予想の範囲内ということだったらしく、構造体の中でも最も面積のあるフロアで、僕達二人を待ち構えていた。

コロナの姿が見えないところを見ると、やはり青組総大将はコロナ……？　いや、それを判断するのは僕達の仕事じゃない。今は目の前の事に集中して、最高の仕事をする…！！
アインハルトと一緒に、高町教導官を撃墜するんだ！！

「ファイア！！」

その高町教導官の声と同時に、シューター、総数３２発がそれぞれの軌道、曲線を描いて僕達に向かって迫ってくる。
設置式シューターと根本は同じだけど、高町教導官が直に誘導する分、命中精度で言えば段違いの代物。ここは下手に避けるよりも、弾き返しながら攻勢に出たほうがいい。

僕とアインハルトは、それぞれ遠距離魔導師対策として、リフレクト方面の技術は持っている。それをうまく生かしていけば……！！

「シューターの軌道さえ見えれば……後は！！」

「っ！！」

シラヌイでシューターを偏向、弾き返しつつ、僕は今できる最高のダッシュで高町教導官に接近する。流石に縮地は使えないけど、それでも反撃には十分な速度。
シューターの軌道を追うのに、視神経を全て費やす。頭の奥がチリチリ痛むような、目の神経が焼けるような感覚に襲われるけど、お構いなしに僕は攻める。

「ここで！！　崩す！！」

「っ…レイジングハート！！」

『Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ』

僕の反撃、シューターの嵐の中を強引に突っ切っての攻撃は、レイジングハートさんが展開したラウンドシールドで阻まれる。シラヌイと魔力で出来たシールドが衝突しあい、耳障りな摩擦音が耳に飛び込んでくる。

防御されたことは残念だけど、これで高町教導官の足と手は止まった。防御に専念すれば、シューターの誘導に割く処理能力は落ちる、あとは、アインハルトが……！！

「はぁぁ！！！」

「惜しいけど、それじゃあ７０点だよ！！」

『Ｂｌａｓｔｅｒ　Ｂｉｔ』

背後に回りこんだアインハルト。そこまでの手際は完璧、攻撃に移る動き、攻撃速度も申し分なかった。

けど、高町教導官、レイジングハートさんのコンビはまさに、ゲームで言えばラスボス級と言わしめるほどのものだと、僕は改めて思い知らされた。

アインハルトが攻撃に移ると同時に、レイジングハートさんの本体ヘッドに酷似した形状のビットタイプの武装が、高町教導官を守るかのように援護射撃を開始した。

「移動砲台……！　いつの間に…！！　くぅ！！」

アインハルトは、その援護射撃を躱すため、攻撃を中断し回避に専念する。ブラスタービットはそんな彼女を高町教導官から引き離すように射撃を続ける。

ビットの数は四基だけど、この数なら僕の相手をしながらでも制御できるってこと……？
嘘でしょ…！？

「アインハルトちゃんの心配ばっかりしてちゃダメだよ？　ほら、注意散漫！！」

「くっ！」

一瞬の油断。いや、不注意と言ったほうが妥当だろうか？
アインハルトの方に意識を向け過ぎていた僕は、なのはさんが高速で生成した追加のシューターに気がつくのが遅れてしまった。

シューターの設置位置は、直上……まず……回避！！

「ファイア！！」

「うわあ！！？」

けど、高町教導官との膠着状態にある僕に、そこまでの余裕はなく、僕はシューターの着弾と同時に勢い良く吹っ飛ばされた。

ＨＰは……１５００にまで減少。まだ余裕はあるけど、まだまだダメージ軽微の高町教導官のＨＰは２８００……ハッキリ言って、状況は芳しくない。

というか、僕とアインハルトの二人がかりでこれって……これが、エースオブエースの実力って……ことなのか。

「ホムラさん！！」

「大丈夫！！　アインハルトは高町教導官の動きにだけ集中してて！！　連携を意識して行かないと、絶対に勝てないからね！！」

「……はい！　分かりました…！」

僕の被弾を心配したアインハルトが、構えを取ったまま状況を確認してくる。

一応、口では警戒をするように言っているけど、多分彼女には不要だろう。アインハルトはそんな事言わなくても油断なんかしない。

さてと……高町教導官相手に、どう攻めるか……。前後からの同時攻撃は、あのビットで無意味にされる……。いっその事、真正面からぶつかってみるのもありだろうか……。

縮地で一気に距離を詰めて、斬り込むのも……。

集束砲なしのルールだけど、高町教導官ならそれを他の技術でカバーしてくるはず。さっきのビットなんかもそうなんだろうけど、あれだけとは考えにくいし……下手に突っ込んでもＨＰを無駄にするだけだ。

選択肢は沢山あるけど……うん、もう少し相手側の動きを観察してからでもいいはず。

よし……ここからは小手先での勝負だ……！！

でも…クゥのことも心配だ………あの三人相手に、大丈夫かな……

…？

【ホムラｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【クゥｖｉｅｗ】

「クゥ！！　後は速攻で撃墜させてもらうからね！！」

「総大将かどうか、見極めさせてもらうから！！」

土煙が晴れた直後、俺の姿がヴィヴィオ姉ちゃんたちの目にハッキリと映る。激しい風を纏ったような今の俺の状態に、若干の戸惑いを見せたようだけど、フォワード二人は怯むことなく向かってくる……。

さっきまでなら、かなり状況的にも、今のＨＰ的にもマズかったけど……今は、負ける気が全くしない…！！

『よし、まずはレクチャーその一。空気と空気の壁、境界線の認識から。これは、お前がよく使ってた技だから、多少のやり方は分かるな？』

「えっと……確か……手の表面で……こうやって……！！」

「何ブツブツ言ってるのかな、クゥ！！」

「余所見してたら、終わらせちゃうよ！！」

ヴィヴィオ姉ちゃんたちの声が聞こえるけど、俺は自分の掌に集中する。頭に響いてくる声の指示通り、いつもやっているように空気と空気の壁、境界線のような物を手で掴む。
その壁を見つけるのは簡単だ。それこそ、呼吸をするくらいに自然にできる。

思えば、これが俺の能力の原点になっているんじゃないだろうか……？

「ソニックシューター、アサルトシフト！！」

「双竜円舞！！」

その間も、ヴィヴィオ姉ちゃんとリオ姉ちゃんは、ソニックシューターと、双竜円舞を再び展開させ、それをトドメと言わんばかりにこちらに向けて放ってきた……。

うん……だけど……やっぱり、今の俺には怖くもなんともないように感じられる。

それと同時に、俺は手で掴んだ空気の壁を自分の目の前に持ってくるようにして……。

「盾にする！！」

ドフン！！

「「えぇ！！？」」

ヴィヴィオ姉ちゃんのソニックシューターも、リオ姉ちゃんの双龍円舞も、俺の目の前に生じた空気の壁によってその勢いを失い、結果的には防がれる。

以前でも、空気の壁と言うか隙間のようなものを扱うことは出来たけど、高威力のシューターや魔法による攻撃を防ぐほどの強度はな

かった。

これが、認識することによって引き出せる力ってやつなのか……？

「きゃ、キャロさん！！」

「うん、分かってる！！　アルケミックチェーン！！」

けど、喜んでばかりもいられない。こういう時にヴィヴィオ姉ちゃんの切り替えは早い。すぐにキャロさんに支援を要請して、今度は近接戦に持ち込むつもりなのだろう。

リオ姉ちゃんと、息のあった動きでこっちに接近してくる。

というか、やっぱり体重の話は禁句だったなぁ。ヴィヴィオ姉ちゃんの顔が……とんでもなく怖い…。

『空に逃げろ。そこからレクチャーその二だ』

「空って……飛んじゃったら、チェーンは避けられるけど、落下地点でヴィヴィオ姉ちゃんたちに待ち受けられちゃうよ…？　俺、飛行魔法なんか使えないし……」

『だから、その為のレクチャーその二だ。お前には飛行魔法なんぞ必要ない、それに相当するような物を見せてやる。ほら、だから黙って本気でジャンプしろ』

「わ、分かった……よっと！！！」

声の主に言われるがまま、俺はアルケミックチェーンを回避するべく、空中に退路を取る。
予定通り、銀色の鎖の応酬を回避することは出来たけど……やはり、落下地点にはヴィヴィオ姉ちゃん達が待ち受けている。
空中退避は、ある意味最悪手になりうることが多い。陸戦魔導師なら尚更だ……って、前お母さんが言ってた。
その最悪手を、今まさに俺はとっているんだ……！！

「で？　ここからどうす……いや、言わなくてもいいや、もう分かった」

『そう言うだろうと思ってたよ。見えるだろ？　お前だけの専用道路がさ』

この戦闘では、スバルさんやノーヴェがいないため、ウィングロードもエアライナーも存在しない。
故に、空中に描く走行ライン、足場、陣形は取ることができない。
飛行魔法を使えるホムラ兄ちゃんたち、空戦魔導師なら話は別だけど、それ以外は地面ありきの戦いになる。
俺自身、その一人だ。
けど……

『風っていうのは、大気の相対的な移動速度の差によって生まれる。
でもって、お前はその風の流れ、ぶつかるポイント、風が生まれる場所を認識できる。だからこそ、力の本質を知ったお前なら、見えてるはずだ』

「俺だけの……専用道路……。風が作ってくれた、風の道か……
これに乗っていければ……！！」

俺の目には、風の流れと、そこから生まれる風の道……つまりは、俺だけが走れる風の専用道路が見えていた。
多分、ヴィヴィオ姉ちゃん達は見えていないだろうけど、俺にはハッキリ見える……。

そして、俺はその風の道に、迷うことなくエウロスで飛び込んでいく。すると……

フワ……

「え！？　く、クゥ……なんで……？　道も何も無いところを……」

「空を……走ってる……！？」

「おわ…！！　これ……凄げぇや……！！」

風の道にエウロスで足を踏み入れた瞬間、エウロスが風を掴んでく

れたような……俺自身を乗っけてくれたような、そんな感覚が俺を襲う。
そう言えば、エウロスを作ってくれた…エステル姉ちゃん言ってたっけ……？　『エウロスは風を掴んでくれるデバイスなんだよ』って……。
その意味が、今やっと分かった気がする……。

「……どんなトリック分かんないけど……撃ち落としちゃえば問題ないよ！！　ソニックシューター！！」

風の道を使って、空を自由に走り回る俺を撃ち落とそうと、ヴィヴィオ姉ちゃんは虹色の魔力弾を放ってくる。
だけど、今の俺には、もう怖いものではない。

風の道は、俺にしか見えない。だから、俺自身の軌道ラインは俺にしか分からない。
動きの先読みができない分、シューターの命中率はガクリと下がってしまうものだ。

「空中で、走行ラインを変えた……？」

「一体どうなって……？　もしかして、クゥが元々持ってる力か何かなのかな……？」

リオ姉ちゃんも、ヴィヴィオ姉ちゃんも、空を走ることが出来る事

と、ソニックシューターを易々と避けたことに驚いているけど、俺の力はまだまだこんなもんじゃない！！
さぁ！！　一気に三人纏めて撃墜しちゃおうかな！！？

「よぉ～し！！　こっから反撃だ！！」

「っ……キャロさん、支援お願いします！！」

「うん、勿論！！　二人は攻撃だけに専念して！！」

「リョーカイです！！」

ヴィヴィオ姉ちゃんは、少し焦りを覚えたのか、キャロさんに素早く支援を頼む。それと同時に、その指示を読んでいたかのようなタイミングでキャロさんのブースト魔法が、ヴィヴィオ姉ちゃん達の力を底上げしていく。
多分、さっきよりもヴィヴィオ姉ちゃんたちの力は高まっているはず……！！　けど！

「クゥ、調子に乗るのもここまでなんだから！！」

「はっ！！　笑止！！　この前、同じクラスの男の子に告白されて、お断りの返事する時に、噛み噛みになってたヴィヴィオ姉ちゃんなんかに負けないもんね！！」

「うぅ～～！！！　あれは忘れてってばぁ～！！　も～～～～！！！」

ガコォォン！！！

そんな会話を交わしながら、僕とヴィヴィオ姉ちゃんは空と地上という、相対的な位置から拳を放ち合う。
その攻撃は、お互いに衝突し合い、拳と拳が激しい衝撃音を響かせる。

キャロさんのブースト魔法で、強化されたヴィヴィオ姉ちゃんの拳の重さはかなりのもの。だけど、俺だって負けてなんか…ない！！

「セイハァ！！！」

「うあっ！！？」

力勝負のガチンコは、俺の勝ち。拳同士でぶつかった俺とヴィヴィオ姉ちゃんだったけど、力負けしたヴィヴィオ姉ちゃんの方が吹っ飛ばされる形で、地面に叩き付けられる。これにより、ヴィヴィオ姉ちゃんのＨＰは一気に１５００になる。
なんだろ？　風を操る力のコツもそうだけど、今の俺、かなり良い感じに力が溢れてる……よく分かんないけど、これはこれで動き易い！！

「隙あり！！」

「！」

と、俺がヴィヴィオ姉ちゃんを力で押し込んで、僅かに生まれた硬直時間。その隙に、リオ姉ちゃんが背後に回りこんでいたようだ。元々、リオ姉ちゃんの本分は接近戦。さっきまではミドルレンジからの攻勢に徹していたけど、リオ姉ちゃんの本当に怖いところはクロスレンジでの戦闘力の方だ。

「轟雷砲！！」

雷神装、加速魔法で身体強化をしてからの、リオ姉ちゃんお得意の雷を纏った状態の蹴り技。

一回戦目で、コロナ姉ちゃんのゴーレムの体制を崩すために使った、威力満点の技。

残りＨＰが６００しかない俺にとっては、掠るだけでも致命傷になりかねない。

でも。

『当たるのがヤバいなら、止めちゃえばいいだけってか？』

「そのとーり！！！」

リオ姉ちゃんの攻撃に対して、俺は振り向きざまに自分と、相手の間に密度の高い風を集中させる。

相手の攻撃を面で捉えるのではなく、一点集中。点で防御するために。

リオ姉ちゃんの轟雷砲は一点集中型の高威力を誇っているから、空気の壁ではさすがに対処しきれない。だから、密度を局部的に上げて防御してやればいい。

ドフッ！！

「なっ、またぁ！！？」

「リオ姉ちゃん……攻撃の威力はものすんごいけど、生憎と……速さが足りない！！！（言ってみたかっただけ）」

「っ！？」

空中で轟雷砲をキャンセルされたリオ姉ちゃんは、一言で言えば隙だらけ。

俺がそのタイミングを逃すわけもなく、エウロスの後輪ウィールが激しく回転。即座に風の流れを掴み取り、それを強力なトルネードに変えてリオ姉ちゃんに思い切りぶつける。

「吹っ飛んじゃえ！！」

「って、それは流石に……うそぉぉぉぉぉ！！？」

小さなトルネードは、リオ姉ちゃんを綺麗に捉えてさっきの技同士の力勝負で負けた、俺みたいにレイヤー建物を一棟崩壊させながら、綺麗に吹っ飛んだ。
そして、リオ姉ちゃんのＨＰが一気に０に。
まずは、一人……でも、次で纏めて全員撃墜しちゃうもんね！！

「「リオ！！」」

「あはは～……ごめ～ん……やられちゃった……」

俺を挟んで、ヴィヴィオ姉ちゃんとキャロさんが、撃墜されてまたしても崩壊してしまったレイヤー建物の瓦礫の上で『ごめ～ん！』と手を合わせているリオ姉ちゃんに声をかける。
保護フィールド内で行われる模擬戦なので、怪我などの心配はないけど、やっぱり仲間が撃墜されるのはいい気分ではない。
さっき、ルー姉ちゃんを撃墜されたところだから、嫌でもそれは分かってしまう。

でも、悲しいけどこれ、模擬戦なのよね。

倒れた仲間に気を取られてちゃ、隙だらけだってね！！

「余所見してていいのかな、二人とも！！？」

「「っ！！？」」

言いながら、俺は片方の手を前に出し、そこに風を、空気の流れを一気にかき集める。
風を圧縮し、手のひらの上で、小さな球体状の台風が出来上がる。
球体状の台風の中では、強力な風がひしめき合って、その威力を全開にする時を今か今かと待ち構えている。
これで……決めてやる!!　俺の新必殺技……！

「ヴィヴィオ!!　シールド張って!!」

「りょ、了解!!」

俺の技のヤバさを、キャロさんは見ただけで判断したらしく、すぐにヴィヴィオ姉ちゃんにガードの指示を飛ばす。
へへ、でもこの技、防御なんかしきれるかな…？
言っとくけど、多分なのはさんのディバインバスター並の威力あるかもよ…!!

俺は、手のひらで猛っている球体状の台風を宙に放り投げ、自分も一緒に飛び上がる。
そこから、その小さな台風に足に履いたエウロスを触れさせ……技の発動を促すトリガーを引いた。
即ち、小さな台風の中に圧縮され、ひしめき合っていた狂った風を

「狂乱の風(フレンジー・エアード)!!」

解放してやる……！！

「でりゃあぁぁぁ！！！」

「げ……」

「とんでもなく大きい竜巻……！！？」

俺の叫び声と一緒に放たれた、フレンジー・エアードはさっきまでのトルネードとは比べものにならないほどの威力とサイズを誇った、巨大な風の渦となってヴィヴィオ姉ちゃんたちを襲った。
圧縮された風達を一気に解放、それによって生まれた風の渦は、これまでに見たことのない程の規模だ。

当然、ちょっとやそっとのシールドでカバーできるもんじゃない。
だからこそ、ヴィヴィオ姉ちゃんやキャロさんは……。

「い～やぁぁぁぁぁぁ！！？」

「ふえぇぇぇ～～～ん！！　エリオくぅぅぅぅん！！？」

展開したシールドも虚しく、そのシールドごと風の渦に飲み込まれ、まるで洗濯機の中に放り込まれたように、風の渦に弄ばれる。
あ、ヴィヴィオ姉ちゃんのバリアジャケット、ちょっと破けちゃった……。

そして、怒り狂った風の渦に飲み込まれた二人は、その風の消滅と共に地面にポテンと尻餅をつく。
言うまでもないかもしれないけど、ＨＰは両者ともに０だ。

「うぅ～～～やられた……」

「め、目が回っちゃったかも……うぅ……」

地面に大の字になりながら、悔しそうにするヴィヴィオ姉ちゃんと、目を回してしまっているキャロさん。
リオ姉ちゃんに続いて、ヴィヴィオ姉ちゃん、キャロさんを撃墜……つまりは……。

「勝った……！！　やった、勝った勝った！！！♪」

『当たり前だな』

この一対三という、絶望的な戦況の中……俺は最高の仕事が出来たってことになる。
思わず、テンションが上がってしまって、その場でピョンピョン跳ねてしまった……やば、変態兄ちゃんや、お母さんに見られたら間違いなく弄られる……。

頭に響いてくる声もどこか嬉しそうな感じがしただけだけど、そう聞こえた。

『ま、及第点だな』

「それはどうも……ていうか、さっきのあれ……ものすごく、疲れる……」

勝利の余韻もそこそこに、俺の体はかなり疲れきっていた。というか、かなり体力を持っていかれてようで、頭の中が白んできてる……。

加えて気が付けば、俺の周囲に待っていた風はその姿を消しており、風を纏った状態は解除されていた。

『お前はまだ、体が子供なんだ。あんだけのことをすれば当然疲れる』

「ってことは……そうホイホイは使えないってこと？」

『あぁそうだ。あと、無理して能力を酷使すると、冗談抜きで死ぬからな。そこんとこだけ気を付けるこった。愛しのママと嫁を泣かせないようにするんだな』

「だ、誰が愛しのママと嫁か！！？……って、だめだ……体に力入いんない……お腹空いた……」

謎の声は、それっきり何も言ってこなくなる。同時に、俺の体は体力の限界だったのか、ゆっくりと地面に倒れていく。視界の端に、そんな俺に気がついたリオ姉ちゃんが駆け寄ってきているのが映る。

自分の体が並行感を失っていくのを感じながら、俺は意識を失った……。

ホムホム兄ちゃん………仕事は、ちゃんとしたからね………。

【クゥview end】

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【side out】

「はぁ~………ホント、手間の掛かるお子様だよ。力使い果たして気絶とは………まだまだ成長途中ってことか」

陸戦上から数百メートル離れた森の中、人一人を軽く超えるほど太さのある大木の枝に寄りかかりながら、森の中には不釣り合いとしか言い用のない黒のスーツタイプジャケットとスラックスという、カジュアルなスタイル。

掛けたメガネのズレを直しながら、ミールは静かにそう呟いた。

「力の使い方を知らないっていうのは……多分、ティアナ・ランスターが何も教えていないってことか………。なるほど、普通の人間

として育てるつもりなんだな……」

ミールは誰に言うでもなく、一人でそう呟くと、少し嬉しそうな表情を浮かべる。

クゥは特別だ。以前、巷を騒がせたイノベイト・チルドレンの中でも、その存在は特殊且つ、重要。

普通の人間にとっても、である。

だが、ティアナはその重要さを理解していながら、敢えて普通の子供として育てようとしているわけだ。

確かに、母親としては最高の仕事をしている。それは、『彼』もそう望んでいたことだ。

「でも、流石に能力の危険性くらいは最低限教えておくべきだ。まぁ、それも俺の仕事の一つなわけなんだけども……」

普通の人間として、健やかに育ってくれるのは、確かに望ましいことだ。クゥという、特別過ぎるイノベイト・チルドレンの存在は、人の意思そのもの、その集合に大きな影響を与える。あまり、刺激的過ぎるバイオレンスな生活はさせないほうが吉だ。

しかし、何も知らないということは、得てして危うさを助長させる。

クゥの能力のこと、恐らくティアナも分かっているのだろうが、敢えて何も言わない。

おそらくは、『彼』が居なくなってしまったことが、彼女の中で一種のトラウマになっているのだろう。

だからこそ、いなくなる原因になった、イノベイト・チルドレンの

能力面に関してはあまり触れたくない。

当然だ。

人間ならば、そう考えるのが普通だし、ひとつの正解でもある。

が、何も知らない状態で振舞わす大きな力ほど、危険なものはない。

それ下手をすれば、クゥ自身を殺すことにも繋がる可能性がある。

だからこそ、ミールは最低限の知識をクゥに与えることにした。ティアナに出来ないことを、代わりにやったわけだ。それが、彼の仕事の一つだから。

「大丈夫さ。あいつはどこにも行かないよ、ティア」

自嘲気味な笑を浮かべながら、ミールは樹の枝の上に立ち上がり、またしてもそこから、霧のように消えてしまった……。

後には、何も残すことなく。

Ｍｅｍｏｒｙ；４１　王様の全力全壊（後書き）

閣下「痛みが増えていく……悲しいよ」

Ｆ２０Ｃ「おい、私の中の神作品を汚すでないわ」

閣下「あふん」

蒼穹のファフナー　ＨＥＡＶＥＮ　ａｎｄ　ＥＡＲＴＨ　のブルーレイを買って早速視聴したわけですが……やっぱりファフナー最高です！！

熱い展開あり、カッコイイ大人あり、ロボ成分あり、小難しい話ありと……うん、ＴＶシリーズからずっとファンでよかった…。続編もあるらしいので、期待は膨らむばかりです。

蒼穹のファフナー、面白いので是非ともオススメでございます。

と、作者は作者はさり気なく宣伝をしてみたり

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；４１　ラブラブ断空剣（笑）

模擬戦二回戦だけで、かなり話数を使ってしまっているような……。

というか、このシリーズの終わりが見えないでござるの巻。

クゥ＆コロナ「「二人のこの手が真っ赤に燃えるぅっ！　」」

クゥ「幸せ掴めと！」

コロナ「轟き叫ぶっ！」

クゥ＆コロナ＆ルーテシア「「「ばぁぁぁぁぁぁくねぇつっ！！ゴッドォッ！！フィンガァァァァァァッ！！　」」」

コロナ「って、ルーちゃん！！　良いところで割り込んできちゃダメだよ！！」

ルーテシア「あら？　私だってクゥの第二夫人よ？　ラブラブ天〇拳やりたいじゃないの」

コロナ「だめだめだめ～！！　正妻の私が一緒にやるの！！」

Ｍｅｍｏｒｙ；４１　ラブラブ断空剣（笑）（前書き）

ものすごく今更なんですけど、ＶｉＶｉｄ四巻、限定版についてたちびキャラアインハルトのフィギュアを箱から取り出して見ました。今まで、完全にノータッチだったんですよね……（＾―＾；）

で……あの……私のパソコンデスクの隣に天使が舞い降りたんですが、ヽ（。▽、。）ノエヘヘヘヘ

アインハルト、可愛いよアインハルト。

でも、汚してしまうのは嫌なので、すぐに箱に戻してしまうわけですがｍ（＿＿；）ｍ

限定版の大きな箱が本棚にてその存在感を物語っている今日この頃ですｗ

Ｍｅｍｏｒｙ；４１　ラブラブ断空剣（笑）

【なのはｖｉｅｗ】

赤組本陣兼狙撃ポジションとして選んでいた、一際背の高いビル構造体。その中の大体真ん中辺りの階層になるのだろうか、その階層の最も面積の広いフロアで、私はアインハルトちゃんとホムラ君の二人を相手に、表情には出さないけど、かなりギリギリの戦いを強いられていた。

「だあぁぁ！！！」

「（速い…！！）」

ホムラくんの縮地、いや、全力の一歩手前のものなのだろうけど、気を抜くと本当に目に映らなくなってしまう。
スピードだけで言うならば、お世辞抜きでフェイトちゃん並なんじゃないだろうか？
フェイトちゃんの方が、経験や魔力量や総合力で言えば段違いで上なんだけど、スピードという部門だけで見れば全く負けていない。
ホムラ君のことを分析しつつ、私は彼のデバイス、シラヌイを使って繰り出される鋭い剣閃をレイジングハートで受け止める。

「（最後の訓練は、確か一週間前だったかな？　その時よりも確実に太刀筋が鋭くなってる。まだまだ鍛えるべきところは沢山あるし、ルーク君じゃないと分からない剣術の範囲の事とかもあるだろうけど、確実に成長してる…！！）」

生徒の成長は、やっぱり嬉しい。
それも、こんな短期間でメキメキと力をつけてくる子はそうそういない。俄然、指導する甲斐があるというもの。
ホムラ君だけじゃない、ヴィヴィオもアインハルトちゃんも……
まだまだ伸びる可能性が十分すぎるくらいにある。
そしていつかは、私達よりも強くなって……。

「はぁぁ！！」

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

バチィィィ！！！

このアインハルトちゃんの拳が、今よりも強くなって、いつかは防ぐことも出来なくなってしまうかもしれない。
でも、指導者としてはそうなることが、何よりの喜びになる。
次の世代を育てること。それが、私の仕事だから。

「こんなに……攻めているのに……与えられたダメージは５００ポッチですか……」

「キツイね……これ……」

私の今のＨＰ残量は、戦闘開始から徐々にだけど、確実に削られている。さっきまで２８００あったそれは、今では２３００にまでになっていた。

アインハルトちゃんもホムラくんも、ＨＰはかなり減ってはいるものの、攻撃の鋭さは時間を経るごとに増していくように思う。

と、そんな時だった。

ホロウィンドウに、ヴィヴィオ達からの通信が入ったのは。

『なのはママ……ゴメン、私とリオ、キャロさん……撃墜されちゃった……』

「え？！　相手は？　クゥと……もしかして、ティアナが前線に……？」

『う、ううん……その……クゥ一人にボコボコにされちゃって……あはは……』

「……！」

ヴィヴィオからの通信の内容に、私は思わず息を飲んだ。

ヴィヴィオとリオちゃん、そこにフルバックの要であるキャロを付けたこの布陣なら、相手が三人でも、互角以上の戦いができると踏んでいた私だったけど……。

実際、ヴィヴィオ達の相手をしたのは、クゥ一人。勝率なんて、絶望的で計算するまでもないはずなのに……。

いくらイノベイト・チルドレンだからと言っても、クゥはまだ幼い。特有の力の本質も、まだ分かっていないような……言ってみれば、本当の意味で『幼子』なのだ。

「クゥは？　こっちに向かってるのかな？」

『ううん。クゥも、私達を撃墜してから気絶しちゃって……。あ、でも総大将じゃなかったみたいだから、残りのホムラさん達の中の誰かになるよね』

気絶……。

何があったのか、まだ把握しきれていないけど、クゥがすごい活躍と言うかとんでもないことをやってのけたのであろうことは理解できた。

だけど、これで赤組の残りは私、コロナちゃん、フェイトちゃんの三人……。こっちの総大将である『彼女』がやられなかっただけ良かったと思うべきだろうか……。それでも、ヴィヴィオ達の抜けた穴は大きい。うん……これは厳しくなってきた……。

「クゥさん……頑張ってくれたみたいですね」

「うん。でもまさか、あの三人を相手に勝っちゃうなんて……流石っていうか、なんていうか……」

私達の通信から、クゥがヴィヴィオ達三人を下したことを聞いたホムラくんとアインハルトちゃんは、驚くのも当然だがそれよりもホッとしたという気持ちのほうが大きいようだった。
自分よりも年下の子に、足止めを任せてきたことを少なからず気にしているというところだろう。

「僕達も、負けてらんないね…！！」

「その通りです…！！」

「にゃはは……これは……俄然気合入れていかないと負けちゃいそうかな……？」

ホムラくんとアインハルトちゃん、二人は同時にそう言うと測ったように同じタイミングで構えを取る。
その表情からは、先程少しその影を見せていた疲れなどは消えており、闘争心全開の心象が伺える。
う～ん……やっぱり、若い子は違うなぁ……

あ、わ、私だってまだまだ２３歳なんだし、若い……うん、若い……はず…！！

「（さぁて、二人がどう攻めてくるのか……それを見極めて、作戦を実行に移さないとね。このフロアにホムラ君達を誘い込めた時点で、その第一段階は整ってる。あとは……私がこの二人に決定的な隙を作ることだけ！！）」

私は、再びレイジングハートを握り直し、ホムラ君達に向き直る。
正直、クロスレンジは私の専門分野外といえばそうだ。本来、砲撃タイプの魔導師は接近戦を好まないと言うか、その方面の訓練のレベルはどうしても純正の近接戦闘魔導師のそれには敵わない。

私も、それなりには近接戦をこなすことはできるけど、流石にその方面でのスペシャリトであるこの二人を相手にするのはさすがに骨が折れる。
そんな私が、ここまでＨＰを温存し、相手のＨＰを徐々に削れている訳……それは一言で言えば、彼らと私の純粋な戦闘経験の差だ。

ババババッ！！！

「ふっ！！」

「（まだこんなスピードで……！！）……！！」

今まさに、ホムラ君が縮地の超スピードからの攻撃を捌けるのも、同じようなスピードタイプの魔導師、言ってみればフェイトちゃんとの戦闘の経験が生きている。
超スピードからの突っ込みから、如何にして攻撃に連携させていく

のか。そう言ったサンプル的な、他人の戦闘スタイルを見ているのといないのでは、大きな差がある。

その他人の戦闘スタイルと、今目の前で戦っている相手の戦闘スタイル。その二つがどう違うのか、どこが違うのかを分析し、目の前の相手との戦い方として最適な形に近づけていく。

最も大切なのは、そのためのイメージする力なんだ。

ガキィィィ！！

『Ｓｈｏｒｔ　Ｂｕｓｔｅｒ』

「っ！　速っ…！？」

ホムラ君の攻撃を受け止め、即座に自分が放つことのできる最速の攻撃で牽制する。

ホムラ君は私のショートバスターを、その場で跳躍して、シールドに接触したままのシラヌイを軸に、私の頭上を一回転して後方に回って回避。

ショードバスターはビルの構造体の壁を破壊して消滅してしまう。

「――――覇王」

「（後ろ！！）」

「断空拳！！」

ガコォォォ！！！

僅かな気配。

だけど、その凛とした、一本筋の通っている気配だけに反応し、私はホムラくんから視線を外さずに後ろにラウンドシールドを展開。

瞬間、体全体が痺れるかのような衝撃が私を襲った。アインハルトちゃんの、覇王断空拳……分かってたことだけど、ここまで重い一撃だなんて……！！

見れば、断空拳のエネルギーをシールドで相殺しきれなかったのか、私のＨＰは２３００→１８００になってしまった。防御してもなおのこの衝撃、流石と言うか、末恐ろしい。

けどね！！　私だって負けてない！

『Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ』

「シューター……！　まさか、さっきの単発のバスターと同時に……！」

断空拳を放ち終わったアインハルトちゃんの体はがら空き。５００のダメージを負ってはしまったけど、この硬直時間を稼ぐためならば安い投資だ。

アインハルトちゃんが呟いた通り、私はさっきホムラ君に対して放った、ショードバスターと平行して、アクセルシューターを展開していた。

並行処理だから、数は6発だけだけどアインハルトちゃんのHPを削るには十分!!

「ファイア!!」

「っ〜〜!!!」

私のシューター発射の合図と共に、アインハルトちゃんは咄嗟にバックステップしながらガードしようとするけれど、僅かに私のほうが早い。

シューターは、アインハルトちゃんに直撃……!!

「八重桜!!」

「なっ…!?　あの距離からいつの間に……!」

けど、そのシューター六発は、まだ滝の間にアインハルトとシューターの間に割って入ったホムラが、高速の八連撃によって叩き落されてしまう。

これが、全力の縮地……訓練校で見た時よりも早くなってる…。

ホムラくんから視線を離していなかったはずなのに、全然反応出来なかった……!!

というか、シューターの真ん前に自分の体を躊躇いなく割って入ら

せるなんて……度胸があると言うか、命知らずと言うか……。

「すみません…！　ですが、今のはかなり危ないですよ！？　私のHPにはまだ余裕があるのに……」

「ゴメン！　体が勝手に動いてた！　謝るのも、怒られるのも後でいくらでも聞くから！！　今は高町教導官を撃墜することだけを考えよう」

「それは分かってます…！！　け、けれど、後でたっぷりお説教ですから！！」

そんな口論…というか、やり取りをしながらアインハルトは体勢を立て直して、構えを取り直す。

う～ん……アインハルト？　お説教はいいんだけど、顔真っ赤にしながら言っても全然威厳がないっていうか……、顔が完全に乙女になっちゃってるよ…？

この二人、本当に見てて飽きないっていうか、初々しいすぎる気がする。

あれ？　よくよく考えてみると、私の周りって恋してる子が多いような……？

フェイトちゃんは言わずもがななんだけど、ルークくんと未だに新婚さんみたいな感じだし、クゥはコロナちゃんと仲良しだし、ホムラくんはアインハルトちゃん、ヴィヴィオも少しホムラくんのことを気にしてるみたいだし……。

も、もしかして私って、Ｉ☆ＫＩ☆Ｏ☆ＫＵ☆ＲＥ……

うん、考えなかったことにしよう。それに今は模擬戦の最中。余計なことを考えている余裕なんて無いんだから……ないんだからね？

見れば、ホムラくんとアインハルトちゃんは、視線を合わせたまま、どうやら念話を飛ばして短い作戦会議をしているらしい。
う～ん……私が二人の相手をするのがギリギリだってこと、バレてないといいんだけど……。長距離狙撃とか、設置型魔法とかで序盤でかなり魔力を使っちゃったから、ハッキリ言って残りの魔力は心許ないんだよね…。

「よっし！！　それじゃあ、アインハルトそういうわけでよろしく！」

「はい！」

おや？
どうやら作戦会議は終わったらしい。さてさて、二人がどんな作戦で攻めてくるのか……。
私も、残りの魔力を上手く使って行かないと……。

このあとも、残ったティアナとルークくんが攻めてくるだろうし、それにも備えないとだしね！

そうして、再びレイジングハートを構え直す私。
それと同時に、アインハルトちゃんとホムラ君も、構えを取った状態から、ゆっくりと体の重心を前にズラし出し、飛び出すタイミングを図っている。

連携で来るのは間違いない。
さっきみたいに背後からの同時攻撃かな……？　ブラスタービットは、アインハルトちゃんを牽制する時に使って、かなり魔力を消費しちゃった。
次もさっきみたいにやれるかは分からないし……。こうなると、一対二っていうこの状況は厳しいと実感できる。
処理する情報量が単純計算で倍に、それ以外の要素を加えれば何倍にも膨れ上がるのだから、精神的余裕なんか全然ない。

う～……こういう緊張感、なんだか久しぶりかも……。ちょっとワクワクしちゃいそうだよ…！

ブラスタービットが使えなくたって、二方向からの攻撃に対処する方法はいくらでもある。最悪、全方向にシールドを張ってしまったっていいんだから。
うん、私はまだ、戦える！！

「「……っ！」」

バッ！！

「（来た！！）」

そして、ホムラくんとアインハルトちゃん。二人はまるでシンクロしているかのように、全く同じようなタイミングで地面を蹴り叩いた。
一人は剣を、一人は拳を以て、私に挑み掛かってくる。
自然とレイジングハートを握る手にも力が入ってしまう。さぁ、どうくる……？
多分だけど、かなり手の込んだ攻撃方法で、私の隙を……

「「だあぁぁぁぁぁぁぁ！！！」」

「って、真正面！？」

思わず、私はそう口走ってしまっていた。
ホムラくんのことだから、かなり手の込んだ、それでいて私の意表を突くような作戦があったのだと思ったのだけれど……。

いや、これもある意味では予想外……。完全に、真正面からの攻撃のパターンは候補から外していたから……。
『ホムラくんなら、真っ向からの勝負は仕掛けてこない』っていう、私の心の隙を突かれた感じだ。

アインハルトちゃんとホムラくんタッグの、私との『真正面からの真っ向勝負』
うん。いいよ、受けて立ってあげる！！！

【なのはｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【ホムラｖｉｅｗ】

『まさかそんなバカ正直に突っ込んでくるなんて思わなかった』

僕は、高町教導官にそう思わせたかった。

高町教導官ほどのレベル、ある意味で『完成』された実力を持つ魔導師ほど、戦闘においては頭が勝手に高度な戦略を敵対する、あるいは模擬戦を行う相手に対して適用してしまいがちになる。

それ故に、相手が単純過ぎる行動、正直過ぎる戦略を選択した場合に僅かに、ほんの一瞬だけど隙が生まれることになる。

その状態こそが、『まさかそんな単純な方法で～』という精神状況だ。

もちろん、高町教導官なら僕達が取るであろう作戦に関しては、高度なものから初歩的なものまで、幅広く頭に入れていたに違いない。

それこそ、今の僕達のように真正面からぶつかっていく戦法も言うまでもなく。

だからこそ、僕は敢えてついさっきまで、高町教導官に対してアイ

ンハルトとの挟撃、連携を重視した戦法でＨＰを削ることに専念していた。
教導官に、『ホムラに真正面から攻めてくる選択肢は存在しない』と思わせるために。
そこまで行かなくとも、挟撃、二方向からの攻撃という戦法を重視して、消耗させる作戦に出たのかもしれない、という考えを持ってもらうだけでも良かった。

そして、戦闘開始から感じていた、高町教導官の残り魔力の少なさ。
長距離狙撃に、何よりあの大量の設置型シューターの配置。いくら高町教導官でも、あの量の魔力を序盤に使ってしまっていては、ここまでの僕達との戦闘で魔力は底を尽きかけているはず。事実、さっきから、段々とアクセルシューターの数にバラつきが出てきているから。

魔力量が減っているのなら、ブラスタービットによる防御も心許なくなる。だからこそ、高町教導官はより一層、挟み撃ちに対する警戒を強めるだろう。
でも、防御方法が皆無なわけがない。シールドを使ってしまってしまうという選択肢もあるんだから。

「「だあぁぁぁぁぁぁ！！！」」

「って、真正面！？」

だからこそ、僕達はその裏を突く。
シールドで防御してくれるのなら、その防御ごとブチ破ってしまえばいい。

僕とアインハルトの使える、一番破壊力のある技を同時に出して、一点集中で高町教導官のシールドに風穴を開ける。

大胆だとか、馬鹿正直だとか思われるかもしれないけど、『そう思わせること』が重要だったんだから！！

「「――覇王」」

「くっ！！」

高町教導官が守勢に入り、全面にシールドを張ってくる。この攻撃が防がれれば、僕とアインハルトは完全にどフリー。何をされても文句は言えないし、ある意味一か八かの一発勝負だ。

そんな成功確率が高くもない作戦に、アインハルトは迷うことなく賛成してくれた。

『私とホムラさんなら出来ます』と、そう言ってくれた。

それだけで、その言葉だけで体の奥からいくらでも力が湧いてくる。だからこそ、余計にこの勝負は、絶対にものにしたい！！

「断空剣！！！」・「断空拳！！！」

ガコォォォォ！！！

足先から練り上げた力を、一気に腕に、次いで鞘から抜刀した剣、拳に移動させて僕達が今撃てる最高の威力を誇る技を、遠慮なしに叩き込む。
シールドと剣と拳がぶつかり合って、強烈なエネルギーが放出された後、空中に霧散していく。

「「いけえぇぇぇぇ！！！！」」

「うぅ～～～！！！！」

バキ……ミシ……

高町教導官のシールドにヒビが入る。だけど、ヒビが入るのはシールドだけではない。
僕が手にしているシラヌイの刀身にも、徐々にヒビが入り始めている。

技の威力に、シラヌイがついて行ってない……！？

ガシャアァァン！！

「うあぁぁ！！？」

シラヌイの異常を認識したと同時に、高町教導官のシールドが完全に消滅。

そして、僕とアインハルトの断空剣と断空拳によって、高町教導官は勢い良く吹き飛ばされ、この大きなレイヤー建物の構造体の壁に衝突。
衝撃を緩和するためか、レイヤー建物の強度はそれほど強くはなく、衝突した壁は吹っ飛んできた高町教導官の体に上乗せされていたエネルギーを殺しきれずに、粉々に砕ける。

高町教導官は、結果として隣のビルにまでふっ飛ばされてしまった。
わ、我ながら……ちょっとやりすぎた……？　いや、それを言うならアインハルトも何だけど……加減も何もしている余裕なんて無かったし……。

でも、ホロウィンドウに表示されている高町教導官の残りＨＰは０を指し示していることだけは確かだった。
ＨＰ＝０……それ即ち、撃墜ということだ。

「……アインハルト」

「……ホムラさん」

僕とアインハルトは、高町教導官を撃墜したんだという事実に、一瞬顔を見合わせてポカンとしてしまう。
二人共満身創痍で、ちょっと息も切れ気味だったのに、何故かその時だけは疲れも忘れて、ただ見つめ合っていた。

そして、どちらからとも言えないような、絶妙のタイミングで……。

「流石、アインハルト」「流石はホムラさんです」

そう、二人同時にお互いのことを褒め称え合ってしまった。
二人同時に出した、言わば合体技なので、僕達二人の力でもぎ取った勝利なんだけど、こうやってお互いを褒め合ってしまうのは……。

うん、もうそういう性格なんだって、そう思うしかない。

僕とアインハルトは、少しバツの悪い顔をした後、お互いの拳を『コツン』と触れさせ、静かに勝利を実感し、その喜びを分かち合うことが出来た。

出来た……のだけど……。

ガッシャアアアアアン！！！

「「え…？」」

次の瞬間、僕とアインハルトのいたフロア。いや、正確には戦闘に使っていた敵本陣、そのビル構造体に、何か巨大なものが飛んできて……僕とアインハルトにクリーンヒット。
ビル構造体をぶっ壊しながら、同時に僕達のＨＰを残すことなく吹き飛ばしていった。

え……？

何がどうなってるの……？

そんな、わけの分からない自体に混乱、いや、あまり混乱はしていなかった。というかそんな余裕も暇も無かったのだけど。

兎に角、僕とアインハルトは、一瞬の虚を突かれ、巨大な何か、石の塊のような物によって侵入していたビル構造体と一緒にぶっ飛ばされ……。

二人一緒に意識を失ったのだった。

【ホムラｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

Ｍｅｍｏｒｙ；４１　ラブラブ断空剣（笑）（後書き）

Ｆ２０Ｃ「いや～……息ぴったりですね」

閣下「もうお前ら結婚しちまえよ」

クゥ「おい、早く結婚しろよ」

アイホム「「……そ、そんな結婚なんて……ヽ（´Д`；）ノアゥ・・・」」

閣下「ほら、また来ましたよ、このシンクロ度！！　あ～…いいないいな、主人公とヒロインは……俺なんかサブキャラなのにさ……」

クゥ「え？　閣下ってこの作品のサブキャラのつもりだったの？！　おいおい、冗談はよし子さんだよ？」

閣下「えー……（　。д。）」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；４２　模擬戦終了とクゥ、一夫多妻の道へ

アインハルト「あ、あの…ホムラさん。私のちびキャラフィギュア……どう思いますか？」

ホムラ「え？　普通に可愛いと思うけど…？　アインハルトの凛と

した感じと、愛らしい小動物的なところとか。クールな印象とは裏腹に、心の根っこの部分から優しいところとかがにじみ出てるフィギュアだと思うな。それからそれから、アインハルトの綺麗な目が……」

アインハルト「も、もういいですよぉ…モジモジ（。＿。＊）））」

閣下「おい、アイツら何とかしろよ。作者だろ」

Ｆ２０Ｃ「いや、俺ちょっと卒論の準備で忙しいからお前何とかしてくれ」

閣下「えー……（＿Д＿；；」

Ｍｅｍｏｒｙ；４２　模擬戦終了とクゥ、一夫多妻の道へ（前編）（前書き）

書いていたら、物凄く長くなってしまったので、前編後編に分けることにしましたｍ（＿＿；）ｍ
１３０００字越えとか、初めてですよｗｗ

卒論と同じくらいの容量と言うか、この勢いを卒論に活かしたいですΣ（´∀｀；）

Ｍｅｍｏｒｙ；４２　模擬戦終了とクゥ、一夫多妻の道へ（前編）

【コロナｖｉｅｗ】

「はぁっ！　はぁっ！！　やった、やったやったやったぁ♪」

私、コロナ・ティミルは走っていた。
瓦礫とかした多数のレイヤー構造体が周囲を廃墟のように演出している、この広大な模擬戦場の中を、私に出来る全速力で駆け抜けていた。

目指しているのは、今まさにルークさんと戦っているであろうフェイトさんの所だ。
フェイトさんがルークさんと未だに戦闘中ということは、ホロウィンドウで常時確認できている。

「なのはさんの作戦……完璧だった…！　あとは、フェイトさんと一緒にルークさんを撃墜すれば……！」

今のところ、相手チームの脱落者の中に総大将はいない。総大将が撃墜された時点で、この模擬戦は終了になるため、戦闘が継続しているということは、まだ総大将が生き残っているということだ。

そう、私のように。

なのはさんの作戦。
それは、自分自身を囮にして、ホムラさんとアインハルトさんを二人纏めて撃墜するというもの。
あまり、囮という戦法に素直に頷けなかった私だったけど、なのはさんの残り魔力の量は、もう多くなかった。だからこそ、残りの魔力を使ってホムラさんたちを引き付け、戦闘を行なって相手に隙を作る。

そこを、私のゴライアスのロケットパンチで一網打尽にする。というのが、大まかな作戦の概要だ。

結果的に、なのはさんが撃墜されてしまったのだけど、作戦上そういう事もありうると、事前になのはさんから聞いていたので、慌てることなく作戦の仕上げ。
ホムラさん達の隙を突き、纏めて叩くという重要な役割をこなせたのだけど。

現状、赤組残存戦力は総大将の私と、フェイトさん。対する青組は、ルークさんとティアナさん。
つまりは、ルークさんとティアナさんのどちらかが、総大将ということ。

「（今戦ってるフェイトさんを援護して、ルークさんを撃墜できれば……。ルークさんが総大将ならその場で決着、そうでなくても、私とフェイトさんの二人でティアナさんを落とせばいい。一対二なら、確実に優位に立てる！！）」

状況は、圧倒的にこちらに有利だった。なのはさんの仕掛けた設置型シューターは、仕掛けたなのはさんの撃墜によって消えてしまったけど、こっちにはまだ地の利がある。
ルールにある、自軍内でのプレイヤーのモニターの制限のルールが、大きな武器になるのだ。

相手チームのプレイヤーが、テリトリー内に侵入すれば、私達は即座にその位置を把握できる。対して、侵入してきた相手チームは、私達がどこに要るか、一度交戦しないと分からない。
このルールを利用したことが、さっきのアインハルトさん達を撃破することが出来た大きな要因だろう。そして、これからルークさんを撃墜するのにも、必ず役に立ってくれるであろう、私に残された最高の武器だ。
姿を消した状態で、相手の不意を突けば必ず突破口が開ける。少し卑怯な作戦かもしれないけど、これこそが総大将ルールの追加が意味する、二回戦の趣旨なんだと思う。

けれど、その趣旨を理解して最適な方法で戦う。これが恐らく戦闘の基本なんだろうと思う。
いずれにせよ、私達赤組の勝利は目前……！

『マスター、オープンチャンネルで通信です。これは…ティアナさんですね』

「え…？」

そんな時。もっと気持ちが高ぶっているタイミングで、ブランゼル

から意外と言うか、予想外の事態が告げられる。
この戦闘では、チームメンバーに対してなら対象を選択した上で通信を飛ばせるけど、敵同士ではそうは行かない。
オープンチャンネル、つまりは全員に通信回線を開いた上での更新しかできない。
そのオープンチャンネルで、ティアナさんが通信を……？　一体何なんだろう……？

『ハァイ、コロナ？　聞こえてるかしら？』

「ティアナさん……」

ホロウィンドウにティアナの姿が映し出される。周囲の背景、レイヤー建物が全く壊れていないところを見ると、ティアナさんは自軍の陣地からこの通信を発しているらしい。
と言うことは、ティアナさんはまだこっちの陣地には攻め入ってきていないということ。通信をしてきたのは……一体どういう意図があって……？

『さっきの一撃は凄かったわね。アインハルトとホムラがやられちゃったわ。折角なのはさんを撃墜できたんだけどね』

「なのはさんの作戦通りです。これで、後はルークさんをフェイトさんと一緒に撃墜できれば、私達の勝ちは同然です！」

『確かにね。流石に、私もフェイトさんとコロナ、二人相手にするのはきついし』

そこで、何故かティアナさんは不敵な笑みを浮かべる。
一体何を企んで……？　というか、敵本陣から私の居るこのポイントまでかなりの距離がある。集束砲でも使わない限り、まず攻撃の手段はありえない。けど、集束砲はこの戦闘では使用不可だし……。

もしかして、私に揺さぶりをかける……？　ううん、今の状況でそんな事をしても何の意味もないし……。

「でもね、一対一で、それも背後を取ればその瞬間に勝負は着いてるようなものなのよ？」

「ふぇ！？」

そして、突如背後から聞こえた声に、私は縮み上がってしまった。
その声と同時に、私にデバイスが……ティアナさんのデバイス、クロスミラージュが突き付けられる。

え？　え？　何がどうなってるの？　確かに、ティアナさんは通信ウィンドウの向こうっていうか、敵本陣に居る筈なのに……？
というか、認めたくないけど……背後からデバイスを突き付けられてるこの状況……明らかに詰んじゃってる……。

「ど、どうしてティアナさんが……？　今通信してるはずなのに……？」

「あぁ、これ？　これはね……」

パチンッ！

「あぁ～！！？」

ティアナさんが、私の疑問に答える形で指を鳴らした瞬間、ホロウィンドウに写っていたティアナさんの姿が掻き消えてしまう。

これは……幻術の技法の一つで……確か……。

「フェイクシルエット。私の得意技ね。通信越しで、本物の私から注意を逸らしてもらうための囮ってわけね」

やられた…！！

視覚的な情報だけで、周囲の索敵を怠ってしまった……。というか、それを誘うための、ティアナさんのフェイクシルエットだったのだろう。

けど、フェイクシルエットだけでは説明がつかないことが、まだ一つ残っている。それは、この二回戦の、『自軍内のテリトリーに入った敵は、常に位置を把握できる』というルールによる制約をどうクリアしてきたのかということだ。

背後に回られるまで気付かなかったのは私のミスだけど、ティアナ

さんが赤組のエリア内に入れば、自動的にそれをモニターできるのに……。

「で、でも！　どうやって私達のテリトリーに？　敵陣地に侵入した時点で、相手チームの一は私達に筒抜けになるはずなのに……！？」

「その答えはもうすぐここに来るわ。……って、言ってる傍から到着したみたいね」

「……？？」

と、ティアナさんがクロスミラージュはこちらに向けたまま、開いている方の手である方向を指す。
そこには、瓦礫の山とかしたレイヤー建物が鎮座していて……その上に、二人の人影を確認することが出来た。

「うぅ～……捕まっちゃったぁ……」

「う～い、ティア～。そっちは終わったか～？」

「ルークさんに……フェイトさん！？」

そこに居たのは、ついさっきまで戦闘を繰り広げていたはずのルークさんと、味方のフェイトさんの姿が。
何故か、フェイトさんはかなり……その、いかがわしい縛り方、確

か『亀甲縛り』という手法だっただろうか？　その縛り方を意識したような感じでバインドにかけられており、捕縛されていた。

「ルーク……捕縛するにしても、もうちょっとマシなバインドの掛け方はできないの？」

「いやだって、いつもはこうするとフェイトが悦ｂ……いや、何でもない」

「今さらりととんでもない事暴露しそうになったわよね！？　一瞬、フェイトさんの顔真っ赤になってたじゃない！？」

ふ、二人の……その、夜の営みはともかくとして……（いいなぁ、私もクゥちゃんとそのうち……いやいや、今は置いておこう）、今の私は自分の見ていた情報によって、かなり混乱してしまっている。

さっきまで、ホロウィンドウにはルークさんとフェイトさんが戦ってるところが映っていたはずで、何故かティアナさんが私達のテリトリーに入ってきても感知出来なかったり……えぇ～…？　一体何がどうなってるの…？

「ルークってばヒドイんだよ？　私がソニックフォームに換装したら、『フェイトって、結構露出魔の気があるよねｗｗ　うわ～、や～ら～し～い～☆』とか言って、私のこと虐めてくるんだよ？　それで隙ができちゃってやられたんだけど……」

「いやぁ……フェイトさん、あの格好を見れば誰だってそう言いたくなるとは思うんですけど……」

「えぇ！？」

フェイトさんの顔↓ガ――――（；。Д。）――――ン！！

う～ん、さすがに私も、フェイトさんのソニックフォームについてはなんとも言えないかも……。確かに、ちょっと露出度が高いし……見てくださいって言ってるのに等しい気もして……。って、そうじゃなくって！！　今は、事の真相を確かめないと……これじゃあ気になって夜寝られないよ……。

「あ、あのルークさん！　ティアナさん！　さっきの一連のトリックっていうかなんて言うか、それについての説明を……」

「あぁ、ごめんごめん。えっと、説明って言う程でもないんだけどさ、一言で言えば、アレ全部、俺の幻術」

「げん……じゅつ……？」

ルークさんが、マジックの種明かしをするように答えてくれたトリックの内容。

幻術……つまりは、ティアナさんのように、敵を欺くための技法だ。

ルークさんが幻術を使えるなんて、今の今まで全然知らなかった……。

「ホロウィンドウで、俺とフェイトが戦ってるように見えたのも幻術だよ。ホロウィンドウを見てみ？　今はもう何も映ってないだろ？」

「……あ、ホントだ……」

さっきまで、激しい戦闘を繰り広げていたルークさんとフェイトさんの映像が、いつの間にか消えている。ついさっきまでは、確かに映像が流れていたのに……。

どうも、私は幻術でホロウィンドウに『ありもしない戦闘の映像』を見せられていたらしい。

「でもって、ティアナが君等のエリア内に入っても検知出来なかったのも、ホロウィンドウに映るはずのティアナの姿を、幻術で見えなくしてただけ。要するに、視覚を麻痺らせてたんだよ」

「でも、そんな幻術をいつの間に……？　というか、私が総大将だってなんで分かって……？」

幻術の件は良く理解できた。

要するに、私はルークさんの幻術で、ありもしない映像と見えていたはずのティアナさんの姿をロストさせられていたというわけだ。

けど、そんな複雑な幻術、一体いつ、どうやって仕掛けられたんだろう？　それに、私が総大将じゃなかったら、この作戦はうまく行

かなかったかもしれないのに……。

「俺の幻術は、目を合わせるだけで掛けられる。だから、この試合が始まる直前にあった、両チーム集合の時にコロナだけじゃなくて、赤組全員に同じような幻術をかけておいたわけ。まぁ、幻術の発動条件やタイミングはそれぞれ違うもんだけど」

「……って、それってつまりは……」

「『計画通り……（　一、Д一′）キリッ』　ってことだねぇ。ふぉっふぉっふぉ♪」

な、なんということをしてくれたのでしょう……。

と言うことは、幻術の仕掛けは模擬戦開始前から仕込まれていたってことで……ルークさんたちからすれば、別に私たちの誰が総大将でも良かったってことだったの……？

うぅ～……やられたって言葉以外、何も言えない……。ルークさんのドヤ顔にも、嫌味の一つも言えない……！

「で、どうする？　私とルークがこの場にいるわけだけど……続ける？」

「……こ、降参します……」

この二人を相手に、私が勝てる見込みは……悔しいけどゼロだ。フ

ェイトさんとの一対二を想定していた私だけど、皮肉にもその算段は逆手に取られてしまったわけだ。

こうして……完全な作戦負けと言うか、接戦となった模擬戦の二回戦は、私のリザイン宣言で幕を閉じたのだった。

く、悔しい……今度は、幻術対策もしっかり考えないと……。

うん、次に生かそう……ポジティブシンキングだよね！！

「あ、あのルーク？　そろそろバインドを外して欲しいんだけど……」

「え～……」

「いやいやいや！！　おかしいよね！？　そこは普通に外してくれるところじゃないの！？」

「だって、フェイトっていつもこうして縛った上で虐めると、ものすごく悦ぶし」

「今はそういう時じゃないからぁぁぁぁ！！！　ひ、人に見られて興奮するような変態さんじゃないからね、私！？」

「え？！」

「その意外そうな顔はやめてぇエエエエ！！！」

という感じで、ルークさんとフェイトさんは、最後までこんなのだったけど……いいなぁ、仲が良さそうな夫婦って……憧れちゃうよ……。

もちろん、その……SとかMとかの関係は要らないけど……。

あぁ、でもでも、クゥちゃんがどうしてもって言うなら、私もそういうプレイに身をまかせるのは吝かではないっていうか……えへへ……

おっとっと……危うく変な道に入っちゃいそうになるところだった……。

さぁて、ヴィヴィオやクゥちゃんたちのこと、迎えに行ってあげないと……。

【コロナview end】

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【ルーテシアview】

「勝った……か……」

青組の中で一番早く撃墜されてしまった私は、皆より一足先にフィールドから離脱し、安全な場所から模擬戦の試合内容を観戦してい

た。
出来れば、私もあの戦いの中で力を発揮したかったのだけれど、まぁ、それは今更言っても仕方がない。
それに……クゥを守ってあげることが出来たのだから、それ以上は望むまい……。

試合結果は、ティアナさんとルークさんの作戦、オペレーション・『ダブル☆幻術でＧＯ！キャハ（ノ∇≦＊）♪』（命名：ルークさん）が功を奏し、何とか逆転勝ち。
作戦名のセンスのなさはともかくとして、その効果だけは絶大だった。

「それにしても……クゥ、頑張ってたわね……」

何気ない風に、私はそう呟いてみる。
私の分まで戦うと、その頑張る姿を見ていて欲しいと……そう言ってくれた、私よりも一回り年下の可愛い男の子。
正直、彼の戦う姿を見せつけられ……胸が自然とときめいてしまったと言うか……視線を釘付けにされてしまった。

「はぅ……やだ、私ったら……脈が荒ぶってるじゃないの……」

心臓の鼓動が、うるさい位に激しいビートを刻み、頬は急激に紅潮していく。

分かっていた、何故こんな気持ち、こんなにも胸が苦しく、熱くなっていたのか。

理解はしていた、何故クゥにいつも必要以上にちょっかいを出していたのか……。

好きな子には意地悪をしたくなってしまう……そんな、小中学生によくありがちな心理が、私の中にあったことを、自覚はしていたんだ。

ただ、あの子にはコロナがいるから……コロナも、クゥのことを想っているから……それを邪魔しちゃいけないと思って、目を背け続けていたんだ。

これでいいんだと、それ以上は望んではいけないと。

「でも……ごめん、コロナ……私、もう我慢出来ないかも……」

クゥに言われた、あの言葉がまたしてもフラッシュバックし、トクンと心臓が高鳴る。

アレは完全に不意打ちと言うか、私にトドメを差したと言うか……。

もう、自分の気持ちに背を向け続けるのは無理だと、そう思わされてしまった。

クゥは多分、年上殺しの素質を持っているのだと、改めてそう思う。

本当に……ズルイ子だ……・

「クゥのこと……もう、可愛い弟っ子っていう目で…もう見れなくなっちゃった」

一旦、気持ちを塞き止めていた門が破られたが最後、私の心の中は、『クゥのことが好きだ』という……甘い、そして切ない気持ちで埋め尽くされてしまう。
自分の胸に手を当ててみても、早くなった心音に加えて、仄かな熱を持っているような……そんな感じさえした。

これが……恋心…？　これが恋……？

「～～～～～っ！！」

そう考えた瞬間、頭が焼けそうなくらいに熱くなり、私は思わずその場に座り込み、頭をブンブンと振り回す。
不味い……これはイケナイ……。

こんなフワフワした気持ちになるなんて……思っても見なかった。
ドラマや本の中では、在り来りな文字や、登場人物たちの心象風景でしか無かったものが、今私の胸の中にも灯っている……。

そう思うだけで……私は、『これまでの私』と同じではいられなくなってしまった。

「私は……クゥが好き……好き……好きなんだ……

えへへ……♪」

今、私の顔を鏡に移してみれば、物凄く乙女な感じになっているのだろうか？
それとも、だらしない表情でニヤニヤしているんだろうか……？
でも、そのいずれにしても、この気持ちを上手く表す方法を私は他に知らない。

「……さてと、クゥのこと……観戦スペースで出迎えてあげようかな……」

私は、そう呟いてスバルさん達が待っているであろう観戦スペースへと足を向ける事にする。
クゥが帰ってきたら、どんなふうに褒めてあげよう、どんなご褒美をあげよう、どんな表情をしよう……。
そんな事で、頭を一杯しながら……。

【ルーテシアｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

Ｍｅｍｏｒｙ；４２　模擬戦終了とクゥ、一夫多妻の道へ（前編）（後書き）

Ｆ２０Ｃ「という訳で、前編終了なわけなんですが……ルーテシアが完全に乙女だねぇ」

閣下「三期では寡黙キャラ、ＶｉＶｉｄでは若干はやてさんみたいな立ち位置だったしな」

はやて「それに比べてウチは……あれ？　まだ出番すらないような……？」

Ｆ２０Ｃ「はやては犠牲となったのだ……」

はやて「ムキーッ（＃・∀・）」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；４３　模擬戦終了とクゥ、一夫多妻の道へ（後編）

次回、女の戦いが始まる予感です。
更新は、いつも通り火曜日に出来るかと思います。碧の軌跡と恋騎士プレイしなければならないので、今週末は物凄く忙しいです（＾―＾；）

次回は、アイホムの出番もありますので、どうぞご期待くださいませｍ（＿　＿）ｍ

碧の軌跡、漸く竹達さんのキャラが出てきたりするとこまで来ました（＾ω＾）ペロペロｗ
う～ん、やっぱり軌跡シリーズはＲＰＧとしてとっつきやすいです。

あと、ラニキとミレイユさんのやり取りに萌えてしまったのは私だけではないはず……。
ラニキ、カッコいいよラニキ。

あ、私の嫁のリーシャさんも、ちょっとだけですが出て来たので、ちょっと前までフィーバー状態な私でした、仕方ないね！てへぺろ（・ω＜）

閣下「俺のバンダナッ！！」

ホムラ「あの変な人、何とかしてくださいよ……」

Ｆ２０Ｃ「レベルを上げて物理で殴れ」

Ｍｅｍｏｒｙ；４３　模擬戦終了とクゥ、一夫多妻の道へ（後編）

【アインハルトｖｉｅｗ】

「イテテ……ごめん、アインハルト……まさかあれしきで足を挫くなんて……」

「いえ、戦闘中何度も助けてくれたじゃないですか。そのお礼……としてはささやかですけど、これくらいは当然です。それに、怪我したときはお互い様ですよ」

ヴィヴィオさんのお母様を撃墜した直後、謎の攻撃……さっき通信で聞いたのだが、どうやらコロナさんのゴーレムによる攻撃だったらしい……によって、意識を失っていた私とホムラさん。
けれど、戦闘終了の合図、青組が敵総大将のコロナさんを生け捕りにしたという一方が入ったのと同じくらいのタイミングで、私とホムラさんは目を覚ました。

どうやら、こちらの総大将であるティアナさんと、遊撃隊のルークさんが作戦通りに上手く事を運んでくれたらしい。
私達が撃墜されてしまったときはどうしようかとも思ってしまったけど、そんな心配は杞憂だったようだ。

それはそうと、私は今、武装形態を解いた普通のサイズに戻った体

で、ホムラさんに肩を貸しながら歩いている。
というのも、さっきのコロナさんの攻撃によってビルが崩壊した際、ホムラさんは軽く足を捻ってしまったらしい。
少し赤くなっている程度だけど、下手なことしないほうがいいと判断し、応急手当だけをした上で、皆さんが集まっているであろう模擬戦場の観戦スペースに向かうことにしたわけだ。

模擬戦終了後は、そこに集まるように言われていたし、あそこには試合を観戦していたノーヴェさんやメガーヌさん達も居る筈。
できるだけ早く、テーピング等をしてもらわないと……。

「というか、ホムラさん？　私言いましたよね？　無茶はしないで欲しいと」

「そ、それは謝るよ……でも、仕方ないんだって、体が勝手にっていうか、もう反射的に体が動いてるんだから。アインハルトが危ないところを、黙って見てるなんかできないし……」

「……そ、それはそうだとしても……見ているこっちは心臓が止まりそうになるんですから……（またそんなずるい言い方をして……そんな事言われたら、これ以上何も言えないですよ……）」

私がピンチになったら、体が勝手に動いていた。
ホムラさんの言い分は、そういう事だ。でも、それではまるで……
…ホムラさんが私を守ってくれるヒーローみたいで……。

そんな事を考えてしまい、私の心臓は言葉とは裏腹に、鼓動のリズムを早めてしまう。同時に、胸がキュンとなってしまうというか…

…胸がいっぱいになるような、そんな感覚に襲われる。

「もっと、力を付けないとね……。アインハルトに心配掛けなくても済むように」

「そそ、その意気込みは買いますけど、何事にも限度というものがあります。無理なオーバーワークなどは絶対に許しませんからね、これは約束です。破ったら、断空拳ですから……」

「あはは……それは怖いな…。うん、分かった……アインハルトにぶっ飛ばされないように気を付けるよ……」

「えぇ、気をつけてください。……本当に……ホムラさんは困った人です……」

そんな風に、口では言っているけど……私は彼とのやり取りの中に心の安らぎのようなもの感じていた。

はぁ……どうしてこうも、リラックスしてしまうんだろうか……？　さっきの模擬戦でも、緊張しそうになった場面はいくらでもあったのに……ホムラさんと一緒に呼吸を合わせていると、自然と体から余計な力が抜けてくれて、気持ちよく体を動かすことが出来た。

急造の合体技だった、断空拳×断空剣も気持ちいいくらいに綺麗に決まった。初めての合体技だったのに、あそこまで息が合うなんて……。

も、もしかして……私とホムラさん……相性が良い……とか……？

な、何を考えているんですか私は！！　そ、そんな相性だなんて……！

あ、でも相性といえば体の相性がどうとかという話も聞くような…

…ってそうじゃなくってですね！！？

決して私は、そのいやらしい想像なんかこれっぽっちもしてません！！　ちょっとムーディな部屋の中のベッドの上で、ホムラさんと見つめ合っている自分を想像したりなんか、絶対してませんから！！

って、私は一体誰に言い訳しているんでしょうか……？

そんな私の妄想（してませんからね？）もそこそこに、私とホムラさんはゆっくりとしたペースではあるけれど、皆が集まっている模擬戦場の観戦スペースに到着することが出来た。

既に、私達を除くメンバー全員が集合しており、私達がビリということらしい。

私とホムラさんが、訳ありとは言えかなり密着した状態で帰ってきたことに、かなり追求があるのではと、勝手な想像をしてしまっていた私。

きっと、ルーテシアさんやクゥさんあたりにからかわれるんだろうなと思っていた。

のだけど……観戦スペースでは、何か妙な空気が漂っていた。

何か、皆で微笑ましい物を見るかのような……そんな温かな空気が。

加えてその微笑ましいものというのは、私達のことでは無いようで……。

「あ、あのさ！　ルー姉ちゃん……怪我とか、してない……？」

「え、えぇ……全然大丈夫…よ？　ク、クゥの方こそ、いきなり倒れたって聞いたけど……体の方はなんともないの？　何か気持が悪い所があるなら、すぐに言わないとダメよ？」

「う、うん。でも、大丈夫だよ……気を失ったって言っても、すぐに目も覚めたんだし……」

「そう……？　それなら……いいんだけど……」

「「……（モジモジ）」」

え？　なんなんでしょう、このこそばゆいと言うか、青春ドラマのワンシーンを見ているような、そんな気分は……？

ルークさんやフェイトさん（何故かフェイトさんは、バインドで縛られているがツッコんだら負けなんだろう）、ヴィヴィオさんやリオさん、メガーヌさん、ティアナさん達がニヤニヤとした視線を向けている先には、お互いに微妙な距離感を保ったまま、少し顔を赤くしあって言葉を交わすクゥさんとルーテシアさんの姿があった。

「あの二人……」

「なんだか、ものすごく甘い雰囲気と言うか、ぎこちないと言うか……青春な匂いがします？」

「うん、それが言いたかった」

ホムラさんと私は、そんなやり取りをしながら、取り敢えずこの甘く、生暖かい空気はなんなのかと、取り敢えず一番近い所で、クゥさんとルーテシアさんを見守っているティアナさんに訪ねてみることにした。

「あの、ティアナさん？　クゥさんとルーテシアさん、どうかなさったんですか？　他の皆さんも、なにかニヤニヤしてますけど……」

「あぁ、あんた達。やっと帰ってきたのね。遅かったから心配してたのよ？って、帰ってきたんだしまぁいいか。……あの二人ね……なんか、帰ってきたと思ったら、気持ち悪いくらいに仲良くなってんのよ。模擬戦始まる前は、いつもみたいにクゥが警戒しまくってたのに……」

ティアナさんは、私達が帰ってきたのに気がつくと、少しホッとしたような表情を浮かべてから、微笑ましい感じの二人について自分達も戸惑っているということを教えてくれた。

確かに、クゥさんはルーテシアさんに対して、警戒心剥き出しでしたしね。ルーテシアさんも、クゥの反応を見て楽しんでいたフシがありましたし。

それが、ここまで仲良くと言うか……甘い感じになっていれば、誰

だって戸惑ってしまうでしょうね。

しかし、私達はあの二人が何故あそこまで仲良くなっているのかには心当たりがあった。

「ティアナさん、実はですね……」

「？？」

そこから、私とホムラさんは、模擬戦中に起こったことを掻い摘んで説明した。

クゥさんの危ないところを、ルーテシアさんが身を呈して守ったこと。それをキッカケとして、クゥさんはルーテシアに対する警戒を緩め、ルーテシアさんは以前に行なってしまった壮絶な悪戯と言うか、ファッションショーに件について謝罪したということ。

クゥさんが、自分を助けてくれたルーテシアさんのために本気を出すと決めたことなど。

それらの説明を聞き、ティアナさんは『な～るほどね…』というように、納得したような表情になった。

「ま、クゥもルーテシアのことを嫌ってたわけじゃないしね……。ルーテシアも、クゥの反応が可愛いとかでいろいろちょっかい出してたみたいだし」

「好きな子をいじめちゃうタイプなんですかね、ルーテシアさんって？」

「そんなとこでしょうね。クゥはクゥで、基本的にまだまだ子供だから、優しいお姉さんは大好きなわけよ。それがどの種類の好意に当たるかは分かってないでしょうけど……」

ホムラさんとティアナさんが、クゥさんとルーテシアさんを見ながら、冷静な分析と言うか、客観的な意見を出す。
でも、確かにその通りなのかもしれない。というか、ホムラさんも他人のことにはそんなに鋭敏になれるのに、なんで自分のことになると……あぁもういいです、諦めてますから…。

ルーテシアさんの場合、面白半分というのももちろんあるだろうけど、興味のない相手に対しては行き過ぎたちょっかいを出すタイプではないと思う。
それだけ、クゥさんに『興味』があったわけだ。

その興味の中身は、ルーテシアさん本人にしか分からないことだけど。

「ルー姉ちゃん、俺さ……お姉ちゃんの分まで頑張ったよ。ヴィヴィオ姉ちゃんとリオ姉ちゃん、キャロさんをまとめて撃墜したんだ…！」

「うん、ちゃんと見てたわよ、クゥの頑張ってるところ。とってもかっこ良かった……」

「……♪」

クゥさんは、ルーテシアさんに頭を撫でられながら褒められると、気持ちよさそうに目を細め、されるがままという感じだ。
というか、あの二人……完全に周りのことが見えていないと言うか……アウトオブ眼中という感じだ。
二人の世界に入るということは、こういうことなんだろう。

『私はそういう経験はないけれど』、幸せそうに見えて羨ましくなってくる……。

あれ？　今どこかから、『お前らもしょっちゅう固有結界展開してるだろうがｗｗ』とか、『無自覚な惚気ほど、厄介なものはない…』とか、そんな声が聞こえたような気がする。
気の所為だろうか？

「そうだ、約束してたわよね？　頑張ったらご褒美あげるって。あれ、今あげちゃおうかな……」

「……？　ご褒美って……何くれるの？」

「う～ん……そうねぇ～……よし、次の中から選びなさい、『？ほっぺにチュー』・『？唇にチュー』・『？Ｏ☆ＴＯ☆ＮＡのディープキス』・『？ベッドの上での寝技の訓練』。さぁ、どれにする？」

いやちょっと待って欲しい。
まともな選択肢が一つも無いような気がするんですが……？　どち

らにしても、クゥさんはキスされることになっていて、最後の選択肢に至っては、かなり際どいもののような……。

というか、？の意味をクゥさんが分かっていないまま選んだりしてしまったら、それこそ不味いことになるんじゃ……？

「ちゅ、チューは恥ずかしいよ……。寝技の訓練くらいしか選べないじゃん……ていうか、なんでベッドでするの？」

「そ、それを女の私に言わせるのかしら？　というか、まさか？を選ぶなんて……どうしましょう……私今日勝負下着じゃないんだけど……」

「？？？？」

クゥさん、やっぱり？の意味を分かっていらっしゃらなかった。

いやいや、流石にこれは不味いんじゃ……？　一応、このお話は全年齢対象ですし、そう言った……えっちぃ感じのお話はタブーなわけですし……。

何より、クゥさんはまだまだ7歳で、ルーテシアさんは１４歳……アブノーマルな匂いしかしないような気がする……。

見れば、ホムラさんもティアナさんも、この展開には少し焦っているようで、額に汗を浮かべている。

けれど、私達の心配は、杞憂に終わることになる。

よくよく考えてみれば、こんな展開をクゥさんに明らかな好意を寄せている、あの子が許すはずがなかったのだから。

「る、ルーちゃん!!?　クゥちゃんと何するつもりなのかな!!?」

「あら、コロナじゃない？　私はただね、頑張ったクゥにご褒美（肉体的な）をあげようとしてるだけで」

「（肉体的な）って何!!?　明らかに……その…ちょっとエッチな感じの事しようとしてたでしょう!!?」

そう、クゥさんにとっての元祖お姉さん、コロナさんだ。
コロナさんは、クゥさんのことを弟のように可愛がり、その一方で傍目から見ても分かってしまうほどの好意をクゥさんに寄せている。
クゥさんも、コロナさんのことは特別に思っているようで、仲の良さで言えばその絆は非常に強いものになるだろう。

そんな彼女の前で、クゥさんとルーテシアさんが延々とイチャイチャとしていれば……コロナさんが起こってしまうのは寧ろ当たり前のこと。
私も、ヴィヴィオさんやヴィヴィオさんのお母様に、ホムラさんがデレデレしていたら面白く無いですし……。

って、これはその……！　好きとかそういうのではなくてですね…？　あぁでも、ホムラさんのことはそのたしかに好きなんですけど……ふにゅぅ……。

「アインハルト？　なんで赤くなってるの？」

「にゃ、にゃんでもないですよぅ……」

いけないいけない。またしても熱暴走を起こしてしまうところでした……。

本当に、最近は気がつくと思考がとんでもない方向を向いていることがあるので、困ってしまいます……。

ホムラさんに変な子だって思われなければいいんですけど……。

私のことは一先ず置いておくとして、クゥさんに対しての、コロナさんとルーテシアさんのご褒美の是非を巡る論争は続いていく。

予想通り、とんでもない方向に……

「く、クゥちゃんへのご褒美は私があげるもん！！　ルーちゃんがちょっとエッチな方向で攻めるなら、私はもっとエッチな路線で行っちゃうから！！」

「うふふ、まだ胸も膨らみかけのお子ちゃまが、私に勝てると思って？　私にかかれば、クゥを心の底から気持よくしてあげられるんだから……」

ルーテシアさんは、そう言いながら、色っぽい視線をクゥさんに送りながら、コロナさんを挑発している。普段は仲が良い二人だけど、今はお互いの間に火花を散らせている。

これが、修羅場と呼ばれるものなんでしょうか……。こっちまで緊張してきてしまいます……！！

「ていうか、あの二人は私の前でなんちゅう話をしてんのよ……。私、クゥの母親なんだけど……」

ティアナさん、そのお言葉ご尤もだと思います。

というか、このまま放っておいたら、本格的に危ない方向に走ってしまいかねないような気がする。

周りの皆さんは、『いいぞ、もっとやれｗｗ』状態で、止める気配は全くない。

ここは、私が率先してあの三人の暴走を止めるべきでしょうね……。流石に、これ以上はＲ指定が入ってしまいそうですし……。

「あ、あのさ……ふたりともちょっと落ち着いて……」

「「クゥ（ちゃん）はちょっと黙ってて！！！」」

「ご、ゴメンナサイ……」

二人の剣幕に、クゥさんが若干涙目になってしまう。

まぁ、年上の女性が自分の目の前で睨み合って、怒鳴られでもしたら誰だって怖いでしょうしね……。

というか、私も少し怖かったです……。

「私が、クゥちゃんにご奉仕するんだから！！」

「いーえ、私よ！！　ご奉仕のための衣装も完備してるんだから！！」

と、『ご褒美』が『ご奉仕』というランクにバージョンアップしてきた頃。

クゥさんは、二人の間で縮こまって、正座（自主的に）してしまっていた。

このままではいけないと、本気で私が止めに入ろうとした時……

意外な人からの声が、この修羅場を一瞬で終わらせることになった。

「クゥってホントモテモテだよね……このままだと、一夫多妻制とかを地で行きそうで怖いよ……」

コロナ&ルーテシア「「はっ！！？」」

その、私の隣にいたホムラさんの何気ないつぶやき。

何気ない、ホムラさんも冗談で言ったのであろうこの一言が……

この修羅場を綺麗に収めるきっかけになった。

その呟き、『一夫多妻制』という単語に、『キュピーン☆』というような効果音と共に、コロナさんとルーテシアさんは目聡く食いついたようで、急に目を輝かせる。

「そっか……一夫多妻かぁ……その手があったわね？！」

「ミッドって、一夫多妻オッケーでしたっけ？　確か、この前教科書では合法だって書いてあったような気がするんだけど……」

「確か大丈夫なはずよ？　少子化対策がうんたらって……その一環で一夫多妻を認めるとか何とか……」

え……？　え…？

いいんですか？　お二人ともそれでいいんですか！？

というか、かなりいきなりと言うか、突飛もないと言うか……。

ホムラさんの何気ないつぶやきから始まった、一夫多妻制バンザイなこの展開。

コロナさんもルーテシアさんも、目をキラキラさせながら、生き生きとした様子で話を進めている。

「？？？」

クゥさんは、なんの事？　という様子で、話の内容を全く分かっていない様子だ。

まぁ、今まさに自分を巡って、目の前の女性二人が一夫多妻制度を利用しようとしているなどと、夢にも思っていないだろう。

「そうと決まれば、私がクゥちゃんの正妻だからね！？　ここは、

譲れないんだから！」

「まぁ、コロナのほうが先にクゥを好きだったわけだしね………そこは譲りましょう……。じゃあ、私はクゥの第二夫人ってことね……」

「セイサイ？　ダイニフジン……？」

クゥさんが頭に？マークを大量生産している中、コロナさんとルーテシアさんも話はどんどん先に進んでいく。

というか、流石にクゥさんの同意がない婚姻はいかがなものかと思うのですが……？

あぁでも、私も結婚に対してはそれなりの憧れはあったりなかったり……。

「え〜と…………取り敢えず、これってもしかしなくても………僕の所為？」

クゥ達を除く全員「「「「「「そうですね」」」」」」

一夫多妻制の話がエスカレーターを二段飛ばしで駆け上る勢いで進んでいく中、冷や汗を流しながらそう呟いたホムラさんに、クゥさん達を除いた、その場に居た全員が首を縦に振った。

そのあと、ホムラさんは責任を感じて、コロナさんとルーテシアさんを必死で説得し、なんとか一夫多妻制というか、この場での婚姻の取り決めを止めさせた。
あの時、私は初めてホムラさんの、というか、男の人の本気の土下座というものを見た。

そして、一旦は、婚姻は取り敢えず先送りとなったわけなのですが……。
やはり、一夫多妻をお二人は諦めたわけではなく、いずれは必ず……という感じで意気込んでいた。
この日以来、コロナさんとルーテシアさんは、クゥさんの正妻と第二夫人を名乗るようになったのは、言うまでもないでしょう。

こうして、波乱と言うか、大嵐と言うか……いろんな人にとって忘れることのできないイベントが盛り沢山だった、模擬戦二回戦は幕を閉じたのだった……。

「ちなみにホムラさん？　私は一夫多妻制は正直いかがなものかと」
「な、なんでそれを僕に？」

と、ホムラさんには少し釘を刺して置いたり……。
モテモテなのは、何もクゥさんだけというわけではないですからね……。

あ、いやまだ私が、ホムラさんの『アレ』になるとか、そういう話は……無いわけですが……。

え？　『アレ』って何かって？　言わせないでください、恥ずかしい……。

【アインハルトｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

Ｍｅｍｏｒｙ；４３　模擬戦終了とクゥ、一夫多妻の道へ（後編）（後書き）

アインハルト「一夫多妻は、私は認めません（　ー、　Дー´）キリッ」

Ｆ２０Ｃ「は、はぁ…？」

アインハルト「や、やはり結婚は一対一がデフォなんです。それ以外は認めませんからね、ホムラさん」

ホムホム「だからなんでそれを僕に？Σ（´∀、；）」

ちなみに、ミッドで一夫多妻おｋな展開は、この作品のオリジナルでございます。でないと、あとあとコロナさんとルーテシアさんにボコられそうだったので……。

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；４４　ホムラの嘘、アインハルトの気持ち

次回からちょっとシリアスです。

ホムホムのダークサイドな部分をお見せできるかと思います。あと、次々回からはルークさんが半端なくカッコよくなるかもです。

フェイト「ＢＤ録画の準備は整ってるよ！！」

閣下「ふ、ついに私の活躍の時！！（＊´ω、＊）」

F２０C「お前に出番は来ないし、その顔文字は流行らないし流行らせない」

あ、DOG　DAYS二期おめーww

また、ユッキーに会えると思うと、胸が熱くなりますねゝ（。▽、。）ノエヘヘヘヘ、

Ｍｅｍｏｒｙ；４４　ホムラの嘘、アインハルトの気持ち（前書き）

姉属性な私だって、たまには妹属性に浮気することだってある。

仕方ないですよ、人間だもの。

何が言いたいのかというと、妹も（　・∀・）イイ！！　可愛いは正義ということです（　ｌ、　ﾛｰ′）キリッ

Ｍｅｍｏｒｙ；４４　ホムラの嘘、アインハルトの気持ち

【ホムラｖｉｅｗ】

「ふ～む……」

オフトレ二日目に予定されていた、大人子供混じっての模擬戦は恙無く終了した。
いや、恙無くということはなかったかもしれない……危うく、クゥが一夫多妻制の下、あの年で所帯を持つ事になりそうになったり、それを止めるために必死で土下座したりと……。
僕にとっては、全然恙無くなんかないわけで。

加えて、今日の模擬戦で、少し困ったことが判明してしまった。
その困ったこと……僕の相棒である刀型のデバイスシラヌイが、抜き身の状態で宿泊ロッジのテラス、そこに設置されているテーブルの上に鎮座している。

「これ……直らないよね……」

『コアの部分は無傷ですが、メインフレームの7割がダメになってますね。恐らく、断空剣の技の威力に、私の強度が追いつかなかったのだと……。申し訳ないです』

「いや、謝んなくていいよ。どのみち、シラヌイはまだ試作機なんだしね。完成機が出来れば、コアを移してもらえばそれで済む話だ

よ」

シラヌイの刀身は、ガラスにヒビが入ったような感じで、ボロボロになってしまっている。
昼間の模擬戦で高町教導官に対して放った、断空剣の威力にシラヌイ本体の強度が追いつかなかった事が原因だ。

今まで、大抵の技の負荷に耐えてきたシラヌイだけど、アインハルトの技術を見よう見真似で再現した、断空剣の威力はこれまでの技とは明らかに一線を画するものというわけだ。

「兎に角、オフトレが終わったらティールさんのとこに行かないと……」

『ですね。どのみち、こんなナリではマスターの足手まといにしかなりませんから』

ティールさんというのは、僕がお世話になっているデバイスマイスターだ。シラヌイの製作者でもある人で……まぁ、かなり変わってる人…悪く言えば、機械オタクな人なんだけど、そのデバイス作成技術はまさに神業と言っていいものを持っている。

そんなすごい人に、なんで僕がお世話になっているのかという話は一先ず置いておくとして。
シラヌイの補修、強化などは基本的にティールさんの力がなければ話にならないと言うわけだ。言うまでもなく、シラヌイはワンオフデバイス、一旦破損すると修復に手間が掛かるから、出来るだけ早

く見てもらいたいところだ。

それから、僕はシラヌイを鞘に戻し、待機状態にして首から下げる。
元々、夕食後に少し涼みに来ただけだったから、そろそろ皆が集まったいるであろうリビングに戻ることにする。
皆、昼間の戦闘でやはりヘトヘトだったようで、夕食時には出された料理があっという間に底をついた程だ。やはり、人間、空腹には勝てなということなんだろうか。

僕もその内の一人だったわけなんだけれども。

「あ、ホムラさん！！　今までどこ行ってたんですか？」

「ちょっと、涼みにベランダに出てただけだよ。で、ヴィヴィオ達はどうしたの？　なんだか皆、テンション高いけど……」

「今ですね、ちょうど皆で【インターミドル・チャンピオンシップ】のことでお話ししてたんです♪」

リビングに戻った僕に、いつもの元気そうな、それでいて人懐っこい笑みを浮かべながら話しかけてきたヴィヴィオ。
その様子は、誰の目から見てもテンションがハイになっている。

彼女、いやリオやコロナ達のテンションも同じくになっている原因と思われるのは、ヴィヴィオの言葉からも分かるように【インターミドル・チャンピオンシップ】。

あぁ、そうか……そういえばそんな大会あったっけ……。

ＤＳＡＡ（ディメンジョン・スポーツ・アクティビティ・アソシエイション）が開催する、公式魔法戦競技会の一つで、１０歳から１９歳までの若い魔導師達が参加する限りなく実戦に近いスタイルで行われる魔法戦競技の大会だったはず。

全管理世界から、若く優秀な魔導師が一同に会し、その強さを競い合う。

上位入賞者の中には、プロの格闘家になる人達もいるとかいないとか……。

「私とコロナとリオは今年から参加資格があるので、皆で出るんですよ？」

「自分でもどこまでやれるかは分からないんですけど……」

「うん、自分の力を試してみるチャンスだもんね」

ヴィヴィオ、コロナ、リオはそれぞれやる気充分な様子で意気込みを語る。ルールで以て整備された競技なら、まず怪我などの心配は少ないだろうし、確かに、自分の力を試す絶好のチャンスということなんだろう。

「いいよね、いいよね……１０歳のお姉ちゃんたちは……俺なん

か俺なんか……あ、強走薬切れた……」

「クゥ、さっさと調合して乱舞厨になれ。攻撃の手が足りん」

「わーってるよ……えぇと、増強剤と生焼け肉は……」

と、そこで残念そうと言うか、若干拗ねた感じで声を出したのは……またしても師匠と一緒にＰ〇Ｐでモン〇ンに興じているクゥだった。

というか、ほんとこの二人モン〇ン好きなんだなぁ……。

それはそうと、インターミドルの出場資格は１０歳からと規定されている。確かに、７歳のクゥは出ることはできないので、彼が拗ねてしまうのも無理は無いだろう。

「あはは……まぁ、そういう感じでクゥは三年後なわけですけど……」

「だね。でも、クゥが参加したら、男子の部はエライことになりそうだよね……」

インターミドルは、男女別での競技会だから、会場こそ一緒だけど男女が入り交じって戦うことはまずない。

クゥが出るとなれば、無論男子の部なわけで。今から、三年後のインターミドルの大会に期待が持ててしまう。

「そして、なんと!!　アインハルトさんも、インターミドルに挑戦することになったんです!!」

「あ、ちょっと……ヴィヴィオさん、そんなに大声で言うようなことでも……」

と、ヴィヴィオが更に興奮気味に、インターミドルへのアインハルトの参戦を教えてくれる。恐らくだけど、公式戦でアインハルトと戦うのを楽しみにしているんだろう。

アインハルトも、多分同じように考えているはずだ。強者が集う祭典という事なら、覇王流の強さを証明するステージとしても適しているから。

まぁ、本人は恥ずかしがっているみたいだけど。

恥ずかしがって、モジモジしているアインハルト……

可愛い。

と、それは一先ず置いておいて……。

アインハルトも参戦する気満々なインターミドル・チャンピオンシップ。今年は、女子の部が賑やかになりそうだなとか、そんなことを考えていた僕。

でも、この流れ的に、次のヴィヴィオ達のアクションは大体予想が付いていたわけで……

「あの！　ホムラさんも、インターミドル出場してみませんか！？」

「あ～……」

予想通りだった。

まぁ、このメンバーでなら、逆に誘わないほうがおかしいと言うか。

基本的に、ヴィヴィオ達はフレンドリーなので物怖じすることなく、こういうイベントには積極的に誘ってくることは分かっていた。

というか、アインハルトからも『出ますよね？　出るんですよね？』みたいな視線を送られてるし……。

アインハルト、そんなに見つめないで……照れるから……。

でも……僕の答えは……。

「ゴメン。僕は遠慮しとくよ……」

ヴィヴィオやアインハルトからの期待に満ちた視線を裏切ってしまうことになるけれど、僕はこういった大会に出るつもりはなかった。

僕の求めているというか、戦うための力を振るう場所は……そこには無いんだと、この三年間ずっと考えてきたから。

「……ふむ」

僕がこの答えを出した瞬間……、視界の端でモン○ンに興じていた師匠がそう呟いた気がした……。
師匠には、見破られているのかもしれない……。

別に、大会そのものやヴィヴィオやアインハルト達を否定するつもりは欠片もないし、頑張って欲しいとも思う。
でも、やっぱり、競技としての魔法戦にはいまいち関心を持てなかった。僕の目標とは、恐らくは対照的なものだろうから。

「え～！！……なんでですか…？」

「あ～……えっと……僕あがり症だからさ、大勢の見ている前でいつも通りに戦えるかなんか分かんないし……あはは……はは……」

取り敢えず、当り障りのない言い訳をしておいて、この話を切り上げようと努力してみる。誘ってくれたヴィヴィオには悪いけど……やっぱり、僕の目標は競技会場じゃないんだ。

でも、かなり吃ってしまったな……こういう時、演技が下手くそな自分を恨めしく思ってしまう。こういう部分も、まだまだなんだなと実感させられる。

「う～ん……ホムラくんなら良いところまで行けると思うんだけどなぁ……」

「そ、そんな……僕なんかが恐れ多いですよ、高町教導官」

「む～……そうかなぁ…？　確かに男子の部もかなりレベルが高そうだけど……」

高町教導官も、勿体ないという表情でそう言ってくれるけど……やっぱり出る意義が見つけられない。
そりゃ、僕なんかよりもレベルの高い相手と戦えるのはいいことなんだろうけど……。

どうせなら、師匠に本格的な修行を付けてもらいたい……。今日の模擬戦でも痛感したんだ、僕はまだ弱い。
もっと、もっと力が欲しい……！　じゃないと……じゃないとアイツを……。

「ホムラさん……」

「あ…アインハルト？」

いつの間にか僕の目の前にまで来ていたアインハルト。
アインハルトは、僕の目をジッと見つめながら、徐ろに僕の手を取り、ギュッと握ってくる。
彼女の体温が伝わってくるのと同時に、アインハルトの澄んだ眸に吸い込まれそうになる。周囲の時間が止まってしまったかのようだった。

一体、どういうつもりで……？

「私は……ホムラさんにも、一緒に大会に出て欲しいと……そう思っています」

「う、うん……でも」

「はい、分かってます。ホムラさんが決めたことなら、私はこれ以上強制はしません。ただ、１つだけ聞かせてもらえますか？」

？？

聞きたいこと……？　アインハルトが僕に……？

というか……アインハルト、ものすごく真剣な目で……なんだか僕の心の中を全部見透かしてるような、そんな感じすらする……。

ヴィヴィオ達が固唾を呑んで見守る中、僕はアインハルトにゆっくりと応える。

「聞きたいことって……何かな？」

「……ホムラさんは……私に、隠し事をしていませんか？　まだ、私にお話ししてくれていないことがあるんじゃないですか？」

「……」

その質問に、僕は一瞬表情が崩れそうになった。

駄目だ……動揺するな……。気取られるとマズい……。

僕の目的を、アインハルトに言うわけには絶対にいかない……！
もしも、アインハルトに知られたら……僕はその目標に向かって走ることをやめてしまいそうになる。

あの時の怒りと憎悪を忘れてしまいそうになる。
それほどに……僕にとってのアインハルトという女の子の存在は大きく、そして安らぎと安心を与えてくれる存在になっていたから。

「何にもないよ。アインハルトには嘘は吐かないから」

「……そうですか」

胸が痛くなる。嘘を吐かないと言っておいて、その実はどうだ？
『嘘を吐かない』という【嘘】を吐いているじゃないか……。

アインハルトは一瞬目を伏せたようにすると、『すみません、変なことを聞いて』と言って僕の手を離してくれた。
僕もそれとなく、『ううん、気にしてないから』と当たり障りのない答えを返しておいたけど……。

もしかしてアインハルトは……僕が何かを隠していることを確信しているんだろうか……？

そんな僕の一抹の疑問と不安を残したまま……僕のインターミドルへの出場に関しての話題は一先ず保留されることになった。
ヴィヴィオやリオ、コロナ達は残念がっていたけど、やっぱりそれ

以上に僕はアインハルトのことが気になって仕方がなかった。

「ふ～む……」

ＰＯＰを片手にゲームをしていた師匠が……また一つ、小さく息をつくのを僕の視界の端で捉えたような気がした……。

【ホムラｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【アインハルトｖｉｅｗ】

――真夜中

私は訳もなく目を覚ましてしまい、月明かりの照らす寝室の中でルーテシアさんが探してくれた、過去のシュトゥラ、覇王クラウス、聖王オリヴィエ、ベルカ時代の書物。

その中の、クラウス・Ｇ・Ｓ・イングヴァルト自身の回顧録を見ながら、物思いに耽っていた。

考えていたのは、これからの私……というか、やるべき事。

今まで、覇王流の強さを証明することは、命を賭けた戦いの中でしか、それは達成できないものと考えていた。
だけど、ヴィヴィオさん達との模擬戦、さらにインターミドル・チャンピオンシップという公式魔法戦競技の存在が私のその考えを根底から覆したような気がした。

舞台は違えど……いや、強さを証明するのに舞台は関係ないのだと……。己の強さを証明するのに必要なのは、自身の意思と実力だけだ。
舞台どうこうは、ただの付属品でしかない。
でも……そうと分かっていても、不安になってしまう。

「クラウス……私はそこで戦ってきていいですか？」

だからこそ、そんな風に呟いてしまう。
不安な気持ちを言葉に乗せて、そのままどこかに流れ出ていくことを望んでいるかのように。

「いつかあなたに追いついて、いつかあなたを追い越して……。あの日のオリヴィエ殿下より強くなって……」

思いは、やるべきことは何も変わらない。
覇王の悲願を、私の願いを、覇王流の強さを証明する。

そのためには、呟いた通りに過去の覇王よりも、過去の聖王よりも強くならなければならない。
そして、その力を発揮するべき場所が……インターミドル・チャンピオンシップという大会であるということだけ。

「私達の悲願を叶えるために……」

本を胸に抱き、最後にそう呟く。
迷いが全くないといえば嘘になる。ただ、ここ最近で分かってきたこともある。

『急ぎすぎる必要はない』ということを。
自分よりも、明らかに強さに対して貪欲で、幾ら言っても焦ることをやめてくれない……気になる男の子をずっと見てきているから。

彼…ホムラさんの向上心と言うか、強さへの執着、固執は私と同じ……いや、それ以上の何かを感じさせる。
だけど、彼はインターミドルでの力試しを辞退した。強者と戦うことも、実力を向上させるためには必要ではないのかと思っけど、ホムラさんの場合は……そう、まるで……

『ルールで守られた公式競技では意味が無い、関心がない』というスタンス、考え方、思いがあるように感じてしまった。

それこそ、命のやり取りが求められる戦いに目線を向けているような気がして……。

「ホムラさん……きっと、私に何かを隠して……」

だから、私はホムラさんに尋ねた。『隠し事はないのか？』と……。
彼の手を取って質問したのは、筋肉の動きや脈拍から彼の嘘が分かるかもしれないと思ってのことだ。

ホムラさんは頭が良い。きっと、必要な場面では嘘を付くのも上手いだろう。
彼に質問をした時、一瞬だけど腕の筋肉に力が入った。表情こそそのままだったけど、やっぱり動揺していたんだ……。

つまりは……私に何か隠し事があるということ……。

「（何も話してもらえないのは……やっぱり、悲しいです……）」

もちろん、ホムラさんが人を傷つけたくて、嘘を付くような人でないことは百も承知だ。
多分、私には聞かせたくないような、そんな話なんだろう。
そうやって、私に気を使って、心配させまいとして、自分の中だけで解決しようとする。

それが、ホムラ・スメラギという人間だ。

でも……多分、彼は一人では生きてはいけない人なんだと思う。
私もそうであるように。

いつかきっと、張り詰めた糸が切れるように、ホムラさんは壊れてしまう。
自分の中に全部を溜め込んで……そのうちパンクしてしまうかもしれない……。
そんな彼を、私は見たくない……。だから…

「（だから……私が守ってあげたいんです……安心させてあげたいんです）」

昨日のベッドでのことでもそうだ。ホムラさんの体が、いつもよりもずっと小さく見えてしまって、目を離せば消えてしまいそうで。
――だから、私は手を伸ばしたんだ。
誰でもそうしたわけじゃない……ホムラさんだから……彼だからこそ、その手を掴んで抱き寄せて……。
私の存在を感じさせて、心に穏やかさを抱いて欲しかったんだ……。

ガチャ……

と、そんな時、私の耳にこの宿泊ロッジの玄関の扉が開かれ、すぐに閉まる音がした。
この世界は無人世界だから、知らない人間が入ってきたということ

は考えられない。と言うことは、誰かが外に出たということ……。

「ホムラさん……？」

一体誰なのかと、部屋の窓から外を見てみると、月明かりを頼りにどこかへ向かっていくホムラさんの姿があった。
こんな時間に……何を……？

「……よし…」

なんだか胸騒ぎを覚えた私は、急いでその誰かの跡を追うべく、寝室を抜けだした。
理由はないけど、そうしなければいけないという、そんな強迫観念にも似た気持ちの突き動かされて……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「えっと……この辺りに来たはず……あ、いた…！」

私は、ホムラさんの跡を付ける形で夜の世界に繰り出した。なんだか、ホムラさんに対して後暗い気持ちが、心の中を掠めて行くけど、ここまで来たらもう引き返せない。

それに、こんな時間に訓練でもしようものなら、本気で断空拳を食らわせて睡眠（強制的）を取ってもらわないといけない。

「あれは……ホムラさんに……ルークさん……？」

ホムラさんの姿は、すぐに見つかった。

一日目で水切りをしていた、あの河原の付近。昼間とはまた別の姿を見せてくれる自然に心打たれながらも、ホムラさんの跡をつける私。

けど、そこに居たのはホムラさんだけではなくて……彼の剣の師匠でもある、ルークさんの姿もあった。

そして、次の瞬間、恐らくはルークさんと話していたであろうホムラさんの口から飛び出した言葉に、私は心臓が止まってしまうかと思うくらいの衝撃を受けた。

「お前は、なんの為に強くなりたいんだ？」

「――僕には……殺してやりたい……復讐したい相手がいるんです。だから……師匠に、人を殺すための剣を……教えて欲しいんです」

え……？

人を……殺すための剣……？

あのホムラさんの、お人好しのホムラさんの……優しいホムラさんから出るはずもないような言葉に……私はその場から動くことも叶わず、ただ彼らの話を聞いているしか無かった……。

【アインハルトｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

Ｍｅｍｏｒｙ；４４　ホムラの嘘、アインハルトの気持ち（後書き）

Ｆ２０Ｃ「おい、あの閣下にクリソツなイケメンは誰だ？」

閣下「わたｓ」

クゥ「ご存じないのですか！　あれが」

ルーク「いや、クゥ。そういうネタいいから。というか、俺シンデレラじゃねーから」

クゥ「（，・ω・、）えー……」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；４５　Ｒｅｖｅｎｇｅ　ａｎｄ　ｐａｓｔ

次回から、ルークさんのカッコイイターンがはっじまるよー！！

加えて、インターミドル編での新キャラのアイデア募集をここで締め切らせて頂きます。

大変多くのアイデアを送って下さり、本当にありがとうございましたｍ（＿＿）ｍ

近い内に、採用させていただくキャラ二名を発表させて頂きますので、暫くの間お待ちください。

Ｍｅｍｏｒｙ；４５　Ｒｅｖｅｎｇｅ　ａｎｄ　ｐａｓｔ（前書き）

Ｆ２０Ｃは録画しておいたガンダムＡＧＥを再生しました。

約３０分後……

Ｆ２０Ｃ「なんか……違くね？」

来月に公開される、ガンダムユニコーンＥＰ４だけが私の希望です。
あ、それとマクロスＦ劇場完結版のブルーレイもですね。予約余裕でしたｗｗ

Ｍｅｍｏｒｙ；４５　Ｒｅｖｅｎｇｅ　ａｎｄ　ｐａｓｔ

【ルークｖｉｅｗ】

「う～む……実に気持ちのいい夜じゃないか」

『そんないい夜に、あんたは何で寝室を抜けだして……というか、追い出されてるのかしら？』

「……昼間のバインドの件で……フェイトにこっぴどく叱られた……」

『あぁ～、なるほどね……私達がスリープ状態になってる間にそんなことが……アホね』

いやぁ、あんなに顔真っ赤にして怒んなくてもいいのにさ……。

まぁ、怒ってプンプンしてるフェイトもまた可愛いんだけど……。

頭上には満天の星空、空気も澄んでいて、小川を流れる水のせせらぎが荒んだ俺の心を優しく癒してくれるようでもある、こんな気持ちのいい夜。

散歩ついでに、若者の人生相談を受けるのも悪く無いだろう……

あ、そう言えば俺、まだ２１歳なんだっけ？

まぁ、いいや、こまけぇこたぁいいんだよ。

『ルーク様、後で奥様にはきちんと謝っておいたほうがよろしいかと』

『今回ばかりは、私もダモクレスに賛成かもねー。あんた、ちょっとやりすぎ』

「なんだよ二人して……、わかった、分かったよ……謝るよ。その後甘えるよ」

『『ダメだこりゃ…』』

相棒であるアーカーシャとダモクレスにそう言われてしまいながらも、俺は川のほとりにある大きな岩の上に腰掛け、星空とおいしい空気を感じながらのんびりとした時間を過ごす。

まぁ、実際は来るであろう人物を待っていたわけなのだが。

「――――師匠（せんせい）」

「……こんないい夜に、俺に一体何のようだ、ホムホムよ？　生憎と、子守唄を歌えるほど歌は上手くないぞ」

「……師匠は、分かってたんじゃないですか？　僕が話しに来るって……だから、わざわざこんな夜中に外に出て……僕を待っていた」

ま、さすがに鋭いと言うか、良い勘をしている。
実際、ホムホムの言うとおりだし、俺自身もすこしこいつとの二者面談が必要だと思っていた。

キッカケは以前からいくらでもあったが、今日のインターミドルの件で、一定のラインのようなものを超えたような、そんな気がしたのだ。

「なるほど。相変わらず鋭い観察力と言うか、直感力か」

「そんな大層なものじゃないです。ただ、そう思っただけですから」

「その言い方が直感的なんだよ。いや、それはまぁいいや……で？　俺に話したいことがあるんだろう？」

俺がそう返すと、ホムホムは少し黙り込んだ後、大きな岩の上に腰掛けている俺を見上げるような形で、視線を持ち上げる。
その目には、昼間に見えたいつもの温かみのある視線は消え失せ、この年頃の子供が出来るはずのないような鋭い視線が顔を覗かせていた。

なるほど、これは確かに……修学旅行で好きな娘の話をするような雰囲気じゃないな……。

「僕が……インターミドルに出ないことには……その、何も言わないんですか？」

「お前が選んだことだろう。出たいのなら出ればいいし、出たくないのなら出なければいい。俺は一応お前の先生だが、特別な理由でもない限り、そういう事にまで干渉するつもりはない」

「……」

押し黙るホムホm……いや、ホムラ。

さてさて、一体どういうつもりでこの話を吹っかけてきたのやら……。

俺としても、インターミドルは出ても出なくてもどっちでもいいと思っている。しかし、力試しが出来るのに加え、初めての絶対的な敗北を味わえるような舞台だ。

出てみて負けてみるのもまた一興。

そこで変な自信を付けて後で痛い目を見るのも一興だ。まぁ、そうならないようにするのが指導者というものなんだろうが。

なんにせよ、最終的には本人が選ぶことだから、今の時点でなにも言うつもりがなかっただけだ。

「ていうか、お前はさ……あぁいう競技としての魔法戦には興味がないんだろ？　それこそ……まるで『自分の戦場は、命のやり取りを必要とするところだ』とでも考えているように思えてならないんだがな」

「……」

また黙り……こりゃ、確定だな。沈黙は肯定なりってことか。
アインハルトたちと話してる時からそうなんじゃないかとは思ってて、試してみたらドンピシャだ。

となると……やっぱり、こいつの目的は……。

「ホムラ……お前は、どこで戦う？　誰と戦う？　なんの為に戦うんだ？　いや……それ以前に……お前は、なんの為に強くなりたいんだ？」

答えは、最初から分かっていた。こういうタイプの、こういう人間はまだ２１年という短い人生の中でも腐るほど見てきた。
皆同じように、今のホムラのような鋭さの中に脆さを感じさせる目をしていたように思う。

ホムラは……一体何を失って、『そうなって』しまったのか？

「――僕には……殺してやりたい……復讐したい相手がいるんです。だから……師匠に、人を殺すための剣を……教えて欲しいんです」

……ほら、やっぱり。

復讐（リベンジ）。まぁ、人間社会ではよくある話だ。
何も、ホムラが特別なわけじゃない、復讐を謳って生きていくこと

を決めた人間は、歴史の中に吐いて捨てるほどいる。

「……何があった？　それくらいは聞いてもいいだろう」

「……はい」

ともあれ、動機ぐらいは聞いておいてもバチは当たらないだろう。というか、そう簡単にガキを復讐鬼に仕立て上げるわけにも行かないし、そんな趣味もない。

ホムラは、俺の質問に短く答えてから、自身の身に起こったことを話し始めた。

それは、こいつにとっては触れたくない過去なのだろう。きっと、心の中にポッカリと口を開いた大きな傷に塩を塗る行為に等しい。

「僕の両親は、二人共執務官でした。結構優秀だったようで、局内でもそれなりに名の知れた二人だったみたいです。そんな両親が……あれだけ強かった父さんと母さんが……三年前、殺されました」

両親か……。

正直、俺には親の大切さ、ありがたみというものはいまいち理解出来ない。いい思い出が無いからだと言われればそれまでだが、劣悪な家庭環境で育ってしまったのが原因なのか、相当ひねくれた感性を身に付けてしまっているらしい。

それでもまぁ……一般的には、親の存在というものは大きく、大切なモノなんだろう。
俺自身、親になってみて……子供に必要とされていると思うと、嬉しくなってしまうものだ。
……最近は、ちょっと泣かされることが多いけど。

「三年前のある日……僕と両親、そして妹は旅行で、ある観光世界の保養地まで足を伸ばしていました。久しぶりに休暇が出たとかで、両親なりの家族サービスだったんでしょうね」

「……」

「でも……ホテルにチェックインしたその日の夜……、その保養地のホテルが……というより、その保養地全体がテロに遭ったんです……」

テロ……。それも、管理世界の保養地に手を出すということは……管理局のような組織に反発心を持つ輩の犯行ってところがオーソドックスだ。
恐らく、ホムラの場合もその例に漏れることはないのだろう。

「両親は、テロで崩壊したホテルからできるだけ多くの人を助けようと必死で動いていました。そして、最後にホテルの中を探検していて逃げ遅れてしまった、僕と妹を見つけてくれて何とか脱出できるところまで来ていたんです」

「でも、そうはならなかった」

「……はい。あと一歩の所で……テロの実行犯だと思われる男が現れたんです。剣型のデバイスを持った男で、かなりの腕を持っていたと思います」

テロの実行犯……剣型のデバイス……。テロと言うからには、複数犯と考えるのが妥当なんだろうが……わざわざ姿を見せる必要があるか？

犯行声明という意味なら、事件の後でも十分……。

まさか、快楽殺人犯か行き過ぎの主義者か……？

「その男は……俺と妹を庇って全力を出せない両親を……次々に殺して行きました。剣で、刺し貫かれて……。それで、そいつは言ったんです」

「何を？」

「……『革命の為には、時には人の血も流れる。　だが、それがいつか、弱い人々を、苦しんでいる弱者を救うためになるのだ……』……そう、これは正義、正義の行いなのだ…』と……『より良い未来のため、お前達の両親の命はそのために摘ませてもらった。力のある者、既得権益にしがみつく者、私はそのすべての敵になる。全ては人々に『平等』を与えるためだ』とも……」

なるほど……主義者（エゴイスト）か。

それも、ニュースで見るようなレベルを完全に超えてる、行き過ぎな社会主義者も真っ青ってところか。これじゃあ、街中で街頭演説してるほうがまだ可愛気がある。

そういった主義主張に関して、気持ち的にはノンポリな俺がどうこう言うつもりもないが……。それにしたって、一般人を巻き込んだ上に、子供を庇う親まで殺すか……。

いや、俺も他人の事は言えないか……。

ともあれ、これでホムラの復讐の動機は分かった。両親の仇を討ちたい……言葉にしてみればシンプルだけど、中々どうしてややこしい話だ。

「両親が死んで……妹のユキナもその時の怪我と精神的なショックが原因で入院することになって……今も、やっと外に出ることが出来るようになったところなんです……。両親を奪って…妹の体をあんなことにした……『俺』は……アイツを許せないんです……。殺してやりたいほどに……憎い」

「それで、俺から人を殺すための術を教わって……その男に復讐ってわけか……」

「馬鹿なことを、と思われてもいいです……。でも……」

「思わねぇよ。ただ、俺の両親はそこまで出来た存在じゃなかったからな。そこまで必死になるお前の気持ちを完全には分かってやれん」

復讐なんて、馬鹿な事はやめろ。
ドラマや漫画、アニメの中の師匠や先生という立場の奴は、こういうセリフを言うのが定石だ。
いや、実際そう言ってやるのが然るべきであり、正しいことなんだろう。

だが……、どうしたって、人間は感情を持った生き物だ。復讐を遂げないと前にも後にも進めないような奴が、確かにいるんだ。
ホムラもきっと、そういう奴なんだろう……。だが、先人としては未来ある若者にホイホイそういう道を許していいものでもない。

一応、俺も先生だからな。

「ただな……。人を殺めるってことは、口で言うのや、頭の中で考えるのとはわけが違う。自分の中の何かが、変わるんだよ。それと同時に、目の前の誰かが物言わぬ肉塊に早変わりするんだ。正直、正気の沙汰じゃない」

「……でも、師匠は……」

「あぁ…殺してきた。俺の故郷は、ずっと戦争中でな、今は休戦中で平和なもんだが……いや、それはどうでもいいんだ。……俺は戦場で、ただひたすらに戦い続けた。毎日毎日が命懸けのデスゲームさ」

あの頃のことは、今でも夢に見る。その度に、飛び起きてしまって

フェイトに心配をかけてしまうこともしばしばだ。
戦争だから仕方ない、戦争に犠牲は付き物だと、そんな理論を振り回すつもりはない。

ただ、戦場は『殺らなければ殺られる』の世界だ。そんな世界では、一瞬足りとも気など抜けない。
それこそ、心を凍りつかせて戦いに挑む勢いでもない限り、正気など保ってはいられない。

「４７６３」

「え…？」

「俺が殺した、敵国の兵士の数だそうだ。記録上のものだから、実際はこれよりも多いかもしれないけどな。そんな数も気にもしないで……毎日毎日、殺して殺して、殺し尽くした……」

一瞬、ホムラの表情が強張る。まぁ、目の前に大量殺戮を繰り広げた人間が居るのならば、当然過ぎる反応だ。それに、そういった視線には慣れている。

故郷からしてみれば英雄でも、敵国にしてみれば悪魔そのものなんだろう。特に、俺を含んだ四聖剣の連中は、周辺国では嫌われ者だ。

「命令に従って自国の人間でさえ、邪魔な奴らの暗殺、掃除もした。殲滅戦だって言われるがままにやったよ……それで、汚い仕事も一通りこなした。普通なら、シャバになんかいられない奴さ」

「……」

「お前は……こんなどうしようもない奴と近い、同じ土台に足を上げようとしている。敵討ちって言っても、やることは変わらん。剣を振るえば人は死んだからな」

ホムラの覚悟。もしかすると、こいつは覚悟を持ってこの場に来ているのかもしれない。

両親に無念と、妹の体。何より、こいつ自身の人生を滅茶苦茶にした奴に制裁を加える、殺す覚悟を。

俺が言えた義理じゃないが、１２歳のガキが考えるようなことじゃないかもな。

でも、こいつはそれをしないと前に進めない。ずっと立ち止まったままなんだろう。

そう……『誰か』が、こいつの手を引っ張る事ができない限りは。

そして……その『誰か』は、もうこっち側にいる俺じゃない。

「覚悟は……あります…！」

「なら、復讐を遂げた後はどうする？　目標を見失った人間ほど、弱い存在はない」

「…それは……」

復讐した後の人生は、否が応でもそいつの目の前に広がっている。
これまでの人生を、【復讐】という目標に向かって走るだけだった人間が、何の指針も無しに走るのは至極難しいものだ。
新しい何かを見つけられる奴なんて、ほんの一握り。それも、心の傷を追ったまま生きることを余儀なくされてだ。

「人を殺めるに至るまでの覚悟は百歩譲って認めてやる。だけど、お前は『その先の人生』のことをまるで考えていない」

「……でも、僕はこれをやり遂げないと……先のことなんか考えられないんですよ……！」

なるほど……こいつ、普段はとんだお人好しだが、ここぞって時の頑固さは筋金入りだ。
刹那的な生き方っていうか……昔の俺自身を見ているみたいな気分だなぁ。
それだけ、こいつにとって過去の事件は許せない事件で、忘れられない出来事で……多分こいつは、悔やんでいるんだろう。
過去の自分の無力さを。

「戦争を経験してきた師匠（せんせい）なら分かるでしょう？　大切な人が死ぬって……辛くて、痛くて……殺した相手を同じ目に遭わてやりたいって……！　そう思うのは、人間としては仕方ないことじゃないんですか……？」

「――あぁ、それは嫌ってほどに経験した。でも、その大切な奴を殺した相手を殺しても、何も帰って来なかったよ。精々が、殺されたダチの母親から礼を言われるくらいだ、泣きながらな」

「……別に僕は……何も帰ってこなくてもいいんです……ただ、…ただ、アイツが……あの日のアイツが憎くて憎くて仕方ない。それだけです…！！」

最終的に行き着くのは、やはり人間の感情というやつだ。
憎い、嫌いだ、邪魔だ、殺してやりたい、そんな感情が……ホムラの復讐の原動力で、力の源でもあるんだろう。

……悲しいな。

「はぁ……」

俺は、溜息を一つ吐いてから、腰を掛けていた大岩から飛び降り、ホムラの正面に立つ。
ホムラも、俺から視線を話すことなく、意思の篭った強い視線を向けてくる。

復讐鬼に堕ちるのも、敵を討ちたいという気持ちも、俺には否定してやることができない。
そういった感情がなければ、人間は人間として成り立たないということを、長い戦いの人生の中で嫌というほど味わってきたからだ。

ホムラの復讐への思いも、憎しみも、刹那的な生き方も……似た

ようなものをこれまで腐るほど見てきた。俺自身もそうだった。

こんな俺が……こいつにしてやれることといえば何だろうか……？

そう考えた時、頭に浮かんだ答えは1つだけだった。

「――条件が2つある」

「え？」

「まず一つ。インターミドル・チャンピオンシップの男子の部で結果を残せ。最低でも都市本戦出場、世界代表にでもなれれば御の字だ」

インターミドルへの参加は強制させるようなもんでもない。さっきもそう言ったのは俺自身だ。

だが、あの大会に参加して……剣術や魔法戦には他の可能性があることも理解させてやりたい。強くなることへの願望、そのためのエネルギーは、憎しみだけじゃないということをこいつが理解できるかどうか……インターミドルへの挑戦は、そのための一つのアプローチだ。

実を結ぶ確率は……正直、かなり低い。が、やらないで俯瞰するのは趣味じゃない。

打てる手は打っておくべきだ。

「でもって2つ目。お前が復讐したい相手が見つかって、そいつと

やり合う場合。必ず俺もその場に同席させる、いや、捜査にも俺を同行させること。この条件が飲めるなら……俺が持ってる全部をお前に教えると約束する」

「師匠（先生）……それって……」

「悪いが……俺は生徒をホイホイ人殺しにするほどまでは腐っちゃいないつもりでね。敵相手を叩きのめすところまでは見守ってやるが、お前にそれ以上のことをさせるつもりはない。憎い相手を殺したいなら、俺よりも強くなることだな」

これは保険だ。

仮に、ホムラがそのテロリストな輩と遭遇、接触…最悪戦闘になる可能性が出てきた場合、俺もそこに居ることが出来れば、『最悪の結末』は避けられるかもしれない。

ホムラが死ぬにしろ、ホムラが相手を殺すにしろ。

これはきっと、俺の自己満足なのかもしれないが…それでも、まだホムラは【こっち側】ではないから。

そうならないで済むかもしれないなら、その方がコイツにとってもアインハルトたちにとっても良い筈だ。

もしもの時は、俺が終わらせてやればいい。

「で、どうなんだ？　この条件が飲めるのか飲めないのか。飲めない場合は、俺はお前の指導を降りるしかなくなるんだが」

「……」

自分でも、こんなやり方は卑怯だと自覚はしている。
だが、手段を選んで後悔するのも、若い奴らに後悔させるのも、どちらも頂けない。

大人のズルさを使ってでも、俺はホムラを人殺しにするつもりはなかった。復讐の先の人生が見えていない奴に、そんな真似をさせる訳にはいかない。

いや、それ以前に……ホムラに昔の俺を重ねてみているだけなのかもしれない。だからこそ、俺の二の舞にさせないようにしているのか…。

「……分かりました。それで……お願いします」

「よし。なら、当面の目標はインターミドルに向けての修行だな。今から大体二ヶ月くらいあるから……大会までには、それなりのことが教えてやれるだろう」

ホムラも、俺の意図には気がついているだろう。
復讐を果たす条件が難しくなったということを理解してもなお、俺に師事する……何と言うか、複雑な気分ではある。
やはり、ホムラの憎しみは本物ということか……。

「話は纏まったな。ほれ、ガキはさっさと布団で寝てこい。体を作

るのにも睡眠は大切だからな」

「――――はい！」

一瞬、先程よりも強い光を宿したホムラの瞳が俺を見据え、元気に返事を返してくる。

これからは、ただの師弟関係じゃなくなったな……。

ホムラの復讐を果たすための壁……その壁役が俺、ホムラにとってはいつか倒さなければならない存在。

でもって、俺も俺で負ける訳にはいかない……。

「師匠……『俺』、負けませんから」

「あぁ、それでいい。というか、俺より強くなるって言えないようじゃ、満足な成長も望めないからな」

「はい。……では……失礼します」

ホムラは、静かに頷くと踵を返して宿泊ロッジの方に帰っていった。

その背中は、昼間見た時よりも、覇気に満ちているような……力強い何かを感じさせるものだった。

さてさて、不肖の弟子とのお話も終わったことだし、今度はこの場にいる仔猫とのお話の番ですかね。

「あ～あ……俺って、損な役回り……で？　いつまでそこで隠れてるつもりなんだ、アインハルト？」

「！？」

さっきから、気配がするとは思っていたけど、どうやらアインハルトがホムラとの話を聞いていたらしい。まぁ、知っていて見て見ぬふりをしていたのは他でもない俺なんだけども。

アインハルトは、俺が気がついているとは思ってもみなかったようで、びっくりした様子が姿が見えない状態でも分かってしまったほどだ。

そして、隠れていても仕方ないと判断したようで、ちょっと気まずそうにしながらその姿を現した。

「盗み聞きとは……いくらホムホムに奈落の底までフォーリンラブって言っても、感心しないなぁ？」

「ふぉふぉ、フォーリンラブってなんですか！！？　そ、それにこれは盗み聞きではなくてですね……た、たまたま聞こえてしまったという感じで……」

「世間では、それを盗み聞きというのだよアインハルト君」

「うぅ……す、すみませんでした……」

シュンとなりながら謝ってくるアインハルト。生真面目と言うか何

と言うか……。
まぁ、しっかり者ということにしておいてやろう。
それはともかく、俺も俺で、アインハルトには話があったわけで、ここに来ていて、且つさっきの話を聞いているのなら話しは速い。

「さっきのホムホムとの話、聞いてたな？」

「……はい」

「そうか……。まぁ、それはいいんだ。俺のことも、元人斬りってことで恐いかもしれないが、距離でも取って我慢してくれると嬉しい」

「そ、そんなことは……！」

慌てた様子で、俺の言葉を否定しようとするが、やはりまだまだ若い。動揺が全く隠せていないところが可愛らしいものだ。ホムホムが夢中になるのも頷けるというものだ。
まぁ、その話は置いておいておくとしよう。

「で、でも……本当なんですか…？　ルークさんが……その……戦争で、沢山の人を…」

「嘘って言えればいいんだけどなぁ……。生憎と本当なわけだ。軍人として命令が出るままに敵の兵士や女子供まで……極悪人だろ？　軽蔑してくれて構わない」

「……」

まぁ、流石にこんな話を年頃の子供にするのも憚られるが、聞かれた以上は正直に話すべきだろう。
ここで嘘をついてしまったら……、こんな俺を好きになってくれたフェイトを、フェイトと過ごしてきたこれまでの時間を裏切ってしまうことになってしまうから。

「……私も…過去の覇王の記憶を持っていますから……。戦争で人が死ぬことや、自身の手に掛けなければならない事は理解しているつもりです。ですから……軽蔑などはしないです……」

「……ま、無理してでもそう言ってくれると気が楽だよ。でも、今は俺のことはどうだっていい、問題はホムラのことだ」

ホムラを、仄暗い闇の中から助けられるのは、さっきも言ったけど俺じゃない。
俺には、ホムラにとっての師匠としての役割と、復讐を遂げるための壁の役割、倒すべき敵という役割がある。
流石に、俺がアイツを救ってやることは無理だ。
それに、それならばより適任な人間が、ホムラにはいるはずだ。

「ホムラの戦う理由……それは理解できたな？」

「……はい……ご両親の敵を討つことと……。ですが、前に話したときは、殺されただなんて一言も……」

「……本当のことを話してもらえなくて、悔しいのか？　それに、さっきもそれとなくホムラに隠していることがないか聞き出そうとしていたみたいだが」

「はい……結局、何一つ話してはもらえませんでしたけど……」

ま、何も話してもらえないっていうのは悲しいもんだよな。ホムラだって、嘘を吐きたくて吐いたわけではないんだろうし……。アインハルトも、その辺りのことは分かっているんだろう。それだけに、ホムラの目的がどんなものなのかを聞いてしまったとなると……アインハルトも辛いだろう。

「分かっちゃいるとは思うが、ホムラはお前に余計な心配を掛けたくなくて嘘をついたんだ。ま、そこは男の子のプライドってことで許してやってくれ」

「でも……やっぱり、悲しいです」

「男ってのはな、気になる女の子には良いカッコしたがるもんさ。アイツも、お前にはダサいところ見られたくないんだろうよ」

「き、気になる……女の子ですか…？！」

あらあら、まぁまぁ……って、俺は近所のおばちゃんか…。

アインハルトは、俺の客観的に見たホムラのアインハルトに対する態度や反応から、『そういう事』なんじゃないかと予想していたんだが……アインハルトもホムラにほの字らしい。

リア充の卵がこんな所にも……最近のガキは迫力満点だ。

「で、ホムラの親の敵を討ちたいっていう話だけどな……。俺はハッキリ言って、あいつを人殺しにするつもりはない。だからこそ、さっきの条件を提示したわけだしな」

「インターミドルでの入賞と、件のテロリストを追う場合の同行……ですか」

「インターミドルのことに関しては、アイツにとっていい刺激になればいいんじゃないか、ってくらいにしか思ってないけどな。大会の中で、あいつが何かを見つけられれば儲けもんだ。実質的な保険は、俺が直にあいつを止めるほうだ」

だからこそ安心しておけ、なんてそんなことを言うつもりはない。ホムラの復讐に対する執念と言うか、覚悟だけは本物。いや、悲しいことにそれだけが今のあいつの生きる原動力になっているといってもいい。

だからこそ、もう一つくらい保険を掛けておきたい。

「でもまぁ、あいつはきっと強くなる。もしかすると、俺が手に負えないようなものになる可能性だってある。そうなれば、あいつの

復讐を止めることは難しいだろう」

「それは……そうかもしれません」

「復讐を終えた人間は、次に成すべきことを見い出せないことが多い。それこそ、自分のしてきたことや、そこからの人生に展望を持てずに自ら命を断つ奴も居る。この目で見てきたことだ」

だからこそ、復讐を止めるための抑止力、若しくはホムラの手を引っ張って薄暗い闇から助けだしてくれるような存在が必要だ。

俺が、フェイトに助けてもらったように。

「アインハルト、お前はホムラに復讐なんかさせていいと思うか？　それを許せるか？」

「……ホムラさんの悲しみも考えれば……復讐したいと思うのは当たり前かもしれません。ですが……私は、ホムラさんには……そんなことはして欲しくない……です」

だよな。この子なら、そう言うと思った。

大切な人間が、復讐鬼に堕ちるところなんて見たいと思う奴はいないだろうさ。それこそ、そんな奴は性根が腐ってるとしか思えない。

だからこそ、ホムラに復讐なんてさせたくないと思っていて、尚且つアイツを好いているアインハルトにこそ、ホムラを救える可能性を見いだせる。

「なら、ホムラのことはお前がしっかりと目を付けておくこった。アイツが間違えそうになったときは、お前が止めて、叱ってやればいい」

「……私が……。私に……出来るでしょうか？」

「出来るさ。男は、いい女の言うことには耳を傾けるもんだからな。それにホムラは……」

「？？？」

ホムラは、お前に惚れている。

と、これを俺の口から言うのは野暮だろう。アインハルトが首を傾げているが、こういうことは本人間で気づいて、気持ちを育んでもらいたいものだ。

「ま、あれだ。愛しのホムホムのお目付け役として頑張れってことだ。ホムラみたいなやつほど、世話を焼いてくれる女の子には弱い。上手くいけば、逆フラグ立てが成功するかもよ」

「にゃ、にゃんのことですかそれは！！」

「またまた照れちゃってまぁ～……。初々しいと言うか何と言うか……」

アインハルトは顔を真赤にしながら、あうあうと口を動かす。これで、腕をブンブン振り回したりすると駄々っ子キャラみたいに見えないこともない。

まぁ、何はともあれ……アインハルトもホムラに対してどう接するべきなのか、何をしてやれるのか……それを考えてくれればいい。そういう気持ちは、きっとホムラにも届くだろう。

「んじゃ、そういう事でよろしくな。ホムラのこと、助けてやってくれ」

「あ……は、はい！！」

俺は、アインハルトにそれだけ言うと、宿泊ロッジへの帰ることにした。若者たちのお悩み相談室タイムはこれで終わりだ。

アインハルトも元気な返事を返してくるあたり、十分に任せられる人材だろう。

どう転ぶかはまだ分からないが……兎に角、今は出来ることから始めて行かないとな。

俺も俺で……ホムラたちにしてやれることがあるだろう。

その後、俺は宿泊ロッジに戻り、ほとぼりが冷めるであろうフェイト、そしてシエル達の寝ているであろう部屋に戻った……のだ

が。

まさかのカギロック状態で、部屋に入れないという現実……（あとで分かったことだが、フェイトが鍵を開け忘れたままシエルと一緒に爆睡してたらしい）。

あれ？　おかしくね？

その日の夜、俺はリビングのソファで寝ることになったのは言うまでもない。

僕泣かないもん、男の子だもん。

【ルークｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

Ｍｅｍｏｒｙ；４５　Ｒｅｖｅｎｇｅ　ａｎｄ　ｐａｓｔ（後書き）

Ｆ２０Ｃ「せ～の……！！」

ホムホム達「ｍ９（＾Д＾）プギャーｗｗｗｗ」

閣下「ちくしょおおおおおおお！！！　かっこ良かったのにこの扱いか……！！」

ホムホム「というか、そもそも先週のお話でハラオウン執務官に変なことさえしなければ、丸く収まったんじゃ……」

アインハルト「激しく同意です」

クゥ「雑種が」

Ｆ２０Ｃ「君は実にバカだな」

閣下「（´・ω・`）」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；４６　アインハルト、宣戦布告！

閣下「じ、次回こそ、我がメイン回！！」

Ｆ２０Ｃ「オメーの出番ねーから」

閣下「なにこの、どうあがいても絶望的な……」

Ｍｅｍｏｒｙ；４６　アインハルト、宣戦布告！（前書き）

今回でやっと、オフトレ編は終了になりますね。
次回から、新章突入！といったところでしょうか。やっとこさ、四巻の内容に入ることができますよ……長かった…。

今月末には五巻も出ますし、お話が進む速度的には良い感じなんですよね。
五巻の内容が終わってからのことは……

正直考えてないです（；・∀・）
番外編で、ルークをメインにしたお話でも書こうかしら。

閣下「ガタッ」［電柱］д｜）　チラッ

ただし、カッコイイルークに限る。

閣下「（＊｀□´＊；」

Ｍｅｍｏｒｙ；４６　アインハルト、宣戦布告！

【アインハルト　ｖｉｅｗ】

『はぁーい、ルールー♪　お久しぶりやー』

「八神司令、お久しぶりです」

オフトレに入って早三日目。
私は、インターミドル・チャンピオンシップに出場する際に、最低限必要なデバイスの問題を解決すべく、ルーテシアさんの伝で真正古代ベルカのデバイスの作成を、八神はやて司令という方にお願いすることになった。

午前中を使って通信ではあるものの、お話をする時間が出来たので、こうして回線を開いてもらったのだけど……。

狸……ではなく、狸のお面を被った、ショートヘアーの女性がホロウィンドウに映し出された時は、流石にびっくりしてしまった。
何と言うか、あのお面は果たして狙っているのか、それともただの悪ふざけなのか……どちらにしても、八神はやてさんという方は『面白い女性』というのが私の第一印象だった。

「今日はですね、この子の……」

『あー、聞いてるよー』

ルーテシアさんが、八神司令に私のことを紹介しようとすると、司令は私のことを知っているようで、スラスラと私の簡単な経歴を話してくれる。

『覇王イングヴァルト陛下の正統血統、ハイディ・E・S・イングヴァルト。格闘戦技【覇王流】を継承してて、ちょっとやんちゃもしてたけど今はノーヴェ師匠やヴィヴィオ達と一緒に魔法戦競技に一生懸命。真面目な一生懸命なええ子やって』

恐らく、ノーヴェさんかヴィヴィオさんのお母様達の方から話が通っていたのかもしれない。それでなくても、八神司令は捜査官という役職にあるということから、情報的な分野において、私のことを調べるのは早々難しいことではないということだろう。

実際、司令が仰る通り、ちょっとやんちゃをしていたわけですし……。

『そんな子になら、いくらでも協力するよー♪』

でも、捜査官というお固い肩書きからは考えられないくらい、ホンワカしているというか、穏やかな方と言うか……。フェイトさんやヴィヴィオさんのお母様のご友人ということに、なんとなく頷けて

しまった。

『公式魔法戦用のデバイスやったっけ？　どんなのがええか、決まってる？』

「あ、はい…！」

『装着型とか武器型とか』

『何でも相談に乗るよー♪』

八神司令と一緒に、青い髪の女の子と、元気そうな印象の赤い髪の女の子が画面に現れる。
ヴィヴィオさんたちに聞いた話では、青い髪の女の子はリインフォースさん、赤い髪の女の子がアギトさんというらしく、両者ともユニゾンデバイスという使用者と融合することの出来る存在とのこと。

だけど、見た目は全然普通の人間にしか見えないし、話をする分には、普通に人と会話するのとなんら変わりない。

多分だけど、八神司令達からすればデバイスと言う括りではなくて、普通の人間の家族という認識なのだと思う。多分、クゥさんもヴィヴィオさんも……私の周囲の人達は皆そういう認識なんだろう。
私はデバイスを持ったことがないから分からないけど……そういう考え方は、どこか温かみを感じることが出来て良い事だと思う。
私も……そういう関係を、相棒となる機体（パートナー）と築いていきたいものだ。

「えと…その……格闘技だけで戦いたいので、武器型ではないほうが……」

『そーかー。格闘家さんやもんねー、ほんなら体の動きを阻害するような装着型もよくないかなぁ…。スバルのナックルもキャリバーも、なんだかんだでめっちゃ重いしな』

『そーなんですよね～』

私が簡単な希望、というか私自身の戦闘スタイルを含めた要望を伝えると、八神司令は『なるほどなぁ』という様子で、数あるデバイスの選択肢の中で私に不向きなものを除外。

というか、スバルさんのあのナックル……意外と重いんですか…。軽々と振り回していらっしゃるところしか見ていないので、全然想像もできませんでしたけど……。

リインフォースさんは、八神司令とスバルさんのデバイスを手にしたことがあるようで、苦笑いを浮かべていた。

「ですからその、この子のような補助・制御型がいいなと……」

『なるほどなー。ほんなら、クリスの性能をベースに真正古代ベルカのシステムで組むのがええかな』

私は、事前に頭にあったアイデアを、ヴィヴィオさんから借り受けてきたセイクリッドハートを膝に置きながら、八神司令に提示してみる。

武器でもなく、体の動きを阻害する恐れのないデバイス。

そうなれば、自ずと選択肢は限られてくる。その中でも、ヴィヴィオさんの使用しているクリスのシステムと性能は、私にも適しているのではないかとそう考えたわけだ。

『補助・制御型か。それなら機体自体はすぐにできそうだな』

『ですね、あとは性能設定と調整です』

『そやね。ほんならアインハルト』

「はいっ！」

八神司令に続いて、アギトさんとリインフォースさんの方でも、機体作成に対するアプローチと目標が定まったようで、心強い言葉を聞くことが出来た。

きっと、知識のない私では、アイデアを出すのが精一杯。こんな風に、デバイスを作って頂ける機会を得ることが出来たのは僥倖といえるだろう。

『覇王の愛機、まずは軽く取り掛かってみるな。八神はやてとリイン&アギトがノリノリで組んであげよ』

『おまかせだ！（です！）』

「ありがとうございます…！！」

八神司令とリインさんとアギトさん。真正古代ベルカ魔法を操るこの人達に組み上げてもらえる私のデバイス……。
ホロウィンドウ越しで心苦しくはあったものの、私は精一杯の感謝の意思を込めて、お礼と頭を下げた。

私だけのデバイス…。これからの戦いを一緒に切り抜けてくれる相棒……。

それはきっと…ホムラさんを、『もしもの』の展開から救い出す、いや最悪の場合は引っぱたいてでも引き戻させる事になってしまった時にも…力を貸してくれるかもしれない。

もちろん、インターミドルでの戦いも私にとっては大切で、覇王流の強さの証明という目的には欠かせない。

けれど……もう私の拳は、その目的のためだけにあるものじゃないって……分かったから。
自分だけの拳じゃなくて、あの人を……守るためのものにもならないといけないんだ……。

――――だから。

「（私はもっと……強くなる……！）」

そう、私は心の中で改めて自分に誓い……八神司令とリインさんとアギトさんにデバイス制作を依頼した。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

八神司令たちとのコンタクトが取れ、デバイスに関しては取り敢えずの目処が立った。
けど、私にはまだ気がかりなと言うか、放っておけない問題が残っている。

それは言わずもがな、ホムラさんのことだ。
ご両親の敵を討ちたい、その相手に復讐したいという、ホムラさんの胸の内に秘められた目標。
出会った頃は、執務官になるのが目標とだけ聞いていたけれど……多分それも、目標に至るための過程にすぎないのだろう。

「(私が……私に出来ることは………)」

その事実を知って、正直ショックだった。ホムラさんが、人を…殺そうとしていることもそうだけど………やはり、私には本当のことを何も話してくれていなかったということが。
もちろん、ルークさんが言っていたとおり、私に気を使ってのことだったのは分かっている。けど、それが分かっているからこそ、頼

り甲斐のない自分自身にもどかしさを感じてしまう。

けれど、そんな私にも出来ることがある。

ルークさんは、私にホムラさんを救えと、助けてやれと言ってくれた。まずは何をするべきなのか、それすらよく分からない私だけど……何もしないで後悔するのだけは嫌だった。

「（だから、兎に角……！　動いてみよう…！）」

頭の中だけで考えて、モヤモヤしているのではなくて、やっぱり私は体を動かしていたほうが性に合っている。

午前はまるまる休息に当てられるから、その間の時間を使ってホムラさんと話をしてみよう。コミュニケーションを取って、ホムラさんのことをもっと知ることから始めるんだ……！

そ、それに、ホムラさんの抱える問題を抜きにしても……彼とお話がしたいですし……。あぁ、でも、もちろん自分の気持だけを優先してるだけではないですからね？　その辺りのことは勘違いしないように。

私は一体、誰に念を押しているんでしょうか……？

さ、さぁ！　そうと決まれば行きますよ、私！！

「あ……いた…！」

そう意気込んだ上で、まずは目標となるホムラさんを探すことから始めたのだけど……。彼は意外とアッサリと見つかった。

昨日、ルークさんと話をしていた河原の辺り。ゴツゴツとした岩が点在しているエリア。

その岩々の中でも、椅子にするのにちょうどいい大きさの岩にホムラさんは腰掛けていた。

「ていうことは……シラヌイの完成版は……？　もしかして……」

『完成機の……あと一歩だよ……あとは……問題……なんだけどね～』

？？

近づいて声を掛けようとした私だったけど、どうやら誰かと通信中らしく、ホムラさんはホロウィンドウ越しに誰かと話している。

声を聞く限り、男の人だろうか？　私の知っている人ではないようだけど……？

『で？　本当に……モード……への負担は……いいのかい？』

「すべて無視してください。どんなデバイスでも、僕は使いこなして見せますから」

『そうかい。……忘れちゃいけないよ？　……モードは激し

い……現象を伴うからねぇ……最悪……に関わるから……』

どうやら、ホムラさんも私と同じくデバイスに関してのことで、その道の方に連絡を入れているようですね。
そう言えば、昨日の模擬戦の最中に、シラヌイさんが大破してしまいましたから……補修か何かをデバイスマイスターの方に依頼しているんでしょう。

知り合いにデバイスマイスターの方がいるなんて……ホムラさんの人脈もよく分からないです。

「それでは、そういう事でよろしくお願いします。そちらに戻ったら、すぐに顔を出します」

『りょうか～い♪　局からの仕事で退屈しのぎしながら待ってるから、いつでもおいで～♪』

「あはは……。分かりました。　では、ティールさん、また」

そう言って、ホムラさんは通信を切った。ところどころ、聞き取れなかった部分は多かったけど、なんだかデバイスマイスターの方が変わった方だということは、声を聞いただけで分かってしまった。
何と言うか、独特と言うか、妙な癖のあるような話し方だ。

と、いつまでもこんなところで呆けていても仕方ないですね。それに、図らずもまた聞き耳を立てるような形になってしまいました…

…。

なんだか、この前テレビで見た家政婦の方みたいです……。

「ホムラさん」

「ん…？　アインハルト？」

「誰かとお話中でしたか？」

「うん、知り合いのデバイスマイスターの人にね。シラヌイ、壊れちゃったし……どうにかしてもらわないといけないしね」

ホムラさんは、いつもどおりの朗らかな笑顔で私を迎えてくれる。やっぱり、昨日のホムラさんは、寝ぼけた私が見間違ったんだと思ってしまうくらい、今のホムラさんと昨日のホムラさんの雰囲気はかけ離れたものだった。

私にとってはやっぱり……今のホムラさんこそが、本当で在って欲しいと思うのは、我侭なんだろうか……。

ううん、違う。きっと、昨日と今のホムラさん、両方合わせての『彼』なんだろう。

復讐という目的を掲げて、冷たい眼をした彼も……やっぱりホムラさんなんだ。

自分の中の都合のいいイメージだけを持つのはよそう……そんな気構えでは、ホムラさんを理解しようだなんておこがましいにも程がある。

「（ちゃんと見ないと……ホムラさんの全部を……）」

こう在って欲しいという、私の気持ちを押し付けるんじゃなく。
ホムラさんの全部を……私は受け入れた上で、理解したい。そして……彼を守って、助けたい。

そうでないと……彼を好きという気持ちが嘘になってしまいそうだった。

あ……今私……ホムラさんのこと自然に『好き』って……。
だ、だめ……です！　ここで赤くなってフニャッとしてしまっては！！　気合を入れなさい、アインハルト！！

「？？　どうかしたのアインハルト？　なんだか挙動が……」

「にゅあ、何でもないですよ！？　えぇ、何でもないです」

「え、でもなんだか…」

「な・ん・で・も・な・い・ん・で・す！！」

「は、はい……」

よし、勝った！！（何にでしょうか？）
ホムラさんが若干震えているように見えますが、多分気の所為でしょう。

「そ、それはそうと……アインハルトはデバイスの事はどうにかなったの？」

「えぇまぁ。八神司令や、その家族の方々が全面的に協力してくださるそうで……。恐れ多いことですけど、かなり凄いものができそうです」

「そっか。アインハルトのデバイスかぁ……どんなのになるんだろうね……？」

「一応、ヴィヴィオさんのクリスのようなタイプを希望しているので、アレに近いものになるのではないかと……。出来てからのお楽しみ、と八神司令達は仰っていましたね」

ホムラさんは、先ほど私がした質問を返すように、デバイスの話題について尋ねてくる。

当り障りのない話題、と言ってしまえば淡白だけど、こうして何気ない会話を交わすだけでもやはり楽しく思えてしまうのは私だけなんでしょうか？

話題の中身よりも……そう、誰と話すかが重要と言うか……。

「ですがこれで、私もインターミドルに出場できます。どれだけ強い方が居るのか……今から楽しみです」

「アインハルトらしいね、そういうところは」

「……ホムラさんは……楽しみではないんですか？　強い相手との戦いというものにかんして」

「……う～ん……いい経験にはなるとは思う。師匠も……それを狙って出場を勧めてくれたんだろうし……。結果を残せば、もっと凄い修行に付き合ってくれるみたいだしね」

インターミドルの話題になると、ホムラさんは少し困ったような顔になる。

多分、ルークさんが何故インターミドルへの出場を促したのか、その本当の意味はホムラさんには届いていないんだろう。

ホムラさんにとっては、インターミドルは本当の意味での剣術指南を受けるための試験……とでも言ったところだろうか。

ルークさんの考えどおり……剣や拳は、人を殺めるだけでなく、もっと他の可能性があるということに関心を向けてもらえればいいんですが……。

やはり、それも難しい道なんでしょうか。

「でも思うんだ……。目的を果たすために……そのための過程として、こういう試合に出るのは良いんだろうかって。アインハルト達みたいに、ちゃんとした目標を持って、大会に向かって頑張ろうとしてる人に対して失礼じゃないのかなって……」

「そんなことはないと思いますけど…？　少なくとも私やヴィヴィオさん達は、ホムラさんもインターミドルに出場するというだけで嬉しいですから。各々、目的は違うかもしれませんが、あぁいった

大会は参加することで自身の見聞を広める事にも繋がります」

「そうかな……。ならいいんだけど……」

「人にはそれぞれ目標もあれば、やりたいことだって違うものですよ。だから、なんの為に大会に出るのかはホムラさんの自由だと思いますから。それに、出るからには勝ちたいですよね？」

目的がなんであれ、どういう思惑があっても……大会に参加するのに必要なものは1つだけでしょう。

即ち、『勝ちたい』という気持ち。それさえ持っているのなら、大会への参加と結果から何を得ようとも誰も文句は言わないはずだ。

「それはもちろん。やるからには…ね」

「それならいいんです。要するに、真剣な気持ちで大会に望むのであれば、それで何も問題はないと思います」

「……そう…だね。アインハルトにそう言ってもらえると、なんだかそんな気がしてきたかも」

「そうですか……。ホムラさんの心の中の引っ掛かりを解消できたなら、私としては十分です」

これは、私にも言えること。覇王流の強さを証明するために、公式戦で勝ち上がることが自身の力の証明に繋がる。そのステージが、たまたま今回の大会であったというだけのこと。

勝利という二文字に対して真剣であればそれだけで十分。

ホムラさんも、負けるわけには行かないのは明白なので、確実に今回の大会には真剣な気持ちで望んでくれるに違いない。

「でも……どんな人達が大会に集まってくるんだろうね……？　女の子の部は昨日聞いただけでも熾烈な感じがするけど」

「それは私にもなんとも……。でも、男子の部も女子と同じくらい厳しいモノになると思いますよ？　なにせ、世界中というかたくさんの世界から腕に覚えのある猛者が集まるわけですから」

「だよね。……でも…」

ホムラさんは、少しだけ真剣な表情のまま、透き通った青い色の空を睨みつけるように見上げる。

その先に何を見ているのか……それはホムラさんにしか分からないことだけど……。

でもきっと……考えているのは、例のテロリストのことなんだろう。

「ここで勝てないようなら……絶対にアイツを捕まえられない（殺せない）……。だから……世界中の実力者の中でも恥ずかしくないくらいの力を身につけないと」

「ホムラさん……」

きっと、ホムラさんは普通に『捕まえられない』と言葉にしたはずだ。けど、ホムラさんの目的の内容を知っている私には……捕まえるという生易しい言葉ではなく、『殺せない』という彼の本心の言葉が聞こえたような気がした。

それと同時に、ホムラさんがとても遠く見えてしまって……私が傍に居るのにも関わらず、ホムラさんの周りに誰もない…そう、まるで一人ぼっちに見えてしまう。

まるで…ホムラさんがこのままの道を歩んだ結果が、彼に決定的な孤独を与えるぞ、という警告のようにも感じられた。

「（これが……私とホムラさんの距離……。彼の傍に居るつもりでも、実際はこんなにも遠いんだ……）」

彼を守る、助ける。
そのためには、というか…何をするにしても、まずはホムラさんの傍に……彼を一人にする訳にはいかない。

そっか……何から始めればいいのか悩んでいた私だけど、簡単なことだったのかもしれない。
単純に……ホムラさんを一人にしないように……彼の隣に歩み寄ること。

それが、何よりもまず最初にしなければいけないことなんじゃないだろうか。
距離が離れていては、助けるために差し出す手も、投げかける言葉

も届かないのだから。

ギュゥ……

「って、アインハルト……？」

「何も云わないでください。そして…聞いてください……」

私は、ホムラさんの隣に座り、彼の手に自分の手を重ねる。
そうすることで、ホムラさんは虚空へ向けていた視線を私に向けてくれる。復讐という目標から視線を外させ、『私』を見るように。

これからすることは……そう、『宣戦布告』のようなものだ。
私から、ホムラさんに対する。私の心から、ホムラさんの心に向けての、宣戦布告。

「私は、あなたの目的がなんであれ……あなたがどれだけ変わっても、私達から距離を置こうとしても……私は絶対に、ホムラさんを一人になんかさせませんから」

「……」

こんなことを言われて、一体何なのかと……そんなふうな顔をされるかと思った。いや、実際はそれでも構わない。意味は伝わらなくても、それでよかった。

けれど、ホムラさんは何も言わずに、ただ真摯な表情で私の言葉を受け取ってくれた。
私が何を知っているのか、どういうつもりでこんな行動に出たのかまでは、きっと伝わらないだろう。

私はホムラさんを一人にしないという事、そのことだけを覚えておいて欲しい。
ただそれだけだ。

「さぁ。そろそろお昼ご飯です。皆さんのところに帰りましょう」

「……うん、そうだねアインハルト」

そうして、私とホムラさんはヴィヴィオさん達が既に待っているであろうロッジに向けての帰路に着く。
手は、重ねた状態から繋いだ状態に移り……私もホムラさんも、どちらからも放す気配がない。

相手と私の体温が、脈が……繋がれた手を中心に混じり合う。
不思議と、落ち着いた気持ちになりながら、私とホムラさんはお互いに言葉をかわすことなく……それでいて温かい気持ちのまま、歩みを進めた。

もちろん、帰ったあとに、クゥさんやルーテシアさんにこれでもかというくらいにからかわれました……。

恥ずかしくて寝込みそうになったのは内緒です。

こうして、様々な思惑を孕んだ４日間のトレーニング期間は、瞬く間に過ぎていったのだった……。

【アインハルトｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

Ｍｅｍｏｒｙ；４６　アインハルト、宣戦布告！（後書き）

Ｆ２０Ｃ「なぁ、お前らいい加減、結婚しろよ」

クゥ「結婚式には、我様も呼ぶのだぞ。華麗なスピーチをしてやろうではないか」

アイホム「「あ、いやその……（／／／ｏ／／／）ゞ　テレテレ」」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；４７　トレーニングは計画的に

閣下「なら私が、司会進行を……」

Ｆ２０Ｃ「あ、じゃあ二次会の準備もよろしくね。下手な店のチョイスとかしたら出番９８％カットだから」

クゥ「俺カラオケ行きたーい」

フェイト「あ、なら私も」

なのは「私も私も～♪」

閣下「俺幹事役っすか……」

Ｍｅｍｏｒｙ；４７　トレーニングは計画的に（前書き）

今月発売のＶｉＶｉｄ５巻の特典が熱いです……。
アインハルトとフェイトさんがメインの架け替えカバーとか特に欲しいんですけど……。

今月末はゲマズにゴーですかねー（∀、＊ゞ）エヘヘ、

Ｍｅｍｏｒｙ；４７　トレーニングは計画的に

【ホムラｖｉｅｗ】

「ミッドチルダ到着～♪」

水遊びや温泉、そして三連続の陸戦試合といった、充実した４日間に渡ってのオフトレはあっという間に過ぎていった。
途中、師匠（先生）との腹を割っての話もあって、僕自身にとっては近年類を見ないほど、内容の濃い四日間だったように思う。
それに……また、アインハルトとの距離が縮まったみたいで……個人的にはそっちも気になっていたり……。

「車回してくるから、ちょっと待っててね～」

「「「は～い！」」」

お世話になったルーテシアさんとメガーヌさんに挨拶をした後、僕達一行は再び故郷であるミッドチルダ、その次元港に帰ってきたところだった。
着いて早々、ハラオウン執務官はシエルくんを連れて、高町教導官

と車を取りに別行動となる。ほんと、運転ご苦労様です……。

「でも皆、明日からまた忙しくなるねぇ」

「インターミドルに向けてバッチリトレーニングしなきゃ」

「はいっ！　でも大丈夫です！」

「うちの師匠（コーチ）がトレーニングメニュー作ってくれますから！」

ティアナさんとスバルさんの言葉に、コロナとヴィヴィオがやる気と元気、共に充実した様子でそう答える。

確かに、オフトレ中はトレーニングとかで充実してたけど、それでもゆったりとした時間の中での、どちらかと言うとスローペースな雰囲気の訓練だったといえる。

けど、連休が終わって、僕達はまた学園も始まる。その中でトレーニングを欠かせないということになれば、かなりハードなスケジュールになることは目に見えている。

「ま、しっかり鍛えていこうぜ」

「「「はいっ！！」」」

ストライクアーツ組のヴィヴィオ達三人に加え、アインハルトはノーヴェさんの指導の下、インターミドルへのトレーニングに励むの

だろう。
アインハルトに関しては、流派が違うから、多分変則的な形になるとは思うけど。

「ん～……」

「あれ？　クゥは向こうに混じらないの？」

「え～…だってさぁ、どっちみち大会には出られないし……。いまいちモチベーションが……」

「あ～……それはまぁ、そうなるかなぁ……」

と、そんな中、クゥがつまらなさそうな顔をしていたので、どうしたのかと声を掛けてみた。
帰り際、ルーテシアさんと散々ハグハグしていたようで、あの時のコロナの嫉妬に満ちた視線は軽く恐怖物だった。やっぱり、女の子って恐い。

と、それは一先ず置いておいて……。クゥがつまらなさそうな顔をしていたのは、単純に大会に出場できないからということだったようだ。

ヴィヴィオ達と一緒に訓練しても、その成果を確かめる場面がないってことになれば、やっぱり面白くないんだろうな。
それを考えると、大会に出る僕としては、なんだか申し訳ない気持ちになってしまうけど。

「ま、クゥはヴィヴィオ達のトレーニングを手伝ったりしてやってくれると嬉しいんだけどな」

「く、クゥちゃんが……私のトレーニングを手取り足取り……？」

「コロナ、誰もそんな事言ってないからね？」

ノーヴェさんが言うように、今回はクゥには我慢してもらうしか無いだろう。それに、人の訓練を見て、それを手伝うというのもいい経験になるかもしれないし。

それでも、コロナが想像したような展開にだけはならないことはハッキリしているのだけど。

リオが冷静に突っ込んでくれなければ、どこまで妄想が広がっていたのかあまり想像したくない。

「でも、インターミドルってかなり沢山の子が出場するんでしょ？予選会とかあるんだっけ？」

「あ、えぇと…確か地区選考会というのがあって……」

「そーです！選考会では健康チェックと体力テスト、あとは簡単なスパーリング実技があって……」

「選考会の結果で予選の組み合わせが決まるんです」

ティアナさんがアインハルトと話しているところに、ヴィヴィオとリオが補足説明を入れてくれる。
僕も、インターミドルに関しての知識は自慢できるほど多くないから、昨日ヴィヴィオやノーヴェさんたちにいろいろ教えてもらっていたくらいだ。

「普通に人は『ノービスクラス』。選考会で優秀だったり、過去に入賞歴があったりする人は『エリートクラス』から地区予選がスタートします」

「勝ち抜き戦で地区代表が決まるまで戦い続けて、そうしてミッドチルダ中央区17部から20人の代表と前回の都市本戦優勝者が集まって……」

「その21人でいよいよ夢の舞台」

「都市本戦です！」

コロナとヴィヴィオ、そしてリオの息のあった説明に、聞くのは二回目だけど感心してしまう僕。というか、三人ともよっぽど大会が楽しみなんだろうな……。
話してる時の目が、もの凄く生き生きしてるし……。

「で、都市本戦の優勝者がその地区のナンバーワン、ミッドチルドの中での王様ってわけか」

「そうですよー♪　テレビ中継も入っちゃいますからね」

師匠も、僕が大会に出るということで、インターミドルについての知識は大方把握済みという感じで、確かめるようにヴィヴィオたちにそう問いかけていた。
というか、テレビ中継なんかも入るのか……うぅ、変な所で緊張してしまいそうだ……。

「まぁ、さすがに私たちのレベルだと……」

「本戦入賞とかは夢のまた夢なので……」

「『都市本戦出場』を最高目標にしてるんですけど……」

と、インターミドルのレベルの高さをヴィヴィオたち三人はよく知っているようで、ちょっと元気をなくしつつも、自分たちの目標を持っているようだ。
でも、この三人のレベルでも都市本戦出場が目標ってことは……男子の部も結構厳しい物になるんだろうな……。

「その…都市本戦で優勝したら終わりですか？」

「もちろん、その上もありますよ。都市選抜で世界代表を決めて…選抜優勝者同士で『世界代表選』です」

「そこまで言って優勝できれば……文句無しに『次元世界最強の１０代女子だな』」

「……！」

コロナとノーヴェさんの話した、世界代表選と最強の１０代女子という単語に、アインハルトの表情が輝いたように見えた。
というか、心を打たれているようだ。やっぱり、覇王流の強さの証明のために、アインハルトがこういった試合に出るのは良かったことなんだろう。

ある意味、一番結果がはっきりと出ることになるし、自分だけではなく、アインハルトの戦いぶりを見た人達が彼女の強さの証人になるのだから。

「狙っていきたいね、１０代最強」

「……はい…！」

僕がそう言うと、アインハルトは力強くそう返事をくれた。その目には、早くも闘志が現れていて、漫画とかなら瞳に炎の模様でも映り込んでいるくらいの勢いだ。

アインハルト、もの凄く燃えてるっていうか……やる気満々だなぁ……。
なんだか、僕まで影響されそうかも。

「ノーヴェさん、率直な感想を伺いたいんですが。今の私たちはど

こまで行けると思われますか？」

「もともと、ミッド中央は激戦区なんだ。ＤＳＡＡルールの選手として、能力以上に先鋭化してる奴も多い。その上での話として聞けよ？」

多分、１０代最強という称号をアインハルトは狙っていくのだろう。けど、アインハルトは賢明で冷静な女の子だ。

第三者からの客観的な意見を得ることで、自身の置かれた立ち位置を確認することも忘れない。

アインハルトには多分、油断とか慢心とか……そういう言葉は無縁のものなんだろうな。

そして、気になるノーヴェさんの評価。ヴィヴィオやアインハルト達は、インターミドルでどのあたりまで行けるのか……？

「ヴィヴィオ達三人は、地区予選前半まで。ノービスクラスならまだしも、エリートクラス相手じゃ、まず手も足もでねー」

「「「……」」」

ヴィヴィオ達三人の実力でも……地区予選の前半まで……。加えて、エリートクラスでは歯が立たないとまで言われてしまった。

この三人もかなりの使い手であることは間違いないのに……エリートクラスはそれだけ強い人達が集まってくるってことなんだろうけど……。

なら、僕やアインハルトは……？」

「アインハルトもいいとこ地区予選の真ん中くらいまで。エリートクラスで勝ち抜くのは難しいだろうな。……で、ホムラに関しては……ルークはどう思う？」

「う～ん……大会のことはノーヴェ達から聞いただけだから、確かなことは言えないけど……アインハルトと同じくらいってとこじゃないかなぁ……。男子の部とかの試合の記録でもあればもっとハッキリしたことが言えるんだけど」

地区予選の真ん中……出来れば、都市本戦くらいまでは…と高望みしてたけれど、現実は中々厳しそうだ。
アインハルトも、現実の厳しさのようなものを感じているのか、表情が硬くなってしまっている。

「でも…！　まだ二ヶ月あるよね！？　その間、全力で鍛えたら？」

「ま、どうなるかは分かんねーな」

「だな。お前らはまだまだ成長途中だし、どれだけ伸びるかで結果はどうなるかわからない」

でも、ヴィヴィオが言うように、まだ大会までは二ヶ月ある。
その間、ヴィヴィオ達はノーヴェさんに、僕は師匠に鍛えてもらうことが出来る。

その『ニヶ月』という日数の、中身が何よりも重要なんだ。
修行期間中、どんな訓練をするのか。今から気合が入ってしまう。

「あたしもルークも、勝つための練習を用意する。頑張って、あたし達の予想なんかひっくり返してみせろ！」

「「「はいっ！」」」

ノーヴェさんの激励に、出場する僕達全員は元気に返事をする。
予想は予想でしか無い。本番までにどれだけの力を付けれるかで、予想を覆すことは十分に可能だ。
全ては、今日からの二ヶ月に掛かっているということ。

「んでな、まずは基礎メニューを作ってみたんだ」

「さ、さすがノーヴェ」

「仕事早っ！」

コーチとして、ノーヴェさんも燃えているんだろう。早速基礎メニューを全員分のデバイスに送ってきてくれた。
リオの言うように、仕事が速いと言うか、こういった方面のことに関しては才能があるんじゃないかと思ってしまうほどだ。
いや、実際ノーヴェさんは人材育成に関して適正が高いんだろう。

「基礎トレは今まで以上にしっかりやる。その上で、コロナはゴーレム召喚と操作の精度向上」

「はいっ！」

「リオは春光拳と炎雷魔法の徹底強化。武器戦闘もやっていくぞ」

「はいっ！！」

「ヴィヴィオか格闘技全体のスキルアップと、カウンターブローの秘密特訓！」

「はいっ！」

「……で、アインハルトは…あたしが変に口を出して、覇王流のスタイルを崩してもなんだ」

それぞれの選手に、各自個別の課題を与えるノーヴェさん。コロナにしてもリオにしても、ヴィヴィオにしても、戦闘スタイルや技法などは全く異なっているため、それぞれの特性をどこまで伸ばせるかということも、基礎訓練と同様に重要な要素になってくる。

三人とも、それぞれの個性ある技をどこまで昇華、発展させることが出来るかが問題なんだ。

でも、やっぱりノーヴェさんでもアインハルトの覇王流までは下手に弄ることはできない。流派が違うのだから、考えてみれば当然の判断だと思う。

「かわりに、公式試合経験のあるスパー相手を山ほど探してきてやろう。お前は戦いの中で必要なものを見つけて掴む……それが一番かと思うんだが、どうだ？」

そこ、ノーヴェさんが代案として提示したのが、実際にインターミドルなどの公式試合に出場したことのある人達とのスパーリング。言ってしまえば、実戦形式での訓練といったところだろうか。

でも、アインハルトの覇王流のことを考えれば、これがベストのトレーニング方法なのかもしれない。

アインハルト本人も、そう思ったようで……。

「ありがとうございます！！」

と、勢い良く頭を下げてお礼を言った。

アインハルトにとって、強敵とのスパーリングほど良い訓練になるものはないだろう。

それこそ、一時期は強敵を求めて野試合をしていたくらいなわけだし……。

「で、あとはホムホムよ。お前だけなんだけどな」

「は、はい」

「お前も、やることはアインハルトと差しては変わらん。実戦形式での訓練メインだ。まぁ、相手は基本俺になるわけだけど……」

そして、僕の訓練メニュー。

師匠が提案したのは、アインハルト同様の実戦形式。ただ、スパー相手は基本的に師匠はのみということなんだけど……？　一体どんなことを……？

「お前が欲しがってたものの……まぁ、入り口くらいまでは連れていってやる。そこからはお前次第ってことだ」

「……はい！　よろしくお願い致します」

今の師匠の言葉の意味を正確に理解できたのは、多分僕だけだろう。あの夜に、師匠と話していた……本物の剣……。

師匠とマンツーマンということは、かなり中身の濃い訓練になりそうだな。

「……」

？

なんだか、アインハルトの表情が硬いけど……。どうかしたんだろうか？

もしかして、今からスパーリングに気合が入りすぎてる……とか？
　でも、視線は僕達の方に向かってるし……？　一体なんなんだろうか？

何か思うところがあるのかと思って、アインハルトに声をかけようと思ったけど、彼女はすぐに表情をいつもの凛としたモノに戻してしまったので、結局聞けずじまいになってしまったのだけど。

けれど、兎に角。
これで、今後の方針は決まった。あとは、この二ヶ月間にどれだけのものを手に入れることが出来るか……。

大会に向けて……今から自分の出来る事をやろう……！

「ホムラさん……私、負けませんからね」

「……？　アインハルト…？」

と、気持ちを新たに自分に喝を入れていると、アインハルトが真剣な表情でそう言ってきた。
えっと……アインハルトとは男女別部門でステージが違うから、負けるも何も無いようなきがするんだけど……？

もしかして、どっちがより強くなれるかで競争……とかかな……？
でも、このアインハルトの真剣な目……どうも、もっと別のことを言いたそうな目をしてるような……。

「まーた、二人して見つめ合ってるし……。あ～やだやだ、これだから最近の若いもんは……」

「「あ、こ、これはそういうのじゃなくって！！」」

気がつくと、僕とアインハルトは結構な時間見つめ合っていたようで……クゥの白い目と、年齢に似つかわしくないセリフと共に我に返った。

ティアナさんやスバルさんからは、ニヤニヤという感じの視線を送られて、師匠からは『勝手に幸せになっちまいやがれ』というお言葉を頂いてしまった。

僕もアインハルトも、いつものごとく赤くなって否定するものの……皆からすると、説得力は皆無みたいで……。

その後、散々弄られまくったのは想像に難くないと思われます。

あ、で、でも！　別にアインハルトとそういうふうに誤解されるのは……まんざら悪い気はしないし……、別に僕はいいんだけど……。

ただ、アインハルトは僕なんかとじゃ迷惑って思うかもしれないし……。

あれ？　僕は誰に対して言い訳してるんだろう……？

と、兎に角……！！明日からの訓練、これまで以上に気合入れて頑

張ろう……うん、そうしよう！！（ヤケクソ気味）

あ、でもやっぱり、赤くなってるアインハルト……可愛いな……。

【ホムラｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【？？？ｖｉｅｗ】

―――ミッドチルダ市街地・１９時３０分頃

「ぐぎゃ！？」

と、そんなカエルが潰れたような声を出しながら、柄の悪そうな、ついでに頭も悪そうな野郎が地面に倒れていく。

原因はまぁ……単純明快、俺が殴り倒した。ただそれだけだ。

「て、てめぇ！！　人にぶつかっておいた謝りもしねぇで、その上殴りやがって……！！」

「あぁ？　クソ虫がなに吠えてやがる。　つーかよぉ、ぶつかってきたのはテメェらの方だし、殴り掛かってきたのもそっちだろうが…。道幅限界にまで広がりながらバカみてぇに大きな声でギャアギャアと……当たり屋家業でもやってやがんのか？」

「こ、こんの糞ガキ……！！　こっちが下手に出てりゃあ」

殴り飛ばした野郎の相方が、テンションを上げながら俺に掴みかかってくる。どうでもいいが、服が伸びるからやめて欲しい。
というか、こいつらの脳みそはなにで出来ているのかと、ちょっと頭蓋骨を分解して拝みたいものだ。
元に戻るかは保証外だが。

「離せよ、クソ虫。あと、お前のクサイ息が俺にかかるだろうが。早々に、俺の半径５０メートル以内から消えろ、服にくさい臭いが伝染る」

「消えるんなら、テメェが消えやがれ！！！」

二人組の片割れが、勢い良く拳を振り上げ、俺を殴らんとその拳を振り下ろしてくる。
が、ハッキリ言って動きが素人過ぎる。恐らく、その辺のチンピラのほうがまだ喧嘩の仕方を知っているだろう。

ゴギャ…！

「あぐ……！？　あ……あ……お、お前……何しやがった……」

「何って……お前が一向に手を離さんもんだからな。鬱陶しいから、お前の急所（金的）に蹴りを入れて、玉を潰したんだが？」

「あ……うぐ……！？　な、なんてこと……しやがるぅ……」

俺を殴る一歩手前で、男の拳は力なく空振り、そのまま股間に手を持っていく。

多分だが、股間を蹴られた痛みが、時間差で押し寄せていることだろう。

まぁ、実際は潰してなどいないのだが、言葉の力というのは偉大で、こう言われると本当に潰されたのかと思い込んでしまい、更に痛みが増すというものだ。

「ほれ、さっさと泌尿器科にでも行ったらどうだ？　あぁ、ついでに早漏を治してもらうといい」

「こ……この……！！　お、俺は……早漏じゃ……ねぇ……どっちかつうと遅い…方……あぐ…」

そう言い残し、男は気絶してしまったようだ。

というか、気を失う間際にこの男、自分が遅漏だということをカミングアウトしてやがった……。

「すげぇどうでもいい情報をありがとよ」

俺は、地面に倒れた馬鹿二人をその場に放置し、再び歩き出した。人通りが全くないこの地域だ。こういったバカどもが多いことは分かっていたが……どうやらその中の底辺というべきクソ虫に当たってしまったらしい。

明日からのランニングコースに、この通りは外すことにしよう。

『主よ、また無用な喧嘩か？　あれほど我がやめろと口を酸っぱく…』

「うるへー……ま～たアホみたいな事しちまったなぁ……。つーか、インターミドルまでが暇過ぎるのが悪いんだよ……」

『なら、勉学にでも励めばよかろう。主もすでに中学2年生、そろそろ進学のための……』

「お前は母親か何かかって…。ていうか、中2から受験勉強って、俺どんな進学先目指してんだよ」

耳に掛けたままになっている、度の入っていないメガネから声が飛んでくる。
長年の相棒であるこのメガネ……の形をしたデバイスは、いつも俺に口うるさい。

まるで、母親がもう一人増えたようで、正直ウザイと思ってしまう時も多々ある。

『主はただでさえ目付きが悪いのだ。その悪人面でこのような治安の悪そうなところを闊歩していれば、絡まれるのは道理……って、無言で我をゴミ箱に捨てようとするでない！！　あと、そこは燃えるゴミ専用だ！！』

「いや、だってウゼェし……」

『我は、主のためを思ってだな』

「目付きが悪いだ、悪人面だのと……その主のハートにクリティカルヒットなことばっか言いやがって……」

目付きが悪いのを誤魔化すためのメガネタイプのデバイスということなんだが……明らかにＡＩの選別を間違えたと、こういう時は嫌というほどに実感してしまう。
このデバイスを受領した時の自分に、今すぐ取り替えて貰えと進言したい。

そして、俺は通りにあったガラス張りのショーケースに映っている自分の姿を見てみる。

灰色っぽい髪を若干伸ばし、首の後ろ辺りで縛った髪型。デバイスにも言われた、目付きの悪い顔、こげ茶色の瞳が特徴の顔。
背丈は平均的なもので、トレーニングウェアを来ていなければ、学生服が似合いそうな容姿だ。

『黒いスーツでも着ていれば、マフィアに見えるな』

「よし、この場でお前をデバイスから粗大ごみにジョブチェンジさせてやろう」

『2割は冗談だ、本気にするな主よ』

「グッバイ、マイデバイス」

『嘘だ嘘だ!!　10割冗談だから、我をそのまま耳に掛けておいてくれ』

俺の心のセリフを呼んだ上、茶々を入れてくるウザいデバイスの処遇は取り敢えず保留ということにしておいて、俺は再びランニングに戻ることにする。

夜のランニングが、この俺、ウィッド・ザクセンの日課になっているのだが、明日からは別のコースを選択したほうがよさそうだ……。

インターミドル・チャンピオンシップ……自分の力を試すために、去年から参加しているのだが……今年は面白い奴がどのくらい居るのやら……。

そんなことを考えつつ、俺はペースを変えることなく足を動かした。

【???ｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【side out】

「使えそうな子、みーつけた」

ウィッド・ザクセンがランニングしながら家路を目指している姿に、小高いビルの屋上に座りながら、興味深そうな視線送っている青年がいた。

黒いスーツジャケットにスラックスを見に纏い、メガネを掛けた青年。

ミステリアスというか、謎という一文字が服を着たような、そんな青年・ミールは両手で四角い窓をつくり、その窓にウィッドを捉えながら口を開く。

「うんうん。高い戦闘能力に、粗暴な性格、ちょっとヤンキーっぽい見た目……ラノベとかの主人公、若しくはそのライバルとして出てきそうな子だねぇ♪」

そう言いながら、ミールは立ち上がり、フェンスも何も無い屋上の縁に仁王立ちする形になる。

普通の感覚を持っている人間なら、高所から見下ろす景色に、個体

差はあれど少しは足がすくむものだ。
が、彼は地面があろうがなかろうが、そんなことは関係ないし興味もないといった様子で、走り去っていくウィッドに視線を送る。

「やっぱ、【主人公】には【ライバル】がいないとね～。主人公の成長にも役立つし、選択肢が広がったりするだろうし」

ミールはそう言うと、やっとウィッドから視線を離し、星空の広がる空に視線をシフトさせる。
その視線からは、何を考えているのか読み取ることは出来ず、物思いに耽っているのかどうかも分からない。ただボーッとしているのか、それとも何か考えがあるのか……。

答えは、ミールにしか分からない。

「さぁて、時期が来たら役に立ってもらうからね、ウィッド・ザクセン君。君はセカンド君にとって、どのくらい有益な駒になってくれるのかな？」

そして、最後に視線をウィッドが走り去った住宅街の方に向け、ミールはそう呟いた後、霧のように消えてしまった。

Ｍｅｍｏｒｙ；４７　トレーニングは計画的に（後書き）

Ｆ２０Ｃ「という訳で、地味に新キャラ登場ですね」

クゥ「登場キャラが増えるよ！！」

コロナ「やったね、クゥちゃん！！」

閣下「おいやめろ」

閣下「不味い……これは不味いぞ…？　ただでさえ最近出番が急激に減少しているのに、新キャラとか……。このままでは、私の出番が……！」

アインハルト「あ、閣下さん？　あなたにどうしてもやって欲しい役目があるとかで、作者さんが呼んで……」

閣下「ｋｔｋｒ！！！」

アインハルト「ホムラさんの新技の実験台で……って、行ってしまいました…。まぁ、いいですよね」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；４８　風の王と鉄腕

次回は、クゥと……あの方の出会いのお話。

つまるところ、クゥのフラグ建築のお話しです。嫁が増えるわけで

すね。

なんと妬ましい…ぐぬぬ

Ｍｅｍｏｒｙ；４８　風の王と鉄腕（前書き）

劇場版マクロスのＢＤ買って、早速ＰＳ３に投入して視聴してたんですが……
うん、やっぱり変形ロボットって胸が熱くなります。

三段変形×三角関係×歌

マクロスのテーマでもありますしねｗ
戦闘シーンも良かったですね～……個人的には、イツワリノウタヒメのほうが盛り上がった感はありましたが、やっぱり完結版ということで揃えておいて損はなかったですねｗ

Ｍｅｍｏｒｙ；４８　風の王と鉄腕

【ヴィヴィオｖｉｅｗ】

――――オフトレから数日後のある日・

「はぁ……！　はぁ……はひぃ……」

「ご、ゴ～ル～……！」

「にゅぅ～……た、タイムは……？」

「おう、三人とも全員自己ベスト更新だな。ま、良い感じに体力も付いてきたってことか」

私とリオ、コロナは、学校が終わってすぐに集合して、ノーヴェとの基礎トレーニングに励んでいた。
今日のメニューはランニングからということで、私達三人とも息も絶え絶えという感じになりつつも、規定の距離を走ってタイムを測ってもらっていたわけだ。

ちなみに、アインハルトさんとホムラさんは、中等部の授業時間が初等部とは違うので、まだ来ていない。
とは言っても、ホムラさんは基礎トレーニング以外は、全部ルーク

さんとのマンツーマンで、何をしているのかよく分からないのだけど。

アインハルトさんも、デバイスが完成し次第、スパーリング相手との訓練が始まるので、それ以外の時間の基礎トレーニング以外では顔を合わせることは少なくなるかもしれない。

「って……クゥの奴はどうしたんだ？　影も形も見えないけど」

「え～と……さっき、『今日は４２．１９５キロ走るんだ、ヒャッハー！』って言って、そのまま別のコースにランニングしに行っちゃって……」

「ランニングっつうか、それじゃあただのフルマラソンじゃねーか……」

クゥがいないことに気がついたノーヴェに、私はつい五分くらい前の出来事を説明しておく。

実は、途中まではクゥと一緒にランニングをしていたんだけど、いつもの気まぐれが発動しちゃったみたいで、クゥだけ別のコースに向かって走って行っちゃったんだよね……。

ノーヴェの言うとおり、４２．１９５キロって、ランニングってレベルじゃないし……。何と言うか、クゥが言うと冗談に聞こえないのが少し怖いけど……。

「う～ん……」

「？　どうかした、コロナ？　もしかして、クゥのことが心配とか……？」

「アイツのことだし、滅多なことはないだろ。それに、アイツの位置はエウロスが教えてくれるしな」

「あ、はい……それは心配してないんですけど……」

一人で走り行ってしまったことで、事故などの心配をしていたように見えたコロナだったけど、実際はそうではないようで……。

というか、クゥなら事故に遭う前に何とかしちゃいそうだし。

でも、だったらどうしてそんなに暗い顔を……？

「クゥちゃん、また知らないお姉さんにフラグ立ててなければいいんだけど……」

「あ……心配ってそっちの心配なんだね……」

確かに、クゥの場合は事故よりも、フラグ建築の可能性のほうが大きいと思えてしまう。

何と言うか……罪作りな子と言うか……将来、変な意味で大物になりそうで怖くもあるけれど。

「だ、大丈夫だって。クゥはコロナのこと大好きだから……ルールーのことはあるけど……」

「そ、そうそう！！　だから、そんな心配すること無いって」

「そうだといいんだけど…………」

私とリオがそう言うと、コロナは取り敢えず納得してくれたみたいで、いつもと同じ軽い表情に戻ってくれた。

でも、ほんとにクゥ…………大丈夫だろうか……？

そんな一抹の不安を感じながらも、私達三人はノーヴェ監修の下、今日の基礎トレーニングの続きに励むことにした。

【ヴィヴィオｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【クゥｖｉｅｗ】

「はぁっ…はぁっ………」

いつものトレーニングとはまた違うランニングコースを走ると、な

んだか新鮮な気分だ。見る景色も、歩いている人も、いつもとどこか違う気がする。
いや、実際毎日同じ物なんかないんだろうけど……、それでも、やっぱりなにかが違うんだ。

『ご主人、よかったのですか？　ヴィヴィオさんたちと別行動で』

「いいの、いいの。なんて言うかさ……皆を見てると羨ましくなるし……」

『左様でございますか』

ヴィヴィオ姉ちゃんたちと別れて走ろうと思ったのは、単純に何かの目標に向かって頑張っているあの三人が羨ましかったからだ。
俺にも、インターミドルに出場する機会があれば、それに向かってテンション上げていけるかと思ったんだけど……まさかの年齢不足とか……。

で、なんだか無性に虚しくなって、一人で走りこんでやろうと思ったわけだ。
やっぱり、具体的な目標がないと、頑張り甲斐がないと言うか、モチベーションが上がらんわけですよ。

「ま、今日は頭を空っぽにして走って、この虚しい気分を何とかしたいわけ」

『気分転換でフルマラソンをしようと思われるのは、恐らくご主人

だけですね……』

エウロスとのそんなやり取りもそこそこに、俺はペースを変えることなくランニングに集中する。
体力づくりと、実戦を想定したスパーリングとかなら、間違いなく後者のほうが好きだけど、たまには走りまわるのも悪くない。

もちろん、慣れてないと次の日に筋肉痛になってしまうけど、そこは鍛えてあるつもりだし、そこまで柔じゃないつもりだ。

「えっほ、えっほ……！……ん？」

と、一定のペースを意識しながら走っていた俺の視線の先に、俺と同じように黒いスポーツウェア姿の……男？　女？　どっちかは判断できないけど、兎に角、人が走っているのが確認できた。
ジャージに付いたフードで、頭がすっぽりと隠れてるから、後ろ姿で性別を確かめられなかった。

「（ランニングしてる人は結構いるけど、あんな風にフード被ってて熱くないのかな……？）」

まぁ、他人のことを気にしてても仕方ないし……うん、さっさと追い抜いちゃおう。スピード的には俺のほうが速いんだし。
というか……誰かの後ろを走るとか、俺のプライドが許さない……！！

うん、物凄く子供っぽい……。

と、俺が子供っぽいとかは今はどうでもいい。さっさと追い抜いてぶっちぎっちゃおう。

俺は速度を少し上げて、前を走るスッポリフードの人の横に並び、一気に抜きにかかることにした。

「～～～♪」

「……！」

けど、事は俺の予想通りに運ばないわけで……。

俺が抜けると思ったスピードで、スッポリフードの人の横に並び、一気に追い抜いてしまおうとしたその時……

グンッ！！

「！？」

横に並んだ瞬間、スッポリフードの人の走る速度が、一段階アップした。

そしてそのまま、俺の少し前を走る形になり、状況はさっきと変わらないものになってしまう。

ていうかこれ……追い抜き阻止された…？

「……む…！」

「……！！」

俺は負けじと、もう一段階走る速度を上げる。さっきと同じように、フードの人の横に並んで抜きにかかる……んだけど……。

グンッ！

「なぬ…！」

やっぱり、向こうも速度を上げて追い抜きを阻止。道幅も広いから、抜くスペースは確保できるんだけど、こうも張り合うようにされると……。

やっぱり、男として負けるわけにはいかん訳ですよ。

『勝負するなら、最大限の力を出し切って、完膚なきまでに叩きのめせ』って、お母さんも言ってたし。（ちょっと俺補正が入ってるけど）

ここからは、もう手加減なしで……一気にブッチギリだもんね！！

グンッ！！！

「……あ…！」

スピードレンジを一気に上げ、俺はフードの人よりも前に出る。
俺が前に出たとき、フードの人から声が漏れたけど……この声の高さ、女の人かな……？

でもって、俺は追い抜いた後、振り向きざまに……

「……（ドヤァ…）」

「……む」

気持ちのいい笑顔と一緒に、ドヤ顔をかましておいた。

けど、フードの人もさらに負けじと、走る速度を上げてくる。そのスピードは、少し前に出た俺に一瞬で並んでしまうほど。
この人、ホント何者だ……？　今まで、ヴィヴィオ姉ちゃんたちもついて来れなかったこのペースに付いてくるなんて……。

「……～～～～！！」

「……！！」

そんな事はともかくとして、俺とフードの人は、そのまま速度を上

げては追い上げ・追い付きのループを延々と繰り返しながら、段々と全力ダッシュに等しい速度で走り出してしまう。

傍目から見れば、まるで短距離走でデッドヒートを繰り広げているように見えるかもしれない。

「ま、負けるかぁぁぁぁ！！！　受けろよ、俺の速さをぉぉぉ！！！」

「～～～～！！！」

と、この前見た深夜アニメに出ていた、物凄くカッコイイアニキのセリフを借りて、さらに加速する。

周囲の景色は流れる速さを早め、風が体を包んでくれる。

フードの人との差は全く付かず、お互いにピッタリくっついた形で走り続ける。

そしてそのまま、俺達二人は数分間もその速度を維持したまま、デッドヒートを繰り広げるハメになったわけだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

――――数分後・浜辺にて

「はぁ……はぁ…な、なんて持久力……GNド○イヴでも積んでるのかな……」

「そ、そっちこそ……ちっちゃいくせに、めちゃめちゃ速いやん……」

「ち、ちっちゃいって言うなーーー！！」

俺とフードの人は、お互いに今回は勝負が着かないと悟って、浜辺当たりまで走り続けた所で、いつの間にかランニングではなく徒競走のような（ただし長距離での）トレーニングを終了して、同時に浜辺に倒れこんだ。

お互いに、息も絶え絶えという感じになっていて、いったい何キロ走っていたのか全く覚えていない。少なくとも俺は、気にする余裕もなかったと心の中だけで告白しておく。

「でも、ホンマ……君凄いなぁ？　うちより一回りくらい年下っぽいのに……って、わわ！」

「あ……」

と、俺とフードの人が倒れた状態から、上体だけを持ち上げると、フードの人の頭をスッポリ覆っていたフードが外れ、そこから黒い

長髪をツインテール……？（アインハルト姉ちゃんとは違った感じ）にしたお姉さんの顔が顕になった。

でもって、何故かフードが外れたことにアタフタしている。

……変なの。

「ねぇ？　なんでフード被ったままなのさ？」

「え？　いや……特に理由はないけど……なんとなくこの方がええんよ」

「ふ～ん、変なの。取ったほうが可愛いのに」

「……君、よく友達から天然ジゴロとか言われへん？」

「ジゴロ？　なんぞそれ？」

何故か、ジト目で睨まれてしまった。俺、なんか怒らせるようなこと言ったかな……？

ていうか、ジゴロってなんの事だろう……帰ってからググッてみよう。

でも、このお姉さん……パッと見細身なのに、さっきのあのスピード……ただ者じゃ無いような気がする。

「え～と……うち、ジークリンデ・エレミア。君は……？」

「俺？　クゥだよ、クゥ・ランスター、7歳。好きなモノは深夜アニメ、嫌いなモノはお母さんにお尻叩かれること」

「7歳で深夜アニメて……それはお母さんも怒るよ……」

「大丈夫！　見たいのは全部録画して、次の日見てるから」

「いや、そういう問題でもないような……」

学校が始まってからは、ろくに夜更かしもできないから、深夜アニメ一つ見るのにも大変だ。

それに、生で見るからこその良さというものが、録画では薄れちゃうんだよなぁ……。

まぁ、夜更かしがバレてお母さんにお尻叩かれるよりかはいいんだけど。

「でも、7歳やのにすごい体力なんやね？　普通、あんなスピードでずっとは走れんよ？」

「鍛えてるんだもん、当然じゃん。ていうか、そのセリフ、そっくりそのままお姉ちゃんに打ち返すよ」

「うちもそれなりに鍛えてるからね」

「ふ～ん？　ていうかさ、鍛えてるってことは結構強いの？」

「う、う～ん……まぁまぁ強いってとこちゃうかな？」

やっぱり、このお姉さんも鍛えてるんだ。まぁ、でないとランニングなんかする必要ないもんね。

ダイエットっていう風には全然見えないし。

もしかして、ヴィヴィオ姉ちゃんたちみたいに、インターミドルに出たりするのかな？

「ねぇ、ジークリンデ…さんは、インターミドルとかに出たりするの？」

「ジークでええよ。フルネームやと長いし。……で、インターミドルやけど……まぁ、一応出るつもり……」

「やっぱりそうなんだ。　俺の友達のお姉ちゃんたちも、今年の大会から出るんだよね」

やっぱり、このお姉さん……ジークもインターミドルに出るんだ…て言うことは、ヴィヴィオ姉ちゃんやコロナ姉ちゃん達にとっては、ライバルになるかもしれないんだ。

うぅ……やっぱり、羨ましいなぁ……インターミドル……。

「へぇ～、友達が出るんや？　その子達、強い？」

「う～ん……強いと思うけど…。今日も、一杯トレーニングしてるみたいだし。二ヶ月後はもっと強くなってるかもね。まぁ、俺ほどじゃないですけどねー」

「あはは……そうなんや……。でも、クゥが強いのは、さっきの競走だけでもよく分かるよ。頑張ってるんやね？」

「ま、まぁね…！！　俺、王様だし…！」

す、ストレートに褒められると、俺としてはどうリアクションしていいのか分かんないんだけど…！！
ジークみたいなお姉さんに褒められると……やっぱり嬉しいじゃない。
でも、いくら強くたって……大会とかに出れないんじゃあなぁ……。

「でも、残念やね？　7歳ってことは、インターミドルまではあと三年間は出れへんってことやし……」

「そうなんだよね……。今日も、実を言うとお姉ちゃんたちのトレーニングの手伝いしようかと思ってたんだけど……なんか羨ましくなって……」

「なるほど……それで今日は一人でランニングしてたんや？」

「うん……」

なんだか、自分だけ蚊帳の外みたいで……正直面白くなかったし、胸の中のモヤモヤを消したくて走っていただけ。
ランニングだと言ってはいるけど、実際はただのガス抜きというか、憂さ晴らしをしたかっただけなのかもしれない。

「……それなら……」

「？」

「明日も、うちと一緒に走る？」

「え？　明日も？」

と、ジークはいきなり俺にそう言ってきた。
いきなりだったから、ちょっと面食らったけど……。でも、なんだかそのお誘いは、今の俺には妙に魅力的なものに見えた。
変態兄ちゃんも言ってた気がする、『綺麗なお姉さんのお誘いは大事にしろ』って。
その後、お母さんにボコボコにされてたけど。

「一緒に走るって……いいの？」

「うん、ランニングは二人でも出来るし。それに、クゥならうちのスピードにもついて来れるしな。あと、暇なら軽く組み手でもしような」

「マジで…！？　やるやる！！」

ジークって強そうだし、組み手でも戦えるなら面白そうだ。
皆のトレーニング見ながら悶々としてるよりも、そっちのがいいのかもしれないし……。

アインハルト姉ちゃんも、強い人達とスパーリングするらしいし…
…俺も同じ感じで訓練できたらなぁって思ってたんだよね。

「じゃあ、また明日、ここにおいで？　うちも、今日と同じくらいの時間に来るから」

「うん！」

「じゃあ、決まりやな。明日からよろしくな、クゥ」

「こ、こっちこそ……！」

ジークはそう言うと、よろしくという感じで手を差し出してきた。
俺も、それに答えてジークの手を取って、握手をする。

って……ジークの手……やっぱり年上なんだなぁ……俺よりも大きいや…。でも、お母さんと同じで、物凄く温かい手だったな…。

「さてと……話も纏まったことやし、今日はそろそろ帰ろうか？

時間も夕方やし」

「あ…ホントだ……」

気がつけば、周りの景色がオレンジ色に染まりつつあった。近くにあった時計を見れば、時間は五時半を少し過ぎた頃……。

俺たち、結構話し込んでたのかな？　いや、走り回ってた時間がそれだけ長かったんだろうな。

「家はどの辺？　送って行ってあげるよ」

「そ、そこまではいいよ。今日はもう飛んで帰るし……エウロス！」

『はいはい、了解ですご主人』

ジークは、子供の俺を一人で帰すのが心配だったみたいで、送ってくれるといったけど……流石にそこまでお世話になる訳にはいかない。

だ、第一、俺は子供じゃないやい！！　ボクサーパンツ履いてるし、おでんだって辛子付けて食べるんだからな！！

でも、今から走って帰ってたら少し遅くなりそうだったし、今日はエウロスで飛んで帰ることにした。

あのオフトレの模擬戦以来、風の流れと、風の生まれる場所が自然と感じられるようになって、俺だけの風の専用道路をエウロスで自由に走れるようになったから、移動は前よりも格段に早くなってる

んだよね。

「へぇ？　クゥってデバイス持ってるんや？　結構、変わった形っていうか……」

「ローラーシューズ型だしね。でも、結構すごいんだよ？」

「ふぅん……あ、でも飛んで帰るって……？　そのデバイスじゃ、空を飛べるようには見えんけど……？」

「見てれば分かるよ。……う～ん……あ、見つけた……」

ジークに答えながら、俺は風の生まれる場所を見つける。海が近いこともあって、この辺りは風が豊富と言うか、生まれやすい環境にあるから、見つけるのにそう苦労はしなかった。

「5、4、3、2、1……それっと！」

「！？」

俺のカウントと同時に、勢い良く風が発生する。俺はその場でジャンプして、その風の道にエウロスを乗せると、一気にその流れと勢いに乗って、空中を走る始める。

ジークの驚いた顔が見れたのが、結構嬉しかったりした。

「それじゃあ、また明日来るねー！！　バイバイ、ジーク♪」

「あ、あぁうん…！　気をつけてな、クゥ。看板とかに気をつけなアカンで～？」

「分かってるよ～！！」

お母さんと同じような心配をしながら、ジークはこっちに小さく手を振ってくれていた。

俺も、風の道を走りながら、ジークに手を振り返す。

そこからは、エウロスで風を掴みながら、俺にしか見えない専用道路を走るだけ……。

普通に走っていては、絶対に味わえない風との一体感を感じながら、俺はヴィヴィオ姉ちゃんたちがトレーニングしてる市民公園を目指した。

「あ、エウロス。一応迷彩魔法使っておこう。何も無いところを飛んでるところ見られると、面倒な事になるかもだし」

『はい、畏まりました』

「よろしく……。う～ん……ジーク……かぁ……なんだか、面白そうなお姉さんだったなぁ…」

ジークという、強そうなお姉さんとの出会いに、特別な何かを感じ

たり、ちょっとテンション上がりつつ……。

【クゥｖｉｅｗ　ｅｎｄ】

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【ｓｉｄｅ　ｏｕｔ】

クゥが去ったあと、ジークリンデは彼の姿が見えなくなるまで、その場で見送っていた。
心配はないだろうとは思うのだが、やはり気になってしまうのだ。
それに、何も無いところを走るという、どんな技を使っているのか皆目見当もつかない、クゥの力に驚いていたということもある。

「……なんか、面白い子と知り合いになれたみたいやな……」

自然と、ジークリンデの表情は柔らかくなる。年下の、というか一回りも年の違う男の子だったけど、彼女のランニングに付いてくるばかりか、本気を出させた。
それに、話してみると……ちょっと子供っぽくて（実際子供だけど）……なんだか可愛いかったと、そう思えてしまった。

「クゥ……かぁ……」

ジークリンデはそう呟くと、口元に少し笑みを浮かべながら、海辺の砂浜を後にし、ランニングしながら自宅を目指すのだった。

クゥだけではなく、ジークリンデもまた……今日の出会いに何か特別なものを感じていたのかもしれない……。

Ｍｅｍｏｒｙ；４８　風の王と鉄腕（後書き）

閣下「クゥめ……また可愛い女の子と知り合いに……こちとら出番すら無いっていうのに…・・……（　。皿。）キーッ！！」

Ｆ２０Ｃ「ボブキャラと準主人公を同列に考えるからいけないんだよ」

閣下「よし、なら今度はクゥの人気を下げる工作を……」

クゥ「滅」

閣下「ひでぶ！！」

クゥ「は～い、それじゃあ次回予告ね」

次回　Ｍｅｍｏｒｙ；４９　新型って言葉には男のロマンが詰まっている

次回は、シラヌイの完成機について触れていきます。

シラヌイの完成型はどんなものなのか……その一部というか、外見だけはハッキリしますｗ

閣下の出番が継続してないです

閣下「ヽ（＾Д´＃）ノ　ムキー！！」

クゥ「ふん、雑種が」

ジーク「雑種やね」

閣下「（´；ω；`）」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2983t/

魔法少女リリカルなのはViVid　とある訓練生と覇王っ子

2011年10月21日10時00分発行